

栃木県埋蔵文化財調査報告第 402 集

くるま橋遺跡Ⅱ

—快適で安全な道づくり事業費(補助)一般県道西田井二宮線石島工区に伴う発掘調査—

2020.7

栃 木 県 教 育 委 員 会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

くるま^{ばし}橋^い遺^{せき}跡Ⅱ

—快適で安全な道づくり事業費（補助）一般県道西田井二宮線石島工区に伴う発掘調査—

2020.7

栃 木 県 教 育 委 員 会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

序

くるま橋遺跡は、栃木県の南東部、真岡市に位置します。真岡市は、古くからこの地域の政治・文化の中心地として、さらには鬼怒川・五行川を利用した水運や陸上交通の要所として栄えてきました。現在もその伝統を引き継いで発展を続けています。

遺跡の東側には五行川が南流しており、周辺には古墳時代を中心とする数多くの遺跡が存在し、くるま橋遺跡も農地整備事業に伴い、平成 24 年から 25 年度にかけて発掘調査を実施しています。

この度、栃木県県土整備部による一般県道西田井二宮線石島工区建設に先立ち、路線内に所在する遺跡の取扱いについて関係機関と協議の上、記録保存を目的とした発掘調査を行いました。

その結果、前回と同様に、古墳時代から古代の遺構・遺物が見つかりました。なかでも、5 世紀前半の初期須恵器や、7 世紀頃の統一新羅系土器、東海地方産の古代施釉陶器、10 世紀頃の金銅仏といった稀少品が発見されていることから、流通や地域支配の拠点の一つであったと考えられます。

本報告書は、くるま橋遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。本書が県民の皆様にとって郷土の歴史を理解する一助になるとともに、各方面において広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、多大なる御協力をいただきました真岡市教育委員会、栃木県県土整備部をはじめとする関係機関、並びに関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

令和 2 (2020) 年 7 月

栃木県教育委員会
教育長 荒川 政利

例 言

- 1.本書は、栃木県真岡市石島地内に所在する、くるま橋遺跡の発掘調査報告書である。
- 2.発掘調査は、快適で安全な道づくり事業費(補助)一般県道西田井二宮線石島工区に伴う事前調査である。
- 3.発掘調査は、栃木県教育委員会からの委託を受け、(公財)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターが実施したものである。
- 4.発掘調査から整理作業及び報告書作成までの担当は下記の通りである。

発掘調査	平成 29 年 9 月 1 日～平成 30 年 3 月 30 日
整理作業	平成 31(令和元)年 4 月 1 日～令和 2 年 7 月 30 日
印刷・製本	令和 2 年 7 月 7 日～令和 2 年 7 月 30 日
- 5.世界測地系座標の移設および航空写真撮影は、株式会社ニッコーに委託した。
- 6.くるま橋遺跡の過去調査(平成 21～29 年度調査)を統合した地形図等報告書掲載図版の作成、今回調査区全測図の作成、遺物実測図デジタル・トレースの作成、遺物(礫器等)写真加工図版の作成については株式会社コクドリサーチ栃木営業所に委託した。
- 7.竪穴建物跡出土の土器写真撮影・図版作成については、株式会社大塚カラーに委託した。
- 8.発掘調査は、津野 仁、後藤信祐、中村享史、猪瀬亜沙美が当たった。
- 9.整理作業および本書の執筆・編集は池田敏宏が行った。
- 10.発掘調査ならびに本書作成に至る過程で次の方々や機関から御指導・御協力を賜った。

栃木県県土整備部、真岡土木事務所、真岡市教育委員会、栃木県立博物館
浅井和春、海野啓之、北口英雄、酒井清治、建石 徹、深沢麻亜沙、本田 諭、吉岡康暢
- 11.調査・整理参加者

発掘調査
阿部孝志、岩渕敬一、宇塚悦美、遠藤茂、大登昇、亀田一六、川名子正美、菊池達巳、倉持進、 児玉祐美子、小林建一、小谷野力、佐藤常幸、島田敦子、鈴木和二、高橋麻佐美、高橋レイ子、 田中国夫、田村輝二、日向野久雄、松本一夫、皆川典男、皆川まさ子、棟方和子、望月保、 森秀昭、山内愛子、横山政雄、吉田豊
整理作業
有馬由乃、池澤友希世、岩井かほり、高橋正恵、武田智子、塚田幸枝、出井百合子、和田恵美
- 12.本書の調査成果は、一部公表されているが、本書をもって正式報告とする。
- 13.本遺跡の出土遺物・資料類は栃木県埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

1. 遺跡の略号は、MO-SK を用いている。
2. 地図の縮尺は各図中に示した。
3. 挿図中の北の矢印は、グリッド北「地図上の北」を示す。
4. 「第6図 本書第Ⅱ・Ⅳ章記載内容に係る古墳時代～古代の遺跡」は、栃木県教育委員会 1997『栃木県埋蔵文化財地図』に掲載されている遺跡一覧を底本に、新たに作成した。
5. 遺構の種別については次の略号を用いている。
SI：竪穴建物跡 SB:掘立柱建物跡 SK：土坑 SD：溝跡 SZ：古墳跡
Pit（略称P）：小穴
6. 遺跡の遺構番号は、調査時、報告時ともに原則変更はない。
7. 遺構図の縮尺は次を原則とした。
調査区全測図 1/200
竪穴建物跡平面図・土層断面図 1/80
カマド平面図・土層断面図 1/40
掘立柱建物跡,土坑,溝跡 平面図・土層断面図 1/80
8. 遺構実測図に示した断面水準は、海拔標高（m）である。
9. 「Ⅲ. 調査成果 1. 古代の遺構」における竪穴建物跡年代観は、「Ⅲ. 調査成果 4. 小結」p276～281 の記載を元にした。
10. 遺物観察の視点、凡例は、「Ⅲ.調査成果 3.遺物 a.遺物観察の視点」p108～109 に記した。
11. 遺構・遺物の写真図版の縮尺は原則、不統一である。

目 次

序	
例 言	i
凡 例	ii
目 次	iii
I. 調査の経緯	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査方法	2
3. 調査経過	3
II. 遺跡の立地と環境	4
1. 地理的環境	4
2. 歴史的環境	5
III. 調査成果	14
1. くるま橋遺跡の概要	14
2. 遺構	23
3. 遺物	108
4. 小結	262
IV. 特記事項	282
1. 初期須恵器	282
2. 統一新羅系土器	286
3. 灰釉陶器・緑釉陶器	291
4. 銅造鍍金阿弥陀如来坐像の位置付け	293

挿図目次

第1図	発掘調査区位置図 (1/25,000) ……	1	第52図	西区 SI-52 実測図 ……	84
第2図	遺跡周辺の地形区分図 (植木・市川 2014) …	4	第53図	東区 SI-54 実測図 ……	84
第3図	小貝川・五行川流域の古墳 (小森紀 1987) …	6	第54図	東区 SI-57 実測図 ……	85
第4図	益子窯跡群・堀ノ内窯跡群 ……	7	第55図	東区 SI-58 実測図 ……	86
第5図	芳賀郡家関連資料 ……	9	第56図	東区 SI-59A・59B 実測図 ……	87
第6図	本書第Ⅱ・Ⅳ章記載内容に関係する古墳 時代～古代の遺跡 (S=1/120,000) ……	12	第57図	東区 SI-59C 実測図 ……	88
第7図	真岡市石島地区の古墳 ……	15	第58図	東区 SI-59C カマド実測図 ……	89
第8図	石島地区の埋蔵文化財包蔵地 ……	16	第59図	東区 SI-60 実測図 ……	89
第9図	くるま橋遺跡ならびに石島古墳群全図 (S=1/3,000) ……	19・20	第60図	東区 SI-61・77 実測図 ……	90
第10図	東区 SZ-53 実測図 ……	51・52	第61図	東区 SI-62 実測図 ……	91
第11図	西区 SI-1 実測図 ……	53	第62図	東区 SI-63 実測図 ……	92
第12図	西区 SI-2 カマド実測図 ……	53	第63図	東区 SI-64 実測図 ……	93
第13図	西区 SI-2 実測図 ……	54	第64図	東区 SI-65 実測図 ……	94
第14図	西区 SI-3 実測図 ……	55	第65図	東区 SI-67 実測図 ……	95
第15図	西区 SI-4 実測図 ……	55	第66図	東区 SI-68 実測図 ……	96
第16図	西区 SI-7 実測図 ……	56	第67図	東区 SI-70 実測図 ……	97
第17図	西区 SI-8 実測図 ……	57	第68図	東区 SI-72 実測図 ……	97
第18図	西区 SI-10 実測図 ……	58	第69図	東区 SI-73 実測図 ……	98
第19図	西区 SI-12 実測図 ……	58	第70図	東区 SI-74 実測図 ……	99
第20図	西区 SI-11 実測図 ……	59	第71図	東区 SI-82 実測図 ……	99
第21図	西区 SI-16 実測図 ……	60	第72図	東区 SI-84 実測図 ……	100
第22図	西区 SI-17 実測図 ……	60	第73図	西区 SB-51 実測図 ……	101
第23図	西区 SI-20 実測図 ……	61	第74図	土坑実測図 (1) ……	102
第24図	西区 SI-21 実測図 ……	62	第75図	土坑実測図 (2) ……	103
第25図	西区 SI-21 カマド実測図 ……	63	第76図	西区 SD-6A・6B 実測図 ……	104
第26図	西区 SI-22B カマド実測図 ……	63	第77図	西区 SD-30 実測図 ……	105
第27図	西区 SI-22A・22B 実測図 ……	64	第78図	西区 SD-36 実測図 ……	106
第28図	西区 SI-23 実測図 ……	65	第79図	東区 SD-69 実測図 ……	107
第29図	西区 SI-24 実測図 ……	66	第80図	竪穴出土土器 (1) ……	144
第30図	西区 SI-25 実測図 ……	67	第81図	竪穴出土土器 (2) ……	145
第31図	西区 SI-26 実測図 ……	68	第82図	竪穴出土土器 (3) ……	146
第32図	西区 SI-27 実測図 ……	69	第83図	竪穴出土土器 (4) ……	147
第33図	西区 SI-28 実測図 ……	70	第84図	竪穴出土土器 (5) ……	148
第34図	西区 SI-29 実測図 ……	71	第85図	竪穴出土土器 (6) ……	149
第35図	西区 SI-31 実測図 ……	72	第86図	竪穴出土土器 (7) ……	150
第36図	西区 SI-33 実測図 ……	73	第87図	竪穴出土土器 (8) ……	151
第37図	西区 SI-34 実測図 ……	74	第88図	竪穴出土土器 (9) ……	152
第38図	西区 SI-35 実測図 ……	75	第89図	竪穴出土土器 (10) ……	153
第39図	西区 SI-37 実測図 ……	76	第90図	竪穴出土土器 (11) ……	154
第40図	西区 SI-38 実測図 ……	77	第91図	竪穴出土土器 (12) ……	155
第41図	西区 SI-39 実測図 ……	78	第92図	竪穴出土土器 (13) ……	156
第42図	西区 SI-40 実測図 ……	78	第93図	竪穴出土土器 (14) ……	157
第43図	西区 SI-41 実測図 ……	79	第94図	竪穴出土土器 (15) ……	158
第44図	西区 SI-42 実測図 ……	80	第95図	竪穴出土土器 (16) ……	159
第45図	西区 SI-43 実測図 ……	80	第96図	竪穴出土土器 (17) ……	160
第46図	西区 SI-44 実測図 ……	81	第97図	竪穴出土土器 (18) ……	161
第47図	西区 SI-45・46 実測図 ……	82	第98図	竪穴出土土器 (19) ……	162
第48図	西区 SI-47 実測図 ……	83	第99図	竪穴出土土器 (20) ……	163
第49図	西区 SI-48 実測図 ……	83	第100図	竪穴出土土器 (21) ……	164
第50図	西区 SI-49 実測図 ……	84	第101図	竪穴出土土器 (22) ……	165
第51図	西区 SI-50 実測図 ……	84	第102図	竪穴出土土器 (23) ……	166
			第103図	竪穴・古墳・土坑出土土器 (24) ……	167
			第104図	竪穴出土土器 (25) ……	168

第 105 図	竪穴出土土器 (26)	169	第 160 図	遺構出土土器 (46)	224
第 106 図	竪穴出土土器 (27)	170	第 161 図	縄文・弥生土器、土師器甕	239
第 107 図	竪穴出土土器 (28)	171	第 162 図	縄文・弥生土器写真	240
第 108 図	竪穴出土土器 (29)	172	第 163 図	石器・石製祭祀具	241
第 109 図	竪穴出土土器 (30)	173	第 164 図	石器・石製祭祀具写真	242
第 110 図	竪穴出土土器 (31)	174	第 165 図	礫器展開図・礫器 1 群	243
第 111 図	竪穴出土土器 (32)	175	第 166 図	礫器 2 群 (1)	244
第 112 図	土坑・竪穴出土土器 (33)	176	第 167 図	礫器 2 群 (2)	245
第 113 図	竪穴・土坑出土土器 (34)	177	第 168 図	礫器 2 群 (3)・3 群 (1)	246
第 114 図	土坑・竪穴出土土器 (35)	178	第 169 図	礫器 3 群 (2)	247
第 115 図	遺構出土土器 (1)	179	第 170 図	礫器 3 群 (3)	248
第 116 図	遺構出土土器 (2)	180	第 171 図	礫器 3 群 (4)・礫器 4 群 (1)	249
第 117 図	遺構出土土器 (3)	181	第 172 図	礫器 4 群 (2)	250
第 118 図	遺構出土土器 (4)	182	第 173 図	礫器 4 群 (3)	251
第 119 図	遺構出土土器 (5)	183	第 174 図	碁石・紡錘車・土錘	252
第 120 図	遺構出土土器 (6)	184	第 175 図	碁石・紡錘車・土錘写真	253
第 121 図	遺構出土土器 (7)	185	第 176 図	粘土塊 (1)	254
第 122 図	遺構出土土器 (8)	186	第 177 図	粘土塊 (2)	255
第 123 図	遺構出土土器 (9)	187	第 178 図	粘土塊 (3)	256
第 124 図	遺構出土土器 (10)	188	第 179 図	鉄滓	257
第 125 図	遺構出土土器 (11)	189	第 180 図	金属製品	258
第 126 図	遺構出土土器 (12)	190	第 181 図	金属製品写真	259
第 127 図	遺構出土土器 (13)	191	第 182 図	銅造鍍金阿弥陀如来坐像写真 (S=2/3)	260
第 128 図	遺構出土土器 (14)	192	第 183 図	3 D 写真計測 銅造鍍金阿弥陀如来坐像 (S=2/3)	261
第 129 図	遺構出土土器 (15)	193	第 184 図	くるま橋遺跡土器編年①	264
第 130 図	遺構出土土器 (16)	194	第 185 図	くるま橋遺跡土器編年②	265
第 131 図	遺構出土土器 (17)	195	第 186 図	補遺 包含層出土土器 (1)	270
第 132 図	遺構出土土器 (18)	196	第 187 図	補遺 包含層出土土器 (2)	271
第 133 図	遺構出土土器 (19)	197	第 188 図	補遺 包含層出土土器 (3)	272
第 134 図	遺構出土土器 (20)	198	第 189 図	補遺 包含層出土土器 (4)	273
第 135 図	遺構出土土器 (21)	199	第 190 図	補遺 包含層出土土器 (5)	274
第 136 図	遺構出土土器 (22)	200	第 191 図	補遺 包含層出土土器 (6)	275
第 137 図	遺構出土土器 (23)	201	第 192 図	遺構変遷ユニットモデル図 (1)	277
第 138 図	遺構出土土器 (24)	202	第 193 図	遺構変遷ユニットモデル図 (2)	278
第 139 図	遺構出土土器 (25)	203	第 194 図	平成 29 年度くるま橋遺跡遺構変遷図 (1)	280
第 140 図	遺構出土土器 (26)	204	第 195 図	平成 29 年度くるま橋遺跡遺構変遷図 (2)	281
第 141 図	遺構出土土器 (27)	205	第 196 図	くるま橋遺跡出土の初期須恵器ハソウ写真	282
第 142 図	遺構出土土器 (28)	206	第 197 図	栃木県域出土の初期須恵器	284
第 143 図	遺構出土土器 (29)	207	第 198 図	栃木県域出土の陶質土器・TK216 号窯式 以前の須恵器 (分布図)	285
第 144 図	遺構出土土器 (30)	208	第 199 図	くるま橋遺跡出土の統一新羅系土器	286
第 145 図	遺構出土土器 (31)	209	第 200 図	栃木県出土の統一新羅系土器 (S=1/6)	289
第 146 図	遺構出土土器 (32)	210	第 201 図	栃木県域出土の統一新羅系土器 (分布図)	290
第 147 図	遺構出土土器 (33)	211	第 202 図	古代施釉陶器整理図	291
第 148 図	遺構出土土器 (34)	212	第 203 図	阿弥陀如来像の変遷 (1)	294
第 149 図	遺構出土土器 (35)	213	第 204 図	阿弥陀如来像の変遷 (2)	295
第 150 図	遺構出土土器 (36)	214	第 205 図	阿弥陀如来像の変遷 (3)	296
第 151 図	遺構出土土器 (37)	215	第 206 図	くるま橋遺跡出土仏像との比較・検討	299
第 152 図	遺構出土土器 (38)	216	第 207 図	如来像出土状況の一例	300
第 153 図	遺構出土土器 (39)	217			
第 154 図	遺構出土土器 (40)	218			
第 155 図	遺構出土土器 (41)	219			
第 156 図	遺構出土土器 (42)	220			
第 157 図	遺構出土土器 (43)	221			
第 158 図	遺構出土土器 (44)	222			
第 159 図	遺構出土土器 (45)	223			

表 目 次

第 1 表	くるま橋遺跡 20km 圏で発見された仏教関連 遺構・仏教系遺物（1）……………	10	第 37 表	西区 SI-44 出土遺物観察表……………	136
第 2 表	くるま橋遺跡 20km 圏で発見された仏教関連 遺構・仏教系遺物（2）……………	11	第 38 表	西区 SI-45 出土遺物観察表……………	137
第 3 表	H24 年度確認調査成果一覧表……………	18	第 39 表	西区 SI-46 出土遺物観察表……………	137
第 4 表	くるま橋遺跡遺構掲載頁一覧……………	21・22	第 40 表	西区 SI-47 出土遺物観察表……………	137
第 5 表	西区 SI-1 出土遺物観察表……………	127	第 41 表	西区 SI-48 出土遺物観察表……………	137
第 6 表	西区 SI-2 出土遺物観察表……………	127	第 42 表	西区 SI-50 出土遺物観察表……………	137
第 7 表	西区 SI-3 出土遺物観察表……………	128	第 43 表	西区 SI-52 出土遺物観察表……………	137
第 8 表	西区 SI-4 出土遺物観察表……………	128	第 44 表	東区 SZ-53 出土遺物観察表……………	137
第 9 表	西区 SI-7 出土遺物観察表……………	128	第 45 表	東区 SI-54 出土遺物観察表……………	138
第 10 表	西区 SI-8 出土遺物観察表……………	129	第 46 表	東区 SI-57 出土遺物観察表……………	138
第 11 表	西区 SI-10 出土遺物観察表……………	129	第 47 表	東区 SI-58 出土遺物観察表……………	138
第 12 表	西区 SI-11 出土遺物観察表……………	129	第 48 表	東区 SI-59A 出土遺物観察表……………	138
第 13 表	西区 SI-16 出土遺物観察表……………	129	第 49 表	東区 SI-59B 出土遺物観察表……………	139
第 14 表	西区 SI-17 出土遺物観察表……………	130	第 50 表	東区 SI-59A または 59B 出土遺物観察表 ……	139
第 15 表	西区 SI-20 出土遺物観察表……………	130	第 51 表	東区 SI-59C 出土遺物観察表……………	139
第 16 表	西区 SI-21 出土遺物観察表……………	130	第 52 表	東区 SI-60 出土遺物観察表……………	139
第 17 表	西区 SI-22A 出土遺物観察表……………	131	第 53 表	東区 SI-61 出土遺物観察表……………	139
第 18 表	西区 SI-22B 出土遺物観察表……………	131	第 54 表	東区 SI-62 出土遺物観察表……………	140
第 19 表	西区 SI-23 出土遺物観察表……………	132	第 55 表	東区 SI-63 出土遺物観察表……………	140
第 20 表	西区 SI-24 出土遺物観察表……………	132	第 56 表	東区 SI-64 出土遺物観察表……………	140
第 21 表	西区 SI-25 出土遺物観察表……………	132	第 57 表	東区 SI-65 出土遺物観察表……………	140
第 22 表	西区 SI-26 出土遺物観察表……………	133	第 58 表	東区 SI-67 出土遺物観察表……………	141
第 23 表	西区 SI-27 出土遺物観察表……………	133	第 59 表	東区 SI-68 出土遺物観察表……………	141
第 24 表	西区 SI-28 出土遺物観察表……………	133	第 60 表	東区 SI-70 出土遺物観察表……………	142
第 25 表	西区 SI-29 出土遺物観察表……………	133	第 61 表	東区 SI-72 出土遺物観察表……………	142
第 26 表	西区 SI-31 出土遺物観察表……………	134	第 62 表	東区 SI-73 出土遺物観察表……………	142
第 27 表	西区 SI-33 出土遺物観察表……………	134	第 63 表	東区 SI-74 出土遺物観察表……………	142
第 28 表	西区 SI-34 出土遺物観察表……………	134	第 64 表	東区 SI-77 出土遺物観察表……………	142
第 29 表	西区 SI-35 出土遺物観察表……………	134	第 65 表	東区 SI-82 出土遺物観察表……………	143
第 30 表	西区 SI-37 出土遺物観察表……………	134	第 66 表	東区 SI-84 出土遺物観察表……………	143
第 31 表	西区 SI-38 出土遺物観察表……………	135	第 67 表	西区 SK-55 出土遺物観察表……………	143
第 32 表	西区 SI-39 出土遺物観察表……………	135	第 68 表	東区 SK-71 出土遺物観察表……………	143
第 33 表	西区 SI-40 出土遺物観察表……………	135	第 69 表	東区 SK-75 出土遺物観察表……………	143
第 34 表	西区 SI-41 出土遺物観察表……………	136	第 70 表	東区 SK-83 出土遺物観察表……………	143
第 35 表	西区 SI-42 出土遺物観察表……………	136	第 71 表	遺構変遷表……………	279
第 36 表	西区 SI-43 出土遺物観察表……………	136	第 72 表	栃木県域出土陶質土器・初期須恵器一覧表……………	285
			第 73 表	栃木県域出土の統一新羅系土器一覧……………	290

I. 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

一般県道西田井二宮線は、真岡市西田井と真岡市(旧二宮町)久下田を結び、市民生活ならびに地域間交流を支える骨格的道路である。しかし、旧二宮町地域の現道は、幅員狭小で屈曲が著しく、安全で円滑な交通に支障をきたしている。また近年、計画線の沿線に大和田工業団地が開発されたこともあり、安全で快適なネットワーク道路の整備が望まれている。加えて、現道沿線には人家が群集し拡幅が困難であること、および、他の県事業(県営畑地帯総合整備事業、安全な川づくり事業二宮遊水池)との関連を考慮して、現道部を迂回するバイパス道路が計画された。

なお、事業予定地内には周知の埋蔵文化財包蔵地「くるま橋遺跡」が存在することから、栃木県教育委員会事務局文化財課(以下、文化財課)と栃木県県土整備部(以下、県土整備部)において協議し、結果、記録保存調査の実施に至った。なお、西田井二宮線における埋蔵文化財の取り扱いについては以下のとおりである。

平成 29 年度(発掘調査)

8月31日、文化財課は文財号外で(公財)とちぎ未来づくり財団に発掘調査費用の見積書提出を求め、財団は8月31日付け、とち埋文号外で見積書を提出した。これに基づき9月1日付け文財号外において文化財課と財団の間に委託契約が締結した。調査対象面積は4,050㎡、調査費用は32,392,000円である。(公財)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターは文化財保護法第98条第1項に基づく届出を9月1日付けで県教育長に提出、現地調査を開始した。

平成 31 年度〔令和元年度〕(整理事業)

4月1日、文化財課は文財号外で(公財)とちぎ未来づくり財団に発掘調査費用の見積書提出を求め、財団は4月1日付け、とち埋文号外で見積書を提出した。これに基づき4月1日付け文財号外において文化財課と財団の間に委託契約が締結した。調査対象面積は4,050㎡、調査費用は29,230,000円である。

令和 2 年度(編集作業・報告書刊行)

4月1日、文化財課は文財号外で(公財)とちぎ未来づくり財団に発掘調査費用の見積書提出を求め、財団は4月1日付け、とち埋文号外で見積書を提出した。これに基づき4月1日付け文財号外において文化財課と財団の間に委託契約が締結した。調査対象面積は4,050㎡、調査費用は7,986,000円である。



第1図 発掘調査区位置図 (S=1/25,000)

I. 調査の経緯

2. 調査方法

①くるま橋遺跡は、(公財)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターにより、平成21・23・24年度と今回、断続的に調査が行われている(「Ⅲ-1. くるま橋遺跡の概要」を併照)。

②今回調査区は、平成24年度調査区と隣接、または一部重複箇所がある。このため今回調査に伴う調査区グリッドを大きめに設定した。

③調査区グリッドは $X=43,080$ 、 $Y=12,640$ の交点を起点とし、 $10\text{ m} \times 10\text{ m}$ に割付けを行った。なお、南北軸がアルファベット列(例A列)、東西列がローマ数字列(例1列)とした。

例. $X=43,070$ 、 $Y=12,640$ を交点とするグリッドは「A1」として呼称する。

④調査区は生活道路によって大きく2分されている。このため、十二所神社から西側の調査区を西区(A列～N列まで)、神社から東側の調査区を東区(O列～X列まで)と呼称している。

⑤重機による表土除去、および細部グリッド設定、遺構確認・遺構調査は、西区西端から東区に向かって三段階に分けて実施した(「I-3. 調査経過」を併照)。

⑥表土除去、遺構確認作業の時点で、出土遺物が大量に出土することが分かった。それゆえ、遺構・グリッド内取り上げを基本とした。ただし、遺存状態が比較的良好なものや遺構の時期特定が可能と思われる遺物は、遺構単位で遺物番号を発番し、出土位置・高さを記録・図化した。

⑦土層断面図、遺物出土状況図ならびに遺構完掘平面図は $S=1/20$ にて現場作図をおこない(遺物出土状況図やカマド図面のうち一部は $S=1/10$ で作図したものも存する)、これを整理作業時、編集した。

⑧調査区内は耕作(ゴボウトレンチャー含む)などによる土層攪拌が著しい。そのうえ、遺構重複が多い。このため、調査時点と整理時点では遺構の重複関係理解が微妙に異なるケースも存在した。それゆえ、発掘現場記録と、整理作業データの照らし合わせを慎重に実施し、双方データ間の矛盾をなくすように努めた。

なお、小破片しか出土していない遺構でも、遺物の属性から、おおよその年代比定が可能な資料は、極力図版掲載するように心がけた。



表土除去風景



発掘作業風景



整理作業(遺物接合)



整理作業(図版作業)

3. 調査経過

平成 29 年度

2017 年 9 月 1 日(金)～9 月 29 日(金)	発掘調査準備。
9 月 19 日(火)～9 月 29 日(金)	井戸掘削工事、ユニット・ハウス設置。安全柵設置。発掘機材搬入。
10 月 2 日(月)～12 日(木)	重機による表土除去作業(西区西端、西区中央～東端)。 第 1 回基本・細部グリット杭設置。
10 月 12 日(木)	第 2 回 細部グリット杭設置。
10 月 4 日(木)～11 月 7 日(火)	遺構確認、遺構調査(とりわけ西区西端を対象に)。
11 月 8 日(水)	ドローンによる航空写真撮影(西区西端)。
11 月 13 日(月)～15 日(水)	重機による西区西端埋め戻し作業。
11 月 9 日(木)～2018 年 2 月 23 日(金)	遺構確認、遺構調査(西区中央～東端、東区)。
12 月 14 日(木)	ドローンによる航空写真撮影(西区中央～東端)。
12 月 19 日(火)～22 日(金)	重機による表土除去作業(東区)。
12 月 27 日(水)	第 3 回基本・細部グリット杭設置。
2018 年 2 月 16 日(金)	ドローンによる航空写真撮影(東区)。
2 月 20 日(月)～28 日(水)	出土遺物及び発掘機材撤収。ユニット・ハウス等撤収。
2 月 26 日(月)～28 日(水)	重機による調査区埋め戻し作業。
2 月 20 日(水)～3 月 28 日(水)	航空写真モザイク写真(オルソー画像)作成。
2 月 22 日(水)～3 月 28 日(水)	くるま橋遺跡地形測量図作成。

平成 31 年度(令和元年度)

2019 年 4 月上旬～5 月下旬	遺物水洗い・注記作業。調査記録(図面・写真等)の整理。
5 月上旬～6 月上旬	遺物接合・復元。実測遺物選別。
6 月中旬～11 月	遺物実測図・拓本作成作業。遺物観察表作成。
6 月中旬～11 月	遺構図面照合(平面図・セクション図等)。
11 月～2020 年 3 月	遺物写真撮影。トレース作業。図版作成作業。 原稿執筆・図表作成作業。

令和 2 年度

2020 年 4 月上旬～5 月下旬	報告書編集作業。
6 月中旬～7 月末日	入稿準備、入稿。校正作業。印刷・製本。

Ⅱ．遺跡の立地と環境

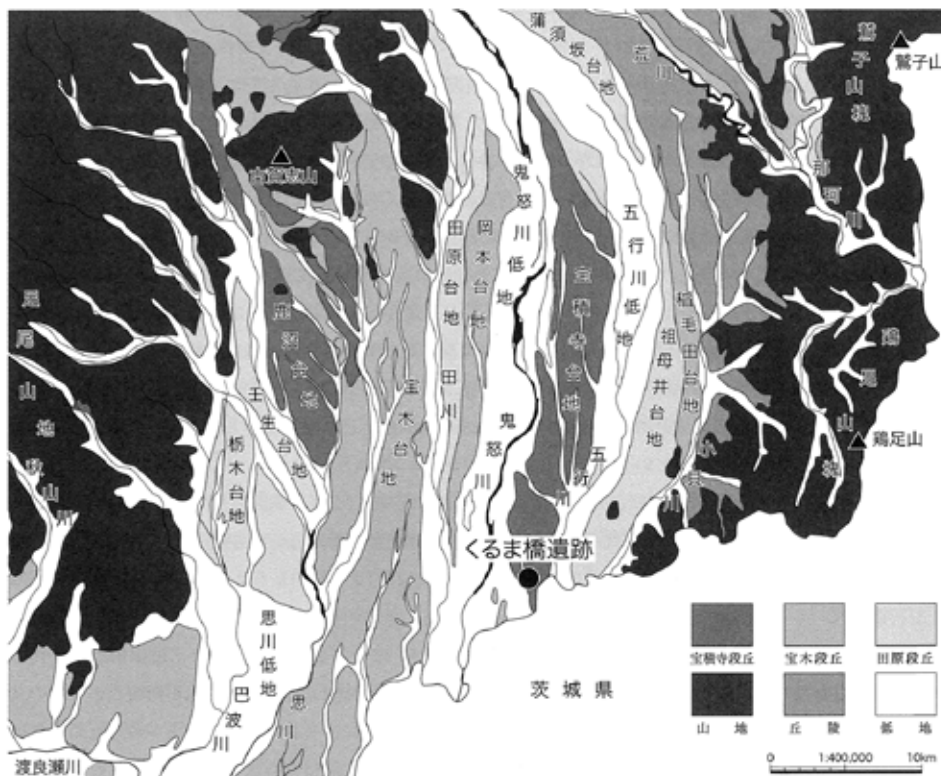
1. 地理的環境

真岡市(註1)は栃木県南東部にあり、北は宇都宮市・芳賀町、東は市貝町・益子町、南は茨城県筑西市、西は上三川町と接している。地形的に見ると、県央平地部に位置する。この県央平地部は台地と低地から成っている。台地は地形面の高度、浸食度、表部に堆積している関東ローム層の層序関係等によって高位のものから宝積寺面、宝木面、田原面、絹島面に区分される。台地と台地の間を田川・鬼怒川・五行川・小貝川などの河川が流下する。それゆえ、各段丘・沖積低地とも、茨城県筑西市方向に向かって細長く伸びる傾向にある。

真岡市の大半は真岡台地(宝積寺面)が占めており、鬼怒川・五行川に流下する小河川(行屋川・江川など)や、浸食谷によって開析された小島状の段丘が発達する。加えて台地西側は低台地面と、鬼怒川低地、東側は五行川低地が広がる。真岡台地の標高は、北部で約100 m、南部は約70 mで南に向かって緩やかに傾斜する。一方、低地部は、圃場整備が進み旧地形はあまり残っていないものの、現集落は自然堤防上や微高地上に点在する傾向にある。

くるま橋遺跡は、五行川右岸、真岡台地平坦面上に拓けた畑地帯に所在する。標高は、59～61 m前後で、台地東側に広がる水田面(五行川低地)との比高は約10 mある(台地・低地境は明瞭な崖線で接する傾向が強い)。今回の調査区は、真岡市役所二宮コミュニティセンターから東へ約700 mの地点、十二所神社附近に位置する(「Ⅲ. 調査成果 1. くるま橋遺跡の概要」にて詳述)。

註1 真岡市は旧真岡町、旧山前村、旧大内村、旧中村が合併し1954年3月に発足した。また、2009年3月に、南接する二宮町(1954年5月発足)を編入合併することにより、現在の形となった。



第2図 遺跡周辺の地形区分図(植木・市川 2014)

2. 歴史的環境

くるま橋遺跡では、古墳時代中期～平安時代後半に至る時期の遺構・遺物が検出されている。以下では、本遺跡と、ほぼ同時期に存在した遺跡群について概観したい。

〔古墳群〕

まず、4世紀～5世紀前半頃について記す。この時期の小貝川・五行川流域を支配した首長の墳墓（真岡市山崎古墳群、芳賀町浅間山古墳、同町亀の子塚古墳、市貝町上根二子塚古墳など）は、本遺跡から9～16kmほど離れた地域の丘陵・台地縁辺域に築造される傾向にある（第3図）。一方、本遺跡4km圏内でも、一辺12～42m程の方墳（方形周溝墓）群や、円墳群が**稲荷山遺跡**、**下陰遺跡**、**市ノ塚遺跡**、**曲田遺跡**、**西物井遺跡**で発見されている（真岡市1984, 藤田直・片根2007, 藤田直2008, 永井・中三川2015, 田代2009, 池田2010, 藤田典・仲山2009）。台地外縁～低地面に立地していることから、低地開発に関与した中小有力者層の墳墓と推察される。こうした状況下、五行川低地を眺望できる台地上に前期古墳と考えられる**石島富士山古墳**が立地する意義は大きい（これらについては、本書14・23頁で後述）。

なお、5世紀後半から6世紀初頭にかけて、**大和田富士山古墳**（芳賀郡域に初めて築かれた前方後円墳・秋元・斎藤1984, 二宮町2006）と、**瓢箪山古墳**（大和田富士山古墳に後続する首長墳・真岡市1984, 埴2000）が、石島富士山古墳と同一地形に立地するのは興味深い事象である。

6世紀になると、各地に古墳が造られるようになる。本遺跡4km圏内を見てみると、五行川右岸の台地上には、20基以上の円墳からなる**大和田・台山古墳群**（註1）、**石島・久松古墳群**（「Ⅲ. 調査成果 1. くるま橋遺跡の概要」で後述）が分布する。また、鬼怒川左岸・真岡台地西縁～南縁部には**中村大塚古墳**、**若旅富士山古墳群**、**上大曾古墳群**、**蟹が入古墳**などがある。五行川低地面を見てみると、**鹿古墳群**、**因ノ塚古墳**などがある（真岡市1984, 水野ほか1989, 埴2000, 二宮町2006）。

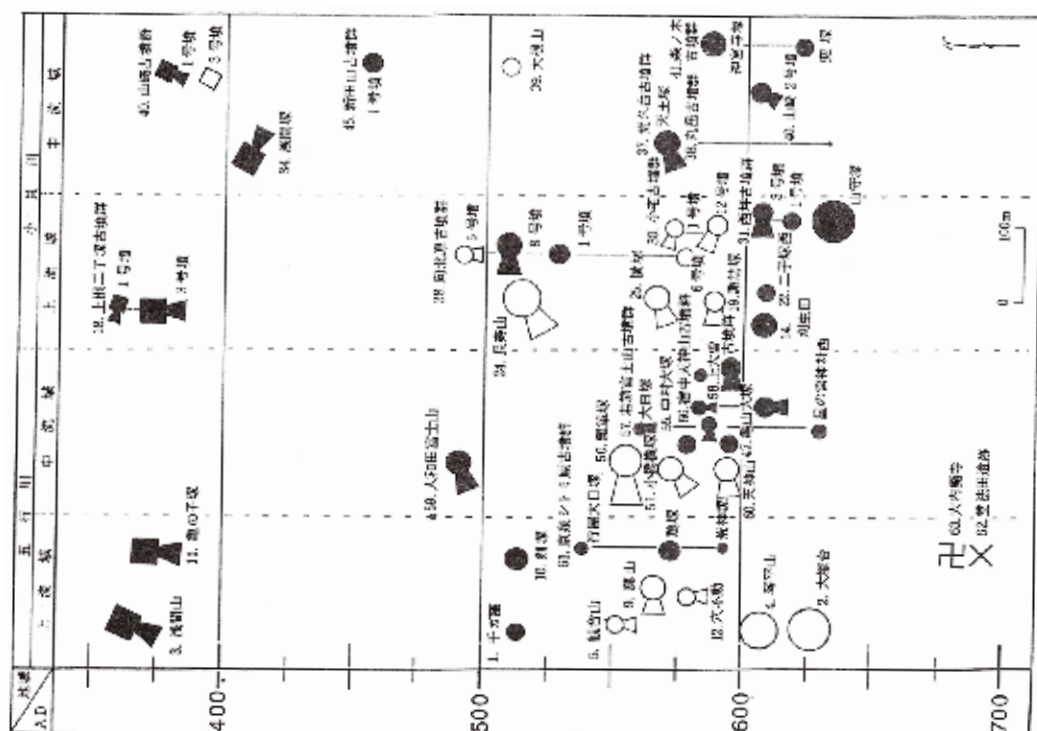
〔集落跡〕

本遺跡の北約12km圏に位置する**井頭遺跡**（註2）と、**赤曾Ⅱ遺跡**（約12,000㎡）は、共に堂法田遺跡（芳賀郡家）と直線距離約3kmの位置に所在することや、大内廃寺（堂法田遺跡附属寺院）など同系統の瓦が出土（第5図）していること等から、郡家（郡衙）との結び付きがあったと考えられている（篠原2004）。

次に真岡台地南部の遺跡をみる。真岡台地南部は鬼怒川や五行川低地との比高が少ない傾向にある。とりわけ、台地南端に近い二宮地域では台地の東西幅が河川浸食により減じている。ゆえ、台地上では中小規模遺跡が隣接し合うことが目立つ（代表的調査事例として本遺跡の北約5km圏に点在する**八木岡Ⅰ遺跡**、**大曲北遺跡**、**伊勢崎Ⅱ遺跡**、**下陰遺跡**がある）。

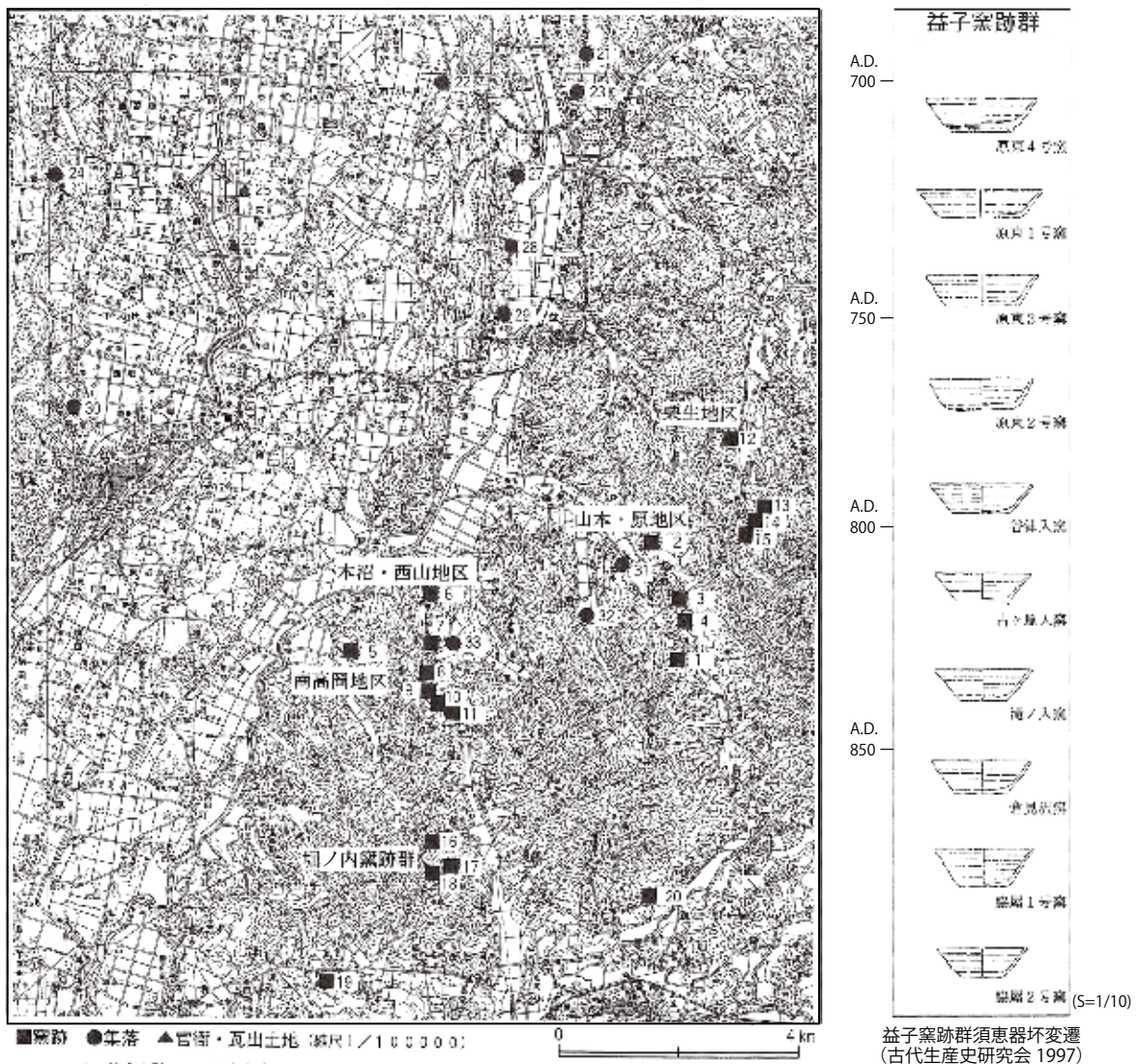
真岡台地南端でも拠点集落と推定されている**長島南遺跡**（二宮町2006）、**蟹が入遺跡**などが広がる。とりわけ蟹が入遺跡では、工場建設に先立つ発掘調査（約27,000㎡）が実施され、古墳時代の集落跡が発見されている（5世紀代の住居跡が21軒、6～7世紀代の住居跡が17軒、時期不明2軒など・水野ほか1989）。

次に、真岡台地の東側、五行川低地面に所在する集落跡を見てみたい。本遺跡の北東約11km、五行川左岸の微高地に所在する**鶴田A遺跡**は、圃場整備予定地（約11,750㎡）と県道改良工事（約1,500㎡）に伴う発掘調査が実施された。結果、5～10世紀の竪穴住居跡85軒、掘立柱建物跡50棟、溝跡31条、土坑257基、柵列2列、道路跡5本、性格不明遺構7基が発見されている（磯貝・木村2001, 進藤2001）。西物井遺跡（本遺跡の北東約4km）も五行川・小貝川に挟まれた微高地上に立地する集落である（註3）。県道調査区（9,000㎡）では、8～10世紀の竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡2棟ほかを検出した（田代2000）。北関東自動車道路の調査区



小貝川・五行川流域における古墳の周年
（白抜きは、時期的相関の希薄なもの）

第3図 小貝川・五行川流域の古墳 (小森紀1987)



	新治窯跡群	木葉下窯跡群	堀ノ内窯跡群
8 C 中	東城寺	TE-3	花見堂1号
後	寄居前A	TE-4	花見堂4号
	東城寺	TC-5	
9 C 前	東城寺桑木		
	小高村内		
中	東城寺		
	寄居前B		花見堂3号・
	小野1号	三ヶ野2号	2号・D地点

常陸国3大窯跡群の併行関係 (古代生産史研究会 1997)

第4図 益子窯跡群・堀ノ内窯跡群

II. 遺跡の立地と環境

(約 26,000㎡) は県道調査区の北約 1 km に所在する。5～9 世紀の竪穴住居跡 67 軒、掘立柱建物跡 7 棟、溝状遺構ほかを検出した(田代 2009)。鶴田 A 遺跡・西物井遺跡とも「水」に関わる施設(水辺に向かう道路状遺構、水場遺構、木組遺構等)が検出されており、低地開発に関わる拠点集落と推定される。なお、西物井遺跡の南東約 1 km に所在する峰高前遺跡でも北関東自動車道路建設に伴う発掘調査(約 26,000㎡)の結果、4～10 世紀を中心とした竪穴住居跡群が検出されているが、集落のピークは 6 世紀後半代に認められる(合田 2007)。

本遺跡の北東約 5 km、小貝川右岸の微高地に所在する市ノ塚遺跡でも 3 世紀末～9 世紀中葉に至る遺構・遺物群が多数確認されている(藤田直・片根 2007, 藤田直 2008, 永井・中三川 2015)。一方、近接する曲田遺跡では、北関東自動車道路建設予定地内(約 28,000㎡)で 5 世紀代の竪穴住居跡 31 軒、溝跡 1 条、土坑 7 基ほかを確認されている(藤田典・仲山 2009)。

馬場先遺跡(本遺跡の東約 5 km)は、小貝川左岸、富谷山地(八溝山塊から派生する小山塊)の裾部に位置する。北関東自動車道路建設に伴う発掘調査(約 10,000㎡)により 6～9 世紀の竪穴住居跡 6 軒、円形有段遺構 4 基等が発見されている(藤田典・仲山 2009)。

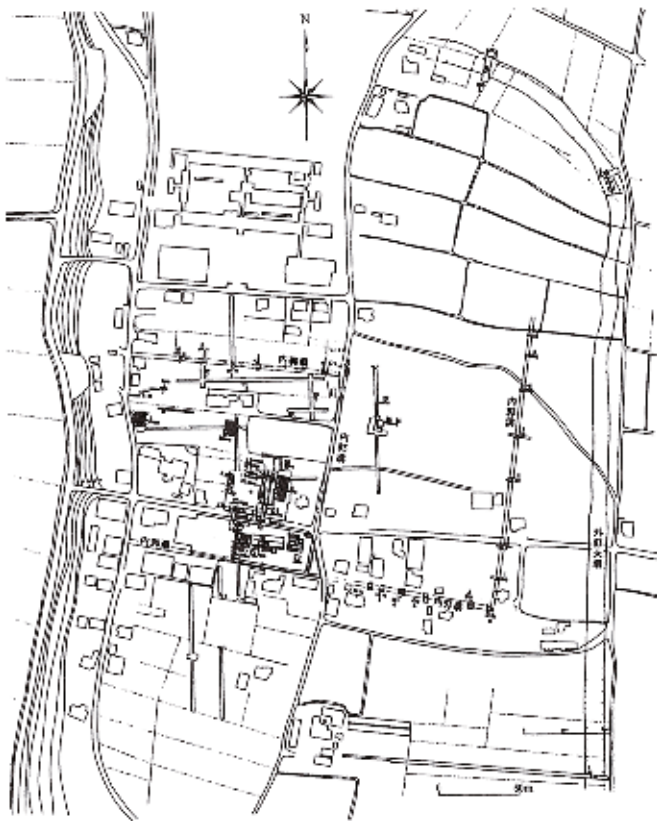
ちなみに、真岡台地西側～鬼怒川東岸に展開する低台地面は、早い時期から水田化が進み、かつ開発が少ないことから遺跡の様相把握は後進気味である。そうした状況であったが、埋蔵文化財包蔵地「**長沼城跡**」(註 4)の至近で県道整備に伴う発掘調査が行われた(調査面積 7,700㎡、東西 800m、幅 17m に及ぶ細長い範囲)。結果、中世遺構群のほか、8～9 世紀の竪穴住居跡 30 軒、掘立柱建物跡 2 棟、古代の溝跡 2 条を発見している(池田 2011)。

〔生産遺跡〕

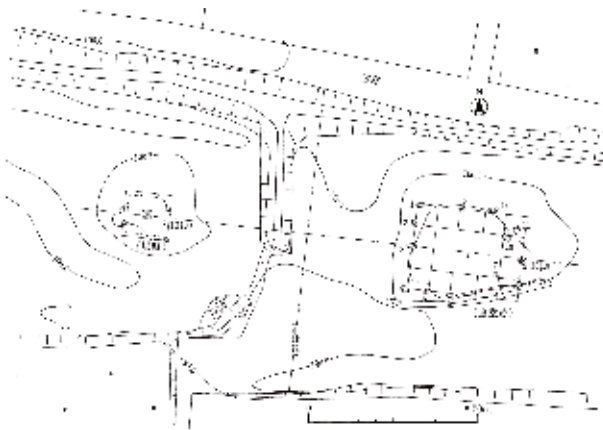
鍛冶・玉作関連 蟹が入遺跡の A 区(5 世紀代の住居群のみで構成)・5 号住居跡において鍛冶炉、鍛冶滓、鍛冶剥片、高坏脚を転用した轆の羽口が出土している(水野ほか 1989)。また、曲田遺跡 B-4 区では石製模造品工房跡が発見されている(調査区内で検出された 11 軒の竪穴建物跡中、半数近い竪穴から滑石の剥片やその未製品が出土している)(藤田典・仲山 2009)。工人集団のルーツ、並びに、「当地域の政治的動向を考えると重要である」(二宮町 2006, 89 頁)。

窯跡 益子町から茨城県桜川市にかけての八溝山地沿いの丘陵地は高火度耐久粘土を含む第三紀層群が分布する地域であるため窯業遺跡が多数存在している。益子窯跡群は、本遺跡の北東約 8～15km、益子町南西部丘陵に形成された窯跡群である(本遺跡の北東約 8～15km に位置、4 支群で 10 数箇所の窯跡群が確認されている)。操業時期は、**南高岡支群**で 7 世紀前半の窯が認められるのを端緒に、山本・原支群の原東窯が 8 世紀前半代に操業される。続いて**本沼・西山支群**の西山窯跡が 8 世紀後半代に瓦を生産し、谷津入窯、古ヶ原入窯の順に操業したと思われる。**栗生支群**は滝ノ入窯、倉見沢窯、脇屋窯の順で操業したと考えられる(第 4 図上段)。加えて、本沼・西山支群の南側丘陵裾部に茨城県桜川市・**堀ノ内窯跡群**が存在する(本遺跡の東約 9 km)。5 支群からなる窯跡群である。発掘調査の結果、**花見堂支群**において 8～9 世紀の操業が確認されている(第 4 図下段右側)。

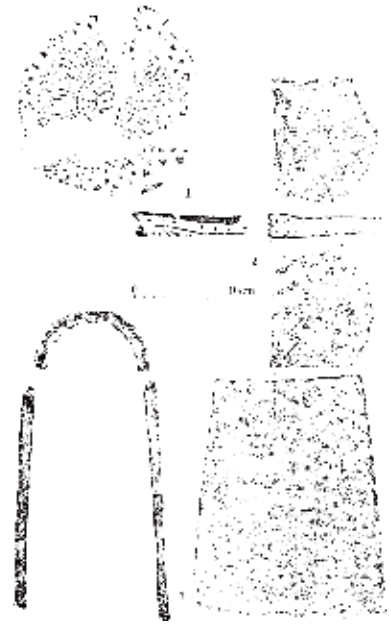
なお、本遺跡発掘調査の結果、益子窯産須恵器のほか、三毳窯産須恵器、常陸地域産須恵器(堀ノ内窯、新治窯、三和窯ほか)、東海地方産の須恵器・施釉陶器等々が出土しており、当時の焼き物流通の様相を垣間見ることができる。



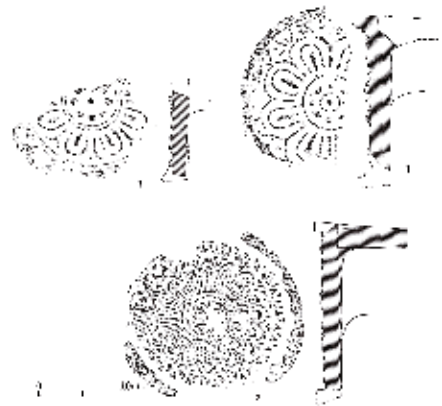
中村遺跡全体図（大橋 2007）



大内廃寺跡遺構の配置図（真岡市 1984）



井頭遺跡出土の瓦（真岡市 1984）



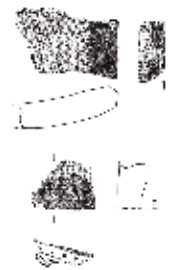
大内廃寺跡出土の瓦（真岡市 1984）



堂法田遺跡出土の瓦（真岡市 1984）



中村遺跡内郭南東隅溝内出土の瓦（真岡市 1984）



赤曾Ⅱ遺跡出土の瓦
（篠原 2004）

II. 遺跡の立地と環境

〔官衙・寺院関連遺跡〕

中村遺跡は、鬼怒川左岸・真岡台地西縁（本遺跡の北西約 4 km）に位置する。数度の発掘調査の結果、外周を東西 360 ～ 380m、南北 800m の大溝で区画し、東西約 300m、南北約 200m の内廓を東西に 2 箇所に分けた官衙遺跡であることが判明した。遺構は礎石建物跡や掘立柱建物跡・竪穴住居跡などが確認されている。芳賀郡家の別院という説が示されている（大橋 2007）。

また、本遺跡の北東約 12km には、芳賀郡家と考えられる**堂法田遺跡**（1965 年、圃場整備に伴い発掘調査、東西約 600m、南北約 300m に整然と配置された礎石建物群を検出）や**大内廃寺**（堂法田遺跡附属寺院、塔跡・金堂跡と推定される礎石群が残る）が存在する（真岡市 1984、大橋 2007）。

附 古代仏教系遺構・遺物が発見された遺跡

本遺跡では、小型阿弥陀如来坐像 1 軀が出土している（「IV. 特記事項 4. 銅造鍍金阿弥陀如来坐像の位置付け」で後述）。ゆえ、参考として、本遺跡 20km 圏内の古代仏教系遺構・遺物が発見された遺跡の一覧表を示しておく。

第 1 表 くま橋遺跡 20km 圏で発見された仏教関連遺構・仏教系遺物（1）

遺跡	所在地	種類	仏教関連遺構	仏教系遺物	備 考
寺平遺跡	芳賀都市貝町	有力者居宅	双堂建物跡 1 組、 仏堂建物跡 1 棟	瓦塔小片 1	富豪層居宅内に仏堂が建てられた可能性が高い
多田羅遺跡	芳賀都市貝町	小規模集落	検出されず	「山寺」銘土器、燈明具転用土器、 仏像鋳型 1	「山寺」を支えた工房集落の可能性あり
星の宮ケカチ遺跡	芳賀郡益子町	有力者居宅か	仏堂と推定される掘立柱建物 1	「寺」銘土器 1、燈明具転用土器 6、 小型短頸壺 1、銅製匙 1	富豪層居宅内に仏堂か
大内廃寺	真岡市	寺院跡	基壇建物跡 2（金堂、 塔跡か）	軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦	8 世紀前半頃に創建された寺院（氏寺）。ただし終焉時期については不明
鶴田 A 遺跡	真岡市	拠点集落	特定出来ず	「中寺」「□井寺」銘土器、燈明具 転用土器 1、花瓶 1、小型短頸壺 1	掘立柱建物群の中の 1 棟が仏堂だった可能性あり
南高岡出土（個人蔵）	真岡市	不明	不明	観音菩薩立像	1987 年、蒔蒨畑を耕運機で耕していた折に発見
大曲北遺跡	真岡市	散居集落	検出されず	「寺」銘土器 1	他の仏教遺構・仏教系遺物は皆無。性格要検討
西物井遺跡	真岡市	拠点集落	特定出来ず	「神役寺」銘土器 1、瓦鉢 1、小型短 頸壺 2、短頸壺 2	発掘調査区外に仏堂施設が存在する可能性も想定できる
くま橋遺跡	真岡市	拠点集落	検出されず	銅造鍍金阿弥陀如来坐像 1、瓦鉢破 片（？）1、燈明具転用土器	本稿（「IV 成果と課題 1. 遺物 e. 銅造鍍金阿弥陀如来坐像について」）
長沼城跡	真岡市	中規模集落	検出されず	「太田寺」「田寺」銘土器、供膳具 1	発掘調査区外に仏堂施設が存在か
猿山遺跡	宇都宮市	中規模集落	検出されず	瓦鉢 1	他の仏教遺構・仏教系遺物は皆無。性格要検討
辻の内遺跡	宇都宮市	拠点集落	双堂建物跡 1 組	瓦鉢破片 1、獣脚 1（香炉か）	ムラの仏堂と考えられている
東林北遺跡	壬生町	散居集落	明瞭な仏堂建物は検 出されず	「阿称寺」銘土器 1、燈明具転用土 器 4	柱筋が通らない掘立柱建物を仏堂に比定する意見が存在する
東谷中島地区遺跡群砂田遺跡 3 区	宇都宮市	拠点集落	検出されず	「佛」「報」銘土器、燈明具転用 土器 7、小型短頸壺 1、水瓶破片 1	発掘調査区外に仏堂施設が存在か

第2表 くるま橋遺跡 20km圏で発見された仏教関連遺構・仏教系遺物（2）

遺跡	所在地	種類	仏教関連遺構	仏教系遺物	備 考
東谷中島遺跡 群砂田遺跡 37 区	宇都宮市	拠点の集落	検出されず	瓦塔破片 1, 獣脚破片 1(香炉か)	発掘調査区外に仏堂施設が存在か
薄市遺跡	上三川町	拠点の集落か	検出されず	瓦塔破片多数, 「寺」銘土器 1, 燈 具転用土器 2, 二彩小型短頸壺小 片 1, 浄瓶小片 1	発掘調査区外に仏堂施設が存在か
一本松遺跡	下野市	散居の集落	検出されず	瓦鉢 1, 小型短頸壺 1	他の仏教遺構・仏教系遺物は皆無。性格 要検討
多功南原遺跡	下野市	拠点の集落	検出されず	「佛」銘線刻土器, 「多心経」銘刻 書紡錘車 1, 瓦鉢 2	池田 2018 参照のこと
下野薬師寺	下野市	伽藍寺院	七堂伽藍が整備され た寺院	螺髪 5, 風鐸, 瓦類	7 世紀後半代に創建された寺院(氏寺)。 のち、官寺化し「天下の三戒壇」の一つ となる
薬師寺南遺跡	下野市	拠点の集落	検出されず	「寺」銘土器 1, 小型短頸壺 1	下野薬師寺関連遺跡
谷館野東遺跡	下野市	散居の集落	検出されず	瓦鉢 1	他の仏教遺構・仏教系遺物は皆無。性格 要検討
上芝遺跡	下野市	散居の集落	検出されず	瓦鉢 1, 花瓶 1	他の仏教遺構・仏教系遺物は皆無。性格 要検討
下野国分寺跡	下野市	伽藍寺院	七堂伽藍が整備され た寺院	仏教関係墨書, 銘土器, 燈明具転用 土器 6, 瓦鉢 3, 小型短頸壺 1, 銅製匙 1, 銅造小型, 増長天立像 1 ほか	

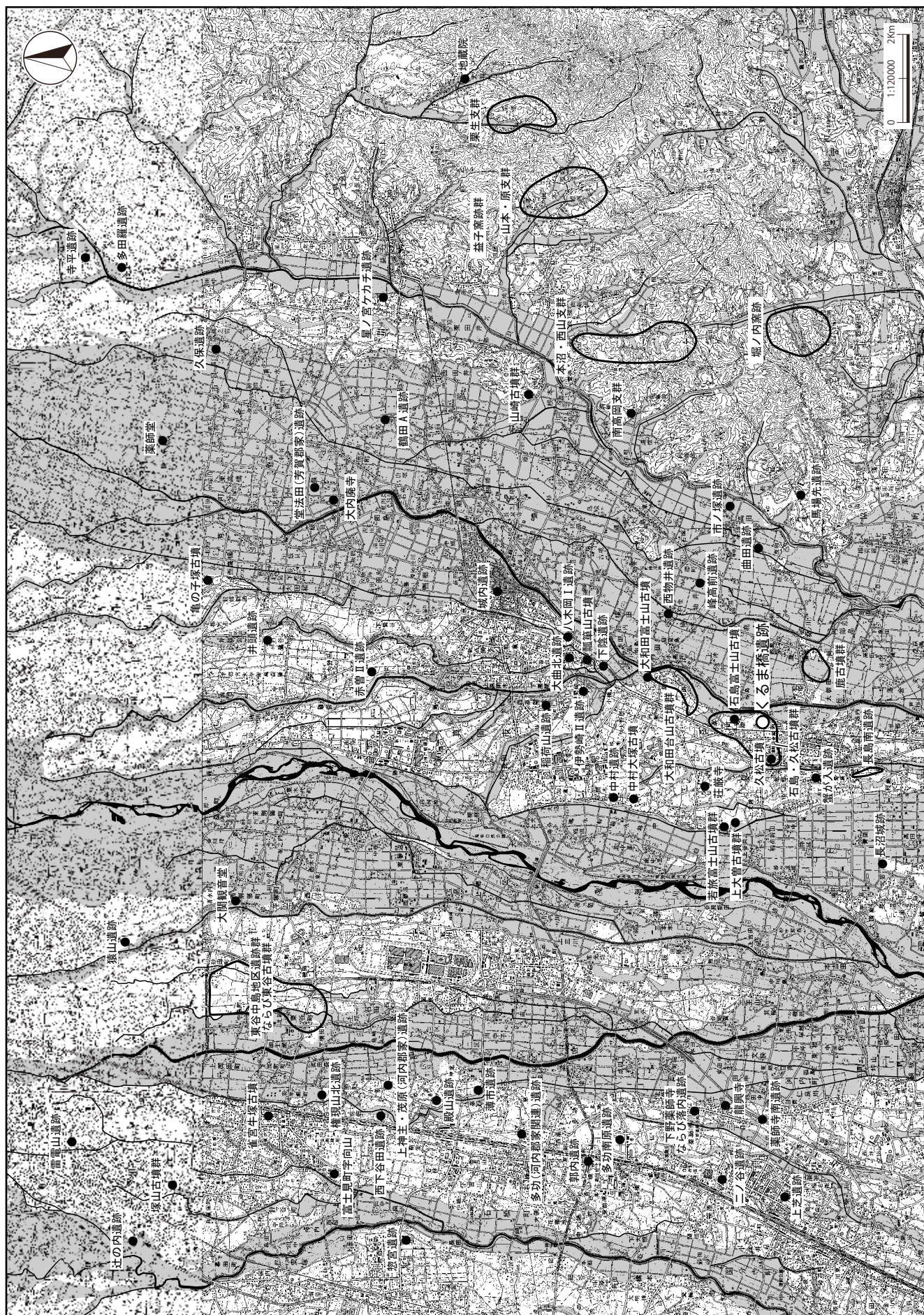
【付記】埼玉県博 1993 文献, 栃木県教委 1999 文献, 田中・池田ほか 2000 文献, 池田 2011 論文ならびに、その後の知見をもとに本表を作成した

【参考資料】くるま橋遺跡 20km圏に残る古代仏像

所蔵	所在地	時期	材質・像高	仏像の種類	備考(来歴など)
龍興寺	下野市 薬師寺	奈良時代	銅造. 像高 7.2cm	誕生釈迦仏立像	1980 年代後半、本堂須弥壇下の銅製箱 (明暦 3 年〔1657〕銘) の中から発見され た。なお本寺は下野薬師寺の南約 700m に 所在する
大関観音堂	宇都宮市 西刑部	平安時代前期	カヤ材の一木造. 像高 2.46m	聖観音菩薩立像	大関観音堂(東谷中島地区遺跡群の東約 2 km) に伝来, 所持。
薬師堂	芳賀町 東高橋	平安時代後期	ヒノキ材の一木割刳 造. 像高 51.1cm	薬師如来坐像(定朝様式)	「延慶四年(1311) 四月八日」の修理銘を 有する
莊嚴寺	真岡市 寺内	平安時代後期	寄木造. 像高 像高 1.04cm	聖観音菩薩立像	
満願寺	上三川町 東汗	平安時代末期	寄木造. 像高 像高 87.5cm	阿弥陀如来坐像(定朝様式)	このほかに、天部立像 2 軀, 平安末期〜鎌 倉初期頃の薬師三尊像が伝わる
下野国分寺 薬師堂	下野市 国分寺	平安時代末期	一木割刳造. 像高 88.0cm	阿弥陀如来(伝釈迦如来) 坐像	下野国分寺の後身である瑠璃光山下野国 分寺の一角(釈迦堂) に伝来

【付記】埼玉県博 1993 文献, 栃木県博 1998 文献, 田中・池田ほか 2000 文献、ならびに、その後の知見をもとに本表を作成した

- 註 1 本遺跡の北約 3 km 圏(真岡市大和田字高畔) には大和田古墳群(旧名称は高畔古墳群) が存在したことが戦前の記録に残る。ほとんどは湮滅し、現状で墳丘が残存しているのは 2 基のみである。なお、真岡市大和田字台山にも 6 基の古墳(台山古墳群) が存在したことが戦前の記録にある。同一古墳群の可能性が考えられる(二宮町 2006)。
- 註 2 過去調査で、住居跡 208 軒(弥生時代が 4 軒、4 世紀代が 4 軒、6 世紀代が 13 軒、8 ～ 10 世紀が 187 軒)、掘立柱建物跡 18 棟などが確認されている(大金ほか 1975、芹澤 2002)。
- 註 3 『『和名類聚抄』下野国芳賀郡の条には 14 の郷名記載がある。郷の現代地比定には不明な部分が多いが、「物井地区を物部郷とする見解は有力である」(二宮町 2006, 8 頁)。
- 註 4 長沼城跡は、バイパス建設地の南方約 200 m の地が城跡の範囲と考えられていた。だが、2008 年度の発掘調査によって当該地まで遺構群が広がることが判明している(池田 2011, 17 ～ 18 頁を併せてご参照頂きたい)。



第6図 本書第Ⅱ・Ⅳ章記載内容に関係する古墳時代～古代の遺跡 (S=1/120,000)

〔参考文献〕

- 秋元陽光・斎藤 弘 1984「芳賀郡二宮町大和田富士山古墳について」『栃木県考古学会誌』第8集、栃木県考古学会
- 池田敏宏ほか 2008・2010・2011『下陰遺跡Ⅰ』/『下陰遺跡Ⅱ』/『長沼城跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 池田敏宏 2011「『寺』銘墨書土器と、古代仏教系遺物、仏堂建物跡の共時性(覚書)―栃木県域事例を対象に―」『研究紀要』第19号、(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 池田敏宏 2018「多功南原遺跡出土「多心経」銘刻書紡錘車に関する仏教史的考証」『研究紀要』第26号、(公財)とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター
- 磯貝 厚・木村友則 2001『鶴田A遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 大金宣亮ほか 1975『井頭遺跡』栃木県教育委員会
- 大橋泰夫 2007「紙上報告 堂法田遺跡/中村遺跡」『栃木県考古学会シンポジウム 上神主・茂原官衙遺跡の諸問題』栃木県考古学会
- 栃木県教育委員会 1999『栃木県立しもつけ風土記の丘資料館第13回企画展 仏堂のある風景 古代のムラと仏教信仰』
- 合田恵美子 2007『峰高前遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 古代生産史研究会 2007『古代生産史研究会'97シンポジウム 東国の須恵器』
- 小森紀男 1986「小貝川・五行川流域における古墳の分布と変遷」『真岡市史案内』第6号、真岡市史編さん委員会
- 埼玉県立博物館 1993『甕の光彩 関東の出土金銅仏』
- 篠倉窯跡研究会 1995・1996「益子町篠倉窯跡採集の須恵器と瓦について」/「益子町篠倉窯跡採集の須恵器と瓦について(続)」『栃木県考古学会誌』第17・18集、栃木県考古学会
- 篠原浩恵 2004『赤曾Ⅱ遺跡・亀山北遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 進藤敏雄 2001『鶴田A遺跡Ⅱ』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 芹澤清八 2002『井頭遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 高井梯三郎・五十川伸弘 1988『常陸国新治上代遺跡の研究Ⅱ』甲陽史学会
- 田代己佳 2000『西物井遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 田代己佳 2009『西物井遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 田中広明・池田敏宏ほか 2000『古代仏教系遺物集成・関東』考古学から古代を考える会
- 栃木県立博物館 1998『栃木県立博物館調査研究報告書 栃木県の仏像』
- 永井三郎・中三川 渉 2015『市ノ塚遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ未来づくり財団
- 二宮町 2006『二宮町史』史料編Ⅰ 考古・古代中世
- 塙 静夫 2000『探訪とちぎの古墳』随想舎
- 藤田直也・片根義幸 2007『市ノ塚遺跡(第1分冊)』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 藤田直也 2008『市ノ塚遺跡(第2分冊)』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 藤田典夫・仲山英樹 2009『曲田遺跡・馬場先遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 水野順敏ほか 1989『栃木県二宮町 蟹が入遺跡』二宮町教育委員会
- 真岡市 1984『真岡市史』第1巻 考古資料編
- 吉田 哲 1998・1999『大曲北遺跡・小橋Ⅰ遺跡』/『八木岡Ⅰ遺跡』/『伊勢崎Ⅱ遺跡(古墳・奈良・平安時代編)』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団

Ⅲ．調査成果

1. くるま橋遺跡の概要

〔1〕石島地区の古墳分布

(1) 真岡市石島地区には 14 基の古墳で構成される石島古墳群が存在したことが戦前の記録にある(第7図上段右側)。古墳群の範囲は、現在の真岡市二宮コミュニティー・センターの北東から南にかけて(東西約 0.7km、南北約 2.0km)である。現在、石島富士山古墳、三本松古墳、吾妻古墳の 3 基が残存する(第7図上段左側)(二宮町 2006)。

(2) 石島富士山古墳(今回調査区の北約 7 km)は、一辺約 40 m、高さ 4 m の方形盛り土の上に径 23 m、高さ 2 m の円丘が載っている(墳頂に浅間神社が祀られている)。また、南へ向かって緩く傾斜する長方形の参道が付く。墳丘測量図を一見すると、全長 70 m 級の前方後方墳を思わせる平面形状である(第7図中段左側)(二宮町 2006)。平成 21 年、農地整備事業(後述)に伴う発掘調査の折、古墳西側の事業地をトレンチ調査したが、遺構は皆無であった。結果、本古墳は、方墳または円墳である可能性が高くなった。なお本墳付近から古墳時代前期の土師器(二重口縁壺)破片が採集されていること、舌状台地先端に立地していること、等から前期古墳と想定されている(二宮町 2006)。

(3) 三本松古墳(今回調査区の北約 2 km)は、残存墳丘部(東西 11 m、南北 18.3 m の長方形・高さは 1.5 m)全体が墓地として利用されていることもあり、内部主体や正確な墳形等は不明であった。平成 24 年、農地整備事業(後述)に伴うトレンチ調査の結果、一辺約 27 m の方墳であることが分った(第7図下段右側)(植木・市川 2014)。

吾妻古墳(今回調査区の南西約 3 km)は、径 15 m、高さ 1 m の円墳で墳丘上に我妻神社の祠が建つ。未調査。墳丘に石材(雲母片岩)片が認められることより竪穴系石棺石室墳、ないし横穴式石室墳の可能性が考えられている。なお、埴輪の出土はない(二宮町 2006)。

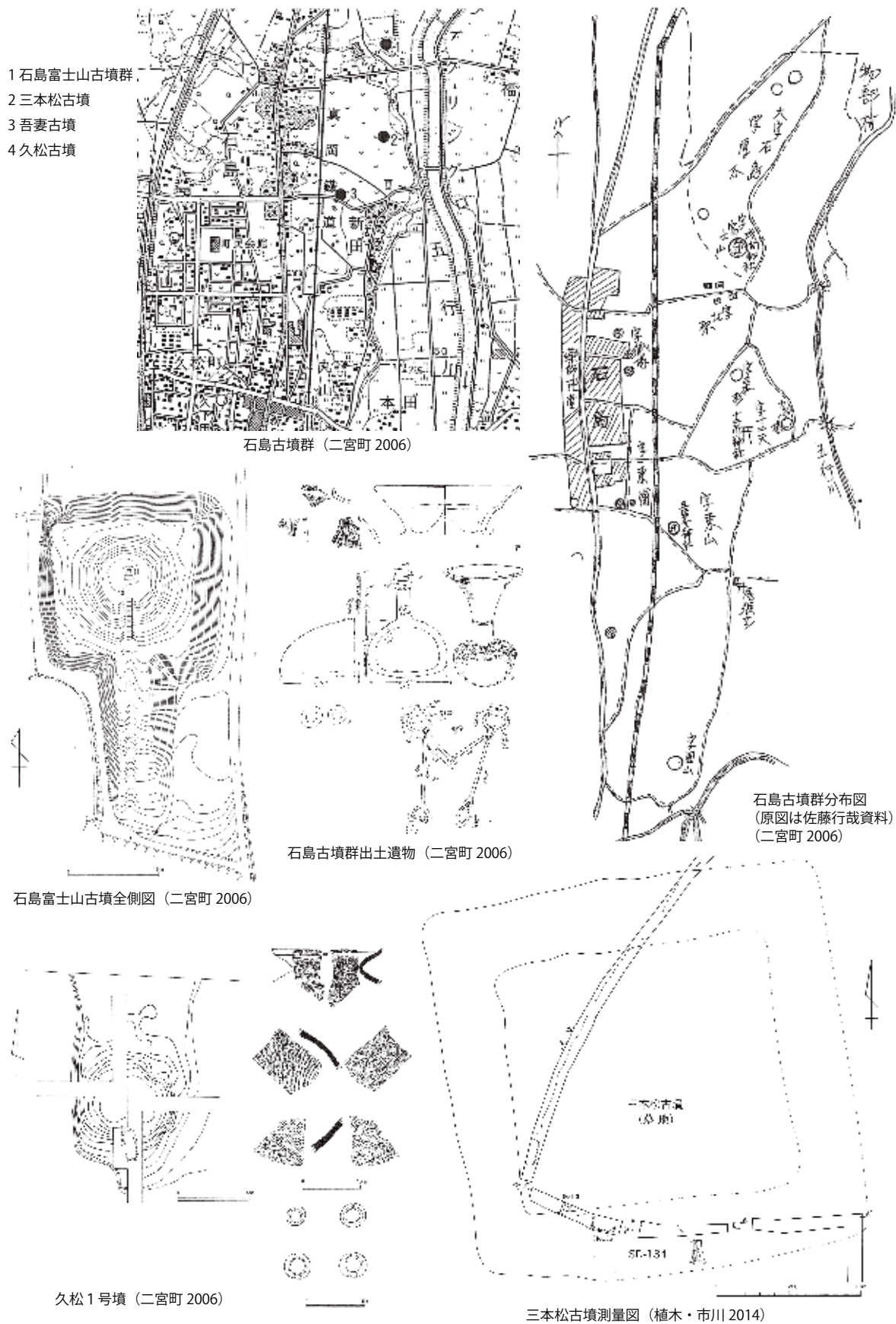
(4) 平成 4～5 [1992～93] 年、久松古墳群(石島古墳群の支群と考えられる)が土地区画整理事業に伴い発掘調査され、1 号墳(墳丘形状は不明だが 20m を超える規模と推定。主体部は横穴式石室)、2 号墳(墳丘・周溝は認められず。主体部は小石室)の 2 基が確認されている。主体部構造から 6 世紀後半以降の古墳と考えられている(第7図下段左側)(二宮町 2006)。

〔2〕石島地区の埋蔵文化財包蔵地について

(1) 石島地区は従来から遺物散布密度が濃いことが知られている。遺物散布の南北範囲は国道 294 号・寺内交差点から同・二宮コミュニティー・センター東交差点にかけて、東西範囲は国道 294 号東側から五行川断崖間で認められている。昭和 48 [1973] 年 1 月、栃木県教育委員会が実施した分布調査では、南・北は五行川に架橋された「くるま橋」～「石島大橋」間、東・西は国道 294 号東側から五行川断崖上の範囲を「石島遺跡」としている。

(2) 1977 年刊行遺跡地図は、(1) のエリアを四分し No.403 遺跡(石島遺跡)、No.404 遺跡、No.405 遺跡、No.406 遺跡(新田遺跡。今回調査区の東区の一部が該当)としている。また、No.406 遺跡の南西方向に No.407 遺跡、No.408 遺跡、No.409 遺跡(新田古墳)、No.410 遺跡を設けている(文化庁 1977)(第8図上段左側)。

(3) 1985 年刊行遺跡地図でも、(1) のエリアを細分し県 No.2289 遺跡(石島東遺跡)、県 No.2290 遺跡(石島 1～2 遺跡)、県 No.2292 遺跡(新田北遺跡)、県 No.2293 遺跡(No.2292・2293 遺跡は今回調査区を含む)としている(栃木県 1985)(第8図上段右側)。



第7図 真岡市石島地区の古墳

Ⅲ. 調査成果



『栃木県埋蔵文化財地図』(1997 年)

- | | |
|------------------------|---------------------|
| No6009-1 遺跡 (大和田 1 号墳) | No6013 遺跡 (久下田中遺跡) |
| No6009-2 遺跡 (大和田 2 号墳) | No6014 遺跡 (久下田中Ⅱ遺跡) |
| No6009-3 遺跡 (大和田 3 号墳) | No6015 遺跡 |
| No6009-4 遺跡 (大和田 4 号墳) | No6016 遺跡 (久下田西Ⅰ遺跡) |
| No6024 遺跡 (久松遺跡) | No6017 遺跡 (久下田西Ⅱ遺跡) |

第 8 図 石島地区の埋蔵文化財包蔵地

(4) 1997 年刊行遺跡地図でも、(1) のエリアを細分、県 No.6013 遺跡 (久下田中遺跡)、県 No.6014 遺跡 (久下田中Ⅱ遺跡)、県 No.6016 遺跡 (久下田西Ⅰ遺跡)、県 No.6017 遺跡 (久下田西Ⅱ遺跡)(今回調査区の東区の一部が該当)としている(栃木県 1997)(第 8 図下段)。

平成 21 年度県営圃場整備事業地内遺跡確認調査の成果(栃木県教育委員会 2011,37 頁を踏まえて記述)

調査対象面積(183,000㎡)の 0.6%(1,100㎡)に対してトレンチ調査を行った(幅 2×長さ 10 m のトレンチを 55 本、適宜設定)(第 9 図)。その結果、多少の粗密はあるものの、調査区のほぼ全域に、5～10 世紀にかけての集落跡、削平された古墳跡、中世遺構等が重複して存在していることが判明した(第 3 表)。

特筆点としては石島古墳群の構成内容を幾ばくかでも明らかに出来た点をあげたい。本章冒頭(「〔1〕石島地区の古墳分布」)でも記したように、石島富士山古墳は、円墳または方墳である可能性が高くなった。また、三本松古墳は、墳丘残存部(墓地)の縁辺トレンチ(北側・西側・南側)全てで周溝の平面プランを検出できた(円墳と仮定すれば、外縁径 30 m 級の古墳であることが明らかになった)。加えて、三本松古墳南側に存在した古墳跡の周溝プランも確認できた(戦前記録には見られない新規発見古墳跡)。

平成 24 年度くるま橋遺跡の発掘調査成果(植木・市川 2014 より抜粋・引用)

農地整備事業(畑地帯担い手育成型)に伴い、総面積 1,080㎡を水路幅(トレンチ状)にて発掘調査した(第 9 図)。なお、この折、真岡市教育委員会と協議のうえ、当該事業地の遺跡名称を、くるま橋遺跡とした。

a. 旧石器～弥生時代の成果

ナイフ形石器 [SI-128・6]、条痕文土器 [SI-5・14]、阿玉台式土器 [SI-133・3 等]、縄文時代後期前半土器 [SD-86・8 等]、弥生時代後期土器 [SI-114・3 等] の小破片が出土した(ただし当該期の遺構は検出されていない)。

b. 古墳時代中期の成果

三本松古墳周溝(西側と南側)の一部を検出した。周溝の内縁幅(約 27 m)と、溝幅(約 4.9 m)をもとに、墳形を復元すると、東西辺約 28 m、南北辺約 27 m の方墳であることが明らかとなった。なお、方墳の南側周溝覆土から古墳時代中期頃の土師器(高坏)が出土したことから、本墳も近似した時期と考えられている。

c. 古墳時代後期～平安時代の成果(要約)

遺構

平成 24 年度調査では、竪穴住居跡 56 軒、掘立柱建物跡 2 棟、掘立柱の柱穴 14 基、土坑 37 基、溝状遺構 13 基、性格不明遺構 1 基が発見・調査された。

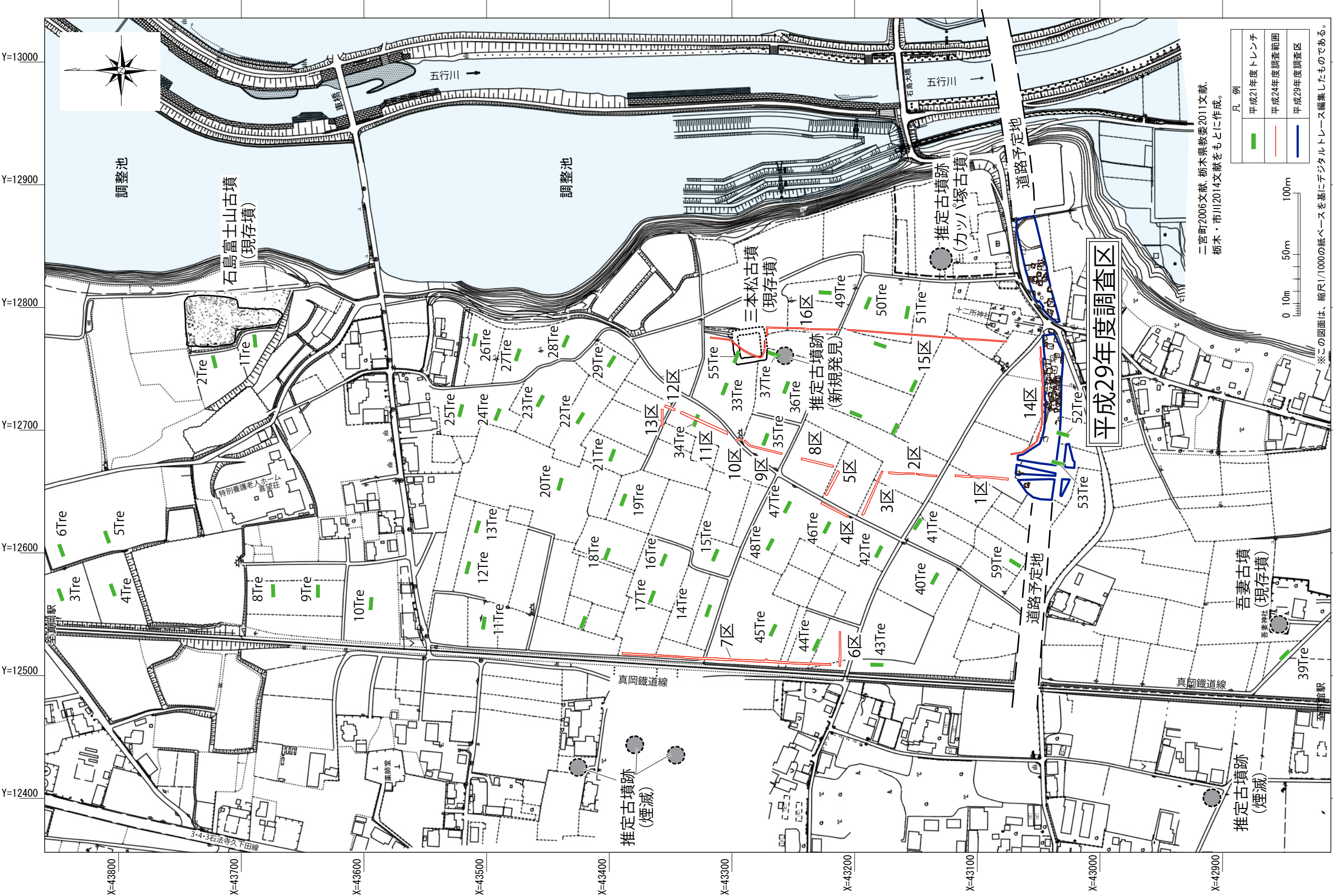
遺物

- ・須恵器は益子窯産製品が多い。なお、三毳窯産、新治窯産の製品等も少量確認されている。
- ・常総系土師器甕は、ほとんどの住居跡から出土。一方、上武系土師器甕 [SI-26・1] は 1 点のみ。
- ・古代施釉陶器は、灰釉陶器破片 13 点 [SI-112・1 等]、緑釉陶器小片 2 点 [図版 21・表採 6 等]。
- ・少量ながら墨書土器 [15 区表採・6 等]・朱書土器 [SI-21・4] が出土(ただし釈読可能資料は少ない)。なお、須恵器の高坏 [SI-21・6 等]、盤 [SI-21・7]、硯 [8 区表採・9 等]、製塩土器 [SI-128・6] や、燈明具転用土器 [SI-129・1 等]、瓦鉢(鉄鉢形土器) [SI-128・6] も出土。
- ・生業関係遺物としては、編み物石 [SI-40・3 等]、土錘 [SD-86・6 等]、石錘 [SI-128・9 等] が出土しており、五行川に関連する漁労が想定されている。なお、土器破片を転用した紡錘車 [SI-106・1] や鉄製の紡錘車軸棒 [7 区表採・1] も出土。

Ⅲ. 調査成果

第3表 H 24 年度確認調査成果一覧表

トレンチ	遺構の有無	現地表から遺構確認面までの深さ (cm)	時期	備考
1	×	—	—	石島浅間神社古墳の東側。平坦に掘削され、遺構無し。
2	×	—	—	石島浅間神社古墳の東側。平坦に掘削され、遺構無し。
3	×	—	—	傾斜地を掘削して開田しているので、遺構無し。
4	×	—	—	傾斜地を掘削して開田しているので、遺構無し。
5	○	60	時期不明	牛蒡トレンチャーで、上半部が攪乱。
6	○	60	時期不明	南東向き緩斜面の上端。
7	×	—	—	南東向き緩斜面、遺構無し。
8	○	10	古墳時代	北向き緩斜面。耕作土直下で遺構確認。集落跡の北端。
9	○	30	古墳時代～奈良・平安時代	畑地で削平を受けておらず、遺構の残存良好。
10	○	25	古墳時代～奈良・平安時代	土師器片多く、竪穴住居跡の可能性。牛蒡トレンチャーで上端が攪乱。
11	○	20	奈良・平安時代	牛蒡トレンチャーで攪乱。一辺約3mの竪穴住居跡の北半分を確認。
12	○	25	古墳時代～奈良・平安時代	奈良・平安時代の住居跡(小)、古墳時代中期の住居跡(大)。
13	○	25	古墳時代	古墳時代中期～後期前半頃の竪穴住居跡を確認。
14	○	30	古墳時代～奈良・平安時代	竪穴住居跡の分布密度がきわめて高い。集落跡の中心か。
15	○	30	時期不明	ビットの埋土は黒色土にロームブロックを多く含む。
16	○	40	古墳時代～奈良・平安時代	炭化物・焼土を多量に含むビット、あるいは竪穴住居跡カマド。
17	○	40	古墳時代～奈良・平安時代	住居の南東コーナー部分の可能性もあり。
18	○	20	古墳時代～奈良・平安時代	土坑群か。1基は、小型の竪穴住居跡の可能性もある。
19	○	20	古墳時代～奈良・平安時代	竪穴住居跡の重複を確認。1基でカマド確認。
20	○	20	奈良・平安時代	一辺5mの竪穴住居跡を確認。
21	○	25	古墳時代～奈良・平安時代	一辺5m以上の竪穴住居跡の南東コーナー部分を確認。
22	○	25	奈良・平安時代	竪穴住居跡の南コーナー部分を確認。
23	○	15	古墳時代	耕作土直下で竪穴住居跡の南東隅を確認。
24	○	20	時期不明	土坑の北端を確認。
25	×	—	—	—
26	○	25	古墳時代～奈良・平安時代	竪穴住居跡のカマドを確認。
27	○	25	時期不明	幅1m以上の溝跡を確認。現在の地割りに近い方向。
28	○	20	中世	耕作土直下で上幅2mの溝跡、コーナー部分を確認。
29	○	25	古墳時代～奈良・平安時代	竪穴住居跡の北東隅を確認。カマドも確認。
30	○	20	時期不明	耕作土直下で推定上幅4mの溝跡を確認。深さは、確認面から約50cm。
31	○	20	古墳時代～中世	上幅1mの溝跡2条を確認。埋土に古墳時代の土師器片。
32	○	15	古墳時代、奈良・平安時代	三本松古墳の西側周溝を確認。奈良・平安時代の竪穴住居跡が重複。
33	○	15	古墳時代～奈良・平安時代	耕作土直下で竪穴住居跡2軒の重複を確認。遺構密度が高い。
34	○	30	奈良・平安時代	竪穴住居跡3軒を確認。遺構密度は高い。
35	○	30	中世～近世	中世以降の墓壇群か？
36	○	20	奈良・平安時代	耕作土直下でカマド付きの竪穴住居跡を確認。ビット群有り。
37	○	20	古墳時代	三本松古墳の南側周溝を確認。南側に隣接する古墳の周溝も確認。
38	×	—	—	南向き緩斜面の上端。遺構確認されず。
39	○	25	中世～近世	吾妻古墳南西のトレンチ。土坑の一部を確認。
40	○	25	奈良・平安時代、中世	竪穴住居跡の一部を確認。中世以降の土坑も存在。
41	○	25	中世～近世	中世以降の土坑の一部を確認。
42	○	20	古墳時代～奈良・平安時代	耕作土直下で竪穴住居跡を確認。土坑も存在。
43	×	—	—	—
44	○	15	奈良・平安時代	耕作土直下で推定一辺3mの竪穴住居跡を確認。
45	○	20	中世	耕作土直下で中世以降の土坑複数が重複する様子を確認。
46	×	—	—	—
47	○	20	中世～近世	幅約3mの大型土坑の一部を確認。
48	○	20	古墳時代	竪穴住居跡の一部を確認。耕作土直下に遺構存在。
49	○	15	古墳時代～奈良・平安時代	耕作土直下で竪穴住居跡および土坑の一部を確認。
50	○	20	奈良・平安時代～中世	耕作土中に土器片多量。竪穴住居跡と土坑を確認。遺構密度高い。
51	○	25	古墳時代～奈良・平安時代	耕作土中に土器片多量。土坑を確認。
52	△	35	古墳時代～奈良・平安時代	耕作土中に土器片多量。牛蒡トレンチャーで攪乱受けるも、遺構多数の可能性大。
53	△	15	古墳時代～奈良・平安時代	耕作土中に土器片多量。牛蒡トレンチャーで攪乱受けるも、遺構多数の可能性大。
54	×	—	—	埋没谷の上端部分か。
55	○	25	古墳時代	三本松古墳の北側周溝を確認。



第9図 くるま橋遺跡ならびに石島古墳群全図 (S=1/3,000)

今回(平成29年度)の発掘調査成果

遺構：総遺構数83基。内訳は古墳時代中期の方墳跡1基、飛鳥時代後半～平安時代前半の竪穴住居62軒、1間×1間以上の規模を有する掘立柱建物跡1棟、中・近世と思われる溝跡4条、土坑15基(付図)。

遺物：5世紀の土器(土師器, 初期須恵器)、7世紀中葉～10世紀頃の土器群(土師器, 須恵器, 統一新羅系陶器, 灰釉陶器, 緑釉陶器)、土製品(土錘, 紡錘車)、石製品(石製祭祀具, 石錘など)、金属製品(刀子, 釘, 鎌, 鋤など)、10世紀頃に位置付けられる小型銅造鍍金阿弥陀如来坐像1軀、中世の陶磁器(須恵系陶器片, 渥美窯産?陶器片, 天目形碗片など)。

第4表 くるま橋遺跡遺構掲載一覧

遺構名	種別	本文	遺構図	土器図	土器写真	碁石, 紡錘車, 土錘図・写真	金属製品図・ 写真
SI-1	竪穴建物	p.23,24	p.54	p.147	p.185		p.259,262
SI-2	竪穴建物	p.24	p.55	p.144-146	p.179-184		
SI-3	竪穴建物	p.24,25	p.56	p.147	p.186	p.253,254	
SI-4	竪穴建物	p.25	p.56	p.147	p.186	p.253,254	
SK-5	土坑	p.48	p.103				
SD-6	溝跡	p.49,50	p.105				
SI-7	竪穴建物	p.25,26	p.57	p.147,148	p.187		p.259,260
SI-8	竪穴建物	p.26	p.58	p.148	p.187,188		
SK-9	竪穴建物	p.48	p.103				
SI-10	竪穴建物	p.26	p.59	p.149	p.189		
SI-11	竪穴建物	p.26,27	p.60	p.149	p.189		
SI-12	竪穴建物	p.27	p.59				
※ S-13,14,15 は欠番							
SI-16	竪穴建物	p.27	p.61	p.149	p.190		
SI-17	竪穴建物	p.28	p.61	p.150	p.190		
SK-18	土坑	p.48	p.103				
SK-19	土坑	p.48	p.103				
SI-20	竪穴建物	p.28	p.62	p.151	p.191		p.259,260
SI-21	竪穴建物	p.28,29	p.63,64	p.151-153	p.191-194		p.259,260
SI-22A	竪穴建物	p.29	p.65	p.153,154	p.195,196		
SI-22B	竪穴建物	p.30	p.64,65	p.154	p.196,197		
SI-23	竪穴建物	p.30	p.66	p.155	p.197,198		
SI-24	竪穴建物	p.31	p.67	p.156	p.198,199		p.259,260
SI-25	竪穴建物	p.31	p.68	p.156	p.199		
SI-26	竪穴建物	p.31	p.69	p.157	p.200	p.253,254	p.259,260
SI-27	竪穴建物	p.32	p.70	p.157	p.200,201	p.253,254	p.259,260
SI-28	竪穴建物	p.32	p.71	p.158	p.201		
SI-29	竪穴建物	p.32,33	p.72	p.158	p.202		p.259,260
SD-30	溝跡	p.50	p.106				
SI-31	竪穴建物	p.33	p.73	p.158	p.202		
SK-32	土坑	p.48	p.103				
SI-33	竪穴建物	p.33	p.74	p.159	p.203		
SI-34	竪穴建物	p.34	p.75	p.159	p.203		
SI-35	竪穴建物	p.34	p.76	p.159,160	p.203,204		
SD-36	溝跡	p.50	p.107				
SI-37	竪穴建物	p.35	p.77	p.161	p.204		p.259,260
SI-38	竪穴建物	p.35	p.78	p.161,162	p.205		p.259,260
SI-39	竪穴建物	p.35,36	p.79	p.162	p.206		p.259,260
SI-40	竪穴建物	p.36	p.79	p.163	p.206	p.253,254	p.259,260
SI-41	竪穴建物	p.36	p.80	p.163,164	p.207		
SI-42	竪穴建物	p.36	p.81	p.164	p.208		
SI-43	竪穴建物	p.37	p.81	p.165	p.208		
SI-44	竪穴建物	p.37	p.82	p.165	p.209	p.253,254	
SI-45	竪穴建物	p.37	p.83	p.165	p.209		
SI-46	竪穴建物	p.38	p.83	p.166	p.210		
SI-47	竪穴建物	p.38	p.84	p.166	p.210		p.259,260
SI-48	竪穴建物	p.38,39	p.84	p.166	p.210	p.253,254	
SI-49	竪穴建物	p.39	p.85				
SI-50	竪穴建物	p.39	p.85	p.166	p.210		
SB-51	掘立柱建物	p.48	p.102				
SI-52	竪穴建物	p.39	p.85	p.167	p.210,211		
SZ-53	方墳跡	p.23	p.52,53	p.167	p.211		
SI-54	竪穴建物	p.40	p.85	p.167	p.211		
SK-55	土坑	p.48,49	p.103	p.167	p.211		
SK-56	現代溝と判断→欠番遺構						
SI-57	竪穴建物	p.40	p.86	p.167,168	p.211,212		p.259,260
SI-58	竪穴建物	p.40	p.87	p.168	p.212,213	p.253,254	p.259,260
SI-59A	竪穴建物	p.41	p.88	p.169,170	p.213		p.259,260
SI-59B	竪穴建物	p.41	p.88	p.169,170	p.213,214		
SI-59C	竪穴建物	p.41,42	p.89,90	p.170	p.214		
SI-60	竪穴建物	p.42	p.90	p.170	p.215		
SI-61	竪穴建物	p.42	p.91	p.171	p.215,216		p.259,260
SI-62	竪穴建物	p.43	p.92	p.171	p.216		p.259,260
SI-63	竪穴建物	p.43	p.93	p.172	p.216	p.253,254	
SI-64	竪穴建物	p.44	p.94	p.172	p.216		
SI-65	竪穴建物	p.44,45	p.95	p.172,173	p.217	p.253,254	p.259,260
SI-66	竪穴建物	p.43	p.104				
SI-67	竪穴建物	p.45	p.96	p.173,174	p.218		p.259,260
SI-68	竪穴建物	p.45	p.97	p.174,175	p.219		p.259,260
SD-69	溝跡	p.50	p.108				
SI-70	竪穴建物	p.46	p.98	p.175	p.220	p.253,254	p.259,260
SK-71	土坑	p.49	p.103	p.176	p.221		
SI-72	竪穴建物	p.46	p.98	p.176	p.221		
SI-73	竪穴建物	p.46	p.99	p.176	p.221		

Ⅲ. 調査成果

遺構名	種別	本文	遺構図	土器図	土器写真	基石・紡錘車・土錘図・写真	金属製品図・写真
SI-74	竪穴建物	p.46,47	p.100	p.177	p.222		
SK-75	土坑	p.49	p.103	p.177	p.222	p.253,254	p.259,260
SK-76	土坑	p.49	p.103				
SI-77	竪穴建物	p.47	p.91	p.177	p.222		
SK-78	現代溝と判断→欠番遺構						
SK-79	土坑	p.49	p.104				
SK-80	土坑	p.49	p.104				

遺構名	種別	本文	遺構図	土器図	土器写真	基石・紡錘車・土錘図・写真	金属製品図・写真
SK-81	土坑	p.49	p.104				
SI-82	竪穴建物	p.47	p.100	p.177	p.223		
SK-83	土坑	p.49	p.104	p.178	p.223		
SI-84	竪穴建物	p.47,48	p.101	p.178	p.223		p.259,260
SD-85	現代溝と判断→欠番遺構						
S-86	欠番遺構						



西区遠景（南東上空）

〔引用・参考文献〕

- 植木茂雄・市川岳朗 2014『くるま橋遺跡』栃木県教育委員会・(公財)とちぎ未来づくり財団
- 栃木県教育委員会 1985『栃木県文化財地図』
- 栃木県教育委員会 1997『栃木県埋蔵文化財地図』
- 栃木県教育委員会 2011『栃木県埋蔵文化財保護行政年報 33 平成 21 年度(2009)』
- 二宮町 2006『二宮町史』史料編Ⅰ 考古・古代中世
- 文化庁 1977『全国遺跡地図 栃木県』

2. 遺構

〔古墳跡〕

SZ-53 (方墳跡)(第 10 図)

位置:東区 .U1 ～ 3, V1, W1, X1・2 グリッドで確認された。 **墳丘・周溝:**墳丘は後世の削平を受けており、盛り土、埋葬主体部は確認できなかった。東・北・西の三辺で周溝が確認された。現状で確認できる周溝内縁幅は東西 22 m、南北 20 m 以上。周溝外縁幅は東西 26 m。周溝の幅は 0.39 ～ 0.6 m。深さは 0.06 ～ 0.16 m。周溝断面は逆台形で、溝内壁が急激に立ち上がる箇所がある。なお、北西側の周溝を見ると、隅丸状に膨らむようである。なお、周溝内縁幅と溝幅をもとに、墳形を復元すると、東西辺約 26 m、南北辺約 30 m の方墳と推定できる。

覆土:5 層に分層した(土層の肉眼観察では、年代指標テフラは確認出来なかった)。ゴボウトレンチャーを始めとする後世の攪乱が著しい。

重複関係:周溝東側は攪乱(現代溝跡)に切られる。 **出土遺物:**古墳時代中期頃と考えられる土師器高坏 1 点(第 103 図)が出土している。非実測資料としては須恵器・土師器破片数点がある。 **時期:**1 期(5c 代)として捉えた。

〔補記〕

以下を根拠に、本墳と、三本松古墳(平成 21・24 年度調査、本書 14 ～ 15 頁併照)が、大和田富士山古墳出現以前の有力首長墓であった可能性を仮定してみたい。

- ・5 世紀後葉に後出する有力首長墳(大和田富士山古墳、瓢箪山古墳)と同一立地(五行川低地を眼下に望む崖上)に所在。
- ・初期須恵器が出土(本書「IV -1. 初期須恵器」併照)。
- ・本遺跡 4 km 圏内の、方墳(方形周溝墓)群は、本墳よりも小型(一辺 9 ～ 15m 程。ただし下陰遺跡 SZ-78 は例外的に大きく一考を要する)が多い。さらに、これらは五行川低地面に所在(本書「II -2 歴史的環境」併照)。

〔竪穴建物跡〕

SI-1 (竪穴建物跡)(第 11 図)

位置:西区 .M3・4, N3・4 グリッド **規模・形状:**長軸 5.46 m、短軸 4.49 m、壁高 47 m。長方形状を呈する。

周溝:東・北・西の三辺で周溝が確認された。最大幅 0.32 m。床面からの深さは 0.04 m。

床面 Pit・土坑:2 基検出した。

P-1 は長軸 1.11 m、短軸 1.03 m。床面からの深さは 0.48 m。

P-2 は長軸 0.31 m、短軸 0.27 m。床面からの深さは 0.16 m。

なお、床面精査の結果、本竪穴には掘り方土坑は無いことが明らかとなった。

火処:カマドは無かった。代わりに、竪穴中央～南西寄りに炉跡と推定(長軸 0.46 m、短軸 0.32 m。床面からの深さは 0.06 m)が確認された。また、竪穴中央部床面に硬化赤変した部分が 2 箇所検出された。

覆土:10 層に分層した(P-1・2、炉を含む)。遺構重複がある上、後世の攪乱(ゴボウトレンチャーや耕作に伴う土層捻転)が著しい。このため、1 層は後世の埋土攪拌の影響を受けている可能性がある。

重複関係:SI-48 を切る。

出土遺物:実測土器 11 点(第 83 図)、鉄製品 [25](第 180・181 図)が床面付近から出土した。また、銅造鍍金阿弥陀如来坐像(第 182・183 図)やロクロ土師器 [2・4] などが覆土 1・2 層境から出土した(「IV

Ⅲ. 調査成果

-4. 銅造鍍金阿弥陀如来坐像の位置付け」併照)。 時期：6 期 (9c4/4 ～ 10c 代) として捉えた。

SI-2 (竪穴建物跡)(第 12・13 図)

位置：西区 .L4・N4 グリッド 規模・形状：竪穴建物跡の北側が確認された (大半は調査区外南側に展開)。

長方形状を呈する。現状で南北 1.9 m 以上、東西幅 9.3 m、壁高 0.9 m。

周溝：現状で東・北・西の三辺で周溝が確認された。最大幅 0.49 m。床面からの深さは 0.20 m。

床面 Pit・土坑：5 基検出した。

P- 1 は竪穴北西部分の柱穴である。東西幅 0.74 m、南北幅 0.35 m 以上。床面からの深さは 1.06 m。

P- 2 は長軸 0.40 m、短軸 0.36 m。床面からの深さは 0.35 m。

P- 3 は長軸 0.28 m、短軸 0.19 m。床面からの深さは 0.23 m。

P- 4 は長軸・短軸とも 0.20 m ほど。床面からの深さは 0.29 m。

貯蔵穴は長軸 0.88 m、短軸 0.82 m。床面からの深さは 0.46 m。なお、覆土中から土師器 8・11・13・27・28 が出土した。

〔補記〕

竪穴北東部分、P- 3 東側でも柱穴痕跡らしいプランが確認された。しかし、ほとんどが調査区外に展開しているため pit 掘り下げ調査は出来なかった。

なお、貼り床面を除去後、貯蔵穴南側と、竪穴の北東隅で掘り方土坑を確認した。

カマド：竪穴の北壁中央部分を深く掘り込んでカマド本体と煙道を作る。カマド袖 (壁体) の下部がかろうじて遺存する。なおカマド袖 (壁体) は白色粘土主体土によって構築される。

覆土：21 層に分層した (貯蔵穴と P-2・3 を除く)。ゴボウトレンチャーを始めとする後世の攪乱が著しい。1・2 層は後世の手による攪拌土として認識した (土色・土のしまり・混入物をもとに)。20・21 層は貼り床であり、20 層上面が生活面と推定される。14 層は周溝の覆土である。 重複関係：なし。

出土遺物：土器出土量は極めて多い。実測個体は 60 点 (第 80 ～ 82 図)、破片資料 (非実測個体) は中テン箱 6 箱分に及ぶ。 時期：2 期 (7c 中～後葉) として捉えた。

SI-3 (竪穴建物跡)(第 14 図)

位置：西区 .L3・4,M3・M4 グリッド 規模・形状：南北 4.02 m、東西 3.47 m、壁高 0.41 m。長方形状を呈する。 周溝：竪穴内の四辺を全周する。最大幅 0.40 m。床面からの深さは 0.08 m。

床面 Pit・土坑：3 基検出した。

P- 1 は竪穴中央～北部に所在し楕円形を呈する。東西幅 0.86 m、南北幅 0.81 m。床面からの深さは 0.5 m。

P- 2 は竪穴中央部分に所在し楕円形を呈する。長軸 0.33 m、短軸 0.28 m。床面からの深さは 0.16 m。

P- 3 は竪穴中央部、P- 2 の西側に所在し長楕円形を呈する。長軸 0.72 m、短軸 0.61 m。床面からの深さは 0.18 m。

なお、貼り床面を除去した結果、本竪穴には掘り方土坑がないことが明らかになった。

火処：炉跡・カマド痕跡とも確認されなかった。

覆土：7 層に分層した (P-1 ～ 3 を含む)。ゴボウトレンチャーを始めとする後世の攪乱が著しい。5 層は周溝の覆土である。 重複関係：SI-4 を切る。

出土遺物：実測個体は 6 点 (第 83 図)。非実測資料としては須恵器小片 30 点余、土師器小片数十点がある。

時期：5b 期 (9c3/4) として捉えた。

SI-4 (竪穴建物跡)(第 15 図)

位置: 西区・L3・4,M3・4 グリッド **規模・形状:** 規模・形状: 東西 4.60 m、南北 4.27 m、壁高 0.14 m。長方形状を呈する。なお、竪穴西壁で検出されたローム混じり褐色土ブロックや、竪穴中央床面で検出した硬化面は出入口施設(高橋・多ヶ谷 1998 文献)の可能性を考慮する必要がある。 **周溝:** 確認できなかった。

床面 Pit・土坑: 2 基検出した。

P- 1 は長軸 0.33 m、短軸 0.31 m。床面からの深さは 0.28 m。

P- 2 は長軸 0.40 m、短軸 0.48 m。床面からの深さは 0.27 m。

なお、床面除去作業を行った結果、本竪穴には掘り方土坑が存在しないことが分かった。

火処: 炉跡・カマド痕跡とも確認されなかった。

覆土: 4 層に分層した(Pit・土坑覆土を除く)。ゴボウトレンチャーを始めとする後世の攪乱が著しい。遺構確認面から掘り方面までの深さは 0.06 m と浅い。それゆえ、1 層は竪穴床面として認識した(本層上面で複数箇所の硬化面が確認されたことも含め)。**重複関係:** SI-3 によって切られる。

出土遺物: 実測個体は 9 点(第 83 図)。非実測資料としては須恵器小片 30 点余、土師器小片数十点がある。

時期: 5b 期(9c3/4)として捉えた。

SI-7 (竪穴建物跡)(第 16 図)

位置: 西区・J4・K4 グリッド **規模・形状:** 東西 5.02 m、南北 4.48 m、壁高 0.42 m。長方形状を呈する。 **周溝:** 竪穴を全周する。最大幅 0.37 m。床面からの深さは 0.13 m。

床面 Pit・土坑: 9 基検出した。

P- 1 は長軸 0.46 m、短軸 0.44 m。床面からの深さは 0.79 m。柱穴である。

P- 2 は長軸 0.48 m、短軸 0.38 m。床面からの深さは 0.40 m。

P- 3 は長軸 0.57 m、短軸 0.50 m。床面からの深さは 0.49 m。柱穴および柱抜き取り痕(北西側平坦面)。

P- 4 は長軸・短軸とも 0.24 m。床面からの深さは 0.08 m。

P- 5 は長軸・短軸とも 0.28 m。床面からの深さは 0.42 m。

P- 6 は長軸 0.31 m、短軸 0.27 m。床面からの深さは 0.28 m。出入口施設か。

P- 7 は長軸 0.33 m、短軸 0.29 m。床面からの深さは 0.26 m。出入口施設と思われる。

P- 8 は長軸 0.34 m、短軸 0.30 m。床面からの深さは 0.28 m。柱穴か。

P- 9 は長軸 0.31 m、短軸 0.28 m。床面からの深さは 0.42 m。柱穴か。

カマド: 竪穴の北壁中央部で確認した。煙道側は SI-20 によって切られ損壊している(カマド覆土 1・2 層は、その状況を端的に示している)。ただし、下面のカマド袖(壁体)～掘り方面は遺存しており、カマドのおおよその大きさは把握できる(長軸 0.31 m、短軸 0.27 m。床面からの深さは 0.16 m)。

竪穴覆土: 7 層に分層した。遺構重複が多い。そのうえ、ゴボウトレンチャーを始めとする後世の攪乱が著しい。このため、1 層は後世の手による攪拌土として認識した。5 層は周溝覆土、6 層は掘り方土坑覆土である。その上層に堆積した 2～5 層は、竪穴廃絶後の堆積土として捉えた。

重複関係: SK-5,SD-6A・6B,SI-20 によって切られる。

出土遺物: 実測土器 11 点(第 83・84 図)、鉄製品 [22](第 180・181 図)が出土。また、非実測資料としては須恵器小片 140 点余や、土師器片多数(SI-7・8 の 2 遺構で中テン箱 1 箱分の未実測土器片)がある。

時期: 5a 期(9c1/4～2/4)として捉えた。

Ⅲ. 調査成果

SI-8 (竪穴建物跡)(第 17 図)

位置：西区 .K4.L4 グリッド **規模・形状：**長軸 5.80 m、短軸 4.92 m、壁高 0.17 m。長方形状を呈する。

周溝、床面 Pit：確認出来なかった。ただし、竪穴中央～やや西側の床面(1 層上面)で複数箇所の硬化面が確認された。

カマド：北壁中央東寄りと、東壁中央南寄りの 2 箇所で確認された。北壁のカマドはカマド袖(壁体)が現存せず掘り方のみである。それゆえ旧カマドと考えた。東壁のカマドは壁体の構築材(粘土壁体、袖石)や、カマド使用に伴う硬化赤変面がほぼ原位置で検出されていることから、作り替えた新カマドと捉えた。

覆土：竪穴覆土は 2 層に分層した(耕作土含む)。ゴボウトレンチャーを始めとする後世の攪乱が著しい。遺構確認面から掘り方面までの深さは 0.10 m と浅い。それゆえ、1 層は竪穴床面として認識した(硬化面が確認されたことも含む)。なお、北カマド(旧)の覆土は 3 層、東カマド(新)の覆土は 5 層に分層した。

重複関係：SI-24,25,28 を切る。

出土遺物：実測個体 18 点(第 84 図)。非実測資料としては須恵器小片 90 点余、土師器片多数(SI-7・8 の 2 遺構で中テン箱 1 箱分の未実測土器片)がある。

時期：5b 期(9c3/4)として捉えた。

SI-10 (竪穴建物跡)(第 18 図)

位置：西区 .C1 グリッド **規模・形状：**現状で南北 1.9 m 以上、東西幅 9.3 m、壁高 0.9 m の長方形状を呈する。ゴボウトレンチャー攪乱と現代水路の掘削により遺存状況は良くない。現存長軸は 3.53 m、短軸 3.43 m、深さ 0.29 m。 **周溝：**確認出来なかった。

床面土坑：掘り方土坑 2 基を検出した。

竪穴南側の掘り方土坑は長軸 1.56 m、短軸 1.52 m、床面からの深さは 0.32 m。

竪穴北側の掘り方土坑は長軸 0.94 m、短軸 0.82 m、床面からの深さは 0.22 m。

カマド：竪穴南東壁が外側に突出するものの、カマド袖(壁体)が現存しないこと、周囲に焼土ブロックや、粘土ブロックの分布が見られることから、SI-10 のカマド痕跡(竪穴建物機能停止に伴うカマド廃絶行為の結果)と判断した。

覆土：5 層に分層した。ゴボウトレンチャーを始めとする後世の攪乱が著しい。この為、1 層は後世の埋土攪拌の影響を受けている可能性がある。 **重複関係：**なし。

出土遺物：実測土器 5 点(第 85 図)と、破片資料(非実測個体)は十数点のみ。

時期：6 期(9c4/4～10c 代)として捉えた。

SI-11 (竪穴建物跡)(第 20 図)

位置：西区 .B1・B2 グリッド **規模・形状：**長軸 4.22 m、短軸 3.91 m、壁高 0.71 m。方形状を呈する。

周溝：東・北・西の三辺で周溝が確認された。最大幅 0.33 m。床面からの深さは 0.06 m。

床面 Pit・土坑：2 基検出した。

P- 1 は長軸 0.28 m、短軸 0.25 m。床面からの深さは 0.16 m。

P- 2 は長軸 0.37 m、短軸 0.30 m。床面からの深さは 0.06 m。

なお、床面精査時には明瞭なプランが検出できなかったものの、掘り方面調査で P- 3(長軸 0.28 m、短軸 0.25 m)を発見した。カマドとの位置関係から見て旧カマドに伴う貯蔵穴の可能性を想定したい。さらに、本竪穴

の中央部・北西隅・南西隅にも掘り方土坑が確認出来た。

カマド：北壁中央東寄りと、東壁中央南寄りの2箇所を確認された。北壁のカマドは掘り方のみである点、カマド破碎痕跡(竪穴覆土4a～d層)が認められる点から、旧カマドと考えた。東壁カマドはカマド壁構築材(粘土壁体)がほぼ原位置で検出されていることから、作り替えた新カマドと捉えた。

覆土：竪穴覆土は11層に分層した(旧カマド覆土を含む)。なお、東カマド(新)の覆土は7層に分層した。

重複関係：なし。

出土遺物：実測土器14点(第85図)。常総系土師器甕の底部破片[14]は東カマドの覆土から出土した。なお非実測土器小片十数点がある。 **時期**：5a期(9c1/4～2/4)として捉えた。

SI-12(竪穴建物跡)(第19図)

位置：西区.C1グリッド **規模・形状**：竪穴建物跡の北東側の一部が確認された(大半は調査区外に展開)。形状は長方形か。南北4.2m以上、東西幅0.6m、壁高0.15m。

周溝・床面Pit・土坑：確認出来なかった。なお、東壁床面で粘土ブロックが検出された。本遺構北東隅壁の掘り込みも含め、この箇所にカマドを作り掛け、途中で作業を中止したのであろうか(ゆえ、本遺構を竪穴建物跡として認識した)。

重複関係：なし。

出土遺物：実測土器なし、破片資料(非実測個体)8点のみ。 **時期**：不明。

SI-16(竪穴建物跡)(第21図)

位置：西区.F3グリッド **規模・形状**：ゴボウトレンチャーを始めとする後世の攪乱が著しい。このため土層断面により竪穴プランを復元した。結果、東西4.2mほど、南北3.55m、壁高0.49mの長方形を呈することが分かった。 **周溝**：確認できなかった。

床面Pit・土坑：2基検出した。

P-1は長軸0.68m、短軸0.59m。床面からの深さは0.10m。

P-2は長軸・短軸とも0.41mほど。床面からの深さは0.12m。

なお、本竪穴では掘り方土坑は確認されなかった。

カマド：竪穴の北壁中央部分を浅く掘り込んでカマド本体と煙道を作る。カマド袖(壁体)の下部がかろうじて遺存する。なおカマド袖(壁体)は白色粘土主体土によって構築される。

覆土：9層に分層した(耕作土・カマド含む)。ゴボウトレンチャーを始めとする後世の攪乱が著しい。2・3層は竪穴が機能停止した直後の堆積土と思われる。同様にカマド構築土(天井部・壁体)に起因する1・4・5層も竪穴が機能停止した直後の堆積土である。つまるところ、本竪穴建物は、廃絶後、直ちに埋め戻されている可能性が高い。**重複関係**：なし。 **出土遺物**：僅少。実測個体7点(第85図)が出土したのみである。 **時期**：4期(8c3/4～4/4)として捉えた。

SI-17(竪穴建物跡)(第22図)

位置：西区.I3グリッド **規模・形状**：竪穴建物跡の南側半分強が確認された(残りは調査区外北側に展開)。長方形を呈する。南北3.32m、東西幅2.76m、壁高0.71mの長方形を呈する。

周溝・床面Pit・土坑：確認されなかった。なお、貼り床面を除去した結果、竪穴の北西。南西、中央～南東

Ⅲ. 調査成果

隅で掘り方土坑が確認できた。

カマド：現状では確認できなかった。

覆土：6層に分層した(耕作土含む)。ゴボウトレンチャーを始めとする後世の攪乱が著しく、1層は上層であるにも関わらず焼土粒・ローム粒がやや多く混入している。この為、1層は後世の埋土攪拌の影響を受けている可能性を想定している。

重複関係：なし。 **出土遺物**：実測土器は11点(第86図)。非実測資料としては須恵器小片50点余や、土師器片多数がある。竪穴中央部から北側にかけての範囲に出土する傾向がある。

時期：5b期(9c3/4)として捉えた。

SI-20(竪穴建物跡)(第23図)

位置：西区 J4・K4 グリッド **規模・形状**：遺構重複が多いうえ、ゴボウトレンチャーを始めとする後世の攪乱が著しい。このため土層断面により竪穴プランを復元した。結果、南北5.6mほど、東西幅4.8mほど、壁高0.18mの長方形状を呈することが分かった。

周溝・床面 Pit・土坑：確認されなかった。なお、貼り床面を除去した結果、本竪穴の掘り方 Pit・土坑は無いことが分かった。

カマド：竪穴の北壁中央部分でカマドの煙出し部分痕跡が確認された。カマド袖(壁体)が現存しない。カマド廃棄時に破壊行為が行われた可能性が高い。

覆土：4層に分層した。後世の攪乱が著しく、1層は上層であるにも関わらず焼土粒が混入している。この為、1層は後世の埋土攪拌として認識した。3層は貼り床であり、この上面が生活面と推定される。

重複関係：SI-7・21・22A・22B・24を切る。SK-5,SD-6A6Bによって切られる。

出土遺物：実測土器は10点(第87図)、鉄製品[27](第180・181図)。非実測資料としては土器小片数十点がある。なお、統一新羅系土器[1]は他遺構からの混入品である。 **時期**：5b期(9c3/4)として捉えた。

SI-21(竪穴建物跡)(第24・25図)

位置：西区 I4,J4 グリッド **規模・形状**：長軸8.27m、短軸6.37m、壁高0.71m。南北方向にやや長い長方形状を呈する。

周溝：北・東の二辺で周溝が確認された。最大幅0.31m。床面からの深さは0.16m。

床面 Pit・土坑：10基検出した。竪穴内の位置(間尺)、pitの深さ、土層観察からみてP-1～4は竪穴建物跡の柱穴で間違いなからう。

P-1は長軸1.03m、短軸0.78m、床面からの深さは0.58m。柱穴である。

P-2は長軸0.77m、短軸0.65m、床面からの深さは0.69m。柱穴である。

P-3は長軸0.56m、短軸0.29m以上。床面からの深さは0.49m。柱穴である。

P-4は長軸0.73m、短軸0.36m以上。床面からの深さは0.42m。柱穴である。

P-5は長軸0.72m、短軸0.57m、床面からの深さは0.26m。

P-6は長軸0.69m、短軸0.59m、床面からの深さは0.15m。

P-7は長軸0.66m、短軸0.43m、床面からの深さは0.27m。

P-8は長軸0.30m、短軸0.27m。床面からの深さは0.20m。

P-9は長軸0.46m、短軸0.40m。床面からの深さは0.50m。

P-10 は長軸 0.42 m、短軸 0.37 m、床面からの深さは 0.24 m。

なお、本竪穴の北西側、北東側、南東側の 3 箇所掘り方土坑が確認された。

カマド：竪穴の北壁中央部分で確認されたが、煙出し部分などが後世の遺構 (SD-36) によって攪拌されている。

覆土：18 層に分層した。他遺構との重複が著多いうえ覆土攪拌が著しい。とりわけ 1a～1e 層は上層であるにも関わらず焼土粒が多く混入している。このため後世の手による攪拌土としてとして認識した。一方、8 層は貼り床と考えた。また、その上位にある 3a～3f 層は生活面ないし、竪穴の機能停止前後頃の堆積土として捉えた。なお、竪穴東側 3 層中に 2 ヶ所の焼土ブロック分布が確認されたが、その意図や機能は不明である。

重複関係：他遺構との重複が多い。SI-22A・SI-34,SD-36 によって切られる。

出土遺物：土器出土量は多量。実測個体は 49 点 (第 87～89 図)、非実測資料としては須恵器小片 40 点余や、土師器片数百点がある。 **時期**：2 期 (7c 中～後葉) として捉えた。

SI-22A (竪穴建物跡) (第 27 図)

位置：西区 J4 グリッド **規模・形状**：長軸 5.53 m、短軸 5.30 m、壁高 0.33 m。南北方向にやや長い長方形形状を呈する。

周溝：東壁から南東壁で確認された。最大幅 0.20 m。床面からの深さは 0.05 m。

床面 Pit・土坑：7 基検出した。竪穴内の位置 (間尺)、pit の深さ、土層観察からみて P-1～4 は SI-22A の柱穴として捉えた。また P-5 も SI-22A の貯蔵穴の可能性を考えた。

P-1 は長軸 0.52 m、短軸 0.48 m、床面からの深さは 0.66 m。

P-2 は長軸 0.93 m、短軸 0.81 m、床面からの深さは 0.58 m。

P-3 は長軸 0.98 m、短軸 0.92 m、床面からの深さは 0.61 m。

P-4 は長軸 1.09 m、短軸 0.95 m、床面からの深さは 0.51 m。

P-5 は長軸 0.96 m、短軸 0.85 m。床面からの深さは 0.62 m。

P-6 は長軸 0.40 m、短軸 0.36 m、床面からの深さは 0.15 m。

P-7 は長軸 0.38 m、短軸 0.30 m。床面からの深さは 0.08 m。

なお、床面精査の結果、本竪穴には掘り方土坑は無いことが明らかとなった。

22A 覆土：3 層に分層した。

火処：カマドの明瞭な平面プランは確認出来なかった。しかし竪穴の北壁中央部分で焼土ブロックとカマド掘り方痕跡を確認した (SI-22A の機能停止時、カマドの破碎が行われた結果と推定している)。

重複関係：多遺構との重複が多い。SI-21・22B を切る。SI-20,SK-5 によって切られる。

出土遺物：本竪穴遺物として実測した個体は 20 点 (第 89・90 図)。このほか非実測資料として中テン箱 4 箱 (22A・22B の総計) 分の土器破片がある。

時期：5b 期 (9c3/4) として捉えた。

Ⅲ. 調査成果

SI-22B (竪穴建物跡)(第 26・27 図)

位置：西区 J3・4 グリッド **規模・形状：**竪穴建物跡の北側が確認された(大半は後世の SI-22A の手によって消失)。確認出来た東西軸は 4.97 m、南北軸は 1.27 m 以上、壁高 0.43 m。東西方向にやや長い。

周溝・床面 Pit・土坑：確認できなかった。なお、床面精査の結果、本竪穴には掘り方土坑は無いことが明らかとなった。

カマド：竪穴の北東壁部分をやや深く掘り込んでカマド本体と煙道を作るが、煙出し部先端が後世の遺構(SI-23)によって攪拌されている。

22B 覆土：3 層に分層した。6 層は貼り床(掘り方覆土)であり、上面が生活面と推定される。その上層に堆積した 4・5 層は竪穴廃絶直後頃の堆積土である。

重複関係：他遺構との重複が多い。SI-20・22A・23 によって切られる。

出土遺物：実測個体は 12 点(第 90 図)。このほか非実測資料として中テン箱 4 箱(22A・22B の総計)分の土器破片がある。

時期：2 期(7c 中～後葉)として捉えた。

SI-23 (竪穴建物跡)(第 28 図)

位置：西区 J3・4、K3・4 グリッド **規模・形状：**東西 5.13 m、南北 4.51 m 以上、壁高 0.44 m。長方形状を呈する。 **周溝：**四辺を全周する。最大幅 0.40 m、深さ 0.10 m。

床面 Pit・土坑：7 基検出した。竪穴内の位置関係から P-1～P-4 は本竪穴の上屋を支える支柱穴、P-6 はカマド掘り方、P-7 は出入口施設と考えた。

P-1 は長軸・短軸とも 0.40、床面からの深さは 0.36 m。

P-2 は長軸・短軸 0.36 m、床面からの深さは 0.45 m。

P-3 は長軸 0.36 m、短軸 0.32 m、床面からの深さは 0.47 m。

P-4 は長軸 0.35 m、短軸 0.31 m、床面からの深さは 0.39 m。

P-5 は長軸 0.40 m、短軸 0.26 m、床面からの深さは 0.29 m。

P-6 は長軸 0.35 m、短軸 0.31 m、床面からの深さは 0.19 m。

P-7 は長軸 0.31 m、短軸 0.27 m。床面からの深さは 0.27 m。

なお、床面精査後、カマド手前と、竪穴の四隅で掘り方土坑を確認した。

カマド：竪穴の北壁中央を深く掘り込んでカマド本体と煙道を作る。カマド袖(壁体)の下部がかろうじて遺存する。なおカマド袖(壁体)は白色粘土主体土によって構築されていたが、カマド廃棄時に破壊されている。

覆土：8 層に分層した(カマド含む)。3 層は周溝覆土。6・7 層はカマド掘り方であり、竪穴廃絶直後頃の堆積土と判断した。また、これらの上層に堆積した 1・2 層は、竪穴廃絶直後頃の埋戻し土として捉えた。

重複関係：遺構重複が目立つ。SI-22A・24・29 を切る。SD-6A・6B によって切られる。

出土遺物：実測土器は 20 点(第 91 図)。非実測個体としては須恵器小片 120 点余、土師器破片多数がある(中テン箱 1 箱分ほど)。

時期：3 期(8c1/4～2/4)として捉えた。

SI-24 (竪穴建物跡)(第 29 図)

位置：西区 .K4 グリッド **規模・形状：**東西 5.19 m、南北 4.19 m、壁高 0.33 m。長方形状を呈する。

周溝・床面 Pit・土坑：確認されなかった。なお、床面精査の結果、本竪穴には掘り方土坑は無いことが明らかとなった。

覆土：5 層に分層した(耕作土含む)。後世の攪乱(ゴボウトレンチャー)が著しい。そのうえ、竪穴の南～東側は遺構重複が目立つ。なお、4 層は周溝覆土である。その上層に堆積した 1～3 層は、竪穴廃絶直後頃の埋戻し土として捉えた。 **重複関係：**SI-73・74・84 を切る。

出土遺物：実測土器は 15 点(第 92 図)。非実測資料としては須恵器小片 30 点、土師器破片数十点がある。

時期：5a 期(9c1/4～2/4)として捉えた。

SI-25 (竪穴建物跡)(第 30 図)

位置：西区 .K4.L4 グリッド **規模・形状：**南北 4.81 m、東西 4.56 m、壁高 0.59 m。長方形状を呈する。

周溝：四辺をほぼ全周する。最大幅 0.25 m、深さ 0.09 m。

床面 Pit・土坑：1 基検出した。竪穴内の位置関係から P-1(長軸 0.58 m、短軸 0.49 m。床面からの深さは 0.16 m)は貯蔵穴と考えた。なお、床面精査の結果、本竪穴には掘り方土坑は無いことが明らかとなった。

カマド：竪穴の北壁中央をやや深く掘り込んでカマド本体と煙道を作る。カマド袖(壁体)の下半が遺存する。なおカマド袖(壁体)は白色粘土主体土によって構築される。

覆土：遺構重複が目立つ。そのうえ、後世の攪乱(ゴボウ・トレンチャー)も著しい。6 層に分層した(耕作土含む .P-1 覆土除く)。6 層は周溝覆土である。その上層に堆積した 2～5 層(ローム粒・焼土ブロック目立つ)は、竪穴廃絶後の人為堆積土として捉えた。なお、1 層はゴボウトレンチャー以前の手による覆土攪拌として捉えた。 **重複関係：**SI-8・24・28・44 を切る。

出土遺物：実測土器は 10 点(第 92 図)。非実測資料としては須恵器小片 30 点弱、土師器破片数十点がある。

時期：5b 期(9c3/4)として捉えた。

SI-26 (竪穴建物跡)(第 31 図)

位置：西区 .L3・4 グリッド **規模・形状：**南北幅 4.88 m、東西幅 3.73 m、壁高 0.74 m。長方形状を呈する。

周溝：西・南・東の三辺で周溝が確認された。最大幅 0.22 m。深さ 0.06 m。

床面 Pit・土坑：確認されなかった。なお、床面精査の結果、本竪穴には掘り方土坑は無いことが明らかとなった。

炉跡：竪穴中央～南南東寄りに確認された。長軸 0.45 m、短軸 0.40 m。床面からの深さは 0.06 m。

覆土：5 層に分層した(耕作土含む)。後世の攪乱(ゴボウトレンチャー)が著しい。そのうえ、竪穴の南～東側は遺構重複が目立つ。なお、4 層は周溝覆土である。その上層に堆積した 2・3 層は、竪穴廃絶直後頃の堆積土である。なお、1 層はゴボウトレンチャー以前の手による覆土攪拌として捉えた。 **重複関係：**SI-27・28 を切る。

出土遺物：実測土器は 8 点(第 93 図)。非実測資料としては土器破片数十点がある。

時期：6 期(9c4/4～10c 代)として捉えた。

Ⅲ. 調査成果

SI-27 (竪穴建物跡)(第 32 図)

位置：西区 .L3 グリッド **規模・形状：**竪穴建物跡の南側が確認された (大半は調査区外北側に展開)。現状で東西 4.61 m、南北 2.82 m 以上、壁高 0.59 m。長方形状を呈する。

周溝：西・南・東の三辺で周溝が確認された。最大幅 0.27 m。深さ 0.07 m。なお、竪穴の南西隅は周溝が途切れている。この部分が出入口施設であったと思われる。

床面 Pit・土坑：確認されなかった。なお、床面精査の結果、竪穴中央部で掘り方土坑 1 基が確認された。

火処：調査範囲内では確認されなかった。

覆土：9 層に分層した (耕作土含む)。後世の攪乱 (ゴボウトレンチャー) が著しい。そのうえ、竪穴の南側は遺構重複が目立つ。7 層は周溝覆土、8 層は掘り方土坑の覆土である。なお、1 層はゴボウトレンチャー以前の手による覆土攪拌として捉えた。

重複関係：SI-28 を切る。SI-26 によって切られる。

出土遺物：実測土器は 15 点 (第 93 図)、非実測資料としては須恵器小片 40 点余、土師器破片数十点がある。

時期：4 期 (8c3/4 ~ 4/4) として捉えた。

SI-28 (竪穴建物跡)(第 33 図)

位置：西区 .L3・4 グリッド **規模・形状：**南北 4.61 m、東西 2.82 m、壁高 0.59 m。長方形状を呈する。

周溝：確認されなかった。

床面 Pit・土坑：2 基検出した。P-1 は長軸 0.78 m、短軸 0.64 m、床面からの深さは 0.16 m。P-2 は長軸 0.56 m、短軸 0.46 m、床面からの深さは 0.13 m。なお、床面精査の結果、本竪穴には掘り方土坑は無いことが明らかとなった。

カマド：竪穴の東側でカマド痕跡を確認した。カマド袖 (壁体) が現存しない。カマド破壊行為が行われた可能性が高い。

覆土：6 層に分層した (耕作土、カマド痕跡・Pit 覆土含む)。後世の攪乱 (ゴボウトレンチャー) が著しい。そのうえ、竪穴の東側は遺構重複が目立つ。4 層は掘り方土坑覆土である。その上に堆積した 2・3 層は竪穴廃絶後の自然堆積土と判断した。なお、1 層はゴボウトレンチャー以前の手による覆土攪拌として捉えた。

重複関係：SI-26・27 によって切られる。

出土遺物：実測土器は 8 点 (第 94 図)、非実測資料としては須恵器小片 40 点余、土師器破片数十点がある。

時期：5b 期 (9c3/4) として捉えた。

SI-29 (竪穴建物跡)(第 34 図)

位置：西区 .J3,K3 グリッド **規模・形状：**竪穴建物跡の南側が確認された (大半は調査区外北側に展開)。現状で東西 7.21 m、南北 5.4 m 以上、壁高 0.44 m。長方形状を呈する。

周溝：西・南・東の三辺で周溝が確認された。最大幅 0.32 m。深さ 0.18 m。

床面 Pit・土坑：4 基検出した。

P-1 は長軸 0.44 m、短軸 0.22 m 以上、床面からの深さは 0.62 m。

P-2 は長軸 0.71 m、短軸 0.37 m 以上、床面からの深さは 0.54 m。

P-3 は長軸 0.58 m、短軸 0.50 m、床面からの深さは 0.46 m

P-4 は長軸 0.55 m、短軸 0.49 m、床面からの深さは 0.50 m

なお、床面精査の結果、本竪穴には掘り方土坑は無いことが明らかとなった。

火処：調査範囲内では確認されなかった。

覆土：9層に分層した(耕作土含む)。遺構重複が多いうえ、後世の攪乱(ゴボウトレンチャー)が著しい。5層は周溝覆土、6層は柱穴覆土である。なお、1a～2層はゴボウトレンチャー以前の手による覆土攪拌として捉えた。 重複関係：SI-28を切る。SI-26によって切られる。

出土遺物：実測土器は9点(第94図)、非実測資料としては須恵器小片50点余、土師器破片数十点がある。

時期：1期(5c代)として捉えた。

SI-31(竪穴建物跡)(第35図)

位置：西区.G4グリッド 規模・形状：ゴボウトレンチャーを始めとする後世の攪乱が著しい。このため土層断面により竪穴プランを復元した。結果、東西4.2mほど、南北3.55m、壁高0.49mの長方形状を呈することが分かった。

周溝：東・北の二辺で周溝が確認された。最大幅0.30m。深さ0.03m。

床面 Pit・土坑：1基検出した。P-1は長軸0.40m、短軸0.35m。壁高0.23m。カマドの西脇にあることから貯蔵穴の可能性が高い。なお、本竪穴では掘り方土坑は確認されなかった。

カマド：竪穴の北壁中央部分を浅く掘り込んでカマド本体と煙道を作る。カマド袖(壁体)の下部が遺存する。カマド袖(壁体)は白色粘土主体土によって構築される。なお、カマド焚き口部付近で赤色硬化面(焼土ブロック)が確認できた。

覆土：5層に分層した(耕作土含む)。後世の攪乱が著しい。このため南北軸の土層断面図を作成するのに苦慮した(カマド東袖を掛ける形でSP-E-Eラインで作図することとなった。なお覆土4層はカマド覆土4層でもある)。

重複関係：SI-52と近接。

出土遺物：実測土器は7点(第94図)、非実測資料としては土器小片数点がある。なお、須恵器坏[1～3]は覆土1層からの出土である(出土平面位置はP-1と被るが、土層堆積状況からみてP-1に伴うものではない)。

時期：3～4期(8c代)として捉えた。

SI-33(竪穴建物跡)(第36図)

位置：西区.H-4,I-4グリッド 規模・形状：南北軸3.14m、東西軸2.90m、壁高0.37m。方形状を呈する。

周溝：西壁で周溝が確認された。最大幅0.32m。床面からの深さは0.04m。

床面 Pit・土坑：竪穴の北西隅でpit 1基(長軸0.31m、短軸0.27m。床面からの深さは1.00m)を検出したのみである。なお、本竪穴では掘り方土坑は確認されなかった。

カマド：竪穴の北壁で2基(作り替え)確認した。

新カマドは北壁中央部分を浅く掘り込んでカマド本体と煙道を作る。カマド袖(壁体)の下部が遺存する。なおカマド袖(壁体)は白色粘土主体土によって構築される(カマド覆土6層以外で構成)

旧カマドの痕跡は竪穴の北西壁で確認できた(カマド覆土の6層最下面が旧カマドの掘り方痕跡。ちなみにカマド覆土6層はSI-33覆土2b層または3層に相当しよう)。

覆土：5層に分層した。5層はローム壁崩落に伴う堆積土と考えられる。一方、2a～4層は土質が近似しており人為的堆積土(埋め戻し)の可能性もある。 重複関係：SI-35を切る。

出土遺物：実測土器は7点(第95図)、非実測資料としては須恵器小片・土師器小片20点余がある。

時期：2期(7c中～後葉)として捉えた。

Ⅲ. 調査成果

SI-34 (竪穴建物跡) (第 37 図)

位置: 西区 I-4, J-4 グリッド **規模・形状:** 竪穴建物跡の北側が確認された (大半は調査区外南側に展開)。復元東西幅 5.49 m、南北 1.6 m 以上、壁高 0.71 m の長方形状を呈する。

周溝: 東・北の二辺で周溝が確認された。最大幅 0.22 m。床面からの深さは 0.06 m。

床面 Pit・土坑: 4 基検出した。

P- 1 は長軸・短軸 0.22 m。床面からの深さは 0.10 m。

P- 2 は長軸 0.36 m、短軸 0.32 m。床面からの深さは 0.27 m。

P- 3 は長軸 0.32 m、短軸 0.27 m。床面からの深さは 0.36 m。

P- 4 は長軸 0.42 m、短軸 0.37 m。床面からの深さは 0.38 m。

なお、貼り床面を除去した結果、カマド手前と、竪穴北西隅で掘り方土坑が確認された。

カマド: 竪穴の北壁中央部分を浅く掘り込んでカマド本体と煙道を作る。カマド袖 (壁体) の下部が遺存する。

なおカマド袖 (壁体) は白色粘土主体土によって構築される。

覆土: 4 層に分層した (カマド除く)。4 層は貼り床であり、この上面が生活面と推定される。3 層は周溝覆土。

1・2 層は竪穴機能停止直後頃の堆積土と考えた。 **重複関係:** SI-21・SI-35 を切る。

出土遺物: 実測土器は 6 点 (第 95 図)、非実測個体の須恵器小片 3 点と土師器小片 30 点余がある。なお、常総系土師器小型甕 [4] はカマド中心部から出土。竪穴およびカマドの機能時、支脚として使用していたのであろう。 **時期:** 5a 期 (9c1/4 ~ 2/4) として捉えた。

SI-35 (竪穴建物跡) (第 38 図)

位置: 西区 I-4J-4 グリッド **規模・形状:** 竪穴建物跡の北半分以上が確認された (残りは調査区外南側に展開)。現状で南北 4.7 m 以上、東西 6.28 m、壁高 0.53 m。長方形状を呈する。

周溝: 東・北の二辺で周溝が確認された。最大幅 0.30 m。床面からの深さは 0.06 m。

床面 Pit・土坑: 7 基検出した。

P- 2 は長軸 0.62 m、短軸 0.55 m、床面からの深さは 0.58 m。柱穴と思われる。

P- 3 は長軸 0.60 m、短軸 0.47 m、床面からの深さは 0.50 m。柱穴である。

P- 4 は長軸 0.82 m、短軸 0.53 m、床面からの深さは 0.40 m。

P- 5 は長軸 0.60 m、短軸 0.46 m、床面からの深さは 0.68 m。柱穴である。

P- 6 は長軸 0.53 m、短軸 0.50 m 以上、床面からの深さは 0.19 m。

P- 7 は長軸 0.77 m、短軸 0.75 m、床面からの深さは 0.53 m。柱穴である。

なお、P- 1 (長軸 0.18 m、短軸 0.15 m。床面からの深さは 0.35 m) は貼り床面除去作業時に検出された。また、竪穴の北西隅に掘り方土坑があることが分かった。

カマド: 竪穴の北壁中央部分を深く掘り込んでカマド本体と煙道を作る。カマド袖 (壁体) の下半部が遺存する。なおカマド袖 (壁体) は白色粘土主体土によって構築される。

覆土: 9 層に分層した (カマド除く)。遺構重複が多い。このため 1a ~ 2b 層は上層であるにも関わらず焼土粒・ローム粒が混入しており、埋め戻し土、または攪拌土として認識した。7 層は貼り床であり、この上面が生活面と推定される。 **重複関係:** SI-33・34・40 によって切られる。

出土遺物: 実測土器は 8 点 (第 95・96 図)。非実測資料としては須恵器小片 3 点と土師器小片 30 点余がある。土師器甕 [8] がカマド西袖の芯材となっていた。また土師器甕 [7] も出土状況からみてカマド焼き口部分の横架材となっていた可能性が高い。 **時期:** 2 期 (7c 中 ~ 後葉) として捉えた。

SI-37 (竪穴建物跡)(第 39 図)

位置：西区 H-3・4 グリッド **規模・形状**：東西 3.71 m、南北 2.88 m、壁高 0.57 m。長方形状を呈する。

周溝・床面 Pit・土坑：確認できなかった。

なお、貼り床面を除去した結果、本竪穴の床下全面は掘り方土坑であることが分かった。

カマド：竪穴の北壁中央部分を浅く掘り込んでカマド本体と煙道を作る。カマド袖(壁体)の下部が遺存する。

なおカマド袖(壁体)は白色粘土主体土によって構築される。

覆土：8層に分層した(カマド除く)。遺構重複部が多い。7・8層は貼り床であり、この上面が生活面と推定される。2・4層は竪穴機能停止直後頃の堆積土と考えた。**重複関係**：本竪穴は SD-30・36 によって十字状に切られる。

出土遺物：実測土器は 12 点(第 97 図)、非実測個体としては須恵器小片 6 点、土師器小片数十点がある。なお、常総系土師器甕 [8・9] はカマド覆土から出土した。**時期**：4 期(8c3/4～4/4)として捉えた。

SI-38 (竪穴建物跡)(第 40 図)

位置：西区 I-3・4、J-3・4 グリッド **規模・形状**：長軸 4.06 m、短軸 3.46 m、壁高 0.51 m。長方形状を呈する。

周溝：ほぼ全周する。最大幅 0.44 m。床面からの深さは 0.07 m。

床面 Pit・土坑：2 基検出した。

P-1 は長軸 0.34 m、短軸 0.31 m。床面からの深さは 0.35 m。

P-2 は長軸 0.34 m、南北幅 0.31 m。床面からの深さは 0.32 m。竪穴内の位置からみて梯子穴などの出入口施設の可能性がある。なお、貼り床除去をした結果、竪穴の四隅で掘り方土坑が確認された。

カマド：竪穴の北壁中央部分を浅く掘り込んでカマド本体と煙道を作る。カマド袖(壁体)の下部がかろうじて遺存する。なおカマド袖(壁体)は白色粘土主体土によって構築される。

覆土：7層に分層した(カマド除く)。1層は上層であるにも関わらず焼土粒・炭化物粒が混入している。本遺構の近辺は他遺構との重複が著しいこともあり、本層は後世の埋土攪拌を受けているのかもしれない。

重複関係：SD-36 によって切られる。

出土遺物：実測土器は 18 点(第 97・98 図)。非実測資料としては須恵器 60 片弱と土師器小片百点余がある。**時期**：5a 期(9c1/4～2/4)として捉えた。

SI-39 (竪穴建物跡)(第 41 図)

位置：西区 I-4 グリッド **規模・形状**：南北 4.24 m、東西 1.08 m、壁高 0.41 m。方形状を呈する。

周溝：ほぼ全周(最大幅 0.24 m。床面からの深さは 0.08 m)するが、竪穴南壁中央部分のみ周溝がない。竪穴の出入口施設があった可能性を指摘しておきたい。

床面 Pit・土坑：3 基検出した(炉跡 P-1 を除く)。

P-2 は長軸・短軸とも 0.45 m ほど。床面からの深さは 0.18 m。

P-3 は長軸 0.41 m、短軸 0.39 m。床面からの深さは 0.29 m。

P-4 は長軸 0.36 m、短軸 0.32 m。床面からの深さは 0.14 m。

なお、貼り床を除去した結果、南西側、南東側で掘り方土坑が確認された。

炉跡(P-1)：竪穴の北壁中央部分で確認された。長軸 1.15 m、短軸 0.49 m。床面からの深さは 0.09 m。なお、炉跡床面に硬化赤変した部分を検出。

覆土：5層に分層した(P-1 覆土を除く)。5層は貼り床であり、この上面が生活面と推定される。4層は周溝覆土。2・3層は本竪穴機能停止直後頃の堆積土と考えた。

Ⅲ. 調査成果

重複関係：本竪穴は SI-38,SD-36 によって切られる。

出土遺物：実測個体は 4 点 (第 98 図)、非実測個体の須恵器小片十点余と土師器小片数十点余がある (大半が他遺構からの混入品である)。**時期：**1 期 (5c 代) として捉えた。

SI-40 (竪穴建物跡) (第 42 図)

位置：西区 .I-4 グリッド **規模・形状：**南北 3.40 m、東西 3.29 m、壁高 0.61 m。方形状を呈する。

周溝・床面 Pit・土坑：確認出来なかった。なお、床面下部は、ほぼ全面が掘り方土坑である。

カマド：竪穴の東側でカマド痕跡を確認した。カマド袖 (壁体) が現存しない。カマド廃棄時に破壊行為が行われた可能性が高い。

覆土：5 層に分層した。1～5 層は、いずれも焼土粒・炭化物粒が混入している人為的堆積土 (埋戻し土) と思われる。**重複関係：**本竪穴は SI-34・35 を切る。

出土遺物：実測土器は 17 点 (第 99 図)。非実測個体の須恵器小片 40 点余と土師器小片数十点がある。また、土製紡錘車 [1] (第 174・175 図)、鉄製品 [36] (第 180・181 図)、鉄滓 [6] (第 179 図) が出土している。

時期：5a 期 (9c1/4～2/4) として捉えた。

SI-41 (竪穴建物跡) (第 43 図)

位置：西区 .H4 グリッド **規模・形状：**南北 3.57 m、東西 3.40 m、壁高 0.38 m。方形状を呈する。

周溝：東・北・西の三辺で周溝が確認された。最大幅 0.20 m。床面からの深さは 0.22 m。

床面 Pit・土坑：確認されなかった。なお、竪穴の北西隅と南東隅で掘り方土坑が確認された。

カマド：竪穴の北壁中央部分を深く掘り込んでカマド本体と煙道を作る。カマド袖 (壁体) の下半部が遺存する。なおカマド袖 (壁体) は白色粘土主体土によって構築される。

覆土：6 層に分層した (カマド除く)。6 層は貼り床であり、この上面が生活面と推定される。4 層は周溝覆土である。**重複関係：**後世の SK-18・32,SD-30 によって切られる。

出土遺物：実測土器 13 点 (第 99・100 図)。常総系小型甕 [11] はカマド袖部から出土しており、カマド袖の芯材として使用されていた可能性が高い。また、鉄滓 [9] (第 179 図) が出土している。非実測資料としては須恵器小片 9 点、土師器小片数十点がある。**時期：**5a 期 (9c1/4～2/4) として捉えた

SI-42 (竪穴建物跡) (第 44 図)

位置：西区 .H4 グリッド **規模・形状：**竪穴建物跡の北～西半分が確認された (残り半分は調査区外東～南側に展開)。現状で南北 4.7 m 以上東西幅 5.0 m 以上、南北 3.7 m 以上、壁高 0.46 m の長方形状を呈する。

周溝：東・北の二辺で周溝が確認された。最大幅 0.40 m。床面からの深さは 0.05 m。

床面 Pit・土坑：確認されなかった。なお、掘り方土坑も確認されなかった。

火処：現状では、炉跡・カマドとも確認されなかった。

覆土：9 層に分層した (耕作土含む)。後世の攪乱 (ゴボウトレンチャーや耕作に伴う土層捻転) が著しい。このため 1 層は、後世の手による埋め戻し土、または攪拌土として認識した。**重複関係：**なし。

出土遺物：実測土器 13 点 (第 100 図)。非実測資料として須恵器小片 10 点余、土師器小片数十点がある

時期：6 期 (9c4/4～10c 代) として捉えた。

SI-43 (竪穴建物跡)(第 45 図)

位置：西区 .H3・4,M3・4 グリッド **規模・形状：**現状で東西 2.6 m ほど、東西 2.4 m ほど、壁高 0.31 m の長方形状を呈する。**周溝・床面 Pit・土坑：**確認されなかった。なお、掘り方土坑も確認されなかった。

火処：現状では、炉跡・カマドとも確認されなかった。

覆土：4 層に分層した。竪穴の大半を後世の遺構 (SD-36) によって切られている。それゆえ、本竪穴の遺存状況は良くない。 **重複関係：**後世の遺構 (SD-36) によって切られる。

出土遺物：実測土器は 7 点 (第 101 図)。非実測資料としては須恵器小片 20 点弱、土師器小片数十点がある

時期：5a 期 (9c1/4～2/4) として捉えた。

SI-44 (竪穴建物跡)(第 46 図)

位置：西区 .K3 グリッド **規模・形状：**竪穴建物跡の南半分が確認された (残り半分は調査区外北側に展開)。復元東西幅は 5.30 m ほど、復元南北幅は 3.45 m 以上、壁高 0.46 m。

周溝：確認できなかった。

床面 Pit・土坑：床面では検出できなかった。なお、貼り床面除去した結果、本竪穴の東側で掘り方土坑や pit が確認された。 **火処：**現状では、炉跡・カマドとも確認されなかった。

覆土：10 層に分層した (耕作土含む)。0～2 層は後世の攪乱 (ゴボウトレンチャーや耕作に伴う土層攪拌) と考えた。3～5 層は竪穴廃絶後の堆積土。7 層は貼り床であり、この上面が生活面と推定される。6 層は周溝覆土である。

重複関係：本遺構近辺は重複が著しい。なお、本竪穴は SI-23・29 を切る。さらに本竪穴は SI-25 によって切られる。

出土遺物：出土土器は 12 点 (第 101 図)。碁石 [1～24] (第 174・175 図) が SI-29 とのプラン境で出土している。なお、灰釉陶器壺瓶類底部片 [1]、益子窯産須恵器坏 [3]、常陸産中型甕 [6] は 5 層中からの出土である。

時期：5a 期 (9c1/4～2/4) として捉えた。

SI-45 (竪穴建物跡)(第 47 図)

位置：西区 .N3 グリッド **規模・形状：**竪穴建物跡の南端が確認された (大半は調査区外北側に展開) 現状で東西 4.4 m 以上、南北 1.1 m 以上、壁高 0.39 m の長方形状を呈する。**周溝・床面 Pit・土坑：**確認されなかった。なお、掘り方土坑も確認されなかった。 **火処：**現状では、炉跡・カマドとも確認されなかった。

覆土：5 層に分層した。遺構重複が多いうえ、後世の攪乱 (ゴボウトレンチャー) が著しい。このため 1 層は、後世の手による埋め戻し土、または攪拌土として認識した。4・5 層は貼り床であり、この上面が生活面と推定される。 **重複関係：**SI-48 を切る。SI-46・47 によって切られる。

出土遺物：実測個体は 7 点 (第 101 図)。堀ノ内窯産須恵器坏 [1] は 3・4 層境のレベルから出土した。なお、非実測個体としては須恵器小片 20 点余、土師器小片数十点がある。

時期：5a 期 (9c1/4～2/4) として捉えた。

Ⅲ. 調査成果

SI-46 (竪穴建物跡)(第 47 図)

位置：西区 .N3 グリッド **規模・形状：**竪穴建物跡の南端が確認された(大半は調査区外北側に展開)。現状で東西 3.39 m、南北 0.69 m 以上、壁高 0.42 m の長方形を呈する。 **周溝・床面 Pit・土坑：**確認されなかった。なお、掘り方土坑も確認されなかった。

カマド：竪穴の東側でカマド痕跡を確認した。カマド袖(壁体)が現存しない。近辺に白色粘土・焼土粒子が多量に混入した堆積層(11～16 層)があり、カマド廃棄時に破壊行為が行われた可能性が高い。

覆土：16 層に分層した(カマド痕跡含む)。遺構重複が多いうえ、後世の攪乱(ゴボウトレンチャー)が著しい。このため 1 層は、後世の手による埋め戻し土、または攪拌土として認識した。なお、2～5 層も粘性弱く、土のしまりも無い。1 層よりも古い時期の人為的堆積土の可能性もある。 **重複関係：**SI-45・47 を切る。

出土遺物：実測土器は 2 点(第 102 図)。非実測資料としても土師器小片数点が出土している程度である。なお、常陸系土師器甕破片[1・2]は 3～4 層のレベルから出土した。

時期：5b 期(9c3/4)として捉えた。

SI-47 (竪穴建物跡)(第 48 図)

位置：西区 .N3 グリッド **規模・形状：**竪穴建物跡の南半分が確認された(残り半分は調査区外北側に展開)東西幅は 4.26 m、南北幅は 3.10 m 以上、壁高 0.39 m。

周溝：西・南・東の三辺で周溝が確認された。最大幅 0.34 m。床面からの深さは 0.04 m。竪穴南壁中央部分のみ周溝がない。この部分が竪穴の出入口施設であった可能性を指摘しておきたい。

床面 Pit・土坑：2 基検出した。

P- 1 は長軸 0.41 m、短軸 0.38 m。床面からの深さは 0.31 m。

P- 2 は長軸 0.34 m、短軸 0.25 m。床面からの深さは 0.19 m。

なお、本竪穴では掘り方土坑は確認されなかった。

火処：現状では、炉跡・カマドとも確認されなかった。

覆土：4 層に分層した。遺構重複が多いうえ、後世の耕作土攪乱(ゴボウトレンチャー含む)が著しい。3 層は貼り床であり、この上面が生活面と推定される。4 層は周溝覆土である。 **重複関係：**SI-45 を切る。SI-46 によって切られる。

出土遺物：実測土器は 3 点(第 102 図)。非実測資料としても須恵器・土師器の小片が数点出土している程度である。 **時期：**5a 期(9c1/4～2/4)として捉えた。

SI-48 (竪穴建物跡)(第 49 図)

位置：西区 .M3,N3 グリッド **規模・形状：**竪穴建物跡の南半分が確認された(残り半分は調査区外北側に展開)。東西幅 3.89 m、南北幅 2.7 m 以上、壁高 0.45 m。

周溝：西・南・東の三辺で周溝が確認された。最大幅 0.23 m。床面からの深さは 0.06 m。

床面 Pit・土坑：2 基検出した。

P- 1 は長軸 0.34 m、短軸 0.29 m。床面からの深さは 0.33 m。

P- 2 は長軸 0.29 m、短軸 0.27 m。床面からの深さは 0.20 m。

なお、貼り床面を除去した結果、床下は、ほぼ全面に渡って掘り方土坑が掘削されていることが分かった。

火処：現状では、炉跡・カマドとも確認されなかった。

覆土：8 層に分層した。遺構重複が多いうえ、後世の攪乱(ゴボウトレンチャー)が著しい。1 層は上層であるにも関わらず焼土粒・ローム粒が混入している。1 層は、後世の手による攪拌の影響を受けている可能性

が考えられる。 **重複関係**：SI-45 を切る。SI-1 によって切られる。

出土遺物：実測土器は7点(第102図)。土錘[9](第174・175図)が出土している。なお、非実測資料としては須恵器・土師器の小片が数点出土している程度である。 **時期**：5a期(9c1/4～2/4)として捉えた。

SI-49 (竪穴建物跡)(第50図)

位置：西区 J3 グリッド **規模・形状**：竪穴建物跡の南端が確認された(残り半分以上は調査区外北側に展開)。東西幅 3.01 m、南北幅 0.4 m以上、壁高 0.25 m。

周溝・床面 Pit・土坑：確認できなかった。なお、掘り方土坑も確認できなかった。

火処：現状では、炉跡・カマドとも確認されなかった。

覆土：2層に分層した(耕作土含む)。遺構確認面から掘り方面までの深さは 0.20 m前後と浅い。それゆえ、1層は竪穴床面として認識した(ローム粒・焼土が一定量確認されたことも含め)。

重複関係：SB-51 によって切られる。

出土遺物：実測個体・破片資料とも無し。 **時期**：5期～6期として捉えた。

SI-50 (竪穴建物跡)(第51図)

位置：西区 J3 グリッド **規模・形状**：竪穴建物跡の南端が確認された(残り半分以上は調査区外北側に展開)。東西幅 3.33 m、南北幅 0.4 m以上、壁高 0.32 m。

周溝・床面 Pit・土坑：確認できなかった。なお、掘り方土坑も確認できなかった。

火処：現状では、炉跡・カマドとも確認されなかった。

覆土：3層に分層した(耕作土含む)。後世の攪乱(耕作土含む)が著しい。なお、2層は貼り床であり、この上面が生活面と推定される。 **重複関係**：なし。

出土遺物：僅少。実測土器2点(第102図)と、未実測土器小片数点がある程度。

時期：5a期(9c1/4～2/4)として捉えた。

SI-52 (竪穴建物跡)(第52図)

位置：西区 G4,H4 グリッド **規模・形状**：竪穴建物跡の北半分が確認された(残り半分は調査区外南側に展開)。南北 5.3 m以上、東西復元幅 2.3 mほど、壁高 0.42 m。方形状を呈する。

周溝・床面 Pit・土坑：確認されなかった。なお、掘り方土坑も確認されなかった。

カマド：竪穴の北壁中央部分でカマド痕跡を確認した。カマド袖(壁体)が現存しない。カマド廃棄時に破壊された可能性が高い。

覆土：後世の攪乱(ゴボウトレンチャーや耕作に伴う土層捻転)が著しい。4層に分層した(カマド含む)。2～4層は竪穴廃棄並び片付け直後の埋め土と捉えた。 **重複関係**：SI-31 と近接。

出土遺物：実測土器5点(第103図)と、未実測土器小片数点がある程度。

時期：5a期(9c1/4～2/4)として捉えた。

SI-54 (竪穴建物跡)(第 53 図)

位置：東区 .U1 グリッド **規模・形状：**東西 3.64 m、南北復元幅 2.9 m ほど、壁高 0.29 m。長方形状。

周溝・床面 Pit・土坑：確認されなかった。なお、掘り方土坑も確認されなかった。

カマド：竪穴の東壁中央部分でカマド痕跡を確認した。カマド袖(壁体)が現存しない。カマド廃棄時に破壊された可能性が高い。

覆土：後世の攪乱(ゴボウトレンチャーや耕作に伴う土層捻転)が著しい。4 層に分層した(カマド含む)。2・3 層は貼り床であり、この上面が生活面と推定される。 **重複関係：**重複なし。

出土遺物：実測土器 7 点(第 103 図)。なお、SI-54・57・58 の 3 遺構で中テン箱 1 箱分(合計)の未実測土器片が出土している。

時期：5a 期(9c1/4～2/4)として捉えた。

SI-57 (竪穴建物跡)(第 54 図)

位置：東区 .T2 グリッド **規模・形状：**南北 4.00 m、東西 3.63 m、壁高 0.57 m。方形状を呈する。

周溝・床面 Pit・土坑：確認されなかった。なお、掘り方土坑も確認されなかった。

カマド：竪穴の北壁中央部分でカマド痕跡を確認した。カマド袖(壁体)が現存しない。カマド廃棄時に破壊された可能性が高い。

覆土：遺構重複や、後世の攪乱(ゴボウトレンチャーや耕作に伴う土層捻転)が著しい。このため 1 層は、後世の手による埋め戻し土、または攪拌土として認識した。5 層は床下土坑の覆土である。2～4 層は竪穴が機能停止した後の堆積土として捉えた。 **重複関係：**SD-69ab によって切られる。

出土遺物：実測土器 9 点(第 103・104 図)。土師器環[5]はカマド覆土中、それ以外の土器は 2～4 層中から出土した。また、鉄製品[4](第 180・181 図)が出土した。なお、SI-54・57・58 の 3 遺構で中テン箱 1 箱分(合計)の未実測土器片が出土している。

時期：2 期(7c 中～後葉)として捉えた。

SI-58 (竪穴建物跡)(第 55 図)

位置：東区 .S2・3 グリッド **規模・形状：**南北 4.00 m、東西 3.63 m、壁高 0.57 m。方形状を呈する。竪穴北東隅の平坦面は棚状施設(桐生 2005 文献)として捉えた。 **周溝：**なし。

床面 Pit・土坑：カマド東側で P-1(長軸 0.41 m、短軸 0.29 m、壁高 0.57 m)、P-2(長軸 0.32 m、短軸 0.31 m、壁高 0.57 m)が確認された。なお、貼り床面を除去した結果、竪穴の四隅で掘り方土坑が確認された。

カマド：竪穴の北壁中央を深く掘り込んでカマド本体と煙道を作る。カマド壁体が赤色硬化するほど使い込まれている。カマド袖(壁体)は西側がかろうじて遺存する。一方、東側カマド袖(壁体)はカマド廃棄時に破壊されたらしく、袖芯材に用いられた石材が近辺に散在する。

覆土：6 層に分層した(カマド除く)。0 層は後世の攪乱(ゴボウトレンチャーや耕作に伴う土層攪拌)と捉えた。1・2 層は竪穴廃絶後の堆積土。3・5・6 層は貼り床であり、この上面が生活面と推定される。

重複関係：SI-61 南東端を僅かに切る。

出土遺物：実測土器 20 点(第 104 図)。カマド焚き口手前で土師器[11,12,17]が出土した。また、P-1 覆土から灰釉陶器破片[2]が出土している。また、土製紡錘車[2](第 174・175 図)、鉄製品[24](第 180・181 図)、鉄滓[11](第 179 図)が出土。なお、SI-54・57・58 の 3 遺構で中テン箱 1 箱分(合計)の未実測土器片が出土している。

時期：5a 期(9c1/4～2/4)として捉えた。

SI-59A (竪穴建物跡)(第 56 図)

位置：東区.T2・3 グリッド **規模・形状：**東西推定幅 5.3 m、南北復元幅 4.7 m ほど、壁高 0.35 m。長方形を呈する。

周溝・床面 Pit・土坑：確認されなかった。なお、覆土 2 層除去後、竪穴中央部と西側で掘り方土坑を確認した。

カマド：竪穴の東壁中央部分を浅く掘り込んでカマド本体と煙道を作る。カマド袖(壁体)の下部がかろうじて遺存する。なおカマド袖(壁体)は白色粘土主体土によって構築される。

覆土：9 層に分層した(SI-59A・B を併せて)。遺構重複が多いうえ、後世の攪乱(ゴボウトレンチャー)が著しい。4～7 層が SI-59A カマドの覆土、8・9 層が SI-59A 床下土坑の覆土である。なお 3 層は SI-59A と SI-59B で確認された。

重複関係：SI-59B・SI-59C・SK-76 を切る。SD-69 によって切られる。

出土遺物：実測個体は 9 点(第 105 図)。5 層中から灰陶陶器壺瓶類底部片 [1]、益子窯産須恵器坏 [3]、常陸産中型甕 [6] が出土した。また、竪穴中心部の 1 層中から紡錘車出土した。なお、SI-59A・59B・59C の 3 遺構で中テン箱 1 箱分(合計)の未実測土器片が出土している。

時期：5a 期(9c1/4～2/4)として捉えた。

SI-59B (竪穴建物跡)(第 56 図)

位置：東区.T2・3 グリッド **規模・形状：**竪穴建物跡の北～西部分が確認された(残り半分以上は調査区外に展開)。長軸 3.5 m 以上、短軸 2.6 m 以上、壁高 0.32 m。

周溝・床面 Pit・土坑：確認されなかった。なお、掘り方土坑も確認されなかった。

カマド：竪穴の中央部分でカマド痕跡を確認した(焼土・粘土ブロックが付近に散在)。なお、現状では、カマド袖(壁体)が現存しない。カマド廃棄時に破壊された可能性が高い。

重複関係：SI-59C を切る。SI-59A・SD-69 によって切られる。

出土遺物：実測個体は 8 点(第 105 図)。非実測資料としては中テン箱 1 箱分(59A・59B・59C を合わせた総数)がある。なお、ロクロ土師器坏 13・17 は SI-59B に帰属するものが SI-59A 覆土中へ混入したものと考えている。

時期：5a 期(9c1/4～2/4)として捉えた。

SI-59C (竪穴建物跡)(第 57・58 図)

位置：東区.T3,U3 グリッド **規模・形状：**南北 7.47 m、東西復元幅 5.3 m ほど、壁高 0.61 m。長方形。

周溝：確認されなかった。 **床面 Pit・土坑：**8 基検出した。

P- 1 は長軸 0.34 m、短軸 0.29 m。床面からの深さは 0.87 m。

P- 2 は長軸 0.29 m、短軸 0.27 m。床面からの深さは 0.26 m。

P- 3 は長軸 0.34 m、短軸 0.29 m。床面からの深さは 0.23 m。

P- 4 は長軸 0.34 m、短軸 0.29 m。床面からの深さは 0.13 m。

P- 5 は長軸 0.34 m、短軸 0.29 m。床面からの深さは 0.07 m。

P- 6 は長軸 0.34 m、短軸 0.29 m。床面からの深さは 0.19 m。

P- 7 は長軸 0.34 m、短軸 0.29 m。床面からの深さは 0.29 m。

P- 8 は長軸 0.34 m、短軸 0.29 m。床面からの深さは 0.10 m。

なお、貼り床面を除去後、カマド手前と、竪穴西側で掘り方土坑を確認した。

カマド：竪穴の北壁中央を深く掘り込んでカマド本体と煙道を作る。カマド袖(壁体)の下部がかろうじて遺存する。なおカマド袖(壁体)は白色粘土主体土によって構築される。

Ⅲ. 調査成果

覆土：8層に分層した。遺構重複が多いうえ、後世の攪乱(ゴボウトレンチャー)が著しい。7層は貼り床であり、この上面が生活面と推定される。2～5層は縦穴廃絶後の堆積土である。

重複関係：SI-59A・SI-59B・SD-69によって切られる。

出土遺物：実測個体は10点(第106図)。非実測資料としては中テン箱1箱分(59A・59B・59Cを合わせた総数)がある。平面的にはSI-59Aとの重複箇所の下面、土層断面的には覆土2層中からの出土が目立つ。

時期：4期(8c3/4～4/4頃)として捉えた。

SI-60(縦穴建物跡)(第59図)

位置：東区.T1・2グリッド **規模・形状：**東西4.65m、南北3.48mほど、壁高0.29m。方形状を呈する(残り半分は調査区外北側に展開)。

周溝・床面Pit・土坑：確認されなかった。なお、掘り方土坑も確認されなかった。

カマド：縦穴の北壁中央部分でカマド痕跡を確認した(焼土・粘土ブロックが付近に散在)。カマド袖(壁体)が現存しない。カマド廃棄時に破壊された可能性が高い。

覆土：4層に分層した。遺構重複が多いうえ、後世の攪乱(ゴボウトレンチャー)が著しい。2～4層は貼り床であり、この上面が生活面と推定される。

重複関係：SD-69a・bによって切られる。

出土遺物：実測土器は6点(第106図)、HEIKOポリ袋(No.615)1袋分の未実測土器片が出土している。

時期：5b期(9c3/4)として捉えた。

SI-61(縦穴建物跡)(第60図)

位置：東区.S2グリッド **規模・形状：**長軸4.56m、短軸4.47m、壁高0.57m。方形状を呈する。

周溝：四辺を全周する。最大幅30m、深さ0.18m。

床面Pit・土坑：6基検出した。縦穴内の位置関係からP-1～P-5は本縦穴の上屋を支える支柱穴、P-6は出入口施設と考えた。

P-1は長軸・短軸とも0.21m。床面からの深さは0.34m。

P-2は長軸0.26m、短軸0.23mほど、床面からの深さは0.39m。

P-3は長軸0.33m、短軸0.28m、床面からの深さは0.66m。

P-4は長軸0.67m、短軸0.50m、床面からの深さは0.85m。

P-5は長軸0.58m、短軸0.54m、床面からの深さは0.59m。

P-6は長軸0.34m、短軸0.29m、床面からの深さは0.04m。

なお、床面精査後、カマド手前と、縦穴の四隅で掘り方土坑を確認した。

カマド：縦穴の北壁中央を深く掘り込んでカマド本体と煙道を作る。カマド袖(壁体)の下部がかろうじて遺存する。なおカマド袖(壁体)は白色粘土主体土によって構築される。一方、縦穴東壁中央部床面でも焼土ブロックと袖石痕跡が検出された。作り替えにより壊された旧カマドの痕跡と捉えた。

覆土：遺構重複が目立つ。そのうえ、後世の攪乱(ゴボウ・トレンチャー)も著しい。9層に分層した(耕作土含む。カマド除く)。6層は周溝覆土である。その上層に堆積した1～5層は、縦穴廃絶後の自然堆積土として捉えた。

重複関係：SI-62・77を切る。SI-68によって切られる。

出土遺物：実測個体は32点(第107図)、HEIKOポリ袋(No.615)4袋分の未実測土器片が出土している。

時期：(3)～4期(8c3/4～4/4)として捉えた。

SI-62 (竪穴建物跡)(第 61 図)

位置：東区 .S2 グリッド **規模・形状：**東西 4.88 m、南北 3.68 m 以上、壁高 0.44 m。方形状を呈する。

周溝：四辺を全周するようである。最大幅 0.32 m、深さ 0.03 m。

床面 Pit・土坑：4 基検出した。いずれも本竪穴の上屋を支える主柱穴と考えられる。

P- 1 は長軸 0.31 m、短軸 0.28 m、床面からの深さは 0.38 m。

P- 2 は長軸 0.36 m、短軸 0.34 m、床面からの深さは 0.44 m。

P- 3 は長軸 0.34 m、短軸 0.32 m、床面からの深さは 0.43 m。

P- 4 は長軸・短軸とも 0.34 m、床面からの深さは 0.53 m。

なお、貼り床面を除去後、カマド手前と、竪穴の北東隅・北西隅・南西隅で掘り方土坑を確認した。

カマド：竪穴の北壁中央をやや深く掘り込んでカマド本体と煙道を作る。カマド袖 (壁体) の下半が遺存する。

なおカマド袖 (壁体) は白色粘土主体土によって構築される。

覆土：4 層に分層した (カマド除く)。ゴボウトレンチャー以前の手による覆土攪拌のため、1 層は上層であるにも関わらずローム粒や炭化物が混入している。4 層は貼り床 (掘り方覆土) であり、上面が生活面と推定される。その上層に堆積した 2・3 層は竪穴廃絶直後頃の埋め戻し土の可能性がある。

重複関係：SI-77 を切る。SI-61 によって切られる。

出土遺物：実測土器は 5 点 (第 107 図)、HEIKO ポリ袋 (No.615)1 袋分の非実測土器片が出土している。

時期：3 期 (8c1/4 ～ 2/4) として捉えた。

SI-63 (竪穴建物跡)(第 62 図)

位置：東区 .O4・P4 グリッド **規模・形状：**竪穴建物跡の東側 1/3 ほどが確認された (大半以上は調査区外側に展開)。確認出来た南北軸は 4.37 m ほど、東西軸は 2.2 m 以上、壁高 0.53 m。 **周溝：**確認されなかった。

床面 Pit・土坑：カマド付近で 2 基検出した。P- 1 は長軸・短軸とも 0.32 m。P- 2 は長軸 0.37 m、短軸 0.29 m。床面からの深さは 0.05 m。なお、床面を精査した結果、調査区きわで、掘り方土坑 1 基を確認した。

カマド：竪穴の南東壁を深く掘り込んでカマド本体と煙道を作る。カマド袖 (壁体) が現存しない。カマド廃棄時に破壊された可能性が高い。なお焚き口部分は赤色硬化する。

覆土：4 層に分層した (耕作土含む)。現耕作土以前の手による覆土攪拌のため、1 層は上層であるにも関わらずローム粒や炭化物が混入している。なお、4 層は貼り床で、上面が生活面と推定される。この上層に堆積した 2・3 層は、竪穴廃絶後の自然堆積土として考えた。 **重複関係：**なし。

出土遺物：実測土器は 5 点 (第 108 図)、なお、SI-63・67・68 の 3 遺構で中テン箱 1 箱分 (合計) の未実測土器片が出土している。

時期：6 期 (9c4/4-10c 頃) として捉えた。

SI-66 (竪穴建物跡)(第 75 図)

位置：東区 .P3 グリッド **規模・形状：**SK-79 の東側で平地式竪穴建物跡の土層断面が確認された。現状で南北幅 1.6 m 以上、東西幅 2 m 以上、壁高 0.24 m。なお、床面 Pit・土坑・火処は確認されなかった。

覆土：基本土層Ⅱ層から掘り込まれている。なお、覆土 2 層は焼土粒を少量含んでおり、生活面、または遺構廃絶直後に近い時期の堆積土と推定している。 **重複関係：**なし。 **出土遺物：**土器小片数点のみ。

時期：6 期以降か。

Ⅲ. 調査成果

SI-64 (竪穴建物跡)(第 63 図)

位置:東区 .P3・Q3 グリッド **規模・形状:**竪穴建物跡の 3/4 以上が確認された(北西端は調査区外側に展開)。
長軸 5.43 m、短軸 5.17 m、壁高 0.56 m。方形状を呈する。

周溝:四辺を全周する。最大幅 0.44 m、深さ 0.16 m。

床面 Pit・土坑:10 基検出した。竪穴内の位置関係から P- 1 ～ P-4 は本竪穴の上屋を支える支柱穴と考えた。

P- 1 は長軸 0.52 m、短軸 0.49 m。床面からの深さは 0.53 m。

P- 2 は長軸 0.50 m、短軸 0.33 m。床面からの深さは 0.58 m。

P- 3 は長軸 0.55 m、短軸 0.34 m。床面からの深さは 0.72 m。

P- 4 は長軸 0.52 m、短軸 0.35 m。床面からの深さは 0.48 m。

P- 5 は長軸 0.30 m、短軸 0.24 m。床面からの深さは 0.08 m。

P- 6 は長軸 0.53 m、短軸 0.50 m。床面からの深さは 0.54 m。

P- 7 は長軸 0.73 m、短軸 0.63 m。床面からの深さは 0.39 m。

P- 8 は長軸 0.89 m、短軸 0.60 m以上。床面からの深さは 0.06 m。

P- 9 は長軸・短軸とも 0.24 m。床面からの深さは 0.08 m。

P-10 は長軸・短軸とも 0.40 m。床面からの深さは 0.19 m。

なお、貼り床面を除去後、竪穴中央部以外の全面で掘り方土坑を確認した。

炉跡:竪穴の東壁中央部分で確認された長軸 1.17 m、短軸 0.53 m、床面からの深さ 0.08cm。

覆土:6 層に分層した(耕作土・炉跡覆土含む)。後世の攪乱(ゴボウトレンチャー)が著しい。4 層は貼り床であり、5 層が炉跡の覆土である。これらから、4 層上面が生活面と推定される。3 層は周溝覆土である。この上層に堆積した 1・2 層は、竪穴廃絶後の自然堆積土として考えた。 **重複関係:**なし。

出土遺物:実測土器は 10 点(第 108 図)。非実測資料としては須恵器小片 40 点余、土師器破片数十点がある。

時期:1 期(5c)として捉えた。

SI-65 (竪穴建物跡)(第 64 図)

位置:東区 .Q3・4 グリッド **規模・形状:**竪穴建物跡の 3/4 が確認された(南端側は調査区外側に展開)。
東西 6.86 m、南北 6.78 m以上、壁高 0.44 m。方形状を呈する。

周溝:四辺を全周するようである。最大幅 0.42 m、深さ 0.20 m。

床面 Pit・土坑:4 基検出した。竪穴内の位置関係から P- 1 ～ P-4 は本竪穴の上屋を支える支柱穴と考えた。

P- 1 は長軸 0.52 m、短軸 0.49 m。床面からの深さは 0.65 m。

P- 2 は長軸 0.80 m、短軸 0.73 m。床面からの深さは 0.48 m。

P- 4 は長軸 0.90 m、短軸 0.61 m。床面からの深さは 0.57 m。

P- 3 は長軸 0.77 m、短軸 0.34 m以上。大半が調査区外に展開しているため底面検出は出来なかった。

なお、貼り床面を除去後、竪穴の四隅と中央部で掘り方土坑を確認した。

火処:竪穴の東壁中央部分を掘り込んでカマド本体と煙道を作る。カマド廃棄時に破壊された可能性が高く、カマド袖(壁体)の下部がかろうじて遺存する。なおカマド袖(壁体)は白色粘土主体土によって構築されるが、カマド廃棄時に破壊のためか、カマド付近に白色粘土ブロックが散在している。なお、竪穴中央部床面でも赤色硬化面が検出された。炉跡を併設していた可能性がある。

覆土:8 層に分層した(カマド除く)。後世の攪乱(ゴボウトレンチャー)が著しい。4～7 層は掘り方土坑の埋土であり、これらの上面が生活面と推定される。3 層は周溝覆土である。その上層に堆積した 1・2 層は、竪穴廃絶後の自然堆積土と考えられる。 **重複関係:**SK-68 を切る。

出土遺物:実測個体は 27 点 (第 108・109 図)、鉄製品 [37] (第 180・181 図) が出土。石製祭祀具 [3] (第 163・164 図) は混入品と考えられる。なお、中テン箱 1 箱分 (合計) の未実測土器片が出土している。

時期: 3 期 (8c1/4 ~ 2/4 頃) として捉えた

SI-67 (竪穴建物跡) (第 65 図)

位置: 東区 .S3 グリッド **規模・形状:** 南北幅 4.12 m、推定東西幅 3.92 m、壁高 0.24 m。方形状を呈する。

周溝: 四辺を全周するようである。最大幅 0.37 m、深さ 0.04 m。

床面 Pit・土坑: 2 基検出した。P- 1 は長軸 0.52 m、短軸 0.49 m。床面からの深さは 0.02 m。P- 2 は長軸・短軸とも 0.20 m。床面からの深さは 0.30 m。なお、床面精査の結果、カマド手前と竪穴北西側で掘り方土坑が確認された。

カマド: 竪穴の中央壁を深く掘り込んでカマド本体と煙道を作る。なおカマド袖 (壁体) は白色粘土主体土によって構築されていたが、カマド廃棄時に破壊されている。カマド掘り方に、かろうじてカマド袖痕跡が残るのみである。

覆土: 5 層に分層した (耕作土含む)。後世の攪乱 (ゴボウトレンチャー) が著しい。そのうえ、竪穴の南～東側は遺構重複が目立つ。なお、4 層は周溝覆土である。その上層に堆積した 1～3 層は、竪穴廃絶直後頃の埋戻し土として捉えた。 **重複関係:** SI-73・74・84 を切る。

出土遺物:実測個体は 16 点 (第 109・110 図)。鉄製品 [12,30,33] (第 180・181 図) が出土している。なお、SI-63・67・68 の 3 遺構で中テン箱 1 箱分 (合計) の未実測土器片が出土している。

時期: 5b 期 (9c3/4) として捉えた。

SI-68 (竪穴建物跡) (第 66 図)

位置: 東区 .R2・3, S2・3 グリッド **規模・形状:** 東西幅 4.85 m、推定南北幅 3.65 m、壁高 0.33 m。長方形形状を呈する。 **周溝:** 確認されなかった。

床面 Pit・土坑: 3 基検出した。

P- 1 は長軸 0.93 m、短軸 0.79 m。床面からの深さは 0.10 m。

P- 2 は長軸 0.58 m、短軸 0.57 m。床面からの深さは 0.27 m。

P- 3 は長軸 0.98 m、短軸 0.63 m。床面からの深さは 0.04 m。

なお、床面精査の結果、カマド手前と竪穴の四隅で掘り方土坑が確認された。

覆土: 6 層に分層した (耕作土含む)。後世の攪乱 (ゴボウトレンチャー) が著しい。そのうえ、竪穴の北東と南東は遺構重複が目立つ。なお、4・5 層は貼り床 (掘り方土坑覆土) であり、上面が生活面と推定される。その上層に堆積した 1～3 層は、竪穴廃絶後の自然堆積土と考えられる。

重複関係: SI-61・77 を切る。SI-67 によって切られる。

出土遺物: 実測個体は 15 点 (第 110・111 図)、なお、SI-63・67・68 の 3 遺構で中テン箱 1 箱分 (合計) の未実測土器片が出土している。

時期: 5a 期 (9c1/4 ~ 2/4 頃) として捉えた。

Ⅲ. 調査成果

SI-70 (竪穴建物跡)(第 67 図)

位置：東区 .R3・4 グリッド **規模・形状：**竪穴建物跡の 3/4 が確認された(南東端は調査区外側に展開)。東西幅 4.69 m、南北幅 4.06 m ほど、壁高 0.48 m。方形状を呈する。 **周溝：**確認されなかった。

床面 Pit・土坑：9 基検出した。竪穴内の位置関係から P-3,5,6,9 は本竪穴の上屋を支える支柱穴と考えられよう。径 0.31 ～ 0.47 m、床面からの深さは 0.53 ～ 0.65 m。P-3,5,6,9 は支え柱穴か。径 0.28 ～ 0.32 m、床面からの深さは 0.10 ～ 0.30 m。なお、床面精査の結果、竪穴の四隅で掘り方土坑が確認された。

覆土：6 層に分層した(耕作土含む)。後世の攪乱(ゴボウトレンチャー)が著しい。なお、4・5 層は貼り床である。その上層に堆積した 1 ～ 3 層は、竪穴廃絶後の自然堆積土と考えられる。

重複関係：なし。

出土遺物：実測個体は 14 点(第 111 図)、土錘 [7] (第 174・175 図)、鉄製品 [1] (第 180・181 図) が出土している。非実測資料としては土師器破片数十点がある。

時期：4 期(8c3/4 ～ 4/4 頃)として捉えた。

SI-72 (竪穴建物跡)(第 68 図)

位置：東区 .Q2 グリッド **規模・形状：**竪穴建物跡の南東側が確認された(3/4 ほどは調査区外北西側に展開)。現状で南北幅 1.6 m 以上、東西幅 1.5 m 以上、壁高 0.53 m。

周溝・床面 Pit・土坑：確認されなかった。なお、床面精査の結果、竪穴中央部に掘り方土坑を検出した。

火処：調査範囲内では確認されなかった。

覆土：4 層に分層した。ゴボウトレンチャーを始めとする後世の攪乱が著しい。なお、3 層は掘り方覆土であり、この上面が生活面と推定される。 **重複関係：**なし。

出土遺物：僅少。実測個体は 2 点(第 112 図)。なお、このほか、未実測土器片十数点がある。

時期：2 期(7c 中～後葉)として捉えた。

SI-73 (竪穴建物跡)(第 69 図)

位置：東区 .S3 グリッド **規模・形状：**竪穴建物跡の北半分が確認された(残りは調査区外南側に展開)。長方形形状を呈する。現状で南北 4.3 m 以上、東西幅 1.8 m、壁高 0.71 m の長方形形状を呈する。

周溝・床面 Pit・土坑：確認されなかった。なお、床面精査の結果、竪穴の北西隅・北東隅に掘り方土坑を検出した。

カマド：竪穴の北壁中央部分をやや浅く掘り込んでカマド本体と煙道を作る。カマド袖(壁体)の下部がかかる遺存する。なおカマド袖(壁体)は白色粘土主体土によって構築される。

覆土：4 層に分層した(トレンチャー含む。カマド除く)。遺構重複が目立つ。そのうえ、後世の攪乱(ゴボウトレンチャー)も著しい。なお、3 層は掘り方土坑覆土であり、この上面が生活面と推定される。

重複関係：SI-74・84 を切る。SI-67 によって切られる。

出土遺物：実測個体は 12 点(第 112 図)。常総系土師器甕 [7・8・10・11] はカマド覆土から出土した。なお、このほか、未実測土器片十数点がある。

時期：5b 期(9c3/4)として捉えた。

SI-74 (竪穴建物跡)(第 70 図)

位置：東区 .Q2・R2 グリッド **規模・形状：**竪穴建物跡の北側が確認された(大半は調査区南側に展開)。現状で南北幅 4.0 m 以上、東西 2.6 m ほど、壁高 0.22 m の長方形形状を呈する。

周溝・床面 Pit・土坑：P-1 は長軸 0.37 m、短軸 0.30 m、床面からの深さは 0.13 m である。なお、床面精

査の結果、竪穴の北東隅で掘り方土坑を検出した。 **カマド**：調査範囲内では確認されなかった。

覆土：2層に分層した(トレンチャー含む。カマド除く)。遺構の重複、および後世の攪乱(ゴボウ・トレンチャー)が著しい。 **重複関係**：SI-84を切る。SI-73によって切られる。

出土遺物：実測個体は6点(第113図)。ロクロ土師器坏[4]はP-1付近の覆土1層中から出土した。なお、このほか、未実測土器片十数点がある。

時期：5b期(9c3/4)として捉えた。

SI-77(竪穴建物跡)(第60図)

位置：東区.R2,S2グリッド **規模・形状**：竪穴建物跡の西側が確認された(大半以上はSI-61・62に切られて消失)。現状で南北幅3.7mほど、東西幅1.7m以上、壁高0.57m。

周溝・床面Pit・土坑：確認されなかった。なお、床面精査の結果、竪穴の南西隅で掘り方土坑を検出した。

火処：調査範囲内では確認されなかった。

覆土：2層に分層した。なお、2層は掘り方土坑覆土であり、この上面が生活面と推定される。灰釉陶器(12)が覆土1層上面から出土しているが、他遺構からの混入品として考えた。 **重複関係**：SI-61・62によって切られる。 **出土遺物**：僅少。実測土器6点(第113図)と、小片(未実測資料については、ほとんどが混入品)数十点がある。

時期：3期(8c1/4～2/4)として捉えた。

SI-82(竪穴建物跡)(第71図)

位置：東区.Q2・R2グリッド **規模・形状**：竪穴建物跡の南端が確認された(大半以上は調査区外北側に展開)。東西復元幅5.0mほど、南北幅2.4m以上、壁高0.40m。

周溝：東・南の二辺で確認された。最大幅30m、深さ0.18m。

床面Pit・土坑：確認されなかった。ただし、貼り床面除去後、ほぼ全面で掘り方土坑が確認された。

カマド：現状では確認されなかった。なお、竪穴中央部の床面(3層上面)で粘土ブロックが検出された。カマド廃棄時の破壊痕跡と思われる。

覆土：後世の攪乱(ゴボウトレンチャー)が著しい。4層に分層した(耕作土含む)。3層は貼り床であり、この上面が生活面と推定される。2層は竪穴廃絶直後頃の堆積土である。 **重複関係**：なし。

出土遺物：実測土器は9点(第113図)、なお、このほか、未実測土器片十数点がある。

時期：2期(7c中～後葉)として捉えた。

SI-84(竪穴建物跡)(第72図)

位置：東区.S3グリッド **規模・形状**：竪穴建物跡の南側が確認された(大半以上は他遺構によって切られる)。東西復元幅4.9mほど、南北幅3.2m以上、壁高0.38m。

周溝：確認されなかった。

床面Pit・土坑：確認されなかった。ただし、貼り床面除去後、竪穴の北西隅と北東隅で掘り方土坑が確認された。

カマド：竪穴の北壁中央を浅く掘り込んでカマド本体と煙道を作る。カマド袖(壁体)の下部がかるうじて遺存する。なおカマド袖(壁体)は白色粘土主体土によって構築される。

覆土：後世の攪乱(ゴボウトレンチャーや耕作に伴う土層捻転)が著しい。4層に分層した(耕作土含む、カマド除く)。5層は掘り方覆土(貼り床)であり、上面が生活面と推定される。その上層に堆積した2～4層は、竪穴廃絶後の自然堆積土として捉えた。なお、1層はゴボウトレンチャー以前の手による覆土攪拌としてと

Ⅲ. 調査成果

して捉えた。

重複関係：SI-67・73・74 によって切られる。

出土遺物：実測土器は 10 点 (第 114 図)。土師器坏 [5]、土師器小型甕 [7] はカマドから出土した。また須恵器フラスコ形瓶 [1] は竪穴東壁床面から出土した。

時期：2 期 (7c 中～後葉) として捉えた。

〔掘立柱建物跡〕

SB-51 (第 73 図)

位置：西区 J3 グリッド **規模・形状：**P-1 から P-6 で構成される側柱掘立柱で、東西 6 m、南北 4.5 m 以上。

重複関係：SI-49 と切り合う。 **出土遺物：**土器小片少量。 **時期：**6 期以降として捉えた (ピット覆土が SD-36 などの覆土に類似している)。なお、付近に点在する P-7 から P-13 の覆土も本遺構覆土に類似している。それゆえ、これらに関わるピット群として捉えておきたい。

〔土坑〕

SK-5 (第 74 図)

位置：西区 J3 グリッド **規模・形状：**長軸 3.52 m、短軸 0.75 m、壁高 0.40 m。長方形を呈する。 **覆土：**1 層に分層した。 **重複関係：**SI-20・22A を切る。 **出土遺物：**多遺構からの混入土器小片少量 (小ビニール袋 1 袋分)。 **時期：**6 期以降として捉えた。

SK-9 (第 74 図)

位置：西区 L4 グリッド **規模・形状：**長軸 0.70 m、短軸 0.65 m、壁高 0.37 m。円形を呈する。 **覆土：**3 層に分層した。 **重複関係：**なし。 **出土遺物：**多遺構からの混入土器小片少量。 **時期：**不明。

SK-18 (第 74 図)

位置：西区 H4 グリッド **規模・形状：**長軸 2.06 m、短軸 0.87 m、壁高 1.03 m。長方形を呈する。 **覆土：**1 層に分層した。 **重複関係：**SI-41 を切る。 **出土遺物：**多遺構からの混入土器小片少量。 **時期：**6 期以降として捉えた。

SK-19 (第 74 図)

位置：西区 I4 グリッド **規模・形状：**長軸 0.75 m、短軸 0.71 m、壁高 0.42 m。楕円形を呈する。 **覆土：**4 層に分層した。 **重複関係：**SI-41 を切る。 **出土遺物：**多遺構からの混入土器小片少量。 **時期：**6 期以降として捉えた。

SK-32 (第 74 図)

位置：西区 H4 グリッド **規模・形状：**長軸 1.55 m、短軸 0.79 m、壁高 0.82 m。長方形を呈する。 **覆土：**1 層に分層した。 **重複関係：**SD-30・SI-41 を切る。 **出土遺物：**多遺構からの混入土器小片少量。 **時期：**6 期以降として捉えた。

SK-55 (第 74 図)

位置：西区 H4,I5 グリッド **規模・形状：**長軸 0.80 m、短軸 0.43 m、壁高 0.36 m。楕円形状を呈する。 **覆土：**

3層に分層した。 重複関係:なし。 出土遺物:上武系土師器甕[1](第103図)。ほか未実測土師器小片数点。
時期:4期(8c3/4～4/4)として捉えた。

SK-71(第74図)

位置:東区.Q3グリッド 規模・形状:長軸2.48m、短軸2.21m、壁高0.34m。長楕円形を呈する。
覆土:6層に分層した。 重複関係:なし。 出土遺物:実測土器は3点(第112図)。HEIKOポリ袋(No.615)1袋分の未実測土器片が出土(ほとんどが混入品)。 時期:不明。

SK-75(第74図)

位置:東区.R2・3グリッド 規模・形状:長軸2.65m、短軸2.41m、壁高1.02m。楕円形を呈する。
覆土:6層に分層した。 重複関係:なし。 出土遺物:須恵器甕体部破片1点、静止糸切り土師器坏底部片、および土師器坏3点(第113図)。そのほか未実測土師器小片数十点。 時期:2期として捉えた。

SK-76(第74図)

位置:東区.T2・3グリッド 規模・形状:長軸1.47m、短軸0.70m、壁高0.30m。長楕円形状を呈する。
覆土:3層に分層した。 重複関係:SI-59Aによって切られる。 出土遺物:土器小片少量。 時期:5a期以前。

SK-79(第75図)

位置:東区.P3グリッド 規模・形状:長軸1.18m、短軸0.47m、壁高0.29m。長楕円形状を呈する。
覆土:1層に分層した。 重複関係:なし。 出土遺物:土器小片少量。 時期:不明。

SK-80(第75図)

位置:東区.P3グリッド 規模・形状:長軸0.56m、短軸0.54m、壁高0.56m。円形を呈する。 覆土:
3層に分層した。 重複関係:なし。 出土遺物:未実測土器小片数十点。 時期:不明。

SK-81(第75図)

位置:東区.Q3グリッド 規模・形状:長軸1.60m、短軸1.15m、壁高0.21m。長楕円形を呈する。
覆土:1層に分層した。 重複関係:なし。 出土遺物:なし。 時期:不明。

SK-83(第75図)

位置:東区.Q3グリッド 規模・形状:長軸1.63m、短軸0.84m、壁高0.39m。楕円形状を呈する。 覆
土:2層に分層した。 重複関係:SI-65によって切られる。 出土遺物:実測土器は2点(第114図)。未
実測土器小片数十点。 時期:3期以前として捉えた。

〔溝跡〕

SD-6A(第76図)

位置:西区.J34,K3グリッド 規模・形状:長軸10.84m以上、幅0.34～0.78m、壁高0.35～0.60m。
断面台形を呈する。 覆土:2層に分層した。 重複関係:SI-7・20・23・29、SD-6Bを切る。 出土遺物:
多遺構からの混入遺物。 時期:6期以降として捉えた。

Ⅲ. 調査成果

SD-6B (第 76 図)

位置：西区 .J34,K3 グリッド 規模・形状：長軸 8.55 m以上、幅 0.26 ～ 0.52 m、壁高 0.29 ～ 0.37 m。断面台形を呈する。 覆土：2 層に分層した。 重複関係：SI-7・20・23・29 を切る。SD-6A によって切られる。

出土遺物：多遺構からの混入遺物。 時期：6 期以降として捉えた。

SD-30 (第 77 図)

位置：西区 .H3・4 グリッド 規模・形状：長軸 12.8 m以上、幅 0.32 ～ 0.60 m、壁高 0.27 ～ 0.45 m。断面台形を呈する。 覆土：2 層に分層した。 重複関係：SI-37・41 を切る。SK-32,SD-36 によって切られる。

出土遺物：多遺構からの混入遺物。 時期：6 期以降として捉えた。

SD-36 (第 78 図)

位置：西区 .G3,H3,I3・4,J3・4 グリッド 規模・形状：長軸約 11.8 m以上、幅 0.45 ～ 0.60 m、壁高 0.22 ～ 0.45 m。

断面台形を呈する。 覆土：4 層に分層した。 重複関係：SI-21・22A・37・38・39・43 を切る。 出土遺物：多遺構からの混入遺物。 時期：6 期以降として捉えた。

SD-69A (第 79 図)

位置：東区 .T1 ～ 3 グリッド 規模・形状：長軸 12.9 m以上、幅 0.25 ～ 0.52 m、壁高 0.17 ～ 0.64 m。断面台形を呈する。 覆土：3 層に分層した。 重複関係：SI-57・59A・59B・59C・60,SD-69B を切る。 出

土遺物：多遺構からの混入遺物。 時期：6 期以降として捉えた。

SD-69B (第 79 図)

位置：東区 .T1 ～ 3 グリッド 規模・形状：長軸 4.9 m以上、短軸 0.18 ～ 0.28 m、壁高 0.27 m。断面台形を呈する。 覆土：3 層に分層した。 重複関係：SI-57・59A・59B・59C・60 を切る。SD-69A によって切られる。 出土遺物：多遺構からの混入遺物。 時期：6 期以降として捉えた。

〔参考文献〕

桐生直彦 1984「カマドを有する住居址を中心とした遺物の出土状態について(素描)」『神奈川考古』第 19 号、神奈川考古同人会

桐生直彦 2005『竈をもつ竪穴建物跡の研究』六一書房

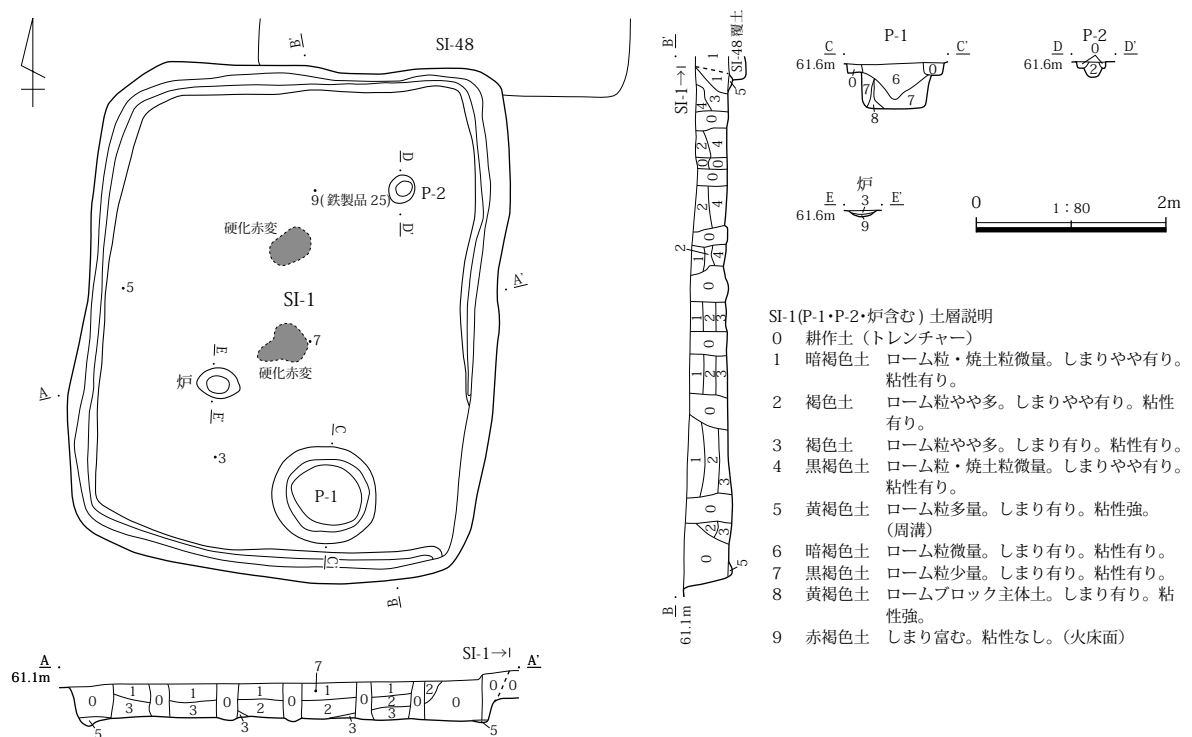
桐生直彦編 2015『季刊考古学』第 131 号 特集：古代「竪穴建物」の研究、雄山閣

笹森健一 2007「古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居」『暮らしの考古学シリーズ③ 住まいの考古学』学生社

高橋泰子・多ヶ谷香里 1998「竪穴住居に関する基本的用語の定義」『土壁』第 2 号、考古学を楽しむ会



第10図 東区 SZ-53 実測図

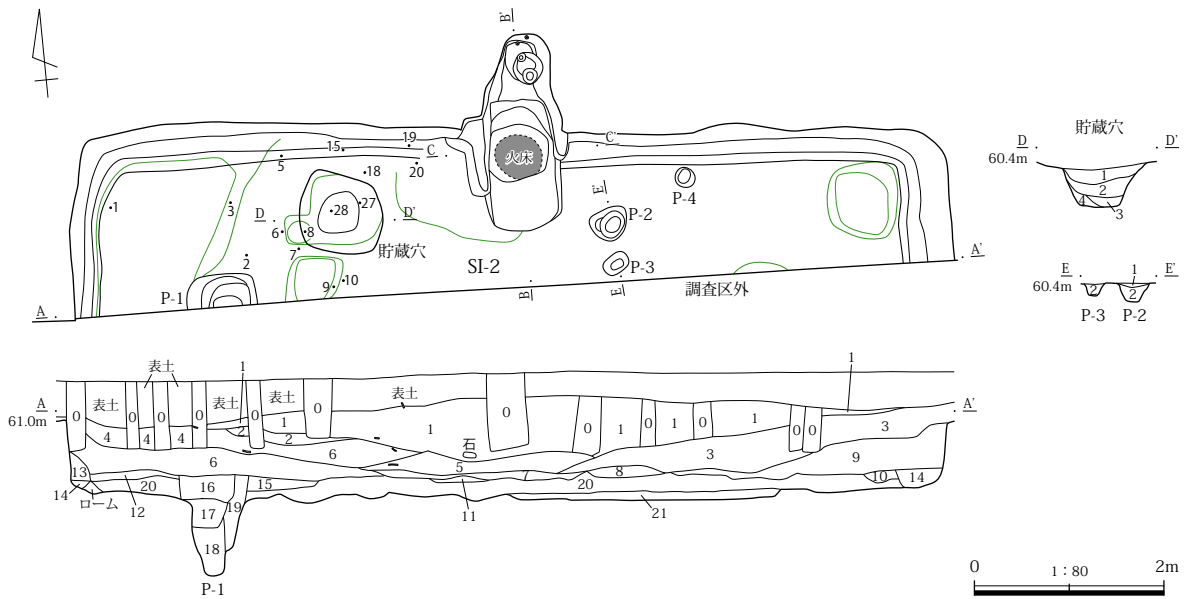


第11図 西区SⅠ-1実測図



第12図 西区SⅠ-2カマド実測図

Ⅲ. 調査成果



SI-2 土層説明

0 耕作土 (トレンチャー)

- 1 暗褐色土 ローム粒少量。焼土粒やや少。しまり無し。粘性無し。
- 2 褐色土 ローム粒少量。焼土粒微量。しまり無し。粘性無し。
- 3 暗茶褐色土 ローム粒少量。焼土粒やや少。しまり無し。粘性無し。
- 4 暗褐色土 ローム粒微量。焼土粒少量。しまり無し。粘性無し。遺物含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒少量。焼土粒やや多。しまり無し。粘性無し。遺物多く含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒少量。焼土粒やや少。しまり無し。粘性無し。遺物多く含む。
- 7 褐色土 ローム粒少量。焼土粒やや少。しまり無し。粘性無し。
- 8 褐色土 ローム粒微量。粘土粒微量。しまり無し。粘性無し。
- 9 暗褐色土 ローム粒やや少。焼土粒微量。しまり無し。粘性無し。
- 10 褐色土 ローム粒多量。しまり無し。粘性無し。
- 11 暗褐色土 ローム粒微量。焼土粒少量。しまり無し。粘性無し。
- 12 褐色土 ローム粒やや少。しまり無し。粘性無し。
- 13 暗褐色土 ローム粒やや少。しまり無し。粘性無し。
- 14 暗褐色土 ローム粒少量。しまり無し。粘性無し。(周溝)
- 15 褐色土 ローム粒多量。しまり有り。粘性無し。
- 16 褐色土 ローム粒少量。しまり無し。粘性無し。(柱穴)
- 17 褐色土 ローム粒やや少。焼土粒微量。しまり無し。粘性無し。(柱穴)
- 18 暗褐色土 ローム粒やや多。しまり無し。粘性無し。(柱穴)
- 19 暗褐色土 ローム粒多量。しまり無し。粘性無し。(柱穴の掘方)
- 20 黄褐色土 ローム粒少量。ロームブロック多量。黒褐色土ブロック混入。しまり有り。粘性無し。(貼床)
- 21 黄褐色土 ローム主体土。(貼床)

SI-2(貯蔵穴) 土層説明

- 1 黒褐色土 焼土粒・炭化物・ローム粒・粘土粒少量。しまり有り。
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。しまり有り。
- 3 黒褐色土 ローム粒微量。
- 4 褐色土 ローム粒少量。鹿沼パミス (Ag-kp) 少量。

[所見] 全体として焼土粒を多量含むのが特徴的。火災住居ではなく焼土粒・土器片を多量含む土で埋められたものであろう。

SI-2(P-2・P-3) 土層説明

- 1 黄褐色土 ローム主体土。(人為的埋め戻しか)
- 2 褐色土 ローム粒多量。ロームブロック少量。

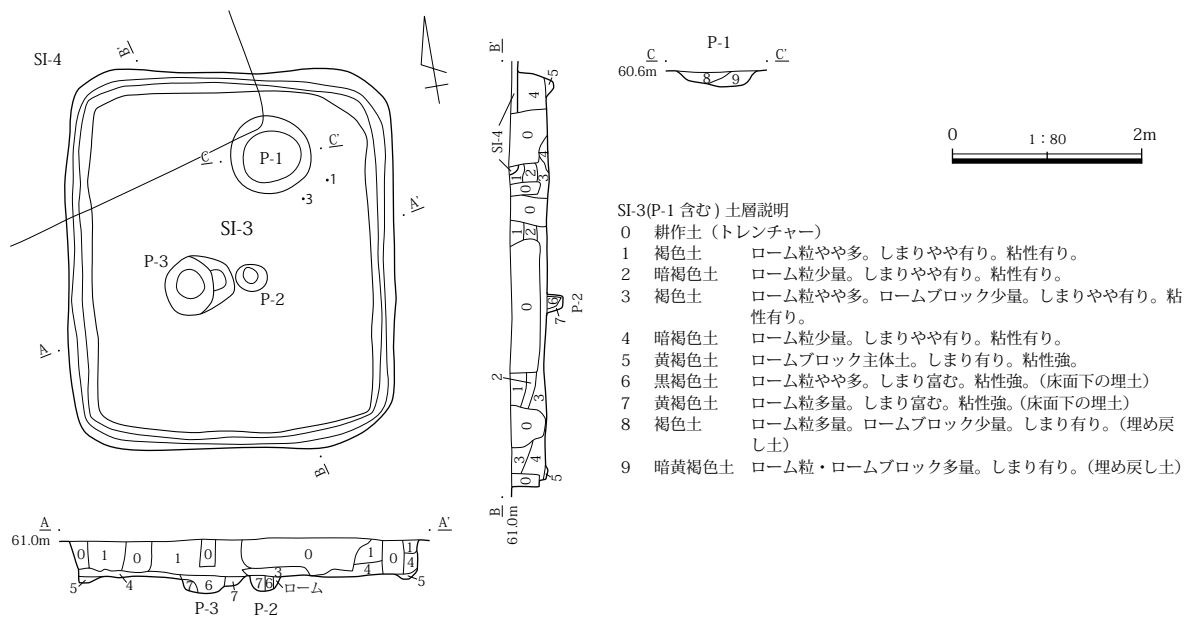
第13図 西区SI-2 実測図



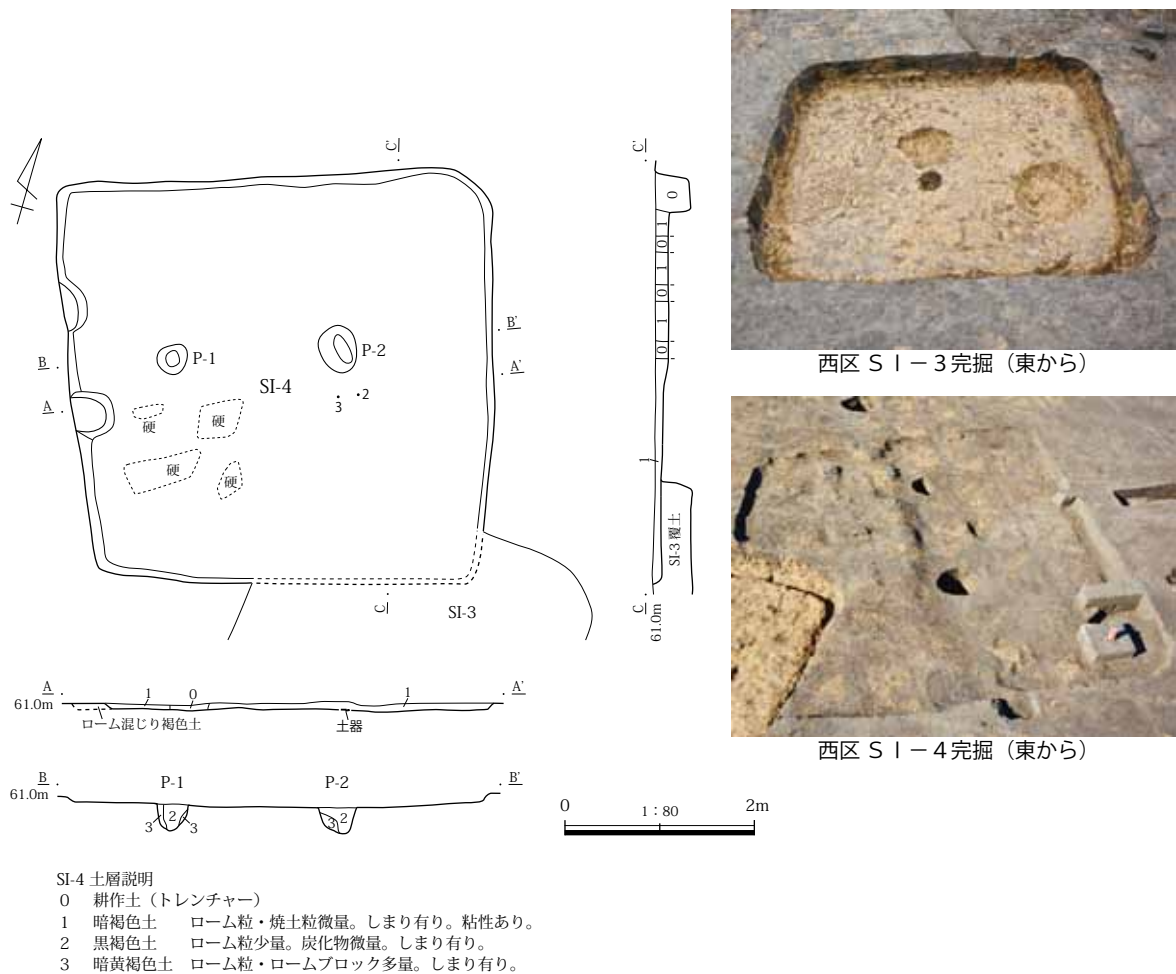
西区SI-2完掘 (北西から)



西区SI-2カマド完掘 (南から)

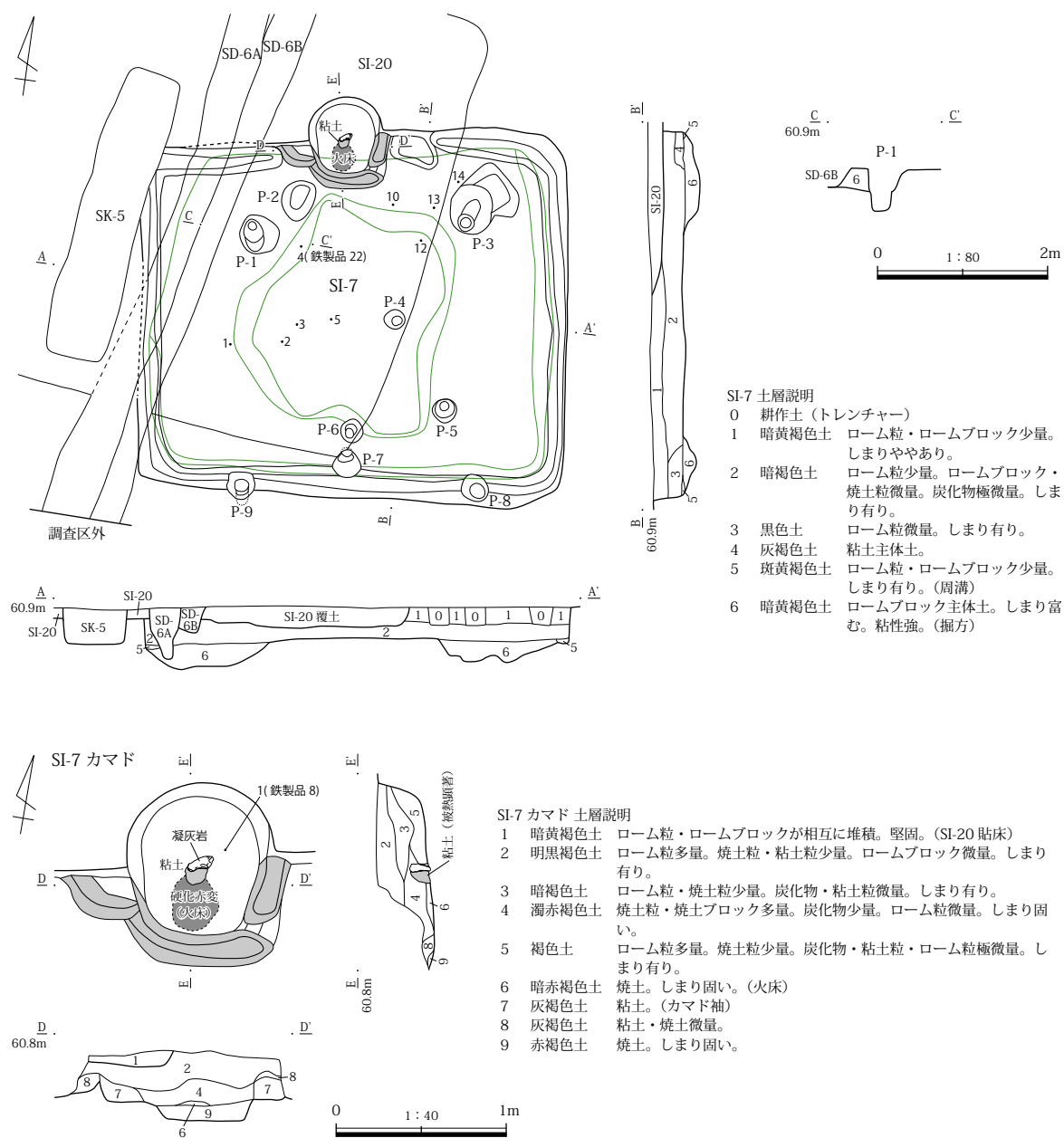


第14図 西区 S I - 3 実測図



第15図 西区 S I - 4 実測図

Ⅲ. 調査成果



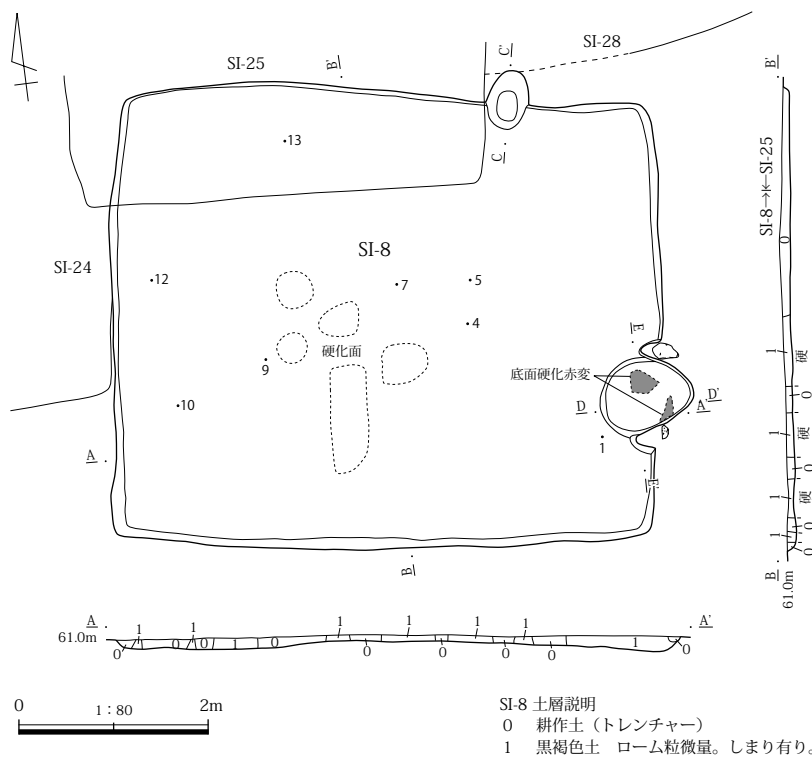
第 16 図 西区 S I - 7 実測図



西区 S I - 7 完掘 (南から)



西区 S I - 7 カマド完掘 (南から)

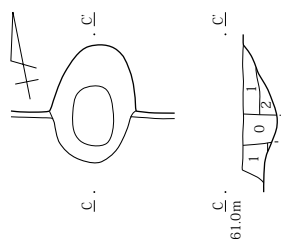


西区 S I - 8 北カマド完掘 (東から)



西区 S I - 8 東カマド完掘 (西から)

SI-8 北カマド (旧)

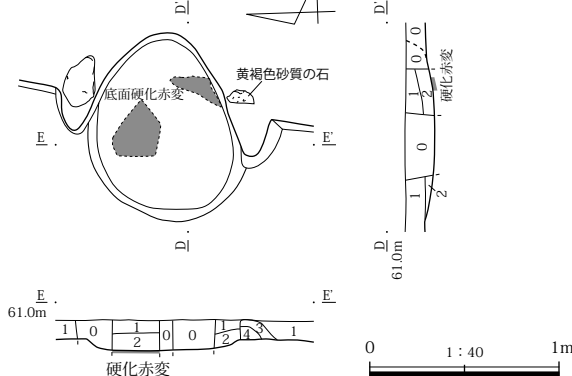


- SI-8 北カマド (旧) 土層説明
- 0 耕作土 (トレンチャー)
- 1 黒褐色土 ローム粒少量。粘土粒・炭化物微量。しまり有り。
- 2 淡褐色土 粘土粒・ローム粒混合土。焼土粒微量。しまり有り。



西区 S I - 8 遺物出土状況 (東から)

SI-8 東カマド (新)



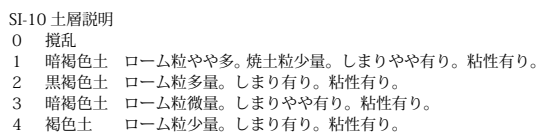
- SI-8 東カマド (新) 土層説明
- 0 耕作土 (トレンチャー)
- 1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量。粘土粒微量。しまり有り。
- 2 褐色土 ローム粒多量。粘土粒少量。炭化物・焼土粒微量。しまり有り。
- 3 灰褐色土 ローム粒多量。灰色粘土少量。しまり有り。
- 4 褐色土 ローム粒多量。焼土粒・粘土粒微量。しまり有り。



西区 S I - 8 完掘 (西から)

第 17 図 西区 S I - 8 実測図

Ⅲ. 調査成果



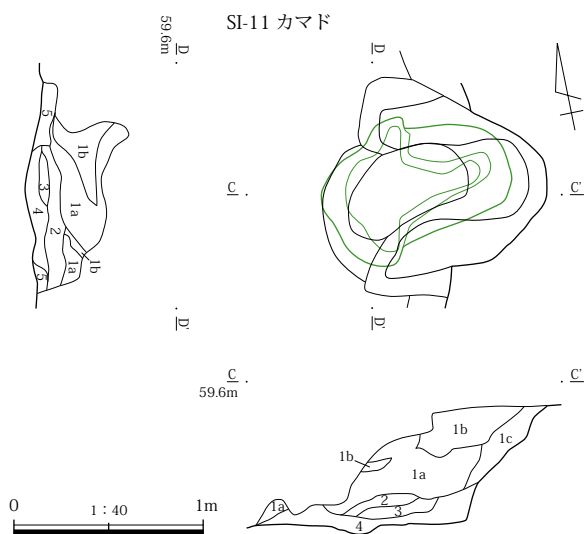
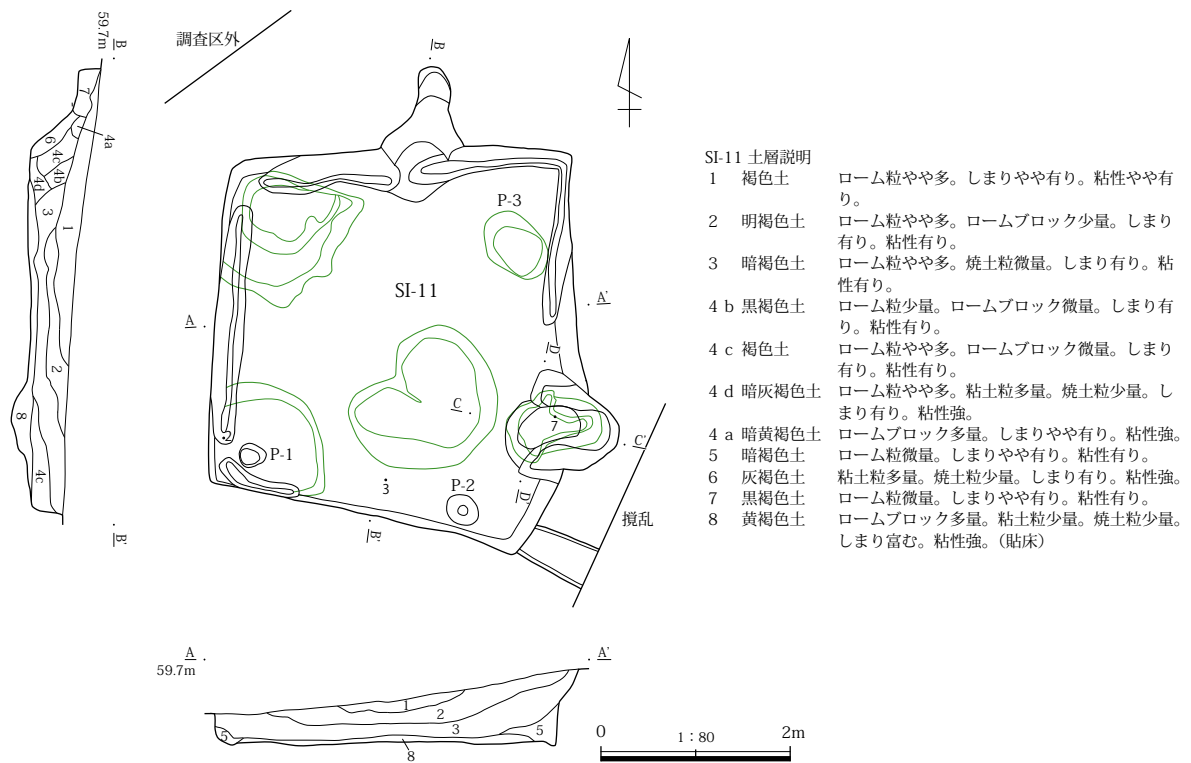
西区 S I - 1 0 半截 (南から)

第18図 西区S1-10実測図



西区 S I - 1 2 完掘 (南から)

第19図 西区S1-12実測図



- SI-11 カマド 土層説明
- | | |
|-------------|--------------------------------------|
| 1 a 灰褐色粘土 | 粘土ブロック主体土。しまりやや有り。粘性強。(天井の崩落) |
| 1 b 暗赤灰褐色粘土 | 粘土ブロック多量。しまり有り。粘性有り。(天井の崩落) |
| 1 c 暗赤灰褐色粘土 | 粘土ブロック多量。焼土粒多量。しまりやや有り。粘性強。(天井の崩落) |
| 2 暗灰色土 | 粘土粒やや多。焼土粒やや多。しまり有り。粘性有り。 |
| 3 赤灰色粘土 | 焼土粒やや多。しまり有り。粘性有り。 |
| 4 黒褐色土 | 粘土ブロック少量。焼土粒少量。炭化物多量。しまりややあり。粘性やや有り。 |
| 5 灰色粘土 | 粘土ブロック主体土。しまり富む。粘性強。(カマド袖) |



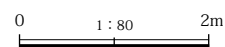
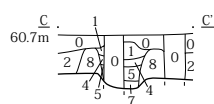
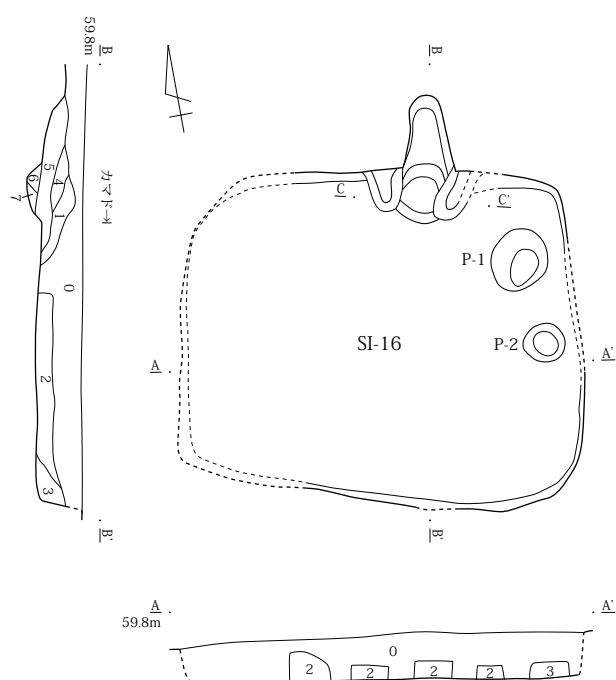
西区 S I - 1 1 完掘 (南から)



西区 S I - 1 1 カマド完掘 (西から)

第 20 図 西区 S I - 1 1 実測図

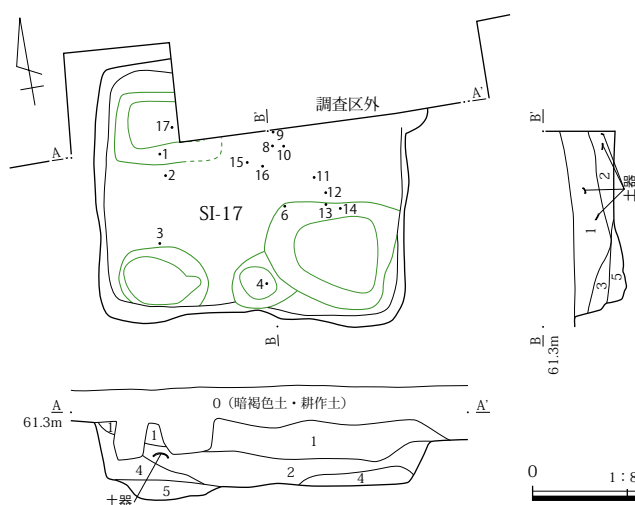
Ⅲ. 調査成果



SI-16 土層説明

- 0 耕作土 (トレンチャー)
- 1 暗灰褐色土 ローム粒少量。粘土粒やや多。しまり有り。粘性有り。(カマド覆土か)
- 2 褐色土 ローム粒少量。焼土粒微量。しまり有り。粘性有り。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒やや多。しまり有り。粘性強。
- 4 灰褐色土 粘土主体土。焼土粒多量。しまり固い。粘性強。(カマド覆土)
- 5 黒褐色土 ローム粒やや多。粘土粒多量。焼土粒多量。しまりやや有り。粘性強。(カマド覆土)
- 6 黒褐色土 ローム粒多量。しまり有り。粘性有り。(カマド掘方覆土)
- 7 黄褐色土 ロームブロック多量。しまり固い。粘性強。(カマド掘方覆土)
- 8 灰白色土 粘土主体土。しまり固い。粘性強。(カマド袖)

第 21 図 西区 S I - 1 6 実測図



SI-17 土層説明

- 1 褐色土 ローム粒やや多。焼土粒やや多。しまりやや有り。粘性有り。
- 2 暗褐色土 ローム粒少量。焼土粒少量。しまりやや有り。粘性有り。
- 3 黒褐色土 ローム粒少量。焼土粒微量。しまりやや有り。粘性有り。
- 4 明褐色土 ローム粒やや多。焼土粒少量。炭化物少量。しまり有り。粘性有り。
- 5 暗黄褐色土 ローム粒多量。粘性強。しまり富む。

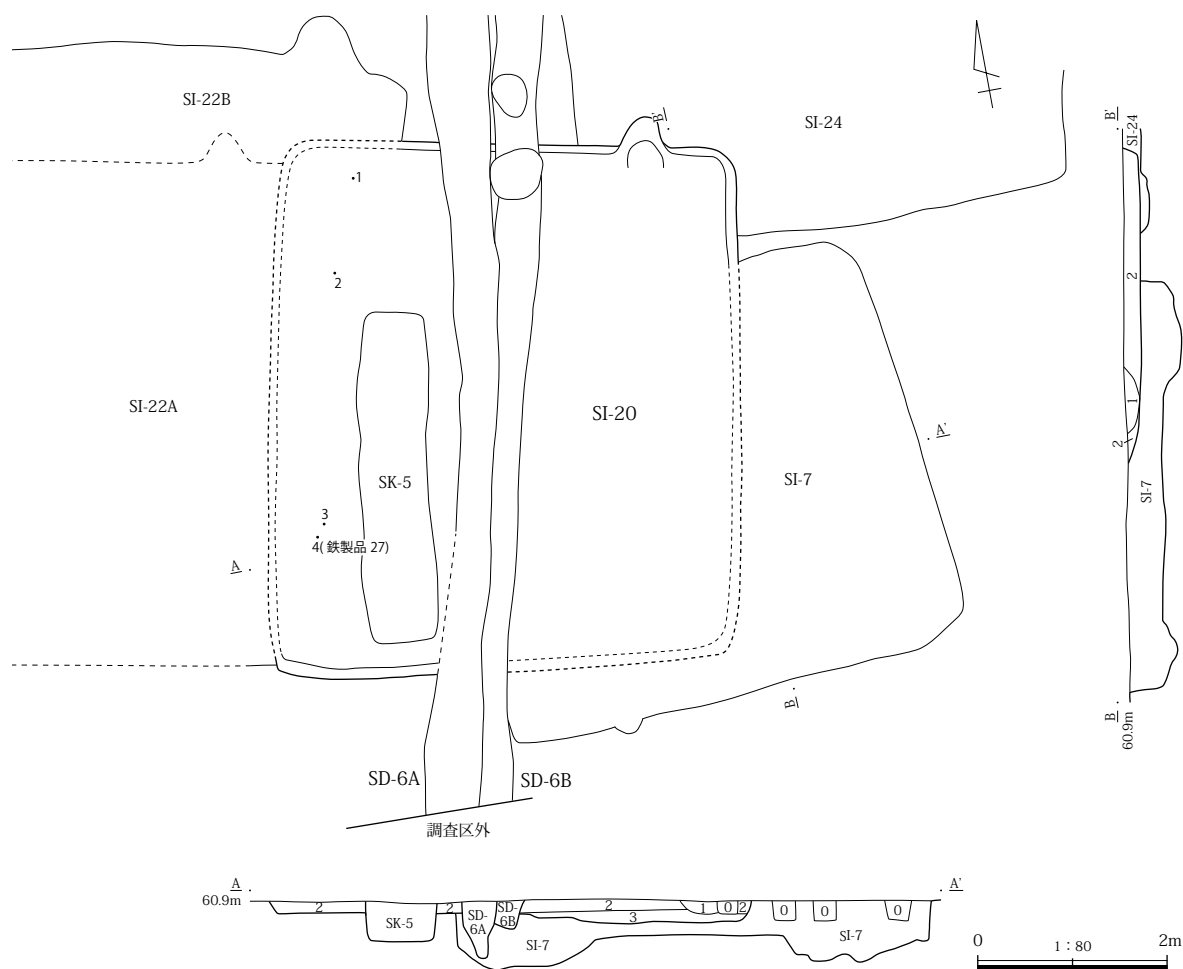
第 22 図 西区 S I - 1 7 実測図



西区 S I - 1 6 完掘 (南から)



西区 S I - 1 7 遺物出土状況 (南から)



SI-20 土層説明

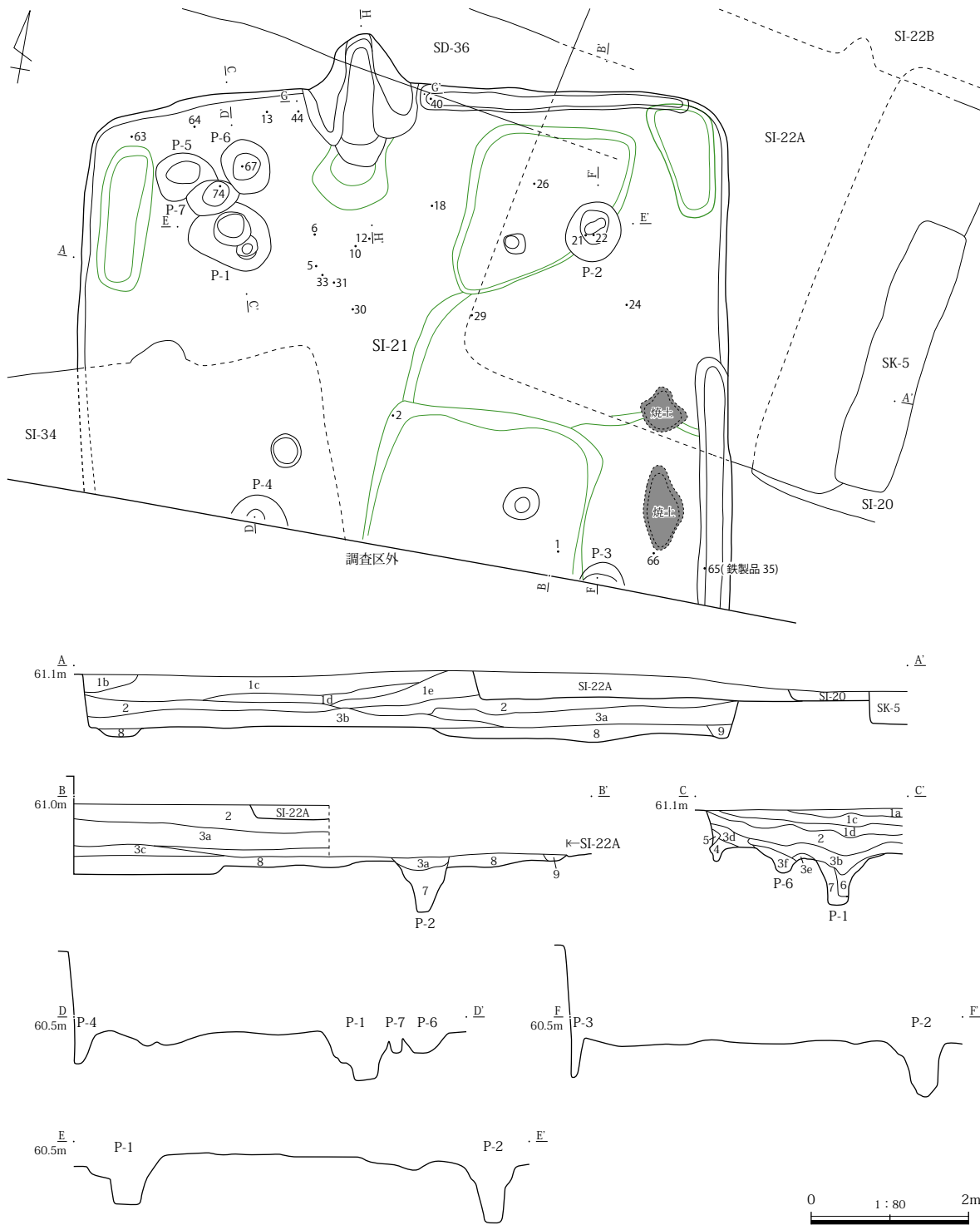
- 0 耕作土（トレンチャー）
- 1 黒褐色土 焼土粒多量。しまりやや無し。
- 2 黒褐色土 ローム粒・焼土粒微量。しまりやや有り。
- 3 褐色土 粘土ブロック・ロームブロック・焼土粒・焼土ブロック少量。しまり固い。（貼床）

第 23 図 西区 S I - 2 0 実測図



西区 S I - 2 0 カマド完掘（南西から）

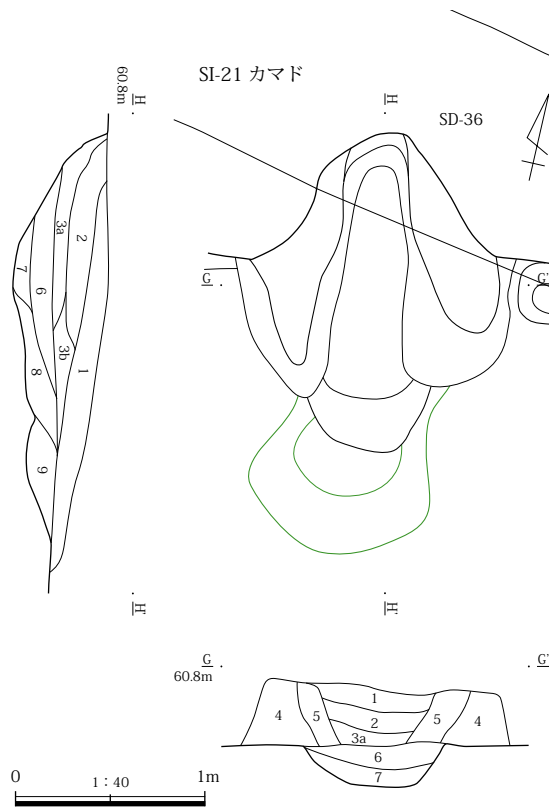
Ⅲ. 調査成果



SI-21 土層説明

- | | | | |
|-----------|------------------------------|-----------|-----------------------------|
| 1 a 暗赤褐色土 | ローム粒微量。焼土粒多量。しまり有り。粘性有り。 | 3 d 暗灰褐色土 | ローム粒やや多。焼土粒少量。しまりやや有り。粘性有り。 |
| 1 b 褐色土 | ローム粒少量。焼土粒少量。しまりやや有り。粘性やや有り。 | 3 e 暗灰色土 | ローム粒微量。しまり有り。粘性有り。 |
| 1 c 暗褐色土 | ローム粒微量。焼土粒少量。しまり有り。粘性やや有り。 | 3 f 暗褐色土 | ローム粒少量。しまり有り。粘性有り。(土坑覆土) |
| 1 d 褐色土 | ローム粒少量。焼土粒やや多。しまり有り。粘性有り。 | 4 暗黄褐色土 | ローム粒多量。しまりやや有り。粘性有り。 |
| 1 e 明褐色土 | ローム粒やや多。焼土粒やや多。しまり有り。粘性有り。 | 5 黄褐色土 | ロームブロック多量。しまり富む。粘性有り。 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒少量。焼土粒少量。しまり有り。粘性有り。 | 6 暗褐色土 | ローム粒やや多。しまりやや有り。粘性有り。(柱痕) |
| 3 a 暗褐色土 | ローム粒少量。焼土粒少量。しまり有り。粘性有り。 | 7 黄褐色土 | ロームブロック主体土。しまり富む。粘性強。(柱穴) |
| 3 b 暗灰褐色土 | ローム粒少量。焼土粒やや多。しまり富む。粘性有り。 | 8 黄褐色土 | ロームブロック主体土。しまり富む。粘性強。(貼床) |
| 3 c 暗褐色土 | ローム粒やや多。焼土粒微量。しまり富む。粘性有り。 | 9 暗褐色土 | ロームブロック多量。しまり富む。粘性強。(周溝) |

第24図 西区 S I - 21 実測図



西区 S I - 2 1 全景 (北から)

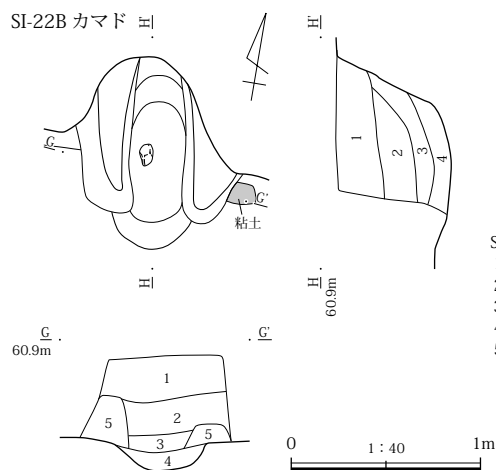


西区 S I - 2 1 カマド完掘 (南から)

SI-21 カマド 土層説明

- 1 灰褐色土 ローム粒少量。しまりやや有り。粘性有り。
- 2 黒灰褐色土 ローム粒微量。しまりやや有り。粘性有り。
- 3 a 赤灰褐色土 粘土粒多量。しまり有り。粘性有り。
- 3 b 灰褐色土 粘土粒多量。しまり富む。粘性強。
- 4 灰色粘土 粘土ブロック主体土。しまり富む。粘性強。(カマド袖)
- 5 赤色土 焼土ブロック主体土。しまり富む。粘性やや有り。(カマド袖)
- 6 黄褐色土 ロームブロック主体土。上面に焼土ブロック層状。しまり富む。粘性無し。
- 7 黒褐色土 ロームブロック多量。しまり富む。粘性無し。(カマド掘方)
- 8 黄褐色土 ロームブロック主体土。焼土粒少量。しまり富む。粘性強。(カマド掘方)
- 9 黒褐色土 ロームブロック多量。上面に焼土ブロック層状。しまり富む。粘性強。(住居跡掘方)

第 25 図 西区 S I - 2 1 カマド 実測図



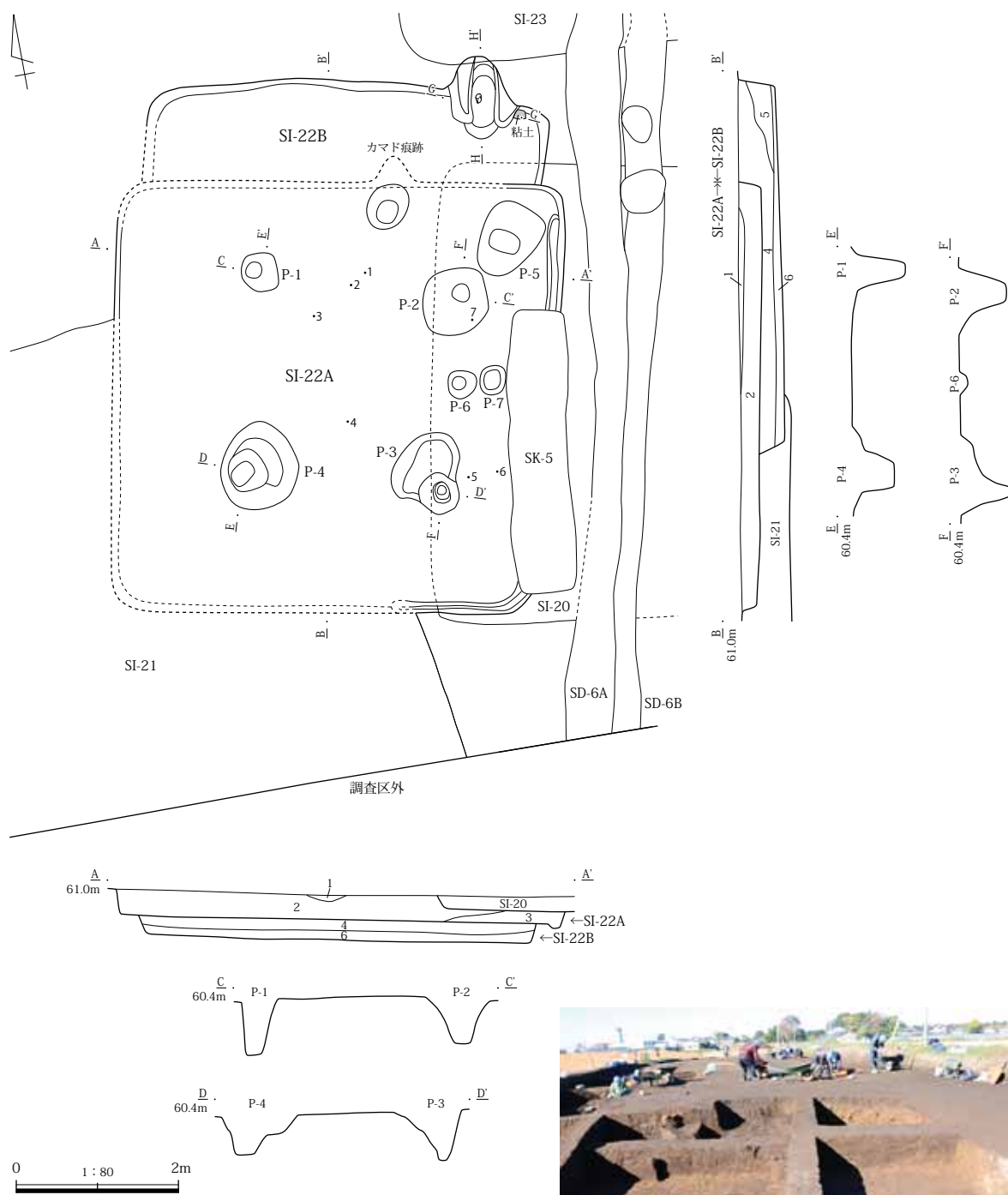
西区 S I - 2 2 B カマド完掘 (南から)

SI-22B カマド 土層説明

- 1 明褐色土 ローム粒・粘土粒多量。しまり有り。
- 2 灰黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。粘土多量。しまり有り。
- 3 褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。粘土粒少量。
- 4 濁赤褐色土 焼土ブロック多量。ローム粒少量・炭化物微量。
- 5 灰黄褐色土 ローム・粘土の混合土。焼土粒少量。(カマド袖)

第 26 図 西区 S I - 2 2 B カマド 実測図

Ⅲ. 調査成果



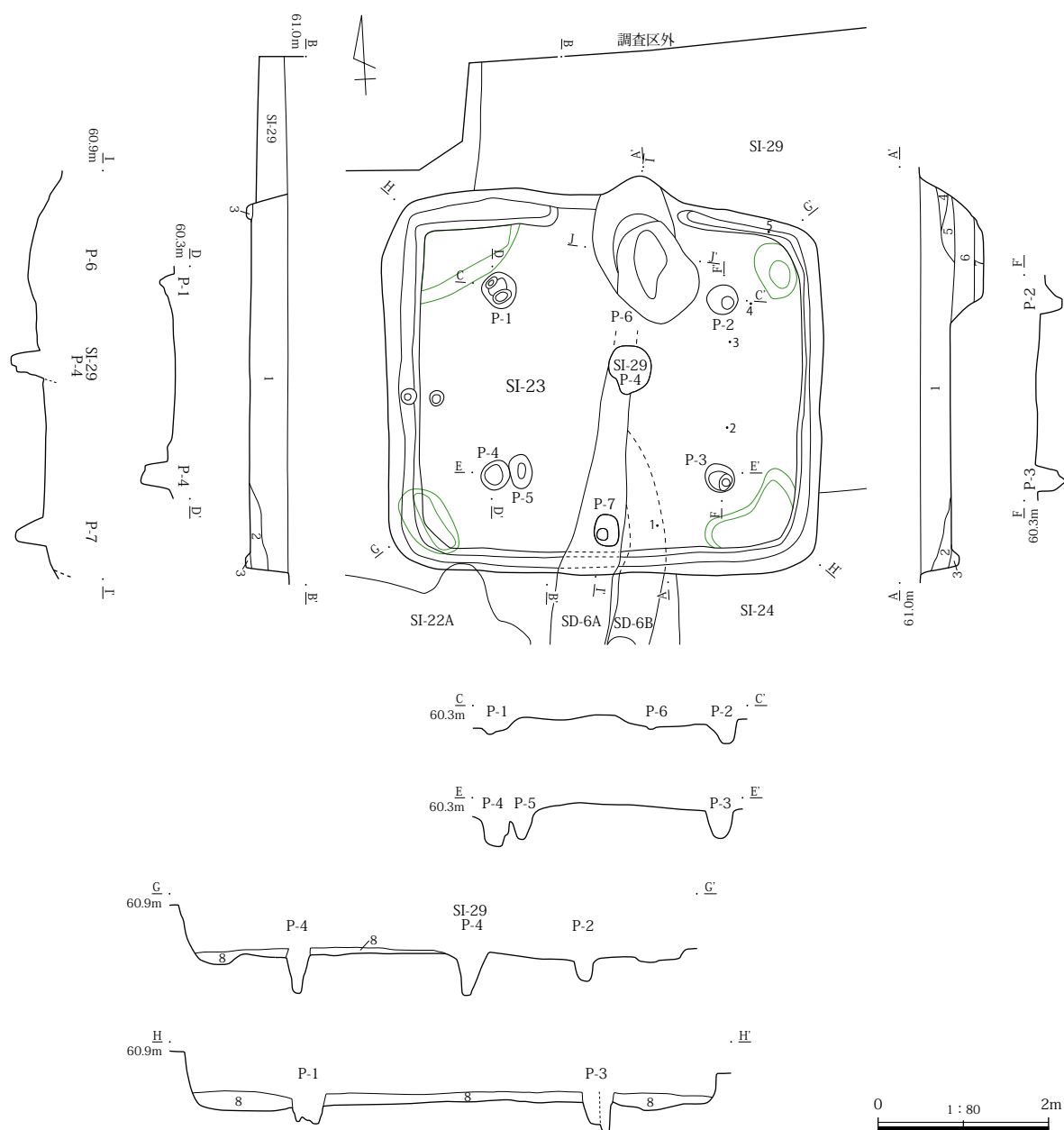
SI-22A・22B 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒やや多。しまりやや有り。粘性有り。(SI-22A 覆土)
- 2 褐色土 ローム粒少量。焼土粒少量。しまり有り。粘性有り。(SI-22A 覆土)
- 3 暗黄褐色土 ローム粒少量。焼土粒少量。しまり富む。粘性強。(SI-22A 覆土)
- 4 黒褐色土 ローム粒少量。焼土粒微量。しまり有り。粘性強。(SI-22B 覆土)
- 5 黄褐色土 ロームブロック多量。しまり富む。粘性強。(SI-22B 覆土)
- 6 黄褐色土 ローム粒多量。しまり富む。粘性強。(SI-22B 貼床)



西区 SI-22A・22B (南から)

第 27 図 西区 SI-22A・22B 実測図



SI-23 土層説明

- | | |
|---------|------------------------------|
| 1 明黒褐色土 | 焼土粒・ローム粒少量。炭化物・粘土粒微量。しまり富む。 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒微量。焼土粒微量。しまり富む。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒多量。ロームブロック微量。しまり富む。(周溝) |
| 4 暗灰色土 | 粘土主体。 |
| 5 灰褐色土 | 粘性多量。焼土粒多量。ローム粒微量。しまり富む。 |
| 6 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒微量。炭化物・粘土粒極微量。しまり富む。 |
| 7 暗黄褐色土 | ローム粒・ロームブロック多量。しまり富む。 |
| 8 暗褐色土 | ローム粒多量。焼土粒少量。しまり有り。粘性やや無し。 |



西区 S I - 2 3 遺物出土状況 (西から)

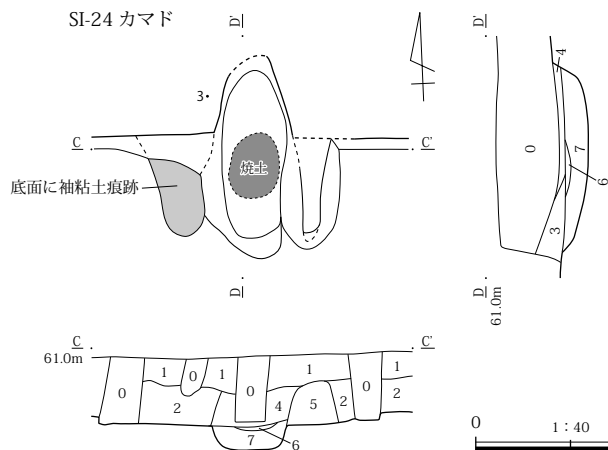
第 28 図 西区 S I - 2 3 実測図

Ⅲ. 調査成果



SI-24 土層説明

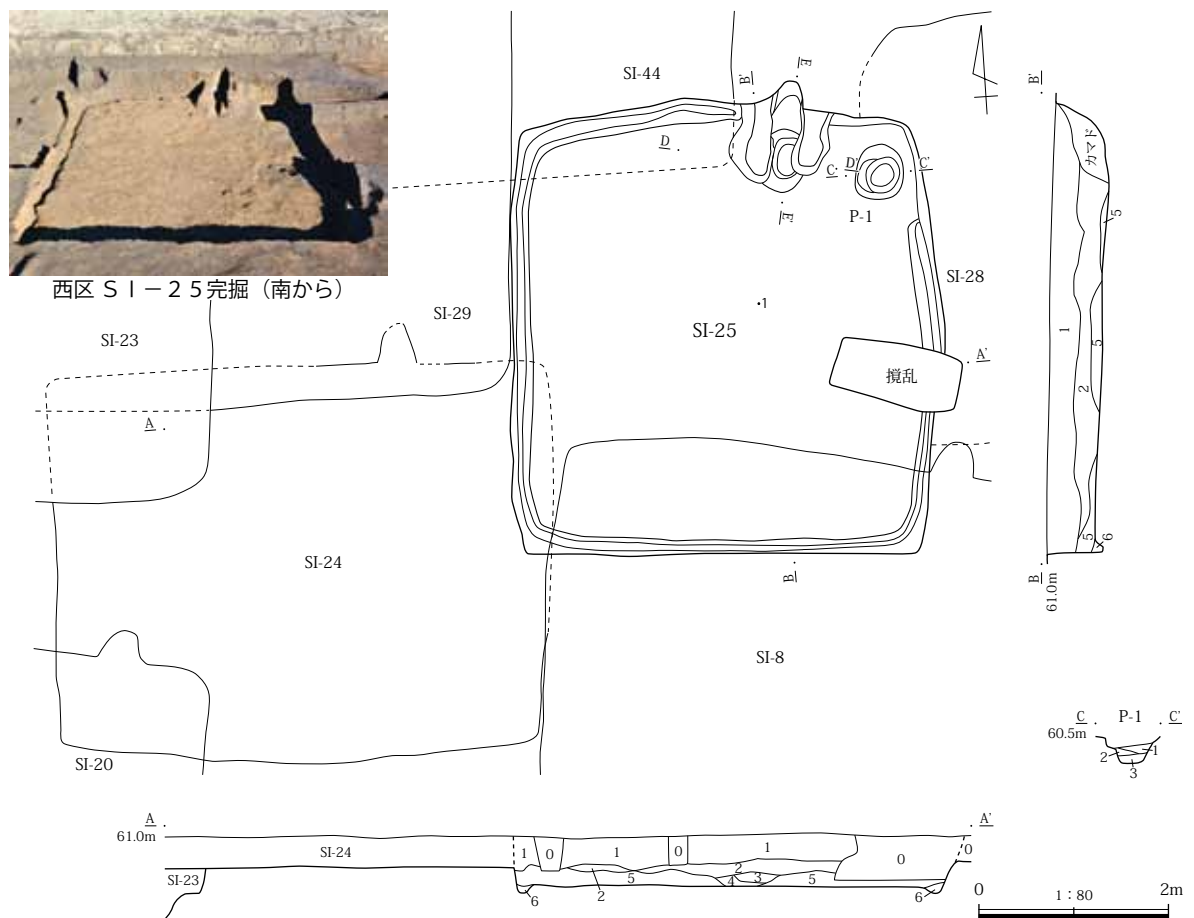
- 0 耕作土 (トレンチャー)
- 1 黒褐色土 焼土粒・焼土ブロック少量。ローム粒・粘土粒微量。しまり有り。
- 2 暗褐色土 焼土粒多量。焼土ブロック・粘土粒少量。ローム粒・炭化物微量。しまり有り。(カマド由来)



SI-24 カマド 土層説明

- 0 耕作土 (トレンチャー)
- 1 黒褐色土 SI-24 覆土 1 層に同じ。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒多量。焼土粒少量。粘土粒微量。
- 3 灰褐色土 粘土・焼土ローム混土。
- 4 明褐色土 ローム粒多量。焼土・粘土少量。(崩落土)
- 5 灰黒褐色土 ローム少量。粘土多量。焼土微量。(カマド袖)
- 6 赤褐色土 焼土。(火床)
- 7 褐色土 ローム粒多量。焼土粒微量。(カマド掘方)

第 29 図 西区 S I - 2 4 実測図

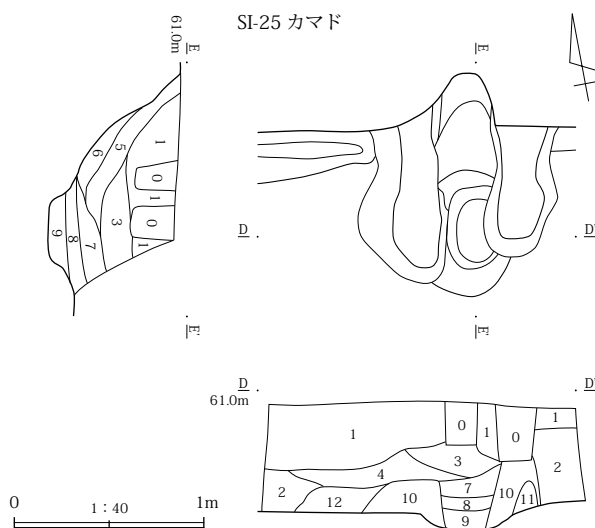


SI-25 土層説明

- | | |
|---|---|
| 0 | 耕作土 (トレンチャー) |
| 1 | 明黒褐色土 焼土粒・焼土ブロック多量。ローム粒少量。炭化物・粘土粒微量。 |
| 2 | 黒褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多。炭化物少量。焼土粒少量。しまり富む。 |
| 3 | 濁赤褐色土 焼土ブロック多量。炭化物少量。しまり富む。 |
| 4 | 褐色土 ローム粒・炭化物少量。しまり富む。 |
| 5 | 暗黄褐色土 ローム粒多量。ロームブロック少量。しまり富む。 |
| 6 | 斑黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり有り。(周溝) |

SI-25 (P-1) 土層説明

- | | |
|---|-------------------------------|
| 1 | 暗黄褐色土 ローム粒多量。ロームブロック少量。しまり有り。 |
| 2 | 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり有り。 |
| 3 | 暗褐色土 ローム粒多量。ロームブロック少量。しまり有り。 |

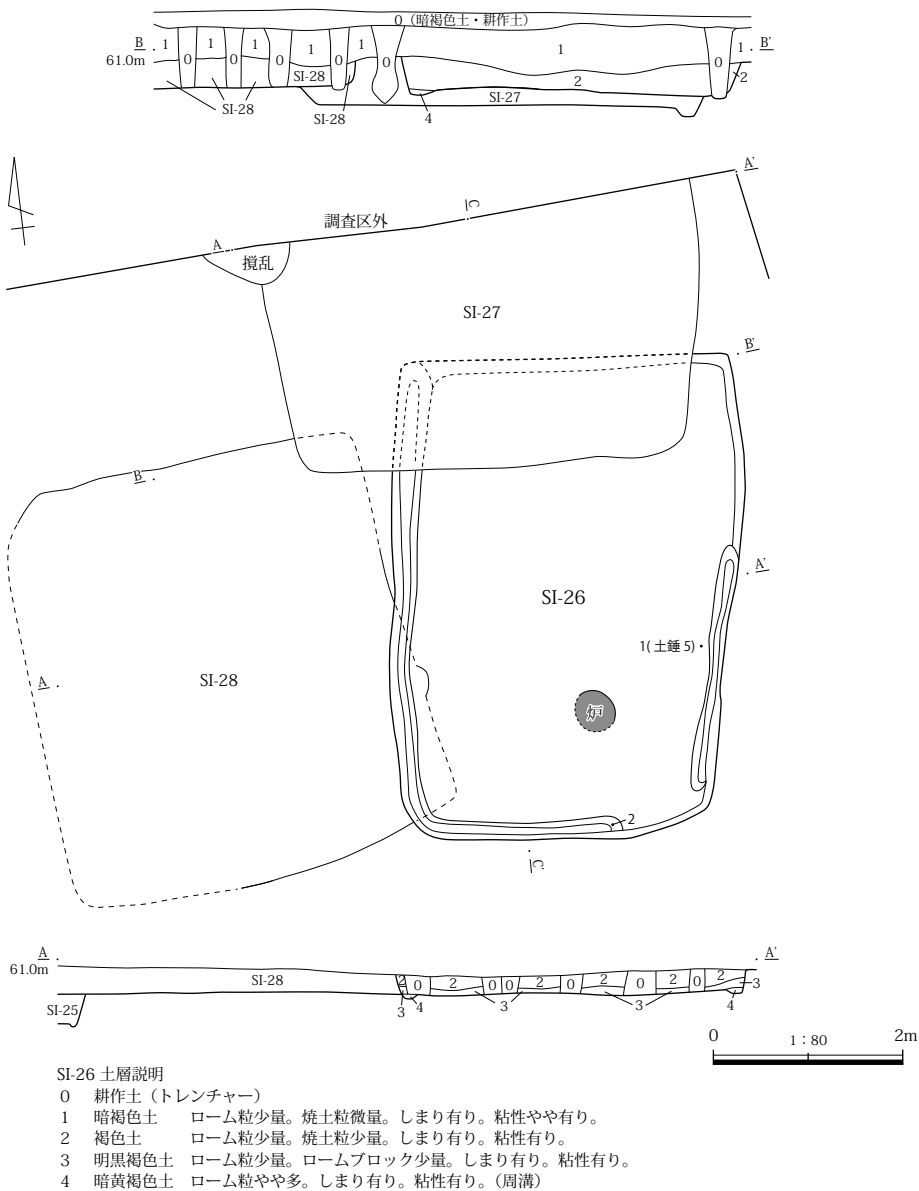


SI-25 カマド 土層説明

- | | |
|----|--------------------------------|
| 0 | 耕作土 (トレンチャー) |
| 1 | SI-25 覆土 1 層 |
| 2 | SI-25 覆土 2 層 |
| 3 | 褐灰色土 粘土多量。ローム粒少量。しまり有り。 |
| 4 | 褐灰色土 粘土主体土。焼土微量。しまり有り。(天井材か) |
| 5 | 暗褐赤色土 粘土多量。粘土ブロック少量。しまり有り。 |
| 6 | 灰褐色土 粘土多量。焼土多量。しまり固い。 |
| 7 | 赤褐色土 焼土主体土。ローム・粘土・炭化物微量。しまり固い。 |
| 8 | 黄褐色土 ローム主体土。焼土少量。しまり固い。 |
| 9 | 明黒褐色土 ローム粒微量。(カマド掘方) |
| 10 | 灰褐色土 粘土主体土。ローム粒少量。(カマド袖) |
| 11 | ローム土 ローム地山の削り残し。(カマド芯材) |
| 12 | 暗褐色土 ローム粒少量。 |

第 30 図 西区 S I - 2 5 実測図

Ⅲ. 調査成果



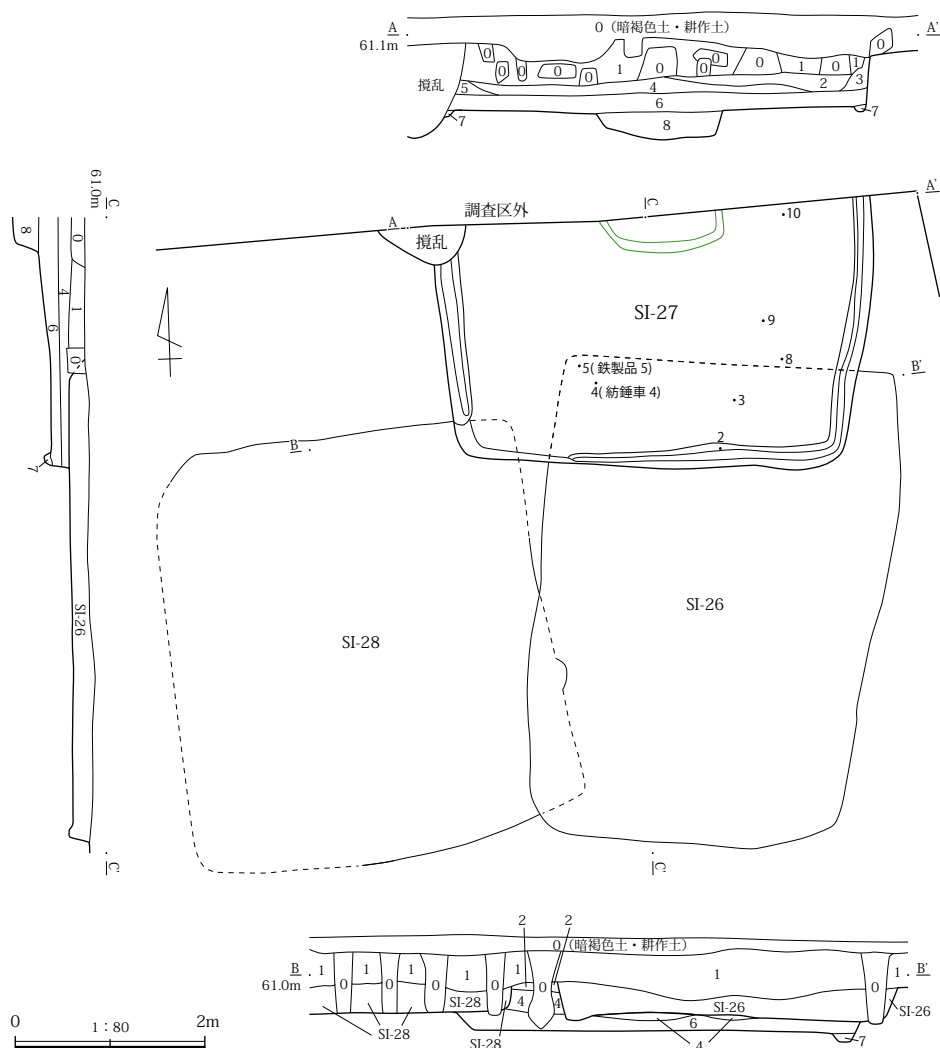
第31図 西区S1-26実測図



西区 S1-25 カマド完掘 (南から)



西区 S1-26 完掘 (西から)



SI-27 土層説明

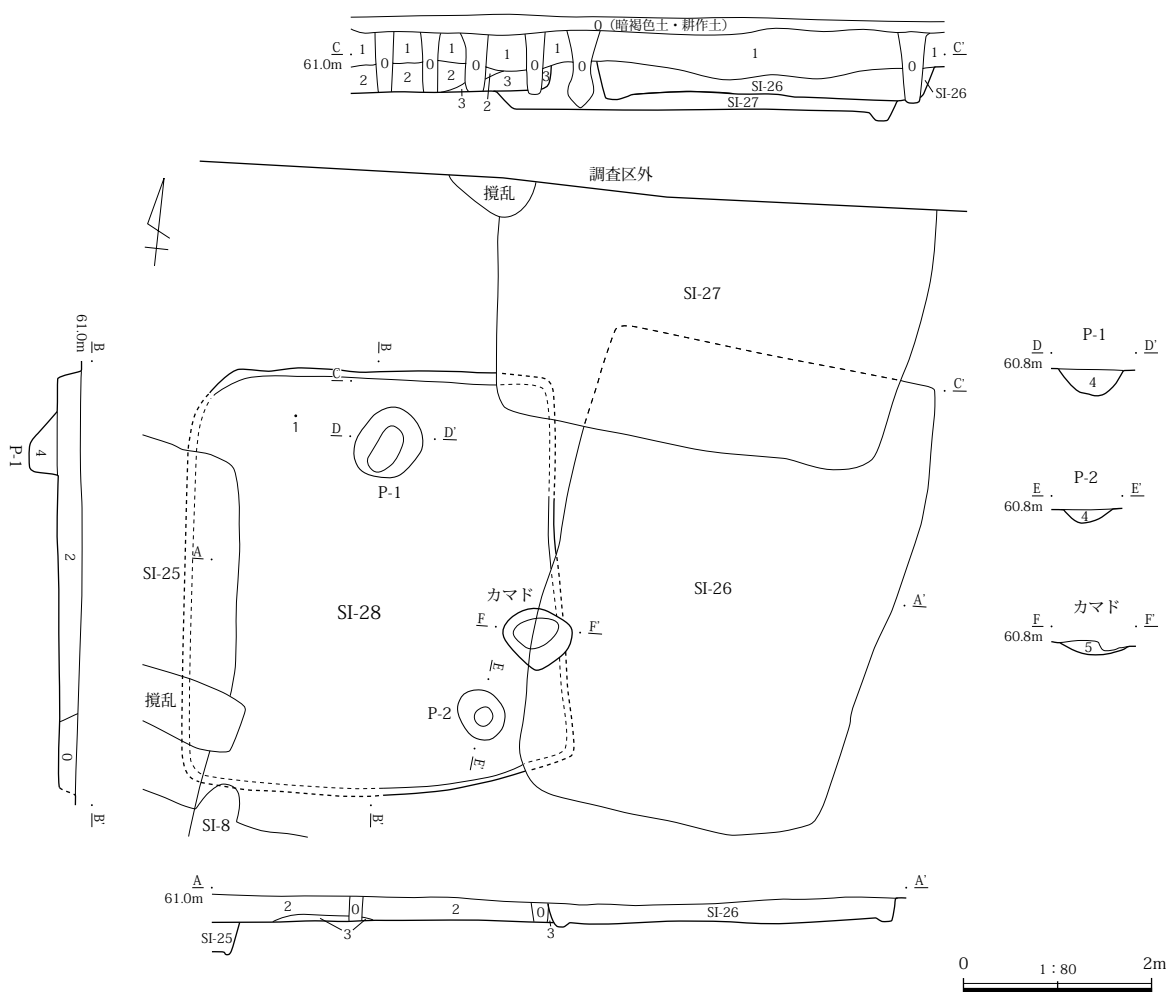
- | | |
|---|---|
| 0 | 耕作土 (トレンチャー) |
| 1 | 褐色土 ローム粒やや多。焼土粒やや少。しまりやや有り。粘性無し。 |
| 2 | 茶褐色土 ローム粒やや少。焼土粒やや多。粘土粒少量。しまりやや有り。粘性無し。 |
| 3 | 暗黄褐色土 ローム主体土。しまりやや有り。粘性有り。(壁崩落土) |
| 4 | 褐色土 ローム粒少量。焼土粒少量。しまりやや有り。粘性やや無し。 |
| 5 | 明褐色土 ローム粒やや多。焼土粒少量。しまりやや有り。粘性やや有り。 |
| 6 | 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。焼土粒少量。しまり有り。粘性有り。(貼床) |
| 7 | 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり有り。粘性有り。(周溝) |
| 8 | 褐色土 ローム粒やや多。粘土粒少量。しまり有り。粘性有り。(床下土坑) |

第 32 図 西区 S I - 2 7 実測図



西区 S I - 2 7 完掘 (南から)

Ⅲ. 調査成果



SI-28 土層説明

- | | |
|---|--------------------------------------|
| 0 | 耕作土 (トレンチャー) |
| 1 | 暗褐色土 ローム粒多量。焼土粒少量。しまり有り。粘性有り。 |
| 2 | 褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり有り。粘性有り。 |
| 3 | 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり有り。粘性有り。 |
| 4 | 暗褐色土 ローム粒やや多。粘土粒・焼土粒やや少。しまり有り。粘性有り。 |
| 5 | 灰褐色土 粘土ブロック多量。焼土粒やや多。しまりやや有り。粘性やや有り。 |

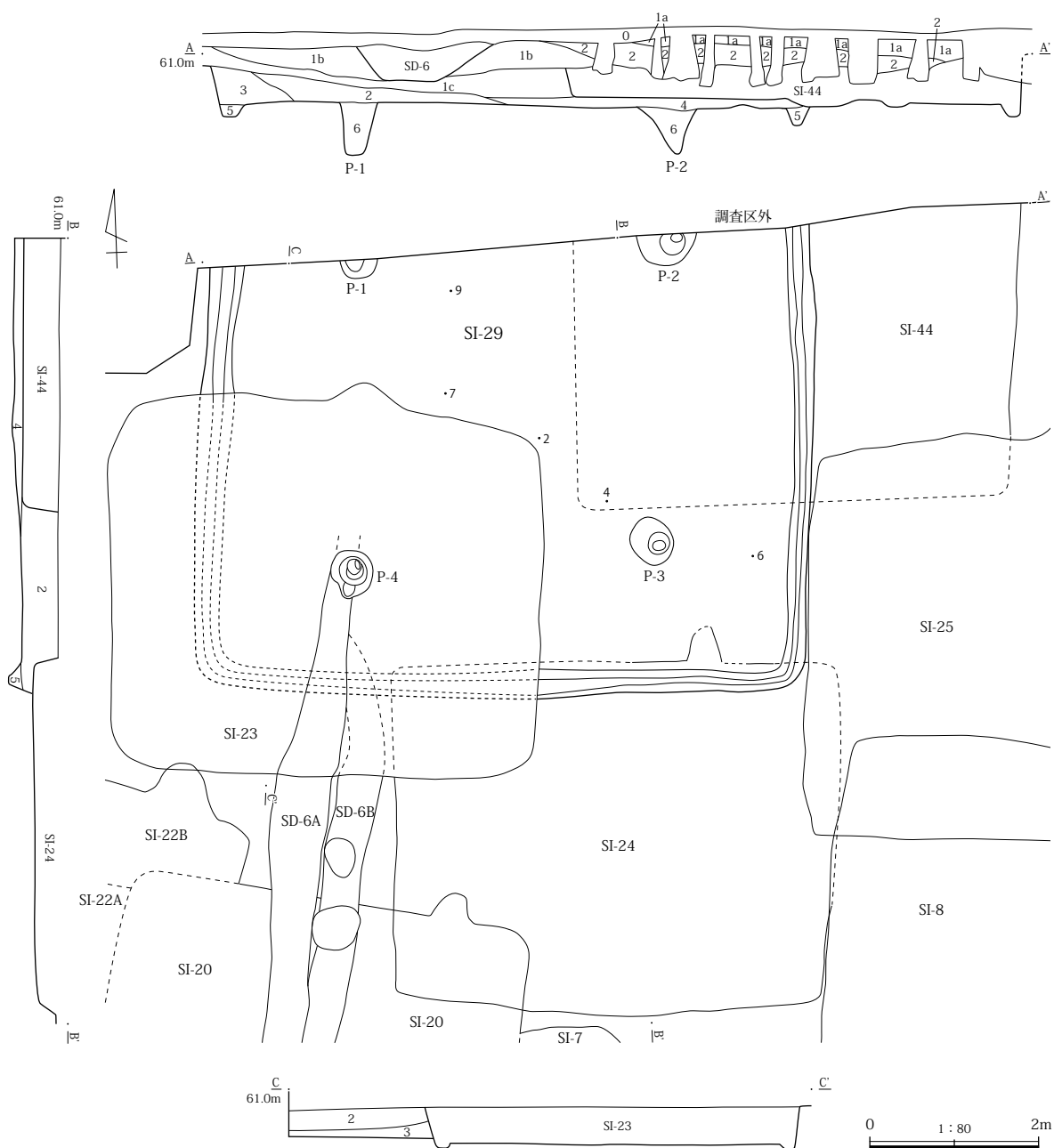
第 33 図 西区 S I - 2 8 実測図



西区 S I - 2 8 完掘 (南から)



西区 S I - 2 8 カマド半截 (南から)



SI-29 土層説明

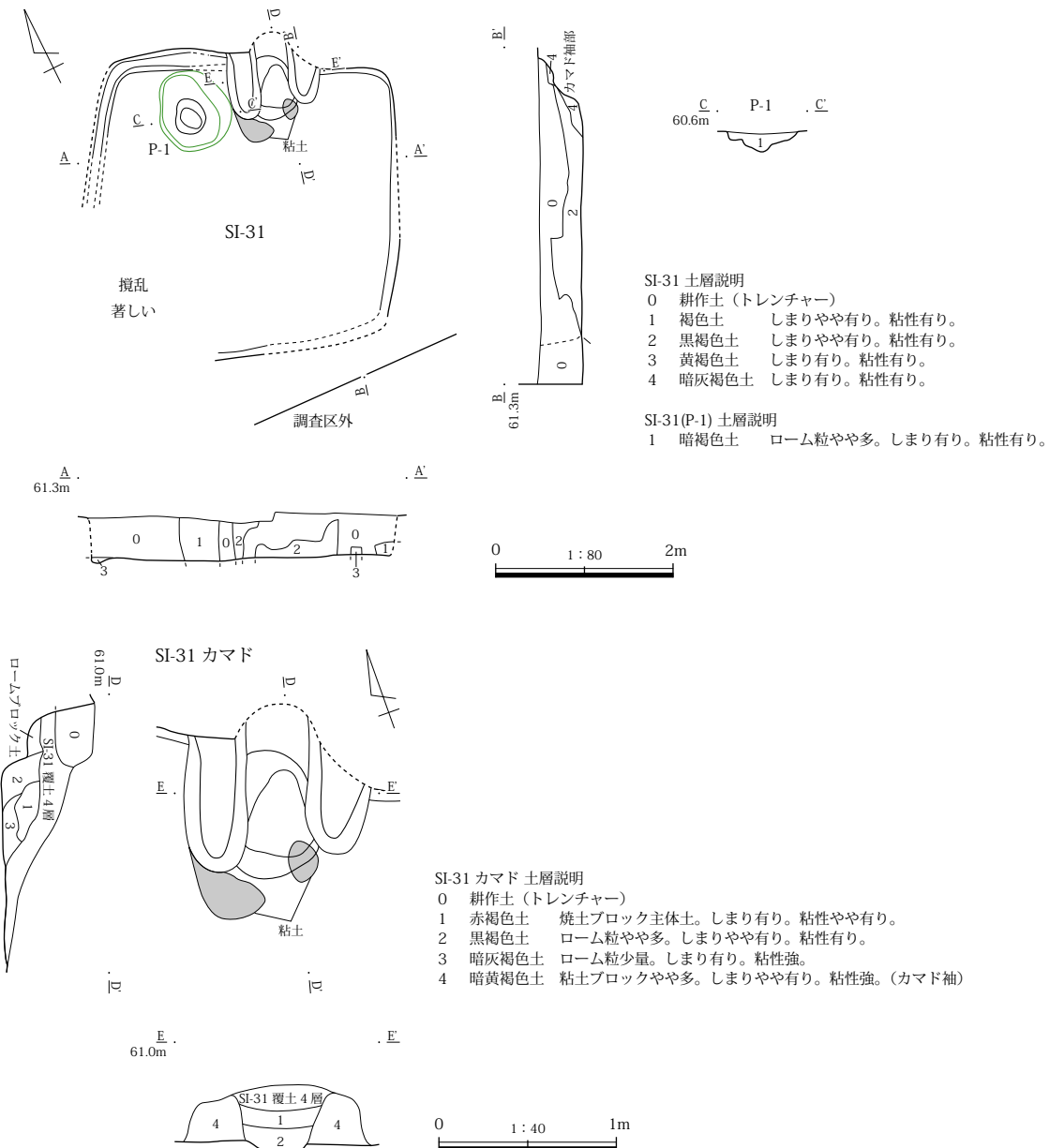
- 0 耕作土 (トレンチャー)
 1 a 黒褐色土 ローム粒多量。ロームブロック少量。しまり富む。(後世土)
 1 b 褐色土 ローム粒多量。焼土粒少量。しまり有り。粘性やや有り。(後世土)
 1 c 暗褐色土 ローム粒多量。焼土粒微量。しまり有り。粘性有り。(後世土)
 2 暗褐色土 ローム粒やや多。ロームブロック少量。焼土粒少量。しまり富む。(後世土)
 3 黒褐色土 ローム粒微量。焼土粒微量。しまり有り。粘性強。
 4 暗褐色土 ローム粒多量。焼土粒少量。粘土粒少量。しまり富む。粘性強。
 5 黒褐色土 ローム粒微量。焼土粒微量。しまりやや有り。粘性強。(周溝)
 6 黄褐色土 ローム粒多量。鹿沼バミス (Ag-kp) 粒少量。しまり富む。粘性強。(柱穴埋土)



西区 SI-29 遺物出土状況 (南から)

第 34 図 西区 SI-29 実測図

Ⅲ. 調査成果



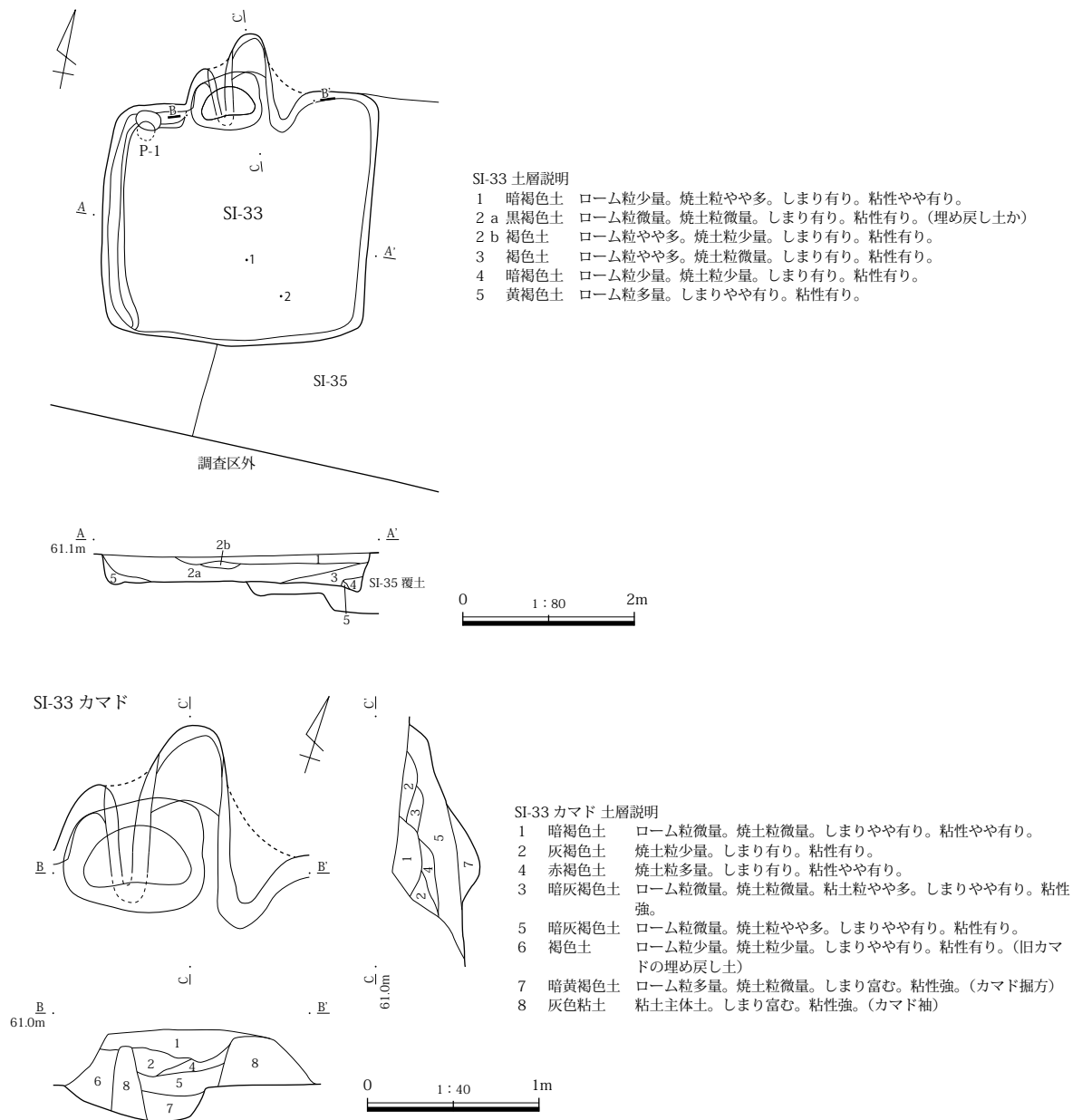
第35図 西区S1-31実測図



西区 S I - 3 1 遺物出土状況（南西から）



西区 S1-31 カマド土層堆積状況（南西から）



第 36 図 西区 S I - 3 3 実測図

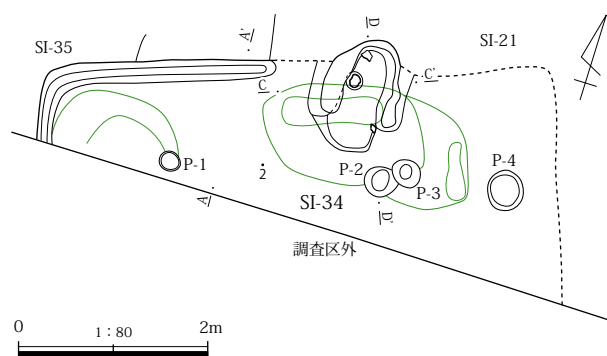


西区 S I - 3 3 土層堆積状況 (南から)



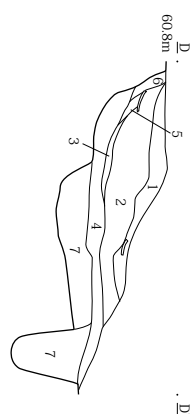
西区 S I - 3 3 カマド完掘 (南から)

Ⅲ. 調査成果

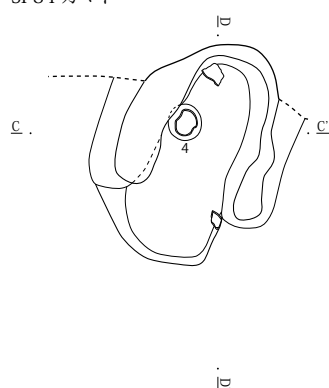


SI-34 土層説明

- | | |
|---------|---------------------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒少量。炭化物微量。しまり有り。粘性有り。 |
| 2 褐色土 | ローム粒やや少。炭化物微量。しまり有り。粘性有り。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒少量。しまり有り。粘性有り。(周溝) |
| 4 暗黄褐色土 | ローム粒多量。しまり富む。粘性有り。 |

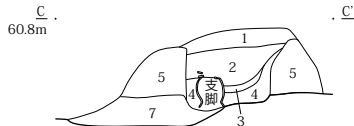


SI-34 カマド



SI-34 カマド 土層説明

- | | |
|--------|-------------------------------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒少量。焼土粒少量。粘土粒やや多。しまりやや有り。粘性ややあり。 |
| 2 灰褐色土 | 焼土粒多量。粘土粒多量。しまり有り。粘性強。 |
| 3 灰色土 | 粘土ブロック主体土。しまり有り。粘性強。 |
| 4 黒色土 | 焼土粒微量。しまりやや有り。粘性強。 |
| 5 灰色粘土 | 焼土粒多量。粘土ブロック主体土。しまり富む。粘性強。(カマド袖) |
| 6 赤褐色土 | 焼土ブロック主体土。しまり富む。粘性なし。 |
| 7 黒褐色土 | ローム粒やや多。焼土・粘土粒とも上面に目立つ。しまり富む。粘性強。 |



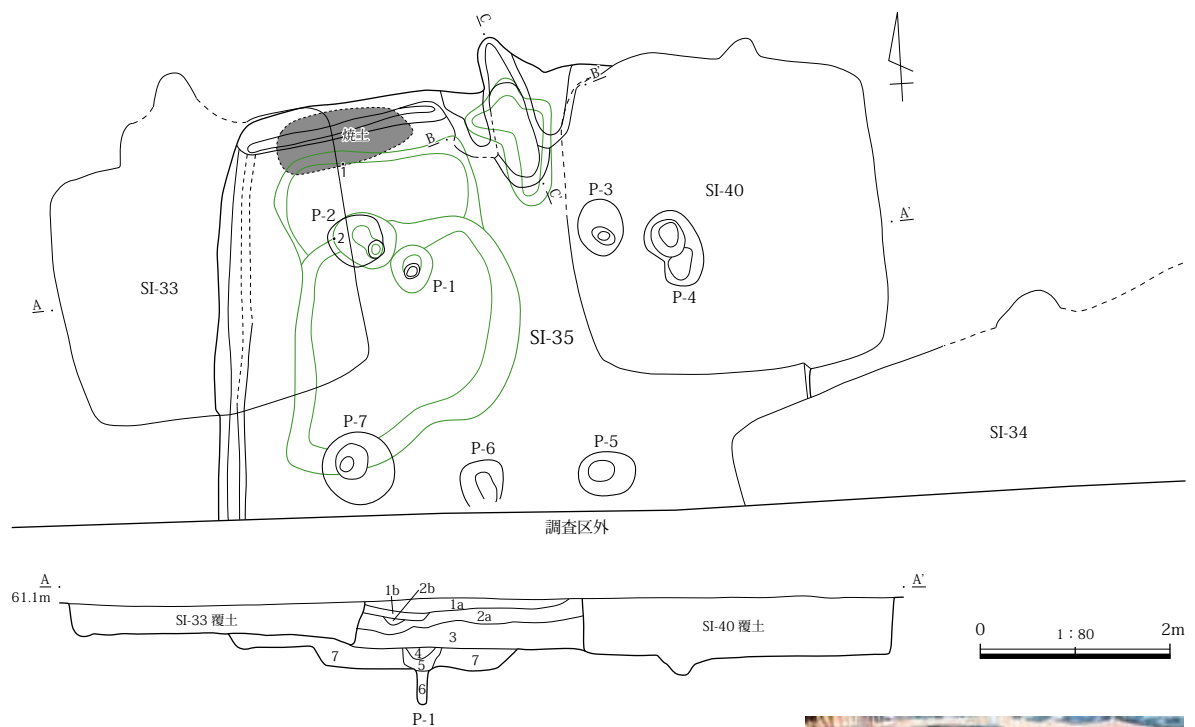
第 37 図 西区 S I - 3 4 実測図



西区 S I - 3 4 土層堆積状況 (東から)



西区 S I - 3 4 カマド遺物出土状況 (南から)

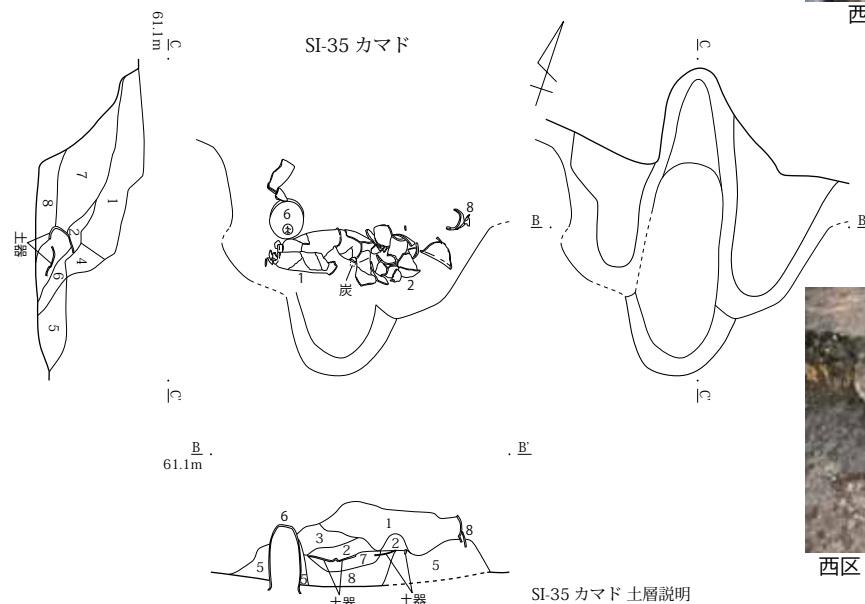


SI-35 土層説明

- | | |
|-----------|--------------------------------------|
| 1 a 暗褐色土 | ローム粒少量。焼土粒微量。しまり有り。粘性有り。(埋め戻し土か) |
| 1 b 暗黄褐色土 | ローム粒多量。焼土粒微量。しまり有り。粘性有り。(埋め戻し土か) |
| 2 a 黒褐色土 | ローム粒やや多。焼土粒少量。しまり有り。粘性有り。(埋め戻し土か) |
| 2 b 黄褐色土 | ローム粒多量。焼土粒微量。しまり有り。粘性有り。(埋め戻し土か) |
| 3 暗褐色土 | ローム粒微量。焼土粒微量。しまり富む。粘性強。 |
| 4 暗赤褐色土 | ローム粒微量。焼土ブロック多量。しまりやや有り。粘性強。(P-1 覆土) |
| 5 黄褐色土 | ロームブロック多量。しまり富む。粘性強。(P-1 覆土) |
| 6 暗褐色土 | ローム粒少量。しまりやや有り。粘性有り。(P-1 覆土) |
| 7 暗黄褐色土 | ローム粒少量。焼土粒微量。しまり富む。粘性有り。(床下) |



西区 SI-35 完掘 (西から)



SI-35 カマド 土層説明

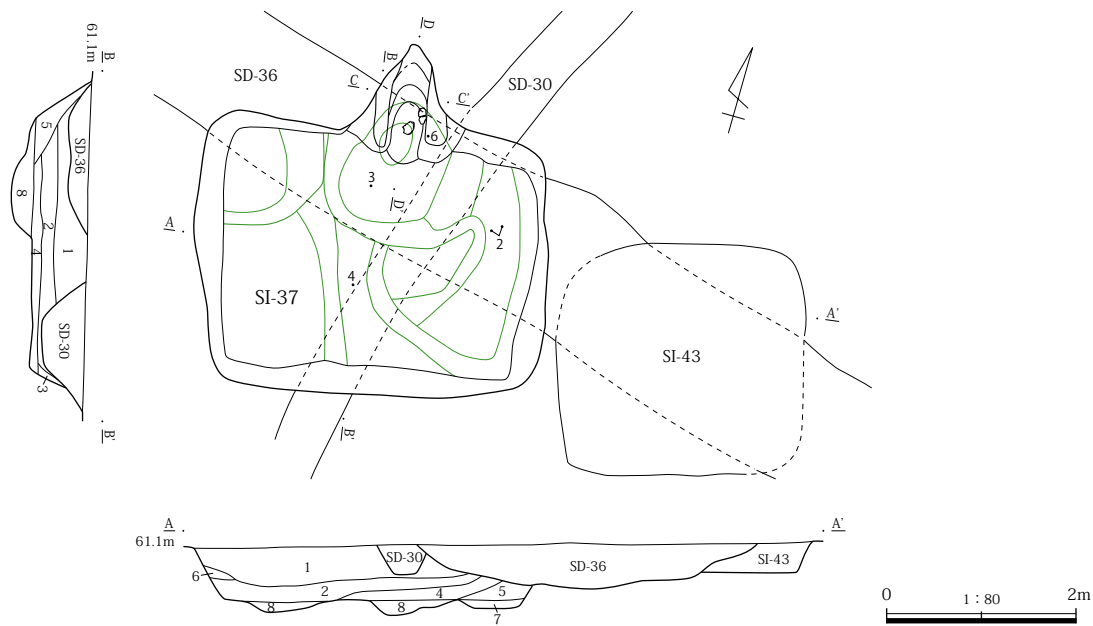
- | | |
|----------|------------------------------|
| 1 暗灰褐色土 | ローム粒少量。焼土粒少量。しまりやや有り。粘性やや有り。 |
| 2 灰褐色土 | 粘土ブロック多量。焼土粒少量。しまり有り。粘性有り。 |
| 3 暗赤灰褐色土 | 焼土粒やや多。しまりやや有り。粘性有り。 |
| 4 暗灰褐色土 | ローム粒少量。焼土粒少量。しまり有り。粘性有り。 |
| 5 灰褐色土 | 粘土ブロック主体土。焼土粒多量。しまり富む。粘性強。 |
| 6 黒褐色土 | ローム粒多量。焼土粒少量。しまりやや有り。粘性強。 |
| 7 暗灰褐色土 | 粘土ブロックやや多。焼土粒少量。しまり有り。粘性強。 |
| 8 黒灰褐色土 | 粘土ブロック少量。焼土粒やや多。しまりやや有り。粘性強。 |



西区 SI-35 カマド 完掘 (南から)

第38図 西区 SI-35 実測図

Ⅲ. 調査成果

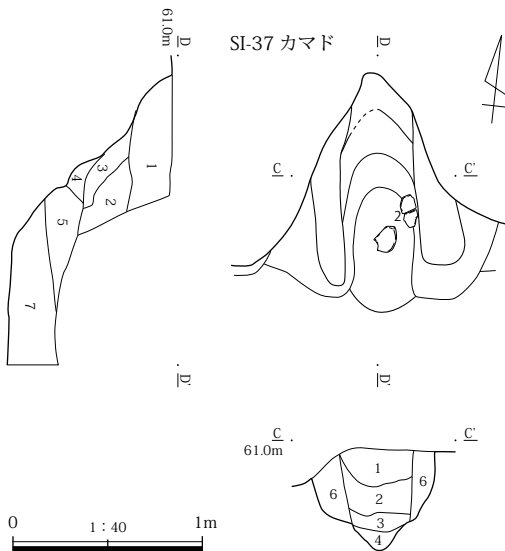


SI-37 土層説明

- | | |
|---------|---------------------------------|
| 1 褐色土 | ローム粒やや多。しまり有り。粘性有り。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒少量。しまり有り。粘性有り。 |
| 3 暗黄褐色土 | ローム粒多量。しまり有り。粘性有り。 |
| 4 暗灰褐色土 | ローム粒やや多。粘土粒やや多。焼土粒少量。しまり富む。粘性強。 |
| 5 暗褐色土 | ローム粒少量。粘土粒少量。炭化物少量。しまり富む。粘性有り。 |
| 6 褐色土 | ローム粒やや多。しまり有り。粘性有り。 |
| 7 黒褐色土 | ローム粒やや多。しまり富む。粘性強。(床下貼床) |
| 8 黄褐色土 | ロームブロック主体土。しまり富む。粘性強。(貼床) |



西区 S I - 3 7 完掘 (南東から)



SI-37 カマド 土層説明

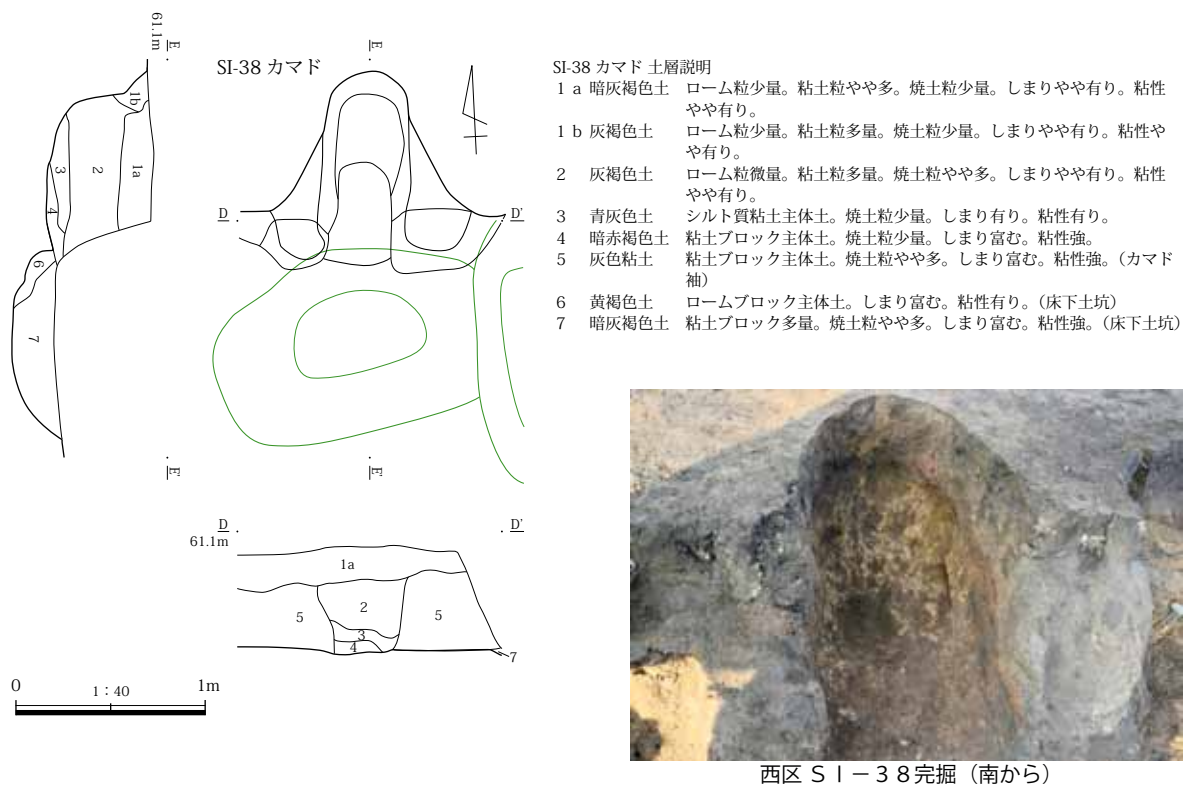
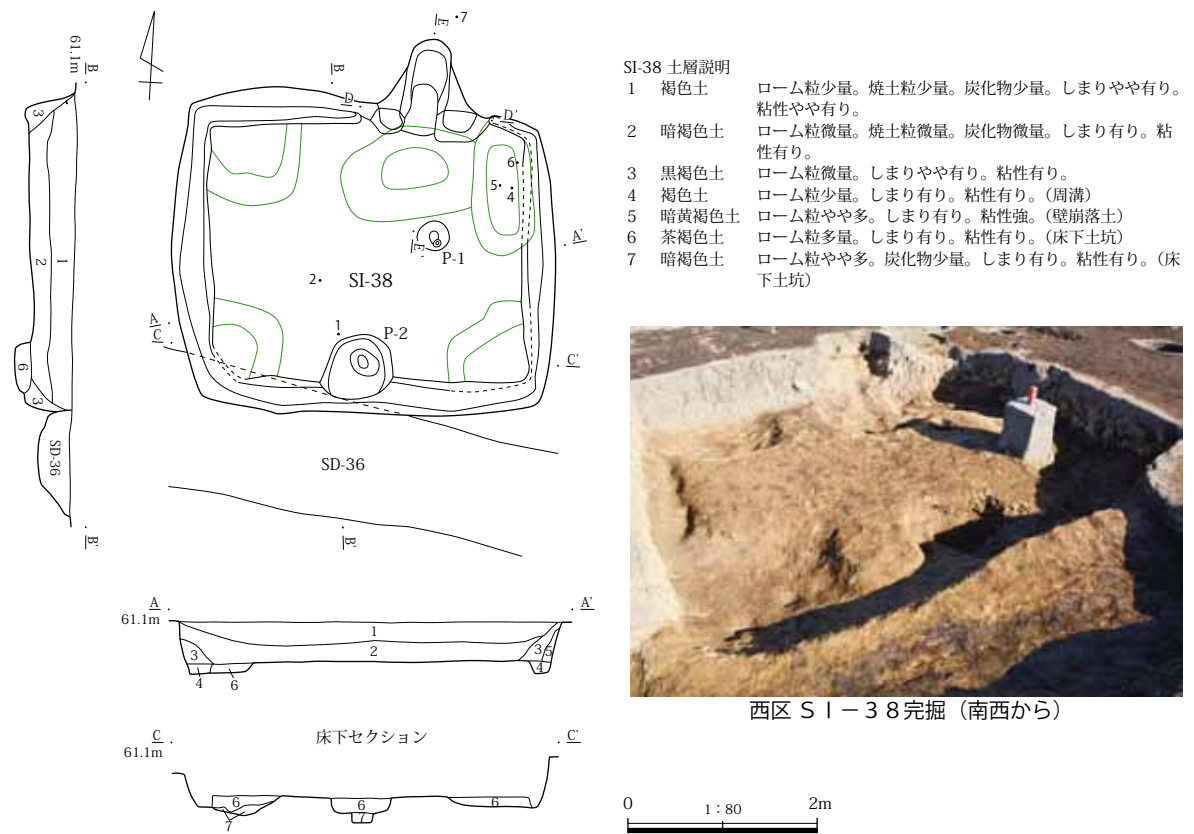
- | | |
|---------|-------------------------------------|
| 1 灰褐色土 | 粘土粒多量。焼土粒やや多。しまりやや有り。粘性有り。 |
| 2 暗灰褐色土 | 粘土粒中量。焼土粒多量。しまりやや有り。粘性やや有り。 |
| 3 灰色粘土 | 粘土ブロック多量。焼土粒多量。しまり富む。粘性強。 |
| 4 灰色シルト | 粘土粒主体土。しまり有り。粘性有り。(カマド掘方) |
| 5 灰褐色土 | 粘土粒多量。焼土粒やや多。しまりやや有り。粘性有り。 |
| 6 灰色粘土 | 粘土ブロック主体土。焼土ブロック多量。しまり富む。粘性強。(カマド袖) |
| 7 暗褐色土 | ローム粒多量。しまり有り。粘性強。しまり有り。(貼床) |



西区 S I - 3 7 カマド完掘 (南から)

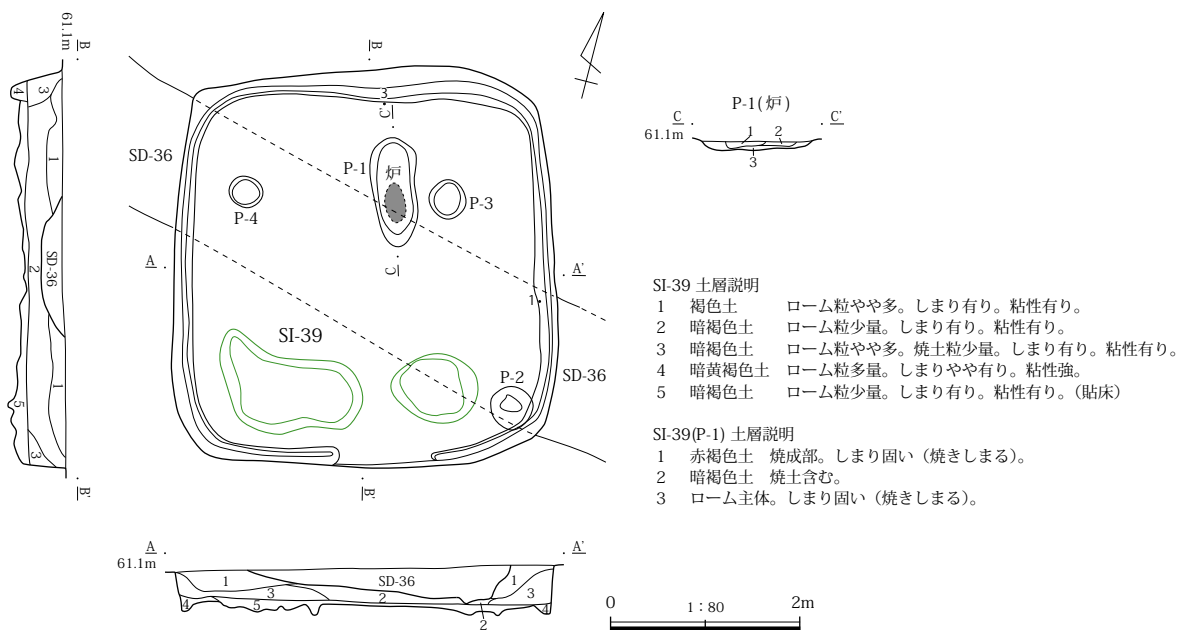
第 39 図 西区 S I - 3 7 実測図

2. 遺構

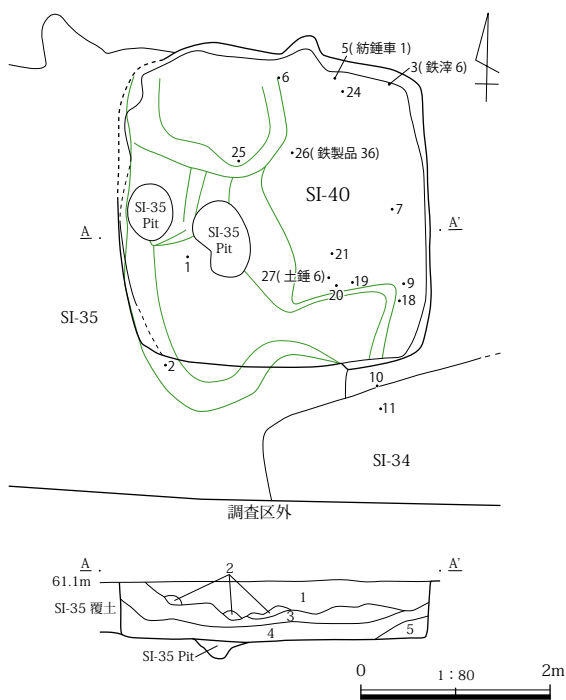


第 40 図 西区 S I - 3 8 実測図

Ⅲ. 調査成果



第41図 西区SI-39実測図

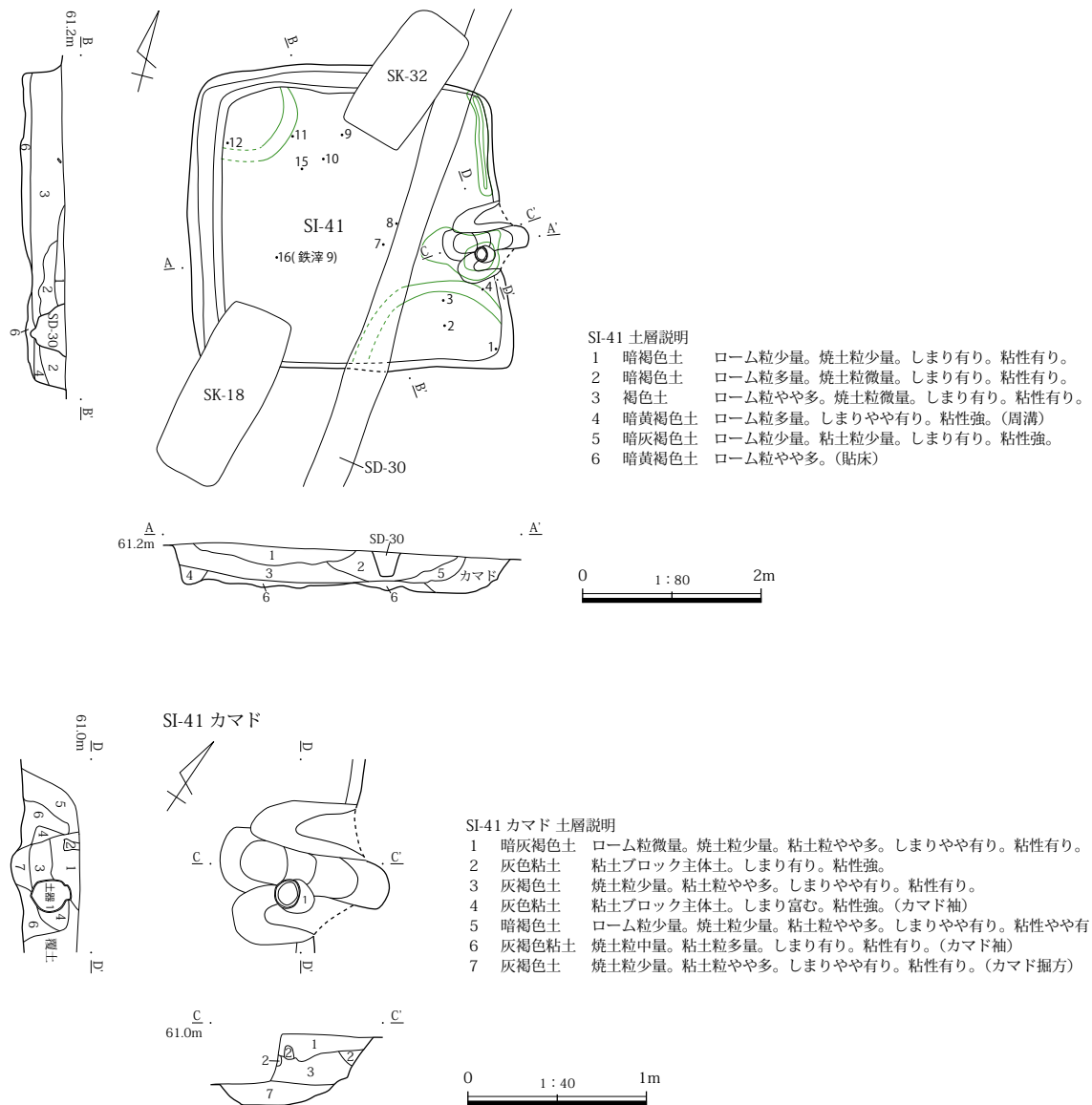


西区SI-39遺物出土状況(東から)



西区SI-40完掘(西から)

第42図 西区SI-40実測図



第43図 西区 S I - 4 1 実測図

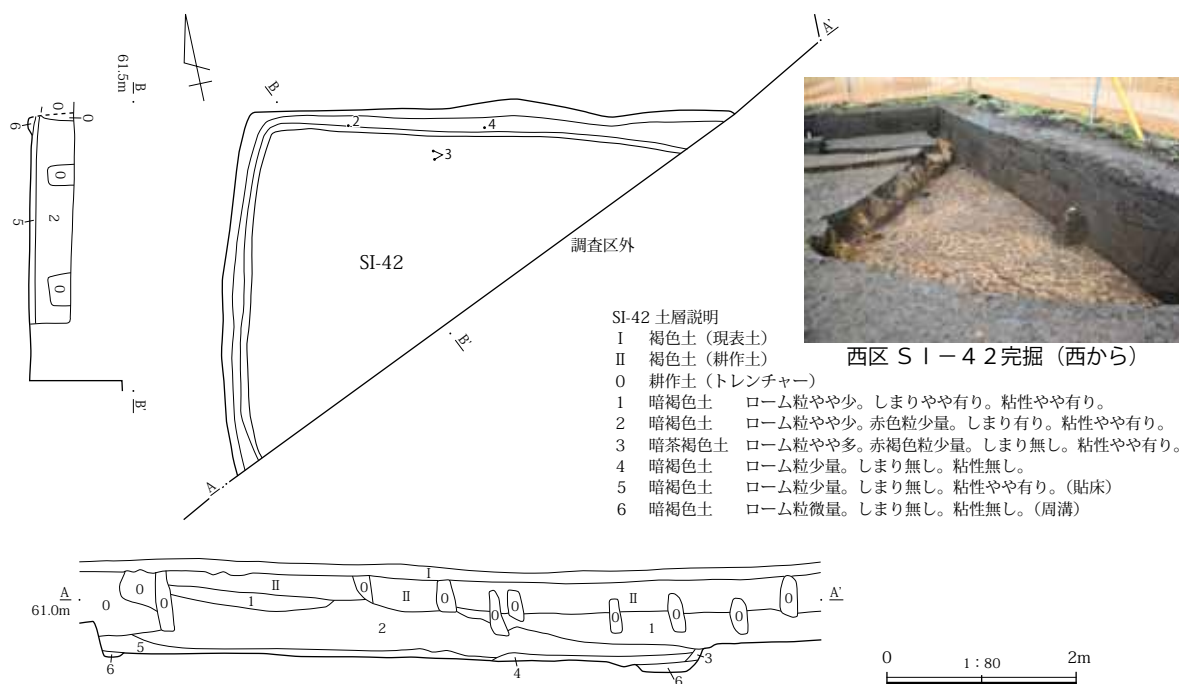


西区 S I - 4 1 完掘 (北東から)

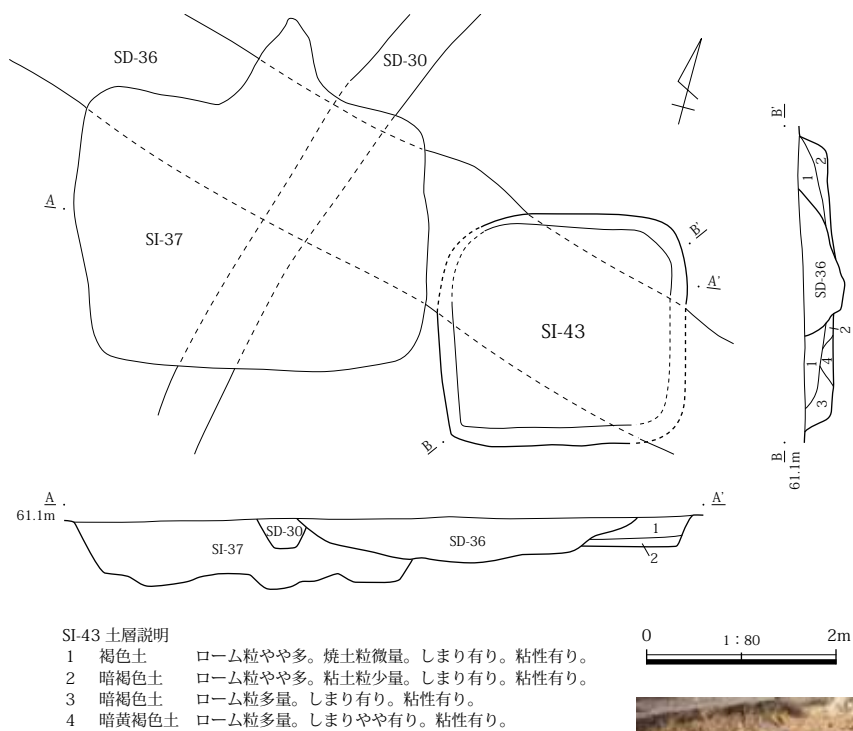


西区 S I - 4 1 カマド遺物出土状況 (西から)

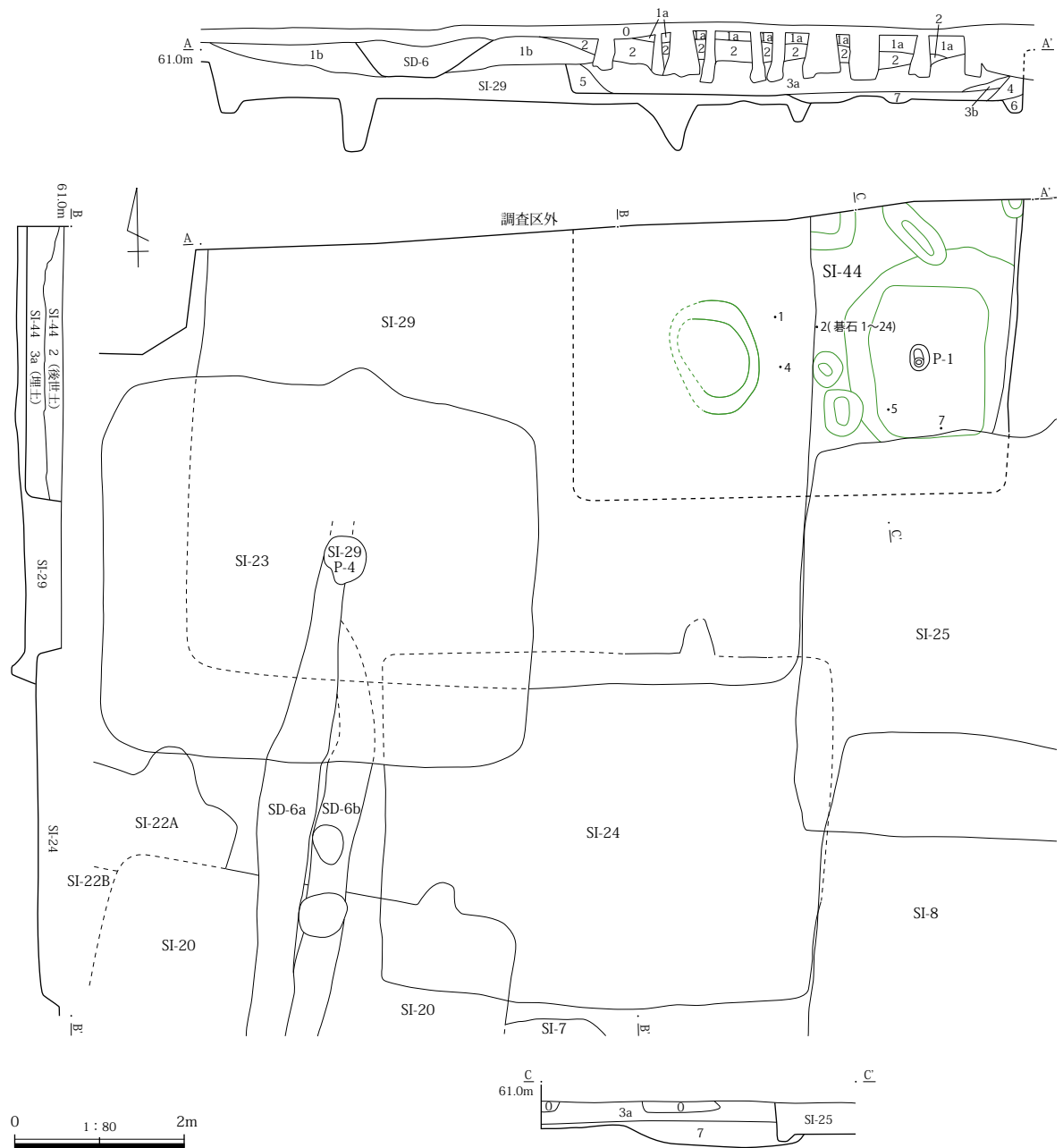
Ⅲ. 調査成果



第 44 図 西区 S I - 4 2 実測図



第 45 図 西区 S I - 4 3 実測図



SI-44 土層説明

0 耕作土 (トレンチャー)

1 a 黒褐色土 ローム粒多量。ロームブロック少量。しまり富む。(後世土)

1 b 褐色土 ローム粒多量。焼土粒少量。しまり有り。粘性やや有り。(後世土)

2 暗褐色土 ローム粒やや多。ロームブロック少量。焼土粒少量。しまり富む。(後世土)

3 a 黒褐色土 ローム粒少量。焼土粒やや多。しまり有り。粘性有り。

3 b 黄褐色土 ローム粒少量。焼土粒やや多。粘土粒少量。しまり有り。粘性有り。

4 黄褐色土 ローム粒やや多。焼土粒微量。しまり有り。粘性有り。

5 褐色土 ローム粒少量。焼土粒少量。しまり有り。粘性有り。

6 暗黄褐色土 ローム粒多量。しまり有り。粘性強。

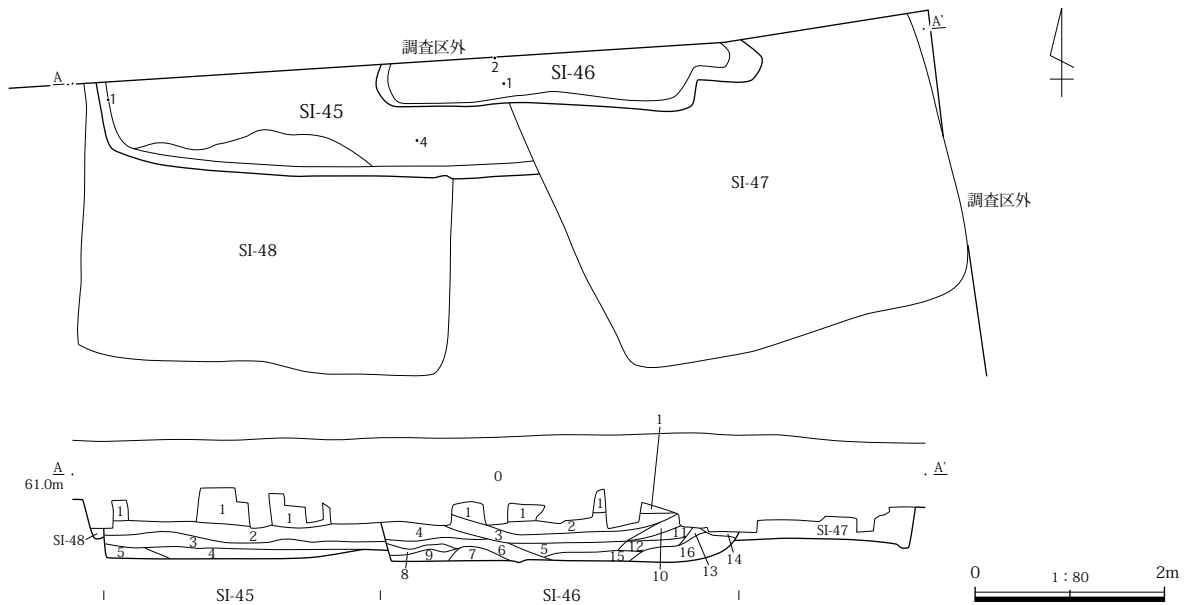
7 暗赤褐色土 ローム粒多量。焼土粒少量。粘土粒やや少。しまり富む。粘性強。(床下土坑)

第 46 図 西区 SI-44 実測図



西区 SI-44 完掘 (北西から)

Ⅲ. 調査成果



SI-45 土層説明

- | | | |
|---|------|---|
| 0 | 耕作土 | |
| 1 | 暗褐色土 | ローム粒少量。焼土粒少量。しまり無し。粘性無し。 |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒やや多。ロームブロック微量。焼土粒微量。粘土粒微量。しまり無し。粘性無し。 |
| 3 | 褐色土 | ローム粒少量。ロームブロック少量。粘土粒少量。しまり無し。粘性無し。 |
| 4 | 褐色土 | ローム粒やや多。ロームブロック少量。焼土粒少量。しまり有り。粘性無し。 |
| 5 | 暗褐色土 | ローム粒多量。ロームブロックやや多。焼土粒少量。しまり有り。粘性有り。 |

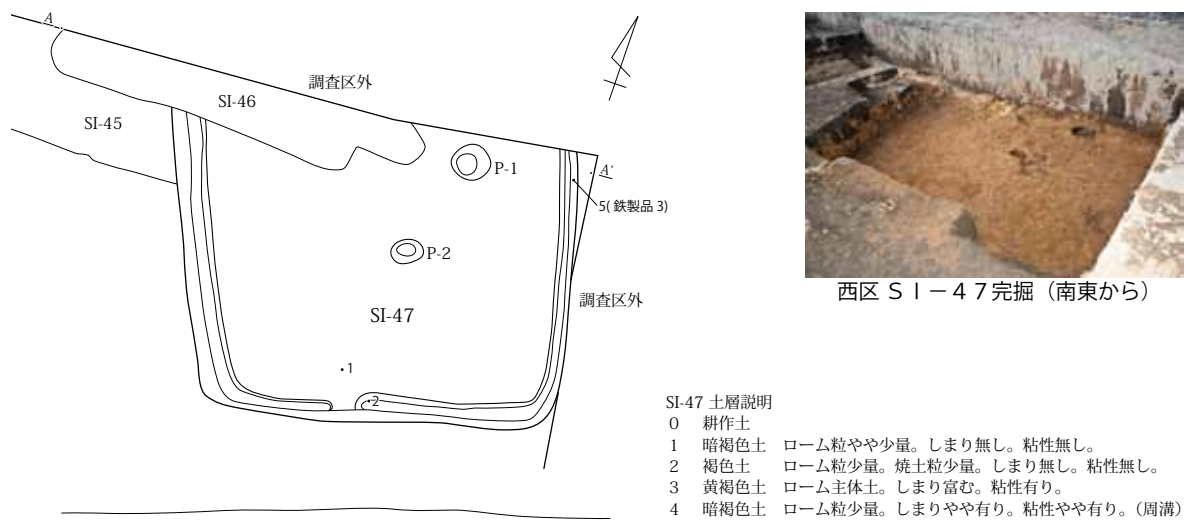
SI-46 土層説明

- | | | |
|----|-------|--|
| 0 | 耕作土 | |
| 1 | 暗褐色土 | ローム粒少量。焼土粒少量。しまり無し。粘性無し。 |
| 2 | 暗褐色土 | ローム粒やや少。焼土粒微量。しまり無し。粘性無し。 |
| 3 | 暗褐色土 | ローム粒やや多。焼土粒微量。しまり無し。粘性無し。 |
| 4 | 暗褐色土 | ローム粒少量。焼土粒微量。粘土粒微量。しまり無し。粘性無し。 |
| 5 | 暗褐色土 | ローム粒やや少。ローム粒微量。焼土粒少量。粘土粒少量。しまり無し。粘性無し。 |
| 6 | 暗褐色土 | ローム粒少量。焼土粒少量。粘土粒やや多。しまり有り。粘性有り。 |
| 7 | 褐色土 | ローム粒少量。ロームブロック少量。焼土粒微量。粘土粒少量。しまり有り。粘性有り。 |
| 8 | 暗褐色土 | ローム粒やや少。焼土粒微量。粘土粒少量。しまり有り。粘性有り。 |
| 9 | 暗褐色土 | ローム粒少量。ロームブロックやや少。しまり有り。粘性有り。 |
| 10 | 褐色土 | ローム粒少量。しまり無し。粘性無し。(カマド) |
| 11 | 暗赤褐色土 | ローム粒少量。焼土粒多量。しまり有り。粘性無し。(カマド埋土) |
| 12 | 暗赤褐色土 | ローム粒少量。焼土粒やや多。粘土粒少量。しまり有り。粘性無し。(カマド埋土) |
| 13 | 赤褐色土 | 粘土粒多量。しまり有り。粘性有り。(カマド埋土) |
| 14 | 褐色土 | ローム粒微量。焼土粒微量。粘土粒多量。しまり有り。粘性有り。(カマド埋土) |
| 15 | 黄褐色土 | ローム粒少量。ロームブロック少量。焼土粒少量。しまり有り。粘性無し。(床下) |
| 16 | 褐色土 | ローム粒多量。ロームブロック多量。しまり有り。粘性有り。(カマド掘込) |

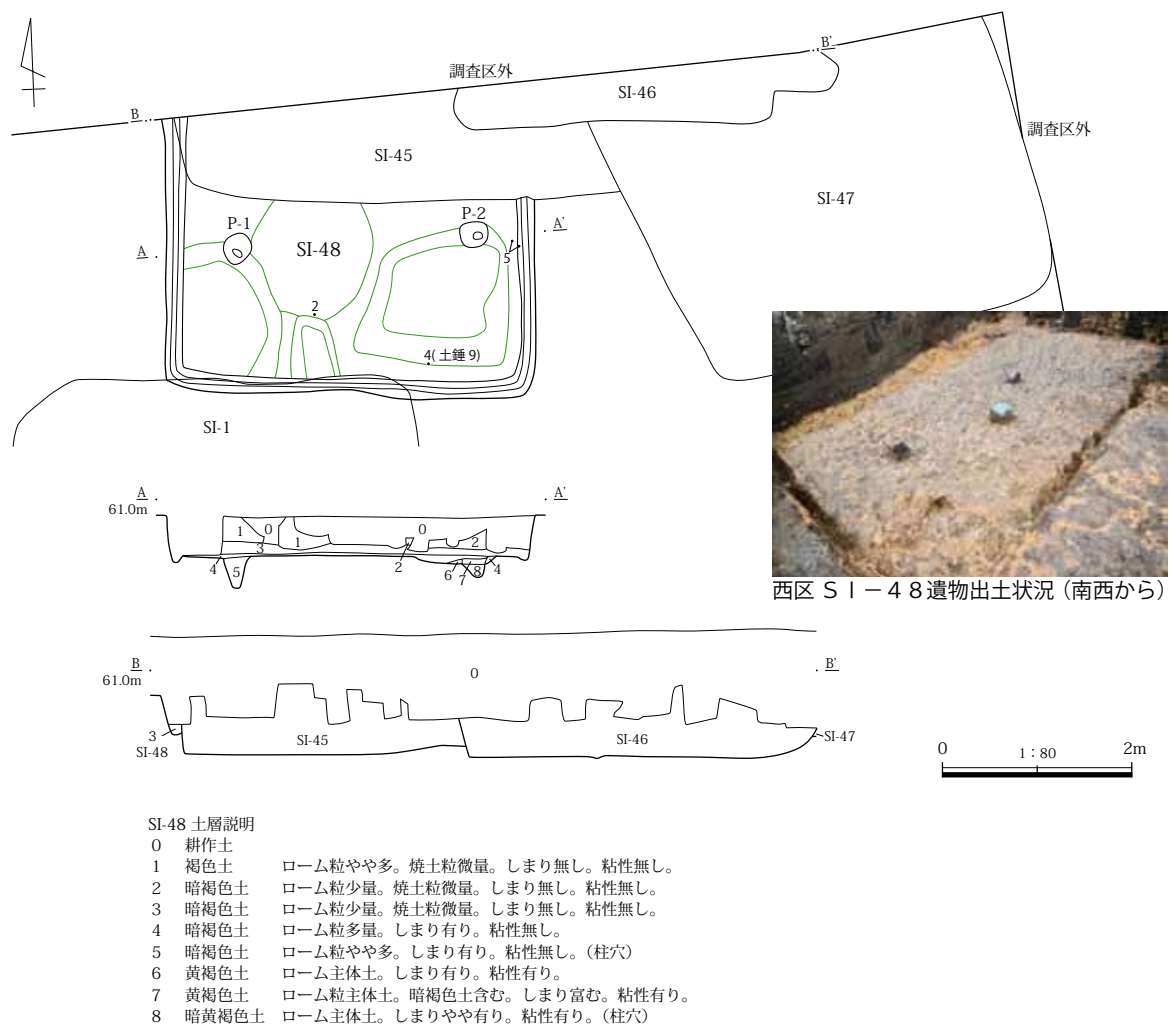
第 47 図 西区 S I - 4 5 ・ 4 6 実測図



西区 S I - 4 5 ・ 4 6 遺物出土状況 (南東から)

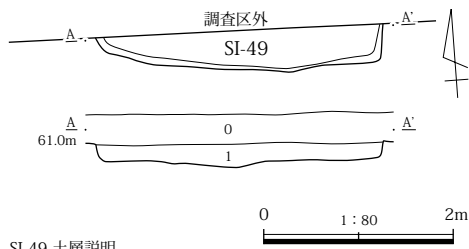


第 48 図 西区 S I - 4 7 実測図



第 49 図 西区 S I - 4 8 実測図

Ⅲ. 調査成果



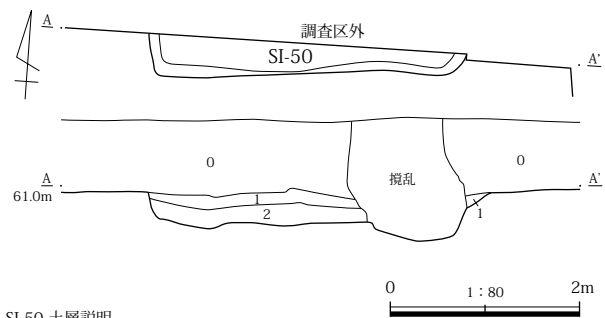
SI-49 土層説明

- 0 暗褐色土 (耕作土)
1 褐色土 ローム粒やや多。焼土粒微量。しまりやや有り。
粘性有り。

第 50 図 西区 S I - 4 9 実測図



西区 S I - 4 9 完掘 (南東から)



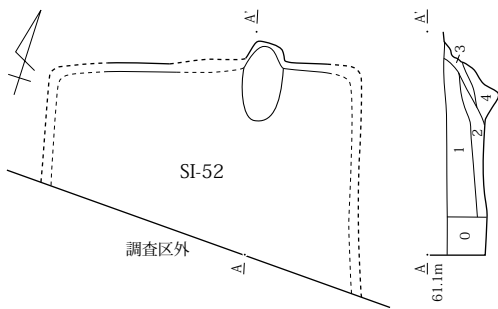
SI-50 土層説明

- 0 耕作土
1 褐色土 ローム粒やや多。焼土粒微量。しまり有り。粘性有り。
2 暗褐色土 ローム粒少量。焼土粒少量。炭化物微量。しまりやや有り。粘性有り。

第 51 図 西区 S I - 5 0 実測図



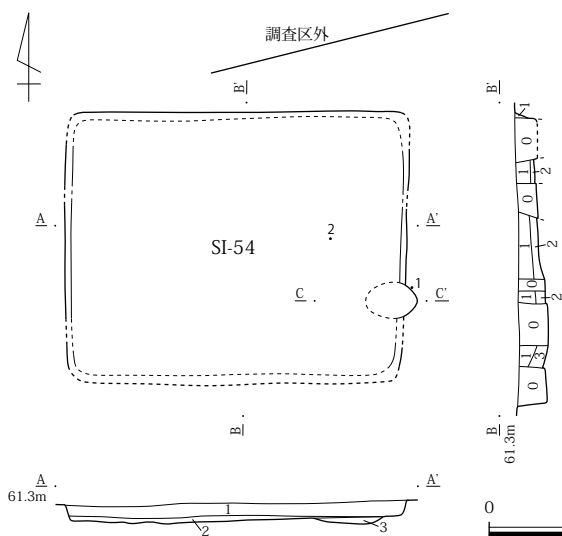
西区 S I - 5 2 確認 (西から)



SI-52 土層説明

- 0 耕作土 (トレンチャー)
1 暗褐色土 ローム粒少量。しまりやや有り。粘性有り。
2 黒褐色土 ローム粒微量。しまりやや有り。粘性有り。
3 暗褐色土 ローム粒やや多。しまりやや有り。粘性有り。
4 暗灰褐色土 粘土ブロック主体土。焼土ブロック・焼土粒やや多。しまりやや有り。
粘性強。(カマド廃棄に伴う埋土)

第 52 図 西区 S I - 5 2 実測図



カマド

SI-54 土層説明

- 0 耕作土 (トレンチャー)
1 暗褐色土 ローム粒少量。しまりやや有り。粘性有り。
2 褐色土 ローム粒多量。しまり有り。粘性強。(貼床)
3 暗灰褐色土 ローム粒やや多。粘土粒多量。焼土粒やや多。しまり有り。
粘性強。(貼床)

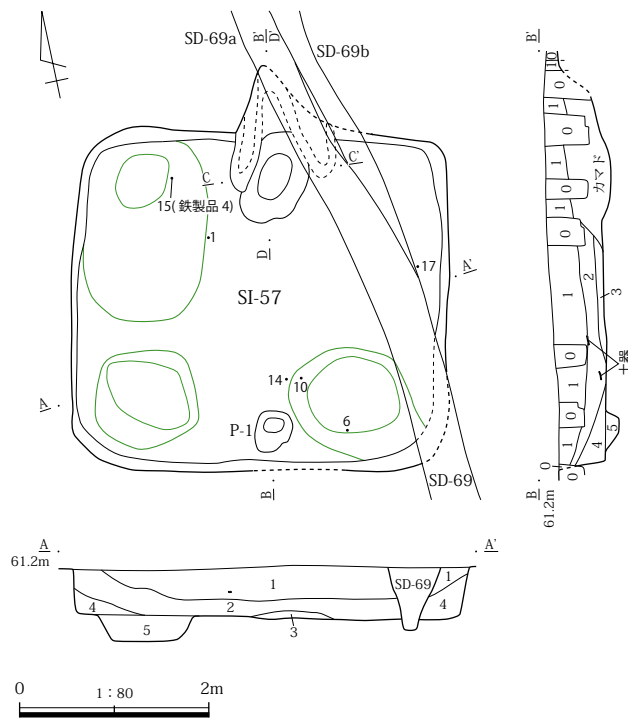
SI-54 カマド 土層説明

- 4 暗赤褐色土 焼土粒多量。粘土粒少量。しまりやや有り。粘性やや有り。
5 灰黄褐色土 ローム粒多量。粘土粒やや多。しまり有り。粘性有り。

第 53 図 東区 S I - 5 4 実測図



東区 S I - 5 4 土層堆積状況 (南から)

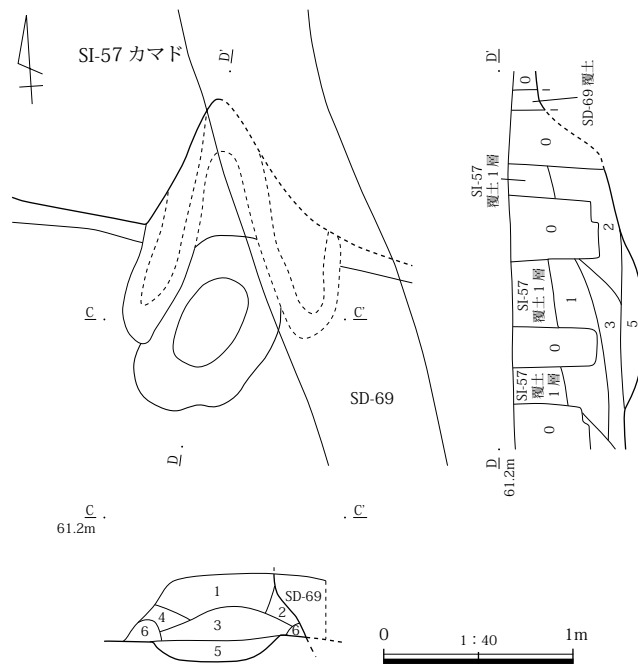


SI-57 土層説明

- 0 耕作土 (トレンチャー)
- 1 暗褐色土 ローム粒少量。焼土粒少量。しまり有り。粘性やや有り。
- 2 褐色土 ローム粒やや多。焼土粒少量。しまり有り。粘性やや有り。
- 3 黒褐色土 ローム粒少。炭化物やや多。しまり有り。粘性やや有り。
- 4 黒褐色土 ローム粒少量。炭化物少量。しまり有り。粘性やや有り。
- 5 暗褐色土 ローム粒少量。しまりやや有り。粘性有り。(床下土坑)



東区 S I - 5 7 完掘 (南から)



SI-57 カマド 土層説明

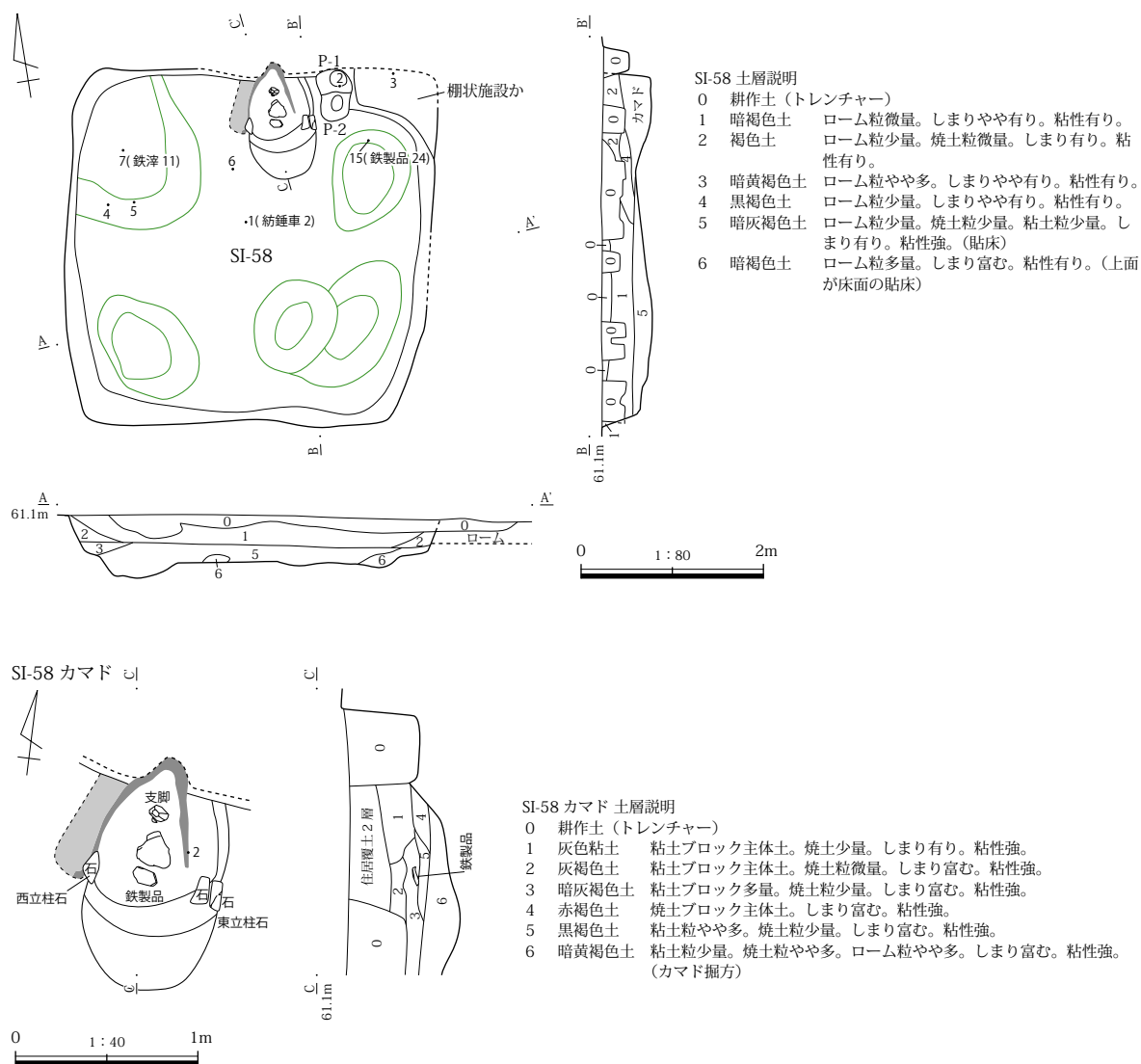
- 0 耕作土 (トレンチャー)
- 1 黄灰色粘土 粘土ブロック主体土。しまり富む。粘性強。(天井崩落)
- 2 暗黄褐色土 ローム粒多量。しまり有り。粘性有り。
- 3 黒色土 炭化物多量。しまりやや有り。粘性有り。
- 4 暗灰褐色土 粘土ブロックやや多。焼土粒少量。しまり有り。粘性強。
- 5 赤褐色土 ローム粒やや多。焼土粒多量。粘土粒少量。しまりやや有り。粘性有り。(カマド掘方)
- 6 灰色粘土 粘土ブロック主体土。しまり富む。粘性強。(カマド袖)



東区 S I - 5 7 カマド完掘 (南から)

第 54 図 東区 S I - 5 7 実測図

Ⅲ. 調査成果



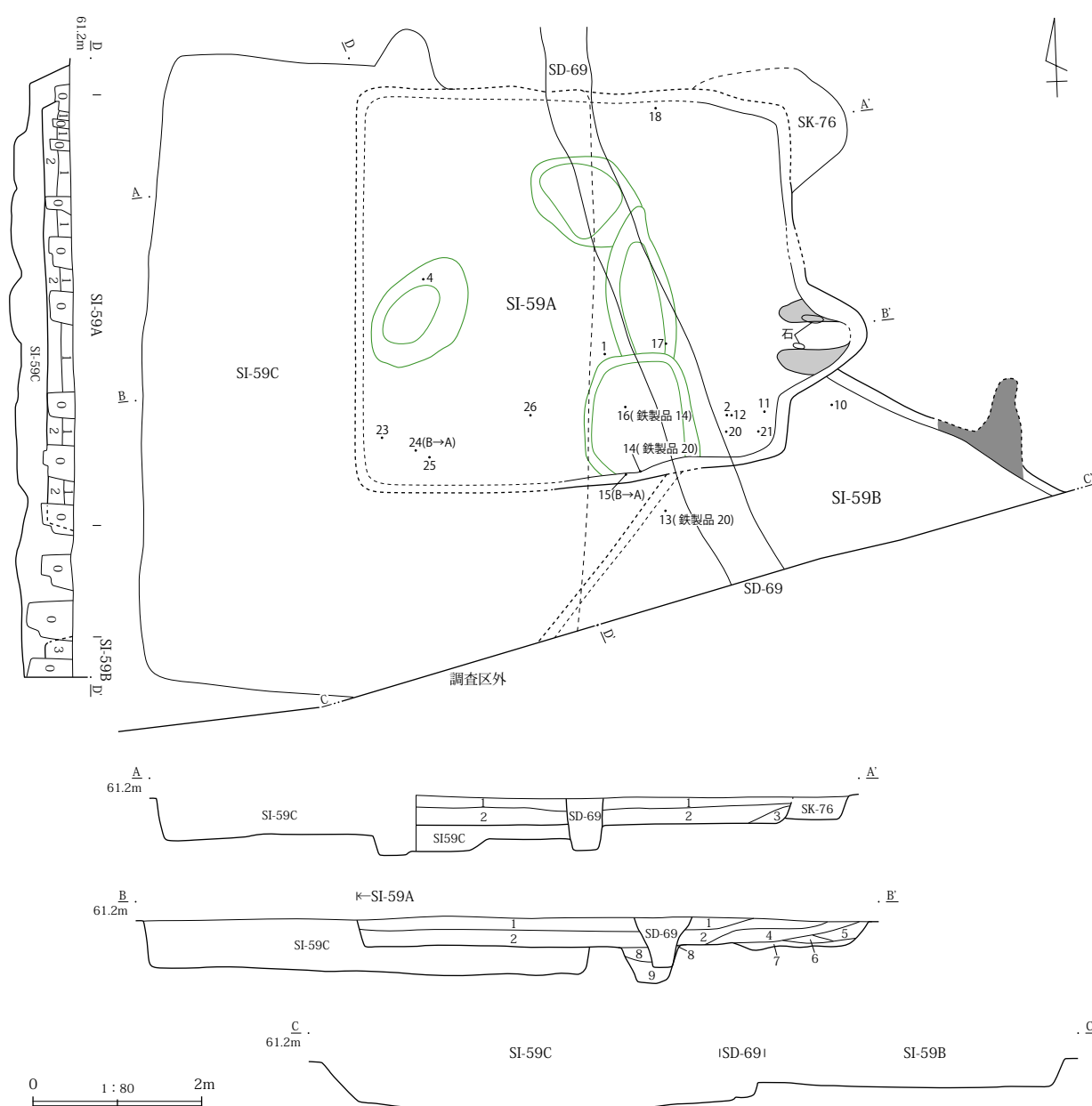
第 55 図 東区 S I - 5 8 実測図



東区 S I - 5 8 完掘 (南から)



東区 S I - 5 8 カマド 完掘 (南西から)



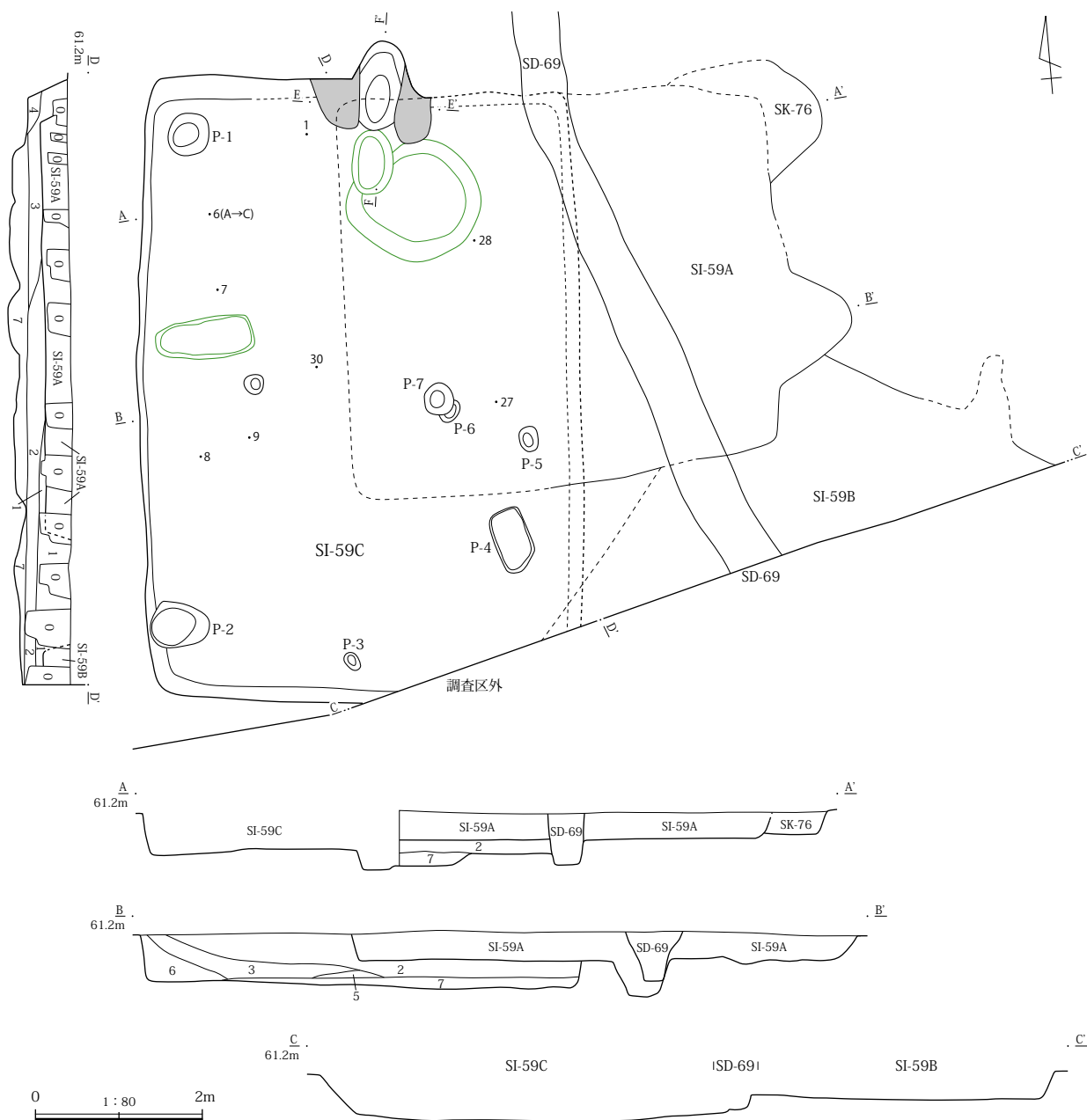
- | SI-59A・59B 土層説明 | |
|-----------------|---|
| 0 | 耕作土 (トレンチャー) |
| 1 | 暗褐色土 ローム粒少量。しまりやや有り。粘性有り。 |
| 2 | 褐色土 ローム粒微量。焼土粒微量。しまりやや有り。粘性有り。 |
| 3 | 暗褐色土 ローム粒少量。焼土粒微量。しまり有り。粘性有り。 |
| 4 | 暗灰褐色土 ローム粒微量。焼土粒中量。粘土粒少量。しまり富む。粘性強。(カマド) |
| 5 | 黒灰褐色土 ローム粒微量。焼土粒多量。粘性中量。しまり富む。粘性強。(カマド) |
| 6 | 灰色粘土 粘土ブロック主体土。しまり富む。粘性強。(カマド) |
| 7 | 灰黄褐色土 ローム粒多量。焼土粒少量。粘土粒少量。しまり富む。粘性強。(カマド) |
| 8 | 灰黄褐色土 ロームブロック主体土。粘土ブロック多量。しまり富む。粘性強。(床下土坑) |
| 9 | 黄褐色土 ロームブロック主体土。しまり富む。粘性強。(床下土坑) |



東区 S1-59A・59B・59C完掘（東から）

第56図 東区S1-59A・59B実測図

Ⅲ. 調査成果



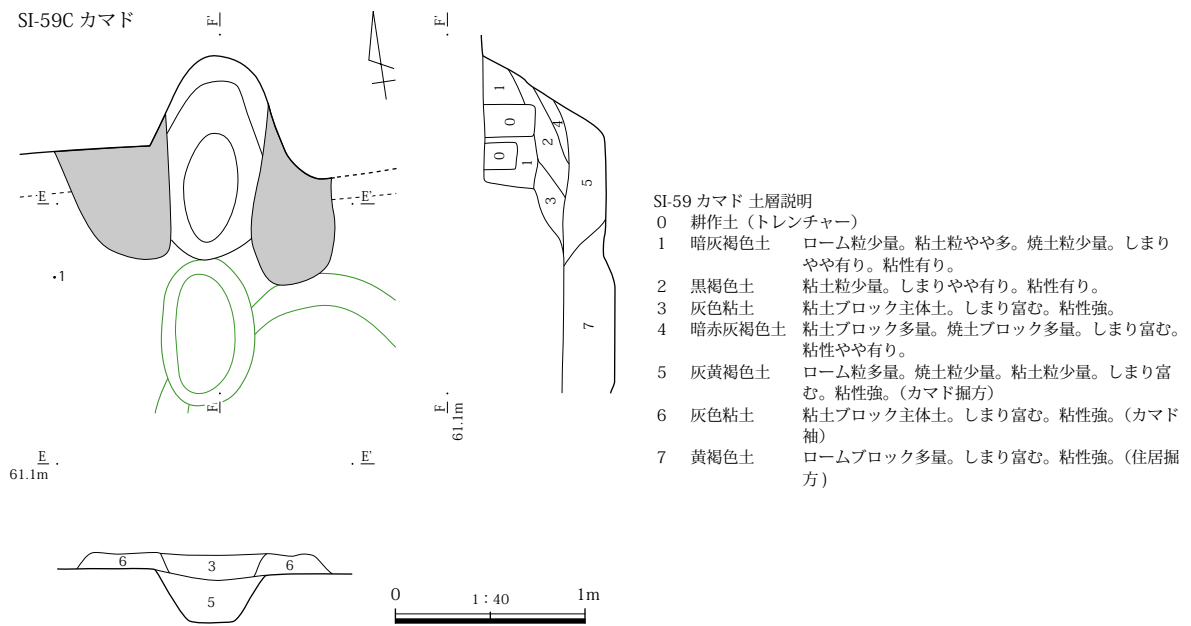
0 耕作土 (トレンチャー)

- | | | |
|---|--------------|----------------------------------|
| 0 | 耕作土 (トレンチャー) | |
| 1 | 暗黄褐色土 | ローム粒やや多。粘土粒少量。しまり富む。粘性強。 |
| 2 | 暗黄褐色土 | ローム粒多量。焼土粒やや多。しまり富む。粘性強。 |
| 3 | 暗褐色土 | ローム粒少量。焼土粒少量。しまりやや有り。粘性有り。 |
| 4 | 黒褐色土 | 粘土主体土。ローム粒微量。しまりやや有り。粘性有り。(カマド袖) |
| 5 | 暗灰褐色土 | 粘土粒少量。焼土粒少量。粘土粒少量。しまり富む。
粘性強。 |
| 6 | 黒褐色土 | ローム粒微量。しまりやや有り。粘性有り。 |
| 7 | 暗褐色土 | ロームブロック多量。しまり富む。粘性強。(貼床) |

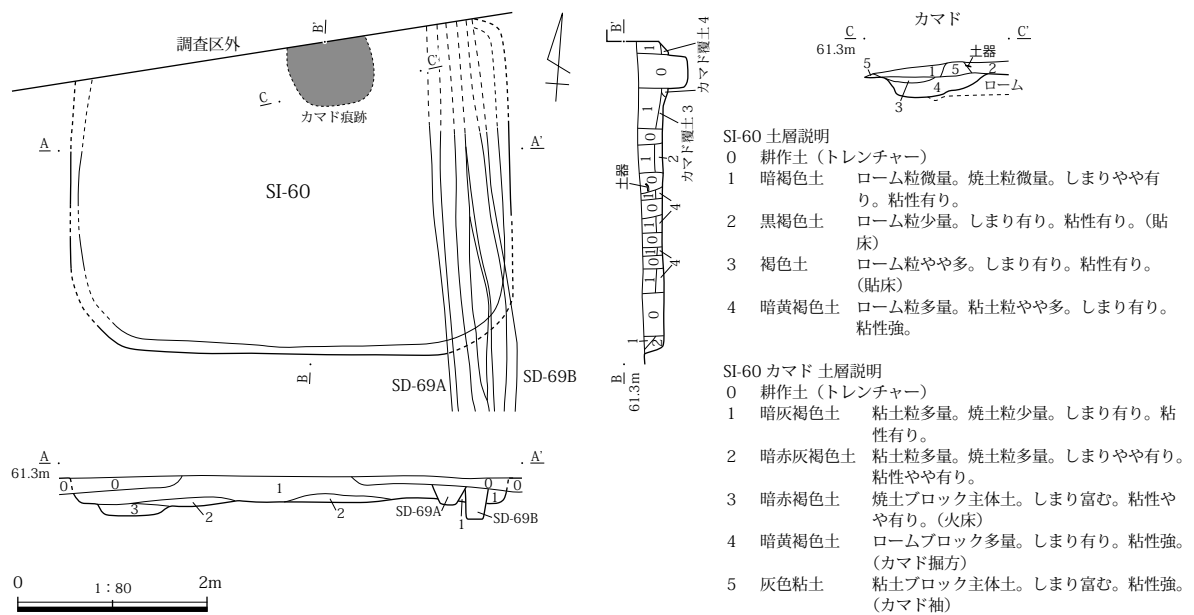


東区 S1-59A・59B・59C完掘（西から）

第57図 東区S1-59C実測図



第58図 東区 S I - 5 9 Cカマド実測図



第59図 東区 S I - 6 0 実測図

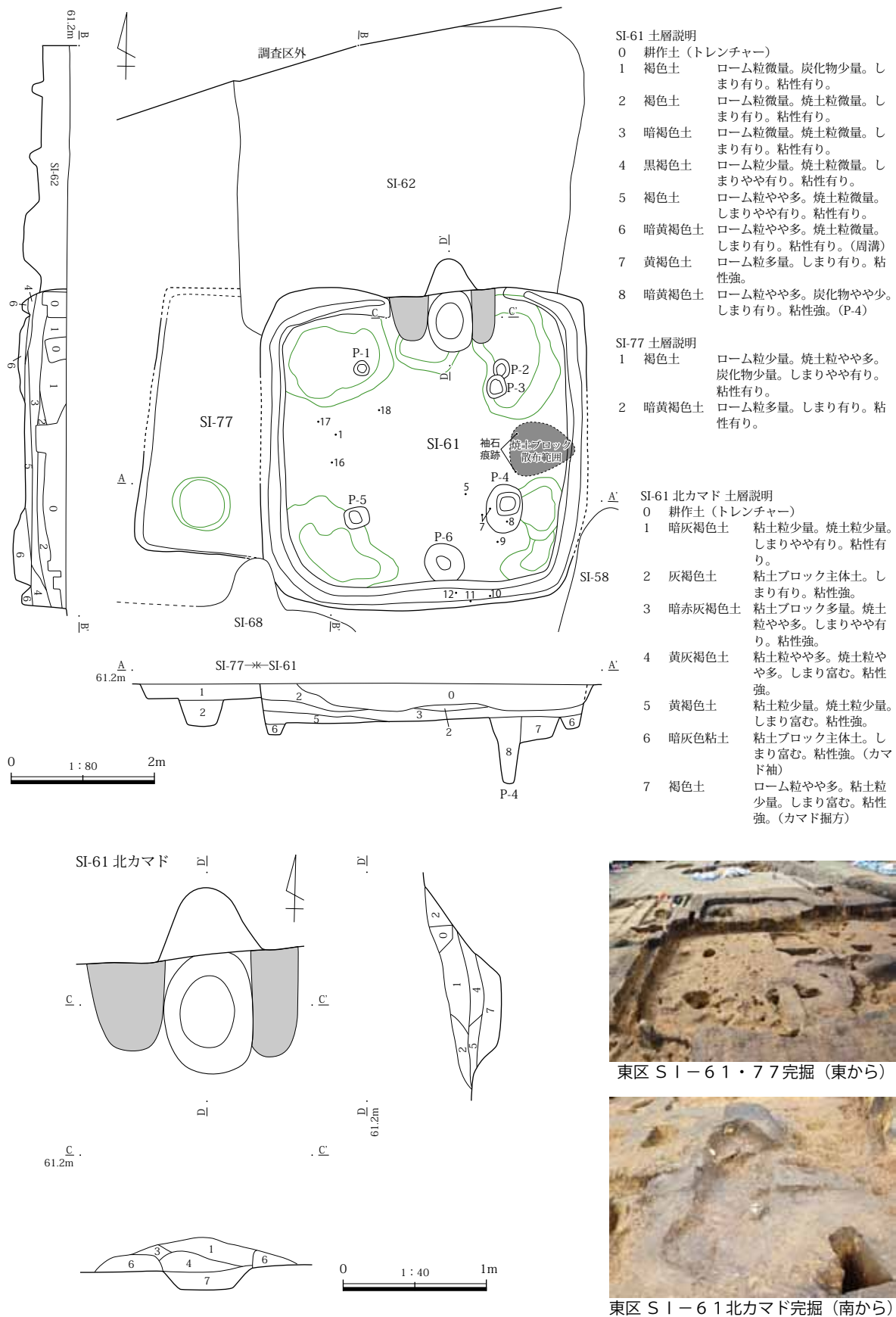


東区 S I - 5 9 Cカマド完掘 (南から)



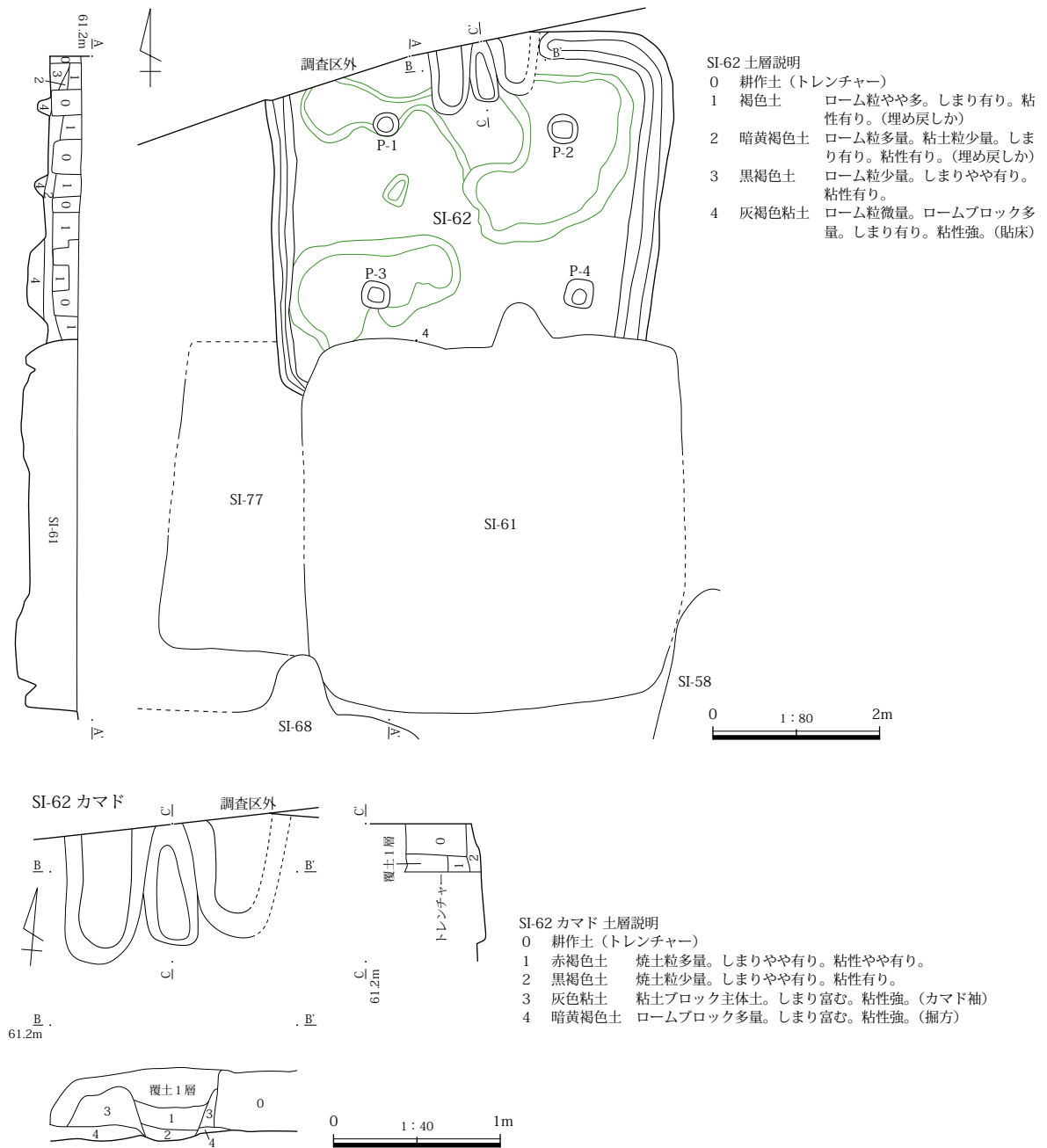
東区 S I - 6 0 全景 (南西から)

Ⅲ. 調査成果



第 60 図 東区 SI-61・77 実測図

2. 遺構



第 61 図 東区 S I - 6 2 実測図

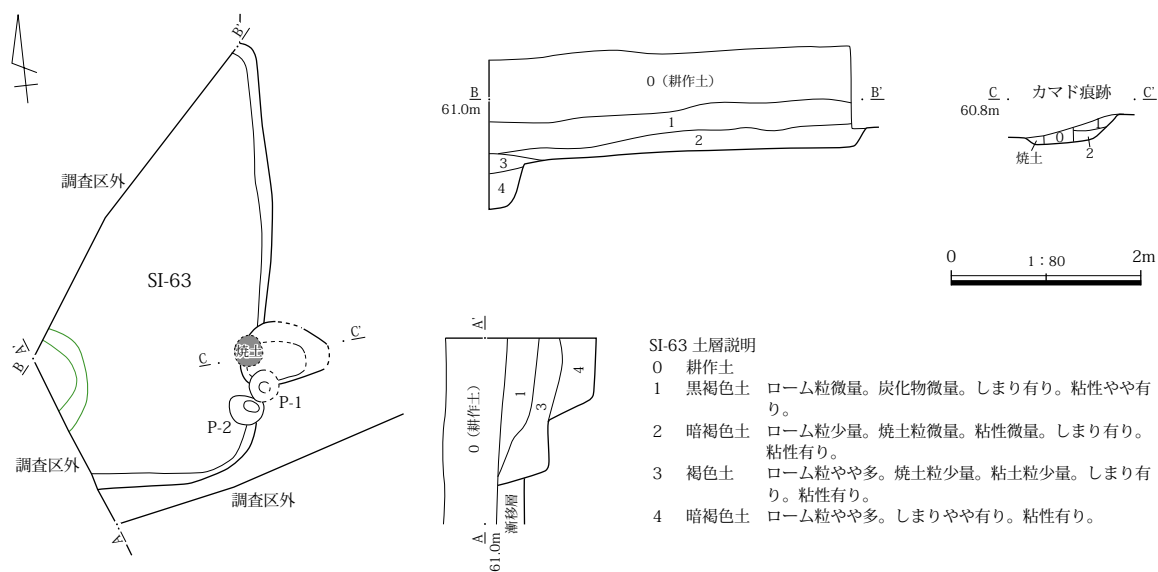


東区 S I - 6 2 全景 (東から)



東区 S I - 6 2 カマド土層堆積状況 (南西から)

Ⅲ. 調査成果



第 62 図 東区 S I - 6 3 実測図



東区 S I - 6 3 完掘 (南から)



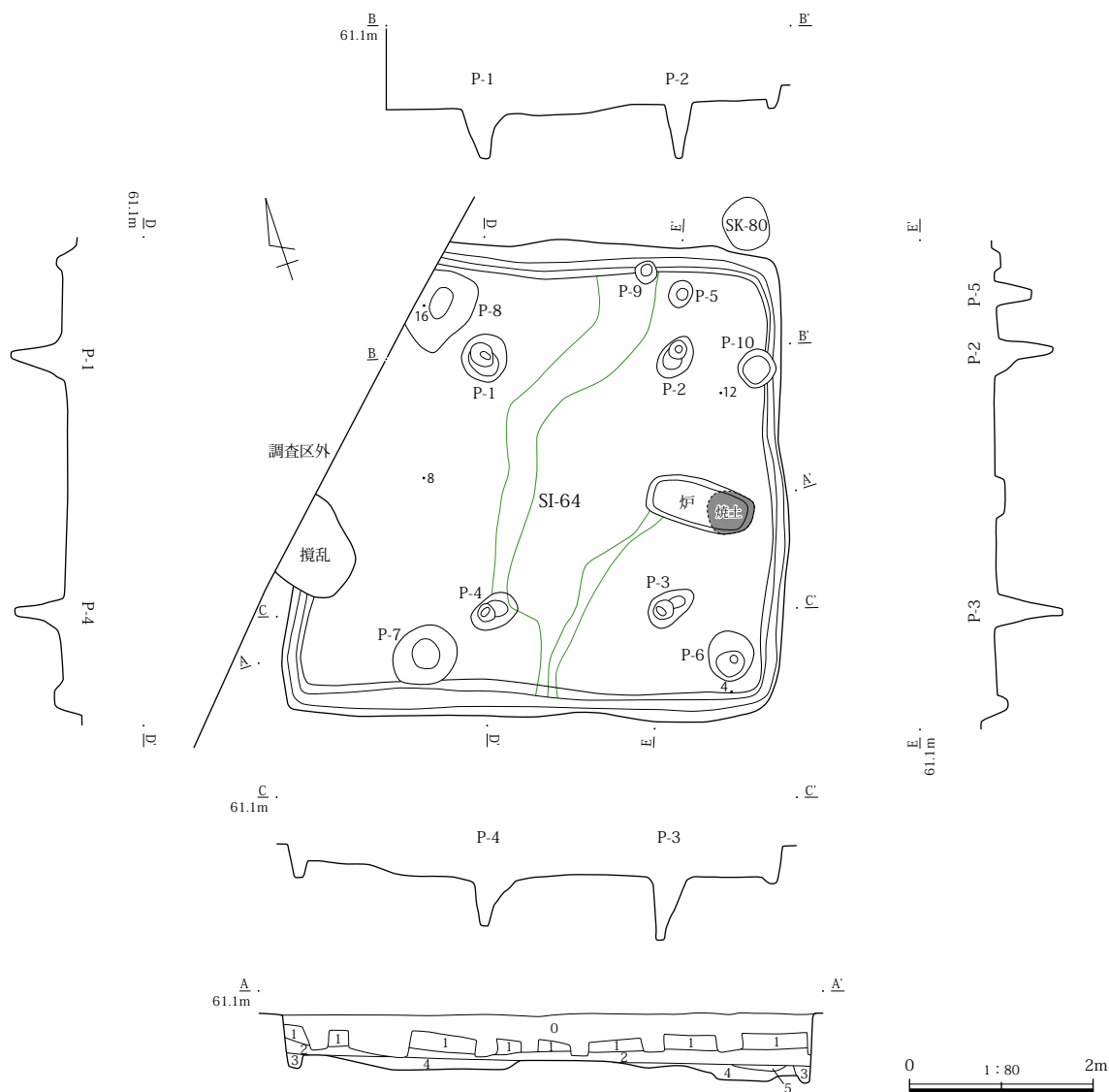
東区 S I - 6 4 完掘 (南から)



東区 S I - 6 5 完掘 (南西から)



東区 S I - 6 5 カマド完掘 (西から)

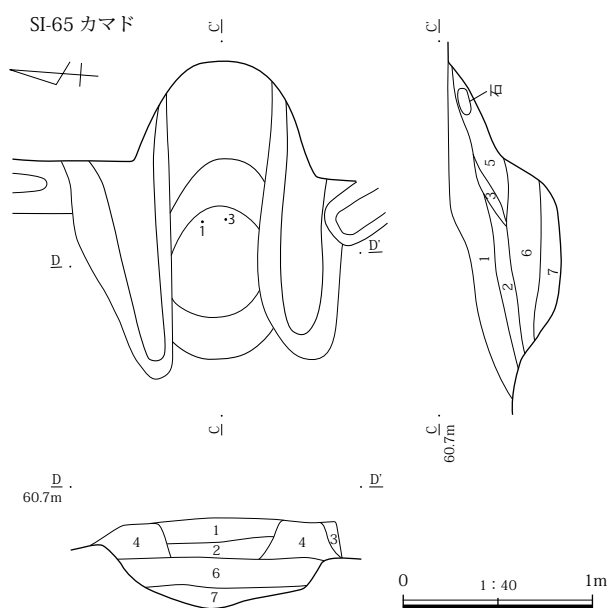
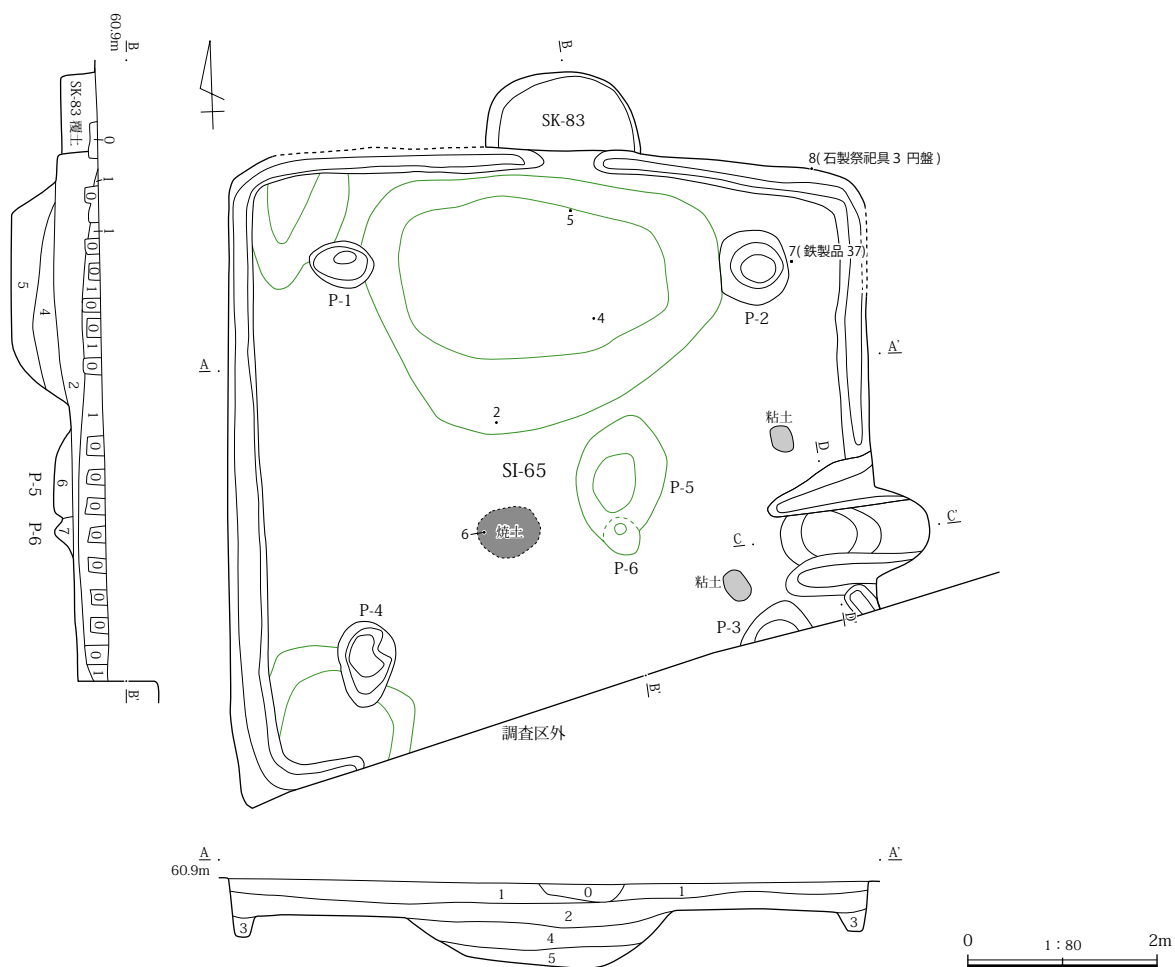


SI-64 土層説明

- 0 耕作土 (トレンチャー)
- 1 暗褐色土 ローム粒微量。しまりやや有り。粘性やや有り。
- 2 黒褐色土 ローム粒少量。しまりやや有り。粘性有り。
- 3 暗褐色土 ローム粒多量。しまりやや有り。粘性有り。(周溝)
- 4 黒褐色土 ローム粒多量。焼土粒少量。炭化物多量。しまり有り。粘性有り。(貼床)
- 5 暗赤褐色土 ローム粒少量。焼土多量。しまり有り。(炉)

第 63 図 東区 S I - 6 4 実測図

Ⅲ. 調査成果



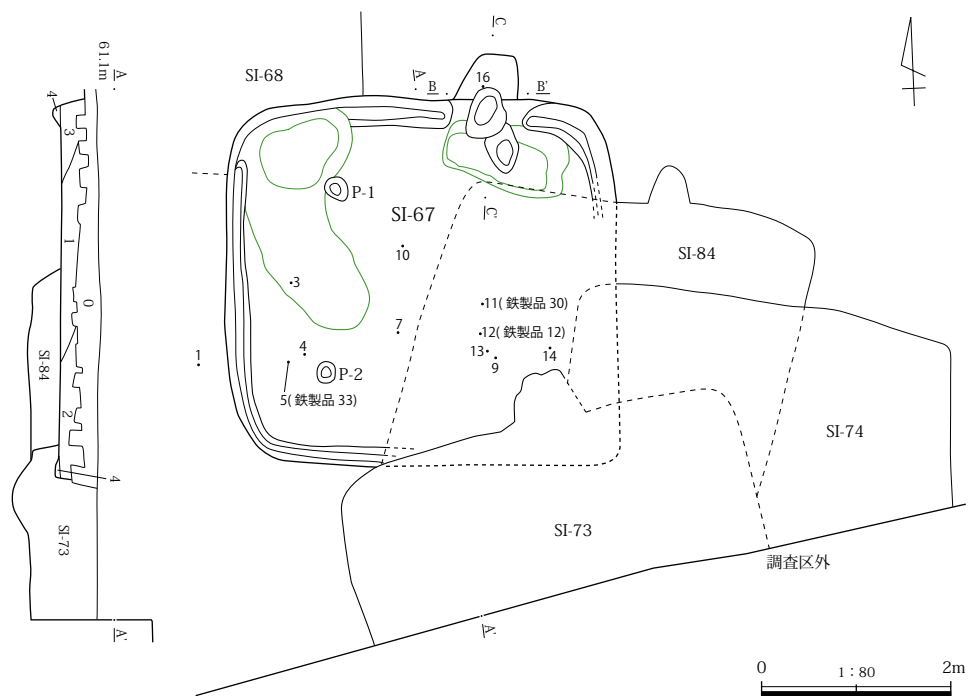
SI-65 土層説明

- 0 耕作土 (トレンチャー)
- 1 暗褐色土 ローム粒やや少。焼土粒やや多。しまり富む。粘性無し。
- 2 暗褐色土 ローム粒やや多。焼土粒やや少。しまり富む。粘性無し。
- 3 暗褐色土 ローム粒やや少。焼土粒微量。しまり富む。粘性有り。
(周溝)
- 4 褐色土 ローム粒少量。焼土粒やや少。黒色土やや少。しまり富む。
粘性有り。(床下土坑)
- 5 褐色土 ローム粒少量。焼土粒少量。黒色土やや少。しまり富む。
粘性有り。(床下土坑)
- 6 黄褐色土 ローム粒多量。黒色土少量。しまり富む。粘性有り。
(P-5 床下土坑)
- 7 黒褐色土 ローム粒少量。焼土粒微量。しまり無し。粘性無し。
(P-6 床下土坑)

SI-65 カマド 土層説明

- 1 赤褐色土 ローム粒少量。焼土粒やや多。粘土粒やや多。砂粒多量。
しまり無し。粘性有り。
- 2 暗灰褐色土 焼土粒少量。粘土粒やや多。砂粒やや多。しまり無し。
粘性有り。
- 3 暗灰褐色土 焼土粒やや多。粘土粒やや多。しまり無し。粘性有り。
- 4 灰褐色土 ローム粒微量。焼土粒やや少。粘土粒多量。しまり強。
粘性有り。(カマド袖)
- 5 暗褐色土 ローム粒少量。しまり無し。
- 6 暗灰褐色土 ローム粒少量。焼土粒少量。粘土粒やや多。しまり強。
粘性有り。
- 7 暗褐色土 ローム粒少量。焼土粒微量。粘土粒やや多。しまり強。
粘性有り。

第64図 東区SI-65実測図



SI-67 土層説明

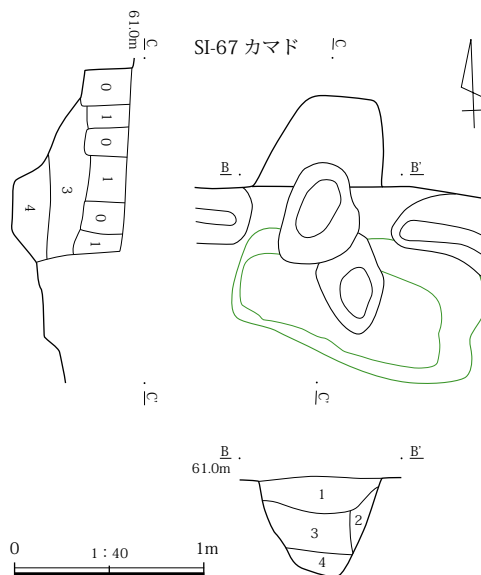
0 耕作土 (トレンチャー)

1 暗褐色土 ローム粒少量。焼土粒少量。しまり有り。粘性有り。

2 褐色土 ローム粒やや多。焼土粒少量。粘土粒やや多。焼土粒やや多。しまり富む。粘性有り。

3 灰暗褐色土 ローム粒やや多。焼土粒少量。粘土粒少量。しまり有り。粘性有り。

4 暗黄褐色土 ローム粒多量。焼土粒微量。しまり富む。粘性有り。



SI-67 カマド 土層説明

0 耕作土痕跡 (トレンチャー)

1 暗褐色土 ローム粒少量。焼土粒やや多。粘土粒やや多。しまりやや有り。粘性有り。

2 灰色粘土 粘土ブロック主体土。しまり富む。粘性強。(カマド袖痕跡)

3 灰赤褐色土 粘土ブロック多量。焼土粒多量。しまり有り。粘性有り。

4 黒褐色土 粘性ブロックやや多。焼土粒少量。ローム粒少量。しまり有り。粘性有り。(カマド掘方)



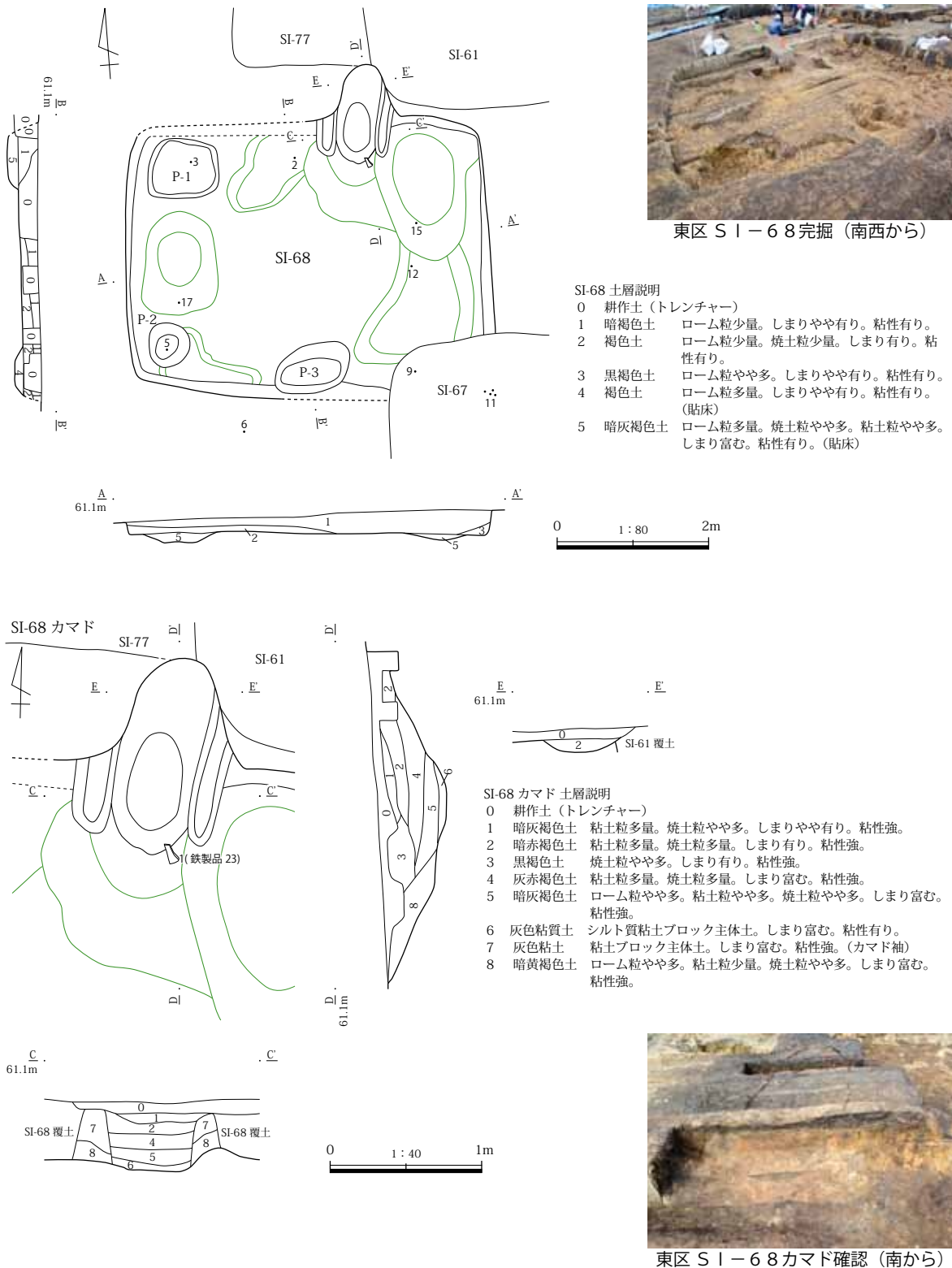
東区 S I - 6 7 遺物出土状況 (南から)



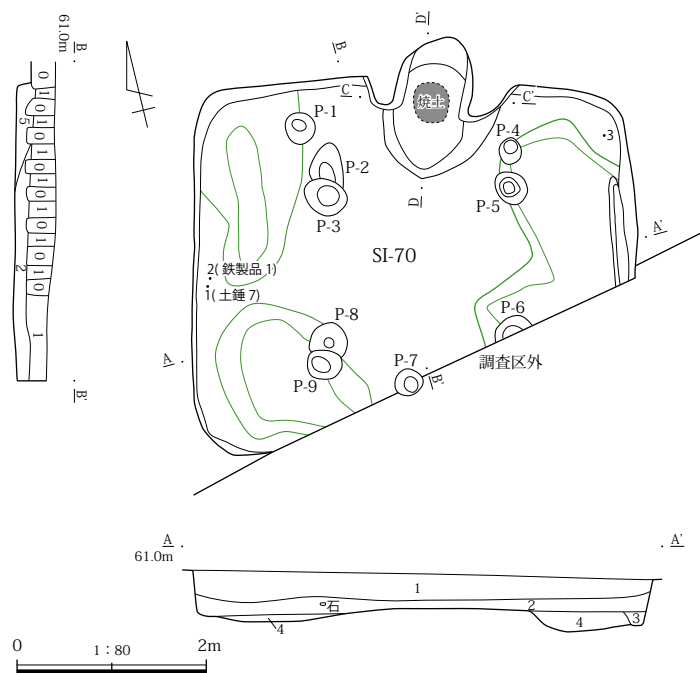
東区 S I - 6 7 カマド土層堆積状況 (南から)

第 65 図 東区 S I - 6 7 実測図

Ⅲ. 調査成果



2. 遺構



SI-70 土層説明

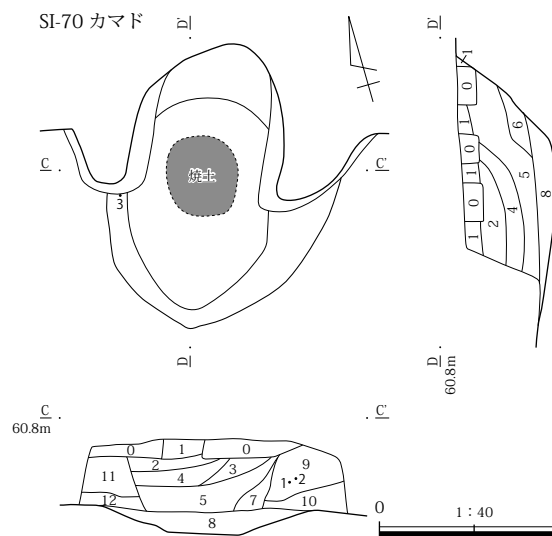
- 0 耕作土 (トレンチャー)
- 1 暗褐色土 ローム粒少量。焼土粒やや少。しまり有り。
- 2 暗褐色土 ローム粒やや多。焼土粒少量。しまり有り。
- 3 褐色土 ローム粒やや多。しまり有り。(周溝)
- 4 褐色土 ローム粒多量。しまり有り。(貼床)
- 5 灰褐色土 ローム粒多量。焼土粒やや少。しまり有り。(貼床)



東区 S I - 7 0 完掘 (南西から)



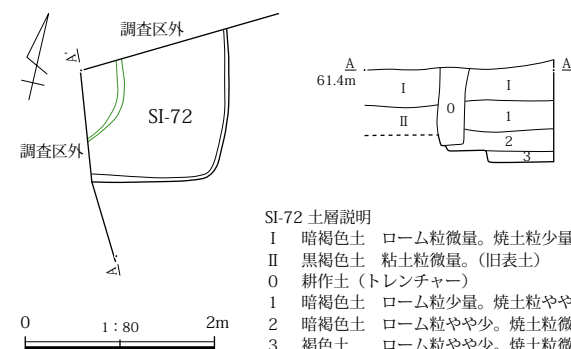
東区 S I - 7 0 カマド 完掘 (南から)



SI-70 カマド 土層説明

- 0 耕作土 (トレンチャー)
- 1 灰褐色土 ローム粒やや多。焼土粒微量。粘土粒やや多。しまり有り。粘性有り。
- 2 暗灰褐色土 ローム粒少量。焼土粒少量。粘土粒やや多。しまり有り。粘性有り。
- 3 灰褐色土 ローム粒少量。焼土粒やや少。粘土粒少量。しまり有り。粘性有り。
- 4 暗灰褐色土 ローム粒少量。焼土粒微量。粘土粒少量。黒色土微量。しまり有り。粘性有り。
- 5 褐色土 ローム粒微量。焼土粒多量。粘土やや少。黒色土少量。しまり有り。粘性無し。
- 6 暗褐色土 ローム粒少量。焼土粒やや少。しまり有り。粘性無し。
- 7 暗赤褐色土 焼土粒多量。粘土粒少量。黒色土少量。しまり有り。粘性無し。
- 8 灰褐色土 ローム粒微量。焼土粒やや多。粘土粒多量。黒色土少量。しまり有り。粘性有り。
- 9 暗灰褐色土 ローム粒少量。焼土粒微量。粘土粒多量。黒色土微量。しまり有り。粘性有り。(カマド袖)
- 10 暗褐色土 ローム粒やや多。焼土粒少量。粘土粒少量。黒色土少量。しまり有り。粘性有り。(カマド袖)
- 11 暗灰褐色土 ローム粒少量。焼土粒微量。粘土粒多量。黒色土少量。しまり有り。粘性有り。(カマド袖)
- 12 暗褐色土 ローム粒やや多。焼土粒少量。粘土粒少量。黒色土少量。しまり有り。粘性有り。(カマド袖)

第 67 図 東区 S I - 7 0 実測図



SI-72 土層説明

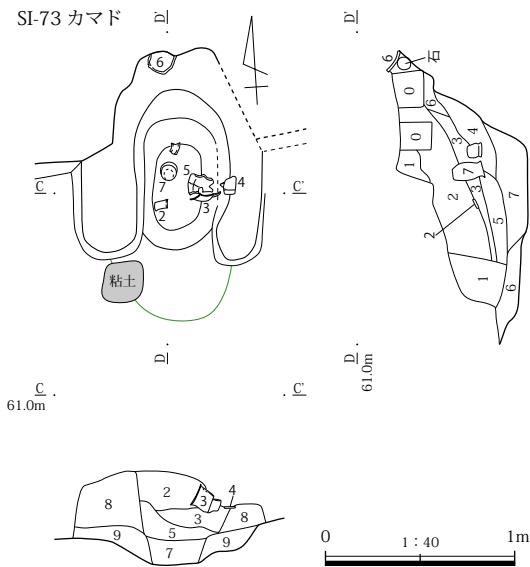
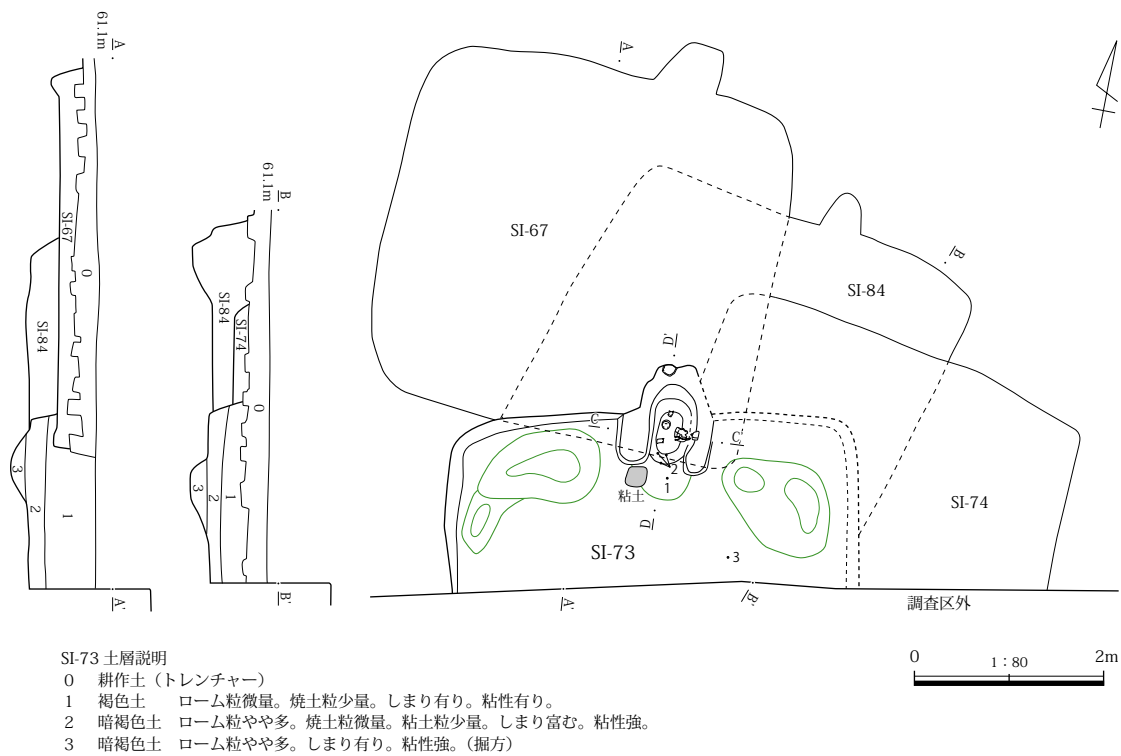
- I 暗褐色土 ローム粒微量。焼土粒少量。(現表土・耕作土)
- II 黒褐色土 粘土粒微量。(旧表土)
- 0 耕作土 (トレンチャー)
- 1 暗褐色土 ローム粒少量。焼土粒やや少。しまり有り。粘性無し。
- 2 暗褐色土 ローム粒やや少。焼土粒微量。しまり無し。
- 3 褐色土 ローム粒やや少。焼土粒微量。粘土粒微量。しまり有り。



東区 S I - 7 2 完掘 (東から)

第 68 図 東区 S I - 7 2 実測図

Ⅲ. 調査成果



- SI-73 カマド 土層説明
- 0 耕作土（トレンチャー）
 - 1 暗褐色土 ローム粒少量。粘土粒やや多。焼土粒少量。しまりやや有り。粘性有り。
 - 2 灰色粘土 粘土ブロック主体土。しまり富む。粘性強。
 - 3 暗灰色粘土 粘土ブロック主体土。しまり富む。粘性強。
 - 4 赤色粘質土 焼土ブロック多量。しまり富む。粘性有り。
 - 5 赤灰色粘土 粘土ブロック多量。焼土粒多量。しまり富む。粘性有り。
 - 6 灰褐色粘土 粘土ブロック少量。ロームブロック少量。しまり富む。粘性有り。
 - 7 灰色粘土 粘土ブロック多量。しまり富む。粘性強。
 - 8 暗灰褐色粘土 粘土ブロック多量。焼土粒少量。しまり富む。粘性強。（カマド袖）
 - 9 黄褐色土 ロームブロック主体土。粘土ブロック少量。焼土粒少量。しまり富む。粘性有り。（カマド袖）

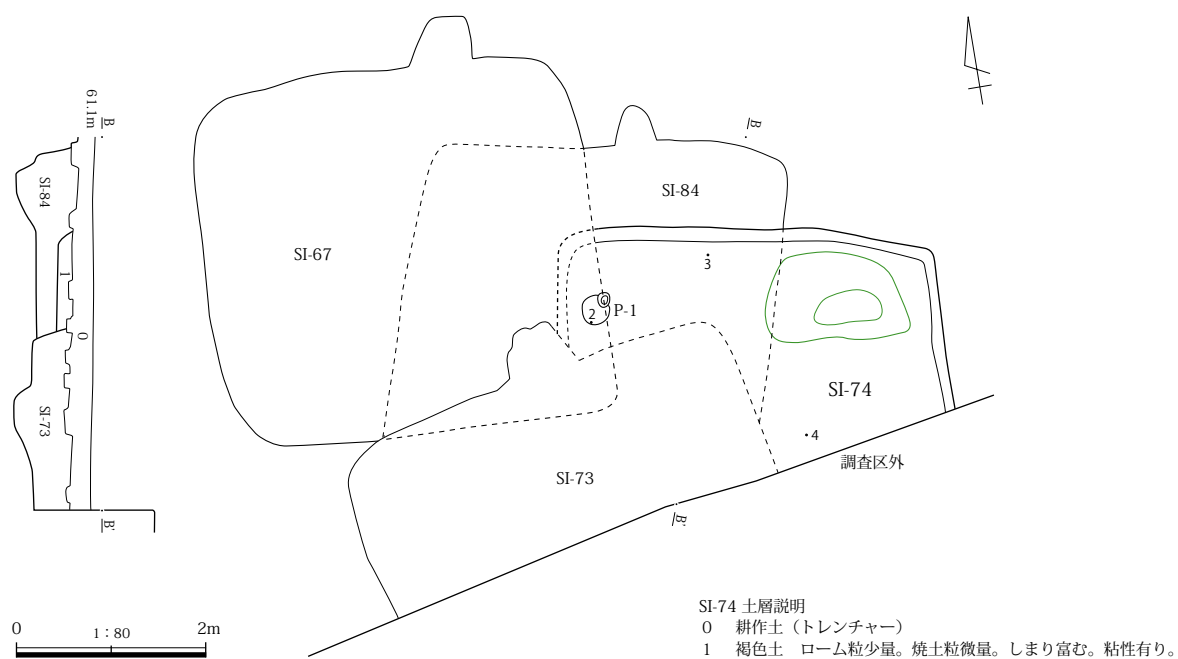


東区 S I - 6 7 ・ 7 3 ・ 7 4 ・ 8 4 （南東から）

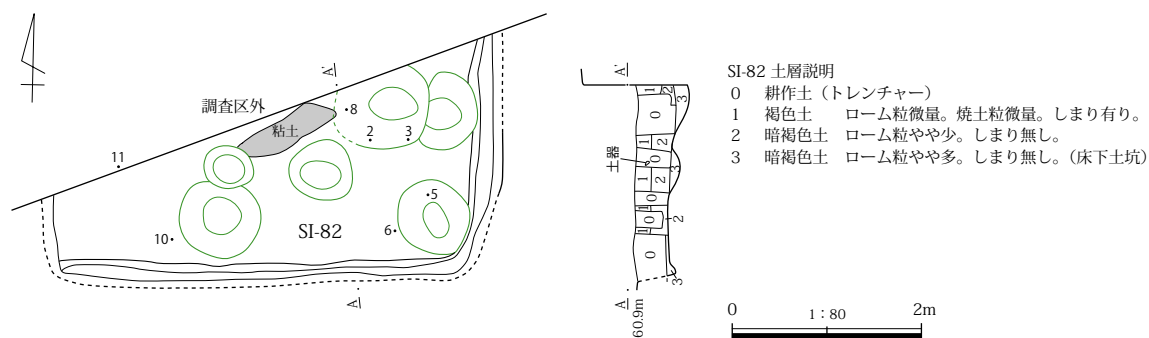


東区 S I - 7 3 カマド土層堆積状況（東から）

第 69 図 東区 S I - 7 3 実測図



第70図 東区 S I - 7 4 実測図



第71図 東区 S I - 8 2 実測図

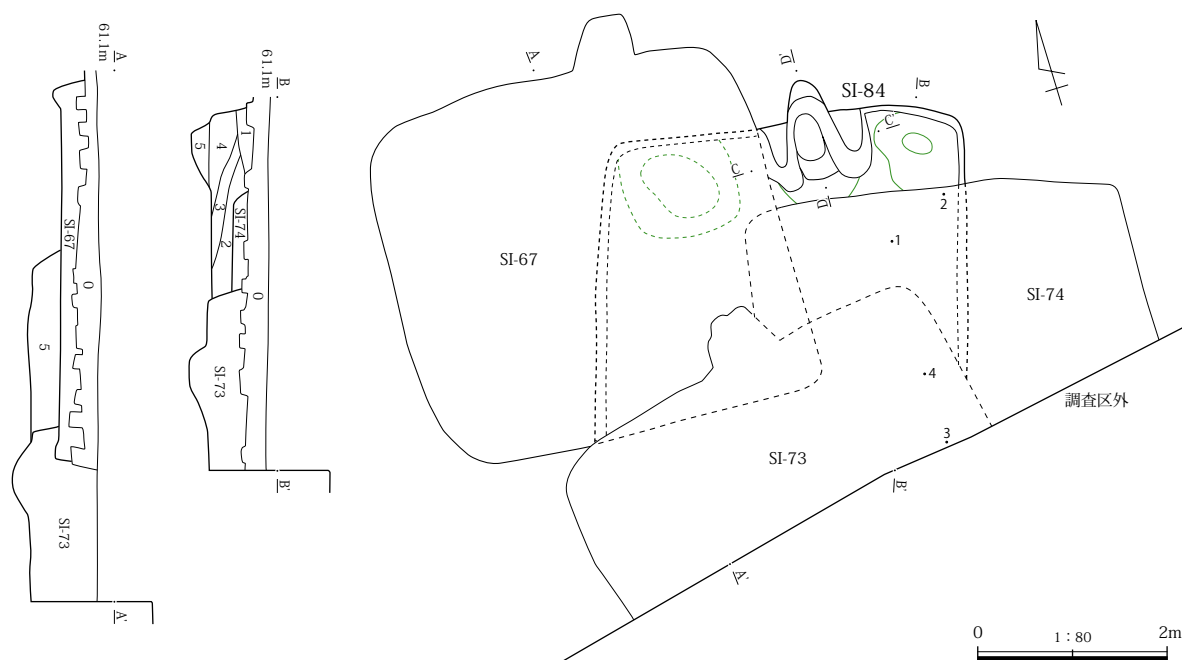


東区 S I - 6 7 ・ 7 3 ・ 7 4 ・ 8 4 （南から）



東区 S I - 8 2 完掘（南西から）

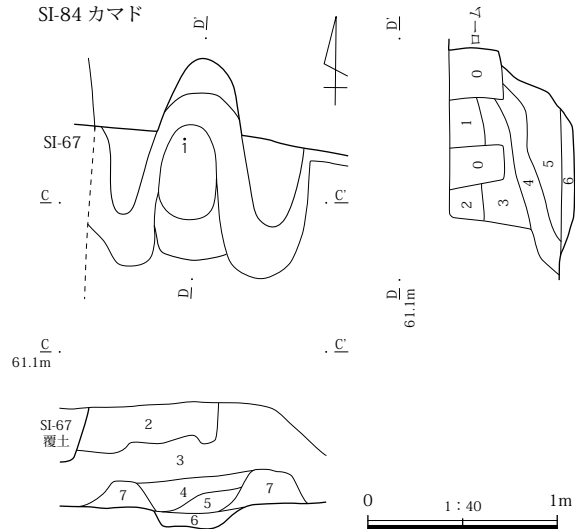
Ⅲ. 調査成果



SI-84 土層説明

- | | |
|---|-------------------------------|
| 0 | 耕作土 (トレンチャー) |
| 1 | 暗褐色土 ローム粒微量。しまり富む。粘性有り。 |
| 2 | 暗褐色土 ローム粒微量。焼土粒微量。しまり富む。粘性有り。 |
| 3 | 黒褐色土 ローム粒微量。焼土粒微量。しまり有り。粘性強。 |
| 4 | 暗褐色土 ローム粒やや多。しまり有り。粘性強。 |
| 5 | 暗黄褐色土 ローム粒多量。しまり有り。粘性強。(貼床) |

SI-84 カマド



SI-84 カマド 土層説明

- | | |
|---|---|
| 0 | 耕作土 (トレンチャー) |
| 1 | SI-84 覆土 1 層 |
| 2 | 灰色粘土 粘性ブロック多量。焼土粒多量。しまり富む。粘性強。 |
| 3 | 暗灰色粘土 粘土ブロックやや多。焼土粒やや多。しまり富む。粘性強。 |
| 4 | 赤灰色粘土 粘土ブロック主体土。しまり富む。粘性有り。 |
| 5 | 灰色粘質土 7 に似るが褐色土混入やや多。しまり有り。粘性有り。 |
| 6 | 黄褐色土 ロームブロック多量。焼土粒・炭化物微量。しまり富む。粘性有り。(カマド掘方) |
| 7 | 明灰色粘土 粘土ブロック主体土。しまり富む。粘性強。(カマド袖) |



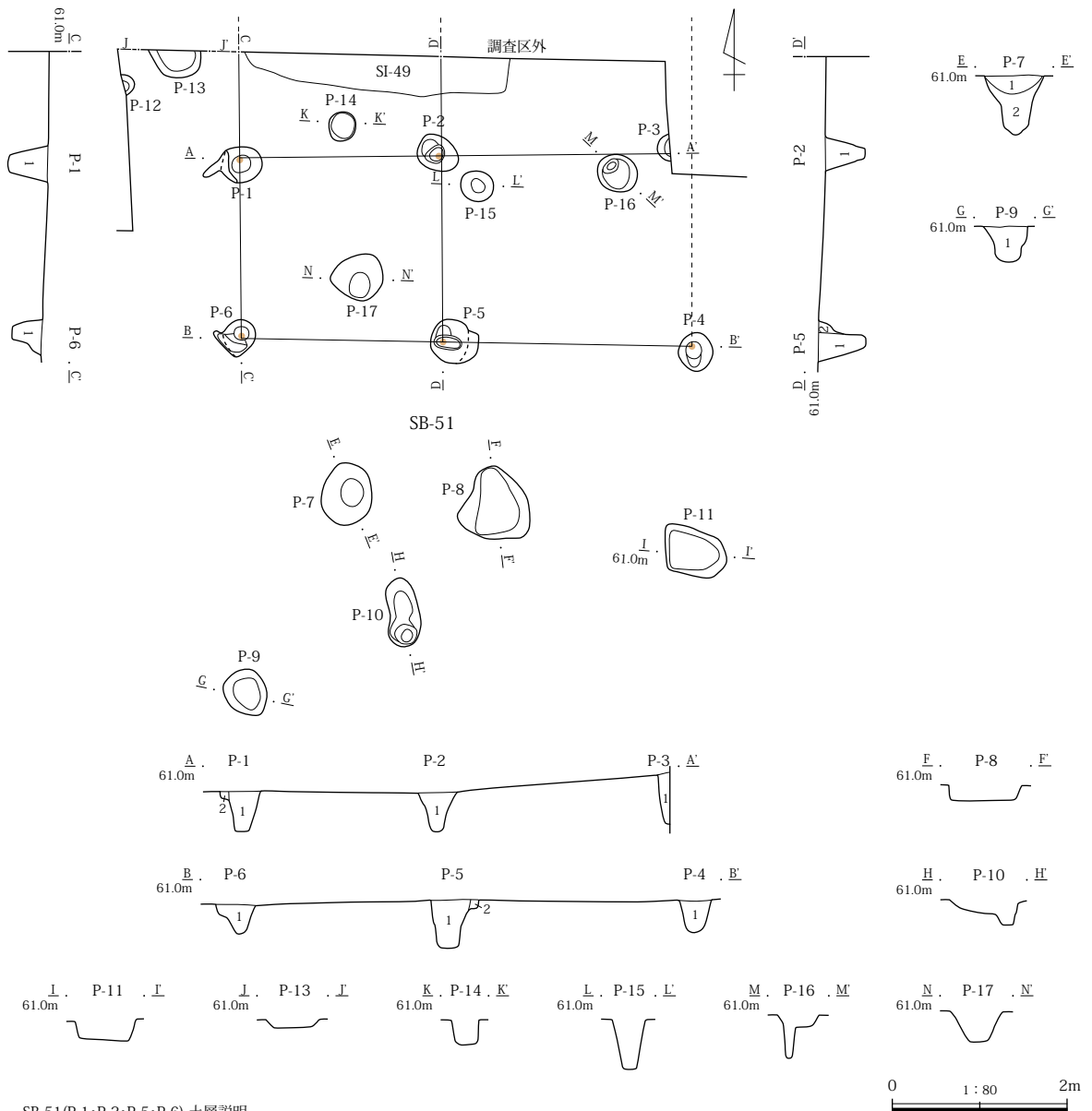
東区 S I - 84 遺物出土状況 (南から)



東区 S I - 84 カマド完掘 (南から)

第 72 図 東区 S I - 84 実測図

2. 遺構



SB-51(P-1・P-2・P-5・P-6) 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒少量。しまりやや有り。粘性有り。
- 2 暗黄褐色土 ローム粒多量。しまり有り。粘性有り。

SB-51(P-3) 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒やや多。しまりやや有り。粘性有り。

SB-51(P-4) 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒やや多。炭化物微量。しまりやや有り。粘性有り。

SB-51(P-7) 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒少量。しまりやや有り。粘性有り。
- 2 黒褐色土 ローム粒やや多。しまりやや有り。粘性有り。

SB-51(P-9) 土層説明

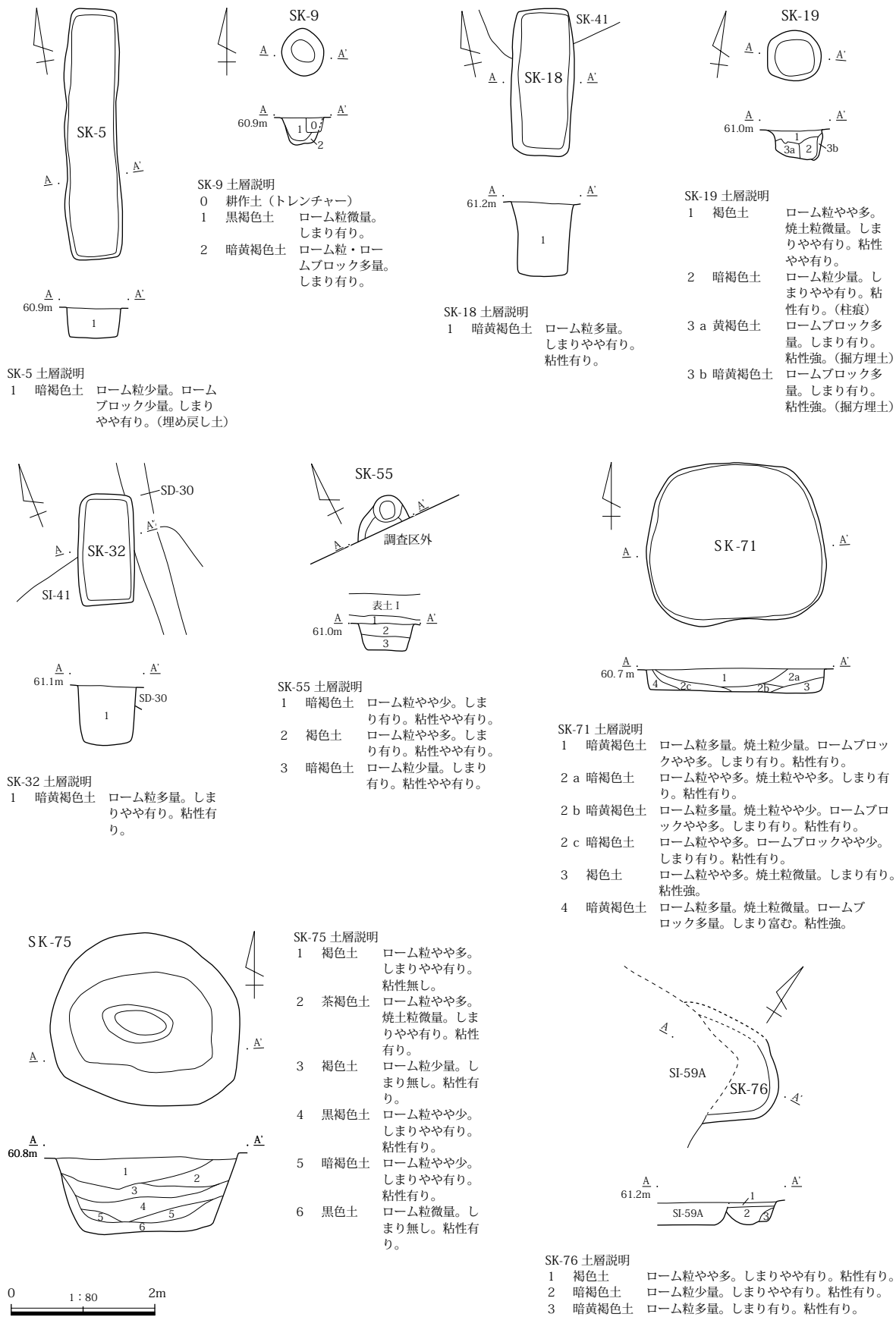
- 1 暗褐色土 焼土やや多。しまりやや有り。粘性有り。



西区 SB-51 完掘（上空から）

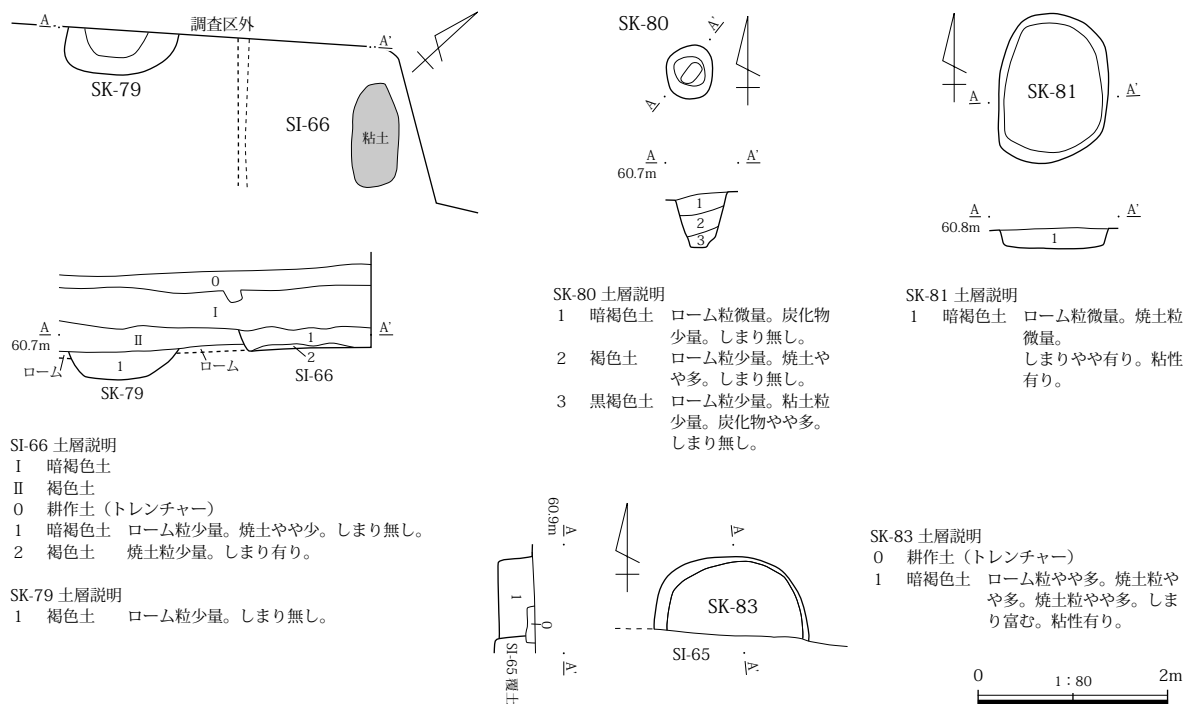
第 73 図 西区 SB-51 実測図

Ⅲ. 調査成果



第 74 図 土坑実測図 (1)

2. 遺構



第 75 図 土坑実測図（2）



西区 SK-5 土層堆積状況（南から）



西区 SK-18 半截（南西から）



西区 SK-32 半截（南西から）



東区 SI-66（南から）



東区 SK-71 土層堆積状況（南から）



東区 SK-75 完掘（東から）

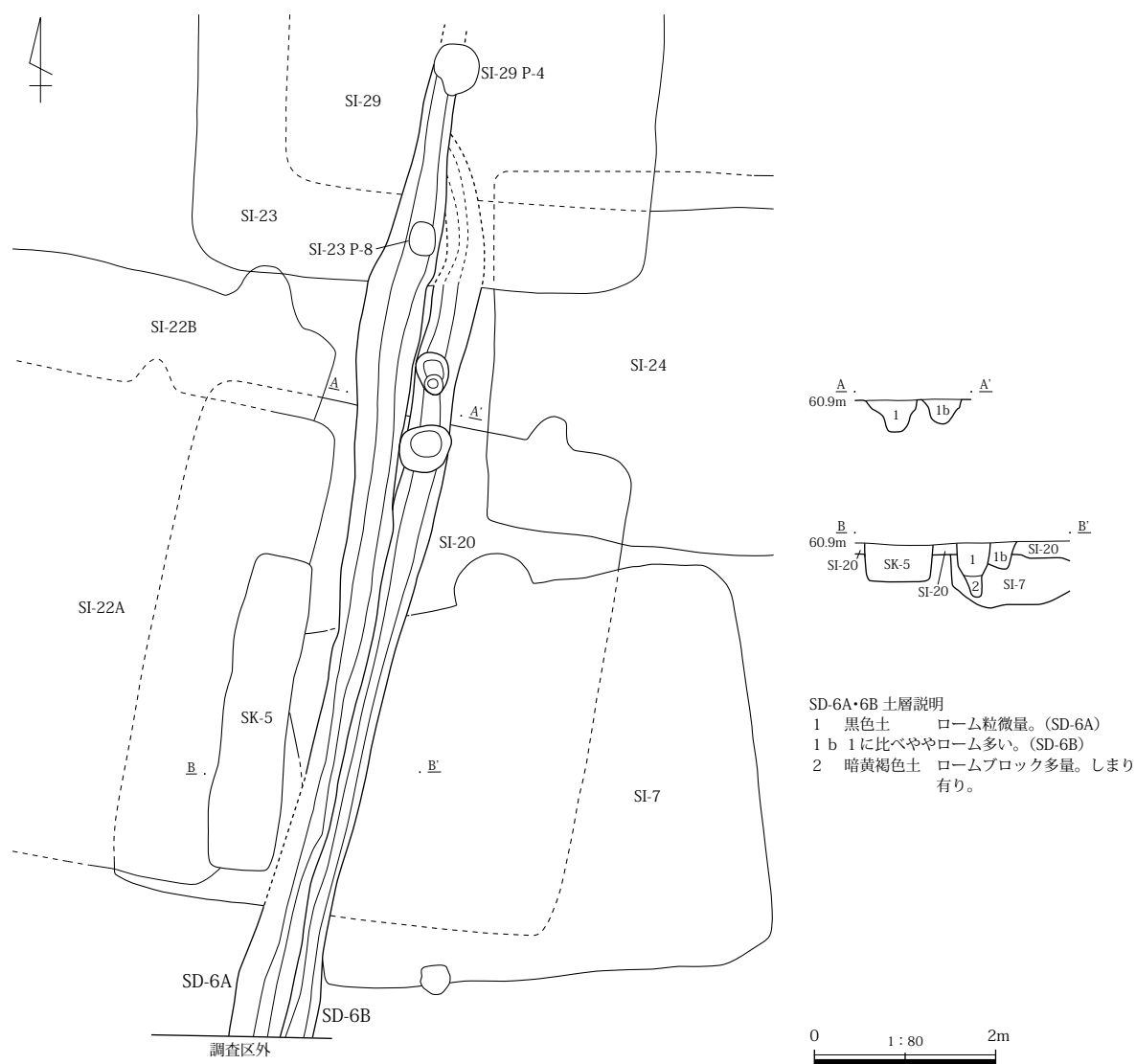


東区 SK-76 土層堆積状況（南から）



東区 SK-79 完掘（南西から）

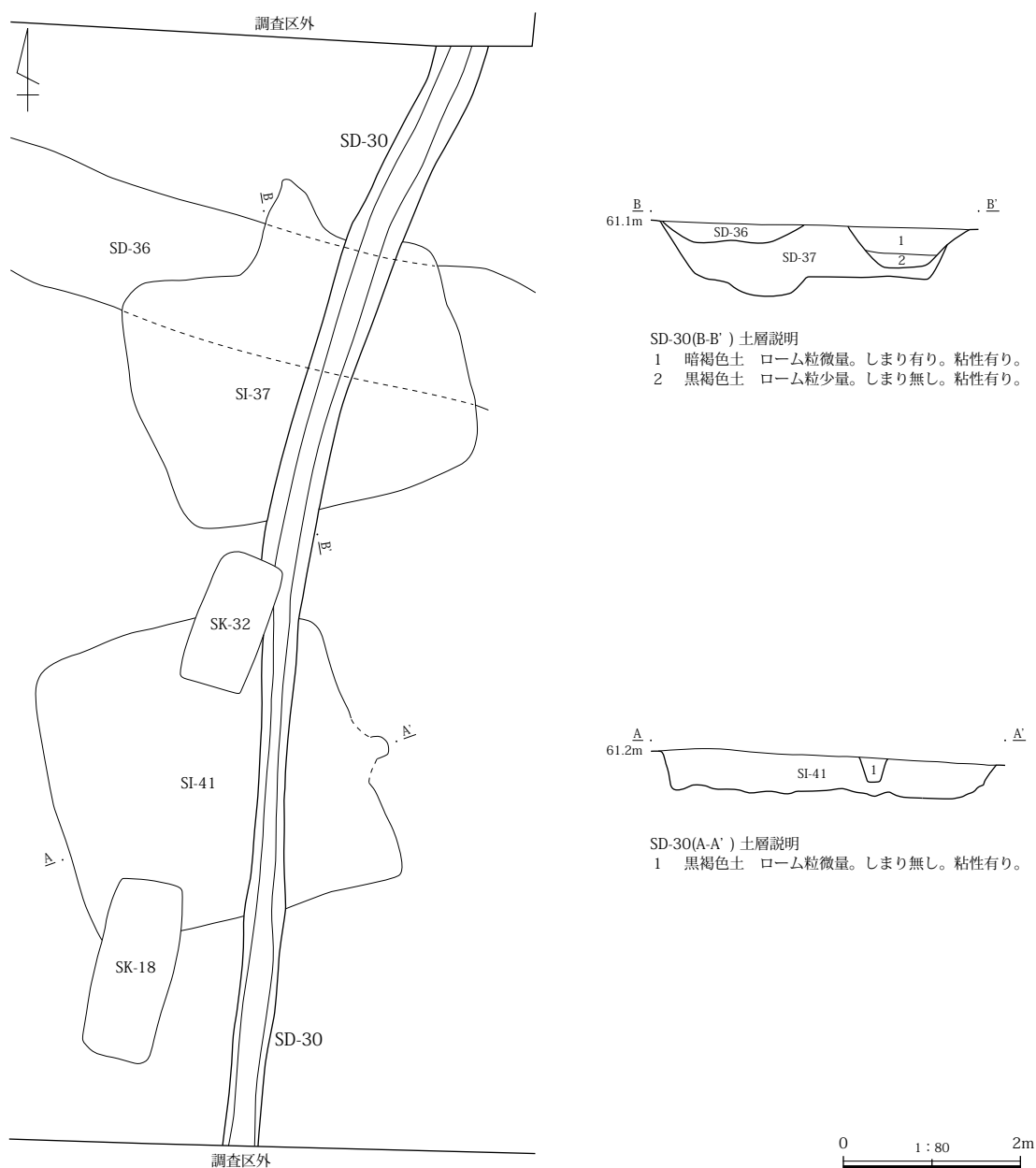
Ⅲ. 調査成果



第76図 西区SD-6A・6B実測図



西区SD-6完掘（上空から）

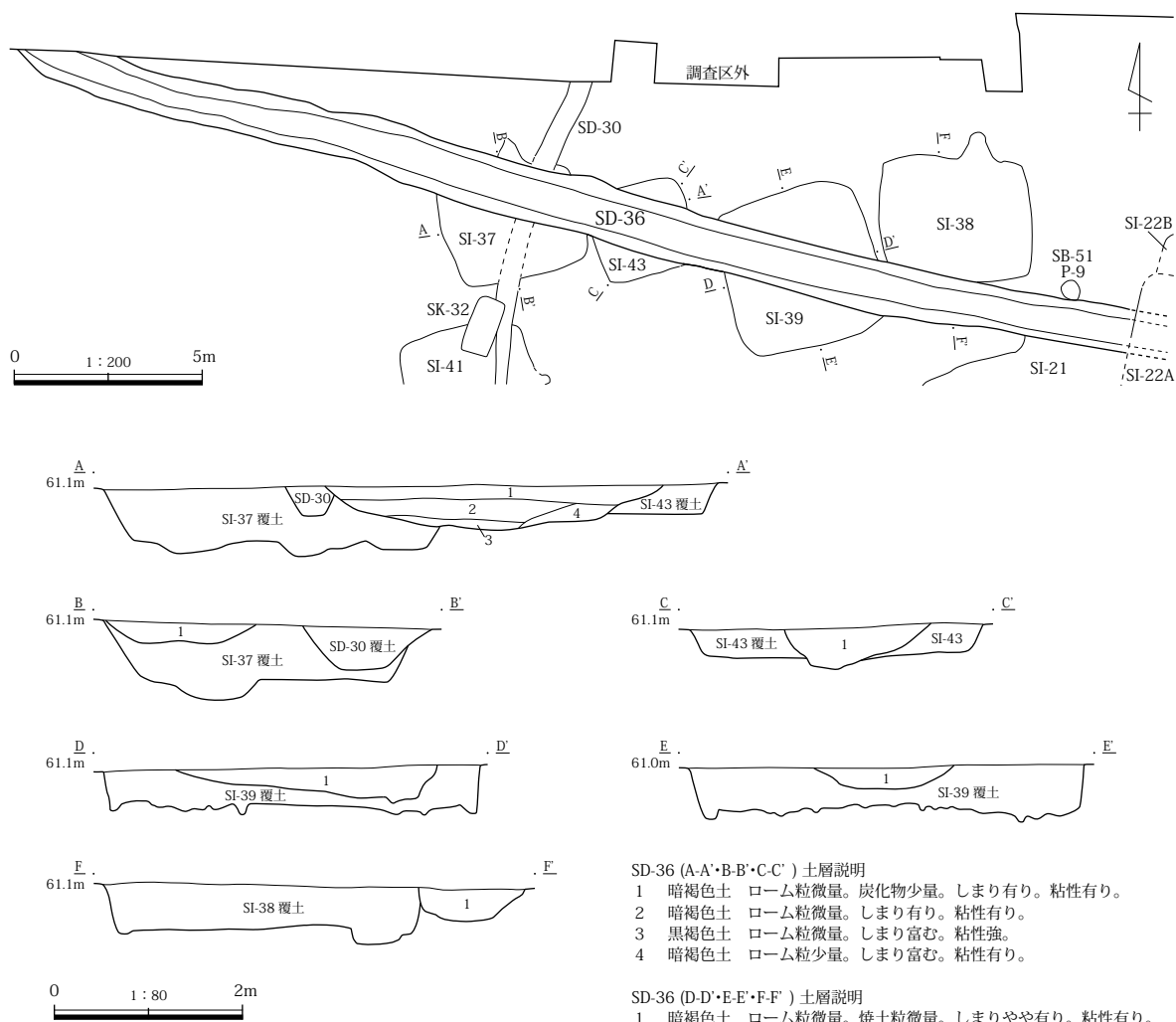


第 77 図 西区 SD-30 実測図



西区 SD-30 完掘 (上空から)

Ⅲ. 調査成果



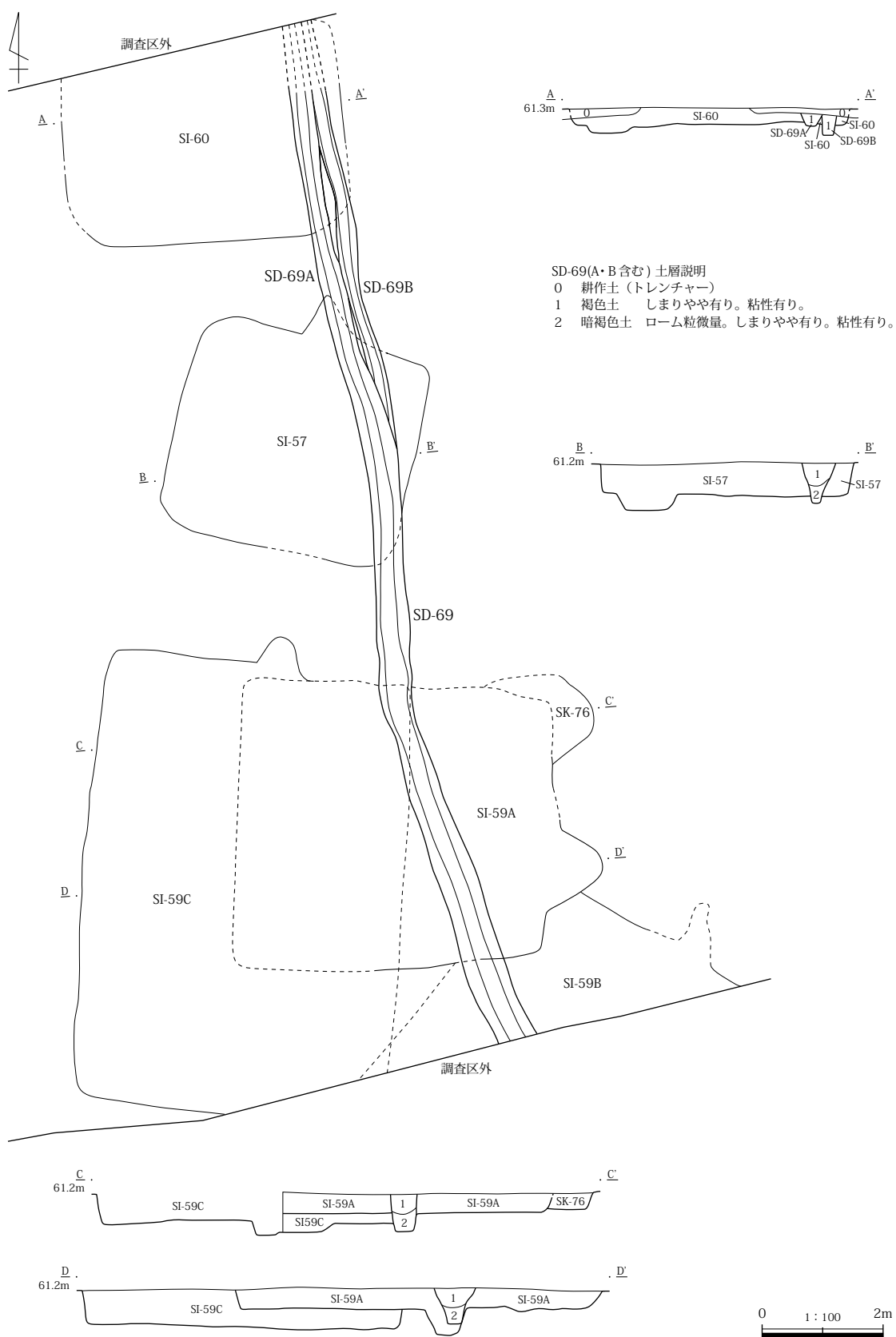
第 78 図 西区 SD-36 実測図



西区 SD-36 完掘（上空から）



東区 SD-69 完掘（上空から）



第 79 図 東区 SD-69 実測図

3. 遺物

a. 遺物観察の視点

本遺跡では、古代土器群（土師器，須恵器，統一新羅系陶器，灰釉陶器，緑釉陶器）、土製品（土鍾，紡錘車）、石製品（石製祭祀具，石鍾など）、金属製品（刀子，釘，鎌，鋤など）、10世紀頃に位置付けられる小型銅造鍍金阿弥陀如来坐像1軀、中・近世の陶磁器（同安窯青磁，須恵系陶器，渥美窯・常滑窯製品）等々が出土している。なお、遺物実測図の縮尺は以下の通りとした。

土師器，須恵器，陶磁器 1/4

銅造鍍金阿弥陀如来坐像 (3D 写真実測図) 2/3

縄文土器・弥生土器，土製・石製紡錘車，土鍾 1/3

礫器，粘土塊 1/4

粘土塊，鉄滓 1/3・1/4 併用

金属製品 1/3・1/2 併用

石器・石製祭祀具，基石，1/2

土器観察表の視点（第80～114図。第5～70表）

- ① 大きさの項目中、（ ）で示した数値は推定値または残存値である。計測不能の時は－とした。
- ② 遺物の遺存率は、図示した部分の推定円周に対する割合である。
- ③ 本遺跡では、小破片資料（推定円周 1/5 以下のもの）であっても、特徴的な属性を有する土器については極力掲載させた（「Ⅲ-4. 小結」とも関わるため）。その折、土器実測図中央に中心線を入れず（数cmの空白を設け）、小破片と分かるように図示している。
- ④ 焼成は、硬質・やや硬質・やや軟質・軟質の4ランクに分けた。
- ⑤ 色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本農林水産省農林水産技術会事務局監修 1994年）を参照のうえ記述した。
- ⑥ 土器本体に記された注記内容は「備考」の項目に記入した。
- ⑦ 遺物特徴の記載は、本文中に記した（なお、これについては、全遺物とも同じ扱いを行った）。
- ⑧ 本報告書では古墳時代以降遺物の胎土を以下のように大別、観察表記載を行った。

土師器

胎土 A 群 きめ細かい。白色細粒・黒色細粒等を含む。

胎土 B 群 ややきめ細かい。白色粒子・黒色粒子・砂粒等を含む。

胎土 C 群 ややきめ細かい。白色粒子・灰白色粒子・黒色粒子・雲母粒子等を含む。

胎土 D 群 ややきめ細かい。赤褐色粒子を含む。

胎土 E 群 やや粗い。白色粒子・灰黒色粒子・赤褐色粒子等を含む。

胎土 F 群 やや粗い。白色粒子・小礫・砂粒を含む。

胎土 G 群 粗い。灰黒色粒子・雲母粒子・小礫を含む。

須恵器

- 胎土 A 群 ややきめ細かい。白色粒子 (半透明)・白色小礫を含む。
- 胎土 B 群 ややきめ細かい。黒色粒子 (鉍物) を含む。
- 胎土 C 群 ややきめ細かい。雲母粒子を含む。
- 胎土 D 群 ややきめ細かい。黄白色粒子・ガラス質透明粒子を含む。
- 胎土 E 群 ややきめ細かい。混入物やや多い。
- 胎土 F 群 きめ細かい。混入物少量。

陶器

- 胎土 A 群 極めてきめ細かい (精緻)。混入物が目立たない。
- 胎土 B 群 きめ細かい (精緻)。混入物が目立たない。
- 胎土 C 群 きめ細かい。混入物を少量含む。
- 胎土 D 群 ややきめ細かい。混入物をやや少量含む。
- 胎土 E 群 若干きめが粗い。混入物やや少量～やや多く認められる。

磁器

- 胎土 A 群 きめ細かい (精緻)。混入物が目立たない。
- 胎土 B 群 きめ細かい。混入物を少量含む。
- 胎土 C 群 きめ細かい。混入物が目立たない。
- 胎土 D 群 ややきめ細かい。混入物を少量含む。
- 胎土 E 群 ややきめ細かい。混入物をやや少量含む。
- 胎土 F 群 きめ細かい。混入物が目立たない。
- 胎土 G 群 きめ細かい。混入物 (黒色粒子) を少量含む。

遺構変遷把握のための視点

- ① 本遺跡は遺構重複が多いうえ、攪拌が著しい。このため、遺構重複 (新旧) 関係の把握＝今回調査区遺構・遺物群の把握と言っても過言ではない。
- ② 土層断面図 (切り合い) 情報⇄出土土器編年の反復照合作業を実施し、遺構重複・攪拌情報による矛盾を少なくするよう努めた。これに伴い、遺構に帰属する時期の遺物か、遺構に流入・混入した遺物 (包含層出土品) かの判別作業も複数回併せて行っていること付記しておきたい。

Ⅲ. 調査成果

b. 遺構出土の土器

SI-2 出土土器 (第 80～82・115～120 図、第 6 表)

1・2 は統一新羅系土器として捉えた陶質土器である。1 は口縁外端に断面三角形の隆帯が巡る。2 は高台部が外方に踏ん張り出る。1・2 とも胎土・焼成・色調とも、確実に統一新羅系土器と判断できた資料〔包含層 -2〕に似る(「Ⅳ -2. 統一新羅系土器」併照)。

3～5 は須恵器坏蓋。天井部は回転ヘラケズリ。産地は不明。6～8 の須恵器蓋は、いわゆる北関東型須恵器(藤井 2020)。ハの字状口縁で、天井部に手持ちヘラケズリを施す点が特徴である。胎土・焼成・色調からみて三毳窯産製品と推定できる。

9 は産地不明の須恵器坏。平底で底部全面回転ヘラケズリ。10 は捏鉢の口縁部破片。11 は体部外面が斜行叩き、内面同心円状当て具痕であり、一見ただけでは甕として誤認されてしまうような破片である。しかし、独特な閉塞技法痕跡(風船技法に伴う閉塞板痕)や、窯詰め(横置き焼成)に伴う自然釉付着が認められることから(中村 2019, 79 頁)、横瓶の胴部破片として捉えた。産地は不明。

12 は湖西窯産の須恵器フラスコ形瓶の口縁部破片。13 も湖西窯産の須恵器瓶の破片。12 よりは後出のものと思われる。14 は須恵器大甕の体部破片。焼成は硬質。産地不明。

15～17 は須恵器坏身を模倣した土師器坏。18～26 は口縁部が直立するタイプの土師器坏。27～38 は口縁部が外反するタイプの土師器坏である。いずれも、口縁端部内面に一条の沈線を施すものが主体を占めるのが特徴である。

39～42 も口縁部が外反するタイプの土師器坏だが、いわゆる内湾口縁坏である(15～42 のように、口縁端部内面に沈線を施していない)。内面ヘラミガキ・黒色処理は施されていないが、器形は(広義の)栗圀系土器の影響(辻・熊谷ほか 2007)が見受けられる。

43～48 は土師器鉢。44・45 は須恵器坏身模倣土師器坏を鉢としてリサイズしたような大きさである。同様に 46・47 も口縁部直立土師器坏を鉢としてリサイズしたような大きさである。

50～53 は在来の土師器長胴甕。50～60 は常総系土師器甕。54・55 は口縁端部の外方へのつまみ出しが比較的弱めであること、檜村 1998 編年・3 期頃に位置付けられよう。

〔補記〕本竪穴出土土器群は、くるま橋遺跡編年 2 期の指標の一つである(Ⅲ -4 [小結] 参照)。

SI-1 出土土器 (第 83・121 図、第 5 表)

1・2・3 はロクロ土師器皿。4 は足高のロクロ高台付皿である(皿部の形態は 2 の土器に似る)。いずれも、底部は回転系切り未調整である。6～11 はロクロ土師器高台付碗。なお、6・7・15 の内面はヘラミガキ、黒色処理を施す。

〔補記〕本竪穴出土土器群は、くるま橋遺跡編年 6 期の指標の一つである(Ⅲ -4 [小結] 参照)。

SI-3 出土土器 (第 83・122 図、第 7 表)

1 は猿投窯産の灰釉陶器皿の口縁部破片。ハケ塗りで灰釉を施すことや、口縁端部は強く外反することから黒笹 90 号窯式と考えられる

2 は益子窯産須恵器坏。底部は回転ヘラ切り未調整。3 は新治窯産須恵器坏。大きさ(口径・底径・器高の比率)や、底部に一方向手持ちヘラケズリを施すことから新治窯編年・小高村内窯段階～東城寺寄居前 B 窯段階と推定できる。

4・5 はロクロ土師器坏。底部は回転系切り未調整である。6 はロクロ土師器高台付碗。内面は黒色処理、ヘラミガキを施す。

SI- 4 出土土器 (第 83・122 図、第 8 表)

1 は須恵器坏。底部は回転ヘラ切り後、緩いナデを施す。益子窯産製品と思われる。2 は三毳窯産の須恵器坏。大きさや、底部回転糸切り未調整であることから日陰沢窯段階以降に位置付けられよう。3 は須恵器壺口縁部破片。生産地は不明。

5 はロクロ土師器坏。6 はロクロ土師器高台付坏。いずれも内面黒色処理・ヘラミガキを施す。7・8 はロクロ高台付皿。7 は内面黒色処理・ヘラミガキを施すが、8 は器面処理を全く施さない。5 は常総系土師器甕の口縁部破片。口縁端部が直立することから吉田哲 1998 分類・下野型甕 3 類、檜村 1998 編年・7 期頃に比定できよう。

SI- 7 出土土器 (第 83・84・123 図、第 9 表)

1 は猿投窯産灰釉陶器皿の底部破片。灰釉をハケ塗りすること、高台部が三日月状を呈することから黒笹 90 号窯式と考えられる。

3・4 は須恵器坏。4 は大きさと、底部回転糸切り未調整の益子窯産製品であることから滝ノ入窯段階～倉見沢窯段階に位置付けられよう。5・6 はバケツ形を呈する新治窯産須恵器甕。外面は縦方向の平行叩き、底部下位に手持ちヘラ削りを施す。

7・8・9 はロクロ土師器坏。内面黒色処理・ヘラミガキを施す。10・11 は常総系土師器甕。口縁端部が直立する点、体部が長胴化傾向にある点から吉田哲 1998 分類・2～3 類、檜村 1998 編年・6～7 期頃に相当しよう。

SI- 8 出土土器 (第 84・123・124 図、第 10 表)

1・2 は東濃窯産灰釉陶器皿の口縁部破片。灰釉をハケ塗りする点や、口縁端部が強く外反する点から光ヶ丘 1 号窯式に比定できる。

3 は猿投窯産灰釉陶器皿の口縁部破片。漬け掛けにより灰釉を施す。また、口縁端部は緩く外反する。4 は灰釉陶器底部破片。退化傾向にある三日月状高台を有する。3・4 とも黒笹 90 号窯式後半段階に位置付けておきたい。なお、5・6 は猿投窯産灰釉陶器瓶類の破片である。

7・8・9 は三和窯産須恵器坏。成形上の特徴(ロクロ成形後、体部外面中位から下端にかけて手持ちヘラ削りを施す。底部は回転ヘラ切り後、一方向ヘラナデを施す)と、大きさ(口径・底径・深さ比)からみて、浜の台窯跡段階と考えられる。

10～14 はロクロ土師器坏。15～18 はロクロ土師器高台付皿・椀類。このうち 10・11・12・15・16・17 は内面黒色処理・ヘラミガキを施す。

SI-10 出土土器 (第 85・125 図、第 11 表)

1・2 は須恵器坏。ロクロ成形。体部外面下位に手持ちヘラ削りを施す。底部は一方向ヘラケズリを施す。なお 2 の坏は体部外面に「金」字状の墨書を記している。なお 1 は常陸産、2 は新治窯産製品である。

3 は土師器甕の把手部分である。4 は土師器高台付皿。ロクロ成形。内面黒色処理・ヘラミガキを施す。

5 は小型常総系甕。口縁端部が緩く S 字状に屈曲すること、土器最大径が口縁部近くの胴部上位にあることから吉田 1998 分類・下野型甕 4 類、檜村 1998 編年・7 期に比定できよう。

Ⅲ. 調査成果

SI-11 出土土器 (第 85・125 図、第 12 表)

1・2 は新治窯産須恵器坏。体部外面下位に手持ちヘラケズリを施す。底部回転ヘラ切り後、一方向ヘラケズリを施すことと、大きさ (口径・底径・深さ比) から東城寺窯段階～東城寺寄居前 B 段階に位置付けられよう。7・10 も新治窯産須恵器坏。体部外面下位に手持ちヘラケズリを施す。10 の底部は回転ヘラ切り後、一方向ヘラケズリを施し、「□眞」の墨書が記される。

3・4 は益子窯須恵器蓋破片。天井部のつまみ部分が欠失している。5・6・8・9 は常陸産の須恵器坏と思われる。5 は回転ヘラ切り離し未調整の底部破片。6・8 は体部下端に、やや幅広の手持ちヘラ削りを施す。なお 6 の底部は回転ヘラ切り後、一方向ヘラケズリを施す。9 はロクロ成形のみ。11 は産地不明の須恵器甕体部破片 (外面は平行叩き、内面はナデ後、指ナデと特徴が少ない)。

12 は口縁端部を S 字状かつ直立気味につまみ上げる常総系土師器甕破片。13 は口縁端部を緩く外側につまみ出す常総系土師器甕破片。いずれも、吉田 1998 分類の 3～4 類、樫村編年 7 期に比定できよう。14 は常総系土師器甕の底部破片。体部下位はヘラケズリを施す。底部は木葉痕が残る。

SI-16 出土土器 (第 85・126 図、第 13 表)

1 は益子窯産須恵器坏。底径が大きく二次底部面を有すること、底部回転ヘラケズリを施すことから、原東 2 号窯段階～谷津入窯段階頃に位置付けられよう。

2 は一見するとロクロ土師器のように見える。しかし、ロクロ成形のみで内面処理が全くない (底部は回転ヘラ切り未調整)。それゆえ酸化焰焼成になってしまった須恵器と判断した。なお本土器の胎土は栃木県域～常総地域では見かけないものであり産地不明とした。

3 は堀ノ内窯産の須恵器坏。4 は新治窯産と思われる須恵器甕口縁部破片 (頸部外面に 3 条 1 組の波状文を施す)。

5 はロクロ土師器坏。6 はロクロ土師器高台付坏。いずれも内面黒色処理・ヘラミガキを施す。7 は常総系甕の口縁部破片。口縁部を外方につまみ上げた後、端部に一条の沈線を施す。吉田 1998 分類の 1～2 類の亜種と思われる。

SI-17 出土土器 (第 86・126 図、第 14 表)

1・3 は新治窯産と判断した須恵器坏。体部外面下位に手持ちヘラケズリを施す。大きさや、底部一方向手持ちヘラケズリを施すことから小高村内窯段階～東城寺寄居前 B 段階に位置付けられよう。

2 は益子窯産須恵器坏。底部回転ヘラ切り後、緩いナデを施すことや、大きさから古ヶ原入窯段階～滝ノ入窯段階と考えられる。

4・5・8 は堀ノ内窯産と判断した須恵器坏 (ロクロ成形のみ。底部は回転ヘラ切り後、周縁ナデ)。花見堂 3 号窯 (木葉下系技術から新治系への技術転換する時期) より古い時期の可能性はある。6 は須恵器高台付坏。腰部 (体部・底部境) からやや内側に入った位置に高台部分を貼り付けるのが特徴的である。益子窯産、または堀ノ内窯産の可能性が考えられる。

7 は益子窯産須恵器壺。口縁部上下に断面三角形の粘土を貼り付ける。体部内面はナデ整形を施す。なお外面の大半以上に淡黄色の自然釉が薄く掛かる。

11 は焼き歪みが目立つ新治窯産須恵器中型甕 (上位・中位・底部とも同一個体)。外面には横方向の平行叩きが施される。内面は斜め方向のナデが主体的だが、肩部内面には無文当て具痕が残る。

9 はロクロ土師器碗。内面黒色処理・ヘラミガキを施す。10 は常総系土師器甕の体部～底部破片。体部外面はヘラケズリ。内面はナデを施す。

SI-20 出土土器 (第 87・127 図、第 15 表)

1 は体部外面に斜行叩き、のち 3 条 1 組の細沈線を 2 段に施す。胎土に雲母粒子を含むが、文様構成が統一新羅系土器を彷彿とさせる。それゆえ、本土器も統一新羅系土器の可能性を指摘しておきたい (「IV-2 統一新羅系土器」併照)。

2 は益子窯産須恵器坏。底部は回転ヘラ切り後、緩いナデを施す。4 は体部外面下位に手持ちヘラケズリを施すことや、底部回転ヘラ切りののち多方向手持ちヘラケズリを施すことから常陸産と判断した須恵器坏。

5 は堀ノ内窯産と考えられる須恵器坏。体部外面に手持ちヘラケズリを施していることと、大きさ (口径・底径・深さ比) から花見堂 3 号窯段階～同 2 号窯段階と考えられる。

6 はロクロ土師器碗。体部外面下位に手持ちヘラケズリ、内面は黒色処理・ヘラミガキを施す。9 はロクロ土師器高台付皿。ロクロ成形のち内面ヘラミガキ・黒色処理を施す。

7 はロクロ土師器高台付碗。8 はロクロ土師器高台付皿。いずれも、ロクロ成形、のち内面ヘラミガキを施す。

10 は底部に五孔を穿つタイプの甑破片。底部外面はヘラケズリ。内面はナデ。

SI-21 出土土器 (第 87～89・127～130 図、第 16 表)

1 は統一新羅系土器の甑把手として捉えた。なお把手部分は粘土充填により形作られる。三毳窯産製品のような胎土・焼成・色調である。2 は器種不明製品である。外面は格子叩き、内面はナデ調整。焼成はやや軟質である。

3 は須恵器坏蓋、4・6 は須恵器坏身。陶邑窯編年・TK-209 号窯式併行期頃に位置付けられよう。なお、3 は産地不明、4 は南高岡窯産、6 は三毳窯産の可能性が考えられる。5 は須恵器坏蓋。産地不明だが、つまみ形状や大きさからみて飛鳥編年Ⅱ～Ⅲ併行期頃に位置付けられよう。7・8 は須恵器壺・瓶類の口縁部。口縁部突帯の下に、さらにもう一つリング条突帯を巡らせていることと、胎土・焼成から東海地方 (湖西窯?) 産製品と思われる。9 は高坏の脚部である。

10 は産地不明の須恵器甕体部破片。外面は斜行叩き、内面は同心円状当て具痕が残る。11 は閉塞技法痕跡 (絞り、閉塞板痕) や、窯詰め (横置き焼成) に伴う自然釉付着が認められることから、横瓶の胴部破片として捉えた。胎土・焼成からみて焼きの良い三毳窯産製品、または太田金山窯産製品と推定される。

12～24 は土師器坏。12・14・15・17 は口縁外反坏。25 はこれを大型化した鉢である。16・19 は須恵器坏身を模倣した土師器坏。口縁内面に一条の沈線を施している。18～23 は半球形の坏。口縁部内面に一条の沈線を有するものが目立つ。なお、18・24 は口縁部が短く直立するタイプである。

26～28 は高坏。短脚の脚部上部に小ぶりの外反口縁坏を接合させているのが特徴的である。一方、29・30 も高坏であるが、こちらは裾の広がる脚部上位に大ぶりの皿部を接合させたタイプである。

31・32 は小型球胴形甕。33・34 は大型甕である。緩い「く」の字状口縁を呈すること、ヘラケズリ調整が主体であることから在地系甕であることが分かる。他方、32・35・36 は口縁部を外方に引き出したのち、端部がつまみ出すことや、頸部～肩部にかけてナデ調整を施すこと、体部中位に最大径をもつことなどから常総系甕として捉えてみたい。なお、35 は胎土中に雲母粒が混ざる。

37・38 は口縁部が「く」の字状を呈する在地系の長胴甕口縁部破片。39～42 は底部に木葉痕が残る土師器甕破片。49 は体部外面下端がヘラミガキを施す常総系甕の破片である。

〔補記〕本堅穴出土土器群は、くるま橋遺跡編年 2 期の指標の一つである (Ⅲ-4 [小結] 参照)。

Ⅲ. 調査成果

SI-22A 出土土器 (第 89・90・130～132 図、第 17 表)

1～3 は灰釉陶器碗。1 は猿投窯鳴海地区から東三河にかけての地域の生産と推定される碗。2 は猿投窯産製品。1・2 とも、体部が直線的に開いたのち、口縁端部が強く外反する。加えて、施釉方法がハケ塗りであることから黒笹 90 号窯式頃に比定できよう。一方、3 の碗体部破片は東濃窯産製品である。施釉方法が漬け掛けであることから大原 2 号窯式以降に位置付けられる。

4 は産地不明の須恵器坏の口縁部～体部破片。5・6・8 は益子窯産の須恵器坏底部破片。とくに 6 は底部に「二」字状のヘラ記号が記されている。9 は三毳窯産の須恵器蓋天井部つまみ部分破片。

10～17 はロクロ土師器。11～16 は、いずれも内面ヘラミガキ・黒色処理を施す。他方、10・17 もロクロ土師器坏だが黒色処理は施していない。

18～20 は在地系土師器甕の口縁部破片。18 は口縁部が「コ」の字状を呈することから鶴田中原タイプ甕の一種と推定される (池田 1994,163～165 頁・池田 2000,203 頁)

〔補記〕本竪穴出土土器群は、くるま橋遺跡編年 5b 期の指標の一つである (Ⅲ-4 [小結] 参照)。

SI-22B 出土土器 (第 90・132・133 図、第 18 表)

1 は外面叩き、内面同心円状叩きを施す須恵器甕体部破片。産地不明。2 は須恵器坏身を模倣した土師器坏。口縁部内外面に漆仕上げが施される。3～5 は口縁部が直立するタイプの土師器坏。

6 は手づくね土器。内外面に炭素を吸着させ黒色処理している。7 は口縁外反鉢の口縁部破片。内面漆仕上げ。8 は半球形の鉢である。外面はヘラケズリ。内面はナデ調整のみ。

9 は球胴系の土師器甕。10・12 は長胴甕である 12 は図上で全形復元した甕。口縁部に最大径を有し、器高も 36cm ほどあることから 7 世紀中葉～後葉頃に位置付けられよう。

〔補記〕本竪穴出土土器群は、くるま橋遺跡編年 2 期の指標の一つである (Ⅲ-4 [小結] 参照)。

SI-23 出土土器 (第 91・133・134 図、第 19 表)

3・5・6 は三毳窯産と判断した須恵器高台付坏。底部出っ尻気味 (3) のものと平底 (6) が混在することと、大きさから見て北山・八幡窯～和田窯段階頃に比定しておきたい。10 も三毳窯産製品。坏部が深いため須恵器高坏として認識した (坏身体部下端に手持ちヘラケズリを施す)。

4・7 は益子窯産の須恵器坏。底部回転ヘラ切り後、緩いナデを施す。11 は須恵器小型盤。底部切り離した後、全面回転ヘラヘケズリ。腰 (体部・底部境) に高台部を貼り付けている。益子窯産と考えた。

8 は堀ノ内窯産須恵器坏。底部は切り離した後、全面回転ヘラヘケズリを施すことと、底部の大きさから花御堂 1～4 号窯段階に位置付けられよう。

14・15 は口縁端部が緩く外方につまみ上げられていることから檜村 1998 編年 4～5 期に比定出来る。

17 は常総系甕の口縁部形を模倣した在地産土師器甕 (鶴田中原タイプ甕の一種) である。

〔補記〕本竪穴は遺構重複が著しいが、遺構重複整理、出土土器編年 (ともにⅢ-4 [小結] 参照) の結果、9 の新治窯産須恵器坏、19・20 の常総系土師器甕は他遺構からの混入品と判断した。

SI-24 出土土器 (第 92・134・135 図、第 20 表)

1 は体部外面に 3～4 条の細沈線を施す。包含層で出土した統一新羅系土器広口壺 (包-2) の胎土・焼成に近似する (「Ⅳ-1- b . 統一新羅系土器」で詳述)。

3 は猿投窯産の原始灰釉陶器壺。赤褐色を呈する体部外面に自然釉 (緑色) が掛かるのが特徴である。生産年代は鳴海 32 号窯～折戸 10 号窯段階に相当しよう。

14 は猿投窯産の灰釉陶器壺瓶類の肩部破片である。

4 は須恵器環。体部外面および底部多方向ヘラケズリを施す。常陸産須恵器であろう。6 は益子窯産須恵器蓋。内面口縁端部付近に焼成時重ね焼き痕跡 (淡黄色の自然釉が掛かる) あり。

5 は新治窯産の須恵器壺・瓶類口縁部。7 は益子窯産須恵器甕の頸部破片。波状文痕跡と工具によるナデ痕跡が認められる。

8・9 はロクロ土師器環。11・12 はロクロ土師器高台付環。9・11・12 は内面黒色処理後、ヘラミガキを施す。なお、8 の器面処理はヘラミガキのみ。

13・14 は吉田 1998 分類・3 類、檜村 1998 編年・7 期に相当する常総系土師器甕。ちなみに、13 の外面調整はミガキを施さず、ヘラケズリのみである。15 は土師器甕底部破片。底部に木葉痕が残る。

SI-25 出土土器 (第 92・135 図、第 21 表)

1 は須恵器瓶の頸部破片。生産地は不明。2 は焼成がやや軟質な須恵器環。底部回転ヘラ切り未調整。益子窯産製品または堀ノ内窯産製品か。3 は益子窯産須恵器環。底部回転ヘラ切り後、緩いナデ。

4・5 はロクロ土師器環。いずれも内面黒色処理・ヘラミガキを施す。なお 4 は円盤状になっている。転用紡錘車として加工しかけた製品 (何らかの理由で、作業を中断した未製品) かもしれない。

7 は在地系土師器甕の口縁部。8 は吉田 1998 分類・3 類、檜村 1998 編年・7 期に相当する常総系土師器甕の口縁部破片。6 は常総系土師器甕の体部～底部破片。外面調整はヘラケズリのみであるうえ、胎土に雲母粒を含まない。筑波地域以外で生産された常総系甕と推定される。

SI-26 出土土器 (第 93・136 図、第 22 表)

1・2 は東濃窯産灰釉陶器碗の底部破片。いずれも高台部は退化傾向にある三日月高台。灰釉は漬け掛けである。光ヶ丘 1 号窯式後半～大原 2 号窯式段階に比定できよう。

3・4 は益子窯産須恵器。3 の底部は回転ヘラ切り後、緩いナデを施す。4 は蓋の外面全体に自然釉 (淡黄色) が付着する。

5～7 はロクロ土師器皿。いずれも底部は回転糸切り未調整。8 は底部に五孔を穿つタイプの甑破片。底部外面はヘラケズリ。内面はナデ。

SI-27 出土土器 (第 93・136・137 図、第 23 表)

1～4 は益子窯産須恵器環。いずれも底部は回転ヘラ切り後、緩いナデを施す。なお 1・18 は谷津入窯式～段階に比定できよう。6 は底部回転糸切り痕が残る須恵器環。胎土・焼成・色調から益子窯産製品と考えられる。なお、益子窯でも谷津入窯式段階～滝ノ入窯式段階まで一時的に回転糸切り技法が技術流入され、少量ながら生産が行われている。

5 は新治窯産須恵器環。体部下位と底部一方向に手持ちヘラケズリが施される。東城寺桑木窯式段階～小高村内窯式段階に相当しよう。8 は益子窯産須恵器短頸壺の破片である。

7 は須恵器鉢類の口縁部破片。口縁端部の内側に三角形突起を付すのが特徴的である。生産地は不明。

8 は益子窯産須恵器短頸壺の破片である。9 は益子窯産須恵器甕の頸部～肩部破片。内外面に自然釉 (淡黄色) が薄く付着する。10・11 は新治窯産須恵器甕の体部破片。いずれも外面に平行叩き痕を施す。

12 はロクロ土師器碗。13 は吉田 1998 分類・2～3 類、檜村 1998 編年・6～7 期に相当する常総系土師器甕の口縁部破片。17 は体部外面をヘラケズリする常総系土師器甕の底部破片。胎土に雲母粒を多量に含むことから筑波地域産製品と分かる。

Ⅲ. 調査成果

SI-28 出土土器 (第 94・137 図、第 24 表)

1 は灰釉陶器瓶類の頸部破片である。2・3 は益子窯産製品。2 は坏の底部破片。底部はナデ調整。3 は高台付坏。底部は全面回転ヘラケズリ。4 は三毳窯産と考えられる須恵器坏。底部外面に朱が残る。5 は益子窯産須恵器坏の底部破片。割れ口面を丁寧に再調整している。おそらく破片を紡錘車に転用しようとしていたところ、何らかの理由で作業が中断。その後、本竪穴跡に廃棄されたものであろう。

6・7 はロクロ土師器坏。内面黒色処理・ヘラミガキが施される。8 は口縁部が直立傾向にある常総系土師器甕。吉田 1998 分類・2～3 類に相当するのであろうが、口縁端部に波状の刻み目を施す点が独自である。

SI-29 出土土器 (第 94・138 図、第 25 表)

1 は益子窯産須恵器破片。底部は回転ヘラケズリを施す。2 は三毳窯産と考えられる須恵器高台付坏。ただし高台部分は欠失が目立つ。3 は須恵器甕の頸部～肩部破片。内外面とも自然釉 (淡黄色) が付着する。

4・5 は半球形を呈する土師器坏。6 は 4 の半球形坏を大型化したような形態の鉢。内面はヘラミガキ・漆仕上げを施す。7・15 は土師器甕の口縁部破片。6 は土師器甕の底部破片。木葉痕が残る。

SI-31 出土土器 (第 94・138 図、第 26 表)

1 は益子窯産須恵器高台付坏。焼き歪みが目立つことから産地から直送されてきたものと推察される。大きさや、底部が平底であるからみて原東 1・3 号窯～2 号窯段階に位置付けられよう。2・3・4 は須恵器坏蓋。2・3 は産地不明。4 は益子窯産製品である。

5 は東海地方産製品。平瓶の口縁部と思われる。6 は小型瓶類の肩部破片である。内面に頸部二段以上の接合痕跡が残る。7 は常総系土師器甕の底部破片。体部外面は縦位のヘラミガキを施し、底部に木葉痕が残る。

SI-33 出土土器 (第 95・139 図、第 27 表)

1・3 は産地不明の須恵器。2 は常陸産の須恵器坏。体部下端の手持ちヘラケズリがなく、底部も大きめである。

4 は口縁部が「く」の状を呈する土師器長胴甕の口縁部破片。口縁端部が、玉縁状になるのが特徴的である。甕 7 と同時期と思われる。7 は土師器長胴甕の体部～底部。現存の器高でも 26.9cm あることからだけでも長胴化傾向が著しい時期 (7 世紀代) のものであることが明らかである。

5 は体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデの土師器甕 (底部外面欠損)。胎土に雲母粒が混入していることから常総系甕であることがうかがい知れる。

〔補記〕本竪穴は遺構重複が著しい。しかし、遺構重複整理 (Ⅲ-4b [小結] 参照)、出土土器編年 (Ⅲ-4a [小結] 参照) の結果、1～3 の須恵器、5 の常総系甕底部破片は他遺構からの混入品と判断した。

SI-34 出土土器 (第 95・139 図、第 28 表)

1・2 は外面叩き、内面同心円条叩きの須恵器甕体部破片。3 は外反口縁坏。内面はナデ・漆仕上げである。1～3 とも混入品と考えられよう。4 の常総系土師器小型甕は口縁部が外方に引き出すこと、最大径が体部中位にあることから吉田 1998 分類・2～3 類、樫村 1998 編年・6 期に比定出来よう。5 は常総系土師器甕の体部破片。外面には縦位のヘラミガキのちナデを施す。6 も常総系土師器甕底部である

SI-35 出土土器 (第 95・96・139・140 図、第 29 表)

1 は半球形の外反口縁坏である。口縁部・体部境の稜が明確なのが特徴的である。2 も半球形の外反口縁

坏であるが、口縁部に数条の段がもうけられている。上武地域の有段口縁坏の系譜を引いていると思われる。

3～8は土師器長胴甕である。6・7は、ほぼ完形品である。いずれも体部外面はヘラケズリ、内面はナデ調整である。

〔補記〕本竪穴出土土器群は、くるま橋遺跡編年2期の指標の一つである(Ⅲ-4〔小結〕参照)。

SI-37 出土土器 (第97・140図、第30表)

1～3は須恵器坏蓋。1の、つまみ部分は山形状を呈する。また3の口縁端部は鶴首状をなす。いずれも8世紀代の須恵器に多くみられる属性である。4・5は壺・瓶類の口縁部から肩部の破片。6は益子窯産の須恵器甕体部破片。

3～8は土師器長胴甕である。口縁部が「く」の字状に外反。口径が土器最大径で、器高も高い(30cm越)のが特徴である。6・7は、ほぼ完形品である。8は甕体部下位が部分的に欠損するのみ。

7～13は土師器甕。8・10は口縁部が外方に引き出されたのち、端部がつまみ出されることから常総系甕の口縁部破片と判断できた。吉田哲 1998 分類・1～2類、檜村 1998 編年・6期頃に相当しよう。9・11・12も常総系甕の体部破片。外面には縦位のヘラミガキのちナデを施す。

〔補記〕本竪穴出土土器群は、くるま橋遺跡編年4期の指標の一つである(Ⅲ-4〔小結〕参照)。

SI-38 出土土器 (第97・98・140図、第31表)

1・3は益子窯産の須恵器坏。底部が回転ヘラ切り未調整であることや、大きさから滝ノ入窯段階に比定できよう。2は常陸産の須恵器坏。大きさや、体部下端に手持ちヘラケズリを施すこと、底部が一方向手持ちヘラケズリであることから新治窯編年・小高村内窯～東城寺寄居前B段階併行期頃に位置付けられよう。

4・10・11は益子窯産と思われる須恵器。うち4は体部外面に自然釉が垂下する瓶の体部破片。

5は猿投窯産灰釉陶器。体部が直線的に開くうえ、施釉方法はハケ塗り。6は箱形を呈する須恵器坏。胎土も精選され、焼成も硬くしまっている。おそらく、東海地方からの搬入品であろう。8は底部ヘラ切りと、体部下端に手持ちヘラケズリを施していることから常陸産と考えた。なお、12の須恵器高台付坏は体部内側に入り込んだ位置に高台部を貼り付けることから堀ノ内窯産製品の可能性が考えられる。7は三毳窯産須恵器坏、9・13は産地不明製品である。

14・16～18は常総系土師器甕の破片。14・18は口縁端部を直立的につまみ上げることから吉田哲 1998 分類・3類、檜村 1998 編年・7期に比定出来る。

一方、15は上武系土師器甕破片である。口縁部が「コ」の字状を呈することから桜岡 1991 編年Ⅶ段階頃に比定できる。

〔補記〕本竪穴出土土器群は、くるま橋遺跡編年5a期の指標の一つである(Ⅲ-4〔小結〕参照)。

SI-39 出土土器 (第98・142図、第32表)

1は土師器球胴甕。体部外面上位はハケメ、外面下端はヘラケズリ、内面は幅狭の工具を用いたナデを施す。4も球胴甕の体部破片だが、こちらは内外面ともハケメである。2は土師器碗。体部外面はヘラケズリのちヘラミガキ。内面はヘラナデのち部分的にヘラミガキである。4は台付碗の碗部分が残ったもの(脚部欠損)。内外面ともやや粗いナデ。

〔補記〕本竪穴出土土器群は、くるま橋遺跡編年1期の指標の一つである(Ⅲ-4〔小結〕参照)。

Ⅲ. 調査成果

SI-40 出土土器 (第 99・142 図、第 33 表)

1・2 は益子窯産須恵器。1 の坏蓋はつまみ部分が山形状であること、大きさから原東 4 号窯～2 号窯段階と考えられる。焼き歪みが著しいことから、産地から直送されてきた可能性が高い。2 の坏は体部下端に「千」字状の刻字 (またはヘラ記号) がある。調整が底部回転ヘラケズリであることや、体部下端に二次底部面を有すること、大きさから原東 2 号窯段階頃と考えられる。3 は底部欠損が著しいが常陸産のバケツ型須恵器甑である。体部外面が横方向のナデ、外面中位から下端にかけて粗い手持ちヘラケズリを施すことから新治窯編年の東城寺窯併行期 (= 8 世紀後葉) 以降の可能性が高い。

4～9 はロクロ土師器。なかでも 4・5 は新治窯系須恵器技術 (体部外面下端に手持ちヘラケズリを施すこと、底部一方向手持ちヘラケズリ) が土師器に転用されていることから常陸産のロクロ土師器坏と考えた。

10・11 は在地系の土師器甕、12・16・17 は常総系甕の破片である。なお、12 は口縁端部を直立的につまみ上げることから吉田哲 1998 分類・3 類、樫村 1998 編年・7 期に比定出来る。

〔補記〕本竪穴は遺構重複が著しい。しかし、遺構重複整理、出土土器編年 (共にⅢ-4 [小結] 参照) の結果、1・2 の益子窯産須恵器は他遺構からの混入品と判断した。

SI-41 出土土器 (第 99・100・143 図、第 34 表)

1～3 は須恵器高台付坏の破片。1 は常陸産、2 は益子窯産、3 は産地不明である。4 は焼き歪みが目立つ須恵器蓋破片。5 は頸部に数条の波状文を施す須恵器甕破片。6 は須恵器壺類の口縁部破片。4～6 は、いずれも産地不明である。

7・8 は非ロクロ整形土師器坏。10,13 は常総系土師器甕、11,12 は常総系土師器小型甕。いずれも口縁端部直立気味につまみ上げること、胴部上位に土器最大径があることから吉田 1997 分類 3 類、樫村 1998 編年 7 期に相当しよう。なお、9 は常総系土師器甑である。上記 10～13 と同タイプの口縁部であることから吉田 1998 分類・3 類併行期に比定しておきたい

SI-42 出土土器 (第 100・144 図、第 35 表)

1 は東濃窯産灰釉陶器の高台付皿。やや緩い稜をもつ角高台であること、施釉がハケ塗りであることから光ヶ丘 1 号窯式に比定できる。2 は新治窯産須恵器坏の破片。体部下端は手持ちヘラケズリ、底部は一方向手持ちヘラケズリ。

4・5 は内面ヘラミガキ・黒色処理のロクロ土師器坏類。6～8 はロクロ土師器坏。器面処理は施されていない。底部は回転糸切り未調整である。なお、4・7・8 は口縁端部がやや強く外反するのが特徴的である。

SI-43 出土土器 (第 101・144 図、第 36 表)

1 は須恵器坏蓋破片。2～4 は益子窯産と思われる須恵器坏底部破片で、3・4 はヘラ記号が記される。5・6 はロクロ土師器の破片。坏部の内面はヘラミガキのみである。7 は常陸系土師器甕の口縁部破片。1 は口縁端部が S 状、かつ直立につまみ上げられていることから吉田 1998 分類 4 類、樫村 1998 編年 7 期に比定できよう。

SI-44 出土土器 (第 101・145 図、第 37 表)

1 は猿投窯産灰釉陶器壺瓶類の体部下端～底部破片。体部外面に灰釉が垂下する。井ヶ谷 78 号窯式～黒笹 14 号窯式に相当しよう。

2 は益子窯産須恵器坏蓋 (つまみ部分は復元図)。3 は酸化焰焼成気味に焼き上がった益子窯産須恵器坏。底部調整が回転ヘラ切り未調整であることや、大きさから古ヶ原入窯段階に比定しておく。4 は常陸産の須恵器坏底部破片 (底部一方向手持ちヘラケズリ)。体部・底部境を意図的に打ち欠いている。おそらく紡錘車に転用するためであろう (しかし、何らかの理由により、その作業は中断・未完成に終わったようである)。

5 は産地不明の須恵器坏。底部回転ヘラ切り後、緩いナデを施す。6 は常陸産の中型甕。体部下端に明瞭な手持ちヘラケズリを施すことから新治窯編年の東城寺桑木窯～小高村内窯段階併行期以降 (= 8 世紀後葉以降) に位置付けられよう。

7 は上武系土師器甕の破片。口縁部は「く」字状～「コ」の字状に変化していく途中にあることから桜岡 1991 編年 V～VI 段階に比定できる。他方、8 は常総系土師器甕の破片。吉田 1998 分類・1～2 類、樫村 1998 編年・5～6 期に相当しよう。

〔補記〕本竪穴出土土器群は、くるま橋遺跡編年 5a 期の指標の一つである (Ⅲ-4 [小結] 参照)。

SI-45 出土土器 (第 101・145 図、第 38 表)

1 は堀ノ内窯産須恵器坏。新治窯系製作技術 (体部下端手持ちヘラケズリ) が導入されていることや、大きさから花見堂 3 号窯段階に比定できよう。3 は体部下端手持ちヘラケズリが施される常陸産の須恵器坏、4 はロクロ成形のみの須恵器坏である。胎土・焼成からみて堀ノ内窯産製品の可能性がある。6 は益子窯産と思われる須恵器高台付坏底部破片。7 は常総系土師器甕の破片。体部外面下端までヘラミガキ、内面はナデが施される。

SI-46 出土土器 (第 102・146 図、第 39 表)

1・2 は常総系土師器甕の口縁部～体部上位破片。1 は口縁端部が三角状、かつ直立的につまみ上げられていること、口縁直下の胴部径が大きいこと (おそらく、この位置が土器最大径であること) から、吉田 1998 分類・4 類、樫村 1998 編年・7 期に比定できよう。

SI-47 出土土器 (第 102・146 図、第 40 表)

1・3 は三毳窯産須恵器と思われる。1 の坏は口縁部が強く外反することから大芝原窯段階であろう。3 の甕破片は外面斜行叩き、内面ナデである。2 は土師器甕の口縁部破片。断面形が「く」の字状を呈する一方、口縁が外方につまみ出され端部に一条の沈線が施される。常総系甕の要素を取り入れた在地甕 (鶴田中原タイプの一種) である。

SI-48 出土土器 (第 102・146 図、第 41 表)

1・2 は益子窯産須恵器坏。いずれも底部回転ヘラ切り後、緩いナデを施すことや、大きさから古ヶ原入窯～滝の入窯段階に比定できよう。3 は常陸産の須恵器中型甕の口縁部破片。口縁端部が S 字状につまみ上げられていることから新治窯編年・東城寺寄居前 B 段階併行期以降のものと思われる。4 は新治窯産の須恵器大型甕破片。体部外面が粗い手持ちヘラケズリであることから、小高村内窯段階以降 (= 9 世紀代) に位置付けられよう。5・6 はロクロ土師器破片。5 は内面黒色処理を施す。7 は常総系土師器甕。口縁端部が三角状、かつ直立的につまみ上げられていることから吉田 1998 分類・3 類、樫村 1998 編年・6 期頃に比定できよう。

Ⅲ. 調査成果

SI-50 出土土器 (第 102・146 図、第 42 表)

1 はロクロ成形土師器坏。体部外面下端に手持ちヘラケズリを施すことから常陸産と推定される。なお、内面はヘラミガキのみである。2 は常総系土師器小型甕。口縁端部が S 字状、かつ直立的につまみ上げられていることから吉田 1998 分類・2 類、樫村 1998 編年・6～7 期頃に比定できよう。

SI-52 出土土器 (第 103・146・147 図、第 43 表)

1 は猿投窯産灰釉陶器壺の破片。2・3 は産地不明の須恵器坏と蓋、5 は新治窯産の須恵器小型円面硯破片。4 は常陸系土師器甕の口縁部破片。断面形が三角状を呈すること、口縁を直立的につまみ出し、かつ端部に沈線を施すことから吉田 1998 分類・3 類、樫村 1998 編年・7 期に比定できよう。

SZ-53 出土土器 (第 103・147 図、第 44 表)

1 は土師器高坏の脚部分。現存高 8.5cm の脚高があることから藤田 1999 編年 V 期より新しくなることはないと考えられる。

SI-54 出土土器 (第 103・147 図、第 45 表)

1 は産地不明の須恵器坏。2 はロクロ土師器坏。内面はヘラミガキのみ施す。3～7 は常総系土師器甕破片である。4・5 は口縁端部を外方につまみ上げること、端部断面形が S 字状を呈することから吉田 1997 分類・2～3 類、および樫村 1998 編年・6 期に相当しよう。なお、7 は口縁を直立的につまみ出すこと、胴部上位に土器最大径があることから吉田 1998 分類・3 類、樫村 1998 編年・6 期に比定できる。

SK-55 出土土器 (第 103・147 図、第 46 表)

1 は上武系土師器甕の破片。口縁部が「く」の字状を呈すること、体部外面上位が横位のヘラケズリであることから桜岡 1991 編年 IV～V 段階に相当しよう。

SI-57 出土土器 (第 103・104・147・148 図、第 46 表)

1 は三毬窯産の可能性がある須恵器坏身破片。陶邑窯編年・TK209 号窯式併行期に相当しよう。2 は外面格子状叩き、内面同心円状叩きの須恵器甕破片。3・4 は口縁部内面に沈線を施すタイプの半球形土師器坏。6 も半球形の土師器坏だが、こちらは口縁内面の沈線がなく、器面処理で放射状ミガキが行われる。5 は外反口縁坏である。7 は土師器球胴甕破片。内外面とも緩めのヘラケズリ、ないしヘラナデが施される。

SI-58 出土土器 (第 104・148・149 図、第 47 表)

1・2 は猿投窯産の灰釉陶器破片。3・4 は猿投窯産の原始灰釉陶器破片。猿投窯編年・鳴海 32 号～折戸 10 号窯式頃に比定できよう。4 の須恵器坏は、大きさや、胎土・焼成から見て、堀ノ内窯産・花見堂 2 号窯段階頃と考えた。5 は体部下端に手持ちヘラケズリを施すことから常陸産須恵器として捉えた。

12～15 はロクロ土師器皿。ロクロ成形のみで底部は回転糸切り未調整。田熊・梁木 1990 編年 VII 期以降の可能性が高く混入品と推定される。16 はロクロ土師器坏の底部破片。円盤状を呈する。転用紡錘車を作ろうと試みたものの、途中で、その作業を中止したようである。

17～20 は常総土師器甕である。17・19 は縁部が直立することから吉田 1998 分類・3 類、樫村 1998 編年・6 期に比定できよう。

SI-59A 出土土器 (第 105・149 図、第 48 表)

1 は猿投窯産の灰釉陶器壺瓶類体部破片である。2 は新治窯産、3・5 は常陸産の須恵器坏である。大きさや、底部調整が一方手持ちヘラケズリであることから新治窯編年・小高村内窯段階～東城寺寄居前 B 段階に併行する時期と思われる。4・6・7 は益子窯産製品である。4 は火襷痕が残る資料である。口径・底径比が 2/3 あることから原東 2 号窯段階以前のものと推定しておきたい。8・9 はロクロ成形土師器である。ロクロ成形のみで器面処理は全くなされていない。

SI-59B 出土土器 (第 105・149・150 図、第 49 表)

10 は常陸産須恵器。11 は新治窯産須恵器。ともに口縁端部：底部が 2/3 あるにもかかわらず、器高が少し深めである。また、底部も回転ヘラ切り未調整である。これらから、新治窯編年・小高村内窯段階～東城寺寄居前 B 段階に併行する時期と思われる。13～17 はロクロ成形土師器坏である。いずれも、体部下半～腰部に丸味を有していること、内面はヘラミガキのみ (黒色処理なし) であることなどから田熊・梁木 1990 編年Ⅲ期に位置付けられよう。なお、15 は常陸地域産製品である。また、16 の内面はタールが付着しており、燈明具として転用されている。

SI-59A または 59B の土器 (第 105・106 図、第 50 表)

18 は常陸産須恵器。口縁端部は若干外反気味であるが、底部は大きめである。新治窯編年・東城寺寄居前 B 段階に併行する時期と思われる。20 は新治窯産須恵器甕の底部破片。体部下端に手持ちヘラケズリを施すことから東城寺窯段階以降のものであることは間違いなからう。

21・22・23 はロクロ成形土師器坏。21・22 の底部は回転糸切り未調整、23 は回転ヘラケズリのち、高台部貼り付けである。

24・25・26 もロクロ成形土師器坏であるが、こちらは内面ヘラミガキを施す (ただし、黒色処理せず)。

27 は有台の円盤状を呈する土器。内外面とも細かなヘラミガキを施し黒色処理を施す。口縁端は短く屈曲するようである。本稿では耳皿として取り扱った。

28 は上武系土師器小型甕の脚部破片。胎土・焼成からみて当該地域からの搬入品の可能性が高い。

SI-59C 出土土器 (第 106・150 図、第 51 表)

29・31・32 は益子窯産須恵器。29 は天井部のつまみが扁平山形ボタン状を呈している。また 32 の高台付坏の脚部は外方に踏ん張りが入るうえ、底部も大きめである。これらは、谷津入窯段階以前に位置付け可能と思われる。

33 は益子窯産の須恵器盤皿部破片。脚部の透かし孔を三方向に開けている。34 は須恵器碗の脚部破片。かなり丁寧に成形されている。なお、脚部の透かし孔は方形である。35・36 は非ロクロ成形の外反坏。35 の底部は平底気味であり、このタイプの坏としては後出のものと推定される。一方、35 の坏は内面ヘラミガキ・黒色処理を施している。くるま橋遺跡 2～3 期頃のものが混入した結果であろう。

37・38 は常総系土師器甕。37 は口縁部を外方につまみ出すこと、胴部上位に土器最大径がないことから吉田 1998 分類・1～2 類、檜村 1998 編年・5～6 期に比定できる。

SI-60 出土土器 (第 106・151 図、第 52 表)

1 は緑釉陶器の体部小片。猿投窯産製品か。2 は体部下端に手持ちヘラケズリを施す三和窯産須恵器。大きさから見て古屋東窯段階と思われる。であるならば、本竪穴での出土は混入品の可能性がある。4 はロク

Ⅲ. 調査成果

ロ成形土師器坏。内面はヘラミガキ・黒色処理を施す。5は非筑波地域産の常総系土師器甕口縁部破片(胎土に雲母含まず)である。口縁を三角状につまみ出すこと、口縁部・肩部境が鋭角な「く」の字状で、かつ肩部に最大径を有することから吉田 1998 分類・4 類、樫村 1998 編年・7 期に比定できよう。なお、

SI-61 出土土器(第 107・151・152 図、第 53 表)

1・2は猿投窯産の原始灰釉陶器壺の口縁部破片と思われる。2は鳴海 32 号窯～折戸 10 号窯段階頃に比定できよう。3は猿投窯産の灰釉陶器壺瓶類の肩部破片。頸部二段接合痕跡が残る。4は堀ノ内窯産須恵器坏。花見堂 3 号窯(木葉下系技術から新治系へと技術転換する時期)よりは古い時期に位置付けられよう。

5・6は三毳窯産須恵器坏。大きさや、底部切り離し・調整法(回転系切り後、回転ヘラズリ)、腰部に二次底部面を有することから、下津原窯～三通窯段階に比定できる。

7・8は益子窯産の須恵器坏。底部回転ヘラ切り後、緩いナデを施すことや、大きさから見て原東 2 号窯～谷津入窯段階と考えられる。9は益子窯産の須恵器壺瓶類底部破片。体部外面に自然釉が付着する。

11は半球形外反坏。内面にヘラミガキを施す。12・13・14は皿状の坏。外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキ。底部は平底状を呈する。なお、これらは赤橙色～赤褐色系の色調を呈し目立つ土器である(下野河内地域に主体的に分布するタイプ)。

15～17は常総系土師器甕の破片。16は口縁端部を外方につまみ出すことから吉田 1998 分類・1 類、樫村 1998 編年・5 期に比定できよう。

SI-62 出土土器(第 107・152 図、第 54 表)

1は益子窯産と考えられる須恵器坏。大きさや、底部が丸みを帯びていることから原東 4 号～1・3 号窯段階頃に位置付けておきたい。2は体部下端手持ちヘラケズリを施す新治窯産須恵器坏。

3は皿状の坏。SI-61 の 12～14 と同じタイプの土器である。4は半球形状の口縁部直立坏。口縁内面に沈線を施す。5は口縁部が「く」の字状を呈する土師器甕の口縁部破片である。

SI-63 出土土器(第 108・152 図、第 55 表)

1～5は、いずれもロクロ土師器である。1・2は坏の底部破片。5は碗の口縁部破片。いずれも、ロクロ成形のみで、器面処理は全く施されていない。

一方、4の高台付坏の底部破片は、土器内面にヘラミガキが施される(ただし、それ以外の器面処理はされていない)。また、3の口縁部破片は、内面ヘラミガキ・黒色処理が施されている。

SI-64 出土土器(第 108・152 図、第 56 表)

1は土師器小型壺。外面はヘラケズリ、内面ナデ。2は半球形状の坏。3・4は口縁端部が外反する土師器鉢。体部外面は丁寧なヘラケズリ、内面はヘラナデ。5・6は土師器高坏の皿部分。内外面ともヘラミガキが施される。7は土師器甕の底部破片。8は甕の底部破片。9・10は土師器壺の底部破片である。内外面ともヘラミガキが施される。

〔補記〕本竪穴出土土器群は、くるま橋遺跡編年 1 期の指標の一つである(Ⅲ-4 [小結] 参照)。

SI-65 出土土器(第 108・109・153 図、第 57 表)

1～7はロクロ土師器で本竪穴への混入品と判断した。1～4・7はロクロナデによる調整のみである。一方、5・6は内面ヘラミガキ・黒色処理を施す。

8は須恵器甕の体部破片。外面は斜め叩き、内面はナデである。9～12は須恵器のかえり蓋破片。かえり部分は、やや鋭利であることから7世紀後半代に位置付けられよう。

13・14は外反口縁坏の破片。13は内面ヘラミガキ・漆仕上げを施す。14は内面ヘラミガキのみで器面処理はない。15は半球形で口縁部が短く直立するタイプの坏。内面はヘラミガキを施す。色調は橙色である。下野河内地域に主体的に分布する土器である。18・19も15に似たような器形である。ただし、こちらは内面はナデ、色調もにぶい橙色～褐灰色である。20は須恵器を模倣した土師器坏がリサイズした形態の鉢である。口縁部・体部境付近は細い工具を用いたヘラナデが施される（一見するとヘラミガキのように見える）。

21～27は土師器甕。22は最大径が口縁部にあるタイプの長胴甕破片。23・24は口縁部が「く」の字状を呈する甕破片である。肩部分に丸味を持つことから球胴形になると思われる。なお、21は、23・24を小型形状化した甕と思われる。

〔補記〕本竪穴は、後世の手による遺構覆土攪拌が著しい。しかし、遺構重複整理、出土土器編年（共にⅢ-4〔小結〕参照）の結果、1～7は混入品と判断した。

SI-67 出土土器（第109・110・154図、第58表）

1・3は益子窯産の須恵器坏。大きさや、1の底部が回転ヘラ切り未調整であることから古ヶ原入窯～滝ノ入窯段階に比定できよう。2は常陸産の須恵器坏。大きさや、体部下端が手持ちヘラケズリであること、底部を一方向手持ちヘラケズリすることから新治窯編年・小高村内窯段階以降に推定しておきたい。

4～8はロクロ土師器。4はロクロナデのみである。8は内面ヘラミガキのみを施す。5～7は内面ヘラミガキ・黒色処理を施す。

9は産地不明。ただし、つまみ部分がボタン状の形態を呈することから9世紀代に位置付け可能である。一方、10は、かえり蓋破片。11はリング状つまみ蓋破片である。10～11は、ともに7世紀後半～8世紀初頭頃に位置付けられる資料であることから本竪穴への混入品として捉えることが出来よう。14は土師器甕の底部破片である。12・13は須恵器甕破片である。外面格子状叩き、内面同心円状叩きであることから生産年代は概ね7～8世紀頃と推定される。これらも本竪穴への混入品であろう。

15は常総系土師器甕の体部下半の破片。外面に縦位のヘラミガキ、内面ナデが施される。16は外面ヘラケズリが施された甕であるが、形態からみて筑波地域以外で生産された常総系土師器甕と考えられる。吉田1998分類・2類以降、檜村1998編年・6期以降に位置付けられよう。

SI-68 出土土器（第110・111・155図、第59表）

1は猿投窯産の原始灰釉陶器壺瓶類の体部破片。鳴海32号窯～折戸10号窯段階に比定出来る。伝世品または混入品と推定される。2は8世紀前半代以前の須恵器甕体部破片。これも混入品であろう。3は須恵器硯破片。脚部外面に×字状の文様がヘラ描きされる。6・7は益子窯産須恵器。

9は酸化焰焼成土器。色調は明赤褐色を呈する。調整はロクロナデのみで、底部も回転糸切り未調整である。本稿では、ロクロ土師器坏として報告することとした。8・10はロクロ土師器坏類。内面にヘラミガキ・黒色処理を施す。11・12もロクロ土師器坏。こちらはロクロナデのみで、器面処理は全く施されない。

13～15は常総系土師器甕の口縁部破片。13・14は吉田1998分類・3類、檜村1998編年・7期に、15は吉田1998分類・4類、檜村1998編年・7期に比定できよう。いずれも小破片であることから本竪穴よりは後出（流入品）の可能性を想定してみたい。

Ⅲ. 調査成果

SI-70 出土土器 (第 111・156 図、第 60 表)

1～3 は益子窯産の須恵器坏。底部回転ヘラ切り後、緩いナデを施すことや、腰部に二次底部面を有することから原東 2 号窯～谷津入窯段階頃に比定できよう。

4・6 は産地不明の須恵器坏。口径・底径比が 2/3 あり、器高も 4cm ほどであること、腰に二次底部面を有すること、底部回転ヘラケズリを施すことから、これらも 8 世紀後半代に位置付け可能と思われる。5 は三毳窯産須恵器坏の口縁部破片。7 は須恵器盤の破片である。産地不明。

8 は須恵器坏類破片。口縁部外面に二条の沈線を施す。当初は、胎土・焼成・色調から益子窯産須恵器として識別した。しかし、本遺跡で統一新羅系土器と考えられる土器が他にも出土していることを考慮し(「IV 2. 統一新羅系土器」併照)、本土器も、これらの影響を受けている可能性を指摘しておきたい。なお、本土器が統一新羅系土器であるならば、本竪穴へは流入した可能性が高い。

9 は逆「ハ」の字状口縁を呈する小型土師器鉢破片。10 も 9 に似るが、口縁部・体部境に明確な稜を有している。いずれも外面はヘラケズリ、内面はナデ調整。

12 は常総系土師器甕。口縁端部を外方に緩くつまみ上げること、胴部中位に最大径をもつことから、吉田 1998 分類・1 類、樫村 1998 編年・5 期に比定できよう。

13 は口縁部が「く」の字状を呈する土師器甕。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデにより調整される。11 は小型甕の破片。口縁部の「く」の字が強めである。

14 は口縁部に最大径を有する砲弾型のヘラケズリ長胴甕。古舘三反田遺跡 2 期の土師器甕 (SI-41.12) と同タイプであることから 8 世紀後葉に位置付けられよう (池田 2007, 93～98 頁)。

SK-71 出土土器 (第 112・157 図、第 68 表)

1 は猿投窯産と思われる灰釉陶器壺瓶類の頸～肩部破片。内外面に釉薬が垂下している。2 は益子窯産と思われる須恵器蓋破片。天井部に山形ボタン状つまみを付している。3 は須恵器甕の底部破片。体部外面下位はヘラナデ。内面はロクロナデ。自然釉 (淡緑色) が底部内面に付着する。

SI-72 出土土器 (第 112・157 図、第 61 表)

1 は半球形土師器坏。体部外面ヘラケズリ。内面ナデである。2 はロクロ土師器坏の体部破片。内面ヘラミガキ・黒色処理を施す。

SI-73 出土土器 (第 112・157 図、第 62 表)

1 は新治窯産の須恵器坏破片。器高が低く、口径・底径比も 2/3 ほどに復元できそうである。生産年代は 8 世紀代と思われる。ゆえに、本竪穴への混入品と推定したい。2～4 は益子窯産の須恵器。2 は底部回転ヘラ切り未調整。3 はヘラ切り後、緩いナデを施す。ともに大きさから見て滝ノ入窯段階に比定出来る。4 は須恵器捏鉢の破片。5 は産地不明の甕破片。

6～12 は常総系土師器甕である。10 の小型甕口縁部は「く」の状を呈する。一方、11 の小型甕口縁部は口縁を直立的につまみ出し断面形が三角状を呈している。ともに胴部上半に最大径を有していることから吉田 1998 分類・3 類、樫村 1998 編年・6 期に比定できよう。6・7・9 も同様に吉田 1998 分類・3 類、樫村 1998 編年・6 期に比定できよう。なお、8 は口縁を外方につまみ出していることから吉田 1998 分類・2～3 類、樫村 1998 編年・6 期の可能性がある。

SI-74 出土土器 (第 113・158 図、第 63 表)

1 は猿投窯産の灰釉陶器皿破片。口縁部が直立傾向にあること、釉薬をハケ塗りしていることから黒笹 14 号窯～黒笹 90 号窯式に比定できる。2 は産地不明の須恵器甕。

3・4 はロクロ土師器。ともに内面へラミガキ・黒色処理を施す。5・6 は常総系土師器甕の破片で、胎土に多量の雲母粒を含む。5 は口縁を直立的につまみ出し断面形が三角状を呈している。6 は縦位のへラミガキが体部下位に施されている。ともに吉田 1998 分類・3 類、樫村 1998 編年・6 期に比定できよう。

SK-75 出土土器 (第 113・158 図、第 69 表)

1 は産地不明の須恵器甕。外面は格子状叩き、内面に同心円状当て具痕が残る。2 は底部に静止糸切り痕が残る土師器坏。土器内面にも板状工具ナデ痕が残る。3・4 は半球形状の土師器坏。3 は 4 に比して底部が平底気味に作られている (木葉痕残る)。また、口縁部・体部境が外面調整によって明瞭である。4 は口縁部が短く外方に反る。口縁部内外面～内面に漆仕上げを施す。

SI-77 出土土器 (第 113・158 図、第 64 表)

1・2 は猿投窯産の原始灰釉壺・瓶類で同一個体と思われる。鳴海 32 号窯～折戸 10 号窯式に比定出来よう。3 は須恵器蓋破片。口縁端部に鶴首状の沈線が施されることから概ね 8 世紀頃の生産年代が想定できる。

4・5 は半球形で口縁が直立するタイプの土師器坏破片。6 は口縁部が「く」の字状を呈する土師器甕小片。7 は底部木葉痕が残る土師器甕小片である

SI-82 出土土器 (第 113・159 図、第 65 表)

1・2 は東海地方産の須恵器で、フラスコ形瓶の同一個体と思われる。1 は口縁部下に環状の隆帯が巡る破片。器の内外面に緑灰色の自然釉が付着する。2 は瓶の底部破片である。底部中央に口縁部 (開口部) から垂下した自然釉溜まりが認められる。

3 は須恵器坏身を模倣した土師器坏である。内面に漆仕上げを施す。4 は平底で口縁部が直立するタイプの土師器坏である。5 は半球形で口縁部が直立するタイプの土師器坏。底部の一部に静止糸切り痕が残る。

6 は半球形で内外面をへラミガキ調整する土師器坏。一部に漆仕上げ痕が残る。7 は高坏。口縁部が外反するタイプの坏を皿部として取り付けている。

8 は土師器甕と推定。内面に斜位～縦位のへラミガキが施される。9 は常総系土師器甕破片。口縁部が外方につまみ出されていることから吉田 1998 分類・2 類、樫村 1998 編年・6 期に比定でき混入品と思われる。

SK-83 出土土器 (第 114・160 図、第 70 表)

1 は産地不明の須恵器甕破片。体部外面は格子状叩き、内面は同心円状当て具痕が残る。2 は半球形で口縁部が外反する坏。外面はへラケズリ。内面はナデである。

SI-84 出土土器 (第 114・160 図、第 66 表)

1 は東海地方産フラスコ形瓶の完形品 (口縁の一部が欠損)。口縁～頸部はロクロナデ、球胴部はカキメが施される。

2 は半球形の土師器坏。口縁部は短く直立する。内面は疎ら、かつ放射状にへラミガキを施す。3 は須恵器坏身を模倣した土師器坏。4・5 は須恵器坏蓋を模倣した土師器坏。5 は口縁部・体部境の稜線が明瞭である。なお、これらは、いずれも体部外面はへラケズリ、内面はナデ。漆仕上げを施している。6 は内湾口

Ⅲ. 調査成果

縁土師器坏の破片。この土器も内面は漆仕上げを施す。

7・8は土師器小型甕。外面はヘラケズリのちヘラナデ、内面はヘラナデ調整である。9・10は土師器長胴甕の底部破片である。

〔参考文献〕

愛知県陶磁美術館 2018『特別企画展 知られざる古代の名陶 猿投窯』

赤井博之 1998「古代常陸国新治窯跡群の基礎的研究(1) 一奈良・平安時代の須恵器編年を中心に―」『婆良岐考古』第20号、
婆良岐考古同人会

池田敏宏 1994「第4章 成果と問題点 第2節 平安時代」『鶴田中原遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興
事業団

池田敏宏 2000「第5章 成果と課題 第1節 土器の編年の位置付けと集落の変遷について」『小丸山北遺跡・山苗代A
遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団

池田敏宏 2007A「第7章 古代 第3節 遺物の研究 2. 古代施釉陶器」『研究紀要』第15号―栃木県の埋蔵文化財と考
古学一、(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター

池田敏宏 2007B「Ⅳ. まとめ 2. 古墳時代後期～平安時代 [1]土器の位置付け」『古館・三反田遺跡』栃木県教育委員会・
(財)とちぎ生涯学習文化財団

池田敏宏 2011「Ⅳ. まとめ 1. 古代の遺物・遺構」『長沼城跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団

樫村友延 1998「常総型甕編年小考―茨城県南部を中心として―」『列島の考古学―渡辺 誠先生古稀記念論文集―』六一
書房

古代生産史研究会 2007『古代生産史研究会'97 シンポジウム 東国の須恵器』

古代の土器研究会 1994『古代の土器研究 律令的土器様式の西・東3 施釉陶器』

桜岡正信 1991「7世紀代以降の土師器坏の画期とその要因について―群馬県域を中心として―」『群馬考古学手帖』
Vol.2 群馬土器観会

佐々木義則 2007「茨城県における奈良・平安時代土器研究の現状」『考古学の深層 瓦吹堅先生還暦記念論文集』瓦吹堅
先生還暦記念論文集刊行会

中村岳彦 2019「横瓶の型式論的検討―北陸の窯跡出土資料を中心に―」『地域考古学』第4号、地域考古学研究会

中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』

宮崎泰史・藤永正明 2006『平成17年度冬季企画展 重要文化財指定記念 年代のものさし―陶器の須恵器―』大阪府
立近つ飛鳥博物館

吉田 哲 1998「第4章 まとめ」『八木岡I遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団

第5表 西区SⅠ-1出土遺物観察表

No	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	土師器	皿	(8.2)	4.7	1.6	土師 A 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	口縁～体 1/4、底完周	P1
2	土師器	皿	(9.5)	5.0	2.3	土師 C 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	口縁～体 1/2、底完周	No. 5
3	土師器	皿	(9.0)	(4.7)	1.9	土師 C 群	オリーブ褐	黄褐	やや軟質	口縁～体 1/8、底 1/2	B 区
4	土師器	高台付皿	9.4	6.6	4.0	土師 C 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	口縁～底 3/4、高台 1/2	No. 7
5	土師器	坏	—	—	(4.5)	土師 B 群	暗灰	灰白	やや軟質	口縁 1/8	D 区
6	土師器	高台付坏	—	(7.7)	(2.0)	土師 F 群	黒	にぶい黄橙	やや軟質	底～高台 1/8	C 区
7	土師器	高台付坏	—	—	(2.0)	土師 C 群	黒	にぶい黄橙	やや硬質	底 1/4	A 区
8	土師器	高台付皿	—	6.8	(3.0)	土師 D 群	灰	にぶい黄橙	やや軟質	底～高台 1/4	C 区
9	土師器	高台付坏	—	—	(1.8)	土師 B 群	黒	褐灰	やや軟質	体～底 7/12	
10	土師器	高台付坏	—	—	(1.8)	土師 A 群	黒	にぶい黄橙	やや軟質	底 1/3	No. 3
11	土師器	高台付坏	—	—	(4.3)	土師 C 群	オリーブ黒	にぶい黄橙	やや軟質	底 1/8	C 区

第6表 西区SⅠ-2出土遺物観察表

No	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	壺	—	—	(5.6)	須恵 A + B 群	灰白	灰白	やや硬質	口縁破片	A 区西 統一新羅系土器？
2	須恵器	壺類	—	—	(7.9)	須恵 A + B 群	灰白	灰	やや硬質	底 1/8	B 区東 統一新羅系土器？
3	須恵器	坏蓋	—	天 (5.6)	(1.4)	須恵 B 群	灰白	灰白	やや硬質	天井 1/2	A 区、A 区西 三義窯産？
4	須恵器	坏蓋	—	—	(3.2)	須恵 B 群	灰白	灰白	やや硬質	口縁～天井 1/8	貯蔵穴、覆土一括 三義窯産？
5	須恵器	坏蓋	12.2	天 (7.3)	(3.6)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	口縁 1/4	A 区西
6	須恵器	坏蓋	—	天 5.6	(1.4)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	天井 1/2	No. 8 益子窯産？
7	須恵器	坏蓋	—	天 (6.8)	(2.4)	須恵 B 群	灰白	灰白	やや硬質	天井完周	A 区西 三義窯産
8	須恵器	坏蓋	(10.6)	天 6.8	4.3	須恵 B 群	灰	灰	やや硬質	口縁 1/3、体～天井 3/4	A 区 三義窯産？
9	須恵器	坏	10.0	6.9	3.7	須恵 A + B 群	灰	灰	やや硬質	口縁～底 1/2	A 区 三義窯産？
10	須恵器	捏鉢	(12.0)	—	(7.3)	須恵 A + B 群	灰	灰	やや硬質	口縁～体 1/2	No. 2、A 区西 産地不明
11	須恵器	横瓶	—	—	(5.9)	須恵 B 群似	灰オリーブ	灰	硬質	体 1/8	No. 10
12	須恵器	瓶	(10.0)	—	(9.4)	須恵 E 群	灰	灰	やや硬質	口縁 1/2	No. 3 湖西窯産
13	須恵器	瓶	(11.0)	—	(15.8)	須恵 E 群	灰白	オリーブ灰	硬質	口縁 1/8、頸完周、底 1/4	A 区西 湖西窯産
14	須恵器	甕	—	—	(14.5)	須恵 A + B 群	灰	黒	硬質	体破片	B 区東 産地不明
15	土師器	坏	—	—	(3.7)	土師 D 群	黒	明黄褐	やや軟質	口縁 1/4	A 区
16	土師器	坏	12.0	6.0	4.3	土師 C 群	にぶい橙	褐灰	やや軟質	口縁～底 1/3	A 区
17	土師器	坏	12.1	—	4.3	土師 A 群	灰黄褐	黒	やや軟質	ほぼ完形	壁面 8 層、一括
18	土師器	坏	(14.0)	(3.5)	(4.4)	土師 B 群	にぶい黄橙	黒	やや軟質	口縁～底 1/2	No. 7
19	土師器	坏	9.3	—	3.2	土師 C 群	明赤褐	黒	やや軟質	口縁～底 7/8	No. 5 河内系
20	土師器	坏	12.7	—	3.4	土師 B 群	明赤褐	黒	やや軟質	口縁～底 2/3	B 区東
21	土師器	坏	—	—	3.9	土師 A 群	にぶい褐	褐灰	やや軟質	口縁～底 1/5	A 区西
22	土師器	坏	(15.2)	(3.0)	(5.2)	土師 B 群	黒褐	褐	やや軟質	口縁～底 1/4	No. 9、A 区西
23	土師器	坏	(11.2)	(3.4)	(3.9)	土師 B 群	浅黄橙	浅黄橙	やや軟質	口縁～底 1/3	A 区西
24	土師器	坏	—	—	(3.9)	土師 A 群	黒	黒褐	やや軟質	口縁～体 1/5	No. 2
25	土師器	坏	(11.1)	(1.0)	(3.7)	土師 B 群	赤褐	赤褐	やや軟質	口縁～底 1/2	No. 8、A 区、A 区東 河内系
26	土師器	坏	(12.2)	—	(5.5)	土師 B 群	灰黄褐	にぶい黄橙	やや軟質	口縁～底 2/3	No. 18
27	土師器	坏	(9.0)	—	3.9	土師 A 群	橙	橙	やや軟質	口縁 1/4、体～底 1/3	B 区
28	土師器	坏	(9.6)	(4.0)	(4.0)	土師 B 群	黒	灰黄褐	やや軟質	口縁 1/2、体～底 3/4	A 区西
29	土師器	鉢	—	—	(5.5)	土師 B 群	橙	橙	やや軟質	口縁 1/4、体～底 1/5	A 区 河内系
30	土師器	坏	—	—	(3.4)	土師 B 群	橙	橙	やや軟質	口縁 1/4	A 区 河内系
31	土師器	坏	(9.4)	—	(3.6)	土師 B 群	橙	にぶい橙	やや軟質	ほぼ完形	A 区西、B 区壁側
32	土師器	坏	(10.0)	—	(4.0)	土師 B 群	にぶい橙	橙	やや軟質	口縁 1/4、体～底 1/3	壁面 8 層
33	土師器	坏	—	—	(4.1)	土師 E 群	にぶい褐	黒褐	やや軟質	口縁 1/4	A 区
34	土師器	坏	(13.8)	—	4.7	土師 B 群	暗灰黄	灰黄	やや軟質	口縁 1/8、体～底 1/3	A 区
35	土師器	坏	(9.8)	—	(3.4)	土師 A 群	にぶい褐	にぶい橙	やや軟質	口縁～底 1/8	No. 20
36	土師器	坏	10.3	—	3.3	土師 C 群	にぶい赤褐	黒褐	やや軟質	完形	No. 27 筑波地域産
37	土師器	坏	(10.2)	—	3.2	土師 B 群	浅黄橙	浅黄橙	やや軟質	口縁 1/4、体～底 1/2	No. 15
38	土師器	坏	(12.1)	—	(4.1)	土師 B 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	口縁～底 1/2	No. 15
39	土師器	坏	(9.8)	—	(3.5)	土師 D 群	褐灰	灰黄褐	やや軟質	口縁 1/5、体～底 3/4	A 区東
40	土師器	坏	(12.1)	—	3.4	土師 B 群	黄灰	にぶい黄橙	やや軟質	口縁 1/4、体～底 1/2	A 区西、B 区東
41	土師器	坏	14.6	—	5.1	土師 B 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	完形	No. 19
42	土師器	坏	(13.5)	—	(4.6)	土師 B 群	にぶい黄橙	黒	やや軟質	口縁～底 1/3	No. 6

Ⅲ. 調査成果

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
43	土師器	小型甕	(11.6)	—	(4.4)	土師 B 群	橙	にぶい橙	やや軟質	口縁 1/2、体 1/3	B 区、B 区東
44	土師器	坏	(9.2)	—	(4.6)	土師 C 群	オリーブ黒	黒	やや軟質	口縁～体 1/2	一括、A 区東
45	土師器	鉢	(13.4)	—	(5.0)	土師 C 群	にぶい褐	褐灰	やや軟質	口縁～体 1/2	No. 2
46	土師器	大型鉢	(19.9)	(12.2)	(7.3)	土師 C 群	黒	橙	やや軟質	口縁 1/4、体～底 1/2	No. 2・8、A 区、A 区東、A 区西
47	土師器	大型鉢	(15.6)	—	(5.9)	土師 B 群	にぶい橙	にぶい橙	やや軟質	口縁～体 1/4	A 区西
48	土師器	大型鉢	—	—	(7.2)	土師 E 群	浅黄橙	浅黄橙	やや軟質	口縁 1/6	A 区
49	土師器	甕	—	—	(6.0)	土師 B 群	にぶい橙	にぶい橙	やや軟質	口縁 1/8	No. 8 常総系甕？
54	土師器	甕	—	—	(6.3)	土師 C 群	にぶい橙	にぶい褐	やや軟質	口縁 1/8	No. 8 常総系甕
50	土師器	甕	—	—	(10.8)	土師 F 群	橙	明赤褐	やや軟質	口縁～体 1/8	No. 8
55	土師器	甕	(21.7)	—	(5.4)	土師 C 群	にぶい橙	橙	やや軟質	口縁 1/4	A 区西 常総系甕
51	土師器	甕	(21.6)	—	(19.8)	土師 G 群	黒	黒	やや軟質	口縁～体 1/4	No. 28
56-1	土師器	甕	(27.2)	—	(7.0)	土師 C 群	灰黄	灰黄	やや軟質	口縁 1/8	No. 10 常総甕
56-2	土師器	甕	—	11.0	(5.7)	土師 G 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	底完周	No. 1 常総甕
52	土師器	小型壺	(13.5)	—	(8.9)	土師 B 群	にぶい橙	にぶい黄橙	やや軟質	口縁～体 1/4	A 区
57	土師器	甕	—	(9.1)	(6.1)	土師 C 群	橙	灰褐	やや軟質	底 1/4	A 区東 常総系甕
58	土師器	甕	—	(8.6)	(3.8)	土師 C 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	底 1/3	A 区東
53	土師器	甕	—	(6.8)	(6.9)	土師 F 群	黄灰	明赤褐	やや軟質	底 1/2	A 区
59	土師器	甕	—	7.1	(4.1)	土師 G 群	にぶい橙	明褐	やや軟質	底 1/2	A 区西

第 7 表 西区 S I - 3 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	灰釉陶器	皿	—	—	(1.9)	陶器 C 群似	灰白	オリーブ灰	硬質	口縁～体 1/6	A 区 猿投窯産
2	須恵器	坏	—	—	(2.2)	須恵 A 群	灰黄	灰黄	やや軟質	体～底 1/3	No. 3 益子窯産？
3	須恵器	坏	12.5	6.3	4.1	須恵 C 群	灰黄褐	灰黄	やや硬質	口縁～体 1/2、底完周	No. 1 新治窯産
4	土師器	皿	—	(6.4)	(1.8)	土師 C 群	にぶい橙	にぶい黄橙	やや軟質	体～底 1/3	B 区
5	土師器	皿	—	—	(2.2)	土師 C 群	橙	にぶい黄橙	やや軟質	体～底 1/6	B 区
6	土師器	高台付坏	—	7.2	(2.4)	土師 C 群	暗灰	にぶい橙	やや軟質	体 1/6、底ほぼ完周	A・D 区、A' 区西

第 8 表 西区 S I - 4 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	埴	—	(6.4)	(3.3)	須恵 A 群	灰オリーブ	灰オリーブ	やや軟質	体～底 1/4	B 区 益子窯産
2	須恵器	坏	—	(5.0)	(1.0)	須恵 B 群	灰黄	灰黄	やや硬質	底 1/4	三義窯産
3	須恵器	壺瓶類	—	—	(2.6)	須恵 B 群似	灰白	灰	やや硬質	口縁 1/8	A 区 産地不明
4	土師器	埴	—	—	(2.0)	土師 B 群	にぶい黄褐	にぶい褐	やや軟質	底 1/4	A' 区内
5	土師器	坏	—	—	(1.1)	土師 D 群	黒	明褐	やや軟質	底 1/4	
6	土師器	高台付坏	—	—	(1.7)	土師 C 群	黒	明褐	やや軟質	底 1/6	
7	土師器	高台付坏	—	—	(3.2)	土師 C 群	にぶい黄褐	明黄褐	やや軟質	底～高台 1/6	No. 2
8	土師器	高台付皿	13.2	7.4	3.7	土師 A 群	褐灰	暗灰黄	やや軟質	口縁～体 1/2、底完周	No. 3
9	土師器	甕	—	—	(4.6)	土師 A 群	にぶい褐	にぶい褐	やや軟質	口縁破片	B 区 常総系甕

第 9 表 西区 S I - 7 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	灰釉陶器	高台付坏	—	(8.2)	(2.0)	陶器 D 群	灰白	灰白	硬質	底～高台 1/4	D 区上層 猿投窯産
2	須恵器	高台付坏	—	(8.0)	(2.3)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	底 1/4	B 区 益子窯産
3	須恵器	坏	(14.3)	(9.0)	(4.7)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	口縁～底 1/4	東西柱穴、益子窯産
4	須恵器	坏	(13.0)	(7.0)	(5.0)	須恵 A 群	暗灰黄	暗灰黄	やや硬質	口縁～底 1/3	No. 13 益子窯産
5	須恵器	甕	—	—	(5.2)	須恵 C 群	褐	褐	やや硬質	口縁破片	No. 1 新治窯産
6	須恵器	甕	—	(14.5)	(9.9)	須恵 C 群	オリーブ灰	灰	やや硬質	体～底 1/4	No. 14 新治窯産
7	土師器	坏	(14.1)	(7.7)	4.0	土師 C 群	黒	橙	やや軟質	口縁～底 1/2	No. 2
8	土師器	坏	13.8	7.0	4.1	土師 C 群	黒	橙	やや軟質	ほぼ完形	No. 5
9	土師器	坏	(14.8)	(7.6)	3.8	土師 C 群	黒	橙	やや軟質	口縁～底 1/4	No. 3
10	土師器	甕	(23.7)	—	(25.0)	土師 C 群	にぶい褐	にぶい褐	やや軟質	口縁～体 1/4	No. 10 常総系甕
11	土師器	甕	(24.0)	—	(14.3)	土師 C 群	橙	にぶい褐	やや軟質	口縁～体 1/4	No. 12 常総系甕

第 10 表 西区 SⅠ-8 出土遺物観察表

No	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	灰釉陶器	埴	—	—	(2.3)	陶器 C 群	灰白	灰白	硬質	口縁～体 1/8	東カド 東濃窯産
2	灰釉陶器	皿	—	—	(1.5)	陶器 C 群	灰白	灰白	やや硬質	口縁破片	A 区、B 区南 東濃窯産
3	灰釉陶器	坏	—	—	(2.0)	陶器 C 群	灰白	灰白	やや硬質	口縁 1/4	A 区 猿投窯産
4	灰釉陶器	皿	—	—	(1.3)	陶器 C 群	灰白	灰白	やや硬質	底破片	A 区南 猿投窯産
5	灰釉陶器	瓶	—	—	(3.0)	陶器 C 群	灰白	灰白	やや硬質	口縁 1/8	B 区 猿投窯産
6	灰釉陶器	瓶	—	—	(3.2)	陶器 B 群	灰	黄灰	やや硬質	体破片	A 区 猿投窯産
7	須恵器	坏	(13.6)	5.7	4.4	須恵 D 群	灰	灰	やや硬質	口縁～体 1/3、底完周	B 区南 三和窯産
8	須恵器	坏	(13.1)	6.0	4.4	須恵 D 群	灰	灰	やや硬質	口縁～体 1/5、底完周	No. 4 三和窯産
9	須恵器	坏	(13.0)	(6.7)	4.3	須恵 A 群	灰	灰白	やや硬質	口縁～底 1/2	No. 5、B 区 三和窯産
10	土師器	坏	(13.3)	6.7	4.0	土師 C 群	黒褐	明黄褐	やや軟質	口縁～体 1/4、底完周	No. 1
11	土師器	坏	(13.2)	7.1	4.0	土師 C 群	黒	褐	やや軟質	口縁～体 1/4、底 1/2	No. 7
12	土師器	坏	(15.4)	(7.8)	3.8	土師 E 群	黒	にぶい黄橙	やや軟質	口縁～底 1/2	No. 12
13	土師器	坏	—	6.8	(2.5)	土師 B 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	底 1/2	No. 13
14	土師器	坏	—	7.3	(3.7)	土師 E 群	橙	にぶい橙	やや軟質	体 1/4、底 3/4	東カド 一括
15	土師器	高台付坏	—	(9.8)	(3.4)	土師 E 群	黒	橙	やや軟質	底 1/2、高台 1/4	No. 9、B 区
16	土師器	高台付坏	—	(7.9)	(3.7)	土師 B 群	黒	にぶい黄橙	やや軟質	底完周、高台 1/4	No. 4
17	土師器	高台付坏	—	(7.6)	(3.5)	土師 D 群	黒	にぶい黄橙	やや軟質	底～高台 1/2	A 区南
18	土師器	高台付坏	(13.4)	(6.4)	(3.5)	土師 B 群	浅黄	黒	やや軟質	口縁～体 1/8、底 1/2	No. 10

第 11 表 西区 SⅠ-10 出土遺物観察表

No	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	坏	13.2	4.8	4.5	須恵 B 群	灰オリーブ	灰オリーブ	硬質	口縁～体 7/8、底完周	No. 6 常陸産
2	須恵器	坏	13.0	6.5	4.0	須恵 C 群	暗灰黄	オリーブ褐	硬質	口縁～体 7/8、底完周	No. 5 新治窯産
3	土師器	—	長 (1.9)	幅 (3.2)	厚 (—)	土師 F 群	明褐	明褐	やや軟質	把手完存	C 区
4	土師器	高台付坏	(9.4)	(5.3)	3.0	土師 A 群	黒	明黄褐	やや軟質	口縁～体 1/3、底～高台 1/2	A 区
5	土師器	甕	(14.0)	—	(10.0)	土師 F 群	にぶい黄橙	にぶい黄褐	やや軟質	口縁 1/3、体 1/8	No. 4

第 12 表 西区 SⅠ-11 出土遺物観察表

No	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	坏	13.4	6.8	4.0	須恵 C 群	暗灰黄	黒	やや硬質	完形	No. 3 新治窯産
2	須恵器	坏	(12.8)	(7.0)	4.8	須恵 A 群似	灰	灰	やや硬質	口縁～体 1/4、底 2/3	C 区、C 区床下 新治窯産
3	須恵器	蓋	(11.4)	—	(2.4)	須恵 E 群	灰	青黒	やや硬質	口縁～体 1/4	D 区 益子窯産
4	須恵器	蓋	—	—	(2.2)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	体 1/4	C 区 益子窯産?
5	須恵器	坏	—	(6.0)	(2.0)	須恵 A 群似	灰	灰	やや硬質	底 1/2	A 区 常陸産?
6	須恵器	坏	—	(6.5)	(1.7)	須恵 A + B 群	灰	灰	やや硬質	底 1/2	D 区 常陸産
7	須恵器	坏	(14.6)	—	(4.6)	須恵 E 群	灰	暗灰	やや硬質	口縁 1/4	A 区
8	須恵器	坏	—	—	(4.3)	須恵 A + B 群	暗灰	黒	やや硬質	口縁 1/8	C 区 常陸産
9	須恵器	坏	—	—	(4.5)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	口縁 1/6	A・C 区、C 区床下、 益子窯産
10	須恵器	坏	—	(7.0)	(1.7)	須恵 C 群	灰	灰	やや硬質	底 2/3	A・D 区 新治窯産
11	須恵器	甕	—	—	(10.9)	須恵 E 群	灰	灰	硬質	体破片	No. 2 産地不明
12	土師器	甕	—	—	(3.4)	土師 G 群	にぶい橙	にぶい橙	やや軟質	口縁 1/4	東カド 常総甕
13	土師器	甕	—	—	(2.7)	土師 F 群	褐	褐	やや軟質	口縁 1/8	東カド 常総甕
14	土師器	甕	—	(5.8)	(3.5)	土師 G 群	にぶい橙	にぶい橙	やや硬質	底完周	東カド No. 7

第 13 表 西区 SⅠ-16 出土遺物観察表

No	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	坏	—	(8.0)	(2.6)	須恵 A 群	オリーブ灰	オリーブ灰	やや硬質	体 1/6、底 1/4	益子窯産
2	須恵器	坏	—	(7.6)	(1.0)	須恵 B 群似	褐	褐	やや硬質	底 1/4	C 区 産地不明
3	須恵器	坏	—	—	3.7	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	口縁～底 1/6	C 区 堀ノ内窯産?
4	須恵器	甕	—	—	(4.4)	須恵 C 群	灰	暗灰	やや硬質	口縁 1/8	A 区 新治窯産
5	土師器	坏	—	(6.8)	(3.1)	土師 F 群	暗灰	にぶい黄橙	やや硬質	体～底 1/8	B 区
6	土師器	高台付坏	—	—	(2.8)	土師 C 群	黒	にぶい橙	やや硬質	体～底 1/8	カド
7	土師器	甕	16.4	—	(4.8)	土師 G 群	にぶい黄橙	にぶい橙	やや軟質	口縁 2/3	カド 西側袖中、カド 常総系甕

Ⅲ. 調査成果

第 14 表 西区 SⅠ－17 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	坏	13.7	7.8	5.2	須恵 A 群似	灰オリーブ	オリーブ黄	硬質	口縁～体 7/8、底完周	No. 11 新治窯産?
2	須恵器	坏	13.0	8.0	4.2	須恵 A 群	灰オリーブ	灰オリーブ	硬質	口縁～体 5/12、底ほぼ完周	No. 14 益子窯産
3	須恵器	坏	(13.5)	7.8	4.5	須恵 C 群	灰オリーブ	灰オリーブ	やや硬質	口縁～体 1/6、底完周	No. 15、西区 新治窯産
4	須恵器	坏	13.4	8.4	4.2	須恵 A 群似	灰	灰	やや硬質	口縁～体 5/12、底 1/2	東・西区 [△] 鉢内 堀ノ内窯産?
5	須恵器	坏	—	—	4.6	須恵 A 群似	灰	灰	やや硬質	口縁～底 1/6	東区 堀ノ内窯産
6	須恵器	埴	16.4	9.9	8.8	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	口縁～体 5/6、高台完周	No. 4・9・16、東区、 [△] 鉢内 堀ノ内窯産?
7	須恵器	壺	(14.6)	—	(10.2)	須恵 A 群	オリーブ黒	オリーブ黒	やや硬質	口縁 1/4、体上 1/2	No. 10・12・13、東区 益子窯産
8	須恵器	坏	—	—	(4.6)	須恵 A 群似	灰	灰	やや硬質	口縁～底 1/4	No. 8 堀ノ内窯産?
9	土師器	埴	14.3	7.2	6.3	土師 D 群	黒	橙	やや軟質	口縁～底 3/4	No. 1
10	土師器	甕	—	(9.0)	(19.2)	土師 G 群	灰褐	にぶい褐	やや軟質	体 1/6、底 1/2	No. 3 西区・No. 6
11	須恵器	甕	14.0	(18.0)	(30.8)	須恵 E 群	灰	灰オリーブ	硬質	口縁～体 1/4、底完周	No. 2・17 新治窯産?

第 15 表 西区 SⅠ－20 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	新羅系	壺類	—	—	(4.9)	須恵 C 群	にぶい黄	灰黄	やや硬質	体破片	A 区 新治窯産
2	須恵器	坏	—	6.8	(1.1)	須恵 A 群	灰	灰オリーブ	やや硬質	底完周	No. 1 益子窯産
3	須恵器	坏	—	(6.6)	(2.3)	須恵 B 群似	灰白	灰白	やや硬質	底 2/3	か [△] 産地不明
4	須恵器	坏	—	6.4	(1.9)	須恵 A + B 群	灰白	灰	やや硬質	底 3/4	A 区 常陸産?
5	須恵器	坏	—	—	(3.3)	須恵 A 群	黄灰	灰	やや硬質	口縁～底 1/4	D 区 堀ノ内窯産
6	土師器	埴	—	(7.0)	(3.7)	土師 E 群	黒	橙	やや軟質	体 1/8、底 1/4	B 区
7	土師器	高台付埴	—	(8.8)	(3.5)	土師 D 群	褐灰	にぶい褐	やや軟質	体～高台 1/4	か [△]
8	土師器	高台付皿	(13.8)	(7.7)	(3.3)	土師 C 群	にぶい黄橙	明黄褐	やや軟質	口縁 1/8、体～高台 3/8	No. 2
9	土師器	高台付皿	—	6.3	(1.6)	土師 A 群	黒	明褐	やや軟質	底完周、高台 1/2	No. 3
10	土師器	甌	—	—	(1.3)	土師 F 群	にぶい橙	にぶい橙	やや硬質	底破片	B 区

第 16 表 西区 SⅠ－21 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	陶質土器	—	長 (3.1)	幅 (3.9)	厚 (2.7)	須恵 B 群	灰白	灰	やや軟質	把手完存	か [△] No. 6
2	土師器	不明	—	—	(6.8)	土師 F 群	灰黄	淡黄	やや軟質	体破片	D 区西
3	須恵器	蓋	—	—	(3.2)	須恵 A + B 群	灰	灰	やや硬質	口縁～天井 1/6	D 区西 産地不明
4	須恵器	坏	—	—	(3.2)	須恵 A 群	灰	暗灰	やや硬質	口縁 1/4	B 区
5	須恵器	蓋	—	—	(1.8)	須恵 E 群	灰	明黄褐	やや硬質	天井 1/4	D 区西
6	須恵器	坏	(9.6)	—	(3.5)	須恵 A 群	灰白	灰黄	やや硬質	口縁～底 1/5	No. 2 三義窯産?
7	須恵器	壺瓶類	(8.8)	—	(3.5)	須恵 D 群	浅黄	灰	硬質	口縁 1/4	B 区東 東海地方産?
8	須恵器	壺類	—	—	(2.6)	須恵 B 群	灰	灰オリーブ	やや硬質	口縁 1/8	C 区 東海地方産
9	須恵器	高坏	—	(9.6)	(3.5)	須恵 B 群	灰	灰	やや硬質	脚 1/3	B 区東 [△] 鉢内
10	須恵器	甕	—	—	(3.8)	須恵 B 群	黄灰	黄灰	やや硬質	体破片	D 区 三義? or 太田?
11	須恵器	横瓶	—	—	—	須恵 B 群	暗オリーブ灰	暗灰	やや硬質	体 1/8	No. 5
12	土師器	坏	(8.1)	—	3.5	土師 B 群	黒	黒褐	やや軟質	口縁 1/12、底 1/2	No. 33
13	土師器	坏	(11.6)	—	3.9	土師 A 群	黒褐	黒褐	やや軟質	口縁～底 1/3	No. 66
14	土師器	坏	10.3	—	3.7	土師 A 群	浅黄橙	浅黄橙	やや軟質	口縁～底 2/3	C 区No. 1、D 区中央、南西
15	土師器	坏	(10.0)	—	(3.7)	土師 D 群	橙	橙	やや軟質	口縁～底 1/3	南西
16	土師器	坏	(11.7)	—	(4.2)	土師 A 群	にぶい黄橙	明黄褐	やや軟質	口縁 3/8、体 1/8	B 区
17	土師器	坏	(14.0)	—	4.7	土師 F 群	黄褐	にぶい黄	やや軟質	口縁～底 1/6	P5
18	土師器	坏	14.2	—	4.0	土師 B 群	黒褐	黄灰	やや軟質	口縁～底 3/4	No. 24、B 区東床下
19	土師器	坏	(14.2)	—	(4.7)	土師 B 群	浅黄橙	浅黄橙	やや軟質	口縁～底 1/3	C 区No. 1、D 区西
20	土師器	坏	—	—	(4.4)	土師 D 群	黒	黒	やや軟質	口縁～底 1/5	か [△] 床下
21	土師器	坏	(16.2)	—	5.9	土師 A 群	明褐	明褐	やや軟質	口縁 3/8、体～底 1/2	No. 40
22	土師器	坏	(13.8)	—	(4.5)	土師 D 群	浅黄橙	浅黄橙	やや軟質	口縁～体 1/3	A 区、B 区東 [△] 鉢内、C 区
23	土師器	鉢	—	—	(5.8)	土師 A 群	明黄褐	明黄褐	やや軟質	口縁～体破片	D 区西
24	須恵器	坏	(12.8)	(5.2)	4.3	須恵 B 群	灰オリーブ	灰	やや硬質	口縁～底 1/6	No. 49
25	土師器	鉢	—	—	(7.4)	土師 B 群	浅黄	浅黄	やや軟質	口縁～体 1/4	No. 10・21・22
26	土師器	高坏	(13.0)	(8.8)	7.7	土師 D 群	褐	にぶい黄橙	やや軟質	皿 1/3、脚 2/3	No. 74、A 区床下、 貯蔵穴付近
27	土師器	高坏	—	(11.0)	(5.3)	土師 B 群	にぶい橙	にぶい橙	やや軟質	皿 3/4、脚 1/2	No. 18
28	土師器	高坏	—	(7.6)	(5.5)	土師 E 群	明褐	明褐	やや軟質	底～脚ほぼ完周	D 区中央

3. 遺物

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
29	土師器	高坏	18.2	(12.1)	11.7	土師 D 群	明黄褐	にぶい黄橙	やや軟質	ほぼ完形	No. 44
30	土師器	高坏	—	—	(6.0)	土師 E 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	皿～脚接合部分完周	No. 26
31	土師器	小型甕	(14.2)	—	(8.3)	土師 E 群	明黄褐	明黄褐	やや軟質	口縁 1/4、体 2/3	No. 29 在地系甕
32	土師器	小型甕	—	—	(6.9)	土師 B 群	灰褐	褐	やや硬質	頸～体 1/3	No. 67、下層
33	土師器	甕	15.1	—	(11.0)	土師 E 群	褐	明褐	やや軟質	口縁～体 1/2	No. 13・30・31
34	土師器	甕	18.0	—	(11.8)	土師 E 群	にぶい橙	にぶい橙	やや軟質	口縁ほぼ完周	No. 63、カド
35	土師器	小型甕	(16.4)	—	(7.7)	土師 C 群	にぶい褐	にぶい赤褐	やや軟質	口縁～体 2/3	A 区 常総系甕
36	土師器	甕	(22.0)	—	(16.2)	土師 F 群	にぶい黄褐	明黄褐	軟質	口縁～体 1/2	No. 67、カド 袖断割
37	土師器	甕	19.0	—	(12.0)	土師 E 群	赤褐	橙	やや軟質	口縁～体 3/4	No. 64
38	土師器	甕	—	—	(12.1)	土師 E 群	褐灰	橙	やや軟質	口縁～体 1/4	No. 12、D 区中央、西側
39	土師器	甕	—	(9.6)	(3.4)	土師 F 群	淡黄	にぶい橙	やや軟質	底 1/4	D 区
40	土師器	甕	—	(6.6)	(1.8)	土師 G 群	赤褐	にぶい赤褐	やや軟質	底 1/2	D 区西 常総系甕
41	土師器	甕	—	(9.0)	(2.3)	土師 G 群	黒褐	褐	やや軟質	底 1/4	B 区西 [△] 社内 常総系甕
42	土師器	甕	—	9.2	(2.8)	土師 F 群	にぶい黄褐	にぶい褐	軟質	底完周	C 区
43	土師器	甕	—	7.5	(2.2)	土師 E 群	浅黄橙	明黄褐	やや軟質	底完周	No. 51
44	土師器	甕	—	7.4	(4.3)	土師 E 群	浅黄橙	にぶい黄橙	やや硬質	底完周	No. 19
45	土師器	壺類	—	(8.2)	(3.7)	土師 E 群	褐灰	にぶい橙	やや軟質	底 1/2	D 区東
46	土師器	甕	—	(5.4)	(2.0)	土師 E 群	灰	にぶい黄橙	やや硬質	底 1/4	一括
47	土師器	甕	—	(7.6)	(2.6)	土師 F 群	灰黄	にぶい黄橙	やや軟質	底 1/4	D 区
48	土師器	甕	—	(8.2)	(2.7)	土師 E 群	にぶい橙	橙	やや軟質	底 1/4	D 区西
49	土師器	甕	—	(9.2)	(2.1)	土師 G 群	オリーブ褐	褐	やや軟質	底 1/4	D 区西 常総系甕

第 17 表 西区 SⅠ－2 2 A 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	灰釉陶器	坏	—	—	(3.2)	陶器 C 群	灰	灰白	やや硬質	口縁 1/8	カド 猿投窯産
2	灰釉陶器	埴	—	—	(3.2)	陶器 C 群	灰白	灰白	硬質	口縁～体 1/6	A 区 猿投窯産
3	灰釉陶器	埴	—	—	(2.7)	陶器 B 群	灰白	灰白	やや硬質	体 1/8	C 区 東濃窯産
4	須恵器	坏	—	—	(4.5)	須恵 A + B 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや硬質	口縁 1/6	C 区 産地不明
5	須恵器	坏	—	(6.0)	(2.7)	須恵 A + B 群	灰白	灰白	やや硬質	体～底 1/4	C 区 益子窯産?
6	須恵器	坏	—	(8.0)	(1.1)	須恵 A 群	にぶい褐	にぶい褐	やや硬質	底 1/4	C 区 益子窯産
7	須恵器	坏	—	(7.0)	(1.1)	須恵 A 群	灰	灰	硬質	底 1/4	B 区 堀ノ内窯産?
8	須恵器	坏	—	(7.0)	(1.0)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	底 1/3	C 区 益子窯産
9	須恵器	蓋	—	—	(1.4)	須恵 B 群	暗灰黄	暗灰黄	やや硬質	ツマミほぼ完存	A 区 三義窯産?
10	土師器	坏	—	—	(3.5)	土師 D 群	暗灰	橙	やや硬質	口縁 1/4	A 区
11	土師器	坏	—	(6.6)	(1.7)	土師 C 群	オリーブ黒	にぶい橙	やや軟質	底 1/3	C 区
12	土師器	坏	—	(8.4)	(1.7)	土師 C 群	黒	明赤褐	やや軟質	体～底 1/2	A 区
13	土師器	坏	—	(6.0)	(2.6)	土師 B 群	にぶい橙	にぶい橙	やや硬質	体～底 1/4	A 区
14	土師器	坏	—	(7.6)	(1.4)	土師 D 群	灰	橙	やや硬質	底 1/2	C 区
15	土師器	坏	—	(7.4)	(1.7)	土師 C 群	暗灰	にぶい褐	やや硬質	底 1/4	B 区
16	土師器	高台付坏	—	(7.0)	(1.7)	土師 C 群	暗灰	にぶい褐	やや硬質	底完周	B 区
17	土師器	甕	—	(5.7)	(2.0)	土師 D 群	暗灰	暗灰	やや硬質	底 3/4	B 区
18	土師器	甕	—	—	(6.7)	土師 F 群	にぶい褐	にぶい橙	やや硬質	口縁 1/8	No. 3
19	土師器	甕	—	—	(5.4)	土師 F 群	橙	橙	やや硬質	口縁 1/8	SI-21・22 床下
20	土師器	甕	(10.0)	—	(7.8)	土師 E 群	橙	橙	やや硬質	口縁 1/4	カド

第 18 表 西区 SⅠ－2 2 B 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	甕	—	—	(7.0)	須恵 E 群	黄灰	灰	硬質	体破片	B 区 産地不明
2	土師器	坏	—	—	(3.4)	土師 B 群	橙	橙	やや硬質	口縁 1/8	SI-21・22 床下
3	土師器	坏	(15.0)	—	(4.2)	土師 C 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	口縁～底 1/4	No. 7
4	土師器	坏	14.0	—	4.5	土師 C 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	口縁～底 1/2	No. 3・7、C 区
5	土師器	坏	—	—	(4.0)	土師 C 群	明赤褐	明赤褐	やや硬質	口縁～体 1/8	A 区
6	土師器	坏	7.7	5.7	2.9	土師 B 群	黒褐	黄灰	やや軟質	ほぼ完存	No. 1
7	土師器	鉢	—	—	(3.7)	土師 D 群	灰褐	橙	やや硬質	口縁破片	C 区
8	土師器	鉢	(12.8)	3.7	6.2	土師 F 群	黒褐	黒褐	やや軟質	口縁 1/12、体 1/8、底 1/3	No. 4
9	土師器	甕	—	—	(7.3)	土師 G 群	にぶい橙	明赤褐	やや軟質	口縁 1/8	C 区
10	土師器	甕	—	—	(10.6)	土師 F 群	橙	橙	やや硬質	口縁 1/8	No. 2
11	土師器	甕	—	(9.7)	(5.1)	土師 F 群	にぶい橙	暗灰黄	軟質	底 1/4	No. 2
12	土師器	甕	21.0	7.4	37.3	土師 F 群	にぶい黄褐	にぶい黄褐	やや軟質	口縁～底 15/16	No. 5・6

Ⅲ. 調査成果

第 19 表 西区 SⅠ－23 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	蓋	—	—	(1.6)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	口縁 1/6	D 区 益子窯産
2	須恵器	蓋	—	—	(1.1)	須恵 A + B 群	灰白	灰白	やや硬質	口縁 1/8	D 区 産地不明
3	須恵器	高台付坏	15.8	10.7	4.4	須恵 B 群	灰白	灰黄	やや軟質	口縁～体 3/4、底完周	No. 5 三義窯産?
4	須恵器	坏	—	(8.0)	(2.3)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	体下～底 1/2	A 区 益子窯産
5	須恵器	坏	(16.2)	—	(3.8)	須恵 B 群	灰白	灰白	硬質	口縁～体 1/4	D 区 三義窯産?
6	須恵器	坏	—	—	4.1	須恵 B 群	灰白	暗灰黄	やや軟質	口縁～底 1/6	No. 4、B 区 三義窯産
7	須恵器	坏	—	(7.0)	(1.6)	須恵 A 群	灰赤	赤灰	やや硬質	底 1/3	B 区 益子窯産
8	須恵器	坏	—	(7.6)	(1.5)	須恵 A 群	灰白	灰	やや硬質	体 1/4、底 1/2	A 区 堀ノ内窯産
9	須恵器	坏	—	(7.0)	(3.0)	須恵 E 群	褐灰	褐灰	やや硬質	体～底 1/2	A 区 新治窯産
10	須恵器	高坏?	—	—	(4.3)	須恵 B 群	黄灰	灰白	やや硬質	口縁～底 1/6	カトノ一括 三義窯産
11	須恵器	高台付皿	12.8	7.6	2.6	須恵 A 群	灰	黄灰	やや硬質	ほぼ完形	No. 1 益子窯産
12	須恵器	瓶類	—	—	(3.7)	須恵 A + B 群	灰白	灰白	硬質	口縁 1/6	D 区 産地不明
13	須恵器	壺瓶類	—	—	(4.4)	須恵 B 群似	にぶい黄橙	浅黄	やや軟質	体～底 1/6	D 区 産地不明
14	土師器	甕	20.8	8.3	31.2	土師 C 群	橙	橙	やや軟質	口縁～底 2/3	No. 2、カトノ一括 常総系甕
15	土師器	甕	—	(8.0)	(1.8)	土師 C 群	にぶい橙	にぶい黄橙	やや硬質	底 1/2	D 区
16	土師器	甕	—	(5.8)	(2.8)	土師 C 群	にぶい黄橙	橙	硬質	底 1/4	C 区
17	土師器	甕	—	—	(11.3)	土師 D 群	にぶい橙	橙	やや軟質	口縁～体 1/4	D 区 常総甕
18	土師器	甕	—	—	(8.7)	土師 F 群	橙	橙	やや硬質	口縁 1/4	No. 3 常総甕
19	土師器	甕	—	—	(5.5)	土師 F 群	橙	橙	やや硬質	口縁 1/8	C 区 常総甕
20	土師器	甕	—	—	(5.1)	土師 F 群	にぶい橙	にぶい橙	やや硬質	口縁 1/8	D 区

第 20 表 西区 SⅠ－24 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	陶質土器	壺	—	—	(5.3)	須恵 D 群	灰白	灰白	やや硬質	体破片	A 区 統一新羅系土器
2	灰釉陶器	壺類	—	—	(4.0)	陶器 F 群	灰	灰	硬質	破片	A 区 猿投窯産
3	灰釉陶器	壺瓶類	—	—	(4.9)	陶器 D 群	黄灰	黄灰	硬質	体破片	C 区
4	須恵器	坏	—	(5.9)	(2.0)	須恵 A 群似	灰	灰	やや硬質	底 1/2	A 区 産地不明
5	須恵器	壺瓶類	—	—	(2.7)	須恵 C 群	灰	灰	やや硬質	口縁 1/6	C 区 新治窯産
6	灰釉陶器	蓋	—	—	(2.2)	陶器 D 群	灰	灰	硬質	口縁～体 1/8	一括
7	灰釉陶器	甕	—	—	(5.8)	陶器 D 群	灰	暗灰	硬質	破片	C 区
8	土師器	坏	—	6.3	(1.6)	土師 C 群	橙	橙	硬質	底 3/4	No. 1
9	土師器	坏	—	(7.2)	(1.8)	土師 C 群	暗灰	橙	やや硬質	底 1/4	C 区
10	土師器	甕	—	7.0	(2.2)	土師 F 群	にぶい褐	橙	やや軟質	底 1/2	B 区
11	土師器	高台付坏	—	(9.6)	(2.9)	土師 C 群	暗灰	にぶい黄橙	やや硬質	底～高台 1/6	C 区
12	土師器	高台付坏	—	(7.0)	(1.3)	土師 D 群	暗灰	にぶい黄橙	やや硬質	底 1/4	B 区
13	土師器	甕	(18.0)	—	(20.4)	土師 F 群	橙	橙	やや軟質	口縁 1/4、体 1/8	
14	土師器	甕	—	—	(6.8)	土師 C 群	橙	橙	やや軟質	口縁～体破片	カトノ No. 3、カトノ、カトノ一括 常総系甕
15	土師器	甕	—	(6.0)	(3.8)	土師 G 群	橙	橙	やや軟質	底 1/4	D 区

第 21 表 西区 SⅠ－25 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	瓶類	—	—	(3.2)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	頸 1/4	B 区 産地不明
2	須恵器	坏	—	(6.0)	(1.6)	須恵 A + B 群	オリーブ黒	黒灰	やや軟質	底 1/3	C 区 益子窯産?
3	須恵器	坏	—	(7.6)	(3.7)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	底 1/3	B 区 益子か堀ノ内窯産
4	土師器	坏	—	(6.8)	(0.6)	土師 B 群	黒	にぶい黄褐	やや軟質	底 2/3	D 区
5	土師器	坏	—	(6.6)	(1.7)	土師 A 群	黒	明赤褐	やや軟質	底 1/4	D 区
6	土師器	甕	—	6.6	(3.2)	土師 F 群	橙	黒褐	やや軟質	底 3/4	A 区 常総系甕
7	土師器	甕	—	—	(5.9)	土師 F 群	にぶい黄橙	暗赤褐	やや軟質	口縁 1/4	B 区
8	土師器	甕	(22.0)	—	(13.2)	土師 G 群	褐	橙	やや軟質	口縁～体 1/6	No. 1 常総甕
9	土師器	甕	—	—	(4.6)	土師 G 群	赤褐	赤褐	やや軟質	口縁 1/8	B 区 常総系甕
10	土師器	甕	—	(5.0)	(15.6)	土師 G 群	にぶい黄褐	暗赤褐	やや硬質	体 1/8、底 1/3	B 区

第 22 表 西区 SⅠ-26 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	灰釉陶器	高台付埴	—	—	(2.2)	陶器 B 群	明黄褐	明黄褐	硬質	底 1/6	D 区 東濃窯産
2	灰釉陶器	高台付埴	—	—	(1.7)	陶器 B 群	灰白	灰白	硬質	底 1/8	B 区 東濃窯産
3	須恵器	坏	—	(5.8)	(1.6)	須恵 A 群	灰黄褐	灰黄褐	やや硬質	底 1/4	A 区
4	須恵器	蓋	—	—	(1.4)	須恵 A 群	灰	オリーブ灰	やや硬質	口縁 1/4	C 区
5	土師器	皿	8.6	4.3	2.0	土師 D 群	橙	明黄褐	やや軟質	完形	No. 2
6	土師器	埴	—	5.9	(2.2)	土師 D 群	明黄褐	明黄褐	やや軟質	底完周	ア 区
7	土師器	皿	(8.2)	(4.3)	2.0	土師 D 群	浅黄橙	灰白	やや軟質	口縁～底 1/4	B 区
8	土師器	甗	—	—	(0.8)	土師 C 群	明赤褐	明黄褐	やや軟質	底 1/4	A 区

第 23 表 西区 SⅠ-27 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	坏	14.5	8.8	4.0	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	口縁～体 3/4、底完周	No. 10 益子窯産
2	須恵器	坏	(14.4)	(9.0)	(3.8)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	口縁～底 1/3	C 区 益子窯産
3	須恵器	坏	—	8.8	(1.5)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	底完周	No. 8 益子窯産
4	須恵器	坏	—	(8.2)	(1.1)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	底 1/4	No. 2 益子窯産
5	須恵器	坏	(12.9)	(8.0)	(3.9)	須恵 C 群	灰黄	灰黄	やや硬質	口縁～体 1/6、底 1/3	No. 3 新治窯産
6	須恵器	坏	—	—	(1.3)	須恵 A 群	暗灰	暗灰	やや硬質	底 1/6	D 区 益子窯産
7	須恵器	鉢?	—	—	(2.5)	須恵 B 群	灰	灰	やや硬質	口縁 1/8	D 区
8	須恵器	壺	(11.4)	—	(7.4)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	口縁～体 1/6	No. 9
9	須恵器	甗・壺類	—	—	(6.2)	須恵 E 群	灰	黒	やや硬質	頸破片	D 区 産地不明
10	須恵器	甗	—	—	(5.1)	須恵 A + B 群	灰白	灰黄	硬質	体破片	D 区 産地不明
11	須恵器	甗	—	—	(4.1)	須恵 C 群	灰白	にぶい橙	やや硬質	体破片	D 区 新治窯産
12	土師器	埴	(13.2)	6.7	4.8	土師 C 群	橙	橙	やや軟質	口縁～体 1/4、底完周	No. 3
13	土師器	甗	—	—	(3.5)	土師 C 群	灰褐	褐灰	やや軟質	口縁 1/6	常総系甗
14	土師器	坏	—	(7.6)	(2.1)	土師 E 群	にぶい褐	にぶい黄橙	やや軟質	体～底 1/4	C 区
15	土師器	甗	—	—	(4.3)	土師 C 群	灰褐	褐	やや軟質	底 1/8	D 区 常総系甗

第 24 表 西区 SⅠ-28 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	灰釉陶器	瓶	—	—	(2.9)	陶器 D 群	灰白	灰白	やや硬質	体 1/8	D 区 東海地方産
2	須恵器	坏	—	(6.3)	(2.5)	須恵 A 群	灰黄褐	にぶい黄褐	やや硬質	体～底 1/4	B 区 益子窯産
3	須恵器	高台付坏	—	(11.0)	(2.1)	須恵 B 群	灰	灰	やや硬質	底～高台 1/4	B 区
4	須恵器	高台付埴	—	(9.2)	(2.7)	須恵 B 群	灰白	灰白	やや硬質	底～高台 1/2	No. 1 三義窯産?
5	須恵器	坏	—	—	(0.8)	須恵 B 群	灰	灰	やや硬質	底ほぼ完周	A 区
6	土師器	坏	—	—	(3.6)	土師 A 群	黒	にぶい黄橙	やや軟質	口縁～体破片	
7	土師器	坏	—	(5.8)	(1.9)	土師 D 群	黒	橙	やや軟質	底 1/4	C 区
8	土師器	甗	—	—	(2.8)	土師 B 群	灰褐	黒褐	やや軟質	口縁破片	C 区 常総系甗

第 25 表 西区 SⅠ-29 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	坏	—	(8.2)	(2.1)	須恵 A + B 群	青灰	暗青灰	やや硬質	底 1/4	一括 益子窯産
2	須恵器	高台付坏	—	—	(1.6)	須恵 B 群	灰白	灰白	やや軟質	底 1/6	一括 三義窯産?
3	須恵器	甗	—	—	(6.8)	須恵 A 群	灰	暗灰	やや硬質	頸～肩 1/8	B 区 益子窯産
4	土師器	坏	(12.1)	3.2	4.0	土師 B 群	黒褐	黄褐	やや軟質	口縁～体 1/4、底完周	No. 4
5	土師器	坏	(14.7)	—	(5.1)	土師 E 群	暗褐	にぶい褐	やや軟質	口縁～底 1/3	No. 9
6	土師器	鉢	(13.8)	—	(7.4)	土師 B 群	橙	にぶい橙	やや軟質	口縁 1/6、体～底 2/3	No. 6
7	土師器	甗	(20.8)	—	(7.3)	土師 E 群	にぶい橙	にぶい赤橙	やや軟質	口縁～体 1/3	No. 7
8	土師器	甗	—	—	(6.3)	土師 D 群	にぶい橙	浅黄橙	やや硬質	口縁 1/8	D 区
9	土師器	甗	—	6.5	(4.8)	土師 B 群	灰オリーブ	オリーブ黒	やや軟質	底完周	No. 2

Ⅲ. 調査成果

第 26 表 西区 SⅠ－3 1 出土遺物観察表

No	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	高台付坏	(16.1)	(9.6)	(6.1)	須恵 A 群	灰	黒	やや硬質	口縁～底 1/2	B 区 益子窯産
2	須恵器	蓋	(15.0)	—	(2.5)	須恵 A + B 群	灰	灰	やや硬質	口縁 1/3	A 区 産地不明
3	須恵器	蓋	—	—	(1.5)	須恵 E 群	灰	灰	硬質	天井 1/3	
4	須恵器	蓋	—	—	(1.5)	須恵 A 群	灰	灰	硬質	口縁～体 1/8	B 区
5	須恵器	小型瓶類	(5.8)	—	(3.3)	須恵 F 群	灰オリーブ	黄褐	やや軟質	口縁 1/4	東海地方産
6	須恵器	瓶	—	—	(1.7)	須恵 F 群	黄灰	黄灰	硬質	体 1/8	
7	土師器	甕	—	(8.0)	(4.9)	土師 F 群	黒褐	にぶい褐	やや硬質	底 1/4	A 区 常総系甕

第 27 表 西区 SⅠ－3 3 出土遺物観察表

No	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	坏	14.3	6.5	4.6	須恵 B 群似	灰黄	灰白	やや硬質	口縁～体 2/3、底完周	No. 2、B 区 産地不明
2	須恵器	甕	—	7.8	(2.8)	須恵 E 群	灰	灰	やや硬質	底完周	No. 1 常陸産
3	須恵器	蓋	—	—	(1.5)	須恵 A + B 群	灰	灰	やや硬質	口縁～体 1/6	D 区 産地不明
4	土師器	甕	—	—	(4.5)	土師 F 群	にぶい橙	にぶい橙	軟質	口縁破片	C 区
5	土師器	甕	—	(7.2)	(4.2)	土師 G 群	灰褐	にぶい黄橙	軟質	底 1/3	A 区
6	土師器	甕	—	(9.5)	(2.0)	土師 D 群	灰黄褐	にぶい赤褐	軟質	底 1/3	D 区
7	土師器	甕	—	6.7	(26.9)	土師 E 群	明赤褐	明赤褐	やや軟質	体 2/3、底完周	カト No. 3

第 28 表 西区 SⅠ－3 4 出土遺物観察表

No	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	甕	—	—	(3.8)	須恵 F 群	灰オリーブ	灰オリーブ	やや硬質	体破片	A 区東
2	須恵器	甕	—	—	(2.2)	須恵 B 群	灰	灰	やや硬質	体破片	A 区
3	土師器	坏	—	—	(3.3)	土師 B 群	橙	橙	やや軟質	口縁～体破片	カト
4	土師器	甕	16.6	—	(16.6)	土師 C 群	灰褐	明褐	やや軟質	口縁 7/8、体 1/2	カト No. 4 常総系甕
5	土師器	甕	—	—	(15.8)	土師 C 群	にぶい黄褐	明褐	やや軟質	体 1/8	No. 2 常総系甕
6	土師器	甕	—	(7.4)	(1.9)	土師 C 群	暗灰黄	黒褐	やや軟質	底 1/4	南壁 B 区 常総系？

第 29 表 西区 SⅠ－3 5 出土遺物観察表

No	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	土師器	坏	11.1	—	3.9	土師 B 群	橙	黒	やや軟質	口縁～底 2/3	No. 2
2	土師器	坏	11.5	—	(4.3)	土師 B 群	橙	にぶい褐	やや軟質	体～底 3/4	No. 1・3
3	土師器	甕	(18.3)	—	(13.4)	土師 A 群	にぶい黄橙	褐	やや軟質	口縁～体 1/12	カト No. 7
4	土師器	甕	18.4	—	(17.0)	土師 E 群	明褐	褐	やや軟質	口縁～体 2/3	カト No. 9
5	土師器	甕	(20.6)	—	(16.4)	土師 E 群	橙	明褐	やや軟質	口縁 3/4、体上位完周	No. 3
6	土師器	甕	(23.7)	—	33.7	土師 E 群	黒褐	黒褐	やや軟質	口縁～体 3/4、底 1/2	カト No. 1-1・1-2
7	土師器	甕	(19.0)	5.8	27.5	土師 G 群	明赤褐	明赤褐	やや軟質	口縁 1/2、体～底完周	カト No. 6
8	土師器	甕	(19.2)	(9.5)	(35.2)	土師 E 群	橙	明褐	やや硬質	口縁 3/4、体～底 1/4	カト No. 2・8

第 30 表 西区 SⅠ－3 7 出土遺物観察表

No	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	蓋	—	—	(1.7)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	天井ツマミ部分完周	C 区 益子窯産
2	須恵器	蓋	(16.0)	—	(2.5)	須恵 C 群	灰	灰	やや硬質	口縁～天井 1/4	新治窯産
3	須恵器	蓋	—	—	(2.5)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	口縁 1/4	C 区 益子窯産
4	須恵器	壺	—	—	(2.1)	須恵 F 群	オリーブ灰	オリーブ灰	硬質	口縁 1/4	C 区
5	灰釉陶器	甕	—	—	(3.3)	陶器 D 群	灰	浅黄	硬質	体破片	No. 2 猿投窯産
6	須恵器	甕	—	—	(13.4)	須恵 A 群	灰	灰	硬質	体破片	No. 4 益子窯産
7	土師器	甕	—	—	(6.6)	土師 C 群	明赤褐	にぶい黄褐	やや軟質	口縁～体 1/4	No. 3 常総系 (亜流)
8	土師器	甕	24.2	—	(15.1)	土師 C 群	にぶい褐	橙	やや軟質	口縁～体完周	カト No. 5 常総系甕
9	土師器	甕	—	—	(14.5)	土師 C 群	明赤褐	明赤褐	やや軟質	体破片	カト No. 2 常総系甕
10	土師器	甕	—	—	(4.0)	土師 C 群	橙	橙	やや軟質	口縁 1/4	常総系甕
11	土師器	甕	—	8.8	(6.7)	土師 C 群	明赤褐・橙	橙・にぶい黄褐	やや軟質	底 2/3、体破片	No. 6 常総系甕
12	土師器	甕	—	—	(9.2)	土師 C 群	にぶい橙	にぶい褐	軟質	底 1/6	No. 6 常総系甕

第31表 西区SⅠ-38出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	坏	(13.9)	6.5	4.8	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	口縁～体 1/4、底完周	No. 5 益子窯産
2	須恵器	坏	(13.4)	7.5	(4.5)	須恵 B 群似	灰黄	灰黄	やや硬質	口縁 1/4、体 2/3、底完周	No. 1、D 区 常陸産
3	須恵器	坏	14.5	6.6	5.0	須恵 A 群	灰	青灰	やや硬質	口縁～体 4/5、底完周	No. 2、D 区 益子窯産
4	須恵器	瓶	—	—	(9.9)	須恵 A + E 群	灰	黒	硬質	体破片	A 区 益子窯産?
5	灰釉陶器	皿	—	—	(2.0)	陶器 D 群	灰オリーブ	灰白	硬質	口縁 1/6	D 区 猿投窯産
6	須恵器	碗	—	—	(6.9)	須恵 B 群	灰	灰	やや硬質	口縁～体 1/6	A 区 東海産?
7	須恵器	坏	—	—	(4.5)	須恵 B 群	灰白	灰白	やや硬質	口縁 1/6	D 区 三義窯産?
8	須恵器	坏	—	(6.0)	(1.8)	須恵 A + B 群	灰	灰	やや軟質	底 1/2	A 区 常陸産?
9	須恵器	坏	—	—	(1.6)	須恵 A 群	オリーブ灰	オリーブ灰	やや硬質	底 1/4	A 区
10	須恵器	坏	—	(6.8)	(1.6)	須恵 A 群	にぶい橙	にぶい黄橙	やや硬質	底 1/2	C 区 益子窯産
11	須恵器	坏	—	(8.0)	(1.7)	須恵 A 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや硬質	底 1/5	C 区 益子窯産
12	須恵器	高台付坏	—	6.8	(2.1)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	底 2/3	D 区、SD-36 14 堀ノ内窯産?
13	須恵器	瓶	—	—	(8.1)	須恵 A 群	暗灰	暗灰	やや硬質	体～底破片	No. 6
14	土師器	甕	—	—	(13.4)	土師 C 群	にぶい黄褐	にぶい橙	やや硬質	口縁 1/6、体 1/12	No. 4、一括 常総系甕
15	土師器	甕	—	—	(16.2)	土師 F 群	にぶい橙	橙	やや軟質	口縁 1/6	A・B 区 上武系甕
16	土師器	甕	—	—	(6.0)	土師 C 群	にぶい赤褐	にぶい褐	やや軟質	口縁 1/4	No. 4
17	土師器	甕	—	—	(6.4)	土師 E 群	灰黄褐	にぶい黄橙	やや硬質	底 1/6	No. 7 常総系甕
18	土師器	甕	—	—	(1.7)	土師 C 群	にぶい橙	にぶい黄褐	やや軟質	底 1/4	床下 常総系甕

第32表 西区SⅠ-39出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	土師器	甕	—	(8.0)	(20.6)	土師 B 群	明赤褐	明赤褐	やや軟質	頸～体 1/8、底 1/4	No. 3、A 区
2	土師器	坏	—	—	(3.2)	土師 E 群	黒	黒	やや軟質	口縁 1/3	C 区
3	土師器	高坏	(10.4)	—	(6.6)	土師 C 群	黒褐	黒褐	やや硬質	皿部完周	No. 1
4	土師器	甕	—	—	(6.2)	土師 F 群	明赤褐	明赤褐	やや硬質	体破片	D 区

第33表 西区SⅠ-40出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	蓋	(16.6)	—	(3.3)	須恵 A 群	にぶい赤褐	灰褐	やや硬質	天井～口縁 1/4	No. 1、D 区 益子窯産
2	須恵器	坏	(13.4)	(8.2)	4.0	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	口縁～体部 1/6、底 1/4	南 益子窯産
3	須恵器	甕	27.3	16.2	25.8	須恵 B 群似	灰白	灰白	やや硬質	ほぼ完形	No. 9・19・20・21、南中央 常陸産
4	土師器	坏	12.5	5.5	3.6	土師 F 群	黄褐	黄褐	やや軟質	口縁 7/8、体～底完周	No. 25 常陸地域産
5	土師器	坏	12.6	5.1	(3.4)	土師 C 群	橙	橙	やや軟質	口縁～底 1/2	南 常陸地域産
6	土師器	坏	—	5.1	(1.8)	土師 C 群	黒	黄褐	やや軟質	底 1/2	No. 18
7	土師器	高台付坏	—	—	(2.4)	土師 B 群	褐灰	明赤褐	やや軟質	体～底 1/4、高台欠損	北 B 区
8	土師器	高台付坏	—	(5.8)	(1.2)	土師 B 群	黒	明黄褐	やや軟質	底 1/3	南中央
9	土師器	高台付坏	—	7.7	(2.5)	土師 A 群	黒	灰黄褐	やや軟質	底～高台完周	No. 10
10	土師器	甕	—	—	(5.7)	土師 E 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	口縁 1/2	No. 24
11	土師器	甕	—	—	(7.2)	土師 E 群	にぶい褐	明黄褐	やや軟質	口縁 1/8	No. 2
12	土師器	甕	—	—	(6.2)	土師 E 群	橙	明赤褐	やや軟質	口縁 1/4	No. 11、南中央 常総系甕
13	土師器	甕	—	5.0	(2.9)	土師 C 群	橙	にぶい黄橙	やや硬質	底 3/4	南
14	土師器	甕	—	(8.0)	(2.7)	土師 B 群	にぶい橙	にぶい橙	やや軟質	底 1/4	南中央
15	土師器	甕	—	(6.8)	(4.1)	土師 C 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや硬質	底 1/3	南中央
16	土師器	甕	—	6.1	(7.2)	土師 E 群	灰黄褐	黄褐	やや軟質	体～底 1/3	No. 6 常総系甕
17	土師器	甕	—	—	(8.1)	土師 E 群	明赤褐	橙	やや軟質	体～底 1/4	No. 7 常総系甕

Ⅲ. 調査成果

第 34 表 西区 SⅠ－4 1 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	高台付坏	—	—	(4.2)	須恵 A 群似	灰白	灰	やや硬質	口縁 1/4	C 区 常陸産
2	須恵器	高台付坏	—	(9.6)	(1.5)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	底 1/2	No. 10 益子窯産
3	須恵器	高台付坏	—	—	(4.4)	須恵 B 群	灰黄	灰黄	やや硬質	底 1/6	D 区、一括 産地不明
4	須恵器	蓋	—	—	(1.6)	須恵 A + B 群	灰	灰	やや硬質	口縁 1/4	No. 12 益子窯産?
5	須恵器	甕	—	—	(3.3)	須恵 A 群	灰	灰	硬質	頸破片	一括 産地不明
6	須恵器	壺	(22.4)	—	(10.4)	須恵 A + B 群	灰	灰	やや硬質	口縁～頸 1/4	No. 11・15、A・C 区 産地不明
7	土師器	坏	(14.6)	(4.0)	(4.2)	土師 D 群	明赤褐	明赤褐	硬質	口縁～体 1/8、底 1/2	A 区
8	土師器	坏	—	(7.0)	(1.6)	土師 D 群	にぶい黄褐	にぶい黄褐	やや硬質	底 1/3	D 区
9	土師器	甕	27.4	11.8	22.2	土師 C 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	ほぼ完形	No. 1 常総系甕
10	土師器	甕	(23.0)	—	(30.3)	土師 C 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	口縁～体 1/2	No. 2・7・8・9、C・D 区、一括 常総系甕
11	土師器	小型甕	17.2	—	(17.7)	土師 C 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	口縁～体完周、底欠損	かど No. 1 常総系小 型甕
12	土師器	小型甕	16.0	—	(16.4)	土師 B 群	浅黄橙	浅黄橙	やや軟質	口縁～体 3/4	No. 3 常総系小型甕
13	土師器	甕	—	9.6	(28.9)	土師 C 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	頸～体 1/3	No. 4 常総系甕

第 35 表 西区 SⅠ－4 2 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	灰釉陶器	高台付皿	—	(7.0)	(2.4)	陶器 B 群	灰白	灰白	硬質	底 1/4	西区 東濃窯産
2	須恵器	坏	—	—	(1.7)	須恵 A + B 群	灰	灰	やや硬質	底 1/6	東区 新治窯産
3	須恵器	高台付坏	—	—	(1.4)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	底 1/6	西区 産地不明
4	土師器	坏	—	—	(2.9)	土師 B 群	黒	橙	やや軟質	口縁～体 1/6	西区
5	土師器	高台付坏	—	—	(1.7)	土師 B 群	オリーブ黒	橙	やや軟質	体～底 1/6	ㄐ 朴中
6	土師器	坏	(14.4)	—	(3.8)	土師 B 群	浅黄	浅黄	やや硬質	口縁～体 1/2	No. 2、ㄐ 朴中、東区
7	土師器	坏	(13.2)	6.8	4.6	土師 A 群	にぶい橙	にぶい橙	やや硬質	口縁 1/8、体～底 1/2	No. 3
8	土師器	坏	(12.2)	6.2	4.7	土師 F 群	浅黄橙	にぶい黄	やや軟質	口縁 1/6、体～底完周	No. 4

第 36 表 西区 SⅠ－4 3 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	蓋	—	—	(1.1)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	口縁 1/6	
2	須恵器	坏	—	—	(2.9)	須恵 A 群	灰	灰	硬質	体 1/6	益子窯産
3	須恵器	坏	—	—	(1.2)	須恵 A 群	灰白	灰白	硬質	底 1/4	益子窯産
4	須恵器	坏	—	—	(0.8)	須恵 A 群	灰	灰	硬質	底 1/5	I4 益子窯産
5	土師器	高台付坏	—	—	(2.0)	土師 A 群	暗灰	にぶい橙	やや硬質	体～底 1/4	
6	土師器	坏	—	(7.0)	(1.4)	土師 A 群	灰	橙	やや硬質	底 1/4	I4
7	土師器	甕	—	—	(2.8)	土師 G 群	にぶい橙	にぶい橙	やや軟質	口縁破片	常総系甕

第 37 表 西区 SⅠ－4 4 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	灰釉陶器	壺瓶類	—	—	(7.0)	陶器 E 群	灰	灰	硬質	体～底破片	No. 5 猿投窯産
2	須恵器	蓋	(14.5)	—	(2.7)	須恵 A 群	暗青灰	暗青灰	やや硬質	口縁～天井 1/4	東 D 区 益子窯産
3	須恵器	坏	12.8	8.2	3.8	須恵 A 群	橙	橙	やや硬質	口縁 3/4、体～底完周	No. 7 益子窯産
4	須恵器	坏	—	6.6	(0.9)	須恵 B 群似	灰	灰	やや硬質	底完周	東 D 区 常陸産
5	須恵器	坏	—	(7.6)	(1.1)	須恵 B 群似	灰白	灰白	硬質	底 1/4	床下 産地不明
6	須恵器	甕	19.6	15.0	34.0	須恵 A + B 群	灰黄	灰白	やや硬質	口縁～体 2/3、底完周	No. 1・2 常陸産
7	土師器	甕	—	—	(8.9)	土師 A 群	橙	橙	やや硬質	口縁 1/4	東 D 区、南北ㄐㄐ 朴内、 西側 C 区 上武系甕
8	土師器	甕	—	—	(4.0)	土師 F 群	にぶい橙	にぶい橙	やや軟質	口縁 1/12	東 D 区 常総甕
9	土師器	甕	—	(7.0)	(3.2)	土師 G 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや硬質	底 1/4	No. 4

第 38 表 西区 SⅠ-45 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	坏	13.2	7.5	4.6	須恵 A + B 群	灰	灰	やや硬質	口縁～底 1/2	No. 4 堀ノ内窯産
2	須恵器	坏	—	8.6	(2.3)	須恵 A + B 群	灰	灰	やや硬質	体 1/4、底 1/2	No. 1
3	須恵器	坏	—	—	(3.4)	須恵 A 群似	黄灰	黄灰	やや硬質	口縁～底 1/12	常陸産?
4	須恵器	坏	—	—	(4.2)	須恵 A + B 群	灰	灰オリーブ	やや硬質	口縁～底 1/6	堀ノ内窯産?
5	須恵器	高台付坏	—	—	(1.1)	須恵 A + B 群	灰オリーブ	灰オリーブ	やや硬質	底～高台 1/4	
6	須恵器	高台付坏	—	—	(3.4)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	底～高台破片	益子窯産?
7	土師器	甕	—	—	(6.8)	土師 C 群	橙	橙	やや軟質	体～底破片	常総系甕

第 39 表 西区 SⅠ-46 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	土師器	甕	—	—	(8.8)	土師 C 群	褐	黄褐	やや軟質	口縁～体 1/8	No. 2 常総甕
2	土師器	甕	—	—	(6.8)	土師 C 群	褐	褐	やや軟質	体破片	No. 1 常総系甕?

第 40 表 西区 SⅠ-47 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	坏	—	—	(3.7)	須恵 B 群	浅黄	浅黄	やや硬質	口縁 1/4	B 区 三義窯産?
2	土師器	甕	—	—	(5.1)	土師 A 群	黒褐	黒褐	やや硬質	口縁 1/4	No. 2
3	須恵器	甕	—	—	(11.0)	須恵 B 群	浅黄	灰白	やや硬質	体破片	No. 1 三義窯産?

第 41 表 西区 SⅠ-48 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	坏	14.4	7.7	4.5	須恵 A 群	オリーブ灰	オリーブ灰	やや硬質	ほぼ完形	No. 2 益子窯産
2	須恵器	坏	—	7.1	(3.1)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	底完周	No. 5 益子窯産
3	須恵器	甕	—	—	(6.8)	須恵 A 群	灰	灰	やや軟質	口縁～体破片	常陸産
4	須恵器	甕	—	—	(4.5)	須恵 E 群	灰オリーブ	灰	やや硬質	底 1/4	新治窯産
5	土師器	坏	—	—	(3.0)	土師 A 群	黒	明黄褐	やや軟質	底 1/8	
6	土師器	高台付坏	—	—	(2.2)	土師 B 群	褐灰	にぶい黄褐	やや軟質	底 1/4	
7	土師器	甕	—	—	(3.2)	土師 E 群	明褐	明褐	やや軟質	口縁 1/12	常総甕

第 42 表 西区 SⅠ-50 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	土師器	坏	—	—	(2.7)	土師 B 群	灰黄褐	にぶい黄橙	やや硬質	底 1/3	
2	土師器	甕	—	—	(4.2)	土師 C 群	にぶい褐	明褐	やや硬質	口縁 1/4	常総系甕

第 43 表 西区 SⅠ-52 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	灰釉陶器	壺類	—	—	(4.5)	陶器 D 群	灰白	灰	硬質	体破片	猿投窯産
2	須恵器	碗類	—	—	(4.7)	須恵 A 群	灰	灰	硬質	口縁～体 1/6	
3	須恵器	蓋	—	—	(1.5)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	口縁～体 1/6	
4	土師器	甕	—	—	(3.6)	土師 C 群	にぶい黄褐	にぶい褐	軟質	口縁破片	常総系甕
5	須恵器	硯	—	(14.2)	(3.5)	須恵 C 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	底破片	新治窯産

第 44 表 東区 SⅡ-53 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	土師器	高坏	—	—	(8.5)	土師 C 群	明赤褐	明赤褐	やや軟質	脚 2/3	No. 1

Ⅲ. 調査成果

第 45 表 東区 SⅠ－54 出土遺物観察表

No	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	坏	—	—	4.1	須恵 A 群	にぶい褐	にぶい橙	やや硬質	口縁～底 1/6	A 区 産地不明
2	土師器	坏	(16.4)	(8.0)	4.7	土師 E 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや硬質	口縁～体 1/6、底 1/4	No. 2
3	土師器	甕	—	—	(2.5)	土師 B 群	橙	にぶい黄橙	やや軟質	底破片	No. 11
4	土師器	甕	—	—	(2.5)	土師 C 群	にぶい黄橙	橙	やや軟質	口縁破片	C 区 常総系甕
5	土師器	甕	—	—	(5.5)	土師 C 群	明赤褐	明赤褐	やや軟質	口縁～体破片	D 区 常総甕
6	土師器	甕	—	—	(9.7)	土師 D 群	赤褐	黒褐	やや軟質	体破片	A 区 常総甕
7	土師器	甕	(19.8)	—	(26.2)	土師 F 群	明赤褐	にぶい赤褐	やや硬質	口縁 1/2、体 1/8	No. 1、D 区 常総甕

第 46 表 東区 SⅠ－57 出土遺物観察表

No	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	坏	(9.5)	—	(3.0)	須恵 B 群	灰白	灰白	やや硬質	口縁～体破片	C 区
2	須恵器	甕	—	—	(7.0)	須恵 B 群	灰白	灰白	やや硬質	体破片	No. 17 産地不明
3	土師器	坏	(11.2)	—	(3.9)	土師 D 群	暗褐	にぶい黄橙	やや軟質	口縁～底 1/4	No. 6
4	土師器	坏	—	—	(3.8)	土師 B 群	橙	灰褐	やや軟質	口縁～体破片	B 区
5	土師器	坏	—	—	(3.5)	土師 D 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや硬質	口縁～底 1/4	カト
6	土師器	坏	—	—	(3.5)	土師 B 群	黒褐	にぶい黄橙	やや硬質	口縁～体 1/3	A・B 区カト
7	土師器	甕	—	—	(21.7)	土師 C 群	橙	明赤褐	やや軟質	体破片	No. 14
8	土師器	壺	—	7.5	(4.8)	土師 D 群	橙	明黄褐	やや軟質	底完周	No. 1
9	土師器	甕	—	(7.0)	(2.8)	土師 C 群	橙	橙	やや軟質	底 1/3	No. 10

第 47 表 東区 SⅠ－58 出土遺物観察表

No	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	灰釉陶器	小型壺	—	—	(4.15)	陶器 C 群	灰白	淡い緑	硬質	口縁～体 1/8	B 区 猿投窯産
2	灰釉陶器	壺瓶類	—	(8.6)	(5.3)	陶器 C 群	黄灰	黄灰	硬質	口縁 1/8、体下～底 1/8	C 区床下 猿投窯産
3	須恵器	蓋	—	—	(1.9)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	口縁～体 1/12	B 区床下 益子窯産
4	須恵器	坏	(12.5)	6.5	3.9	須恵 A + B 群	黄灰	黄灰	やや硬質	口縁～体 1/4、底 3/4	B 区 堀ノ内窯産
5	須恵器	坏	—	(6.0)	(1.6)	須恵 A 群	灰黄	にぶい黄橙	やや硬質	底 1/4	カト 支脚下 常陸産
6	須恵器	坏	—	—	4.3	須恵 A 群	黄灰	黄灰	やや硬質	口縁～底 1/6	カト 床下
7	須恵器	甕	—	—	(9.1)	須恵 B 群	灰黄	灰黄	やや軟質	体～底 1/8	No. 4 産地不明
8	須恵器	甕	—	—	(10.7)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	体 1/8	No. 3
9	土師器	高台付坏	—	(6.8)	(2.2)	土師 C 群	にぶい橙	にぶい橙	やや軟質	体下～底 1/4	D 区
10	土師器	高台付坏	—	—	(1.8)	土師 C 群	黒	にぶい橙	やや硬質	底 1/2	No. 2
11	土師器	坏	—	—	(2.6)	土師 C 群	にぶい橙	橙	やや軟質	体～底 1/6	カト 床下
12	土師器	坏	—	—	2.2	土師 C 群	橙	橙	やや軟質	口縁～底 1/6	A 区
13	土師器	坏	—	(6.0)	(2.6)	土師 C 群	橙	橙	硬質	口縁～底 1/3	A 区
14	土師器	皿	(10.0)	5.3	2.6	土師 C 群	浅黄橙	浅黄橙	やや軟質	口縁～体 1/4、底 1/2	No. 6
15	土師器	坏	—	—	2.2	土師 A 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	口縁～底 1/5	C 区
16	土師器	坏	—	(7.0)	(0.7)	土師 F 群	橙	橙	やや軟質	底 1/5	D 区
17	土師器	甕	—	—	(7.6)	土師 C 群	橙	橙	やや軟質	口縁 1/8	カト No. 2
18	土師器	甕	—	—	(12.9)	土師 G 群	にぶい黄褐	にぶい黄褐	やや軟質	体～底 1/8	No. 5 常総系甕
19	土師器	甕	—	—	(2.3)	土師 C 群	にぶい褐	にぶい褐	やや軟質	口縁 1/8	A 区
20	土師器	甕	—	—	(4.3)	土師 E 群	にぶい黄橙	にぶい橙	やや硬質	体破片	カト 床下

第 48 表 東区 SⅠ－59A 出土遺物観察表

No	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	灰釉陶器	瓶類	—	—	(6.5)	陶器 E 群	灰白	灰オリーブ	硬質	体 1/8	No. 4 猿投窯産
2	須恵器	坏	12.3	6.1	3.8	須恵 C 群	黄灰	黄灰	やや硬質	ほぼ完形	No. 25 新治窯産
3	須恵器	坏	(10.9)	5.3	3.7	須恵 E 群	オリーブ黄	にぶい黄	やや硬質	口縁～体 1/8、底完周	No. 26 常陸産
4	須恵器	坏	(11.5)	(6.5)	(3.9)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	口縁～底 1/5	No. 6、A 区 益子窯産
5	須恵器	坏	—	(6.2)	(2.2)	須恵 A + B 群	オリーブ灰	オリーブ灰	やや硬質	底 1/2	No. 25 常陸産
6	須恵器	坏	—	6.0	(1.1)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	底 2/3	No. 2 益子窯産
7	須恵器	高台付坏	—	8.2	(2.1)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	底～高台完周	No. 23 益子窯産
8	土師器	坏	—	5.8	(1.3)	土師 C 群	黄灰	にぶい黄橙	やや軟質	底ほぼ完周	No. 18
9	土師器	高台付皿	—	—	(2.3)	土師 F 群	灰褐	黒褐	やや軟質	底 3/4	No. 1

第49表 東区SⅠ-59B出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
10	須恵器	坏	13.3	6.8	4.1	須恵 A + B 群	浅黄	浅黄	やや硬質	口縁～体 2/3、底完周	No. 10 常陸産
11	須恵器	坏	(13.6)	(8.0)	4.4	須恵 C 群	灰白	灰白	やや硬質	口縁～底 1/3	No. 24 新治窯産
12	須恵器	壺	—	9.4	(2.2)	須恵 A + B 群	灰白	灰白	やや硬質	底～高台完周	No. 15
13	土師器	坏	(11.2)	6.0	3.5	土師 C 群	橙	灰黄	やや軟質	口縁～体 1/2、底完周	No. 12
14	土師器	坏	(18.2)	—	(5.0)	土師 C 群	灰	にぶい黄橙	やや硬質	口縁～体 1/6	No. 20
15	土師器	坏	—	(6.6)	4.0	土師 D 群	明黄褐	にぶい黄橙	やや硬質	口縁～体 1/6、底 1/2	C 区
16	土師器	坏	10.6	6.0	2.8	土師 C 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	口縁～体 2/3、底完周	No. 21
17	土師器	坏	(10.2)	6.0	3.0	土師 C 群	にぶい黄橙	黄灰	やや軟質	口縁～体 1/2、底完周	No. 11

第50表 東区SⅠ-59Aまたは59B出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
18	須恵器	坏	(12.6)	(7.2)	4.3	須恵 A + B 群	灰	灰	やや硬質	口縁～底 1/4	B 区 常陸産
19	須恵器	甕	—	—	(3.0)	須恵 F 群	灰白	オリーブ黄	硬質	体破片	B 区 東海地方産?
20	須恵器	甕	—	—	(4.5)	須恵 C 群	灰	灰	やや硬質	底 1/8	C 区 新治窯産
21	土師器	坏	(10.4)	(6.2)	2.4	土師 D 群	橙	褐灰	やや硬質	口縁 1/8、体～底 1/4	B 区
22	土師器	坏	(10.0)	(5.8)	2.4	土師 D 群	橙	橙	やや硬質	口縁～底 1/4	B 区
23	土師器	高台付埴	—	—	(3.0)	土師 C 群	にぶい橙	橙	やや軟質	底完周	No. 17
24	土師器	坏	—	(6.0)	(1.7)	土師 C 群	赤褐	明赤褐	やや軟質	底 1/4	C 区
25	土師器	坏	—	(6.0)	(1.7)	土師 A 群	橙	にぶい黄橙	やや軟質	底 1/3	A 区
26	土師器	坏	—	(6.0)	(2.0)	土師 D 群	暗灰	にぶい黄橙	やや硬質	底 1/4	東カド 周辺
27	土師器	高台付耳皿?	—	(4.5)	(2.5)	土師 C 群	暗灰	暗灰	やや軟質	底完周	A 区
28	土師器	小型台付甕	—	(7.2)	(5.8)	土師 C 群	にぶい褐	明赤褐	やや軟質	脚完周	B 区 上武系甕

第51表 東区SⅠ-59C出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
29	須恵器	蓋	—	—	(2.2)	須恵 A 群	黄灰	灰褐	やや硬質	天井 1/4	No. 7 益子窯産
30	須恵器	坏	—	(6.8)	(3.1)	須恵 E 群	灰黄	灰黄	やや軟質	底 1/3	A 区 常陸産
31	須恵器	坏	—	—	(3.8)	須恵 A 群	暗灰	暗灰	やや硬質	口縁～底 1/6	No. 30
32	須恵器	高台付坏	—	8.6	(3.9)	須恵 A 群	オリーブ黒	灰	やや硬質	底部 3/4	No. 8 益子窯産
33	須恵器	高坏	—	—	(1.6)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	坏底破片	D 区 益子窯産
34	須恵器	円面硯	—	—	(4.5)	須恵 A 群	暗オリーブ	暗オリーブ灰	硬質	底部 1/8	No. 9
35	土師器	坏	(12.3)	—	(4.0)	土師 E 群	黒	明赤褐	やや軟質	口縁 1/6、体～底 2/3	D 区
36	土師器	坏	(10.6)	—	3.4	土師 C 群	にぶい黄橙	にぶい橙	やや軟質	口縁～体 2/3、底完周	No. 27
37	土師器	甕	(19.8)	—	(9.3)	土師 G 群	橙	明赤褐	やや軟質	口縁 1/2	カド No. 1 常総系甕
38	土師器	甕	—	—	(9.0)	土師 E 群	にぶい橙	にぶい橙	やや軟質	体～底 1/4	No. 28 常総系甕

第52表 東区SⅠ-60出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	緑釉陶器	皿	—	—	(1.2)	陶器 C 群	淡緑	淡緑	やや軟質	口縁 1/8	猿投窯産?
2	須恵器	坏	—	—	3.9	須恵 D 群	灰白	灰白	やや硬質	口縁～底 1/8	C 区 三和窯産
3	須恵器	坏	—	(5.4)	(1.3)	須恵 B 群	にぶい橙	にぶい褐	やや硬質	底 1/2	D 区
4	土師器	坏	—	—	(2.6)	土師 A 群	黒	黄灰	やや軟質	体～底 1/6	D 区
5	土師器	甕	—	—	(5.2)	土師 E 群	橙	明褐	やや軟質	口縁～体破片	常総系甕
6	土師器	甕	—	—	(2.2)	土師 C 群	にぶい橙	オリーブ黒	やや硬質	底 1/3	D 区 常総系甕

第53表 東区SⅠ-61出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	原始灰釉	壺・瓶	—	—	(9.7)	陶器 D 群	灰	灰	やや硬質	口縁～体破片	D 区 猿投窯産
2	灰釉陶器	瓶	—	—	(2.4)	陶器 C 群	浅黄	暗褐	やや硬質	口縁破片	C 区 猿投窯産
3	灰釉陶器	瓶	—	—	(7.1)	陶器 C 群	灰白	灰オリーブ	やや硬質	体破片	D 区 猿投窯産
4	須恵器	坏	(12.9)	(9.7)	3.5	須恵 A 群	黒褐	黒褐	やや硬質	口縁～底 1/3	No. 9 堀ノ内窯産
5	須恵器	坏	(14.6)	(9.2)	3.9	須恵 B 群	浅黄	浅黄	やや硬質	口縁～底 1/2	カド、C 区 三義窯産
6	須恵器	坏	(15.0)	8.7	3.9	須恵 B 群	オリーブ黄	オリーブ黄	やや硬質	口縁～体 1/4、底 1/2	No. 8 三義窯産
7	須恵器	坏	—	(9.0)	(3.7)	須恵 A 群	褐灰	にぶい赤褐	やや硬質	底ほぼ完周	No. 17 益子窯産

Ⅲ. 調査成果

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
8	須恵器	坏	—	7.6	(3.7)	須恵 A 群	灰	暗緑灰	やや硬質	口縁 1/2、体～底 1/3	No. 7 益子窯産
9	須恵器	瓶	—	(9.7)	(8.4)	須恵 A 群	灰オリーブ	灰	硬質	体～底 1/4	No. 1 益子窯産
10	土師器	坏	(13.2)	—	(3.2)	土師 E 群	にぶい橙	灰	やや軟質	口縁～体 1/6、底 1/4	No. 16
11	土師器	坏	(12.0)	—	3.9	土師 C 群	橙	橙	やや硬質	口縁～底 1/4	B 区
12	土師器	坏	13.7	—	3.7	土師 D 群	明赤褐	明赤褐	やや硬質	完形	No. 11
13	土師器	坏	(16.0)	(8.0)	(3.2)	土師 B 群	明赤褐	暗赤褐	やや軟質	口縁～底 3/8	No. 10
14	土師器	坏	(15.0)	—	(3.5)	土師 B 群	暗褐	黒褐	やや軟質	口縁～体 1/4	No. 18
15	土師器	甕	—	(17.0)	(17.0)	土師 C 群	橙	橙	やや軟質	体～底 1/3	No. 5 常総系甕
16	土師器	甕	—	—	(8.8)	土師 C 群	橙	橙	やや硬質	口縁 1/12	A・B 区 常総系甕
17	土師器	甕	—	8.0	(10.6)	土師 F 群	明褐	黒褐	やや軟質	体下～底完周	No. 12 常総系甕

第 54 表 東区 SⅠ－6 2 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	坏	11.1	6.5	4.5	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	口縁 1/2、底完周	No. 4 益子窯産？
2	須恵器	坏	—	—	(2.1)	須恵 E 群	灰	灰	やや硬質	体～底破片	C 区 新治窯産
3	土師器	坏	—	—	(2.7)	土師 B 群	暗赤褐	赤褐	やや軟質	口縁～底 1/6	C 区
4	土師器	坏	—	—	(4.3)	土師 A 群	にぶい褐	灰黄褐	やや軟質	口縁～底 1/4	B 区
5	土師器	甕	—	—	(6.4)	土師 E 群	黒	橙	やや軟質	口縁～体破片	B 区

第 55 表 東区 SⅠ－6 3 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	土師器	坏	—	(5.4)	(1.0)	土師 G 群	浅黄橙	浅黄橙	やや軟質	底 11/12	A' 跡中
2	土師器	坏	—	(5.2)	(1.4)	土師 G 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや硬質	底 1/4	南
3	土師器	坏	—	—	(3.1)	土師 D 群	暗灰	にぶい橙	やや硬質	口縁 1/8	南
4	土師器	高台付坏	—	—	(2.3)	土師 C 群	オリーブ黒	橙	やや硬質	体～底 1/6	A' 跡中
5	土師器	高台付坏	—	—	(4.4)	土師 C 群	橙	橙	やや硬質	口縁～体 1/8	南

第 56 表 東区 SⅠ－6 4 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	土師器	小型壺	—	4.0	(4.8)	土師 E 群	にぶい橙	橙	やや硬質	体 1/3、底完周	Pit7
2	土師器	坏	10.4	4.5	5.7	土師 F 群	にぶい黄褐	褐灰	やや軟質	口縁～体 1/4、底完周	Pit6
3	土師器	坏	14.4	3.4	5.8	土師 C 群	にぶい橙	にぶい黄橙	硬質	口縁～底 3/4	No. 16
4	土師器	鉢	—	—	(3.4)	土師 F 群	灰褐	明赤褐	やや軟質	口縁 1/4	Pit6
5	土師器	高坏	(16.4)	—	(6.8)	土師 G 群	明赤褐	にぶい黄褐	硬質	口縁 1/5、体～底 1/2	No. 8
6	土師器	高坏	—	—	(2.5)	土師 F 群	にぶい黄橙	にぶい褐	硬質	皿部底 1/3	B 区
7	土師器	甕	—	(7.0)	(2.2)	土師 G 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや硬質	底 1/4	南辺
8	土師器	甕	—	(7.0)	(4.6)	土師 F 群	黒褐	にぶい黄橙	やや硬質	底 1/4	C 区
9	土師器	壺	—	5.2	(2.9)	土師 F 群	橙	にぶい黄橙	硬質	体 1/4、底完周	No. 4
10	土師器	壺	—	(5.2)	(1.9)	土師 G 群	にぶい橙	黒褐	硬質	底完周	No. 12

第 57 表 東区 SⅠ－6 5 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	土師器	坏	(10.6)	(5.4)	2.7	土師 D 群	浅黄橙	浅黄橙	やや軟質	口縁～体 1/4、底 1/2	東
2	土師器	坏	(10.5)	7.0	2.5	土師 C 群	灰褐	にぶい黄橙	やや軟質	口縁～体 1/2、底完周	カド No. 3
3	土師器	坏	(10.6)	6.0	3.1	土師 E 群	浅黄橙	浅黄橙	やや硬質	口縁～体 1/2、底完周	カド 周辺
4	土師器	坏	(10.0)	(6.8)	2.5	土師 D 群	にぶい黄橙	浅黄橙	やや軟質	口縁～体 1/6、底 1/4	東
5	土師器	坏	—	(6.6)	(1.8)	土師 C 群	黒	にぶい黄橙	やや軟質	底 1/4	B 区
6	土師器	高台付坏	—	(7.6)	(3.8)	土師 C 群	暗灰	灰黄	やや硬質	底完周、脚 1/3	カド No. 1
7	土師器	高台付坏	—	—	(2.0)	土師 F 群	橙	橙	やや軟質	底 1/3	D 区
8	須恵器	甕	—	—	(6.8)	須恵 E 群	青灰	青灰	やや硬質	体破片	C 区 常陸産？
9	須恵器	蓋	—	—	(0.8)	須恵 B 群	灰白	灰白	やや硬質	口縁～体 1/8	A 区
10	須恵器	蓋	—	—	(0.7)	須恵 B 群	灰褐	灰褐	やや硬質	口縁 1/8	D 区
11	須恵器	蓋	—	—	(0.9)	須恵 B 群	灰白	にぶい黄橙	やや硬質	口縁 1/4	C 区
12	須恵器	蓋	—	—	(0.7)	須恵 B 群	灰黄	黄灰	やや硬質	口縁 1/12	A 区
13	土師器	坏	—	—	(3.9)	土師 F 群	黒	にぶい黄橙	やや軟質	口縁～体 1/4	D 区

3. 遺物

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
14	土師器	坏	—	—	(3.0)	土師 D 群	灰白	浅黄橙	やや軟質	口縁～体 1/4	B 区 Pit
15	土師器	坏	(14.6)	—	4.0	土師 B 群	赤褐	赤褐	やや軟質	口縁～体 1/6、底 2/3	No 5・6 河内郡産
16	土師器	坏	—	—	(4.7)	土師 F 群	にぶい黄橙	にぶい褐	やや軟質	口縁～体破片	A 区
17	土師器	坏	—	—	(4.0)	土師 D 群	赤褐	にぶい赤褐	やや軟質	口縁～体 1/6	
18	土師器	坏	(14.8)	—	3.4	土師 D 群	にぶい橙	にぶい橙	やや軟質	口縁 1/4、体～底 1/2	No 4、A 区
19	土師器	皿	(18.4)	—	2.8	土師 A 群	褐灰	橙	やや軟質	口縁 1/6、体～底 1/3	B 区
20	土師器	鉢	(16.4)	—	(10.8)	土師 A 群	浅黄橙	浅黄橙	やや軟質	口縁～体 1/4	No 2、D 区
21	土師器	甕	—	—	(4.4)	土師 F 群	明赤褐	明赤褐	やや軟質	口縁 1/6	D 区
22	土師器	甕	—	—	(7.1)	土師 G 群	にぶい赤褐	赤褐	やや軟質	口縁～体 1/8	カド 北袖
23	土師器	甕	—	—	(5.5)	土師 E 群	淡黄	黒	やや軟質	口縁 1/8	A 区
24	土師器	甕	—	—	(4.7)	土師 F 群	黒褐	黒	やや軟質	口縁 1/8	D 区
25	土師器	甕	—	(11.0)	(3.5)	土師 F 群	にぶい橙	にぶい橙	やや軟質	底 1/4	B 区
26	土師器	甕	—	—	(2.5)	土師 E 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	底 1/4	D 区
27	土師器	甕	—	—	(2.8)	土師 F 群	黒	にぶい赤褐	やや軟質	底 1/4	D 区

第 58 表 東区 S I－6 7 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	坏	(13.4)	(9.0)	(4.1)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	口縁～体 1/8、底 1/2	D 区 益子窯産
2	須恵器	坏	—	(8.0)	(1.6)	須恵 A + B 群	灰	灰	やや硬質	底 1/2	常陸産
3	須恵器	高台付坏	(13.2)	(8.2)	(5.3)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	口縁～底 1/4	C 区、SI-73A 区 益子窯産
4	土師器	坏	—	(6.2)	(1.8)	土師 B 群	浅黄橙	浅黄橙	やや硬質	底 1/3	
5	土師器	坏	—	(8.0)	(1.6)	土師 C 群	暗灰	にぶい黄橙	やや軟質	底 2/3	C 区、SI-73A 区
6	土師器	壺	—	7.0	(2.0)	土師 B 群	淡黄・黒	にぶい橙	やや軟質	底完周	No. 1
7	土師器	高台付坏	10.9	6.7	4.0	土師 D 群	黒	浅黄橙	やや軟質	ほぼ完形	No. 7
8	土師器	甕・壺	—	6.9	(1.5)	土師 C 群	暗灰黄	にぶい褐	やや軟質	底完周	No. 3
9	須恵器	蓋	—	—	(2.0)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	体～ツマミ 1/4	益子窯産
10	須恵器	蓋	—	—	(1.5)	須恵 E 群	黄灰	黄灰	やや硬質	口縁 1/8	No. 4 産地不明
11	須恵器	蓋	(15.3)	—	3.0	須恵 A 群	灰白	灰白	やや硬質	口縁～天井 1/5、ツマミ完周	No. 10、C 区 益子窯産？
12	須恵器	甕	(19.2)	—	(6.1)	須恵 A 群	灰	灰	硬質	口縁 1/4	No. 14
13	須恵器	甕	—	—	(10.2)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	体破片	No. 13
14	土師器	甕	—	—	(4.8)	土師 F 群	橙	にぶい黄橙	やや硬質	底 1/4	
15	土師器	甕	—	—	(11.8)	土師 G 群	橙	橙	やや軟質	体破片	No. 16
16	土師器	甕	—	(8.7)	(18.0)	土師 F 群	にぶい褐	灰黄褐	やや軟質	体～底 1/3	No. 4・9

第 59 表 東区 S I－6 8 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	灰釉陶器	壺・瓶	—	—	(6.9)	陶器 E 群	黄灰	黄灰	硬質	体破片	No. 2・12 猿投窯産
2	須恵器	甕	—	—	(14.0)	須恵 A 群	黄灰	灰白	やや硬質	体破片	北東
3	須恵器	碕	—	—	(2.5)	須恵 A 群	灰	灰	硬質	底破片	A 区？
4	須恵器	坏	(12.2)	(6.6)	3.9	須恵 A 群	灰	灰	硬質	口縁～体 1/4、底 1/8	D 区 常陸産
5	須恵器	坏	—	(6.8)	(2.9)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	体～底 1/5	No. 3 常陸産
6	須恵器	坏	—	(7.8)	(2.7)	須恵 A 群	オリーブ灰	オリーブ灰	硬質	底 1/4	No. 15 益子窯産
7	須恵器	高台付坏	—	—	(2.7)	須恵 A 群	灰	灰	硬質	底 1/3	C 区 No. 9 益子窯産
8	土師器	坏	—	(6.3)	(1.2)	土師 B 群	黒	にぶい黄橙	やや軟質	底 2/3	No. 5
9	土師器	坏	(12.3)	5.8	3.9	土師 C 群	明赤褐	明赤褐	やや硬質	口縁～体 1/2、底 7/8	No. 17 下野河内系
10	土師器	坏	—	(6.0)	(2.7)	土師 C 群	オリーブ黒	にぶい橙	硬質	底ほぼ完周	No. 11
11	土師器	坏	—	(6.0)	(1.4)	土師 E 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	底 1/4	No. 6
12	土師器	坏	—	(8.0)	(1.1)	土師 D 群	灰白	灰白	やや軟質	底 1/4	D 区
13	土師器	甕	—	—	(5.6)	土師 E 群	橙	橙	やや硬質	口縁 1/4	B 区床下 常総系甕
14	土師器	甕	—	—	(2.5)	土師 G 群	にぶい橙	にぶい橙	やや軟質	口縁破片	A 区 常総系甕
15	土師器	甕	—	—	(1.8)	土師 C 群	橙	橙	やや軟質	口縁破片	D 区 常総系甕

Ⅲ. 調査成果

第 60 表 東区 SⅠ－70 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	坏	(15.0)	(8.0)	3.3	須恵 A 群	灰白	灰白	やや硬質	口縁 1/12、体～底 1/4	A 区 益子窯産？
2	須恵器	坏	—	(6.8)	(1.2)	須恵 A 群	オリーブ灰	オリーブ灰	やや硬質	底 1/2	AD ^ハ 鉢 益子窯産
3	須恵器	坏	—	(9.0)	(2.8)	須恵 A 群	灰白	灰白	やや軟質	底 1/2	カ ^ハ 前土坑・B 区 益子窯産
4	須恵器	坏	(15.0)	(10.0)	4.0	須恵 E 群	黄灰	黄褐	やや硬質	口縁～底 1/6	カ ^ハ No. 3 産地不明
5	須恵器	坏	—	—	(3.7)	須恵 B 群	灰白	灰白	やや硬質	口縁～体 1/4	B 区 三義窯産？
6	須恵器	甕	—	(8.2)	(2.0)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	底 1/4	B 区 産地不明
7	須恵器	盤	—	—	3.8	須恵 B 群	灰	灰	やや硬質	口縁 1/8、体 1/5、底 1/36	A・B 区 産地不明
8	須恵器？	埴	—	—	(3.5)	須恵 A 群	灰	オリーブ黒	やや硬質	口縁 1/8	A 区 統一新羅系土器？ 益子窯胎土似
9	土師器	鉢	(13.0)	—	(3.5)	土師 B 群	橙	橙	やや軟質	口縁～体破片	B 区
10	土師器	鉢	—	—	(3.8)	土師 B 群	浅黄橙	浅黄橙	やや軟質	口縁～体破片	B 区
11	土師器	甕	—	—	(5.2)	土師 F 群	黒褐	にぶい黄褐	やや軟質	口縁～体破片	A 区 在地系
12	土師器	甕	—	—	(11.2)	土師 C 群	橙	橙	やや軟質	口縁～体 1/8	カ ^ハ No. 1・2 常総甕
13	土師器	甕	(20.7)	(13.4)	(23.1)	土師 F 群	にぶい黄橙	にぶい褐	やや軟質	口縁～体上 1/6、体下～底 1/4	カ ^ハ 、No. 3、B 区床面
14	土師器	甕	(24.9)	6.7	33.3	土師 C 群	橙	橙	やや軟質	口縁～底 1/2	No. 3、B 区床面、カ ^ハ 上武系

第 61 表 東区 SⅠ－72 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	土師器	坏	(10.6)	—	3.6	土師 E 群	橙	にぶい橙	やや軟質	口縁～底 1/4	No. 1
2	土師器	坏	—	—	(3.1)	土師 B 群	オリーブ黒	にぶい黄	やや軟質	底 1/6	

第 62 表 東区 SⅠ－73 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	坏	—	—	(3.6)	須恵 E 群	黄灰	黄灰	硬質	口縁～底 1/4	A 区 新治窯産
2	須恵器	坏	(13.4)	(7.2)	4.3	須恵 A 群	灰	暗灰	やや硬質	口縁～体 1/4、底 1/2	No. 3 益子窯産
3	須恵器	坏	(14.0)	6.5	4.4	須恵 A 群	橙	橙	やや軟質	口縁～体 2/3、底完周	No. 2、A 区 益子窯産
4	須恵器	捏鉢	(14.6)	(10.2)	(11.4)	須恵 B 群	灰	灰	やや硬質	口縁～底 1/4	カ ^ハ No. 6、SI-70B 区
5	須恵器	甕	—	—	(12.0)	須恵 B 群	灰	灰	硬質	体破片	No. 1 産地不明
6	土師器	甕	—	—	(4.5)	土師 G 群	橙	橙	やや軟質	口縁 1/12	A 区 常総甕
7	土師器	甕	—	—	(5.5)	土師 C 群	にぶい橙	橙	やや軟質	口縁 1/5	カ ^ハ No. 4 常総甕
8	土師器	甕	—	—	(5.9)	土師 C 群	橙	橙	やや軟質	口縁 1/5	カ ^ハ No. 3 常総甕
9	土師器	甕	—	—	(4.3)	土師 C 群	橙	橙	やや軟質	口縁 1/8	A 区 常総甕
10	土師器	甕	14.9	7.5	15.3	土師 C 群	明赤褐	明赤褐	やや軟質	ほぼ完形	カ ^ハ No. 7 常総系甕
11	土師器	甕	(15.3)	(6.8)	17.5	土師 E 群	橙	橙	やや軟質	口縁～底 2/3	カ ^ハ No. 2・3・5・7・A 区、SI-67C 区
12	土師器	甕	—	—	(2.8)	土師 F 群	にぶい赤褐	にぶい赤褐	やや硬質	底 1/8	A 区

第 63 表 東区 SⅠ－74 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	灰釉陶器	皿	—	—	(1.8)	陶器 D 群	灰黄	灰黄	やや硬質	口縁破片	A 区 猿投窯産？
2	須恵器	甕	—	—	(9.2)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	体 1/8	No. 2
3	土師器	高台付坏	—	(6.8)	(2.2)	土師 C 群	黒	にぶい橙	やや軟質	底 2/3	A 区
4	土師器	坏	(12.0)	(6.2)	(4.0)	土師 C 群	黒	にぶい褐	やや軟質	口縁～底 1/3	No. 3
5	土師器	甕	—	—	(4.3)	土師 C 群	橙	灰褐	軟質	口縁 1/8	B 区
6	土師器	甕	—	—	(7.0)	土師 C 群	にぶい黄橙	橙	やや軟質	底 1/5	No. 4

第 64 表 東区 SⅠ－77 出土遺物観察表

No.	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	灰釉陶器	壺・瓶	—	—	(4.0)	陶器 D 群	灰白	オリーブ灰	硬質	口縁破片	A 区 猿投窯産
2	灰釉陶器	壺・瓶	—	—	(4.6)	陶器 D 群	灰白	淡緑	硬質	体破片	P1 猿投窯産
3	須恵器	蓋	—	—	(2.1)	須恵 A 群	灰	灰	やや硬質	口縁～体破片	一括 益子窯産
4	土師器	坏	—	—	(3.6)	土師 A 群	にぶい褐	にぶい褐	やや軟質	口縁～体破片	一括
5	土師器	坏	—	—	(3.1)	土師 A 群	橙	橙	やや軟質	口縁～体破片	A 区
6	土師器	甕	—	—	(4.2)	土師 C 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	口縁～体破片	P1 常総系甕？
7	土師器	甕	—	—	(1.9)	土師 C 群	灰黄褐	灰黄褐	やや軟質	底 1/4	A 区

第 65 表 東区 S I - 8 2 出土遺物観察表

No	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	壺・瓶類	—	—	(2.1)	須恵 B 群	灰白	灰白	硬質	口縁 1/8	北壁土坑 東海産
2	須恵器	壺	—	—	(4.3)	須恵 B 群	灰	灰	やや硬質	体 1/8	No. 5
3	土師器	坏	—	—	(3.7)	土師 A 群	黒褐	灰黄褐	やや硬質	口縁～体 1/4	No. 3
4	土師器	坏	(10.6)	(5.6)	4.0	土師 A 群	橙	橙	やや硬質	口縁～体 1/4	D 区床面
5	土師器	坏	9.0	(4.0)	4.4	土師 C 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや硬質	口縁 1/2、体～底 1/4	No. 10
6	土師器	坏	17.3	—	(5.2)	土師 B 群	にぶい褐	灰黄褐	やや硬質	口縁～底 1/2	No. 11
7	土師器	高台付坏	10.4	—	(5.5)	土師 A 群	橙	橙	硬質	皿部完周、脚 1/2	No. 2
8	土師器	甕	—	—	(6.0)	土師 A 群	にぶい褐	にぶい褐	やや硬質	口縁 1/8	No. 6
9	土師器	甕	—	—	(9.0)	土師 C 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや軟質	口縁 1/8	No. 8

第 66 表 東区 S I - 8 4 出土遺物観察表

No	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	瓶	6.5	—	19.6	須恵 F 群	灰	灰	やや硬質	ほぼ完形	No. 2 フラスコ形瓶
2	土師器	坏	—	—	(3.9)	土師 C 群	橙	橙	やや軟質	口縁～体破片	C 区床下
3	土師器	坏	—	—	(4.5)	土師 B 群	にぶい橙	にぶい橙	やや硬質	口縁 1/6	カド
4	土師器	坏	(10.8)	(4.8)	3.7	土師 D 群	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや硬質	口縁～底 1/4	No. 2
5	土師器	坏	12.0	—	5.3	土師 E 群	橙	橙	やや軟質	口縁～体 2/3、底完周	カド、カド No. 3・4
6	土師器	坏	—	—	(4.5)	土師 B 群	浅黄橙	浅黄橙	やや軟質	口縁 1/6	B 区床下
7	土師器	鉢	(11.0)	5.0	10.7	土師 G 群	黒褐	黒	やや軟質	口縁 1/4、体 2/3、底完周	No. 1
8	土師器	甕	(12.2)	—	(5.8)	土師 B 群	にぶい黄橙	にぶい赤褐	やや硬質	口縁 1/3	カド
9	土師器	甕	—	(6.0)	(9.9)	土師 G 群	黒褐	黒褐	軟質	体～底 1/4	カド、カド No. 1
10	土師器	甕	—	—	(3.1)	土師 E 群	灰	にぶい橙	やや軟質	底 1/6	B 区床下

第 67 表 西区 S K - 5 5 出土遺物観察表

No	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	土師器	甕	—	—	(7.0)	土師 D 群	褐	明赤褐	やや軟質	口縁 1/4	上武系甕

第 68 表 東区 S K - 7 1 出土遺物観察表

No	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	灰釉陶器	甕	—	—	(3.8)	陶器 B 群	灰オリーブ	灰	やや硬質	口縁～頸 1/4	
2	須恵器	蓋	—	—	(1.6)	須恵 A 群	灰オリーブ	灰オリーブ	やや硬質	ツマミ 1/2	
3	須恵器	甕	—	—	(8.4)	須恵 B 群	オリーブ黄	灰	やや硬質	体～底 1/6	

第 69 表 東区 S K - 7 5 出土遺物観察表

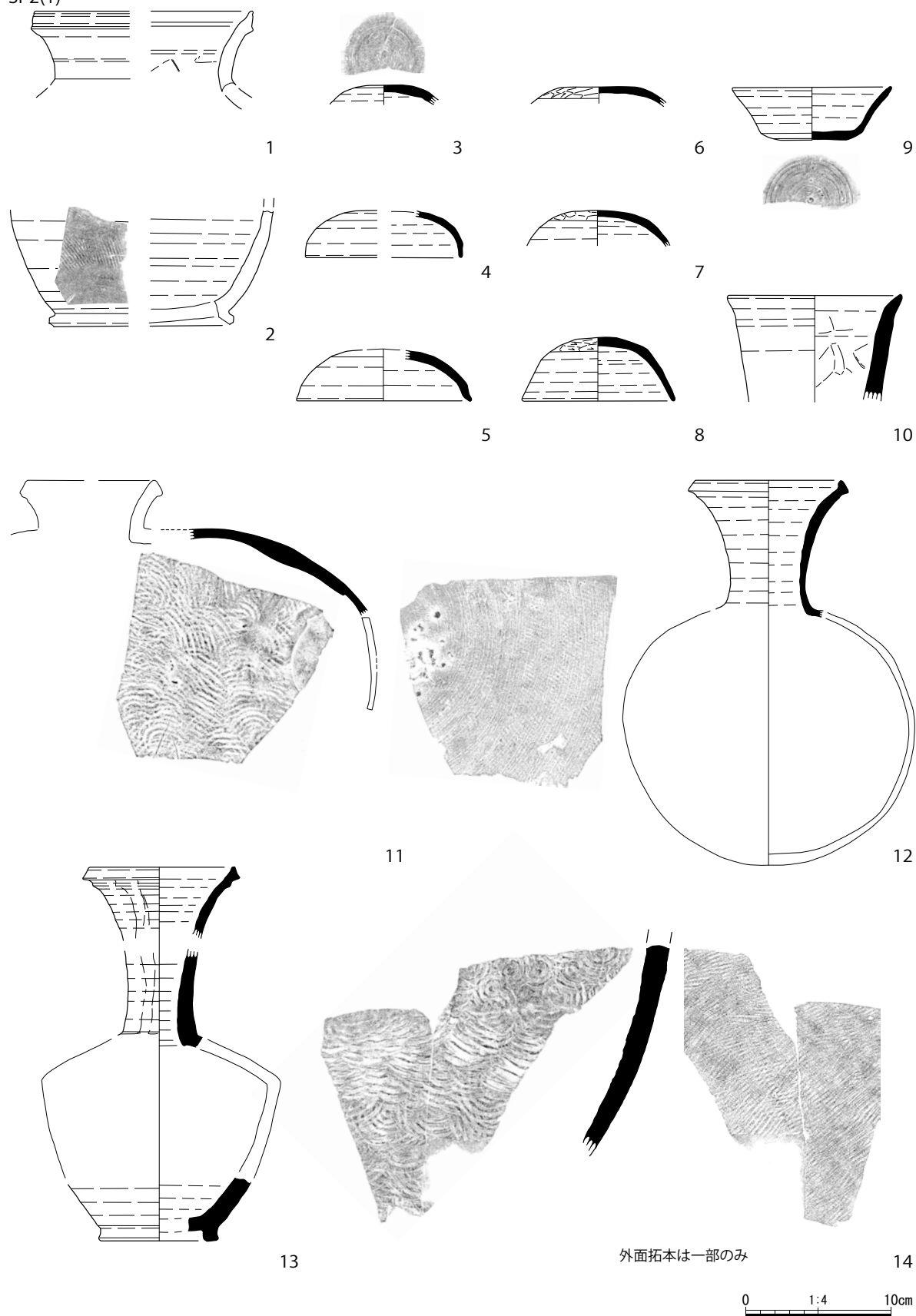
No	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	甕	—	—	(3.0)	須恵 E 群	褐灰	灰	硬質	体破片	
2	土師器	坏	—	(4.6)	(1.4)	土師 E 群	にぶい橙	橙	やや硬質	底 11/12	
3	土師器	坏	(5.7)	(5.5)	4.3	土師 E 群	橙	橙	やや軟質	口縁～底 1/2	No. 3
4	土師器	坏	(11.9)	—	(4.2)	土師 D 群	黒	にぶい褐	やや硬質	口縁～底 1/4	

第 70 表 東区 S K - 8 3 出土遺物観察表

No	器種	器形	大きさ (cm)			胎土	色調		焼成	残存率	備考
			口径	底径	器高		内	外			
1	須恵器	甕	—	—	(4.3)	須恵 B 群	黄灰	黄灰	硬質	体破片	
2	土師器	坏	—	—	(3.0)	土師 A 群	にぶい橙	黄灰	やや硬質	口縁～体破片	

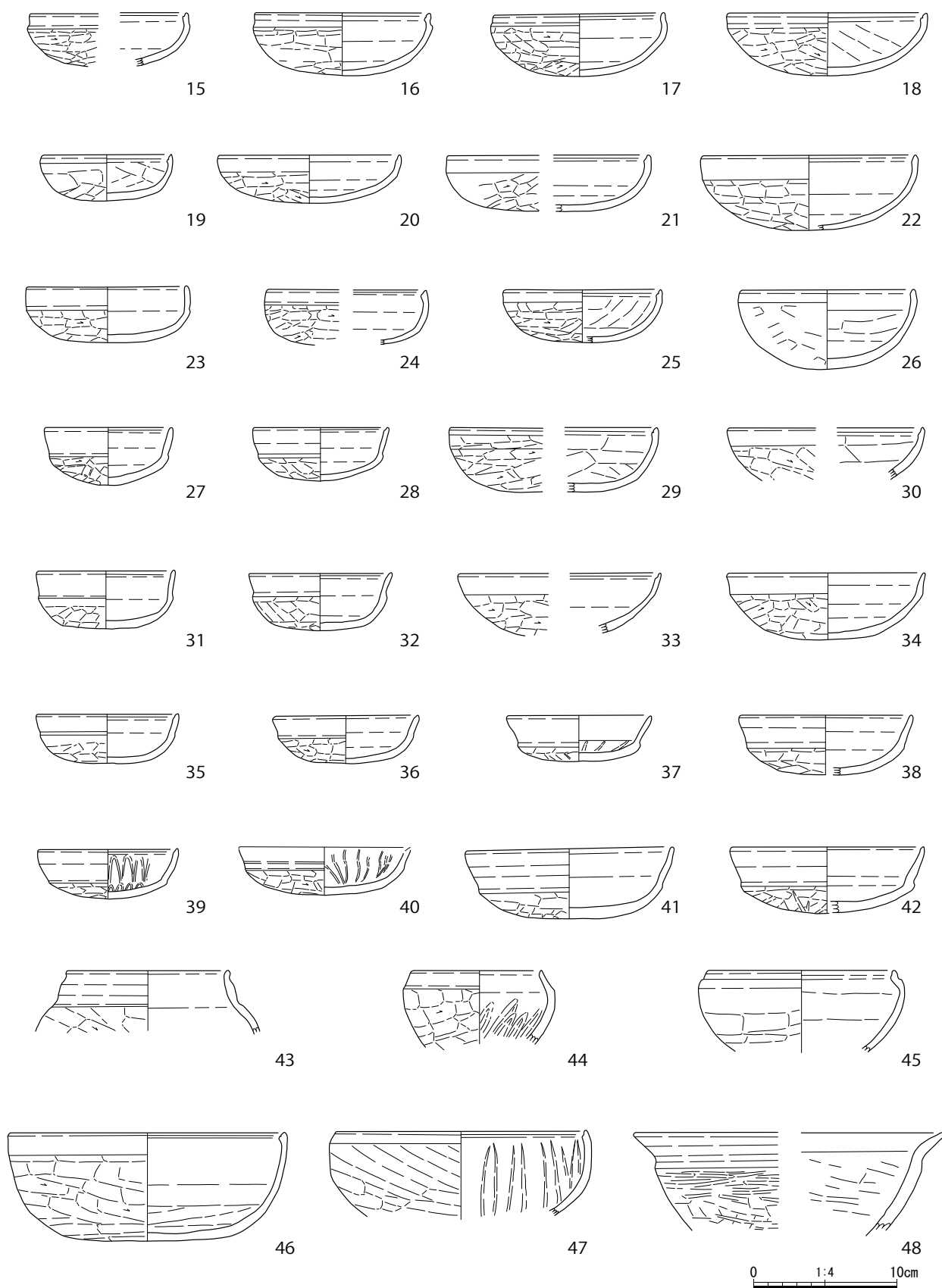
Ⅲ. 調査成果

SI-2(1)



第 80 図 竪穴出土土器 (1)

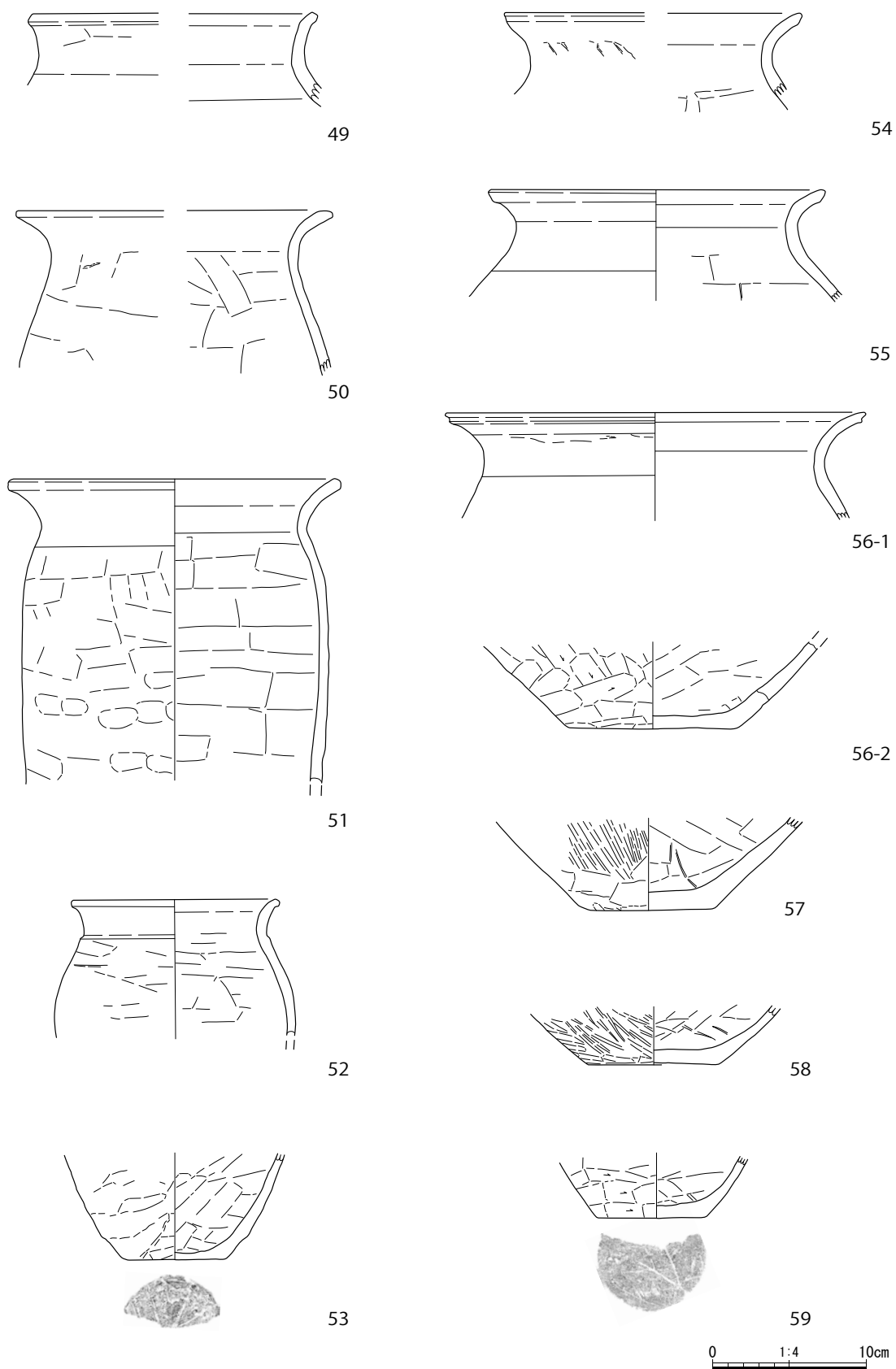
SI-2(2)



第 81 図 竪穴出土土器 (2)

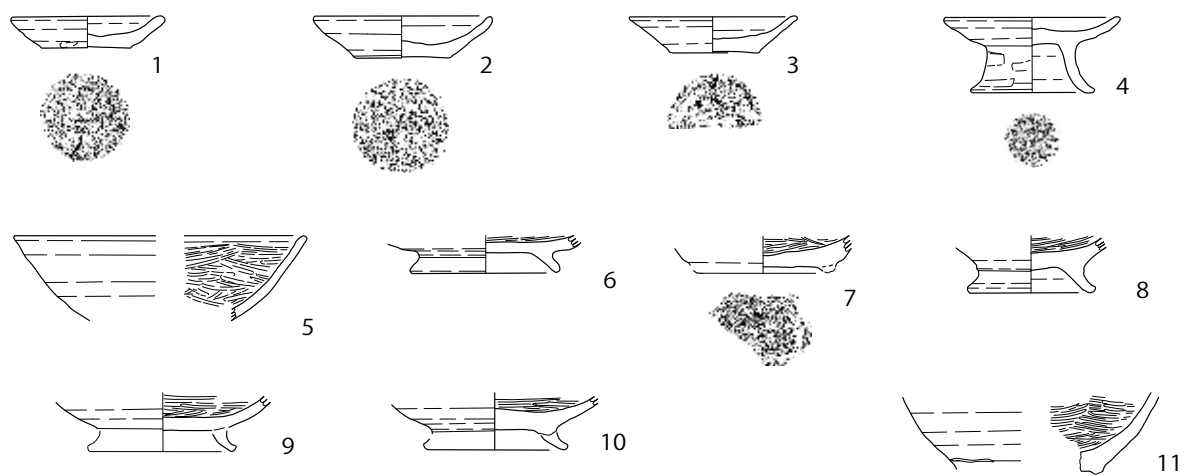
Ⅲ. 調査成果

SI-2(3)

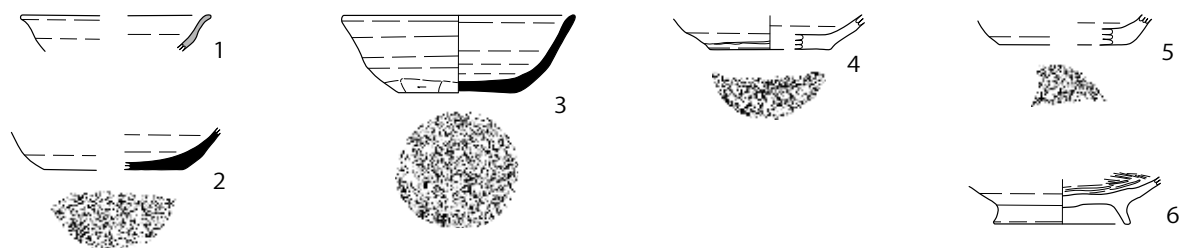


第 82 図 豎穴出土土器 (3)

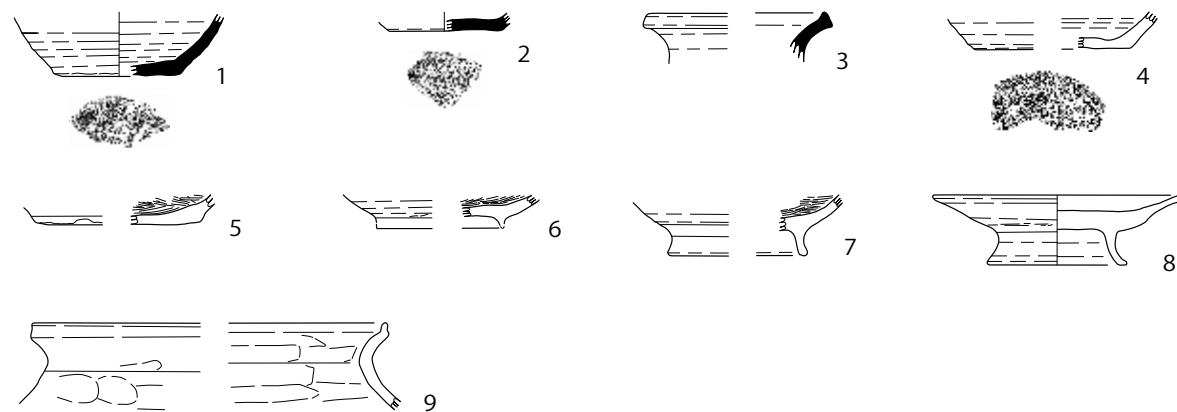
SI-1



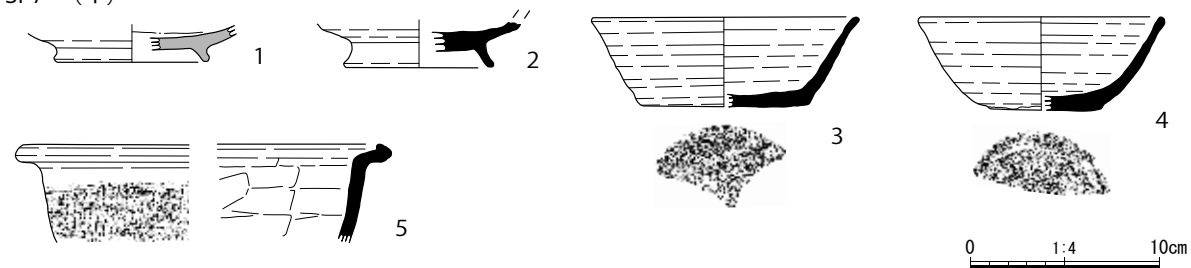
SI-3



SI-4

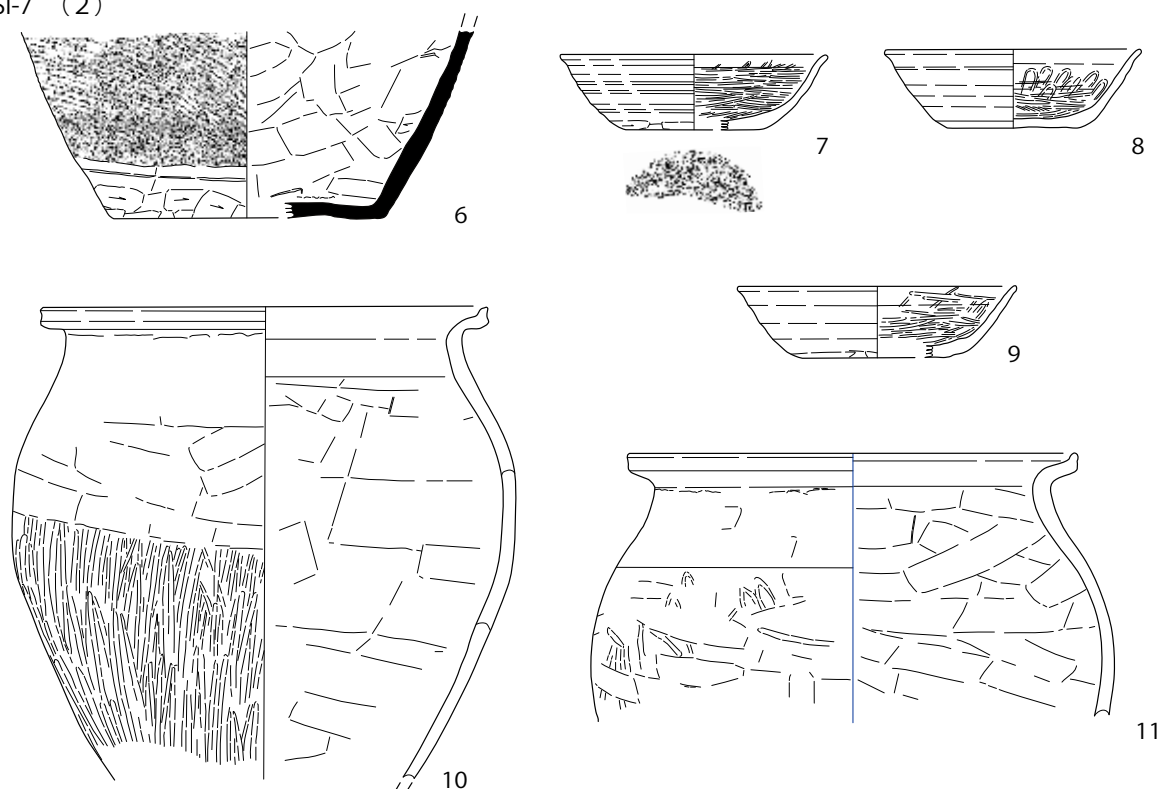


SI-7 (1)

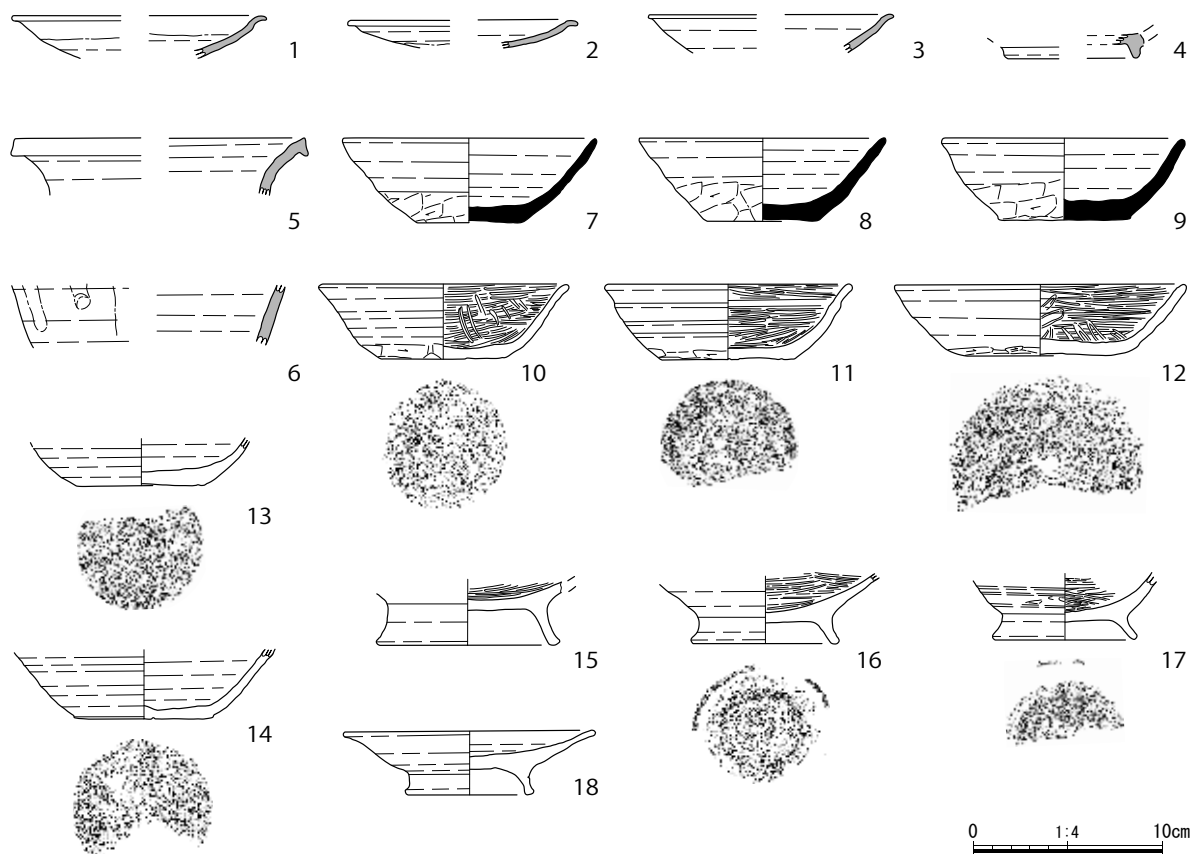


第 83 図 竪穴出土土器 (4)

SI-7 (2)

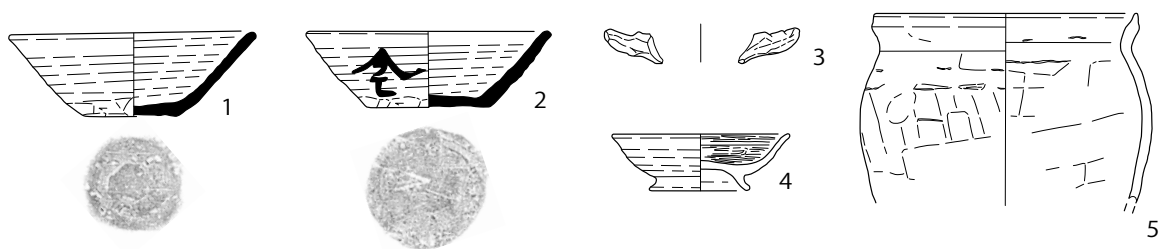


SI-8

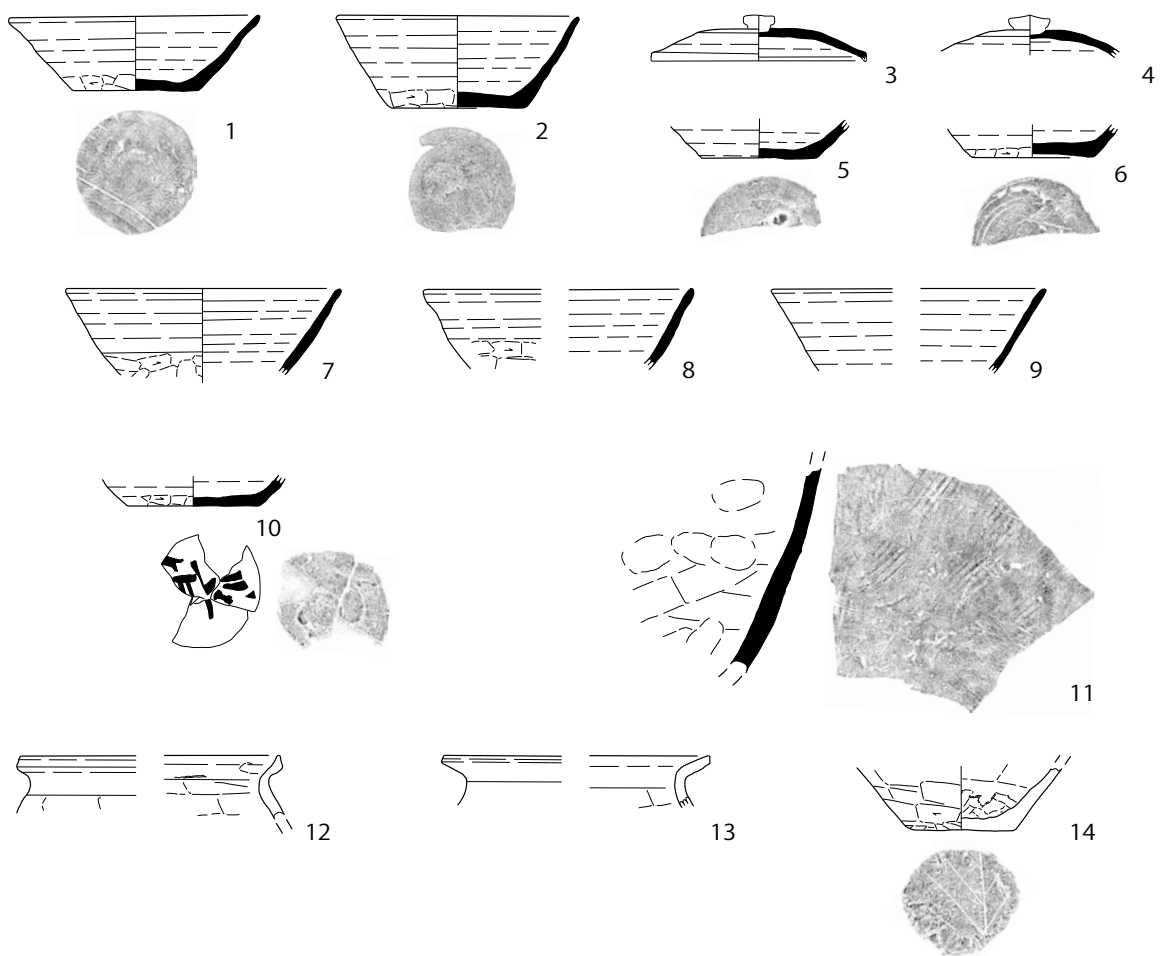


第 84 図 竪穴出土土器 (5)

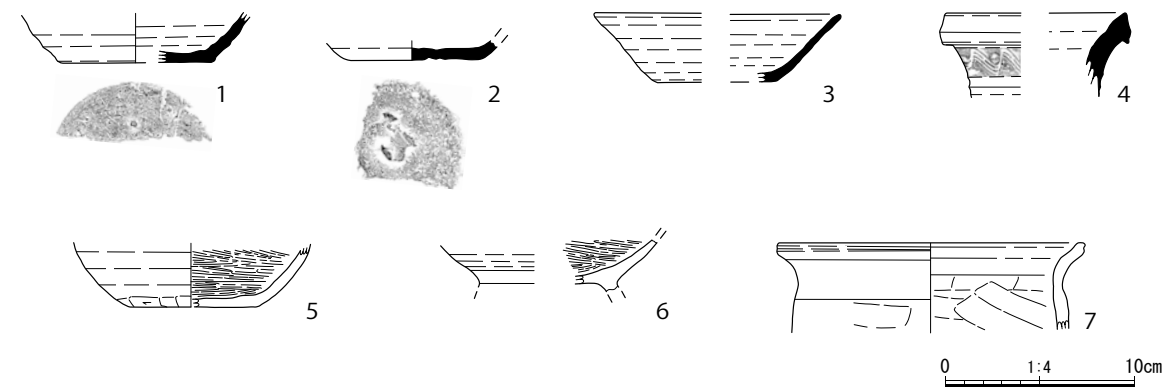
SI-10



SI-11

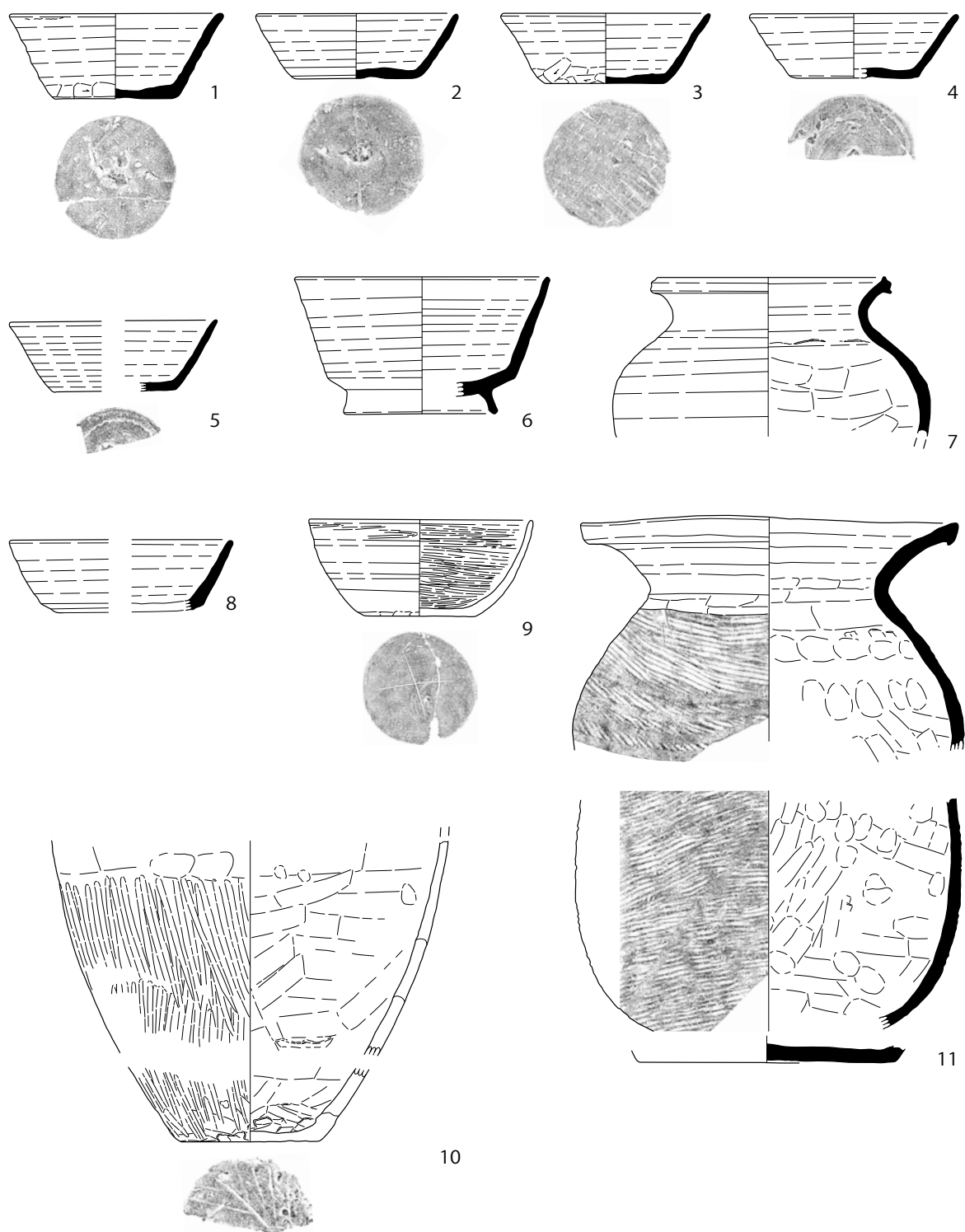


SI-16



第 85 図 竪穴出土土器 (6)

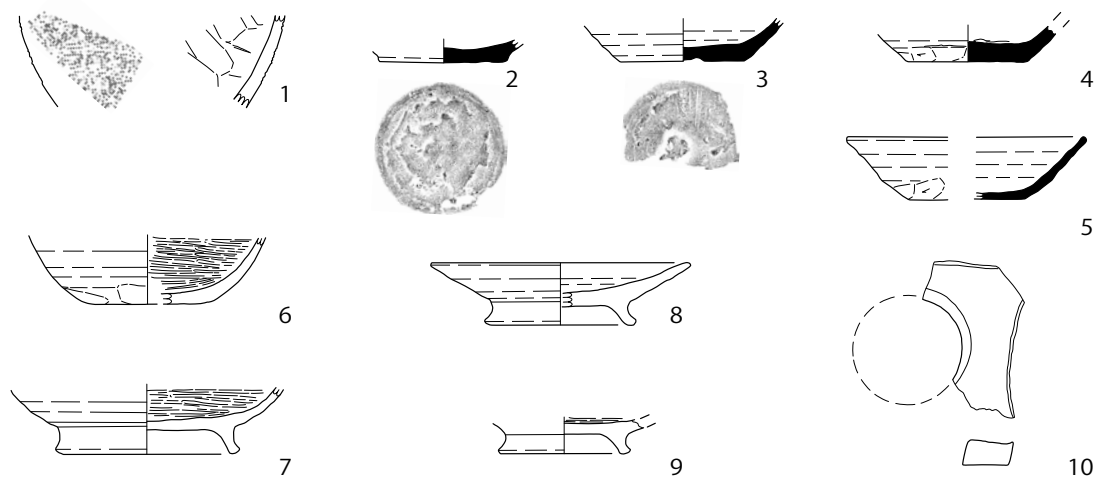
SI-17



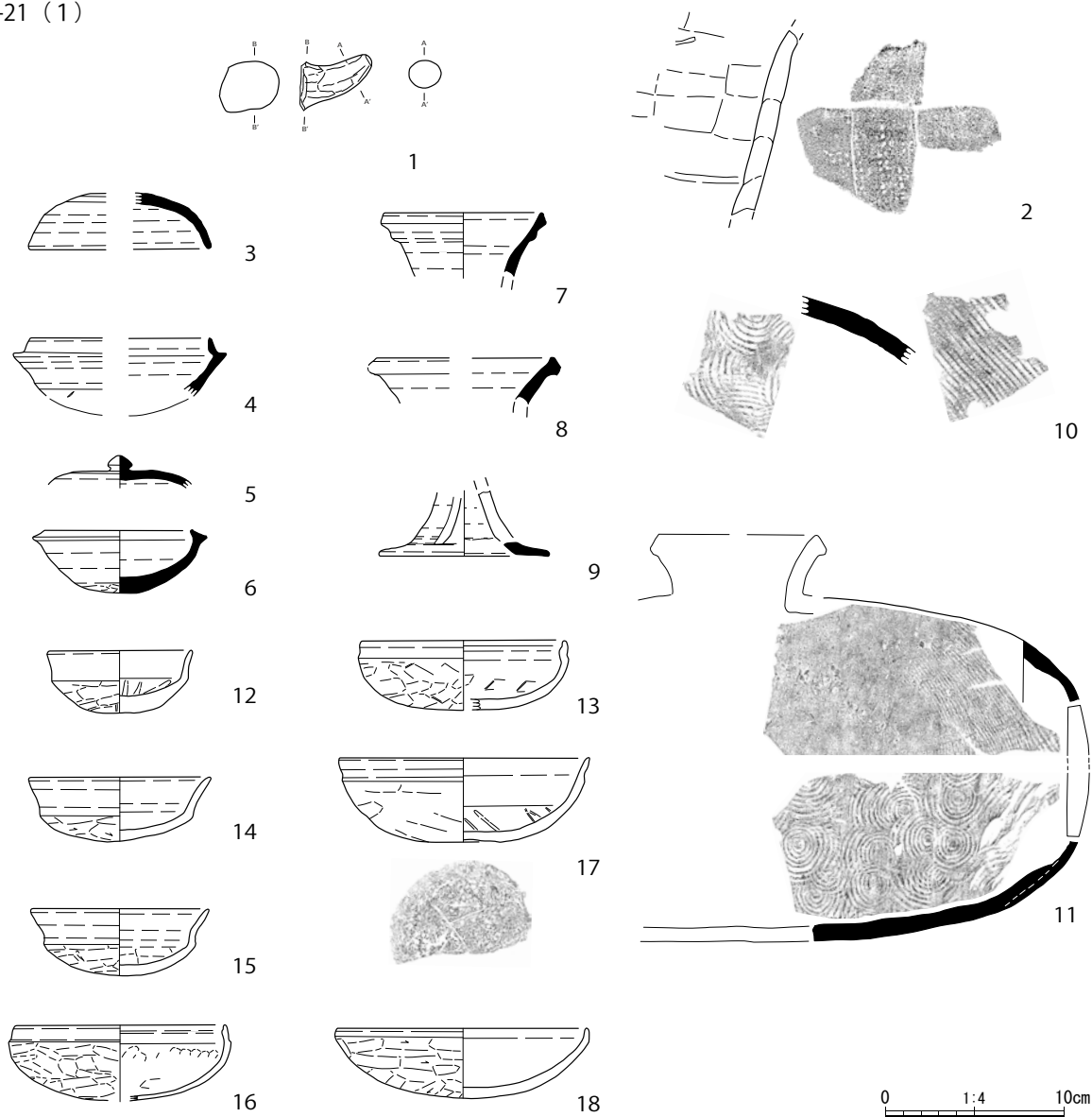
0 1:4 10cm

第 86 図 豎穴出土土器 (7)

SI-20



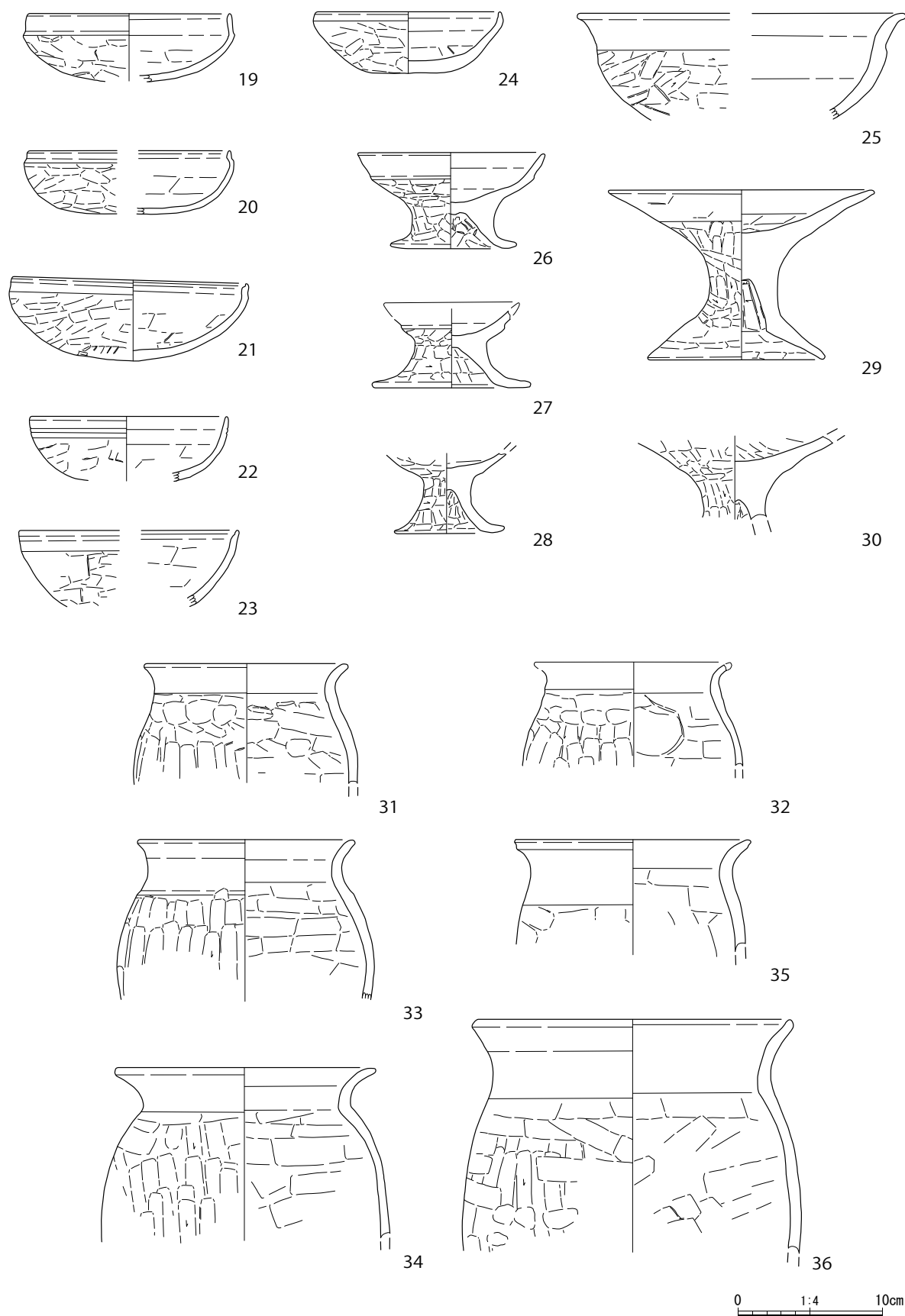
SI-21 (1)



第 87 図 竪穴出土土器 (8)

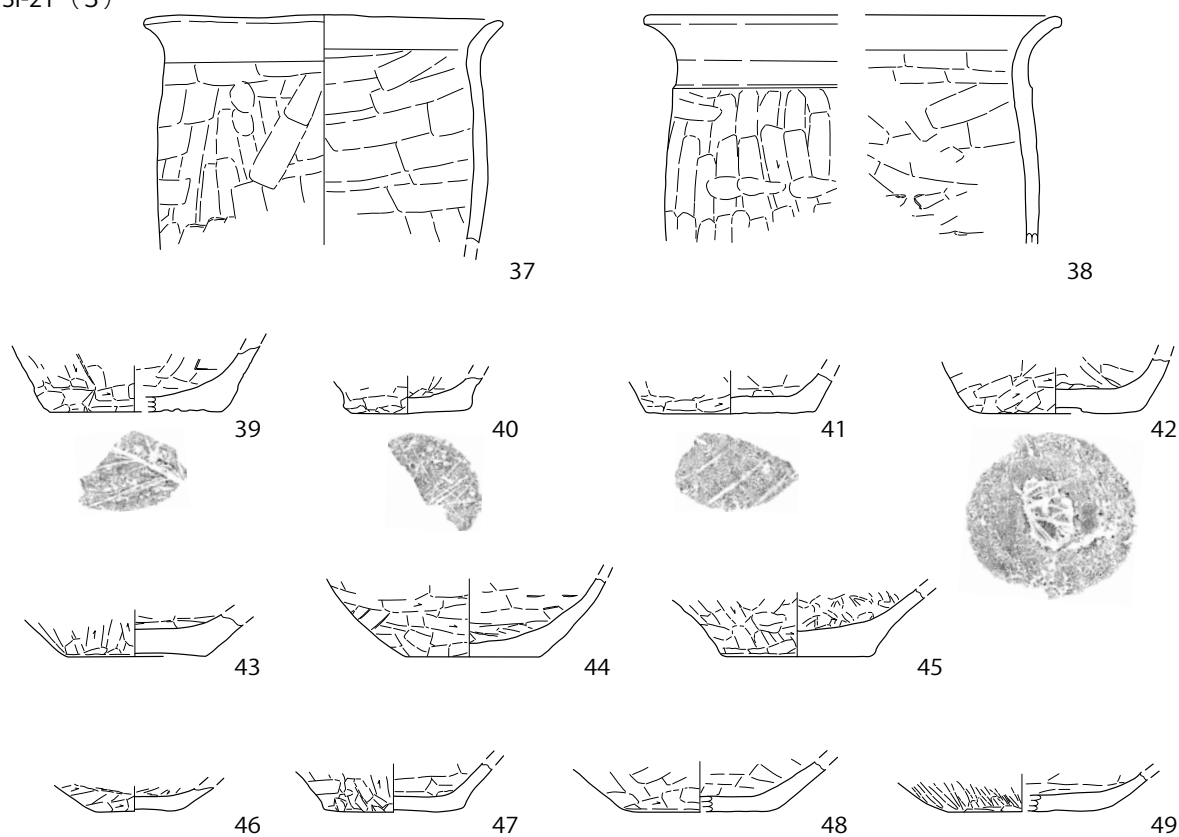
Ⅲ. 調査成果

SI-21 (2)

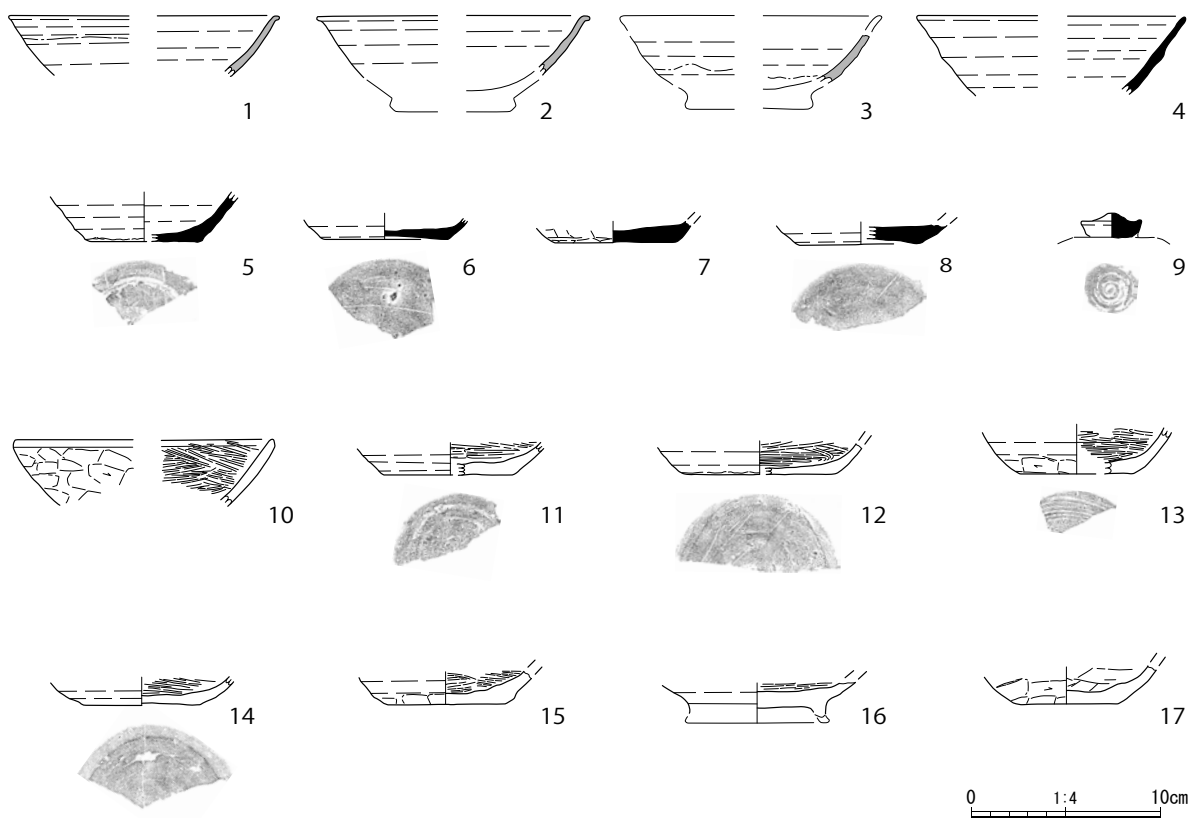


第 88 図 竪穴出土土器 (9)

SI-21 (3)



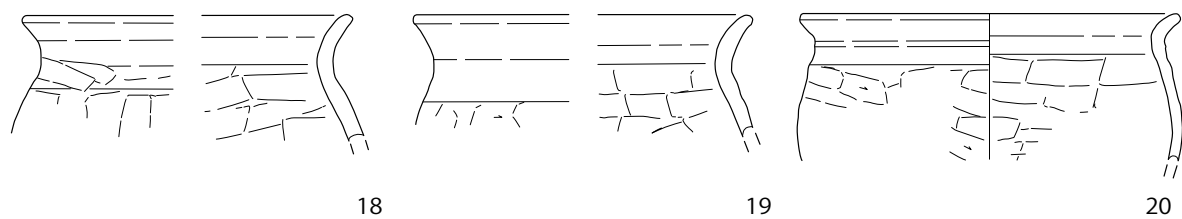
SI-22A (1)



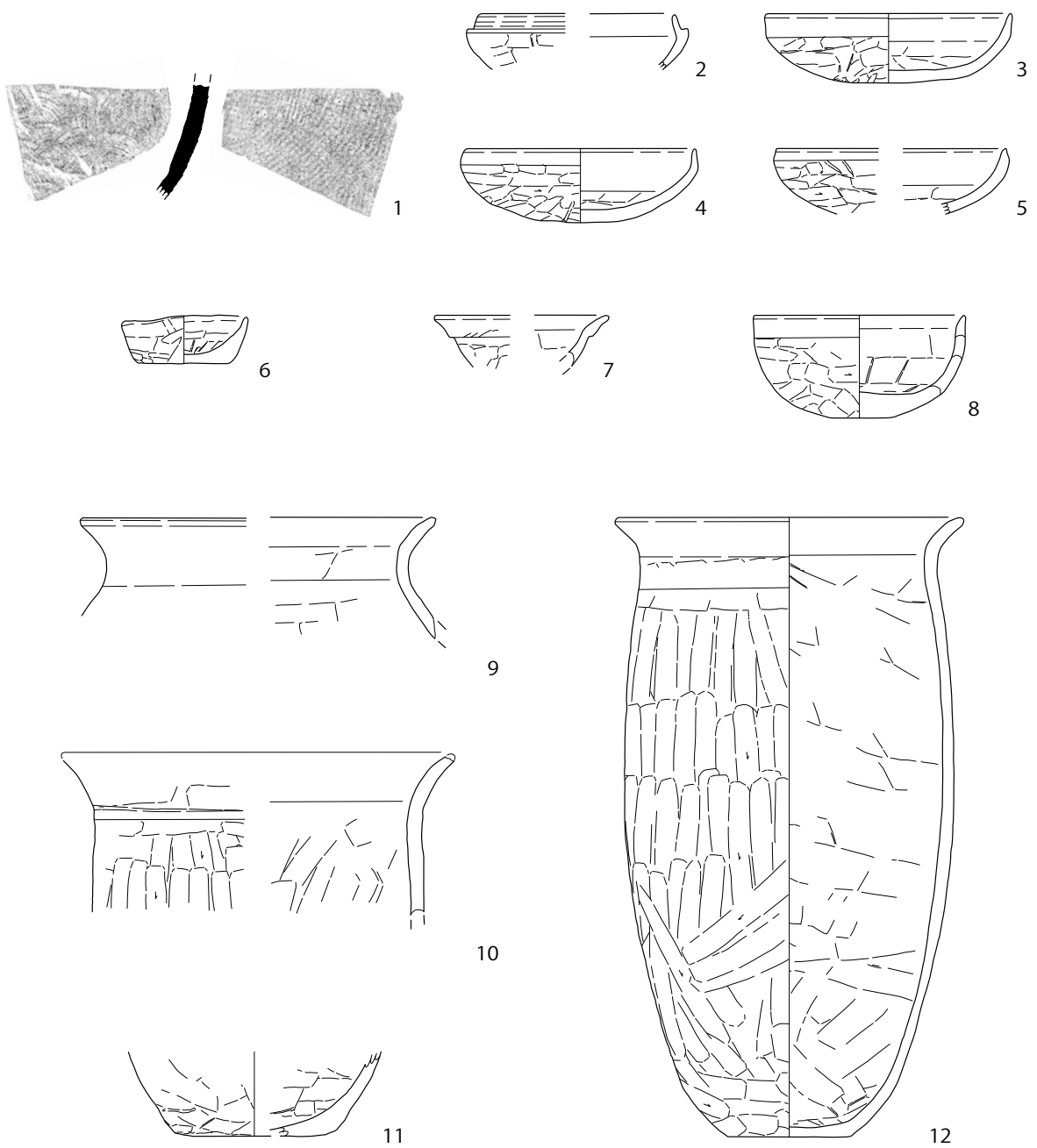
第 89 図 竪穴出土土器 (10)

Ⅲ. 調査成果

SI-22A (2)



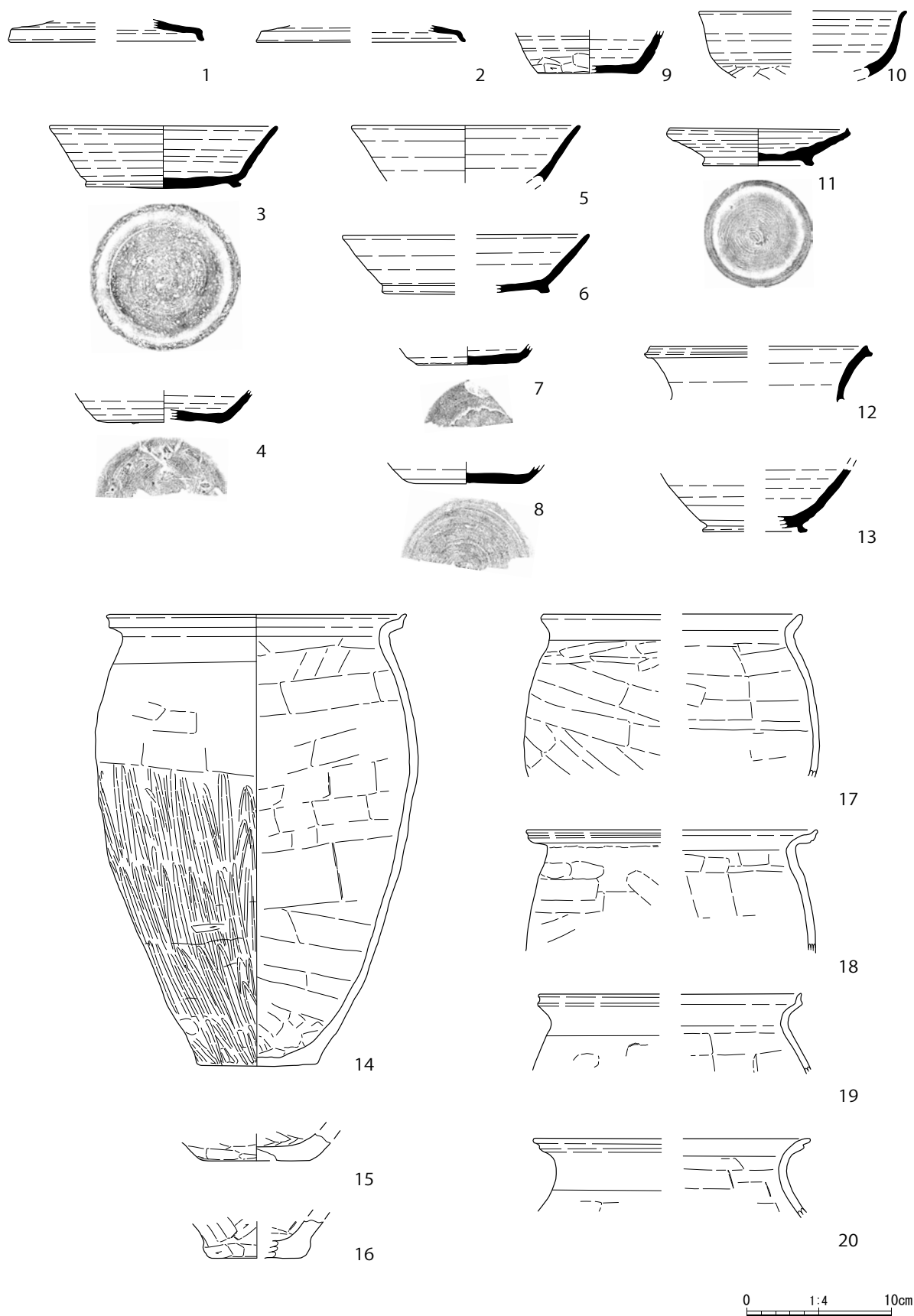
SI-22B



0 1:4 10cm

第 90 図 竪穴出土土器 (11)

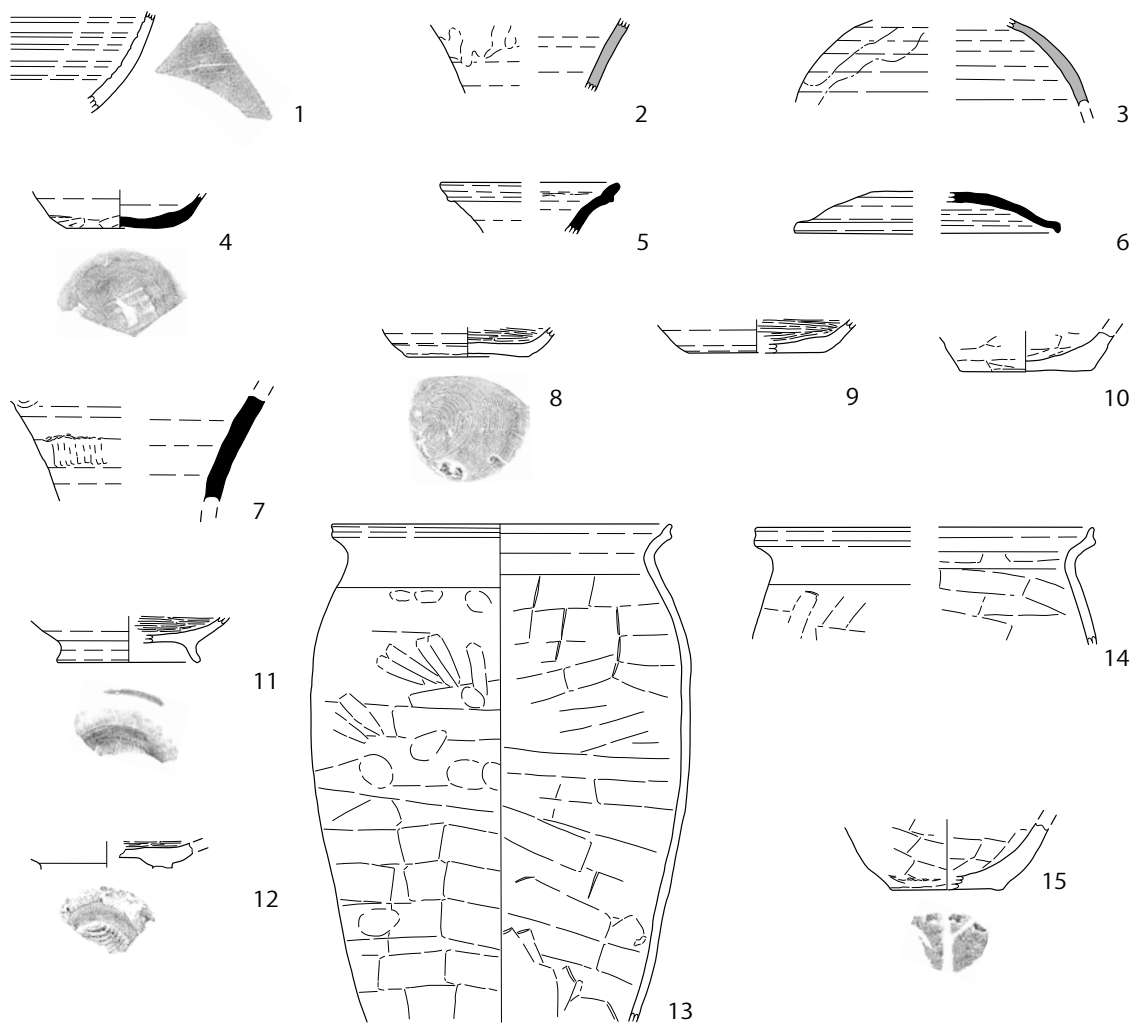
SI-23



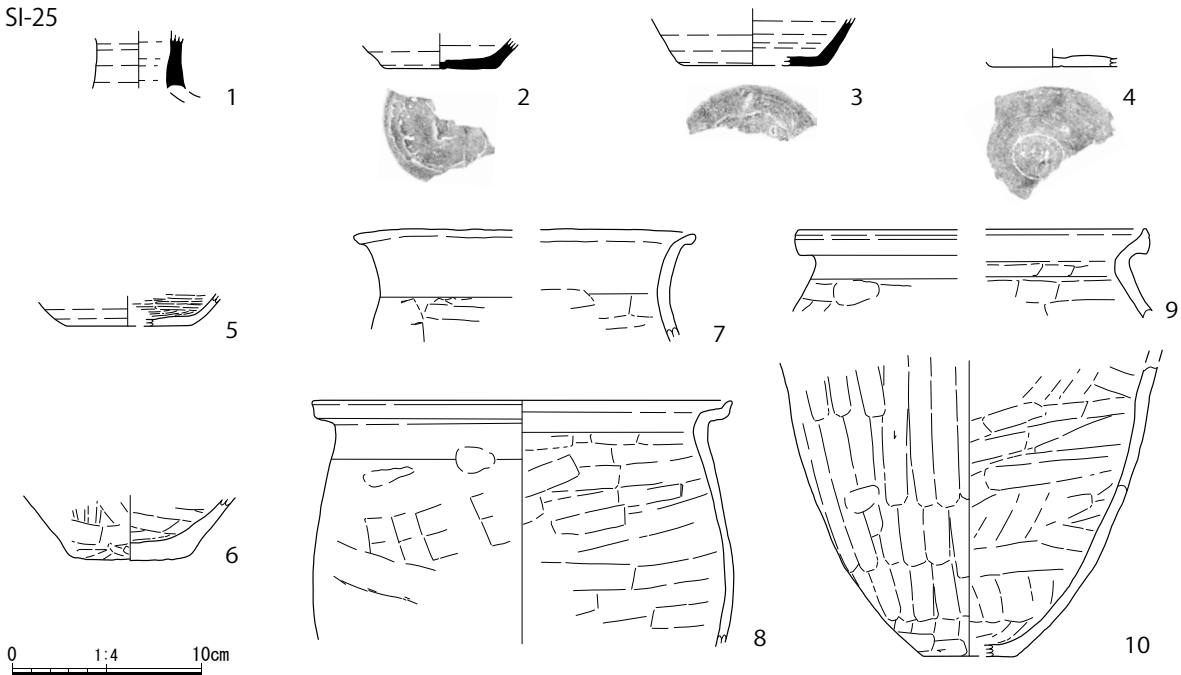
第 91 図 豎穴出土土器 (12)

Ⅲ. 調査成果

SI-24



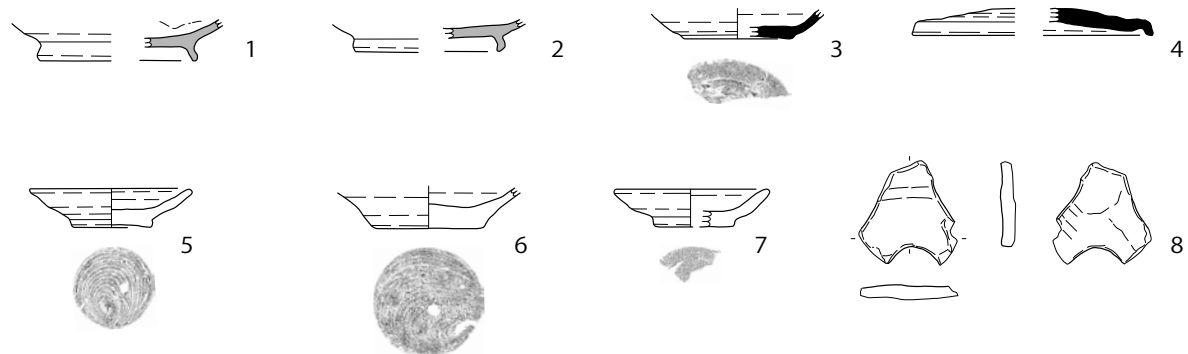
SI-25



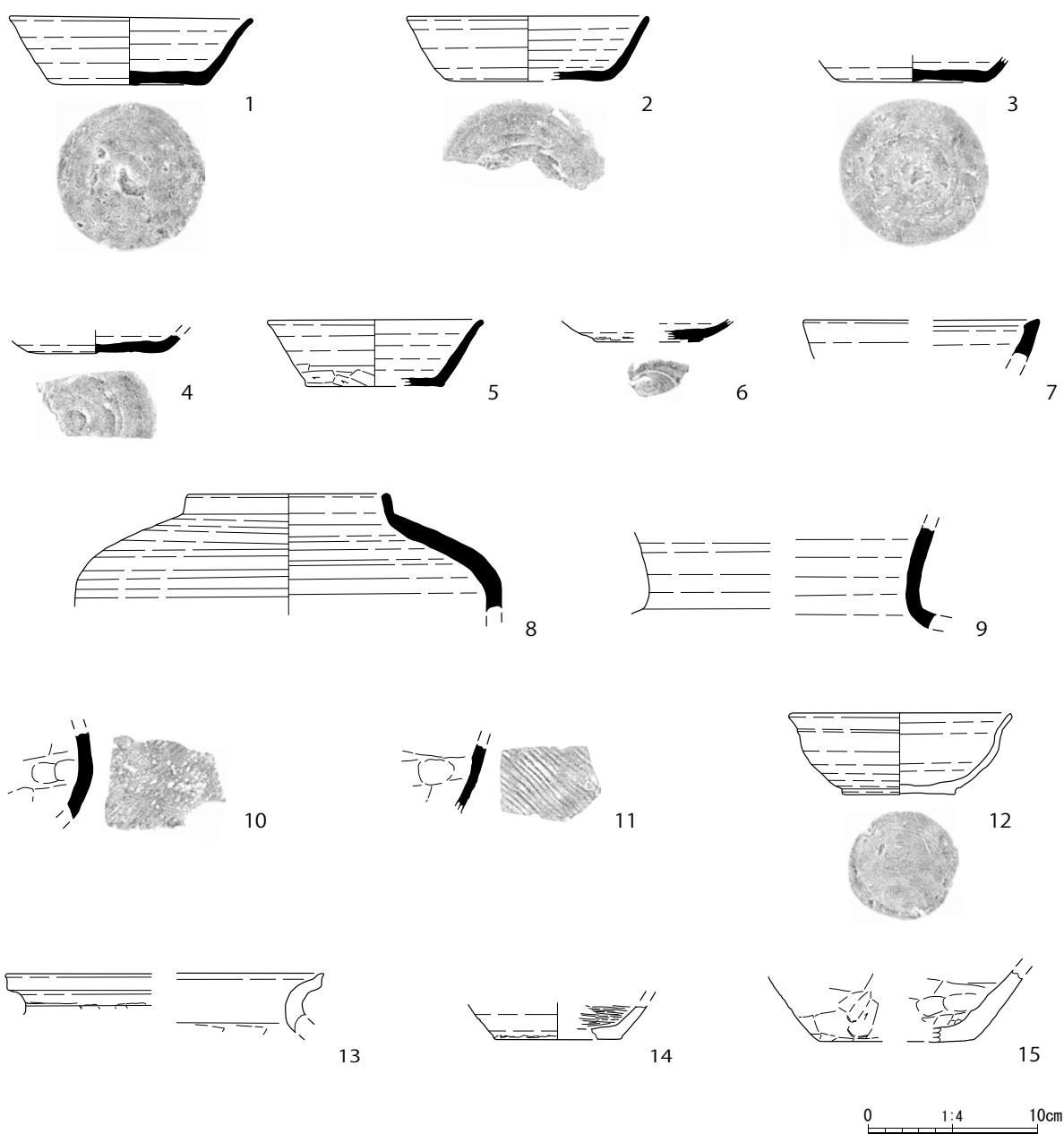
0 1:4 10cm

第 92 図 竪穴出土土器 (13)

SI-26



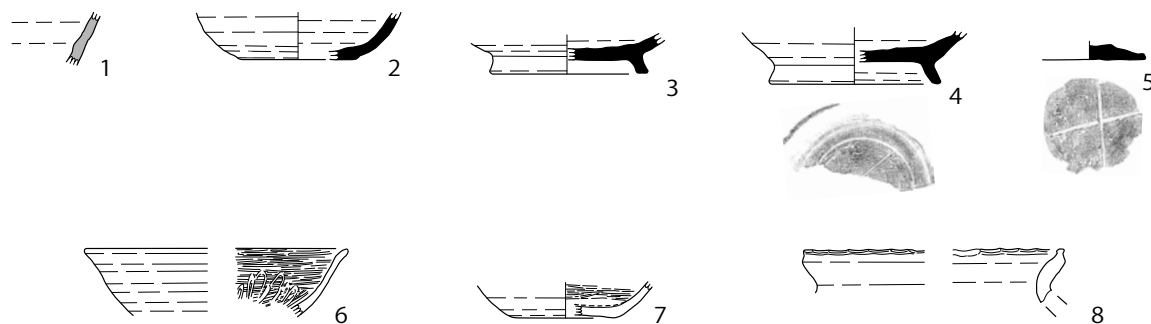
SI-27



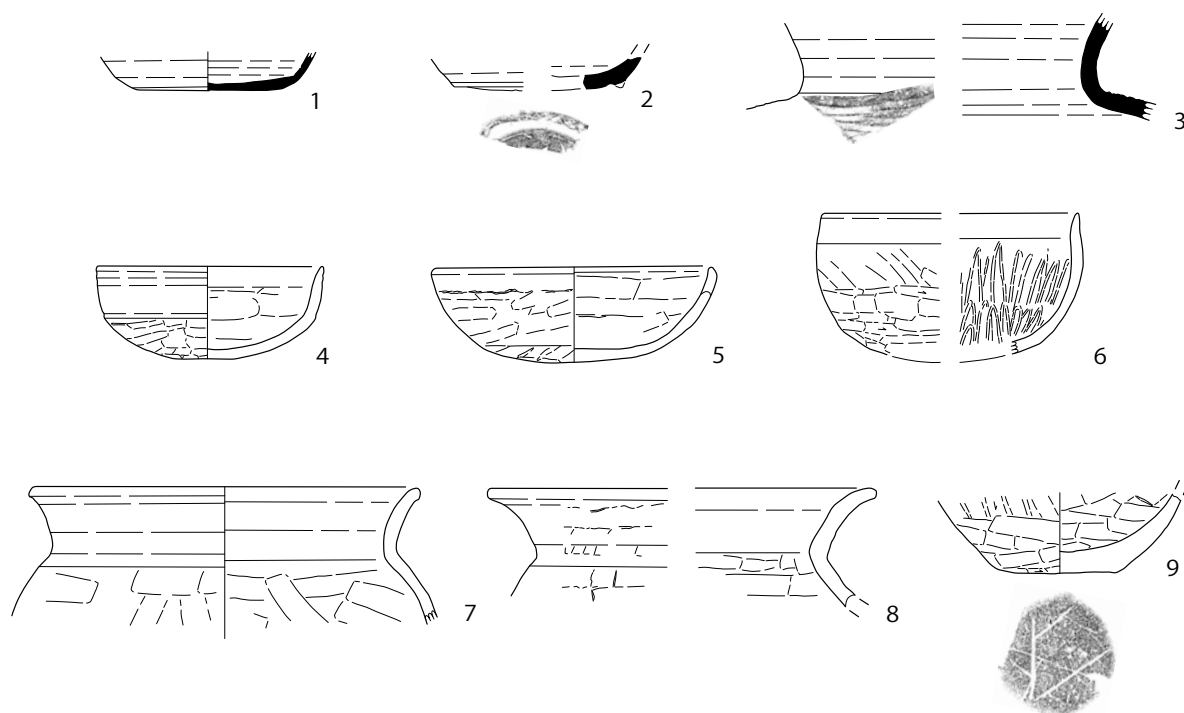
第 93 図 竪穴出土土器 (14)

Ⅲ. 調査成果

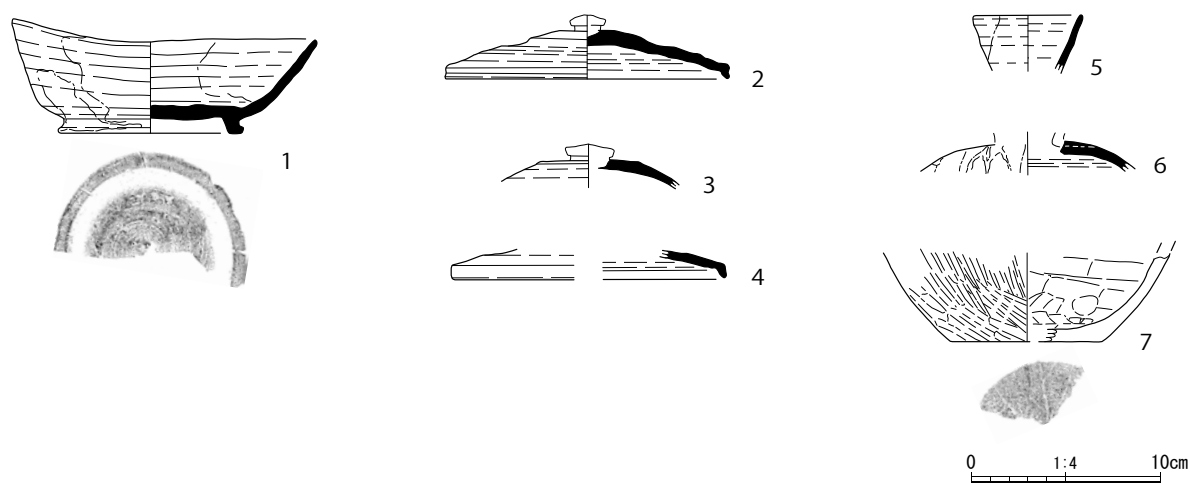
SI-28



SI-29

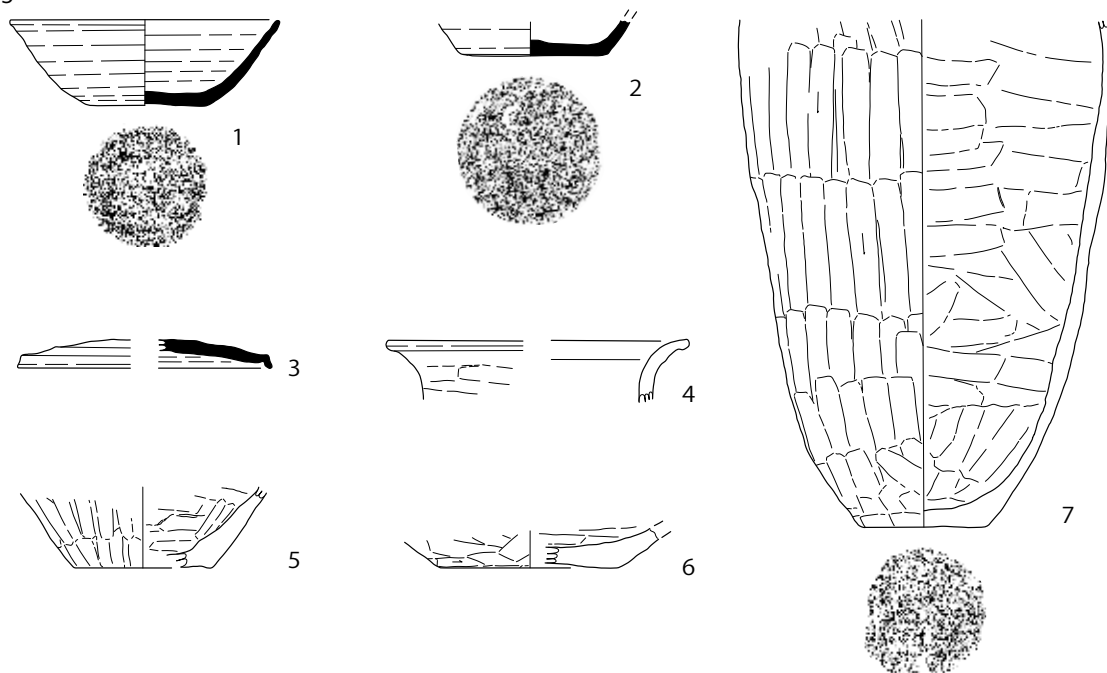


SI-31

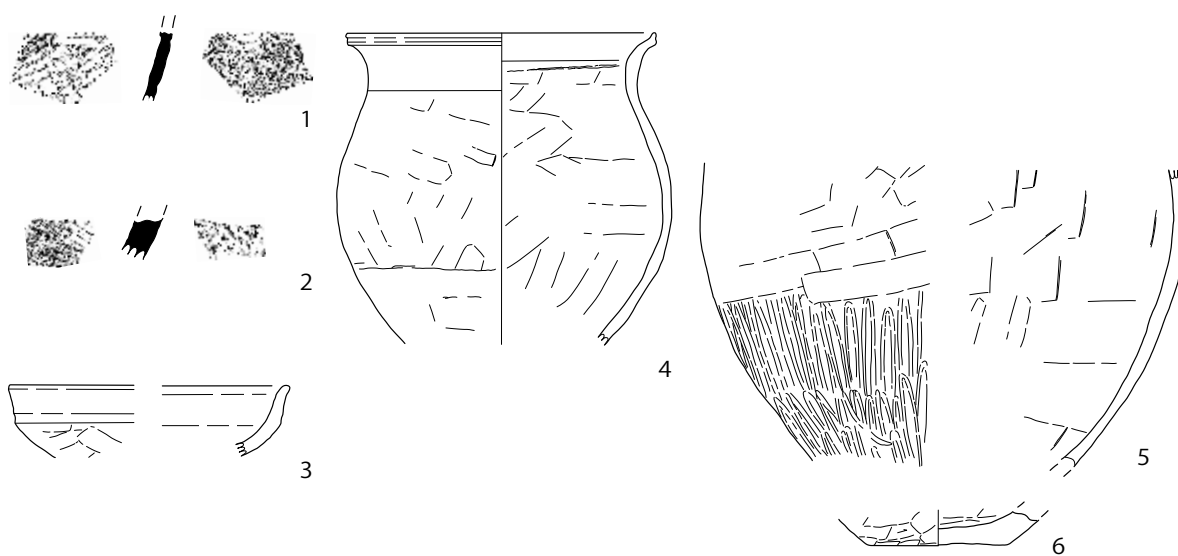


第 94 図 竪穴出土土器 (15)

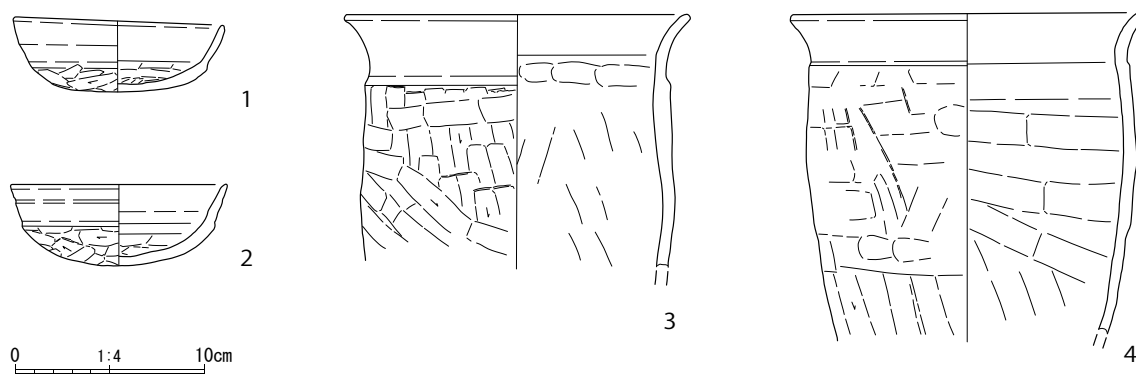
SI-33



SI-34



SI-35 (1)

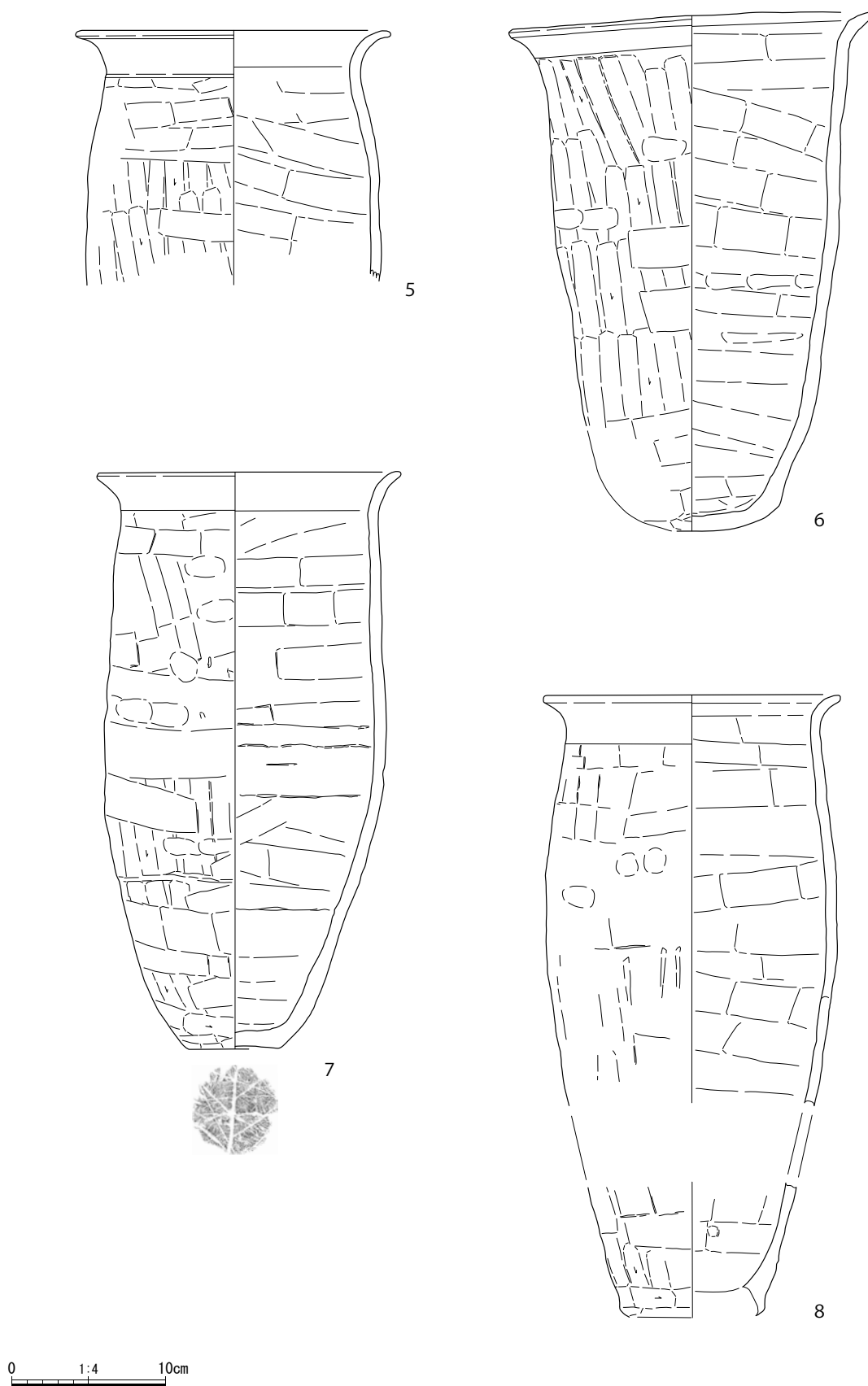


0 1:4 10cm

第 95 図 竪穴出土土器 (16)

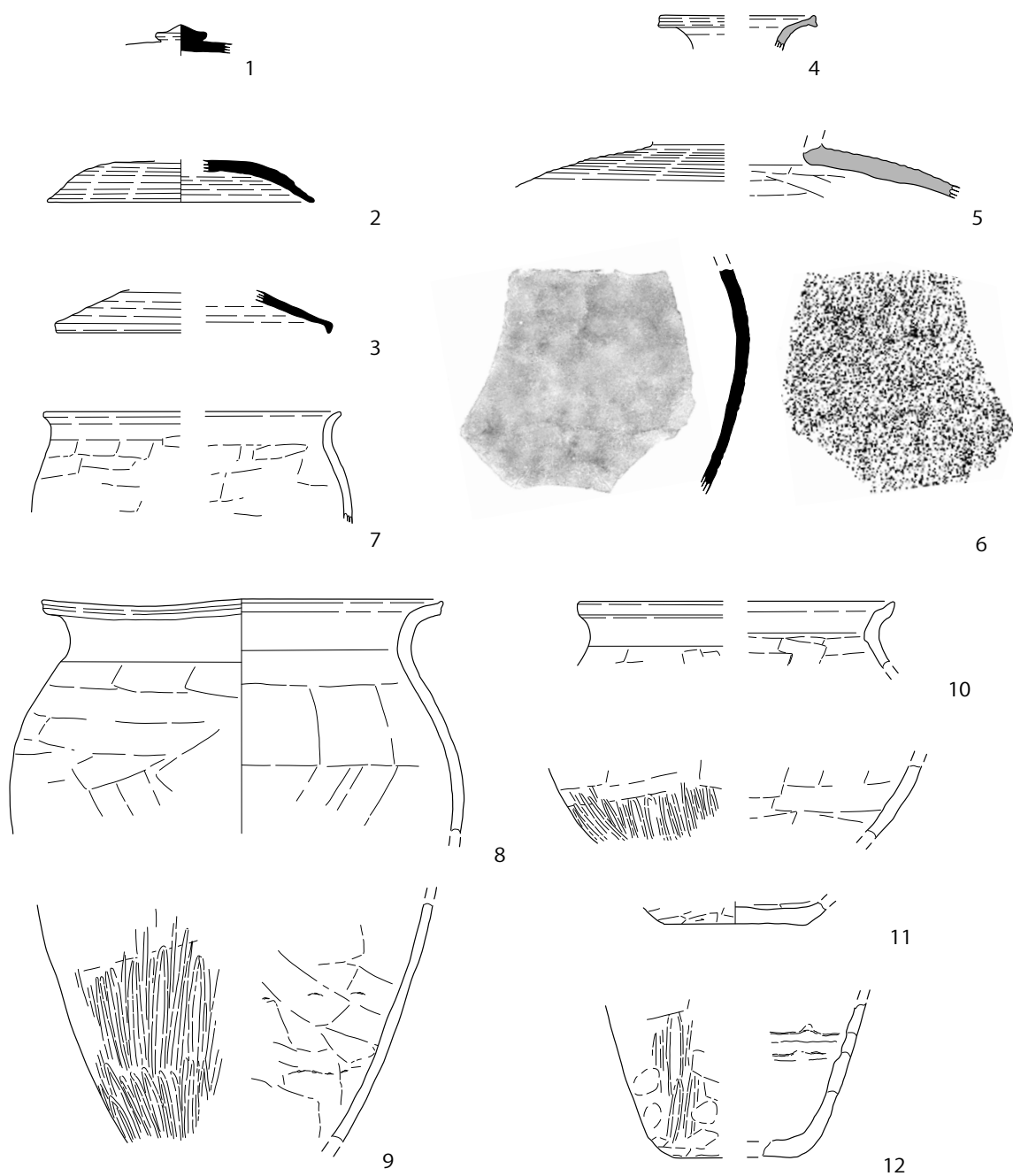
Ⅲ. 調査成果

SI-35 (2)

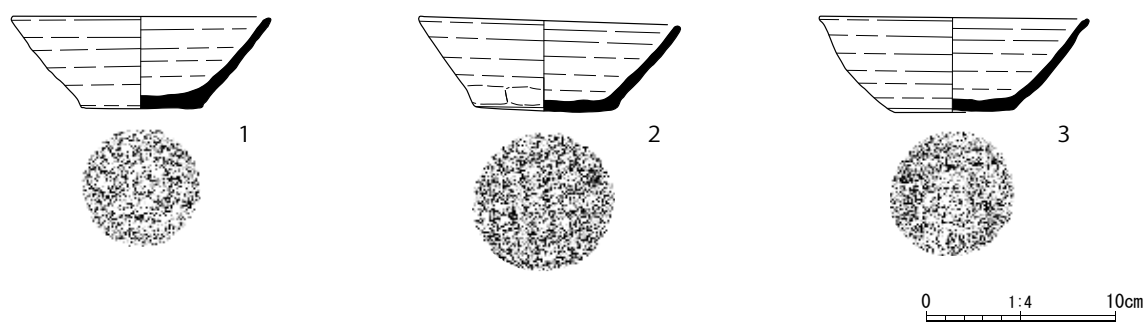


第 96 図 竪穴出土土器 (17)

SI-37



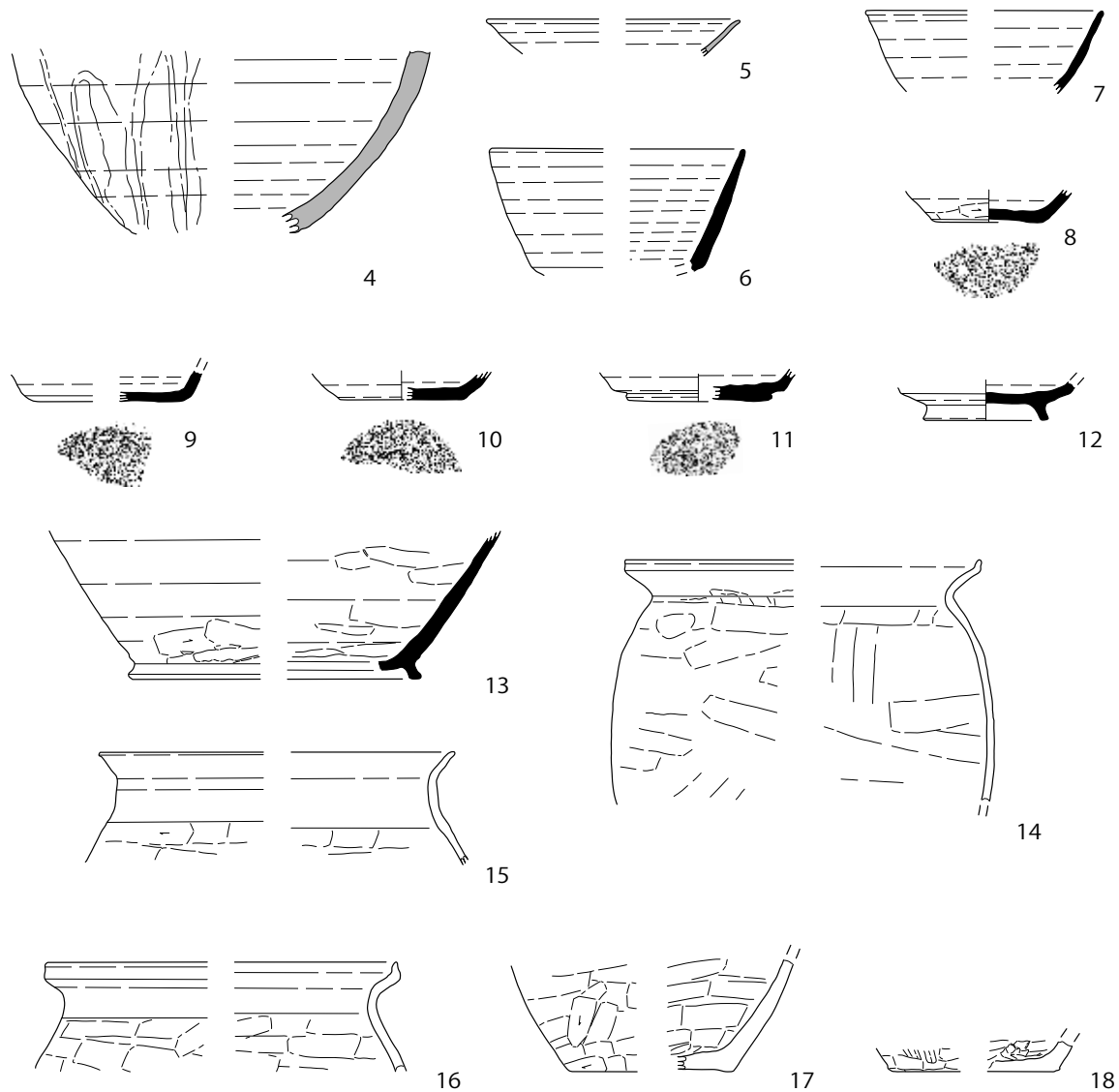
SI-38 (1)



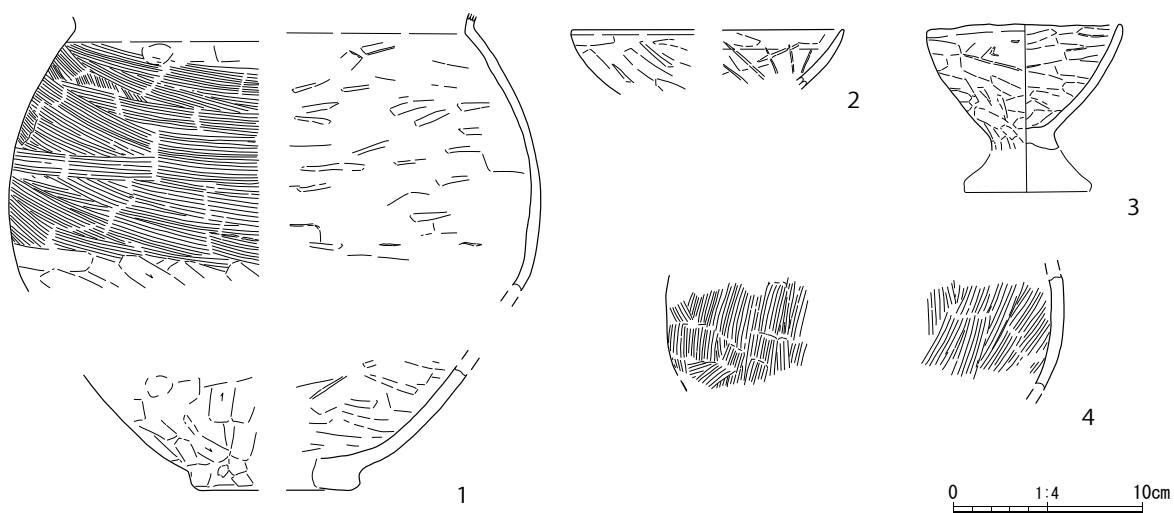
第 97 図 竪穴出土土器 (18)

Ⅲ. 調査成果

SI-38 (2)

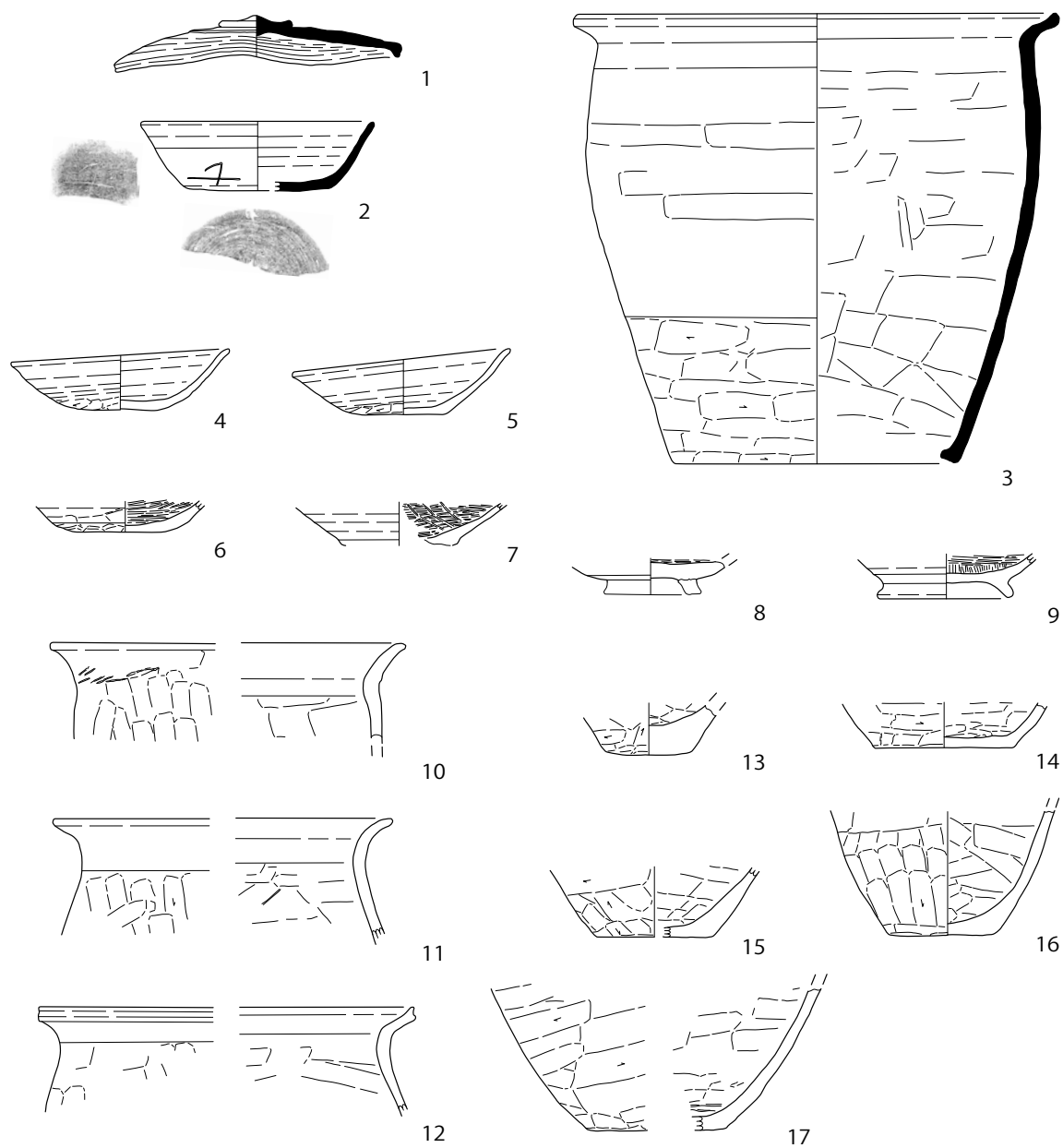


SI-39

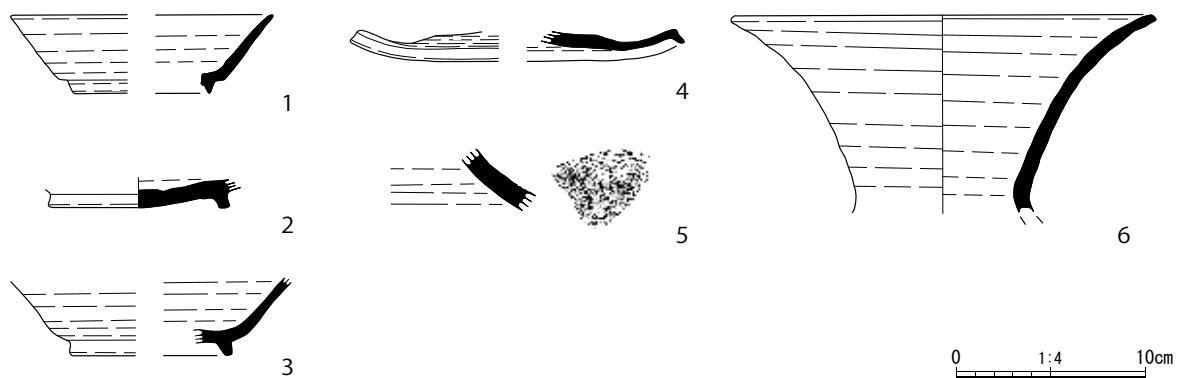


第 98 図 竪穴出土土器 (19)

SI-40



SI-41 (1)

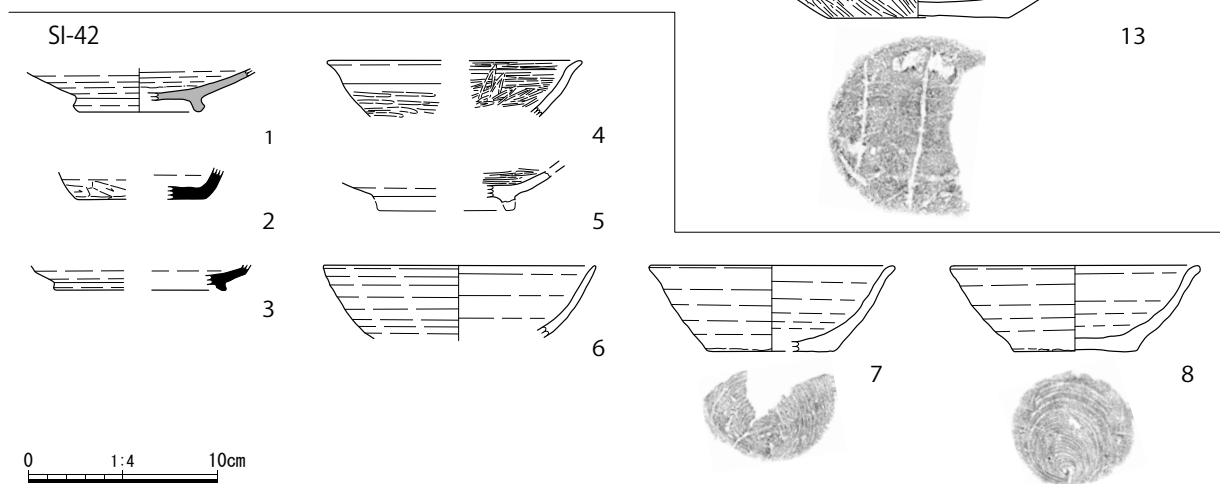
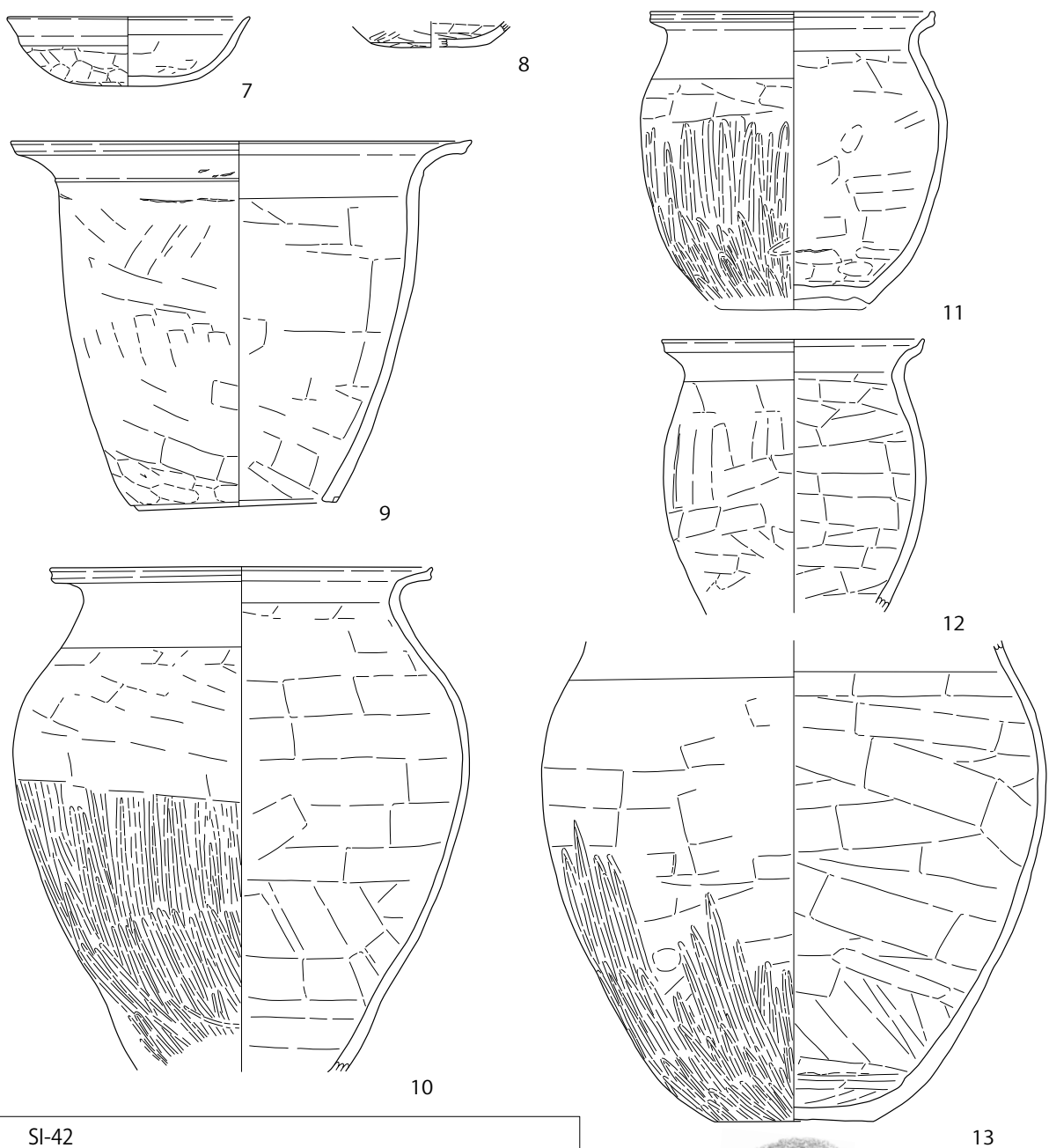


0 1:4 10cm

第 99 図 竪穴出土土器 (20)

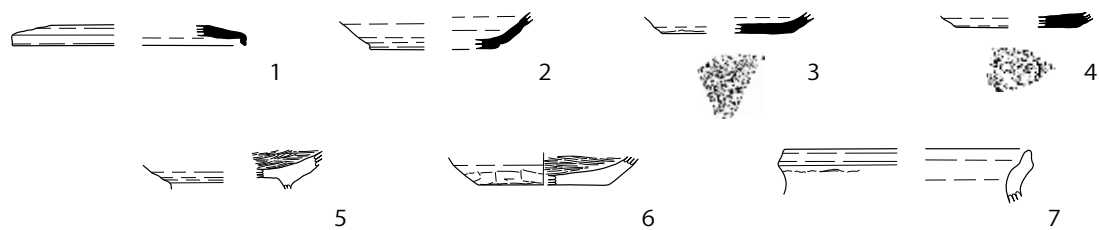
Ⅲ. 調査成果

SI-41 (2)

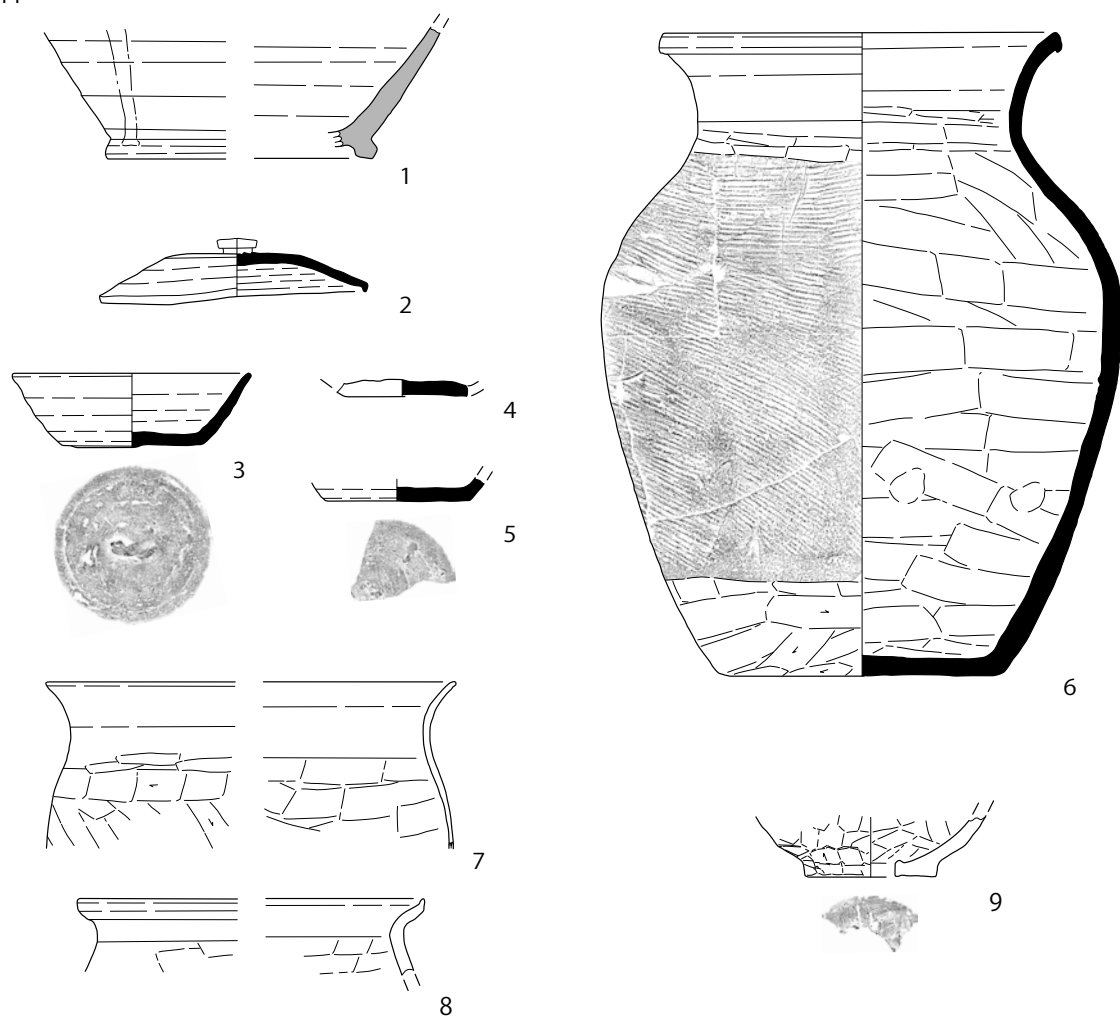


第 100 図 竪穴出土土器 (21)

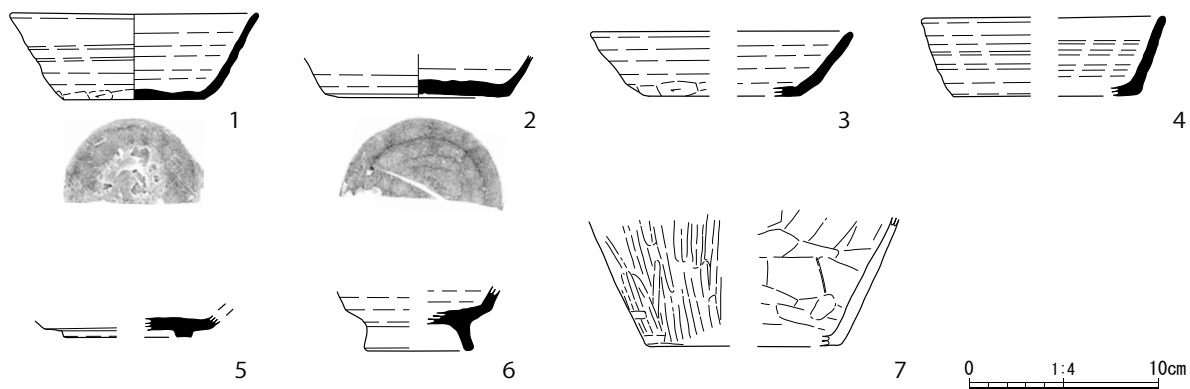
SI-43



SI-44



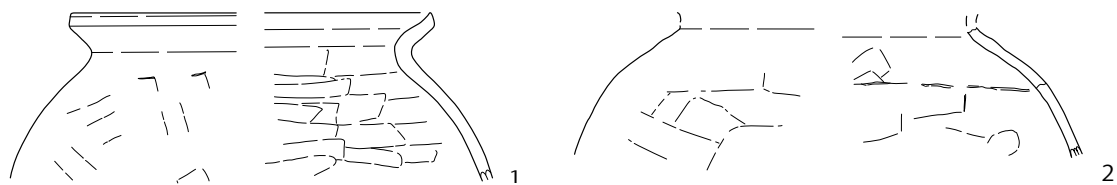
SI-45



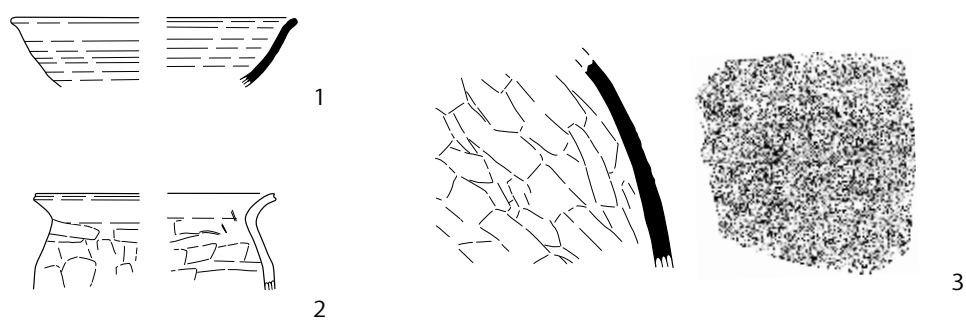
第 101 図 竪穴出土土器 (22)

Ⅲ. 調査成果

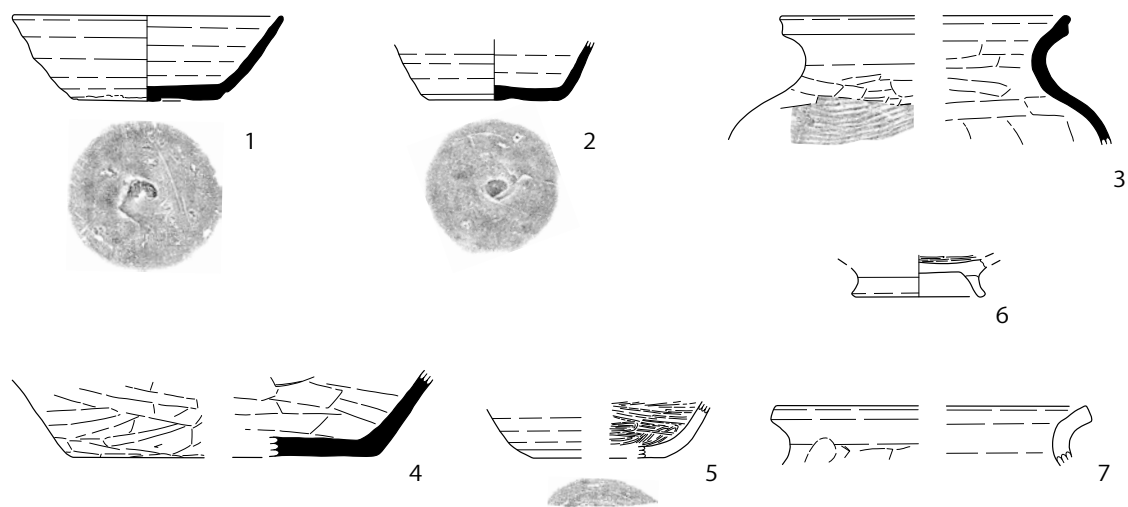
SI-46



SI-47



SI-48



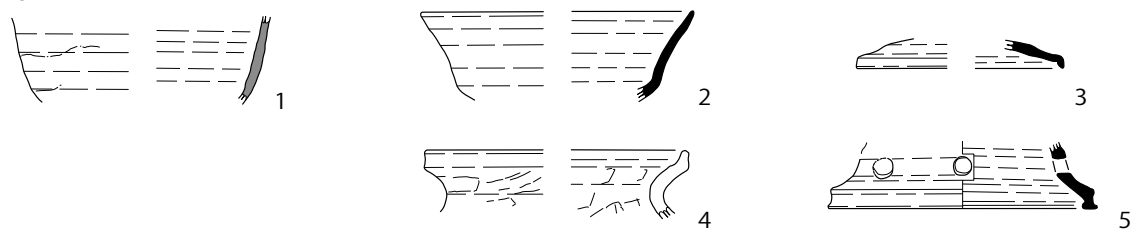
SI-50



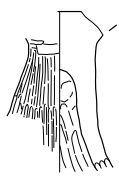
0 1:4 10cm

第 102 図 竪穴出土土器 (23)

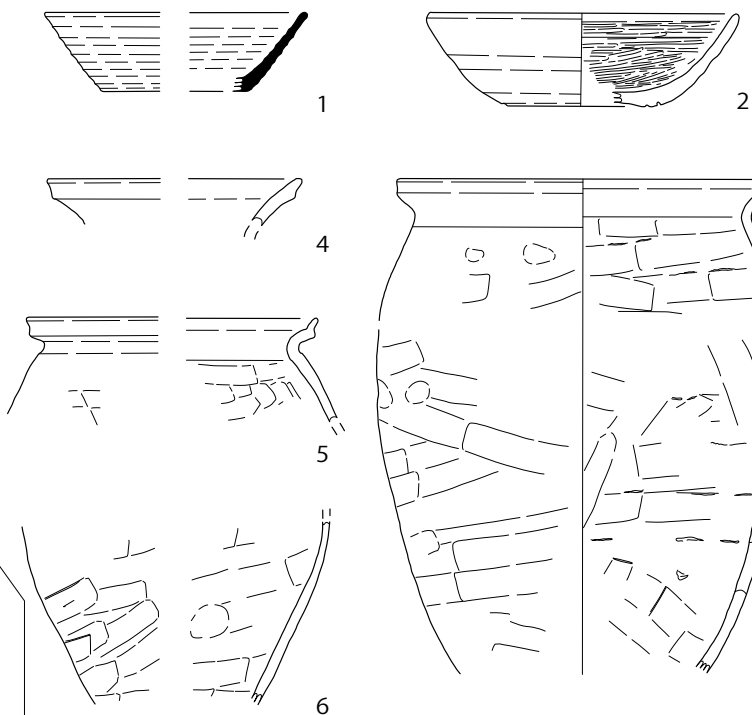
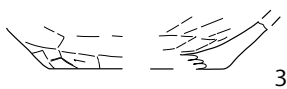
SI-52



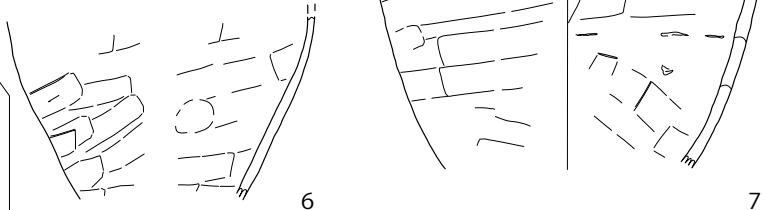
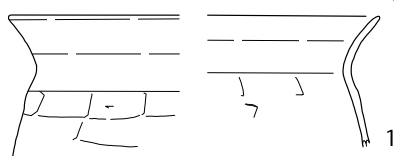
SZ-53



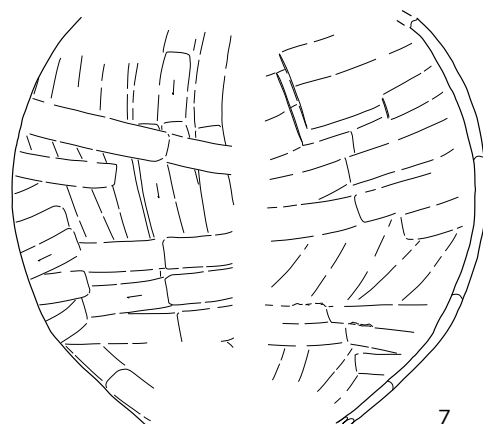
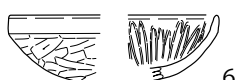
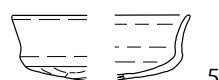
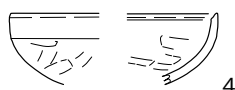
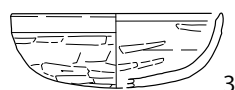
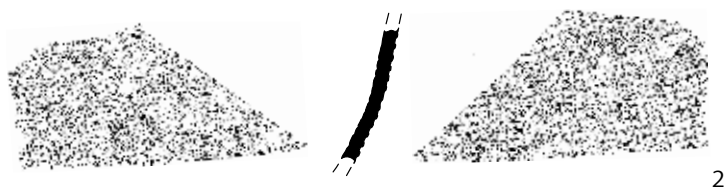
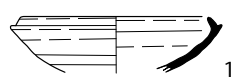
SI-54



SK-55



SI-57 (1)



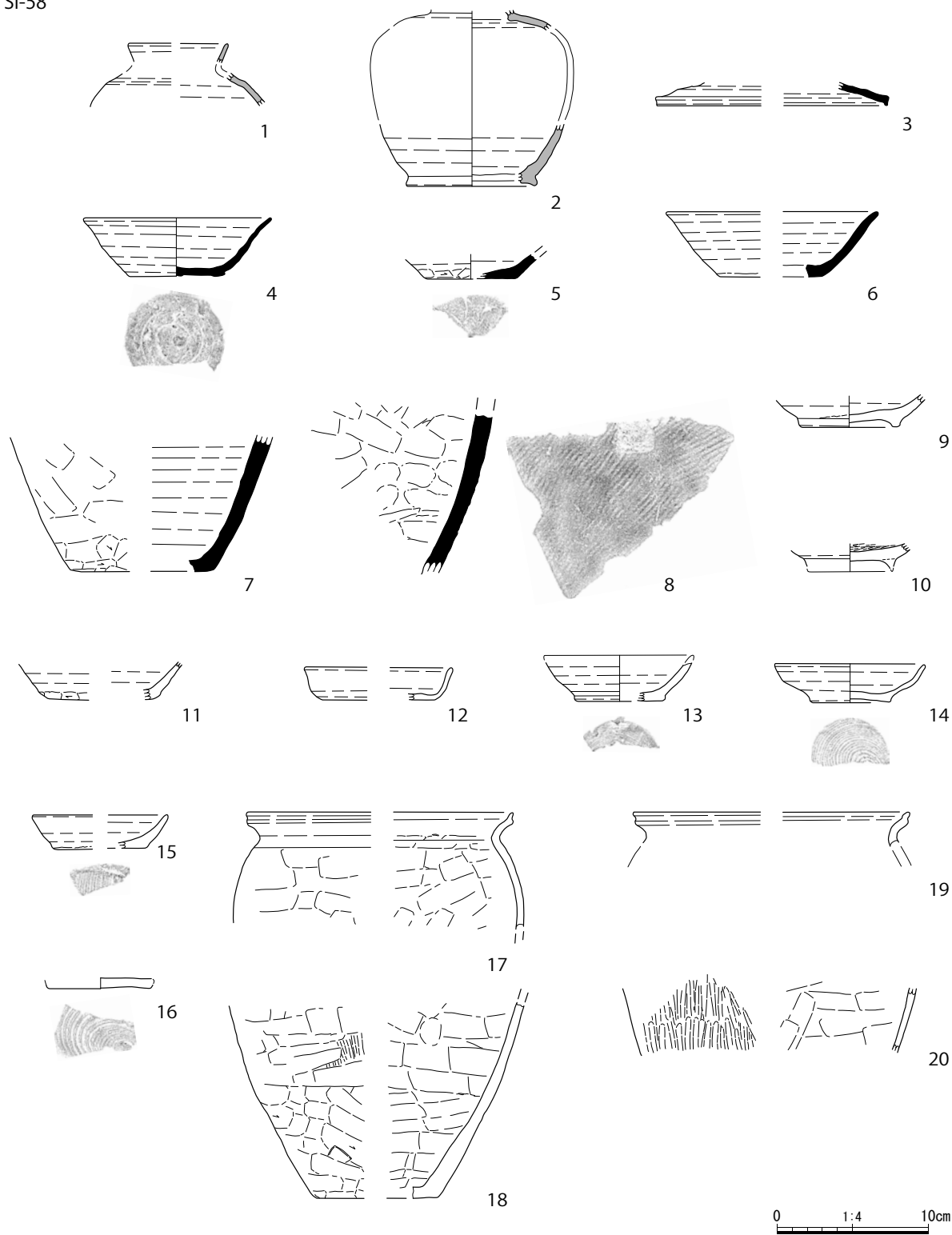
0 1:4 10cm

第 103 図 竪穴・古墳・土坑出土土器 (24)

SI-57 (2)

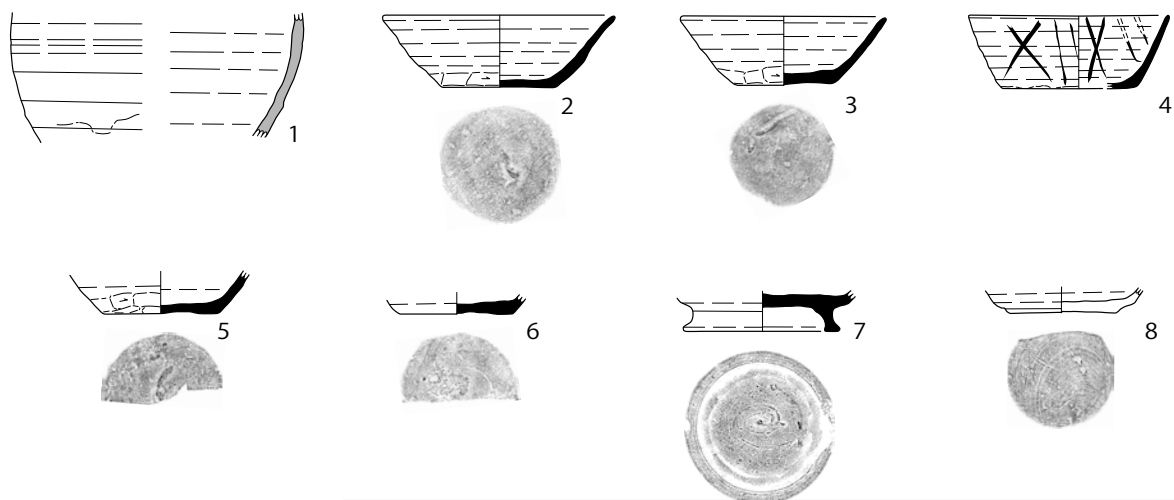


SI-58

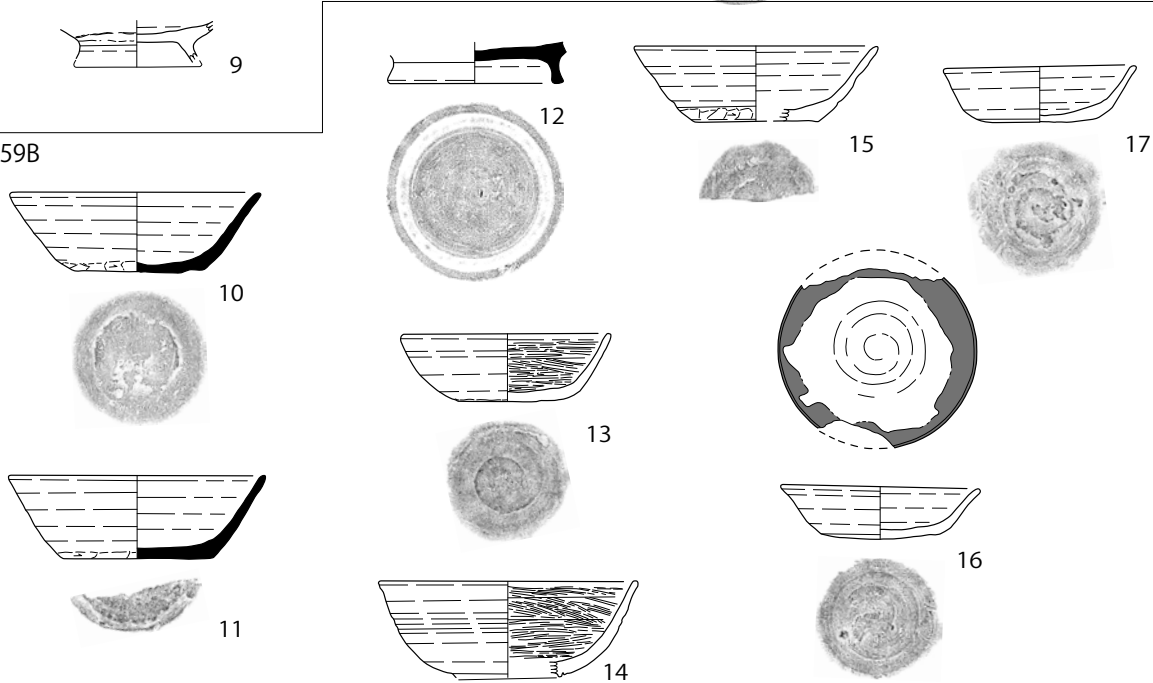


第 104 図 竪穴出土土器 (25)

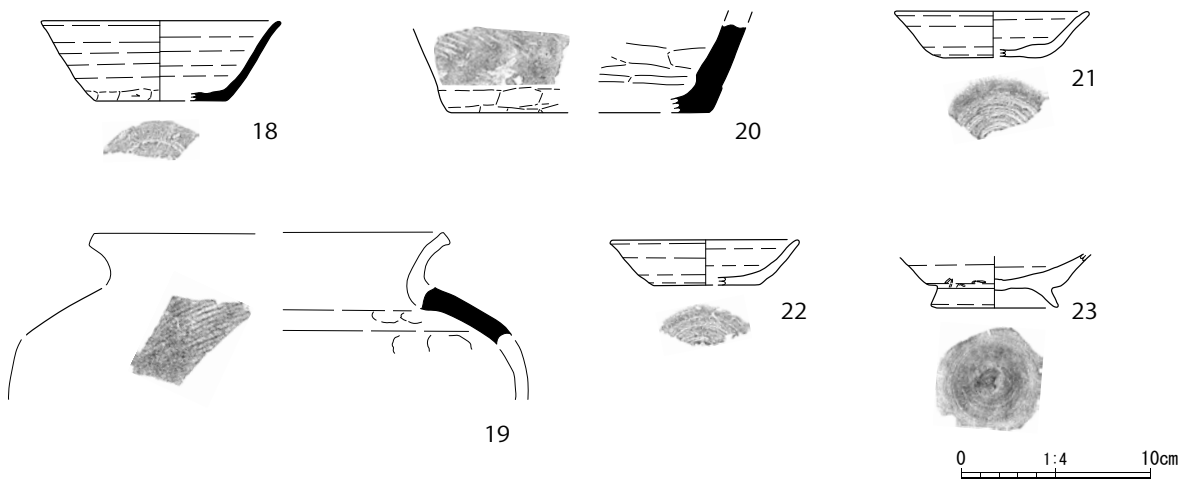
SI-59A



SI-59B



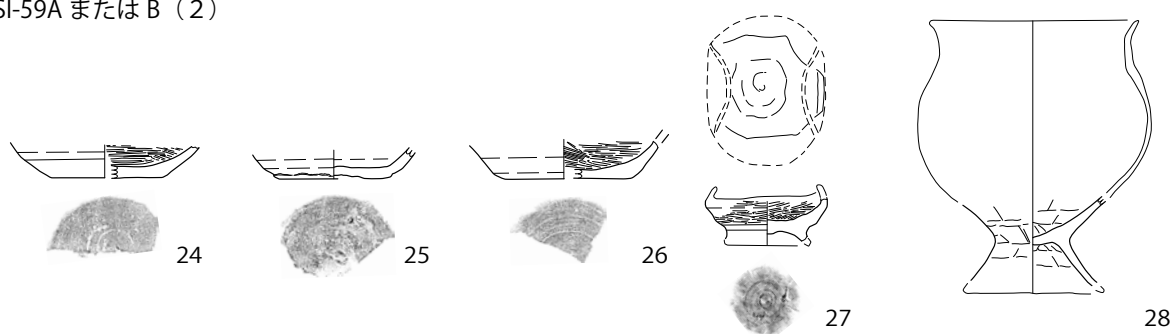
SI-59A または 59B (2)



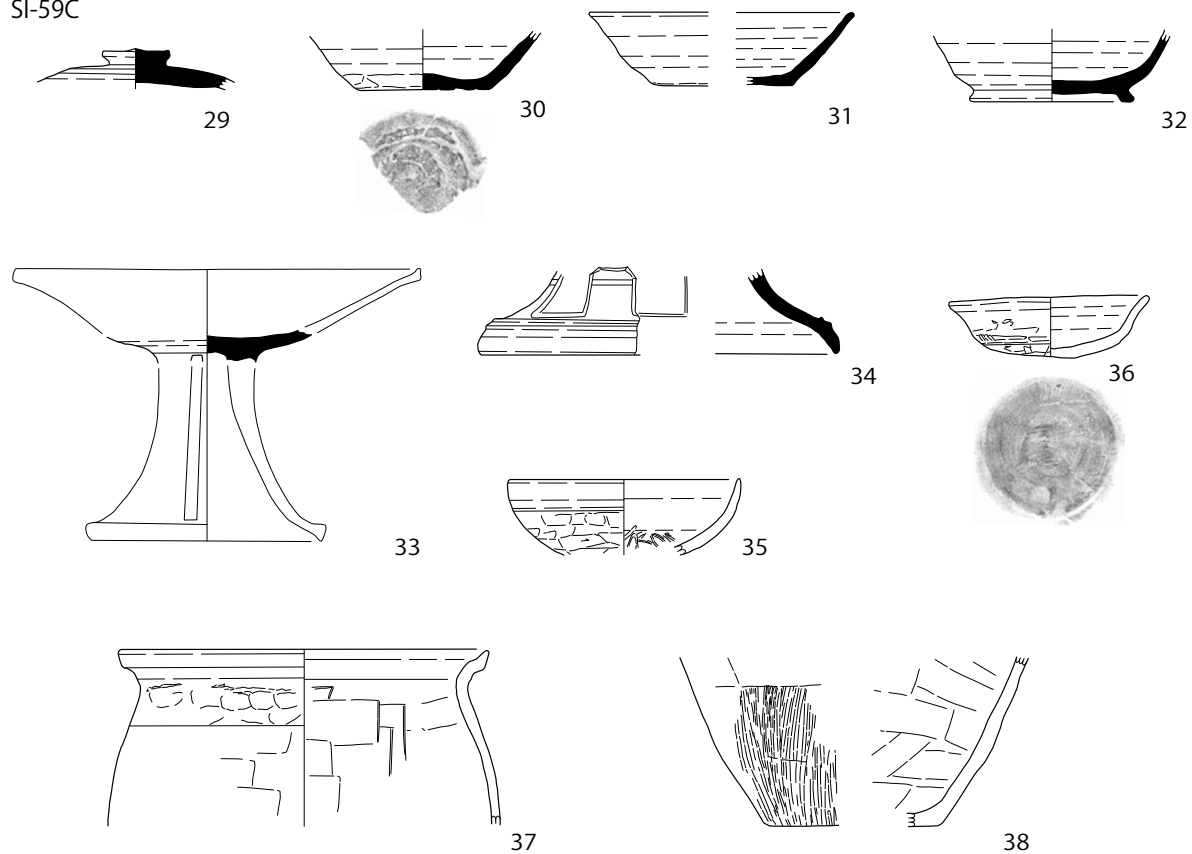
第 105 図 竪穴出土土器 (26)

Ⅲ. 調査成果

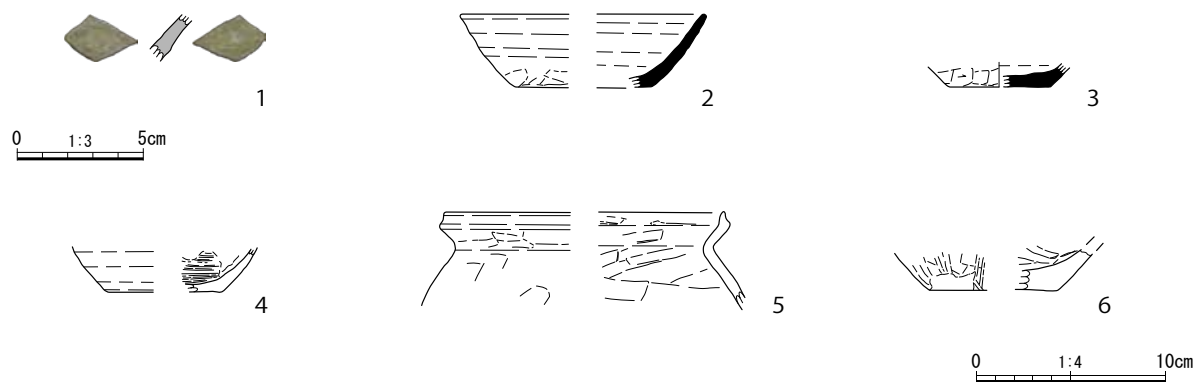
SI-59A または B (2)



SI-59C

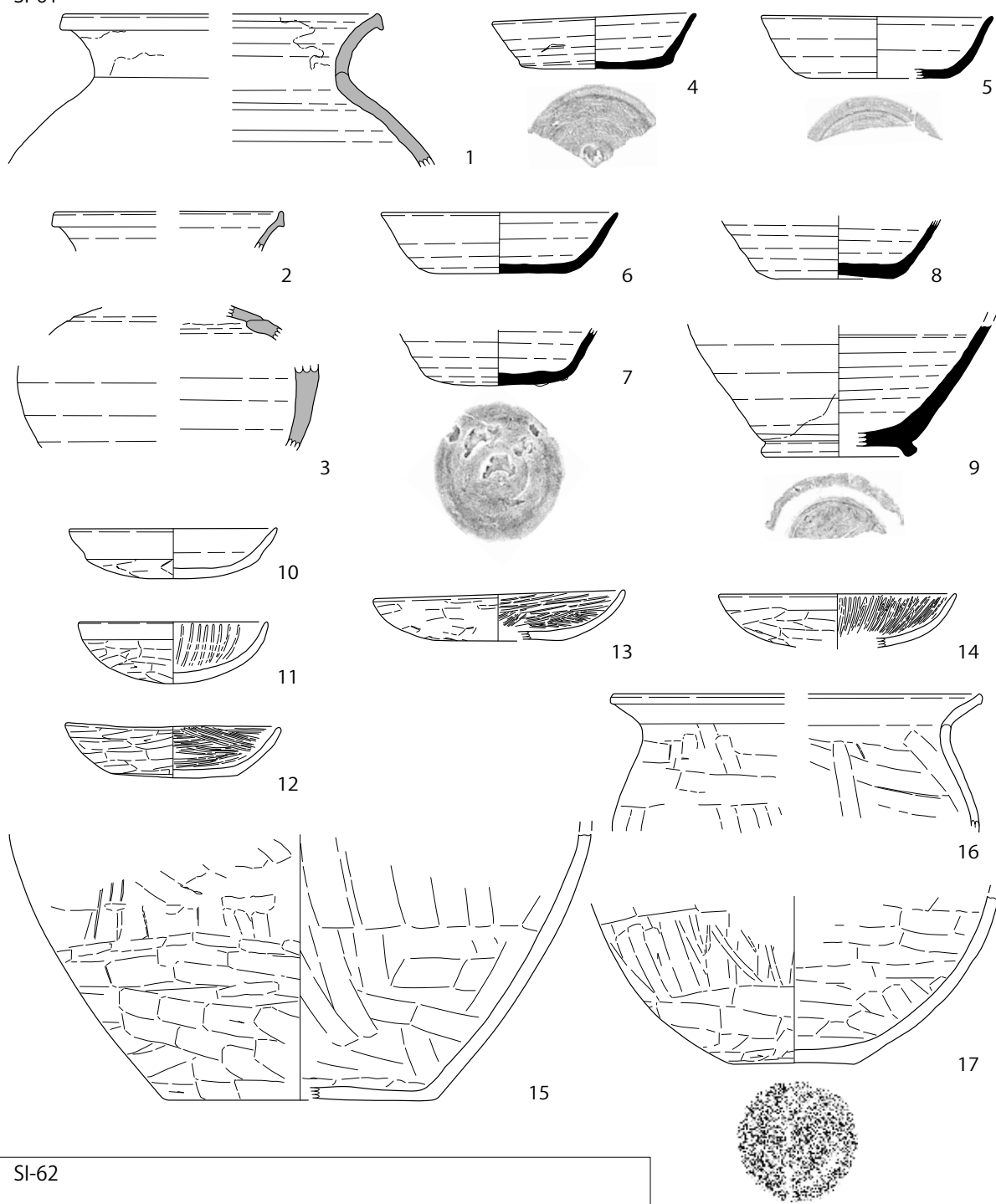


SI-60

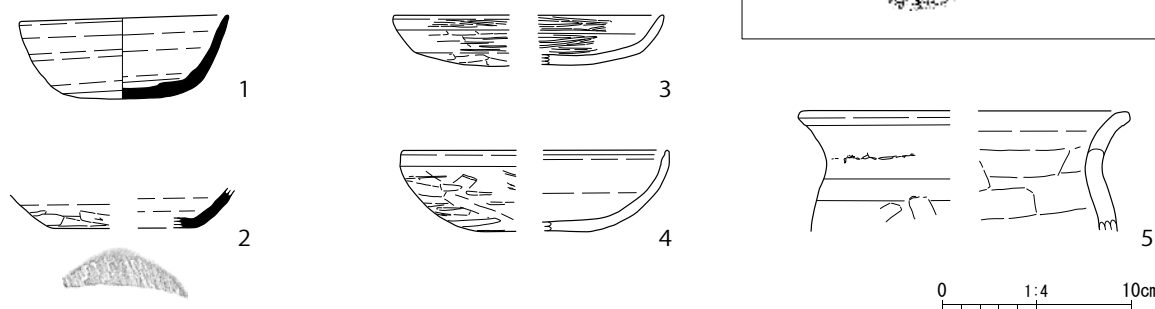


第 106 図 竪穴出土土器 (27)

SI-61



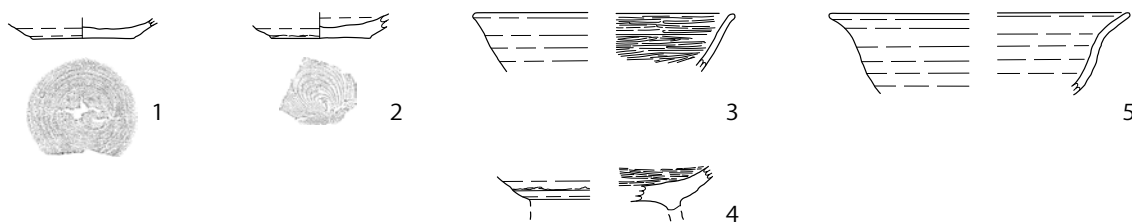
SI-62



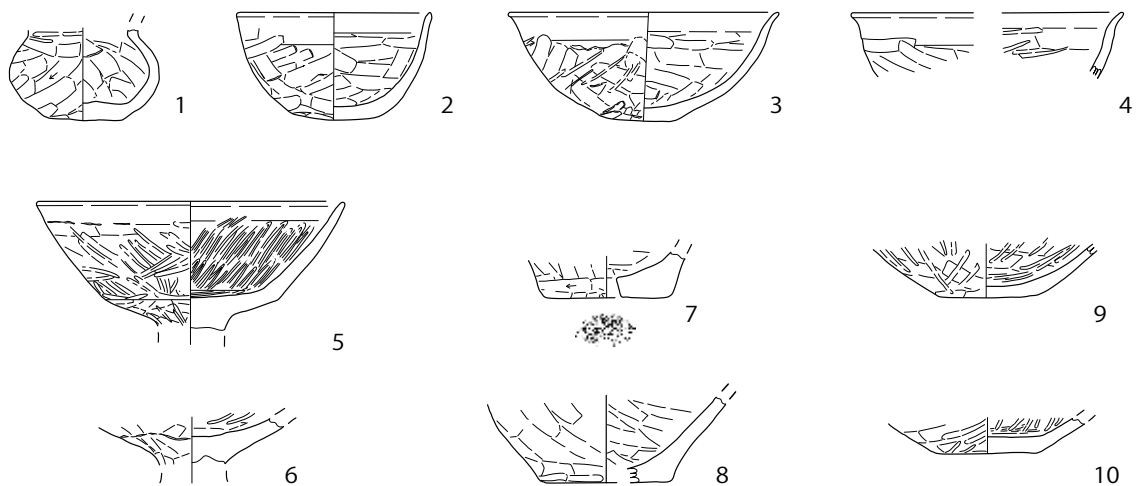
第 107 図 竪穴出土土器 (28)

Ⅲ. 調査成果

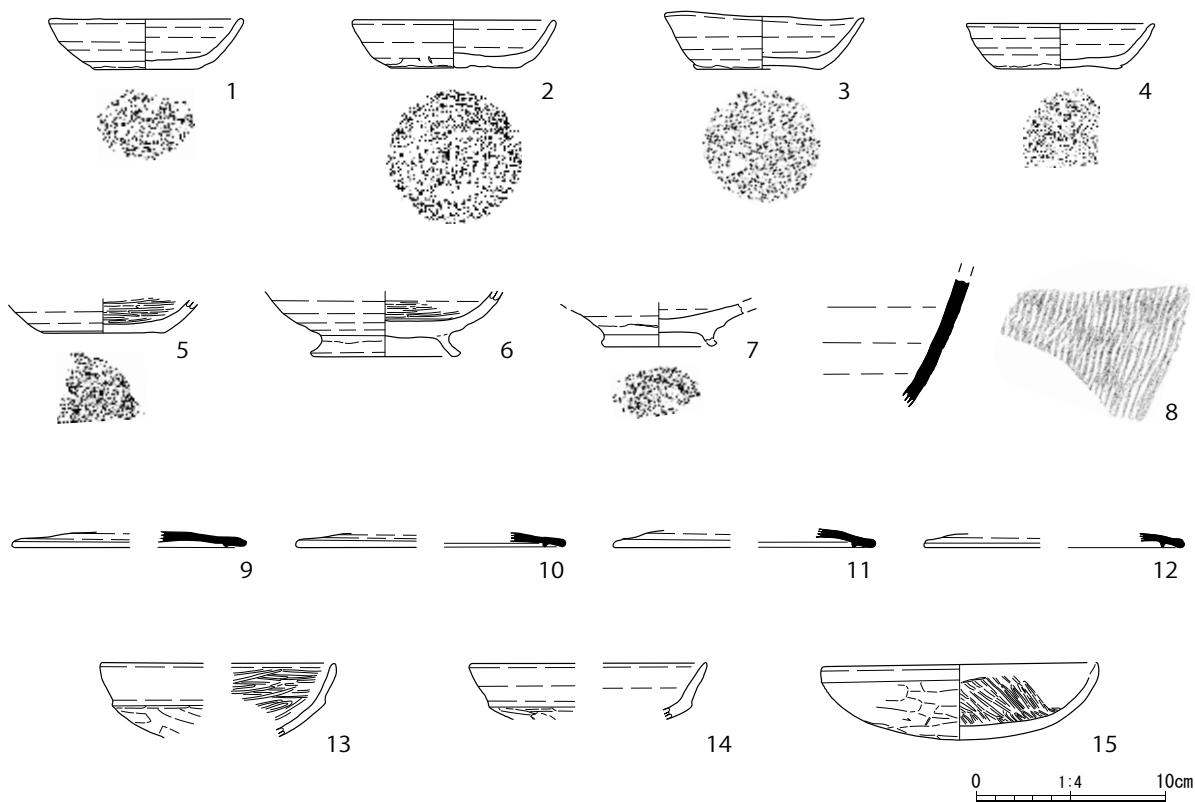
SI-63



SI-64

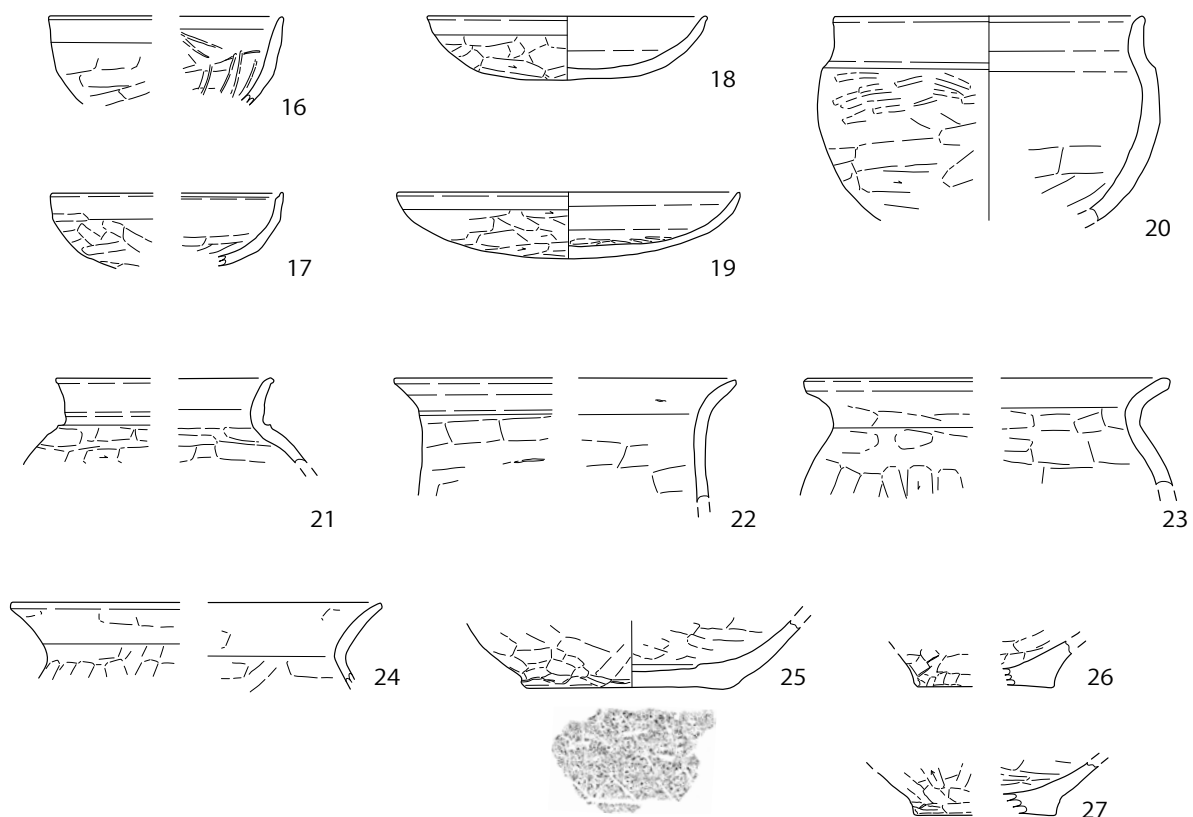


SI-65 (1)

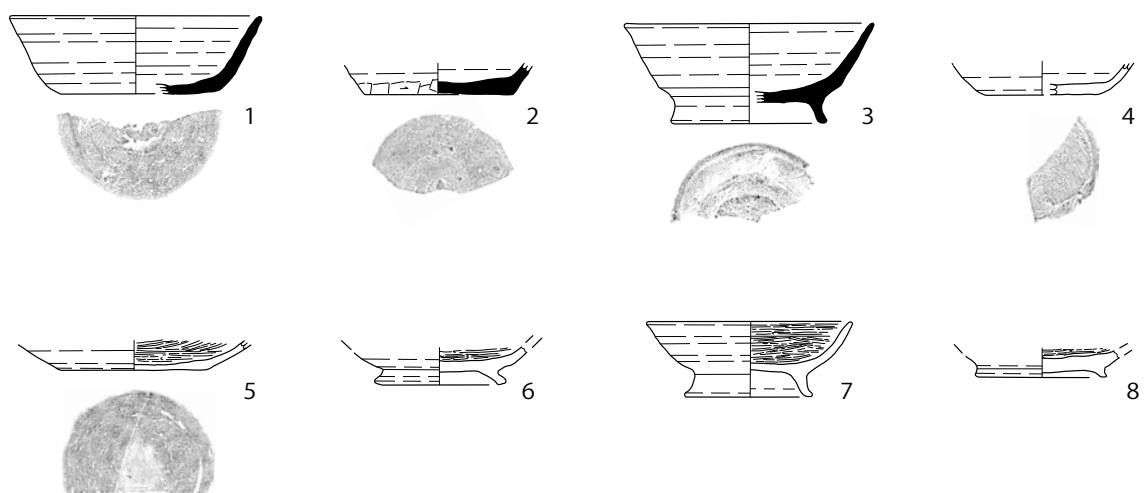


第 108 図 竪穴出土土器 (29)

SI-65 (2)



SI-67 (1)

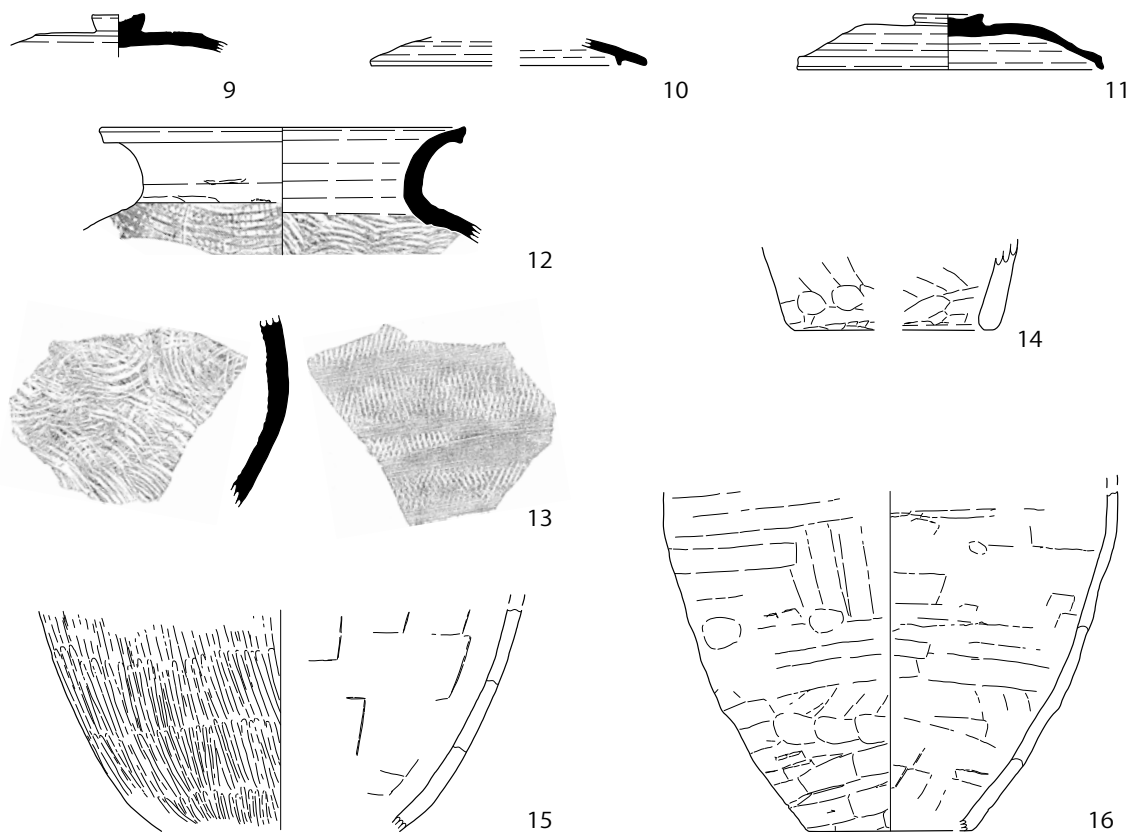


0 1:4 10cm

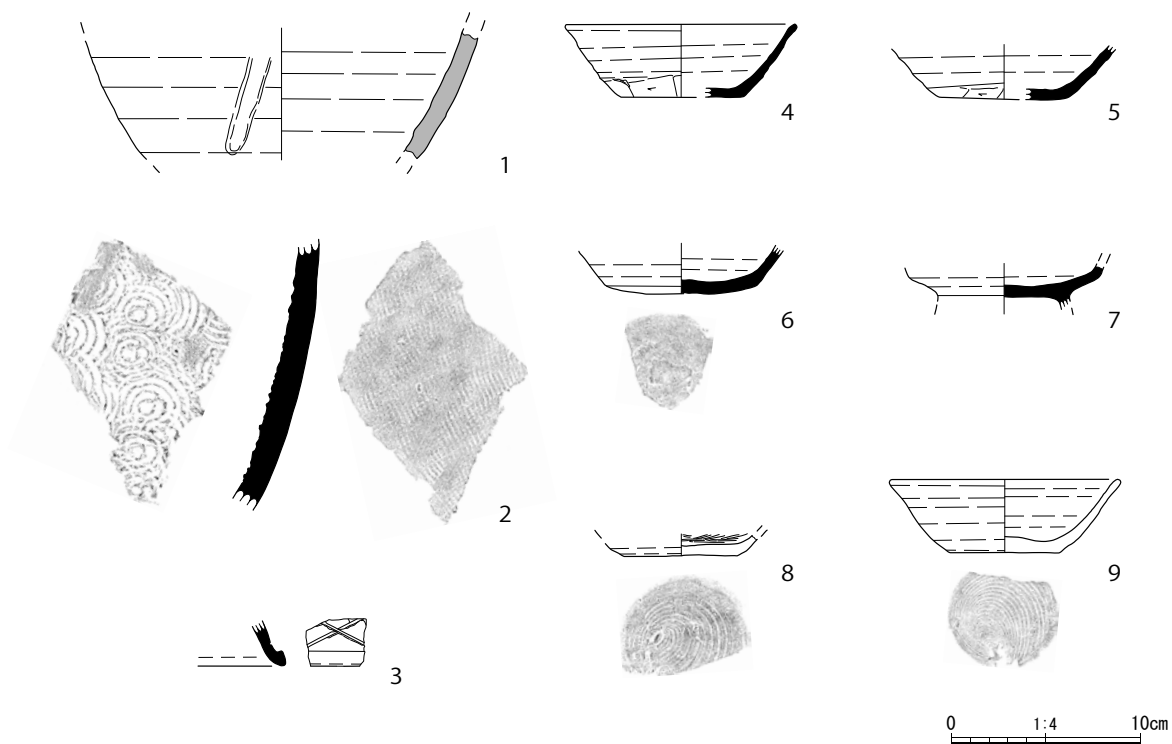
第 109 図 竪穴出土土器 (30)

Ⅲ. 調査成果

SI-67 (2)

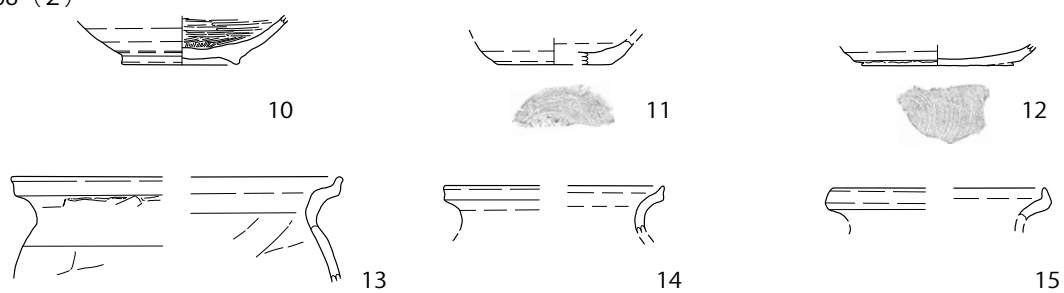


SI-68 (1)

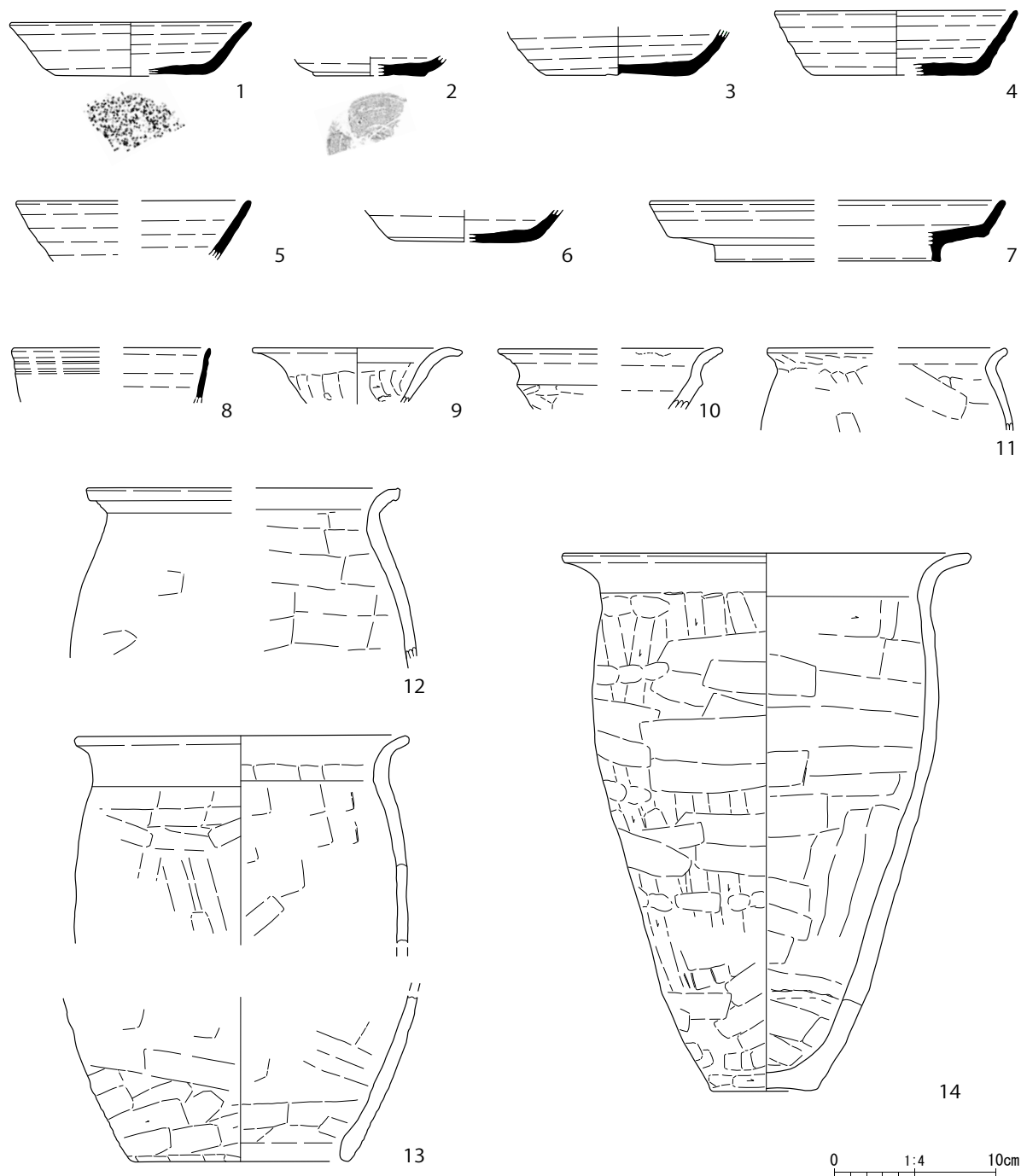


第 110 図 竪穴出土土器 (31)

SI-68 (2)



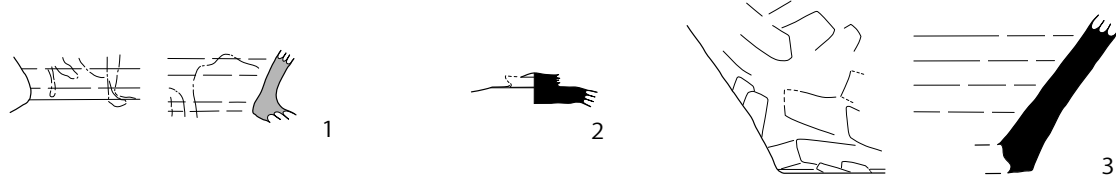
SI-70



第 111 図 竪穴出土土器 (32)

Ⅲ. 調査成果

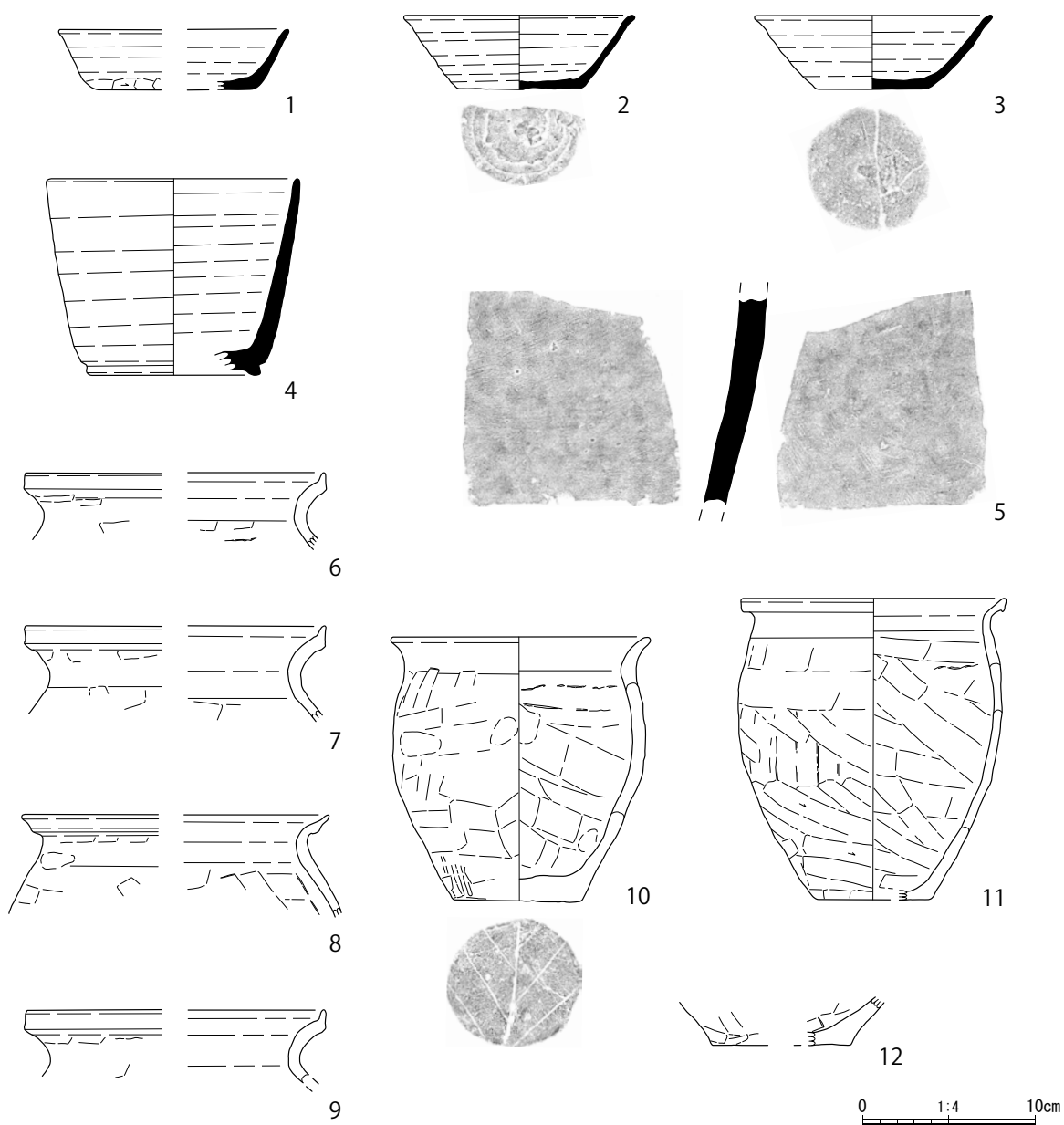
SK-71



SI-72

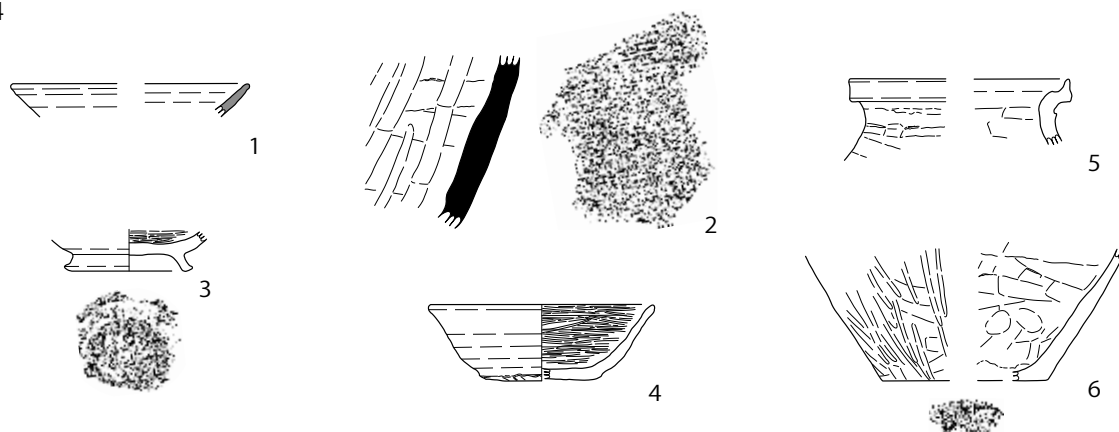


SI-73

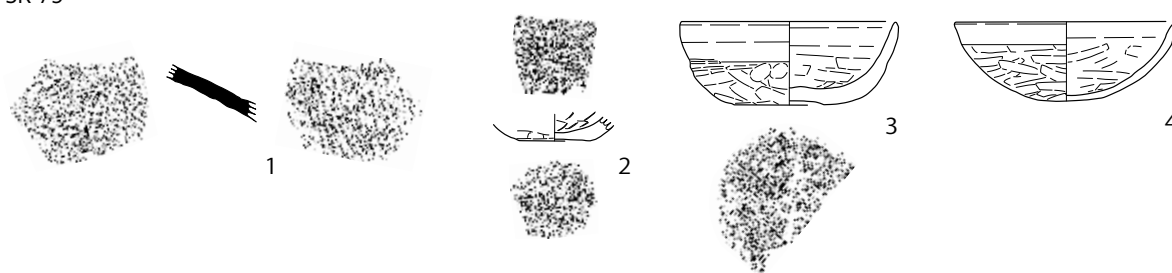


第 112 図 土坑・竪穴出土土器 (33)

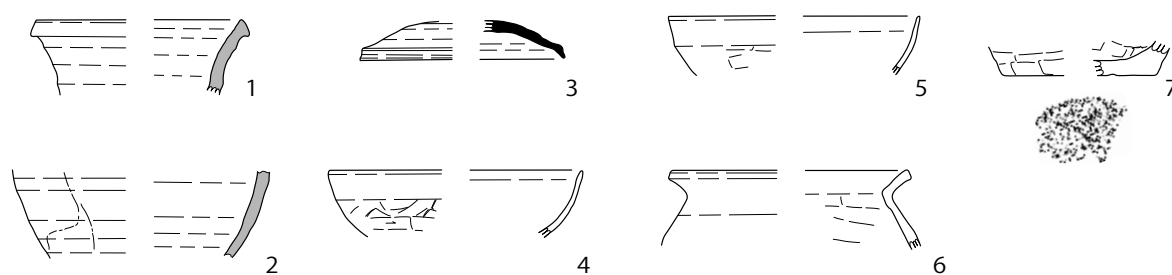
SI-74



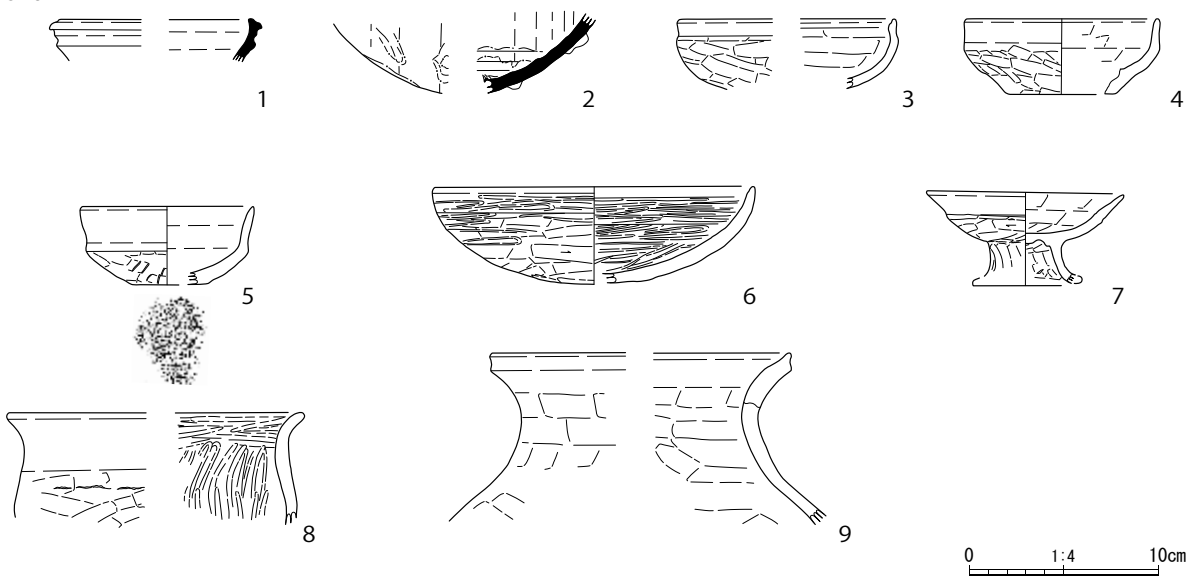
SK-75



SI-77



SI-82



0 1:4 10cm

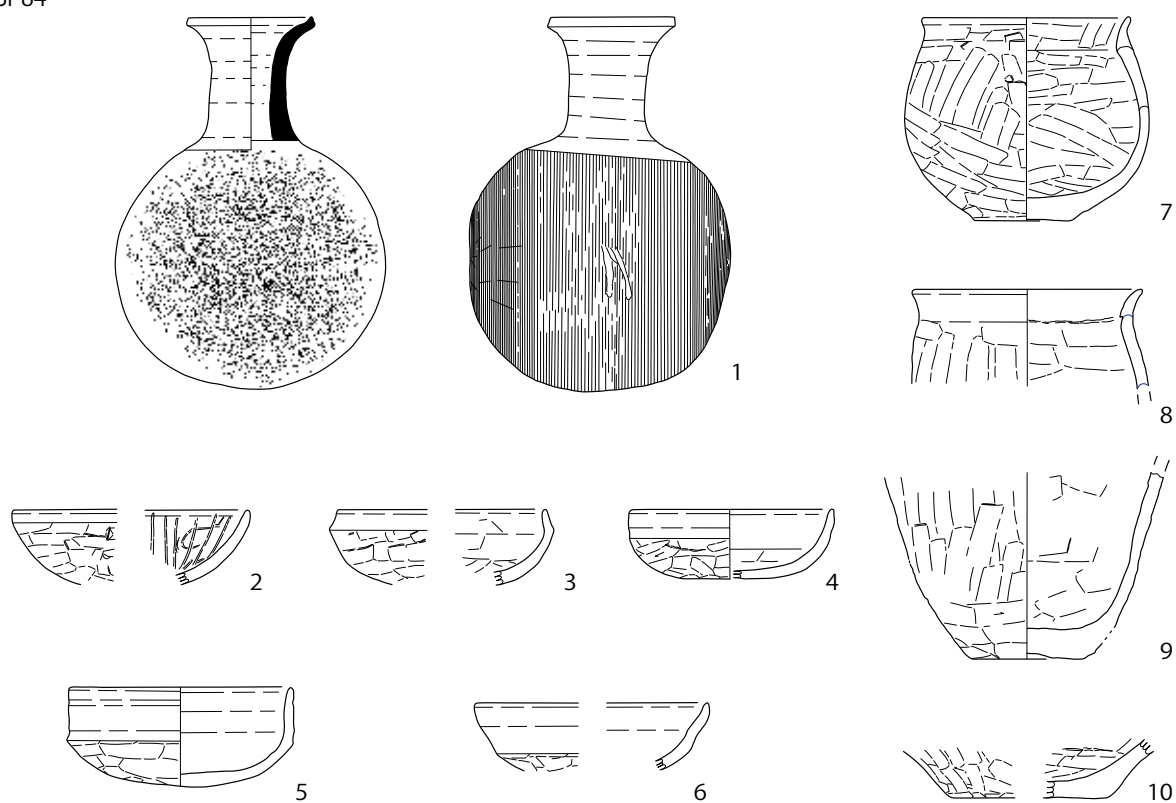
第 113 図 土坑・豎穴出土土器 (34)

Ⅲ. 調査成果

SK-83



SI-84



0 1:4 10cm

第 114 図 土坑・竪穴出土土器 (35)



第115図 遺構出土土器(1)

Ⅲ. 調査成果



SI-2・11 (内面)



SI-2・14 (内面)



SI-2・14 (外面)



SI-2・11 (外面)



SI-2・15 (内面)



SI-2・15 (外面)



SI-2・16 (内面)



SI-2・16 (外面)



SI-2・17 (内面)



SI-2・18 (内面)



SI-2・19 (内面)



SI-2・17 (外面)



SI-2・18 (斜め)



SI-2・19 (斜め)



SI-2・20 (内面)



SI-2・18 (横)



SI-2・19 (横)



SI-2・20 (外面)

第116図 遺構出土土器(2)



SI-2・21 (内面)



SI-2・22 (内面)



SI-2・23 (内面)



SI-2・21 (外面)



SI-2・22 (外面)



SI-2・23 (横)



SI-2・24 (内面)



SI-2・25 (斜め)



SI-2・26 (内面)



SI-2・24 (外面)



SI-2・25 (横)



SI-2・26 (外面)



SI-2・27 (内面)



SI-2・28 (内面)



SI-2・29. 30 (内面)



SI-2・27 (外面)



SI-2・28 (外面)



SI-2・29. 30 (外面)

第117図 遺構出土土器(3)

Ⅲ. 調査成果



■ SI-2・31 (内面)



■ SI-2・32 (内面)



■ SI-2・34 (内面)



SI-2・31 (外面)



SI-2・32 (外面)



SI-2・34 (外面)



■ SI-2・35 (内面)



■ SI-2・36 (内面)



■ SI-2・37 (内面)



SI-2・35 (外面)



SI-2・36 (外面)



SI-2・37 (外面)



■ SI-2・38 (内面)



■ SI-2・39 (内面)



■ SI-2・40 (内面)



SI-2・38 (横)



SI-2・39 (外面)



SI-2・40 (横)

第118図 遺構出土土器(4)



SI-2・41 (斜め)



SI-2・42 (内面)



SI-2・44 (内面)



SI-2・41 (横)



SI-2・42 (外面)



SI-2・44 (横)



SI-2・43 (外面)



SI-2・45 (内面)



SI-2・46 (内面)



SI-2・47 (内面)



SI-2・45 (横)



SI-2・46 (外面)



SI-2・47 (外面)



SI-2・48 (内面)



SI-2・48 (外面)



SI-2・49 (内面)



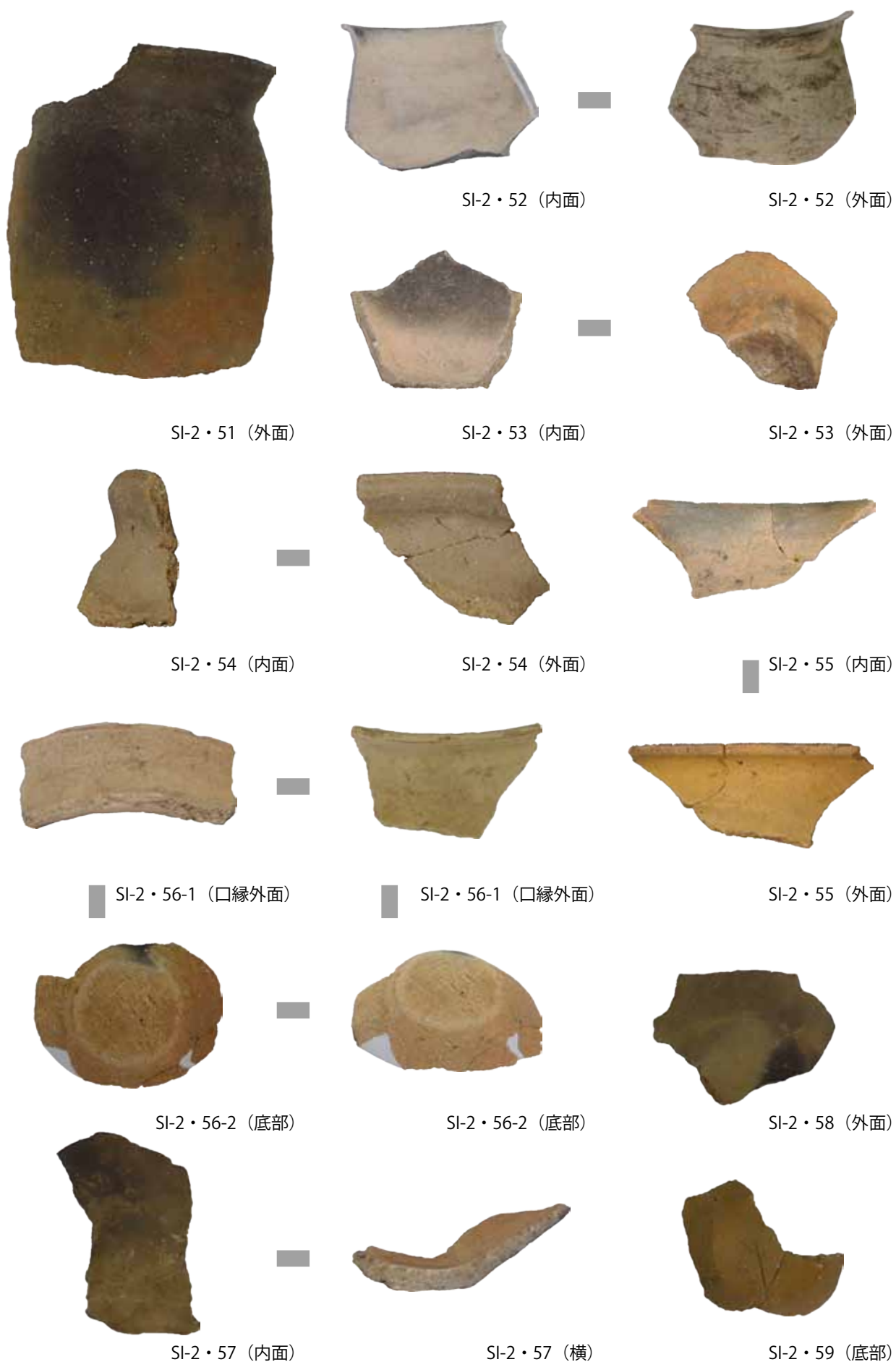
SI-2・49 (外面)



SI-2・50 (外面)

第119図 遺構出土土器(5)

Ⅲ. 調査成果



第 120 図 遺構出土土器 (6)



SI-1・1



SI-1・2



SI-1・3



SI-1・1 (内面)



SI-1・2 (内面)



SI-1・3 (横)



SI-1・1 (外面)



SI-1・2 (外面)



SI-1・3 (外面)



SI-1・4 (皿内面)



SI-1・4 (横)



SI-1・4 (底部)

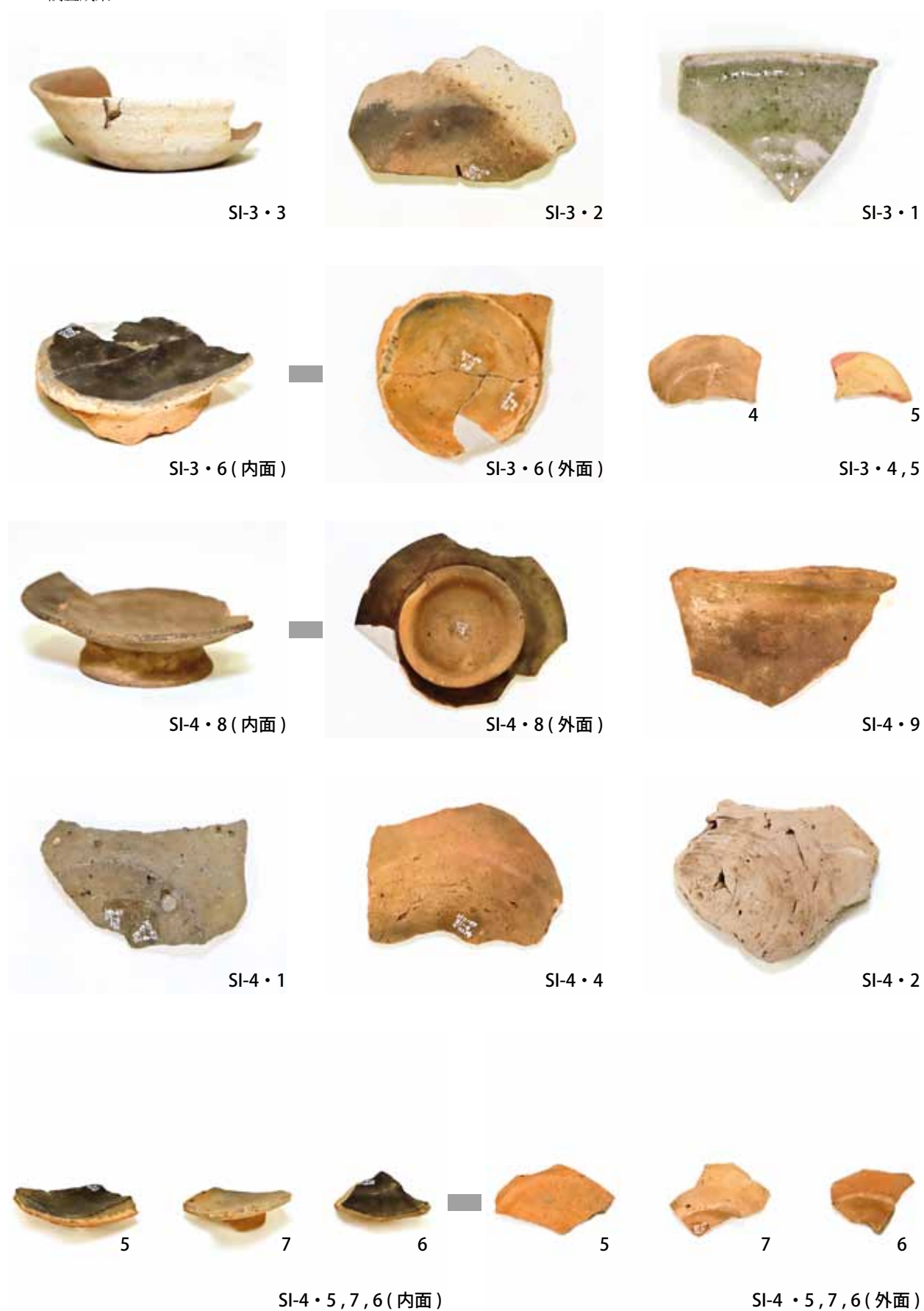


SI-1・5,7,8,9,10,11(外面)



SI-1・5,7,8,9,10,11(外面)

Ⅲ. 調査成果



第 122 図 遺構出土土器 (8)



SI-7・4



SI-7・3



SI-7・1 (内面)



SI-7・5



SI-7・13



SI-7・1 (横)



SI-7・7 (内面)



SI-7・8 (内面)



SI-7・10



SI-7・7 (外面)



SI-7・8 (外面)



SI-7・11



SI-8・8



SI-8・9 (内面)



SI-8・1 (内面)



SI-8・7



SI-8・9 (外面)



SI-8・1 (外面)

第 123 図 遺構出土土器 (9)

Ⅲ. 調査成果



第 124 図 遺構出土土器 (10)



SI-10・1 (横)



SI-10・2 (横)



SI-10・4 (内面)



SI-10・1 (底部)



SI-10・2 (底部)



SI-10・4 (底部)



SI-10・6 (横)



SI-10・3 (横)



SI-10・5 (横)



SI-11・10 (底部)



SI-11・2 (底部)



SI-11・1 (横)



SI-11・4 (天井部)



SI-11・5 (底部)



SI-11・12, 13 (口縁部)



SI-11・3 (横)



SI-11・6 (底部)



SI-11・14 (底部)

第 125 図 遺構出土土器 (11)

Ⅲ. 調査成果



SI-16・1 (底部)



SI-16・2 (底部)



SI-16・4 (外面)



SI-16・5, 6 (内面)



SI-16・5, 6 (底部)



SI-16・7 (外面)



SI-17・1 (横)



SI-17・2 (底部)



SI-17・4 (底部)



SI-17・1 (底部)



SI-17・3 (底部)



SI-17・6 (横)



SI-17・7 (横)



SI-17・9 (内面)



SI-17・12 (内面)



SI-17・11 (口縁部)



SI-17・9 (底部)



SI-17・12 (底部)

第 126 図 遺構出土土器 (12)



SI-20・1



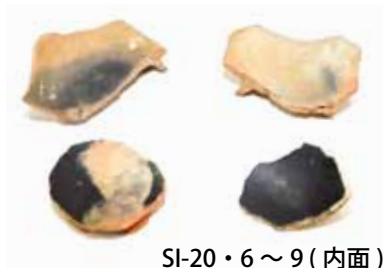
SI-20・3



SI-20・4



SI-20 包含層出土



SI-20・6～9 (内面)



SI-20・10



SI-20・2



SI-20・6～9 (外面)



SI-20・10



SI-21・3 (外面)



SI-21・3 (内面)



SI-21・5



SI-21・4 (内面)



SI-21・6 (内面)



SI-21・9 (脚外面)



SI-21・4 (外面)



SI-21・6 (外面)



SI-21・9 (脚内面)

第 127 図 遺構出土土器 (13)

Ⅲ. 調査成果



第 128 図 遺構出土土器 (14)



SI-21・24



SI-21・14



SI-21・15



SI-21・25 (内面)



SI-21・48 (外面)



SI-21・23



SI-21・29 (底面)



SI-21・29 (横)



SI-21・29 (皿内面)



SI-21・18



SI-21・28



SI-21・45



SI-21・26 (底面)



SI-21・26 (横)



SI-21・26 (皿内面)



SI-21・30



SI-21・31



SI-21・33

第 129 図 遺構出土土器 (15)

Ⅲ. 調査成果



第 130 図 遺構出土土器 (16)



SI-22A・5



SI-22A・4 (外面)



SI-22A・4 (内面)



SI-22A・6



SI-22A・7



SI-22A・8



SI-22A・9 (横)



SI-22A・9 (裏)



SI-22A・10 (外面)



SI-22A・10 (内面)



SI-22A・12 (内面)



SI-22A・11 (内面)



SI-22A・11 (外面)



SI-22A・12 (外面)



SI-22A・13



SI-22A・14



SI-22A・17

第 131 図 遺構出土土器 (17)

Ⅲ. 調査成果



第 132 図 遺構出土土器 (18)



SI-22B・12 (横)



SI-22B・19



SI-22B・20



SI-23・4



SI-23・5



SI-22B・16 (底部)



SI-23・11 (横)



SI-23・11 (底面)



SI-23・3 (横)



SI-23・3 (底面)



SI-23・9



SI-23・6



SI-23・5 (内面)



SI-23・5 (外面)



SI-23・12



SI-23・13 (内面)



SI-23・13 (外面)

第 133 図 遺構出土土器 (19)



第 134 図 遺構出土土器 (20)



第 135 図 遺構出土土器 (21)

Ⅲ. 調査成果

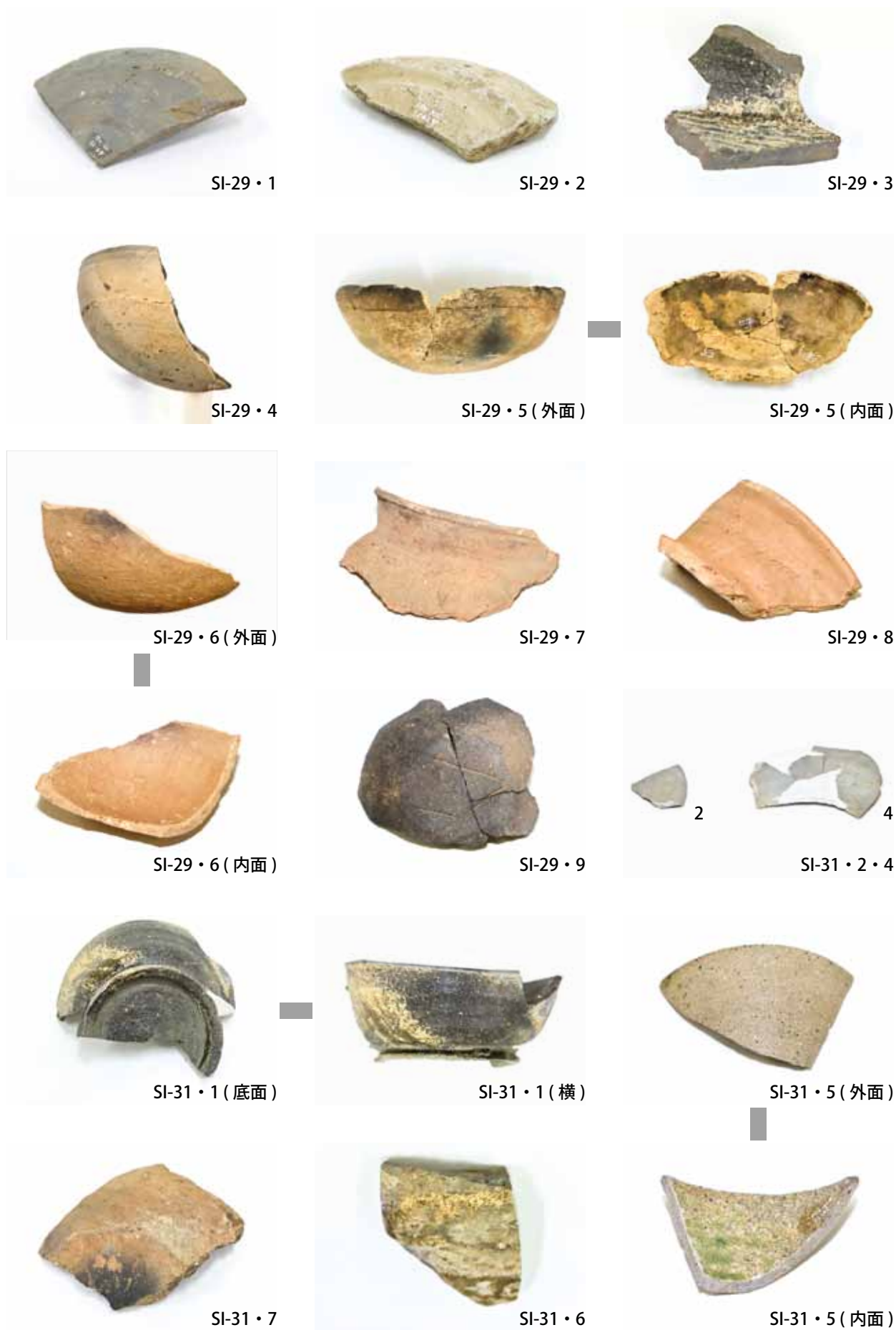


第 136 図 遺構出土土器 (22)



第 137 図 遺構出土土器 (23)

Ⅲ. 調査成果



第 138 図 遺構出土土器 (24)



SI-33・1 (横)



SI-33・1 (底面)



SI-33・7



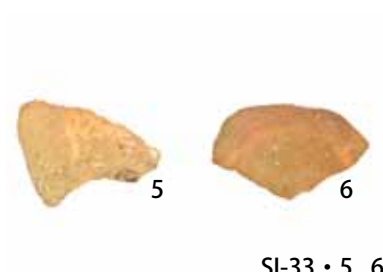
SI-33・2



SI-33・4



SI-33・3



SI-33・5, 6



SI-33・7 (横底部)



SI-34・4



SI-34・1, 2, 3, 6



SI-35・1 (内面)



SI-34・5



SI-35・2 (横)



SI-35・1 (外面)



SI-35・3



SI-35・2 (内面)



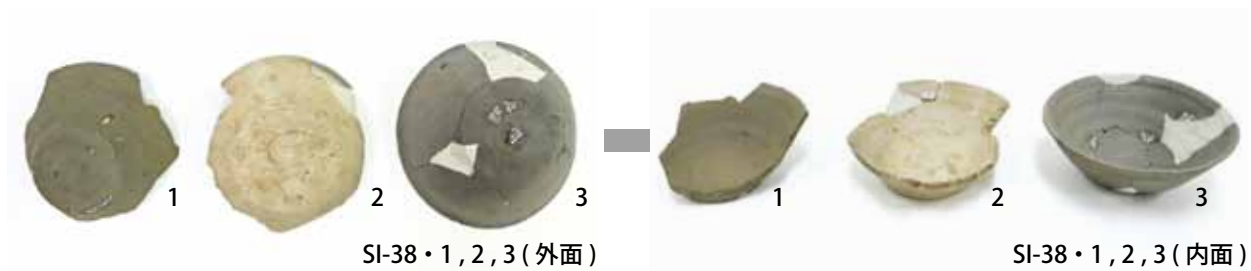
SI-35・7 (底部)

第 139 図 遺構出土土器 (25)

Ⅲ. 調査成果



第 140 図 遺構出土土器 (26)



第 141 図 遺構出土土器 (27)

Ⅲ. 調査成果



第 142 図 遺構出土土器 (28)



SI-41・1



SI-41・3



SI-41・4



SI-41・6



SI-41・2



SI-41・5



SI-41・7



SI-41・8



SI-41・13



SI-41・11 (内面)



SI-41・12



SI-41・10



SI-41・11 (横)



SI-41・9

第 143 図 遺構出土土器 (29)

Ⅲ. 調査成果



第 144 図 遺構出土土器 (30)



SI-44・1



SI-44・2



4



5

SI-44・4, 5



SI-44・3 (横)



SI-44・3 (底面)



SI-44・3 (内面)



SI-44・8 (横)



SI-44・8 (外面)



SI-44・8



SI-44・9



SI-44・6



SI-45・1 (外面)



SI-45・2



3



4

SI-45・3, 4



SI-45・1 (底面)



SI-45・5, 6



SI-45・7

第 145 図 遺構出土土器 (31)

Ⅲ. 調査成果



第 146 図 遺構出土土器 (32)



第 147 図 遺構出土土器 (33)

Ⅲ. 調査成果



第 148 図 遺構出土土器 (34)



SI-58・13



SI-58・17



SI-58・18



SI-59A・1 (外面)



SI-59A・2 (横)



SI-59A・3



SI-59A・1 (内面)



SI-59A・2 (底面)



SI-59A・5



SI-59A・4 (外面)



SI-59A・4 (内面)



SI-59A・8



SI-59A・9



SI-59B・10



SI-59B・11



SI-59B・12



SI-59B・15



SI-59B・17

第 149 図 遺構出土土器 (35)

Ⅲ. 調査成果



第 150 図 遺構出土土器 (36)

3. 遺物



SI-60・2



SI-60・3, 4



SI-60・5



SI-61・1



SI-61・2



SI-61・3



SI-61・4 (外面)



SI-61・4 (外面)



SI-61・4 (内面)



SI-61・7



SI-61・8



SI-61・6



SI-61・11 (内面)



SI-61・14 (外面)



SI-61・12 (内面)



SI-61・13



SI-61・14 (内面)



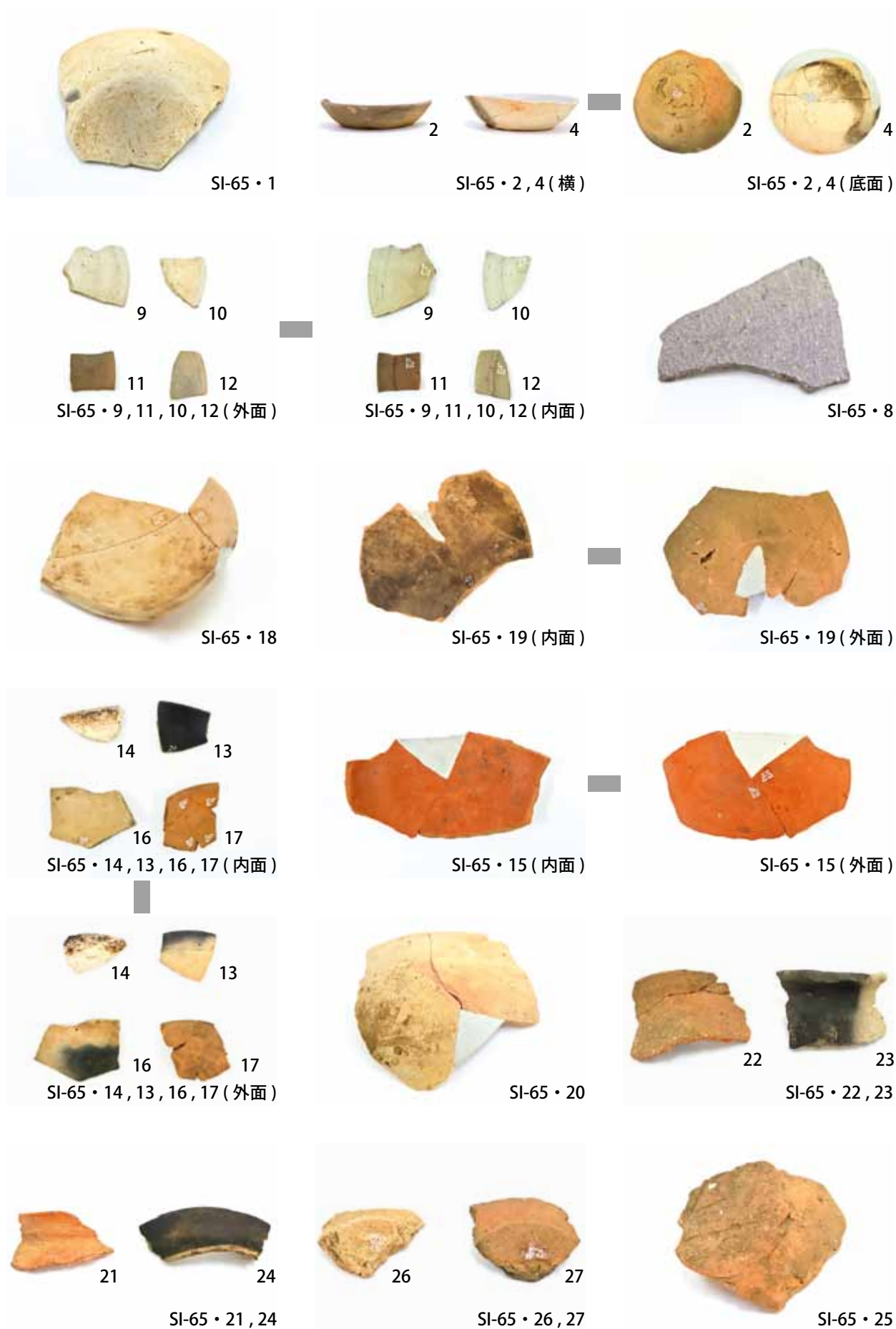
SI-61・12 (外面)

第 151 図 遺構出土土器 (37)

Ⅲ. 調査成果



第 152 図 遺構出土土器 (38)

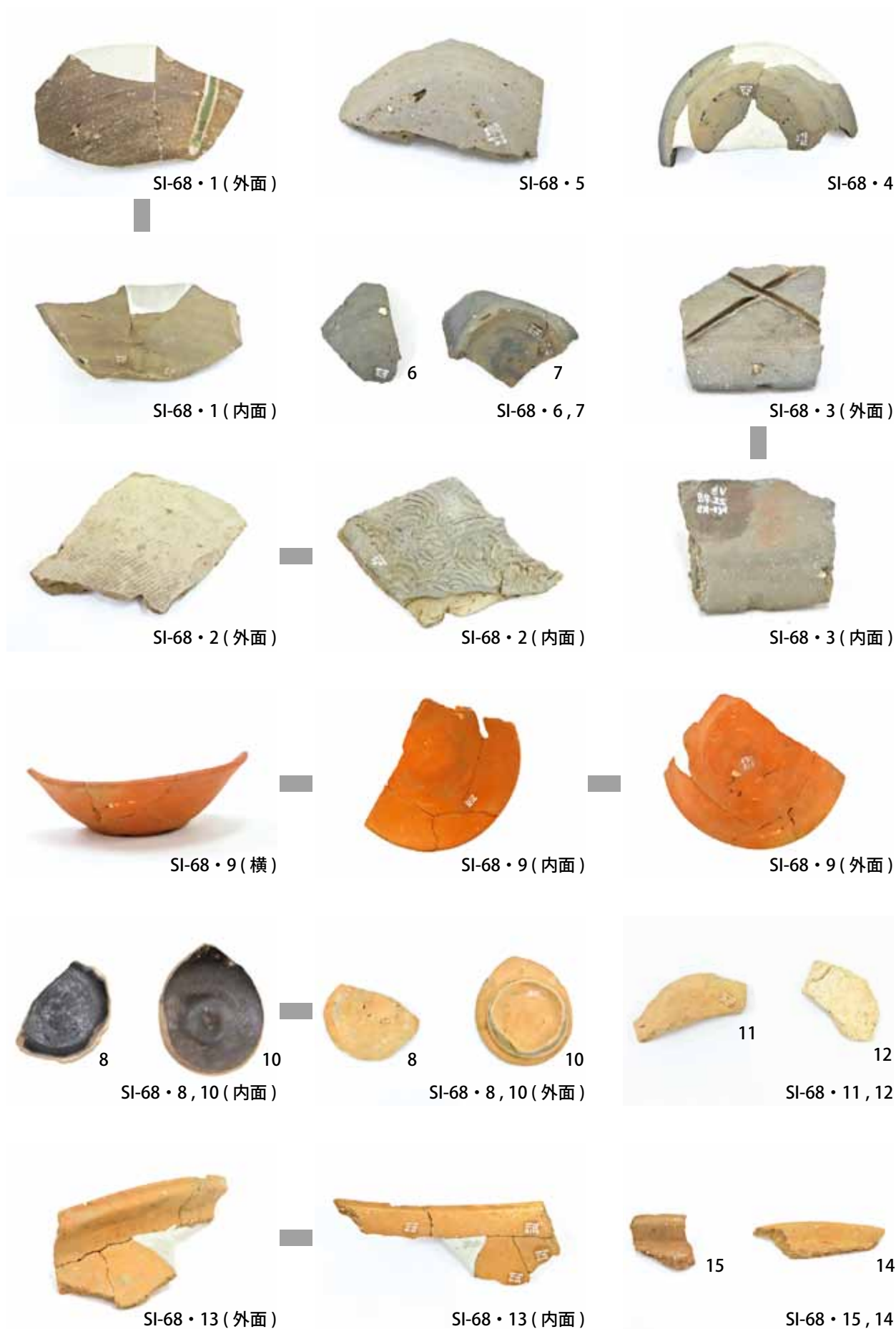


第 153 図 遺構出土土器 (39)

Ⅲ. 調査成果

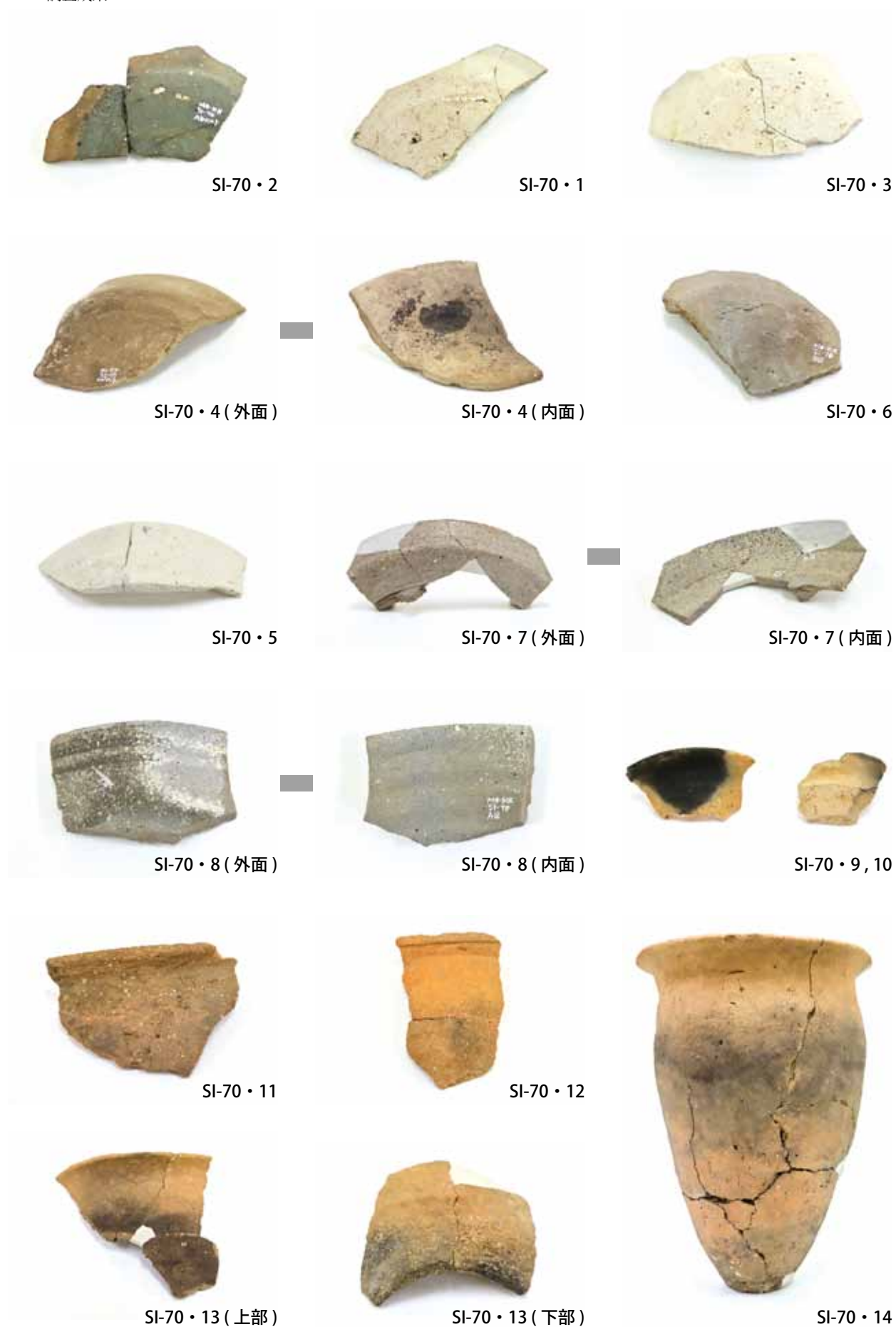


第 154 図 遺構出土土器 (40)



第 155 図 遺構出土土器 (41)

Ⅲ. 調査成果



第 156 図 遺構出土土器 (42)



SK-71・1 (外面)



SK-71・1 (内面)



SK-71・2



SK-71・3



1



2

SI-72・1, 2 (外面)



1



2

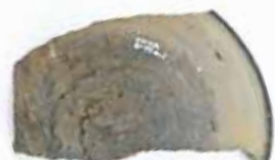
SI-72・1, 2 (内面)



SI-73・1



SI-73・2 (横)



SI-73・2 (底面)



SI-73・3 (内面)



SI-73・3 (外面)



SI-73・4



6



9

SI-73・6, 9



SI-73・7



SI-73・10 (横)



SI-73・8



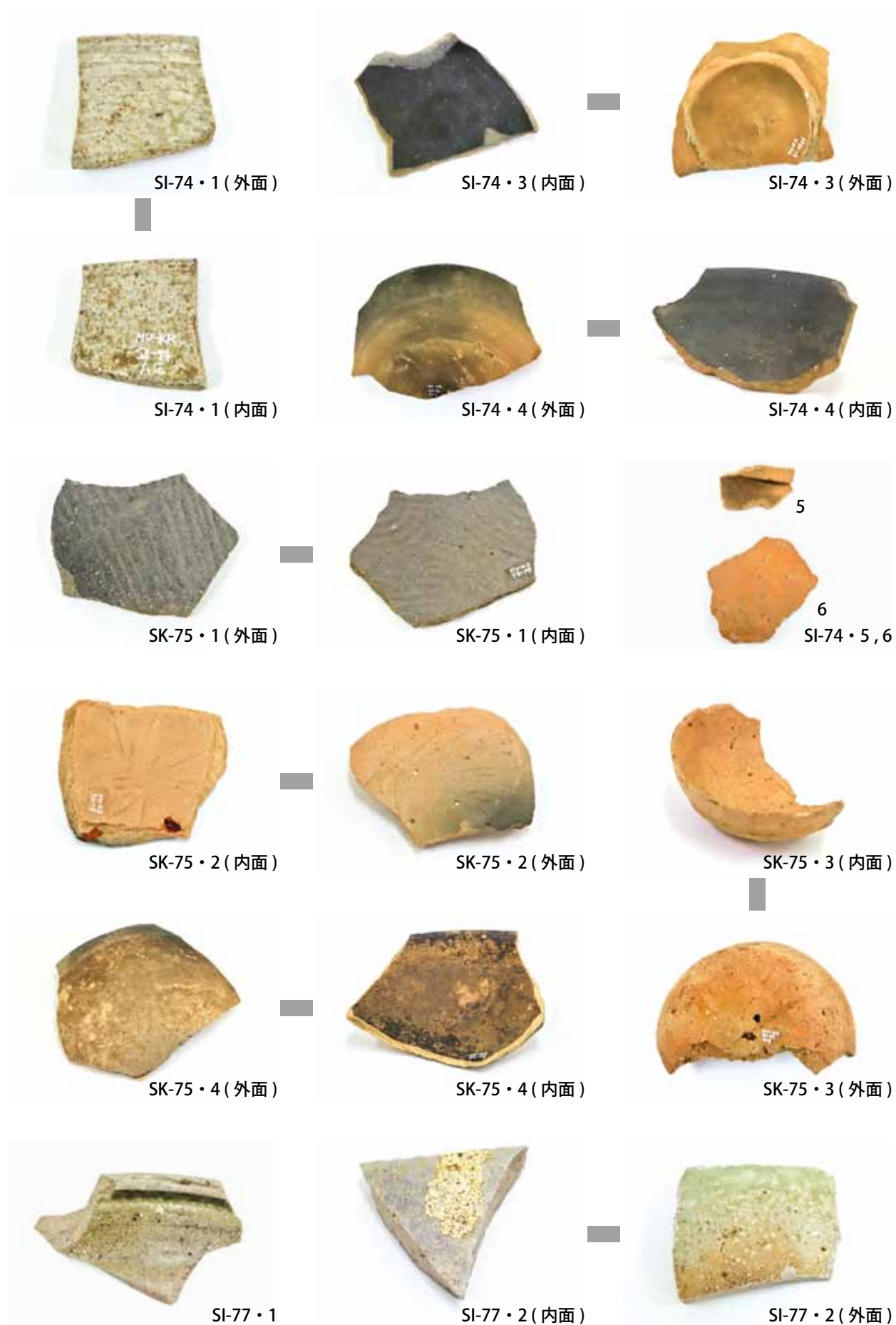
SI-73・11



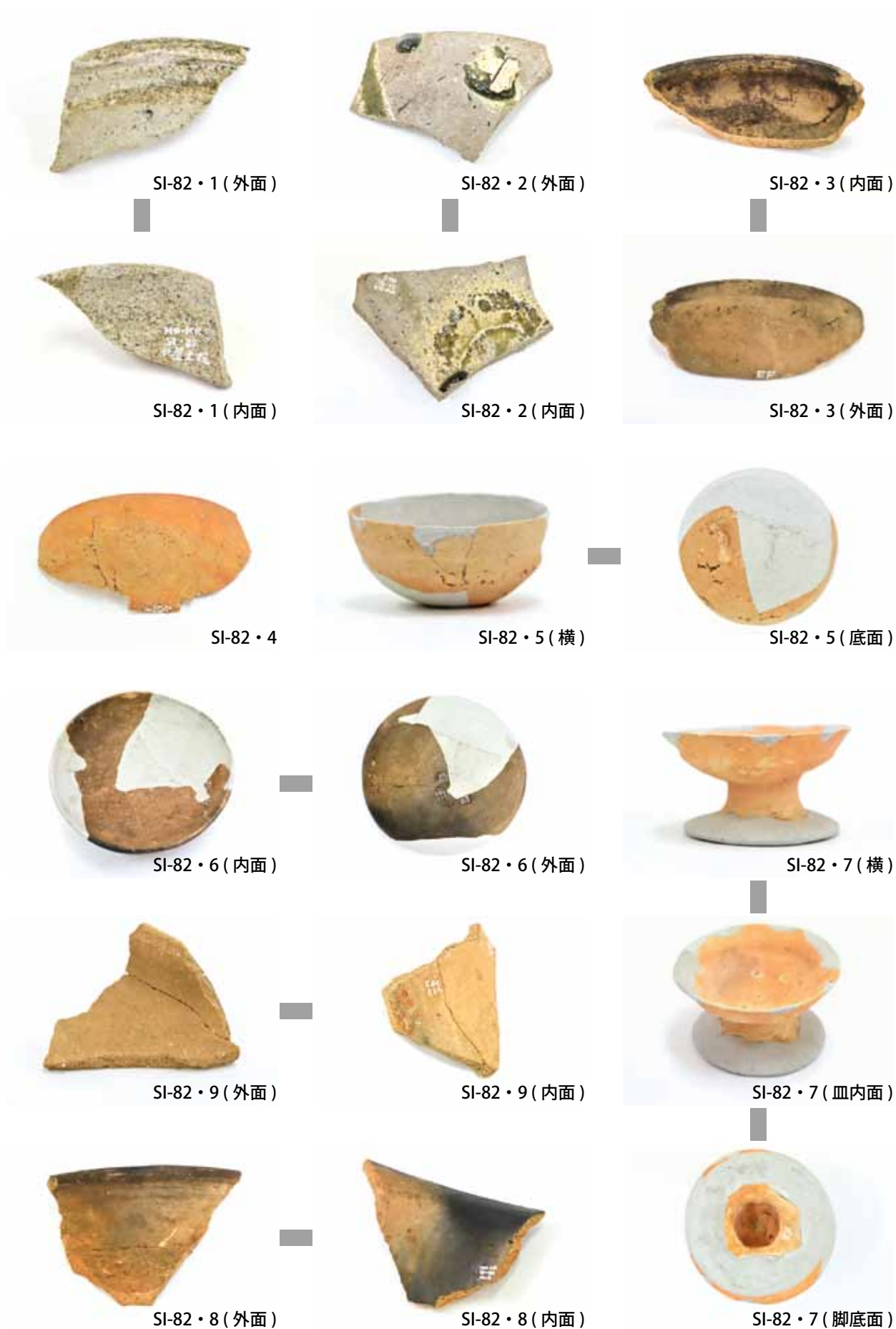
SI-73・10 (底面)

第 157 図 遺構出土土器 (43)

Ⅲ. 調査成果

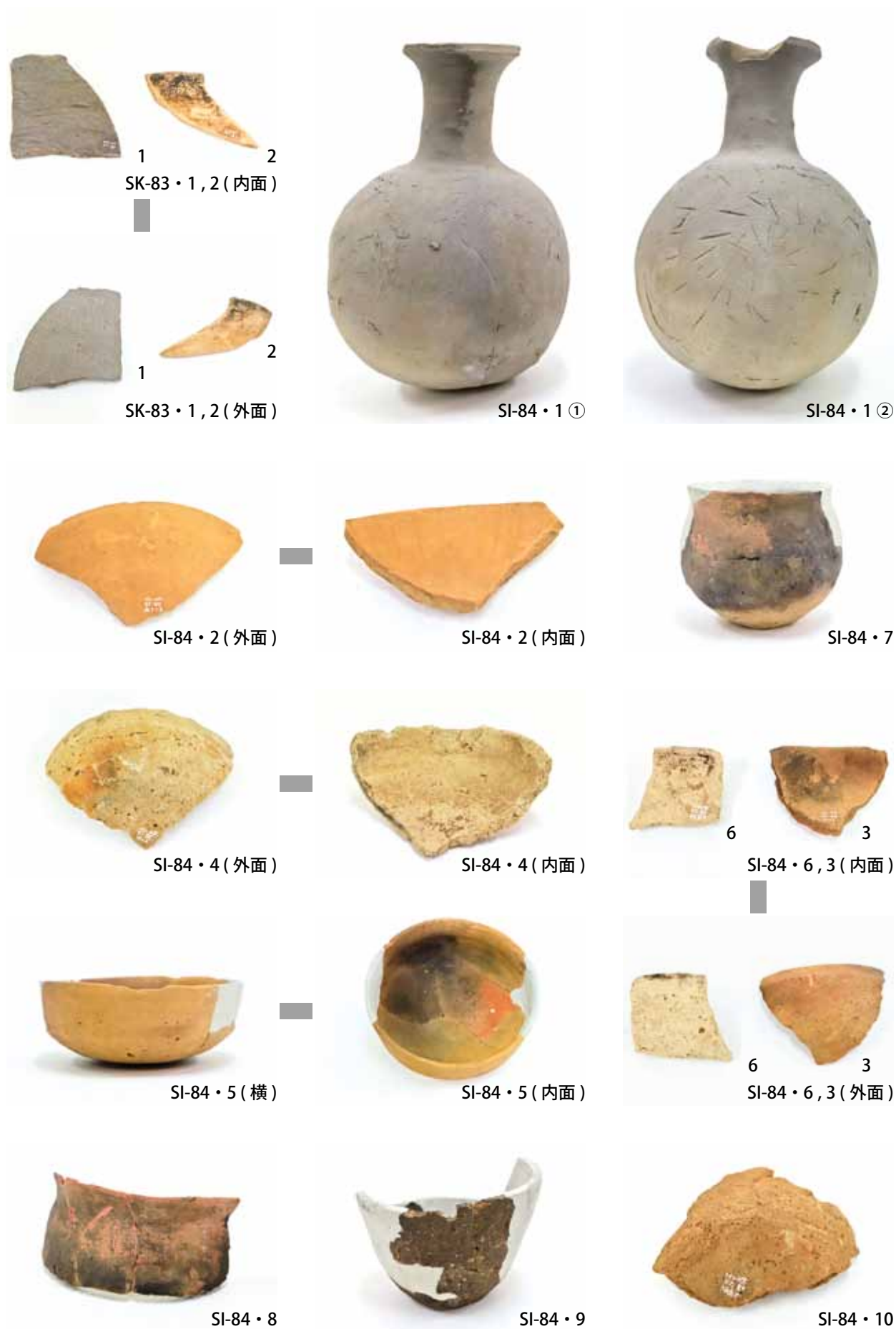


第 158 図 遺構出土土器 (44)



第 159 図 遺構出土土器 (45)

Ⅲ. 調査成果



第 160 図 遺構出土土器 (46)

c-1. 縄文土器・弥生土器 (第 161・162 図)

1～4 は縄文時代前期の土器である。1 の原体は 1 段 L の縄を用いている。粘土紐の積み上げと縄文施文を交互に行なった様子が土器断面からも確認できる (SI-2 混入品)。2 は摩滅により不明瞭ではあるが、原体は 2 段 RL と思われる (東区 X2 グリッド出土)。いずれも胎土中に繊維を含んでおり黒浜式に位置付けられよう。3 は変形爪型文及び平行沈線がみられ浮島Ⅱ式に比定できよう (SI-21 混入品)。4 は貝殻背面を浅く寝かせ気味に施文することから興津Ⅰ式と考えられる (SI-65 混入品)。

5～24 は弥生時代中期後半から後期の土器破片である。このうち、5～11 は口縁部から頸部にかけての破片である。5 は複合口縁で下端部に加飾がみられない。一方、6, 7, 8 の複合口縁下端部には棒状工具による押圧が認められる。ちなみに、これらの土器の原体は、5, 6, 7, 8 は撚り戻し (直前段反撚り) の可能性が高い。これに対し、9 の地文は明瞭な附加条縄文で、口縁下端の刺突は原体の末端を用いている。なお 9・

10 の頸部には櫛描波状文がみられる。このほか、11 は縄文地に斜め方向からの円形刺突を施す複合口縁下端部の破片である。

12～22 は頸部から胴部の破片である。12 (R2 グリッド出土)・13 (R2 グリッド出土) は 2 段の縄を横位施文している。14 は 1 段 L または 2 段 LL の原体を用いている。15 の原体は直前段反撚りあるいは撚糸文と考えられる

16, 17, 18, 19 の原体は直前段反撚りと思われる。色調は 16, 19 が淡い褐色、17, 18 がオリーブ黒色である。ちなみに、いずれの土器も古代の竪穴建物跡へ混入品で、16 が S I-65 混入品、17 は SI-2 混入品、18 は SI-59 混入品、19 は SI-67 混入品である。

20, 21, 22 の施文原体は明瞭な高低差があることから、附加条縄文と考えられる。なお出土位置は、20 が SI-65 混入品、21 は SI-67・73 混入品、22 は X2 グリッドからの出土である。

23・24 は底部破片で、双方とも底部外面に木葉痕を残す。なお、23 (R2 グリッド出土) は 2 段 LR あるいは直前段反撚り、24 (SI-64 混入品) はやや太めの縄 (2 段 LR か) によって胴部下端外面の施文を行う。色調は、ややにぶい黄褐色である。

c-2. 古墳時代前半代の土師器 (第 161 図)

SI-2 覆土中からは、以下に取り上げる実測個体 1 点と、非実測個体 (破片資料) 26 点の土師器ハケメ球胴甕が出土している。いずれも後世の手による攪拌土中からの出土であるため、混入品として捉えた。

ちなみに、1 の甕は、口縁部～体部上位にかけて円周の 1/4 弱が残存する。推定口径約 18cm、器高 (残存高) 9.8cm。調整は、口縁部内外面横ナデ。体部外面ハケメ、内面ヘラナデ調整。胎土は、やや粗い。色調は、にぶい黄褐色。焼成は、やや軟質である。古墳時代前半代のものとして考えた。

d. 石器 (第 163・164 図)

1 の剥片は全長 4.2cm、最大幅 5.8cm、厚さ 1.4cm、重量 28.28 g。流紋岩、または珪質頁岩製。SI-21 覆土への混入品である。

2 の分銅形打製石斧は全長 9.1cm、最大幅 6.9cm、厚さ 1.4cm、重量 116.02 g。安山岩製。東区の S2 グリッドから出土した。

3 の打製石斧未成品は全長 10.8cm、最大幅 4.7cm、厚さ 1.7cm、重量 130.69 g。ホルンフェルス製か。東区の P3 グリッドから出土した。

Ⅲ. 調査成果

4の乳棒状磨石は現存長5.9cm、最大幅3.4cm、厚さ2.2cm、重量58.18 g。緑色凝灰岩製と思われる。SI-21 覆土への混入品である。

5の石鏃は全長2.0cm、最大幅1.5cm、厚さ0.3cm、重量0.79 g。ホルンフェルス製。西区のD3グリッドから出土した。

6の磨石は全長2.8cm、最大幅1.0cm、厚さ0.9cm、重量3.75 g。石材は不明。SI-1 覆土混入品である。

e-2. 石製祭祀具 (第163・164図)

1(剣形)は全長5.2cm、幅2.2cm、厚さ0.4cm、孔径0.15cm、重さ7.33 g。滑石片岩製。SI-35 覆土混入品である。2(剣形)は全長4.1cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、孔径0.15cm、重さ3.45 g。滑石片岩製。SI-23のカマド覆土混入品である。

3(円板)は全長2.0cm、幅2.2cm、厚さ0.2cm、孔径0.1cm、重さ2.09 g。滑石片岩製。SI-65 混入品であろう(出土位置については第64図併照)。

〔補記〕d. 縄文・弥生土器、古墳時代前半期の土器 e. 石器・石製祭祀具

平成24年度調査でも、旧石器時代～弥生時代の遺物が少量出土しているが、当該期の遺構は全く見つからないこと、改めて記しておく(「ナイフ形石器[SI-128・6]、条痕文土器[SI-5・14]、阿玉台式土器[SI-133・3等]、縄文時代後期前半土器[SD-86・8等]、弥生時代後期土器[SI-114・3等]の小破片が出土した)(植木・市川2014)。

f. 礫器

礫器は、1群(何らかの人為的痕跡が認められる不整形礫器)、2群(長方形状、または長楕円形状を呈した礫器・石錘や編み物石に使用された可能性がある)、3群(長楕円形状で、やや扁平な礫器・石錘や編み物石に使用された可能性がある)、4群(楕円形状で、扁平な礫器)に分類した。

第165図Aは礫器2群の展開図例。全長13.45cm、最大幅4.5cm、重量511.51 g。石英斑岩製。SI-2 出土。

第165図Bは礫器3群の展開図例。全長13.2cm、最大幅5.2cm、重量383.60 g。ひん岩製。SI-61 出土。

第165図Cは礫器4群の展開図例。全長8.35cm、最大幅6.9cm、重量298.41 g。安山岩製。SI-77 出土。

礫器1群(第165図)

1は現存長8.0cm、最大幅10.8cm、重量307.07 g。多孔質安山岩製。SI-22 から出土した。

2は全長10.5cm、最大幅4.3cm、重量209.97 g。石材は不明。SI-37 から出土した。

3は現存長9.5cm、最大幅10.4cm、重量361.24 g。多孔質安山岩製。SI-41 から出土した。

4は現存長14.0cm、最大幅8.5cm、重量426.00 g。多孔質安山岩製。SI-47 から出土した。

5は現存長6.6cm、最大幅6.4cm、重量126.25 g。多孔質安山岩製。SI-58 から出土した。

6は現存長5.4cm、幅残7.2cm、重量135.28 g。多孔質安山岩製。SI-59 から出土した。

礫器2群(第166～168図)

7は全長22.5cm、最大幅8.7cm、重量1662.25 g。安山岩製。SI-1 から出土した。

- 8 は全長 13.8cm、最大幅 5.3cm、重量 409.78 g。ひん岩製。SI-2 から出土した。
- 9 は全長 14.5cm、最大幅 6.2cm、重量 372.19 g。雲母片岩製か。SI-2 から出土した。
- 10 は全長 12.7cm、最大幅 6.2cm、重量 329.64 g。ひん岩製。黒色付着物あり。SI-2 から出土した。
- 11 は全長 8.0cm、最大幅 4.6cm、重量 86.20 g。石材は不明。SI-2 から出土した。
- 12 は全長 16.1cm、最大幅 4.8cm、重量 393.21 g。安山岩製。SI-2 から出土した。
- 13 は全長 14.3cm、最大幅 5.8cm、重量 374.73 g。ひん岩製。SI-21 から出土した。
- 14 は全長 12.6cm、最大幅 5.9cm、重量 340.14 g。砂岩系石材製。SI-21 から出土した。
- 15 は現存長 12.7cm、最大幅 4.2cm、重量 291.75 g。雲母片岩製か。SI-21 から出土した。
- 16 は現存長 5.6cm、最大幅 6.2cm、重量 171.57 g。石英斑岩製。SI-21 から出土した。
- 17 は全長 15.1cm、最大幅 6.1cm、重量 462.88 g。安山岩製。SI-21 から出土した。
- 18 は全長 14.6cm、最大幅 6.0cm、重量 581.76 g。石英斑岩製。被熱により黒化。SI-22A から出土した。
- 19 は全長 5.1cm、最大幅 3.3cm、重量 33.01 g。砂岩系石材製。SI-31 から出土した。
- 20 は全長 12.3cm、最大幅 4.7cm、重量 221.25 g。安山岩製。被熱により赤化。SI-35 から出土した。
- 21 は全長 11.3cm、最大幅 5.5cm、重量 246.41 g。石英斑岩製。SI-35 から出土した。
- 22 は全長 11.4cm、最大幅 4.8cm、重量 169.51 g。ひん岩製。黒色付着物あり。SI-37 から出土した。
- 23 は現存長 10.9cm、最大幅 5.7cm、重量 186.87 g。石材は不明。SI-37 から出土した。
- 24 は全長 13.0cm、最大幅 5.1cm、重量 313.21 g。安山岩製。SI-40 から出土した。
- 25 は現存長 11.5cm、最大幅 5.3cm、重量 301.72 g。石材は不明。SI-50 から出土した。
- 26 は全長 13.8cm、最大幅 5.9cm、重量 458.80 g。ひん岩製。SI-51 から出土した。
- 27 は全長 13.2cm、最大幅 4.8cm、重量 288.41 g。砂岩系石材製。SI-57 から出土した。
- 28 は全長 14.7cm、最大幅 5.5cm、重量 356.89 g。ひん岩製。SI-57 から出土した。
- 29 は全長 18.0cm、最大幅 6.2cm、重量 531.00 g。安山岩製。SI-57 から出土した。
- 30 は全長 12.0cm、最大幅 6.0cm、重量 424.68 g。ひん岩製。SI-61 から出土した。
- 31 は全長 9.8cm、最大幅 4.7cm、重量 260.65 g。石材は不明。SI-61 から出土した。
- 32 は現存長 11.6cm、最大幅 4.5cm、重量 152.33 g。泥岩製か。SI-64 から出土した。
- 33 は全長 12.3cm、最大幅 4.1cm、重量 199.28 g。安山岩製。SI-65 から出土した。
- 34 は全長 18.3cm、最大幅 5.1cm、重量 520.32 g。安山岩製。SI-65 から出土した。
- 35 は全長 10.3cm、最大幅 4.2cm、重量 183.22 g。ひん岩製。SI-68 から出土した。
- 36 は全長 9.8cm、最大幅 5.6cm、重量 333.08 g。チャート製。SI-68 から出土した。
- 37 は全長 13.4cm、最大幅 2.3cm、重量 423.67 g。安山岩製。Q2 グリッドから出土した。
- 38 は現存長 12.8cm、最大幅 5.8cm、重量 313.21 g。石材不明。被熱により黒化。S2 グリッドから出土した。
- 39 は全長 15.3cm、最大幅 5.4cm、重量 324.4 g。安山岩製。調査区一括。
- 40 は全長 13.1cm、最大幅 5.3cm、重量 260.80 g。安山岩製。Q2 グリッドから出土した。
- 41 は現存長 12.6cm、最大幅 6.0cm、重量 225.71 g。石英斑岩製。S2 グリッドから出土した。
- 42 は全長 15.4cm、最大幅 5.6cm、重量 609.01 g。ひん岩製。出土地点は不明である。
- 43 は全長 13.5cm、最大幅 6.3cm、重量 367.25 g。安山岩製。調査区一括品。
- 44 は全長 14.2cm、最大幅 4.9cm、重量 267.03 g。安山岩製か。調査区一括品。

礫器 3 群 (第 168 ～ 171 図)

- 45 は全長 13.0cm、最大幅 5.5cm、重量 287.40 g。石英斑岩製。調査区一括品。
- 46 は全長 12.8cm、最大幅 5.7cm、重量 293.81 g。ひん岩製。調査区一括品。
- 47 は全長 14.1cm、最大幅 6.0cm、重量 470.21 g。安山岩系石材製。調査区一括品。
- 48 は全長 13.15cm、最大幅 5.4cm、重量 363.02 g。ひん岩製。SI-2 から出土した。
- 49 は全長 12.25cm、最大幅 5.55cm、重量 394.60 g。安山岩製。SI-2 から出土した。
- 50 は全長 13.5cm、最大幅 5.8cm、重量 324.4 g。ひん岩製。SI-2 から出土した。
- 51 は全長 13.8cm、最大幅 6.1cm、重量 388.80 g。雲母片岩製。SI-2 から出土した。
- 52 は全長 11.2cm、最大幅 4.6cm、重量 208.93 g。石材は不明。SI-2 から出土した。
- 53 は全長 13.9cm、最大幅 5.7cm、重量 440.02 g。デイスait製か。SI-2 から出土した。
- 54 は全長 12.9cm、最大幅 4.9cm、重量 328.4 g。ひん岩製。SI-2 から出土した。
- 55 は全長 15.2cm、最大幅 7.5cm、重量 485.98 g。安山岩製。SI-2 から出土した。
- 56 は全長 13.9cm、最大幅 6.9cm、重量 313.15 g。デイスait製。SI-2 から出土した。
- 57 は全長 9.0cm、最大幅 4.9cm、重量 180.76 g。花崗岩製。SI-2 から出土した。
- 58 は現存長 15.4cm、最大幅 7.0cm、重量 464.44 g。ひん岩製。SI-2 から出土した。
- 59 は現存長 10.3cm、最大幅 7.9cm、重量 307.29 g。ひん岩製。SI-2 から出土した。
- 60 は全長 15.5cm、最大幅 7.2cm、重量 419.07 g。安山岩製。SI-3 から出土した。
- 61 は現存長 8.4cm、最大幅 5.9cm、重量 180.58 g。安山岩製。SI-4 から出土した。
- 62 は全長 12.9cm、最大幅 6.8cm、重量 395.4 g。ひん岩製。SI-21 から出土した。
- 63 は全長 14.9cm、最大幅 5.8cm、重量 460.01 g。ひん岩製。SI-21 から出土した。
- 64 は全長 13.8cm、最大幅 6.9cm、重量 477.72 g。ひん岩製。SI-21 から出土した。
- 65 は全長 11.9cm、最大幅 5.3cm、重量 309.09 g。ひん岩製。SI-21 から出土した。
- 66 は全長 12.0cm、最大幅 4.9cm、重量 286.36 g。ひん岩製。SI-21 から出土した。
- 67 は全長 14.6cm、最大幅 5.3cm、重量 311.22 g。ひん岩製。SI-21 から出土した。
- 68 は現存長 12.8cm、最大幅 4.8cm、重量 290.44 g。石英斑岩製。SI-21 から出土した。
- 69 は現存長 8.5cm、最大幅 4.7cm、重量 147.06 g。石材は不明。SI-21 から出土した。
- 70 は現存長 9.1cm、最大幅 6.0cm、重量 226.12 g。安山岩製。SI-21 から出土した。
- 71 は現存長 5.0cm、最大幅 4.0cm、重量 37.07 g。ひん岩製。SI-21 から出土した。
- 72 は全長 11.6cm、最大幅 3.5cm、重量 84.27 g。石材は不明。SI-21 から出土した。
- 73 は全長 9.1cm、最大幅 4.7cm、重量 122.66 g。ひん岩製。SI-25 から出土した。
- 74 は全長 10.8cm、最大幅 5.9cm、重量 207.79 g。ひん岩製。SI-34 から出土した。
- 75 は全長 11.65cm、最大幅 4.2cm、重量 254.6 g。花崗岩製。SI-37 から出土した。
- 76 は現存長 9.7cm、最大幅 4.3cm、重量 95.17 g。結晶片岩製か。SI-37 から出土した。
- 77 は全長 14.9cm、最大幅 5.8cm、重量 349.21 g。安山岩製。SI-40 から出土した。
- 78 は現存長 11.3cm、最大幅 8.8cm、重量 667.30 g。安山岩製。SI-40 から出土した。
- 79 は全長 14.1cm、最大幅 6.6cm、重量 429.33 g。ひん岩製。SI-41 から出土した。
- 80 は現存長 11.5cm、最大幅 5.1cm、重量 227.42 g。安山岩製。SI-57 から出土した。
- 81 は全長 10.1cm、幅残 5.9cm、重量 156.53 g。安山岩製。SI-59 から出土した。

82 は全長 10.5cm、最大幅 3.5cm、重量 61.06 g。安山岩製で石器としても使用できそうな石材を使用しているのが特徴。SI-63 から出土した。

83 は全長 10.0cm、最大幅 4.0cm、重量 143.86 g。ひん岩製。SI-64 から出土した。

84 は全長 12.5cm、最大幅 4.6cm、重量 290.50 g。花崗岩製。SI-64 から出土した。

85 は現存長 6.3cm、最大幅 6.3cm、重量 148.52 g。安山岩製。SI-65 から出土した。

86 は現存長 10.3cm、最大幅 6.5cm、重量 358.65 g。安山岩製。SI-67 から出土した。

87 は全長 12.8cm、最大幅 6.4cm、重量 464.61 g。安山岩製。SI-70 から出土した。

88 は全長 12.0cm、最大幅 6.1cm、重量 345.4 g。安山岩製。Q4 グリッドから出土した。

89 は現存長 11.9cm、最大幅 5.6cm、重量 202.94 g。安山岩製。Q4 グリッドから出土した。

90 は全長 11.6cm、最大幅 7.6cm、重量 415.0 g。安山岩製。S3 グリッドから出土した。

91 は全長 13.8cm、最大幅 6.5cm、重量 317.02 g。デイサイト製。T3 グリッドから出土した。

92 は全長 13.5cm、最大幅 6.8cm、重量 394.7 g。安山岩製。調査区一括品。

93 は現存長 12.5cm、最大幅 6.6cm、重量 332.55 g。安山岩製。調査区一括品。

94 は全長 12.9cm、最大幅 6.6cm、重量 386.70 g。デイサイト製。調査区一括品。

95 全長 14.5cm、最大幅 7.5cm、重量 526.15 g。安山岩製。調査区一括品。

96 は全長 15.8cm、最大幅 7.1cm、重量 369.84 g。安山岩製。調査区一括品。

97 は全長 15.8cm、最大幅 5.9cm、重量 510.16 g。安山岩製。調査区一括品。

礫器 4 群 (第 171 ～ 173 図)

98 は全長 6.7cm、最大幅 8.0cm、重量 194.85 g。石材は不明。SI-2 から出土した。

99 は全長 7.5cm、最大幅 5.6cm、重量 156.2 g。砂岩製。SI-2 から出土した。

100 は全長 10.5cm、最大幅 8.1cm、重量 690.17 g。石材は不明。SI-3 から出土した。

101 は全長 9.0cm、最大幅 4.7cm、重量 204.14 g。石英斑岩製。SI-16 から出土した。

102 は全長 7.8cm、最大幅 4.8cm、重量 200.90 g。安山岩製。SI-17 から出土した。

103 は現存長 7.7cm、最大幅 7.2cm、重量 145.66 g。安山岩製。SI-21 から出土した。

104 は全長 8.9cm、幅残 5.65cm、重量 51.12 g。凝灰岩製。SI-21 から出土した。

105 は現存長 9.2cm、最大幅 7.1cm、重量 312.79 g。凝灰岩製 (砥石)。SI-29 から出土した。

106 は全長 9.5cm、最大幅 9.4cm、重量 324.84 g。安山岩製。SI-29 から出土した。

107 は全長 8.7cm、最大幅 6.0cm、重量 141.91 g。安山岩製。SI-34 から出土した。

108 は全長 10.5cm、最大幅 7.9cm、重量 333.51 g。石英斑岩製。SI-34 から出土した。

109 は全長 7.9cm、最大幅 5.6cm、重量 453.17 g。ひん岩製。SI-40 から出土した。

110 は全長 6.45cm、最大幅 5.4cm、重量 56.91 g。砂岩製。SI-40 から出土した。

111 は全長 7.0cm、最大幅 4.7cm、重量 100.32 g。安山岩製。被熱している。SI-40 から出土した。

112 は全長 7.4cm、最大幅 5.4cm、重量 134.77 g。黒色片岩製。SI-41 から出土した。

113 は全長 5.9cm、最大幅 7.6cm、重量 129.1 g。安山岩製。SI-41 から出土した。

114 は全長 6.55cm、最大幅 6.05cm、重量 117.41 g。安山岩製。SI-41 から出土した。

115 は全長 6.7cm、最大幅 6.0cm、重量 190.56 g。石材は不明。SI-45 から出土した。

116 は全長 10.6cm、最大幅 6.5cm、重量 189.58 g。安山岩製。SI-50 から出土した。

Ⅲ. 調査成果

- 117 は全長 9.6cm、最大幅 7.8cm、重量 394.29 g。安山岩製。SI-59 から出土した。
- 118 は現存長 11.5cm、幅残 9.55cm、重量 870.1 g。石材は不明。SI-59 から出土した。
- 119 は全長 5.85cm、最大幅 5.4cm、重量 140.42 g。安山岩製。SI-60 から出土した
- 120 は全長 8.8cm、最大幅 6.9cm、重量 298.51 g。安山岩製。SI-61 から出土した。
- 121 は全長 5.1cm、最大幅 5.8cm、重量 40.43 g。石材は不明。SI-62 から出土した。
- 122 は全長 6.6cm、最大幅 6.4cm、重量 237.31 g。安山岩製。SI-64 から出土した。
- 123 は全長 9.8cm、最大幅 7.2cm、重量 437.57 g。ひん岩製。SI-65 から出土した。
- 124 は全長 20.5cm、最大幅 14.3cm、重量 2950.2 g。石材は不明。SK-83 から出土した。
- 125 は全長 9.9cm、最大幅 6.1cm、重量 227.59 g。ひん岩製。SI-84 から出土した。
- 126 は全長 8.8cm、最大幅 8.2cm、重量 365.94 g。安山岩製。SI-82 から出土した。
- 127 は全長 10.5cm、最大幅 6.5cm、重量 132.14 g。安山岩製。SI-37・39・SD-36 重複部から出土した。
- 128 は現存長 8.6cm、最大幅 5.6cm、重量 168.90 g。安山岩製。SI-37・39・SD-36 重複部から出土した。
- 129 は全長 7.7cm、最大幅 4.5cm、重量 112.66 g。安山岩製。SI-37・39・SD-36 重複部から出土した。
- 130 は全長 7.7cm、最大幅 6.75cm、重量 146.53 g。安山岩製。SI-37・39・SD-36 重複部から出土した。
- 131 は全長 10.4cm、最大幅 8.1cm、重量 560.83 g 石材は不明。X2 グリッドから出土した。
- 132 は全長 12.4cm、最大幅 9.7cm、重量 467.65 g。雲母片岩製。砥石か。B1 グリッドから出土した。
- 133 は全長 7.25cm、最大幅 6.0cm、重量 275.6 g。安山岩製。L3 グリッドから出土した。
- 134 は全長 8.8cm、最大幅 7.6cm、重量 513.18 g。安山岩製。S3 グリッドから出土した。
- 135 は全長 6.15cm、最大幅 0.75cm、重量 38.12 g。安山岩製。調査区一括品。

g. 基石 (第 174・175 図)

径 2cm 前後の黒・白二色の磨石が SI-44・29 境の同一面 (確認面 -30cm ほどの高さ) からまとまって出土した。このため、これらを基石として認識した。

1 ～ 12 の白色基石 (石材特定できず) は、平面形状が長楕円形、断面形状については蒲鉾形を呈するものが目立つ。なお、計測値は次の通り。

- 1 は全長 2.1cm、幅 1.4cm、厚さ 1.2cm、重量 5.03 g
- 2 は全長 2.1cm、幅 1.5cm、厚さ 1.2cm、重量 4.56 g
- 3 は全長 2.0cm、幅 1.3cm、厚さ 1.0cm、重量 4.39 g
- 4 は全長 2.0cm、幅 1.4cm、厚さ 1.2cm、重量 4.36 g
- 5 は全長 2.2cm、幅 1.3cm、厚さ 1.2cm、重量 4.24 g
- 6 は全長 1.9cm、幅 1.1cm、厚さ 1.0cm、重量 3.60 g
- 7 は現存長 (2.0) cm、幅 1.5cm、厚さ 0.7cm、重量 2.94 g
- 8 は全長 1.9cm、幅 1.2cm、厚さ 0.8cm、重量 2.53 g
- 9 は全長 1.8cm、幅 1.4cm、厚さ 0.8cm、重量 3.42 g
- 10 は全長 1.8cm、幅 1.5cm、厚さ 0.6cm、重量 2.65 g
- 11 は全長 1.7cm、幅 1.6cm、厚さ 0.7cm、重量 2.68 g
- 12 は全長 1.5cm、幅 1.4cm、厚さ 0.8cm、重量 2.57 g

一方、No.13 ～ 24 の黒色基石 (石材特定できず) は、平面形状が楕円形、断面形状については扁平または

紡錘状を呈するものが目立つ。計測値は次の通り。

- 13 は全長 2.1cm、幅 1.9cm、厚さ 0.9cm、重量 5.51 g
- 14 は全長 1.9cm、幅 1.5cm、厚さ 0.7cm、重量 2.88 g
- 15 は全長 1.7cm、幅 1.3cm、厚さ 1.1cm、重量 3.76 g
- 16 は全長 1.8cm、幅 1.3cm、厚さ 1.0cm、重量 3.45 g
- 17 は全長 1.4cm、幅 1.0cm、厚さ 0.5cm、重量 1.11 g
- 18 は全長 1.6cm、幅 1.2cm、厚さ 0.4cm、重量 1.45 g
- 19 は全長 1.7cm、幅 1.2cm、厚さ 0.7cm、重量 1.82 g
- 20 は全長 1.8cm、幅 1.2cm、厚さ 0.7cm、重量 1.34 g
- 21 は全長 1.8cm、幅 1.5cm、厚さ 0.4cm、重量 3.83 g
- 22 は全長 1.5cm、幅 1.3cm、厚さ 0.4cm、重量 1.33 g
- 23 は全長 1.4cm、幅 1.2cm、厚さ 0.4cm、重量 0.98 g
- 24 は全長 1.5cm、幅 0.9cm、厚さ 0.5cm、重量 0.94 g

〔補記〕

本県域では、下野国分尼寺、上神主・茂原遺跡（河内郡家）といった公的施設や、多功南原遺跡、磯岡遺跡、馬門南遺跡などの拠点集落から基石が出土している（津野 1997・2014）。本遺跡の性格を考えていくうえで極めて示唆的な資料と言えよう。

h. 土製・石製紡錘車（第 174・175 図）

1 は土製の紡輪（弾み車）で断面は逆台形状を呈する。広端面径 5.8cm、狭端面径 3.2cm、中央の孔径 0.8cm、厚さ 1.6cm、重量 49.59 g。調整は全面に細かいヘラミガキを施す。焼成は、やや硬質。色調は広端面が黒褐色、側面～狭端面がにぶい赤褐色（胎土に雲母細粒を含むことから常陸筑波地域産と思われる）。SI-40 のドット取り上げ品である（出土位置については第 42 図も併照のこと）

2 は凝灰岩系の石材を用いた紡輪で、断面は長方形形状を呈する。広端面径 4.1cm、狭端面径 3.9cm、中央の孔径 0.8cm、厚さ 1.6cm、重量 50.02 g。SI-58 のドット取り上げ品である（出土位置については第 55 図も併照のこと）。

3 は土師器高台坯の底部を転用した紡輪である（焼成は、やや硬質。色調はにぶい赤褐色）。直径は広径（土器内面側）5.7cm、狭径（土器外面側）4.4cm、中央の孔径 0.8cm、厚さ 1.0cm、重量 40.77 g。SI-4 覆土出土。

4 は暗青灰色を呈する堆積岩系の石材を用いた紡輪で、断面は長方形形状を呈する。広端面径 4.5cm、狭端面径 4.1cm、中央の孔径 0.7cm、厚さ 1.4cm、重量 39.37 g。SI-27 のドット取り上げ品である（出土位置については第 32 図も併照のこと）。

なお、上記 4 点の紡錘車は、いずれも、くるま橋遺跡編年 5a～5b 期の竪穴建物跡から出土している。

〔補記〕

栃木県の古代（7～12 世紀）紡錘車の出土傾向をみると、9 世紀前半～後半にピークがあることが知られている。また「郡内集落でも優位な集落で紡錘車がまとまって出る事例が存在する」ことも指摘されている（津野ほか 2011, 579～580 頁）。本遺跡紡錘車は、この傾向に沿うものである。

ただし、栃木県域では石製紡錘車の出土は僅少であるにもかかわらず、本遺跡では 2 点もの出土がある。加えて、紡錘車 (1) は胎土に雲母細粒を含むことから筑波地域産製品がもたらされた可能性が高い。本遺跡出

Ⅲ. 調査成果

土紡錘車は栃木県域ばかりでなく、隣県・茨城県域の動向（茨城県域でも 9 世紀前半に紡錘車出土ピークがある。なお、茨城県域では土製・石製とも同程度の出土率である。渥美 2011, 597～602 頁）をも併せて検討していく必要を感じる。

i. 土錘（第 174・175 図）

- 1 は全長 4.9cm、最大幅 2.2cm、厚さ 1.8cm、孔径 0.3cm、重さ 19.46 g。SI-3 覆土出土。
- 2 は現存長 (4.4)cm、最大幅 2.3cm、厚さ 2.0cm、孔径 0.3cm、重さ 19.63 g。SI-63 覆土出土。
- 3 は全長 5.1cm、最大幅 2.2cm、厚さ残 1.6cm、重さ 14.98 g。SI-3 覆土出土。
- 4 は全長 3.6cm、最大幅 1.4cm、厚さ 1.2cm、孔径 0.4cm、重さ 5.40 g。SI-65 覆土出土。
- 5 は全長 4.1cm、幅 1.9cm、厚さ残 1.8cm、孔径 0.5cm、重さ 10.67 g。SI-26 No. 1 取上げ品（出土位置は第 31 図も併照）。
- 6 は全長 5.0cm、幅 1.3cm、厚さ 1.4cm、孔径 0.3cm、重さ 7.44 g。SI-40 No. 27 取上げ品（出土位置は第 42 図も併照）。
- 7 は残存長 4.1cm、幅残 3.4cm、孔径 0.9cm、厚さ残 3.3cm、重さ 32.75 g。SI-70 No. 1 取上げ品（出土位置は第 67 図も併照）。
- 8 は残存長 6.7cm、幅残 3.4cm、孔径 1.1cm、厚さ残 1.4cm、重さ 34.04 g。SK-75 出土。
- 9 は残存長残 3.4cm、幅 3.8cm、厚さ 3.2cm、孔径 1.2cm、重さ 35.10 g。SI-48 No. 4 取上げ品（出土位置は第 49 図も併照）。
- 10 は残存長 5.4cm、幅 1.7cm、厚さ 1.6cm、孔径 0.7cm、重さ 37.39 g。N4 グリッド 表採品。
- 11 は残存長 6.0cm、幅 3.1cm、厚さ残 1.0cm、重さ 17.47 g。SI-58 覆土出土。

なお、上記 11 点の土錘は、いずれも、くるま橋遺跡編年 4～5b 期の竪穴建物跡から出土している。

〔補記〕

栃木県域における古代（7～12 世紀）土錘の出土傾向をみると、8 世紀後半～9 世紀前半にピークがある。栃木県域の全般傾向に沿うものである。ちなみに、本遺跡は五行川に隣接しているうえ、中村遺跡（芳賀郡家別院と推定）とは約 4 km と至近距離にある（本書「Ⅱ-2 歴史的環境」併照）。堂法田遺跡（芳賀郡家）-鶴田 A 遺跡（郡家と密接に関わる遺跡で土錘出土率も高い）の関係のように水産物の調達や加工・流通に従事した遺跡であった可能性（津野ほか 2011, 579～580 頁）はあろう。

j. 焼粘土塊（第 176～178 図）

- 1 は全長 4.2cm、幅 5.6cm、重量 24.25 g。SI-1 から出土した。
- 2 は全長 3.6cm、幅 2.6cm、重量 11.40 g。SI-1 から出土した。
- 3 は全長 3.6cm、幅 3.9cm、重量 18.41 g。SI-2 から出土した。
- 4 は全長 3.4cm、幅 3.0cm、重量 11.40 g。SI-2 から出土した。
- 5 は全長 2.8cm、幅 4.0cm、重量 8.92 g。SI-2 から出土した。
- 6 は全長 5.0cm、幅 3.8cm、重量 30.14 g。SI-2 から出土した。
- 7 は全長 3.6cm、幅 2.2cm、重量 9.30 g。SI-2 から出土した。
- 8 は全長 3.6cm、幅 3.0cm、重量 12.17 g。SI-2 から出土した。
- 9 は全長 4.2cm、幅 4.2cm、重量 15.01 g。SI-2 から出土した。
- 10 は全長 3.8cm、幅 3.0cm、重量 9.07 g。SI-2 から出土した。

- 11 は全長 6.8cm、幅 6.6cm、重量 93.25 g。SI-2 から出土した。
- 12 は全長 5.0cm、幅 2.8cm、重量 22.32 g。SI-2 から出土した。
- 13 は全長 5.8cm、幅 5.6cm、重量 75.13 g。SI-2 から出土した。
- 14 は全長 6.0cm、幅 4.2cm、重量 48.87 g。SI-2 から出土した。
- 15 は全長 4.8cm、幅 3.0cm、重量 14.94 g。SI-2 から出土した。
- 16 は全長 3.2cm、幅 2.8cm、重量 11.18 g。SI-2 から出土した。
- 17 は全長 4.0cm、幅 3.4cm、重量 15.24 g。SI-2 から出土した。
- 18 は全長 4.0cm、幅 3.4cm、重量 29.31 g。SI-2 から出土した。
- 19 は全長 4.0cm、幅 5.8cm、重量 19.87 g。SI-3 から出土した。
- 20 は全長 2.2cm、幅 4.8cm、重量 4.85 g。SI-3 から出土した。
- 21 は全長 3.8cm、幅 2.8cm、重量 7.26 g。SI-3 から出土した。
- 22 は全長 2.8cm、幅 3.0cm、重量 7.61 g。SD-6 から出土した。
- 23 は全長 3.0cm、幅 2.6cm、重量 7.76 g。SD-6 から出土した。
- 24 は全長 3.6cm、幅 3.8cm、重量 35.37 g。SI-8 から出土した。
- 25 は全長 3.0cm、幅 3.8cm、重量 15.31 g。SI-8 から出土した。
- 26 は全長 4.2cm、幅 2.2cm、重量 13.52 g。SI-8 から出土した。
- 27 は全長 3.2cm、幅 2.4cm、重量 5.47 g。SI-8 から出土した。
- 28 は全長 5.2cm、幅 3.8cm、重量 29.48 g。SI-8 から出土した。
- 29 は全長 2.8cm、幅 2.6cm、重量 6.34 g。SI-10 から出土した。
- 30 は全長 6.8cm、幅 7.6cm、重量 76.68 g。SI-11 から出土した。
- 31 は全長 3.4cm、幅 2.8cm、重量 5.20 g。SI-11 から出土した。
- 32 は全長 3.0cm、幅 3.4cm、重量 7.03 g。SI-11 から出土した。
- 33 は全長 2.4cm、幅 3.0cm、重量 5.62 g。SI-11 から出土した。
- 34 は全長 2.6cm、幅 3.6cm、重量 8.46 g。SI-16 から出土した。
- 35 は全長 3.8cm、幅 2.6cm、重量 9.80 g。SI-23 から出土した。
- 36 は全長 2.8cm、幅 2.2cm、重量 7.45 g。SI-23 から出土した。
- 37 は全長 3.8cm、幅 2.2cm、重量 7.29 g。SI-23 から出土した。
- 38 は全長 2.8cm、幅 2.4cm、重量 7.82 g。SI-23 から出土した。
- 39 は全長 3.8cm、幅 2.6cm、重量 7.29 g。SI-25 から出土した。
- 40 は全長 3.2cm、幅 2.2cm、重量 11.15 g。SI-27 から出土した。
- 41 は全長 3.2cm、幅 2.6cm、重量 11.02 g。SI-27 から出土した。
- 42 は全長 4.0cm、幅 3.4cm、重量 32.15 g。SI-27 から出土した。
- 43 は全長 2.4cm、幅 2.2cm、重量 6.19 g。SI-29 から出土した。
- 44 は全長 4.0cm、幅 2.8cm、重量 14.93 g。SI-29 から出土した。
- 45 は全長 3.2cm、幅 3.0cm、重量 11.38 g。SI-33 から出土した。
- 46 は全長 4.0cm、幅 3.8cm、重量 21.61 g。SD-36 から出土した。
- 47 は全長 3.4cm、幅 2.2cm、重量 6.30 g。SI-37 から出土した。
- 48 は全長 3.2cm、幅 2.2cm、重量 7.70 g。SI-37 から出土した。

Ⅲ. 調査成果

- 49 は全長 7.8cm、幅 6.0cm、重量 89.44 g。SI-40 から出土した。
50 は全長 3.8cm、幅 2.2cm、重量 9.05 g。SI-41 から出土した。
51 は全長 4.0cm、幅 3.0cm、重量 17.02 g。SI-41 から出土した。
52 は全長 2.8cm、幅 4.4cm、重量 16.72 g。SI-44 から出土した。
53 は全長 2.8cm、幅 2.8cm、重量 11.82 g。SI-44 から出土した。
54 は全長 4.6cm、幅 3.2cm、重量 13.68 g。SI-45 から出土した。
55 は全長 4.0cm、幅 3.2cm、重量 6.94 g。SI-57 から出土した。
56 は全長 3.0cm、幅 3.0cm、重量 10.76 g。SI-57 から出土した。
57 は全長 3.6cm、幅 2.4cm、重量 7.40 g。SI-57 から出土した。
58 は全長 4.8cm、幅 3.0cm、重量 20.22 g。SI-58 から出土した。
59 は全長 4.4cm、幅 3.2cm、重量 18.24 g。SI-58 から出土した。
60 は全長 3.4cm、幅 2.2cm、重量 7.40 g。SI-58 から出土した。
61 は全長 4.2cm、幅 4.4cm、重量 37.30 g。SI-59 から出土した。
62 は全長 3.0cm、幅 2.8cm、重量 8.77 g。SI-59 から出土した。
63 は全長 3.0cm、幅 2.2cm、重量 7.26 g。SI-59 から出土した。
64 は全長 5.8cm、幅 4.6cm、重量 31.42 g。SI-65 から出土した。
65 は全長 2.8cm、幅 2.2cm、重量 5.68 g。SI-65 から出土した。
66 は全長 4.2cm、幅 3.2cm、重量 21.94 g。SI-65 から出土した。
67 は全長 3.4cm、幅 4.2cm、重量 22.35 g。SD-69 から出土した。
68 は全長 3.4cm、幅 2.4cm、重量 9.13 g。SI-73 から出土した。
69 は全長 3.0cm、幅 2.8cm、重量 5.41 g。SI-73 から出土した。

〔補記〕

小山市・八幡根遺跡では、各竪穴建物跡から出土した多量の焼成粘土塊を土師器生産に伴うものと仮定している（同一調査区内に所在する土師器焼成遺構，土師器未製品との関係性から，内山 1997）。本遺跡でも、このことを念頭において整理作業を進めたが（静止糸切り痕跡が残る土師器底部破片〔SK-75・2, SI-82・5〕が出土していることを発見したのを契機として）、遺構はもちろん、未製品の破片すら確認できなかった。

なお、本遺跡では、カマドならびに竪穴の廃絶時に何らかの破碎が多々行われている（本書「Ⅲ-2 遺構」併照）。本遺跡の焼成粘土塊群は、むしろ、カマド破碎行為に伴うものと推定したほうが妥当なようである（津野氏、御教示含む）。

k. 鉄滓（第 179 図）

- 1 は全長 4.7cm、幅 2.8cm、重量 23.90 g。SI-1 覆土出土。
2 は全長 6.1cm、幅 5.4cm、重量 106.63 g。SI-1 覆土出土。
3 は全長 3.4cm、幅 2.3cm、重量 20.28 g。SI-8 覆土出土。
4 は全長 3.7cm、幅 3.2cm、重量 35.06 g。SI-21 覆土出土。
5 は全長 2.6cm、幅 2.5cm、重量 18.85 g。SI-24 覆土出土。
6 は全長 5.7cm、幅 4.3cm、重量 37.13 g。SI-40 № 3（出土位置については第 42 図併照）。
7 は全長 6.1cm、幅 4.5cm、重量 52.16 g。SI-41 覆土出土。

8は全長 3.5cm、幅 2.5cm、重量 12.75 g。SI-41 覆土出土。

9は全長 5.5cm、幅 4.5cm、重量 62.92 g。SI-41 № 16(出土位置については第 43 図併照)。

10は全長 5.6cm、幅 4.4cm、重量 49.61 g。SI-58 覆土出土。

11は全長 12.1cm、幅 7.9cm、重量 380.03 g。SI-58 № 7(出土位置については第 55 図併照)。

12は全長 5.2cm、幅 3.6cm、重量 21.01 g。SI-58 覆土出土。

13は全長 3.5cm、幅 2.2cm、重量 16.46 g。SI-61 覆土出土。

14は全長 5.1cm、幅 4.6cm、重量 45.00 g。SI-64 覆土出土。

〔補記〕

ほとんどが、くるま橋遺跡編年 4～5b 期の竪穴建物跡からの出土である (SI-1 は 6 期だが、混入品の可能性あり)。なお、本遺跡では上記鉄滓 11 点以外、鉄づくりに関わる遺構・遺物は皆無である。鉄製品修繕程度の野鍛冶が、この時期行われていたのであろう。

I. 金属製品 (第 180・181 図)

1・2 は鉄鏃。1 は鏃身部の一部と柄の末端が欠損する。現存長 8.8cm、最大幅 3.4cm、重量 17.08 g。SI-70 № 2 出土 (出土位置については第 67 図併照)。なお、1 は 9 世紀前半の長三角形Ⅲ式に相当しよう (津野 2011 ほか, 585 頁)。

2 は鉄鏃の柄部分破片。現存長 6.9cm、最大幅 1.4cm、重さ 6.54 g。SI-84 № 3 出土 (出土位置については第 72 図併照)。

3～19 は刀子。3 は刀子が鞘に入った状態のもの。おそらく文筆用品であろう。現存長 13.9cm (うち鞘部分は 12.4cm)、最大幅 2.3cm、重量 37.06 g。なおレントゲン撮影をしたところ鞘内に刃部の一部が 5.2cm ほど残存していることが明らかになった。SI-47 № 5 出土 (出土位置については第 48 図併照)。

4 は刀子の刃部切っ先破片。現存長 1.2cm、最大幅 2.8cm、重量 2.15 g。SI-57 № 15 出土 (出土位置については第 54 図併照)。5 の左側破片は刀子柄部分と思われる。現存長 1.9cm、最大幅 0.8cm、重量 0.75 g。同右側破片は刀子刃部。現存長 7.4cm、最大幅 1.3cm、重量 7.61 g。SI-27 № 5 出土 (出土位置については第 32 図併照)。

6 の左側は刀子の刃部破片。現存長 3.6cm、最大幅 1.2cm、重量 4.17。I4 グリッドから出土。同右側は刃部切っ先側破片。現存長 4.6cm、最大幅 1.1cm、重量 3.66 g。SI-39 出土。

7 の左側破片は刀子の柄部茎から刃部切区にかけての破片。現存長 3.0cm、最大幅 1.5cm、重量 4.62g。同右側は刀子の刃部 (部分破片)。現存長 5.0cm、最大幅 1.7cm、重量 7.10 g。SK-75 出土。

8 は刀子の柄部茎尻付近から刃部にかけての破片。現存長 11.3cm、最大幅 1.8cm、重量 20.18g。SI-7 のカマド手前から出土した (出土位置については第 16 図併照)。

9 は刀子の刃部で刃区付近が折り曲げられたもの。現存長 8.6cm、幅 1.4cm、重量 11.84 g。SI-61 覆土出土。

10 の左側破片は現存長 5.7cm、最大幅 1.3cm、重量 5.25 g。調査区一括品。

11 の左側破片は刀子の柄部茎破片。7 の左側破片は刀子の柄部茎。現存長 2.8cm、最大幅 1.0cm、重量 1.67 g。同右側は刀子の刃部切っ先側破片。現存長 4.7cm、最大幅 1.6cm、重量 5.81 g。SI-26 覆土出土。

12 の左側破片は刀子の柄部・刃部境、茎付近の破片。現存長 3.6cm、最大幅 1.4cm、重量 2.26 g。同右側は刀子の刃部破片。現存長 2.0cm、幅 1.1cm、重量 2.02 g。SI-67 № 12 出土 (出土位置については第 65 図併照)。

13 の左側破片は刀子の柄部茎破片。現存長 5.5cm、最大幅 1.3cm、重量 5.07 g。同中央は刃部破片。現存長 3.2

Ⅲ. 調査成果

cm、最大幅 1.1cm、重量 2.52 g。同右側は刀子の刃部切っ先側破片。現存長 1.8cm、最大幅 0.8cm、重量 0.63 g。SI-29 覆土出土。

14・15 は刀子の刃部破片。14 は現存長 7.4cm、最大幅 1.3cm、重量 11.67 g。SI-59 A 覆土出土 (出土位置については第 56 図併照)。15 は現存長 5.1cm、最大幅 2.1cm、重量 10.59 g。SI-38 貼り床面出土。

16・18 は刀子の柄部茎破片。16 は現存長 4.7cm、最大幅 1.4cm、重量 7.84 g。SI-62 覆土出土。18 は現存長 3.7cm、最大幅 1.3cm、重量 2.38 g。SI-65 覆土出土。

17 は刀子の柄部破片。現存長 3.7cm、最大幅 1.0cm、重量 2.53 g。SI-59 覆土出土。19 も刀子の柄部破片であるが木柄痕跡が付着する。現存長 4.6cm、最大幅 1.7cm、重量 6.05 g。SI-24 覆土出土。

22 は小刀の刃部切っ先付近破片。現存長 13.5cm、最大幅 2.7cm、重量 32.47 g。SI-7 № 4 出土。

20・21 は鉄製鎌。20 の左側は先部分の破片。現存長 8.6cm、最大幅 3.7cm、重量 34.36 g。同右側は腰付近の破片。21 は現存長 6.2cm、最大幅 3.7cm、重量 13.33 g。いずれも SI-59 № 14 (出土位置については第 56 図併照) で、7 世紀中葉から 8 世紀後葉にかけての時期の鉄製鎌の特徴を有している (津野 2011 ほか文献, 585 頁)。

23 は鉄製 U 字形鍬の刃先破片。現存長 13.5cm、最大幅 3.8cm、重量 76.60 g。SI-68 カマド № 1 出土 (出土位置については第 66 図併照)。

24 ～ 33 は鉄釘である。24 は現存長 4.0cm、最大幅 1.0cm、重量 4.07 g。SI-58 № 15 出土 (出土位置については第 55 図併照)。

25 は現存長 4.8cm、最大幅 1.0cm、重量 3.64 g。SI-1 № 9 出土 (出土位置については第 11 図併照)。

26 は現存長 3.9cm、最大幅 1.0cm、重量 4.14 g。SI-27 覆土出土。

27 は現存長 3.6cm、最大幅 1.0cm、重量 4.49 g。SI-20 № 4 出土 (出土位置については第 23 図併照)。

28 は現存長 3.0cm、最大幅 0.8cm、重量 2.29 g。SI-61 覆土出土。

29 は現存長 1.0cm、最大幅 5.8cm、重量 4.51 g。SI-24 覆土出土。

30 は現存長 3.5cm、最大幅 0.7cm、重量 2.69 g。SI-67 № 11 出土 (出土位置については第 65 図併照)。

31 は現存長 6.5cm、最大幅 2.9cm、重量 5.69 g。SI-38 覆土出土。

32 は現存長 3.7cm、最大幅 1.1cm、重量 2.03 g。SI-40 覆土出土

33 は現存長 3.4cm、最大幅 0.8cm、重量 5.17 g。SI-67 № 5 出土 (出土位置については第 65 図併照)。

34 は鉄製釣り針と推定される。現存長 4.2cm、最大幅 1.0cm、重量 6.34 g。SI-68 から出土した。35 は環状鉄製品。現存長 5.6cm、最大幅 0.9cm、重量 12.40 g。SI-21 № 65 出土 (出土位置については第 24 図併照)。

36 は鉄製紡錘車 (推定長 14.1cm 以上)。36-1 は紡茎 (回転軸) と紡輪 (弾み車) が組み合う破片である (部位名称は東村 2011, 21 頁に従う)。紡茎の現存長 7.1cm、幅 0.5cm、紡輪径 5.1cm、重量 23.61 g。36-2 は紡茎下側の破片。現存長 7.0cm、幅 0.4cm、重量 4.65 g。SI-40 № 26 出土 (出土位置については第 42 図併照)。

37 も推定長が 12cm 以上であることから鉄製紡錘車の紡茎 (回転軸) と捉えた。37-1 は紡茎上側の破片と思われる。現存長 8.6cm、幅 0.8cm、重量 3.16 g。37-2 は紡茎下側の破片。現存長 3.4cm、幅 0.4cm、重量 1.31 g。SI-65 № 7・覆土出土 (出土位置については第 64 図併照)。

38 は金銅製毛彫金具。金銅板一枚造りし、馬具皮帯に直接鉗留したものである (ゆえ、本品には革帯から外された痕跡が鉗付近に残る)。縦軸の現存長 2.0cm、横軸 (幅) 2.6cm、厚さ 1mm、重量 1.92 g。SI-37 覆土から出土した。

39 の材質は不明 (X 線撮影の結果、断面投影ははっきりと出ている。アルミニウム製品ではなさそうである)。

装飾金具と推定される。重量 2.25g。山形部分の縦軸 1.4cm、横軸 3.0cm。柄部は折れ曲がる。付け根から端部まで現存長 1.4cm。なお山形部、柄部ともに鋳留め具（直径 6mm）が付着する。西区の N3 グリッドから出土。

40 は銅製煙管の雁首部分で小口部分が一部欠損している。現存長 7.9cm、太径 1.0cm、火皿径 1.7cm、高さ 2.7cm、重量 9.27g。G3 グリッド出土。

なお、これらのほか、十数点ほどの未実測鉄製品（錆による劣化が著しく原型を留めていないものや、小破片）が出土している

〔補記〕

概して、栃木県域の古代集落遺跡は金属製品の出土率が低い傾向にある。だが本遺跡では、刀子・鉄釘ばかりでなく、金銅製毛彫金具〔38〕のような希有品、文筆用品〔3〕、鉄製生産具〔20,21,23,34,36,37,40,41〕など数・種類とも比較的出土したほうである。これもまた、本遺跡の性格を考えていく上での一助となる。なお、金銅製毛彫金具は、もともとは、東日本の終末期古墳で出土する副葬品である（田中 1980）。だが、本来用途とは別の機能（金銅製毛彫金具の所持＝ステータス・シンボル性）が付加されたようで、後世に伝世することが稀にあると言う（津野氏、御教示）。

m. 銅造鍍金阿弥陀如来坐像（第 182・183 図）（註）

像高 8.9cm。光背や台座（蓮華坐）は欠損している。造像は、鑄造法により、表面を漆箔したのち、金箔を押し上げて仕上げている（6～8 世紀の金銅仏で多用されるアマルガム法ではなく、木彫仏と同じ造像技法を採用）のが特徴である。なお姿勢（側面形）は、そり身である。

螺髪を大きめに造るが、肉髻部と螺髪部の境や、肉髻珠（肉髻中央の円形文 .3D 写真画像で、かろうじて確認が可能）が明瞭ではない。なお螺髪表現は鑿により表されるが、後頭部は省略傾向にある。

顔は、全体的に、ふっくらとしている。目は半眼に表現されている（3D 写真画像で、かろうじて確認が可能）。耳朵は大きく、肩口まで及んでいる。鼻は太めでやや扁平気味である。口元は肉厚ながら引き締まり、上下の唇が、ほぼ水平に表されている。なお、本像は白毫が現状ではない（眉間の円形文、貼り付けてあったものが欠損ゆえかもしれない）。加えて、三道も肉眼では捉えることが難しい（顎部分に刻まれた三本の筋 .3D 写真画像で、かろうじて確認が可能）。

着衣は、大衣（衲衣）で両肩を覆う通肩表現を採用している（胸部は肌蹴ている）。両手は腹前で異形な阿弥陀定印（上品上生印）を表しているのが最大の特徴である（鑿打ち出しによる造形）。さらに足の組み方も、左足の上に右足をのせる「半跏趺坐」状を呈しているのも特色の一つである。なお大衣、裳（腰から脚を纏う衣）とも比較的こまめに衣文線（衣装の襞表現）を表そうとしている。

SI-1 の覆土 1 層から正位で出土した（本書「IV -4. 銅造鍍金阿弥陀如来坐像の位置付け」併照）。

〔補記〕

一般的な阿弥陀如来坐像（通形阿弥陀如来坐像）とは異なる衣の纏い方（通肩表現）、印相（特殊な阿弥陀定印）、足の組み方（「半跏趺坐」状を呈する）をしている。これらは京都・奈良方面で流行していた密教系阿弥陀如来像の特徴である。奈良県・當麻寺の木造宝冠阿弥陀如来坐像（伝・紅坡瑠璃阿弥陀如来）（奈良国立博物館 1983,57 頁）や、同県・大峰山寺本堂解体修理調査出土 純金製小型阿弥陀如来坐像（奈良県教育委員会 1986, 巻頭図版 3）などに似ていることから 10 世紀頃の造像で、地鎮めに用いられた可能性を指摘しておきたい（本書「IV -4. 銅造鍍金阿弥陀如来坐像の位置付け」併照）。

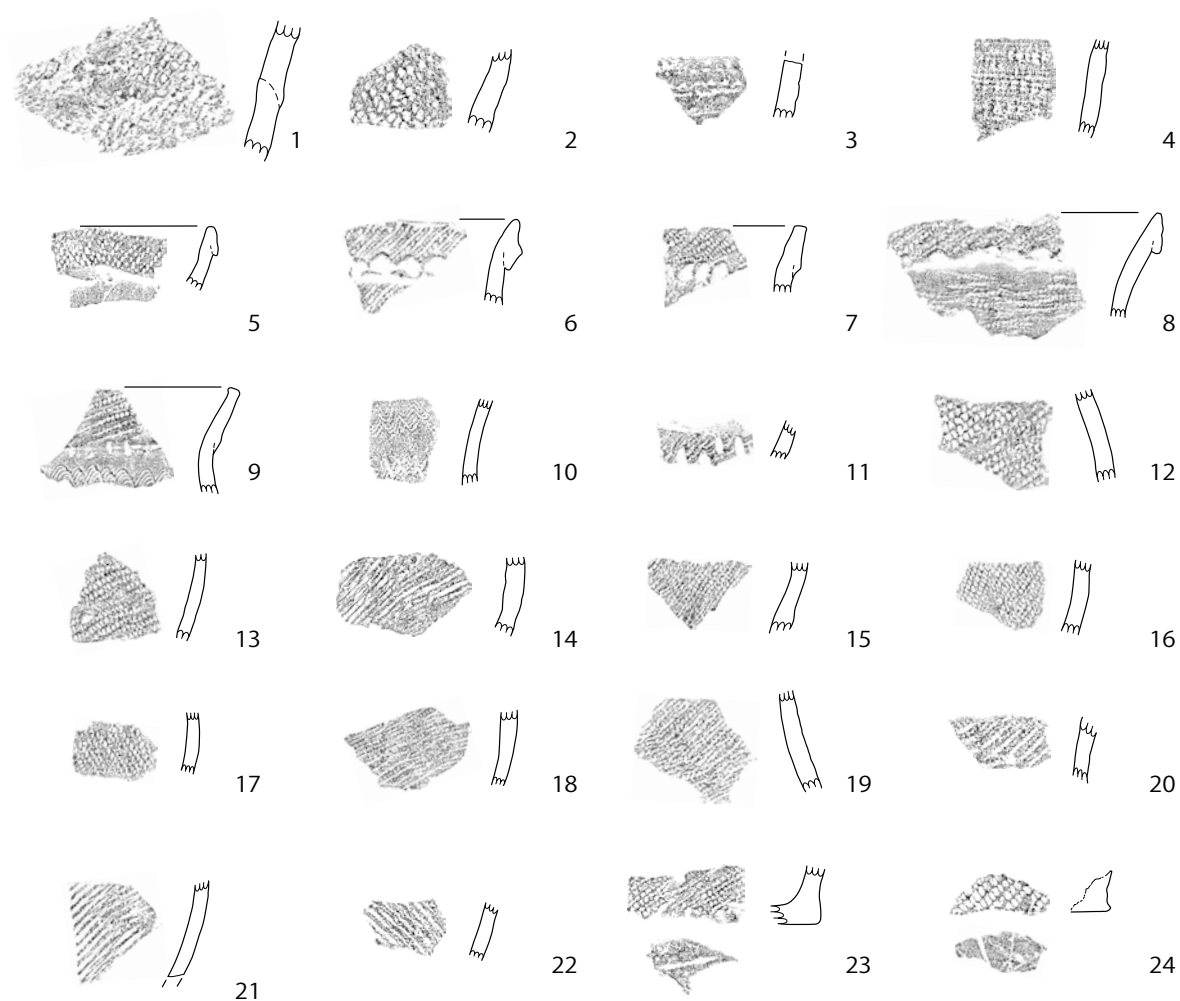
Ⅲ. 調査成果

註 浅井和春氏、北口英雄氏、深沢麻亜沙氏、本田諭氏の御教示、ならびに拙所見(本書 293～301 頁)をふまえて本頁を記した。

〔参考文献〕

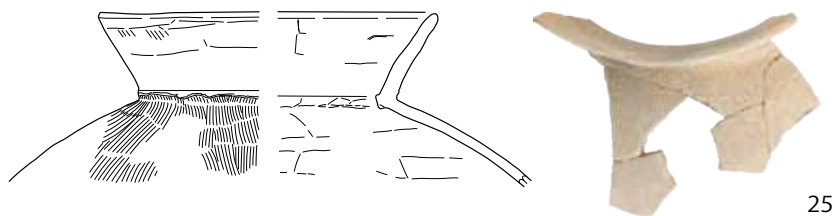
- 渥美賢吾 2011「シンポジウムⅢ 古代社会の分業をめぐる諸問題 茨城県の古代生業」『日本考古学協会 2011 年度栃木大会 研究発表資料集』一般社団法人日本考古学協会
- 植木茂雄・市川岳朗 2014『くるま橋遺跡』栃木県教育委員会・(公財)とちぎ未来づくり財団
- 内山敏行 1997『八幡根遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 田中新史 1980「東国終末期古墳出土の馬具―年代と系譜の検討―」『古代探叢―滝口宏先生古稀記念考古学論集―』
- 津野仁ほか 2011「シンポジウムⅢ 古代社会の分業をめぐる諸問題 栃木県の古代生業」『日本考古学協会 2011 年度栃木大会 研究発表資料集』一般社団法人日本考古学協会
- 津野 仁 1997「第7章 古代 第6節 遺物の研究 6. その他の遺物」『研究紀要』第15号―栃木県の 埋蔵文化財と考古学―、(公財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 津野 仁 2011『日本古代の武器・武具・馬具と軍事』吉川弘文館
- 津野 仁 2014『下野国分尼寺Ⅱ』栃木県教育委員会・(公財)とちぎ未来づくり財団
- 奈良国立博物館 1983『仏像のかたちと技法』仏教美術ハンドブック 1
- 奈良県教育委員会 1986『重要文化財 大峰山寺本堂修理工事報告書』
- 東村純子 2011『考古学からみた古代日本の紡織』六一書房
- 真鍋俊照編 2004『日本仏像事典』吉川弘文館
- 光森正士 1986『日本の美術』No.241 阿弥陀如来像、至文堂

縄文・弥生



0 1:3 5cm

古墳時代前期



25

0 1:4 8cm

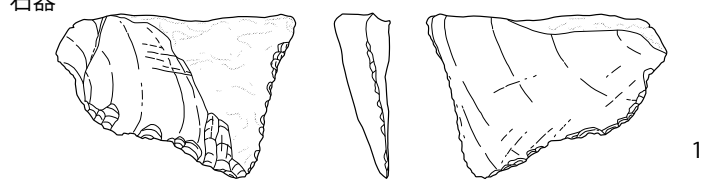
第 161 図 縄文・弥生土器、土師器甕

Ⅲ. 調査成果

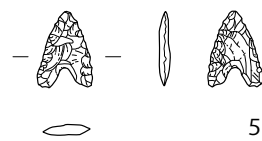


第 162 図 縄文・弥生土器写真

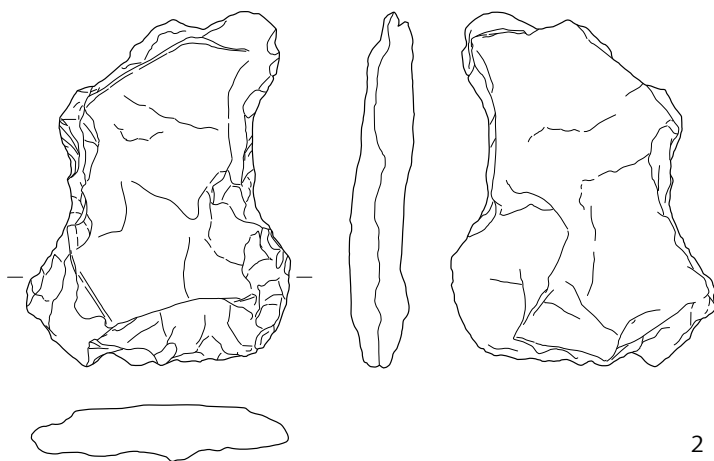
石器



1



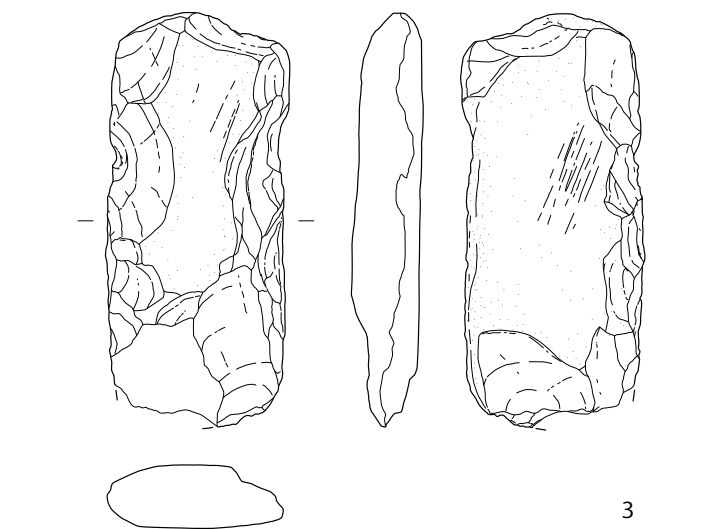
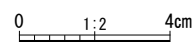
5



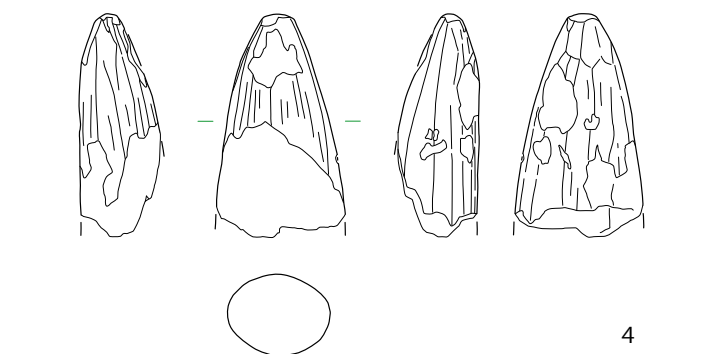
2



6

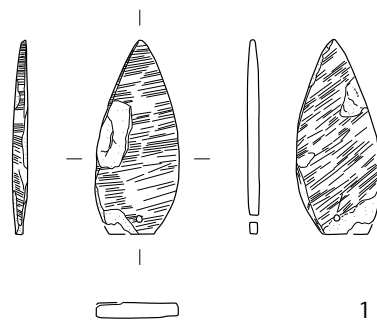


3

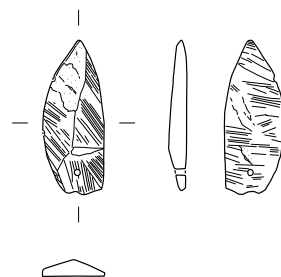


4

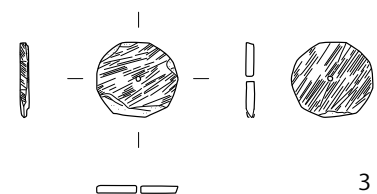
石製祭祀具



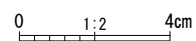
1



2



3



第 163 図 石器・石製祭祀具

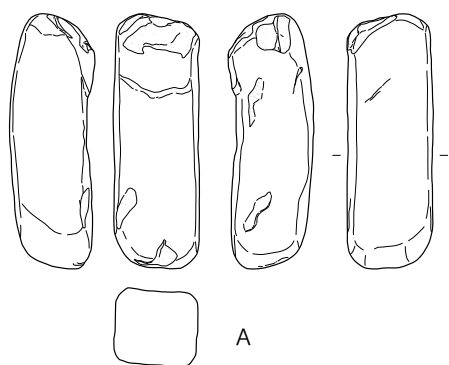
Ⅲ. 調査成果

石器

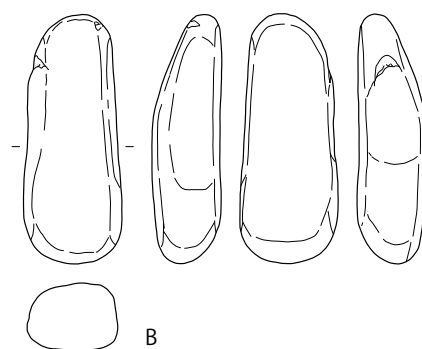


第 164 図 石器・石製祭祀具写真

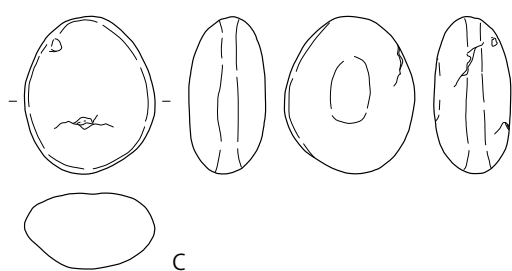
礫器 2 群展開図



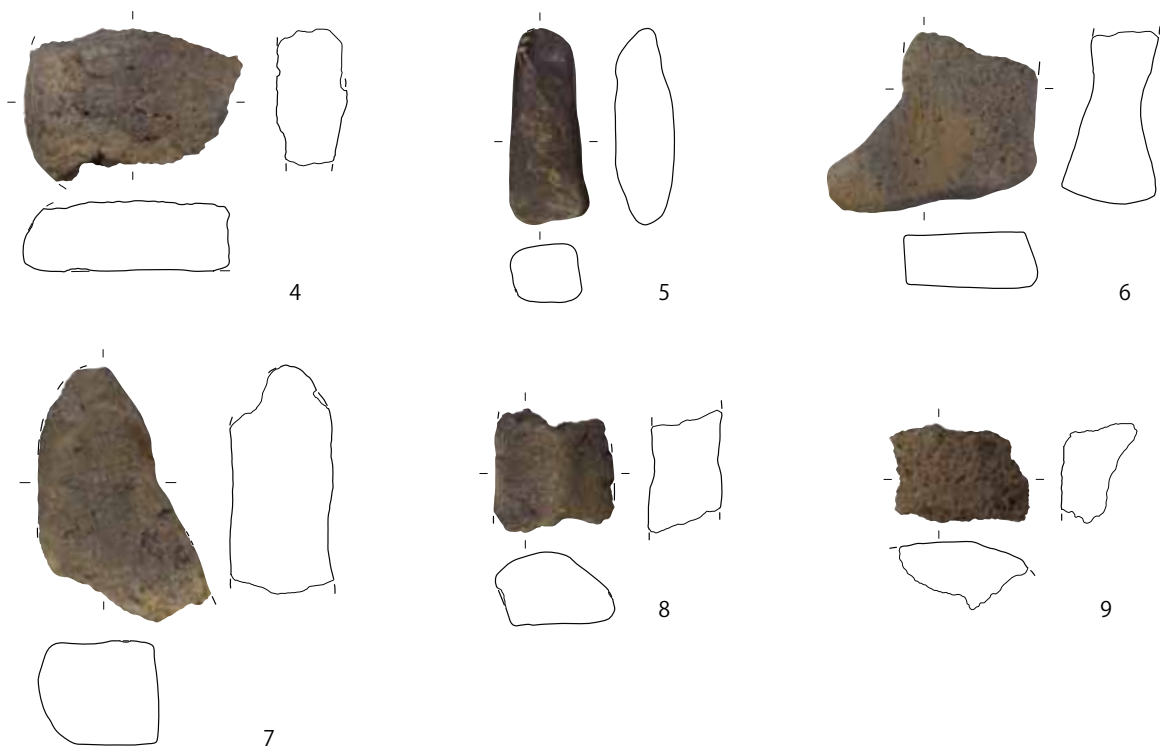
礫器 3 群展開図



礫器 4 群展開図



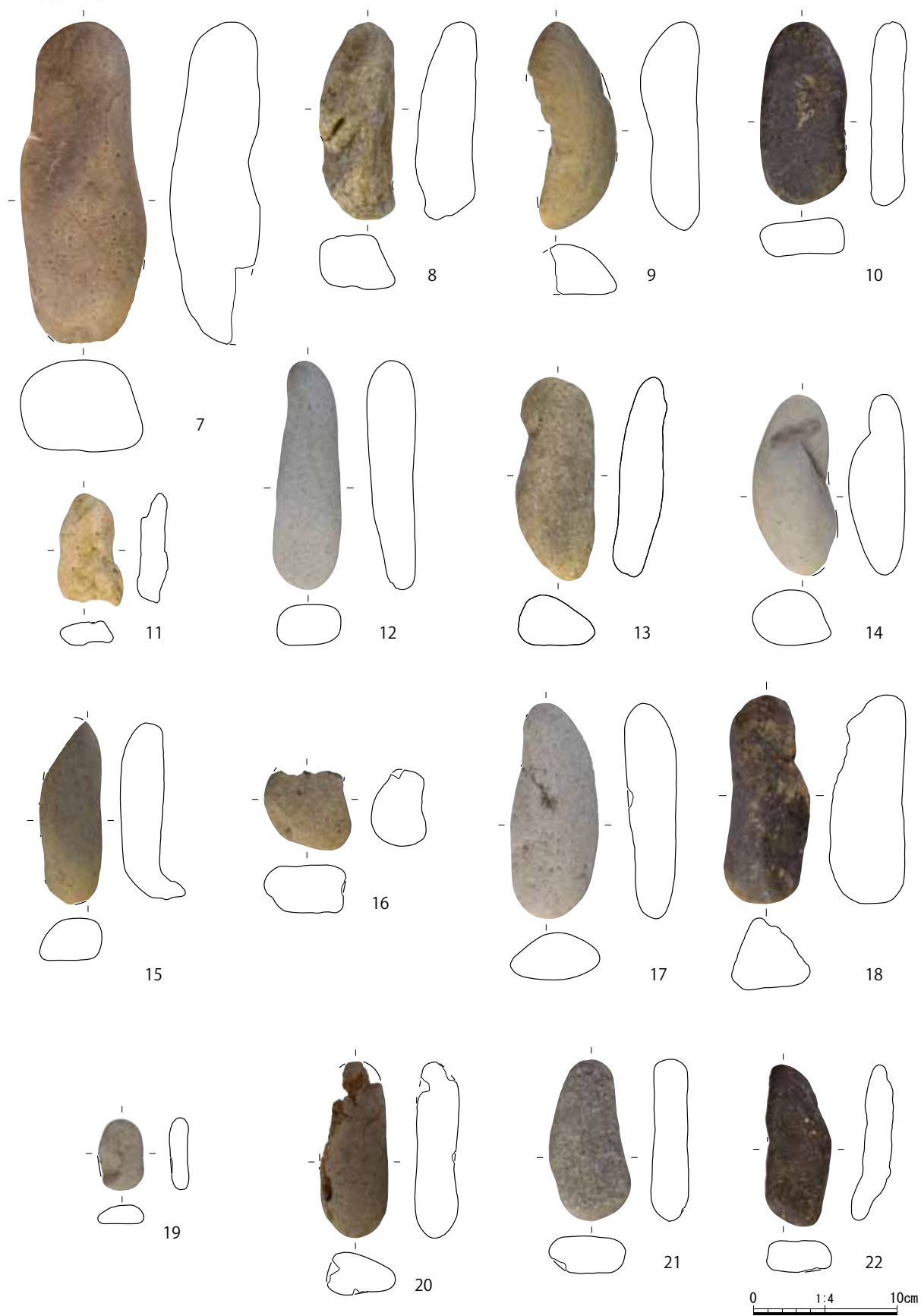
礫器 1 群



0 1:4 10cm

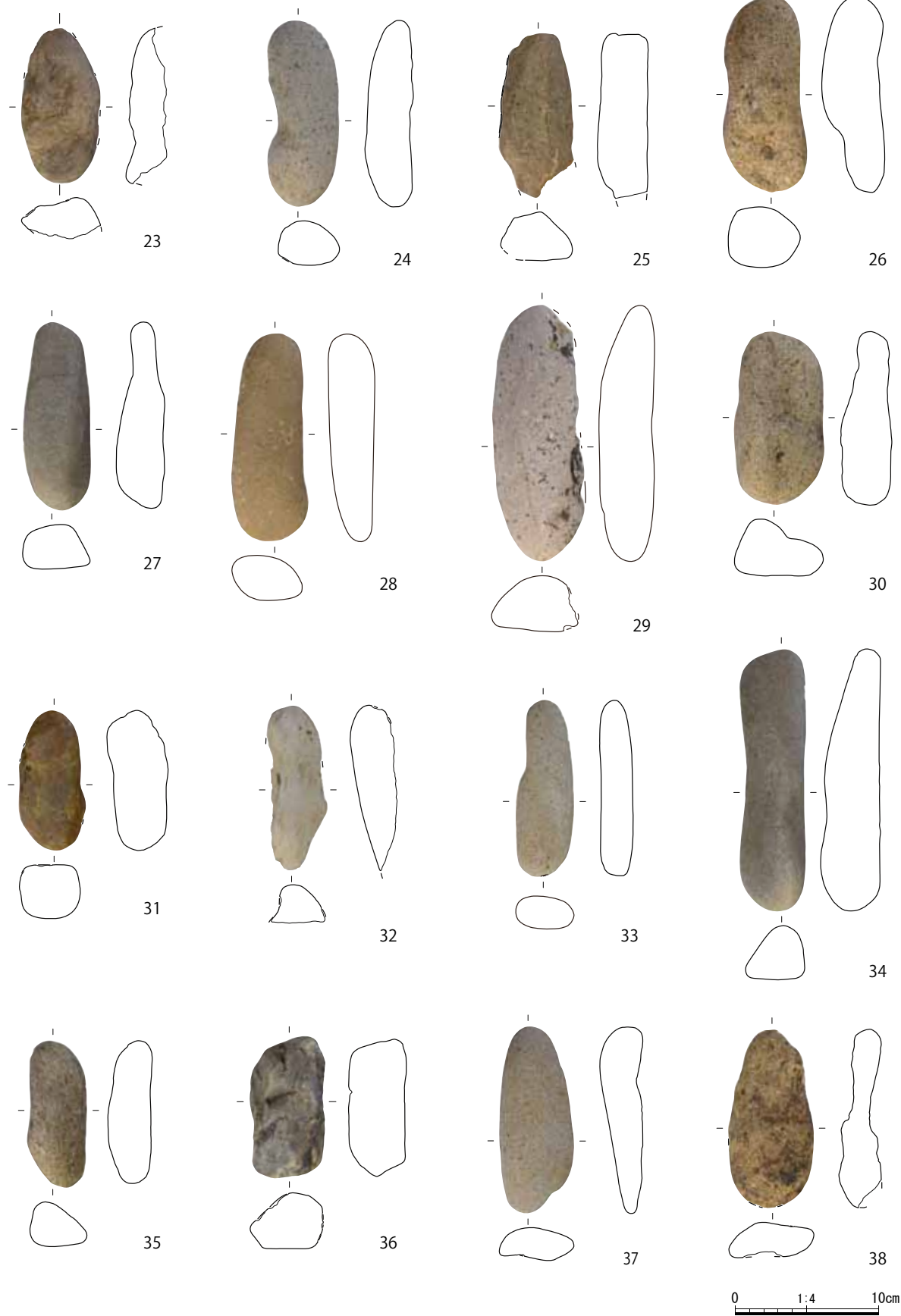
第 165 図 礫器展開図・礫器 1 群

礫器2群(1)



第166図 礫器2群(1)

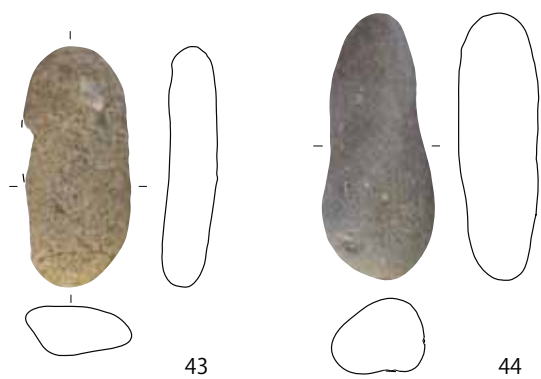
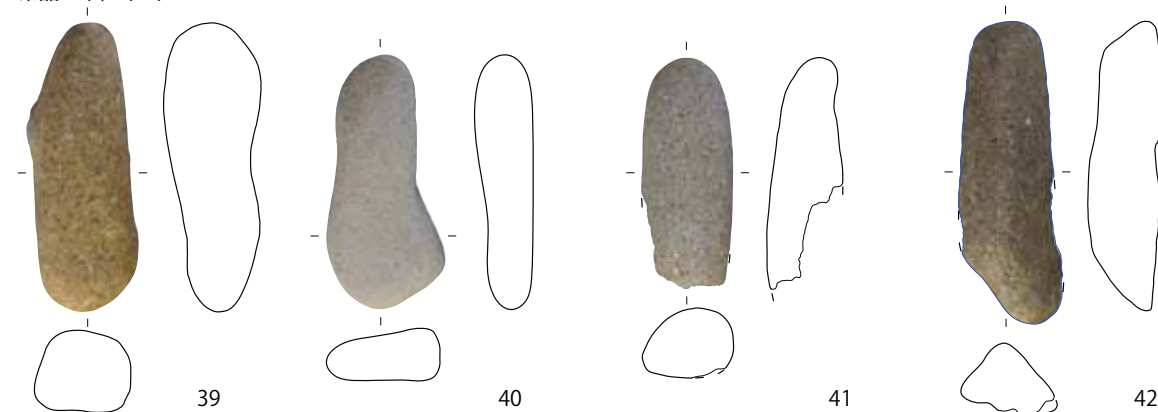
礫器 2 群 (2)



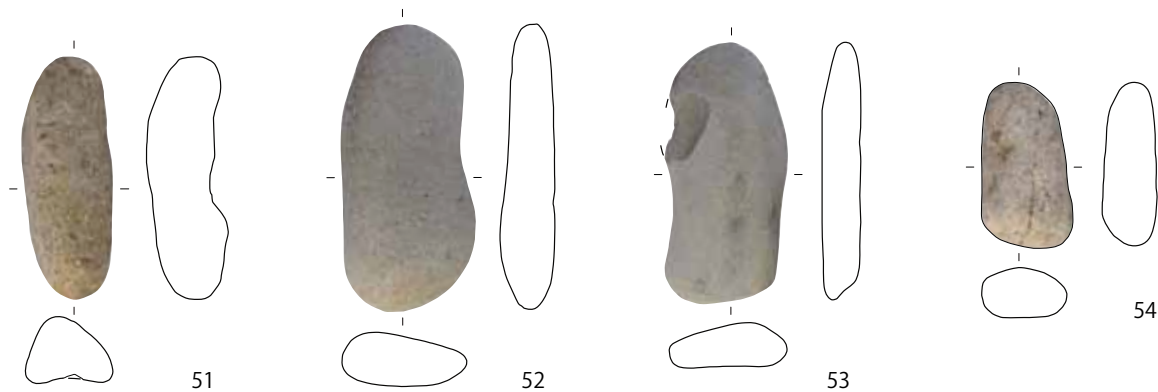
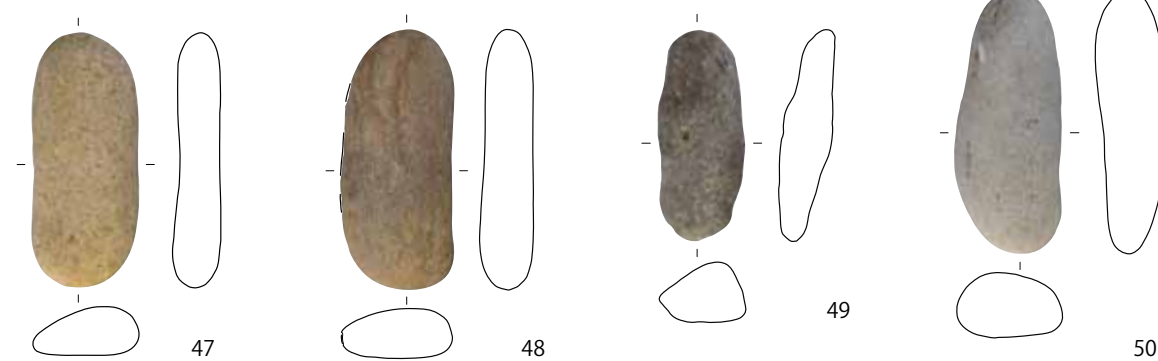
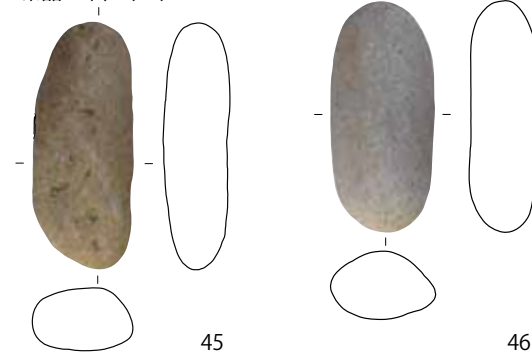
第 167 図 礫器 2 群 (2)

Ⅲ. 調査成果

礫器 2 群 (3)



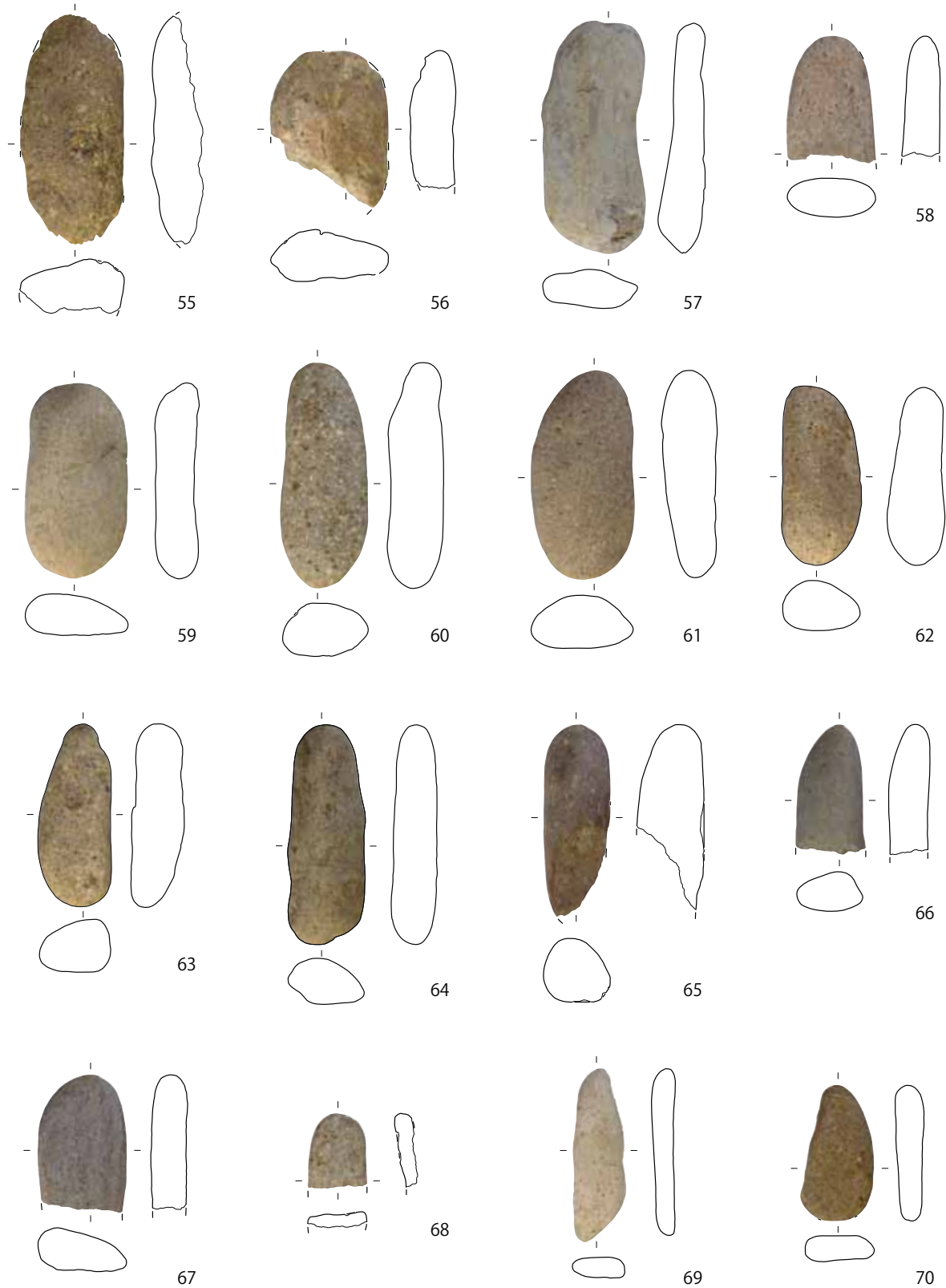
礫器 3 群 (1)



0 1:4 10cm

第 168 図 礫器 2 群 (3) ・ 3 群 (1)

礫器3群(2)

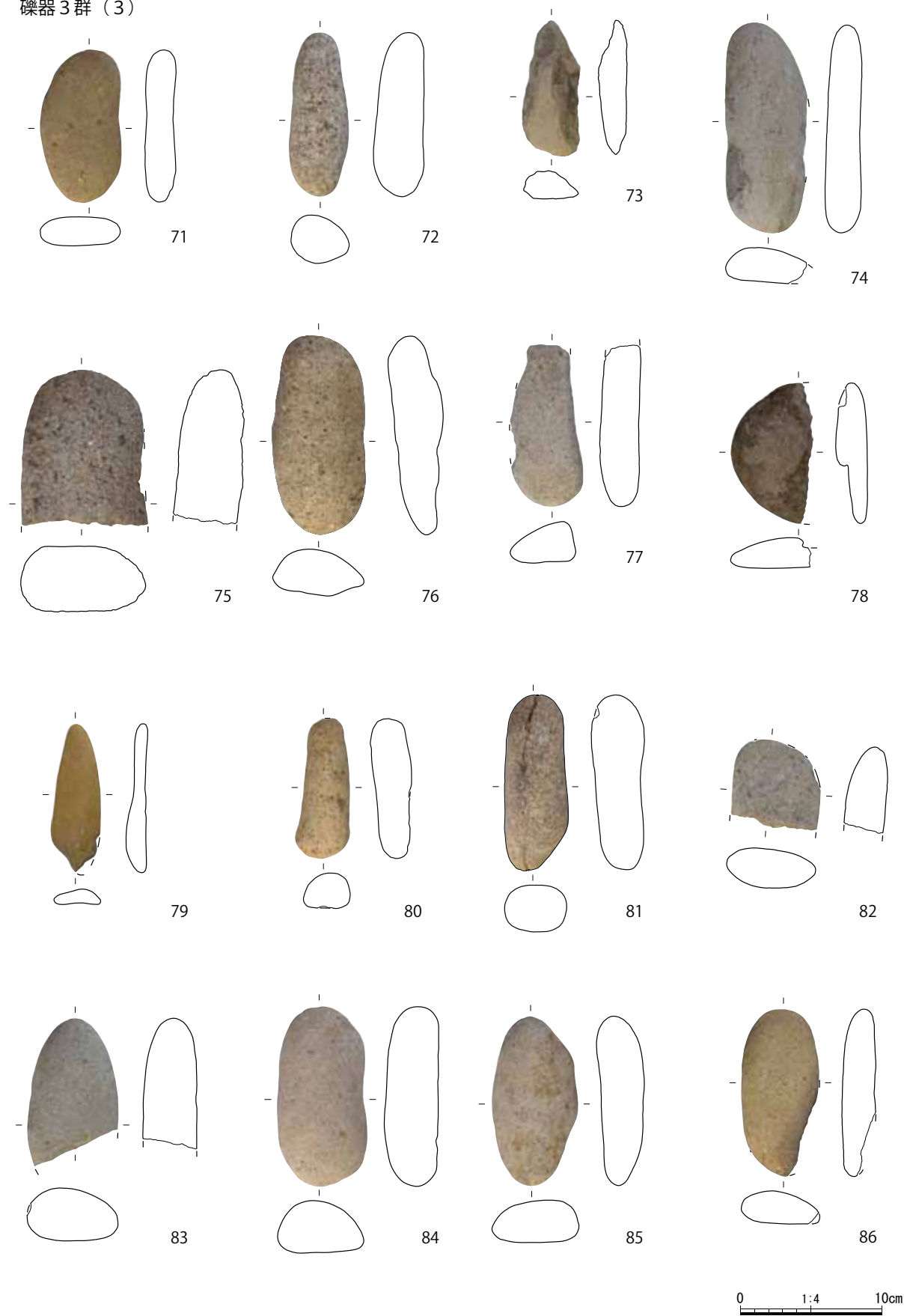


0 1:4 10cm

第169図 礫器3群(2)

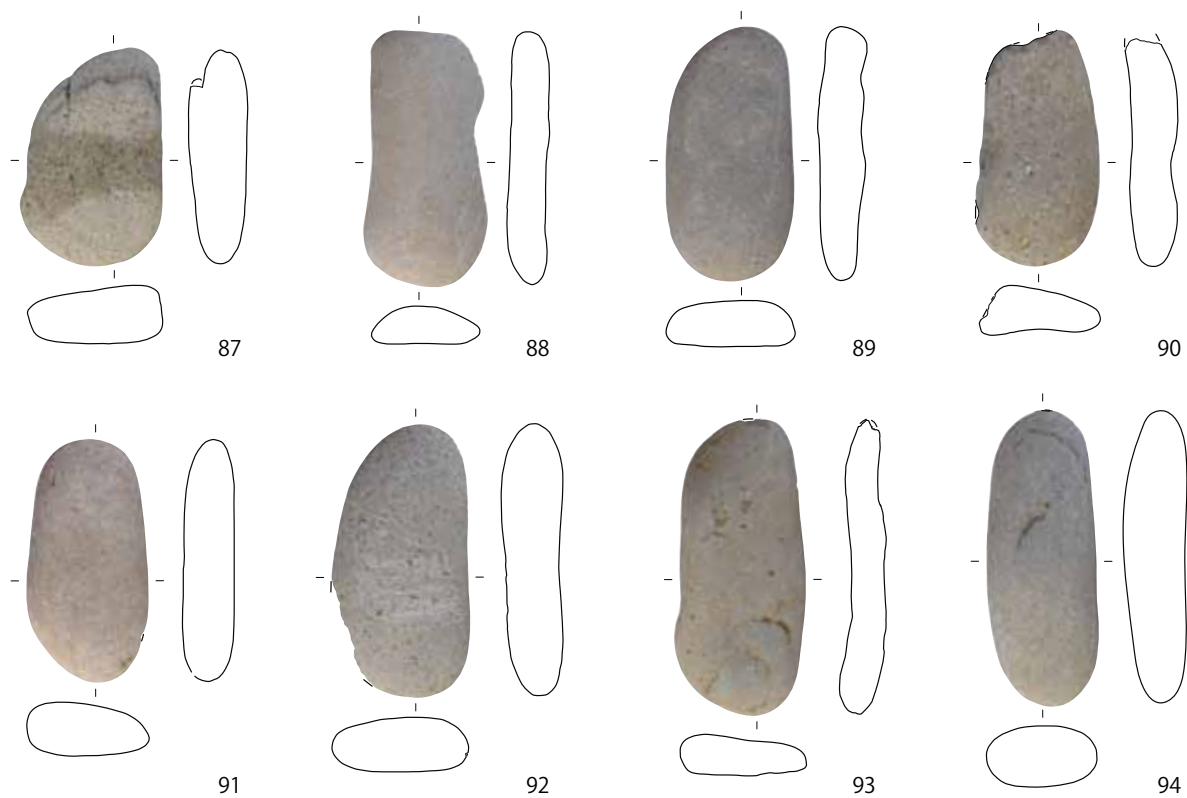
Ⅲ. 調査成果

礫器 3 群 (3)

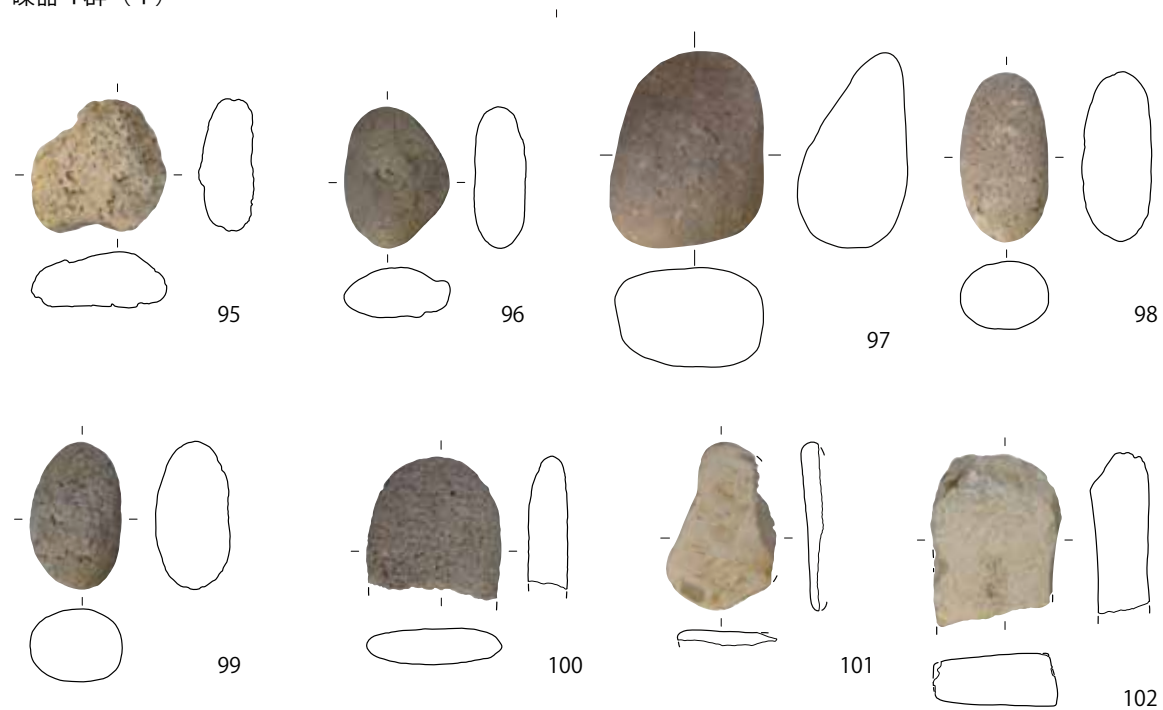


第 170 図 礫器 3 群 (3)

礫器 3 群 (4)



礫器 4 群 (1)

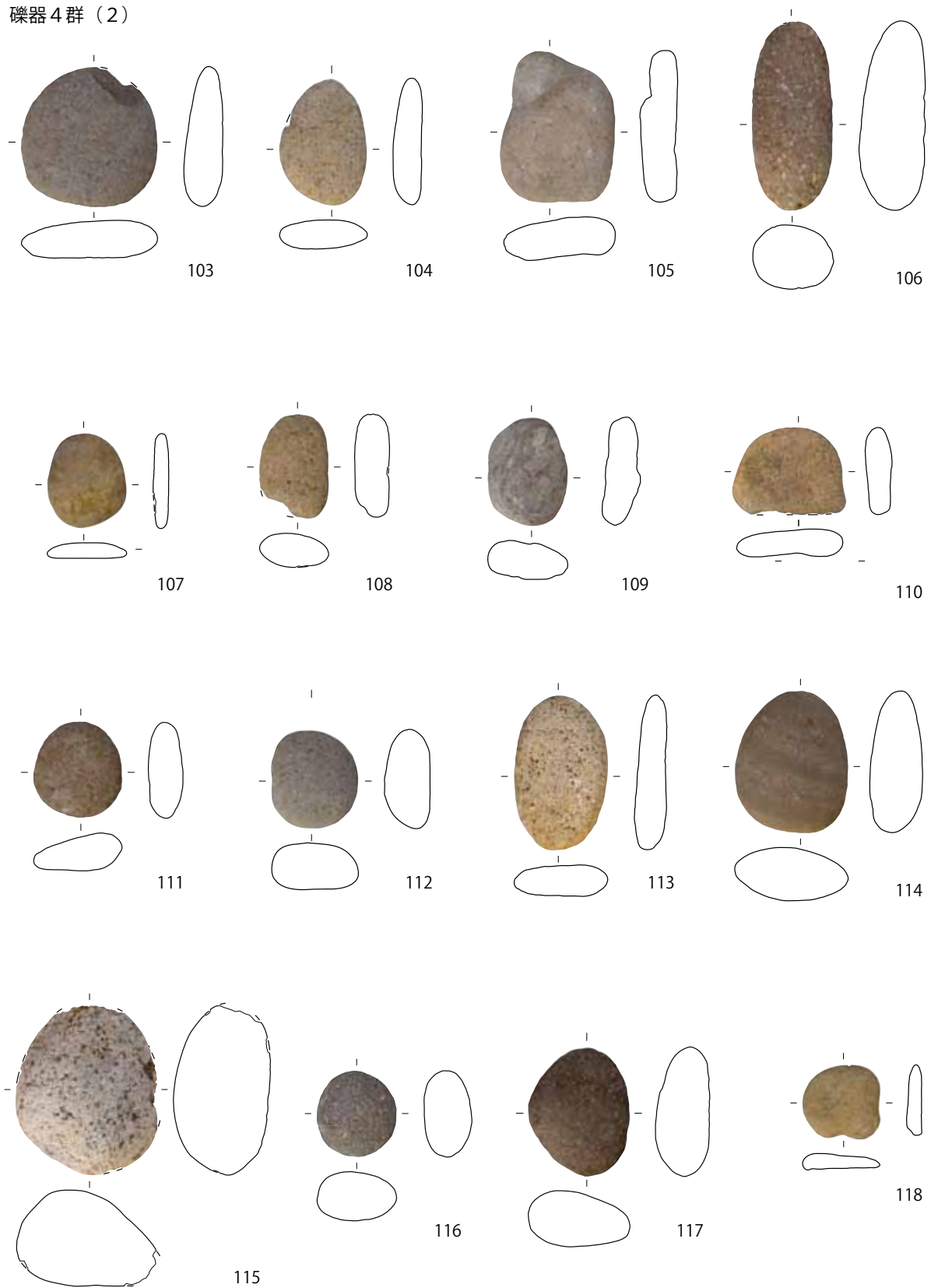


0 1:4 10cm

第 171 図 礫器 3 群 (4)・礫器 4 群 (1)

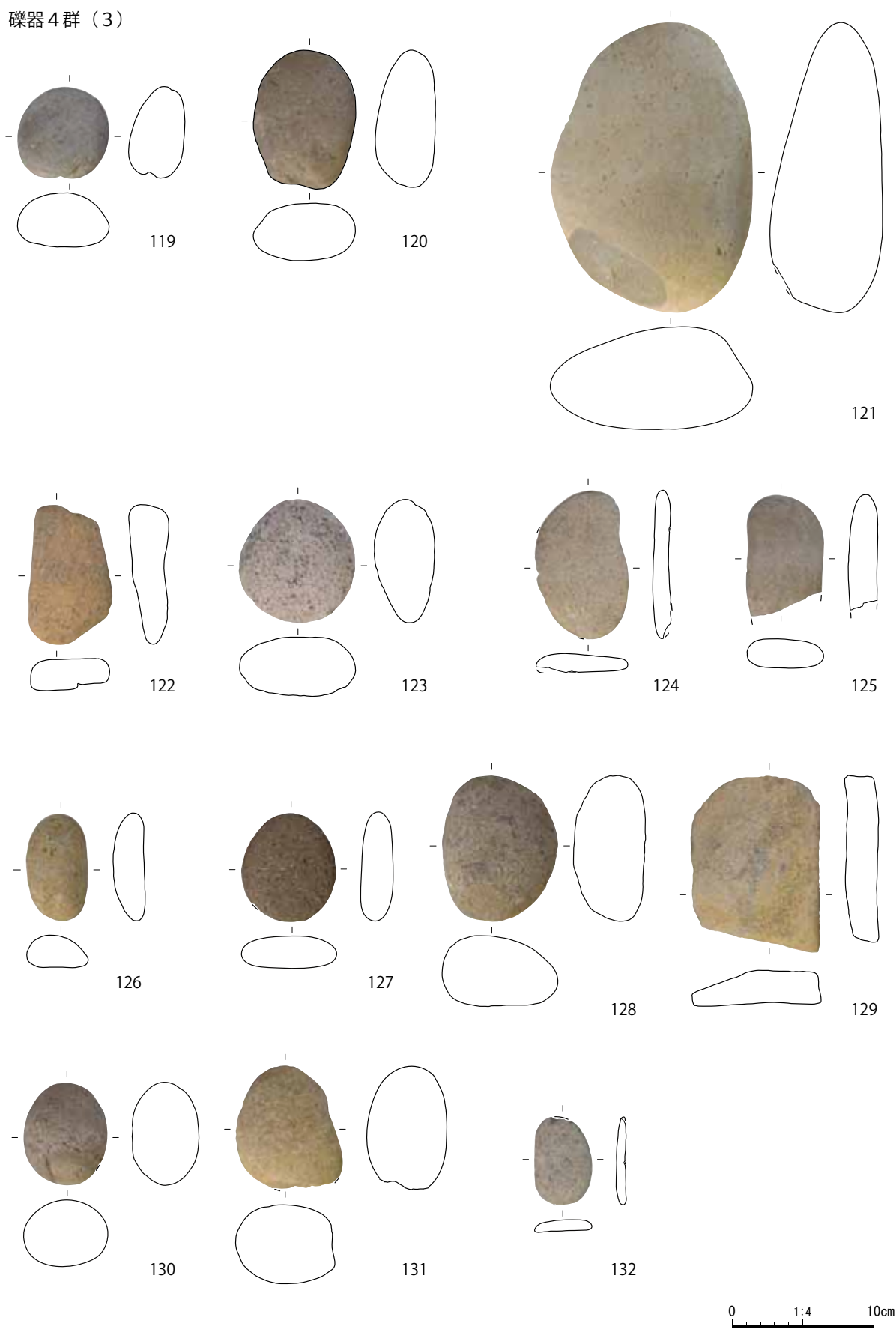
Ⅲ. 調査成果

礫器4群(2)



第172図 礫器4群(2)

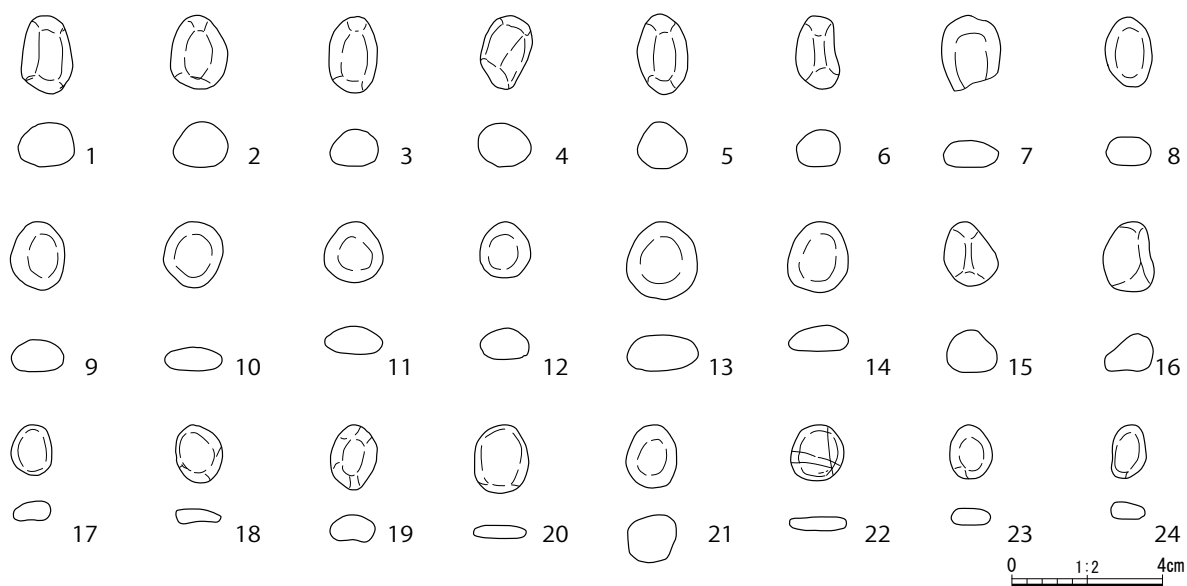
礫器 4 群 (3)



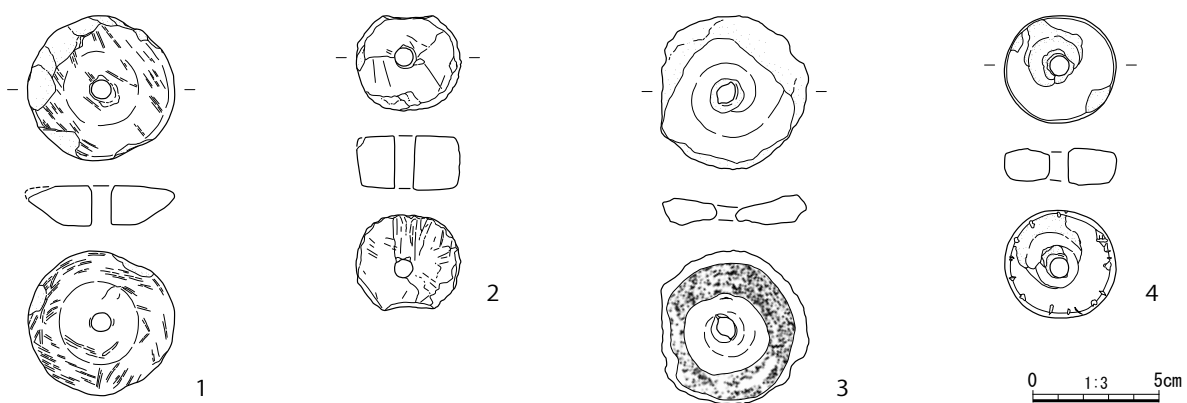
第 173 図 礫器 4 群 (3)

Ⅲ. 調査成果

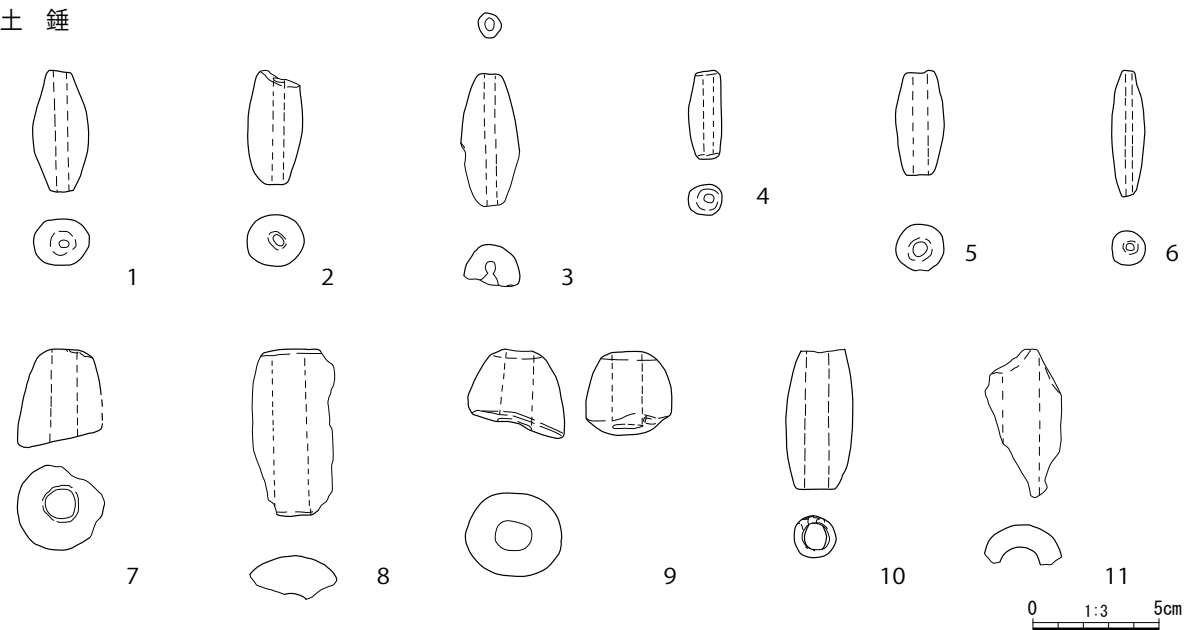
碁石



紡錘車



土 錘



第 174 図 碁石・紡錘車・土錘

基石



紡錘車



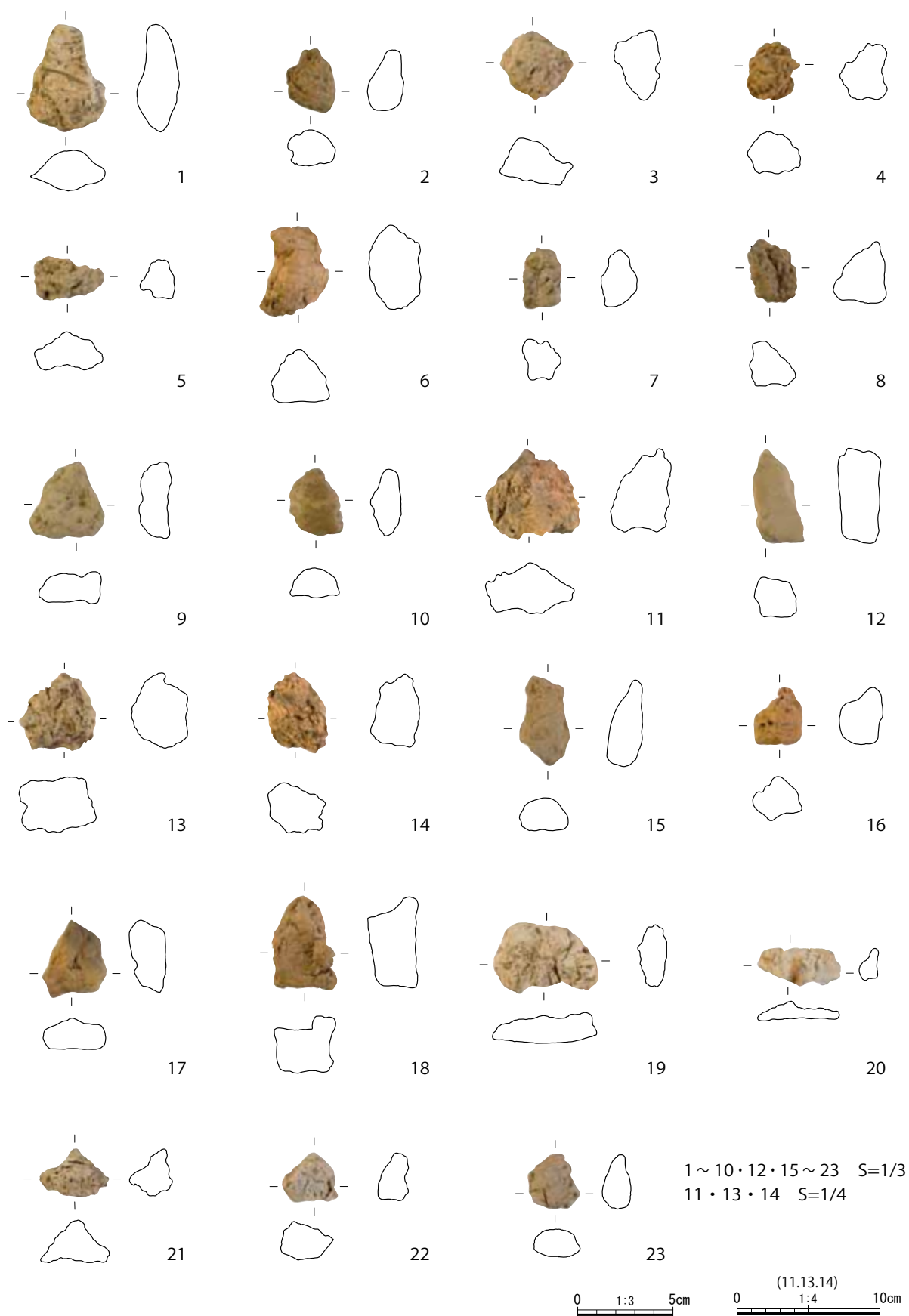
土 錘



第 175 図 基石・紡錘車・土錘写真

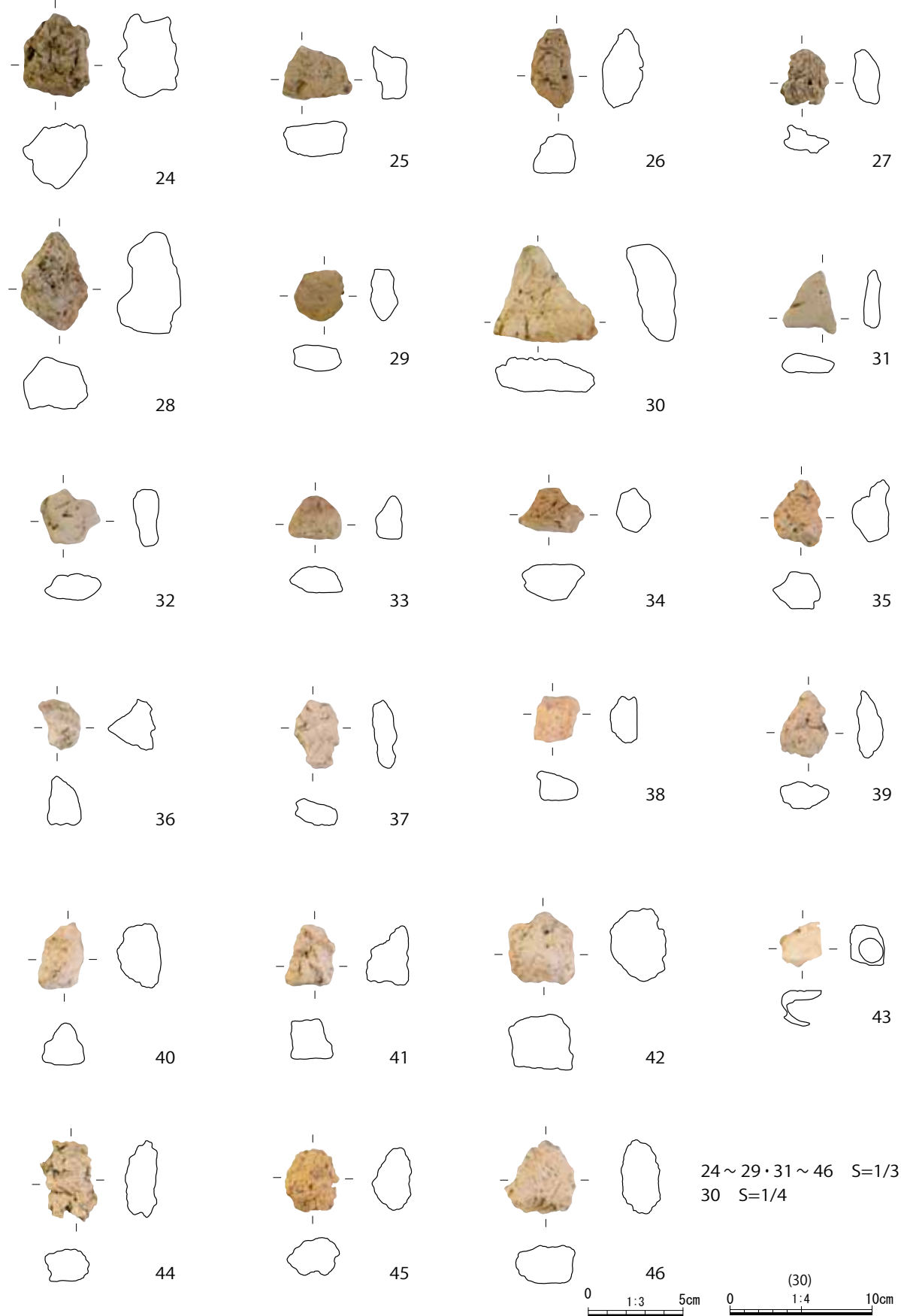
Ⅲ. 調査成果

粘土塊 (1)



第176図 粘土塊 (1)

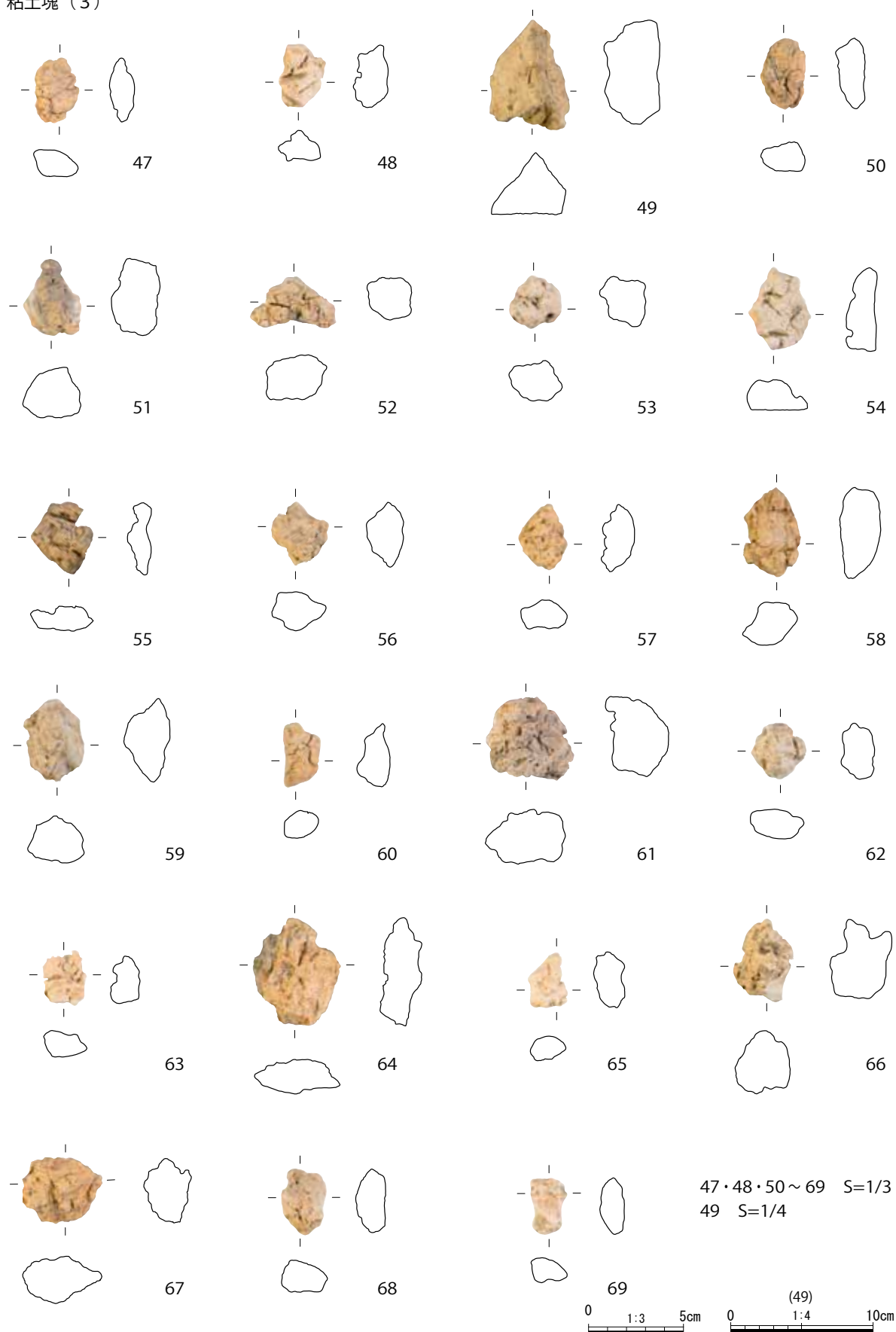
粘土塊 (2)



第 177 図 粘土塊 (2)

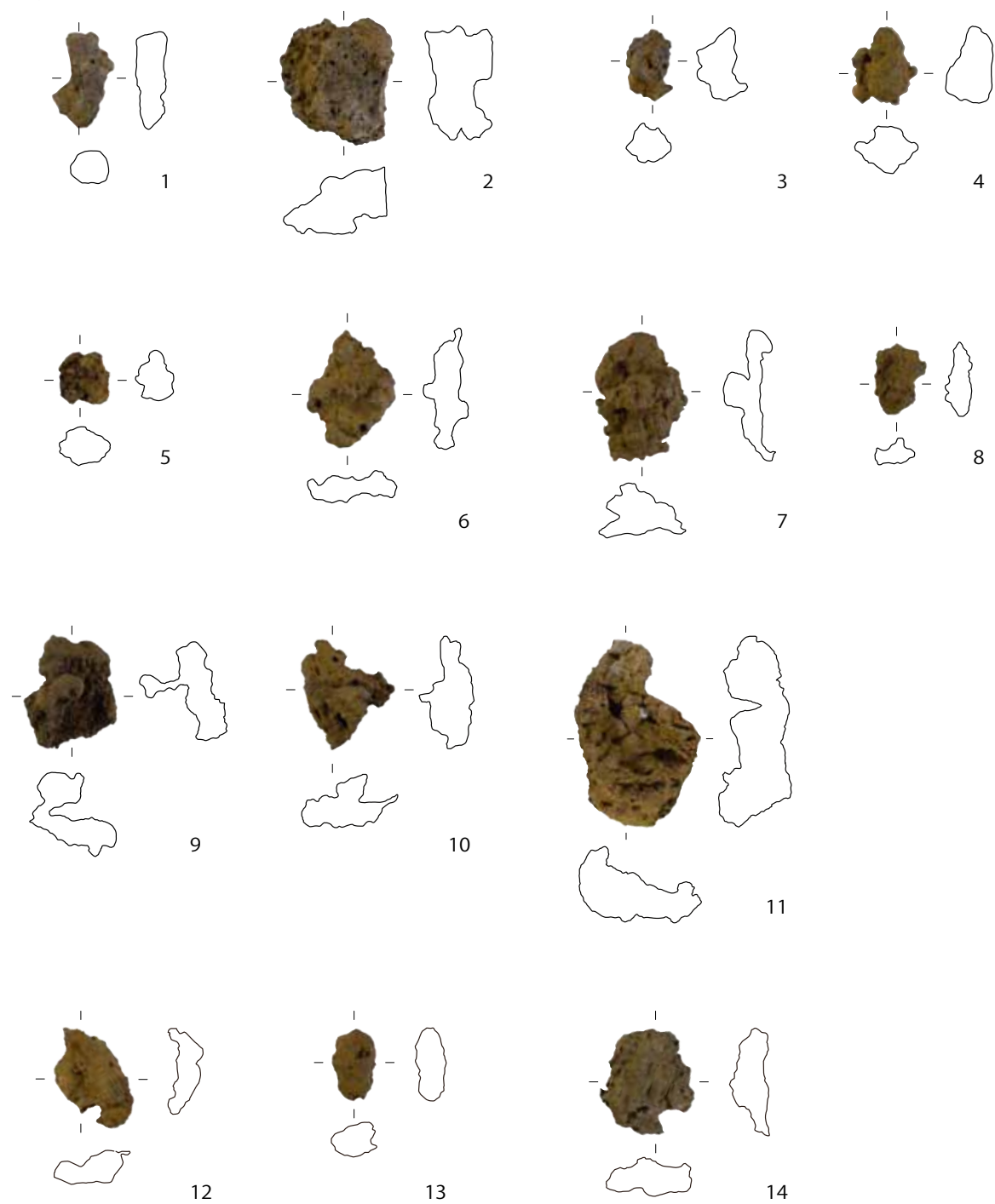
Ⅲ. 調査成果

粘土塊 (3)



第 178 図 粘土塊 (3)

鉄滓



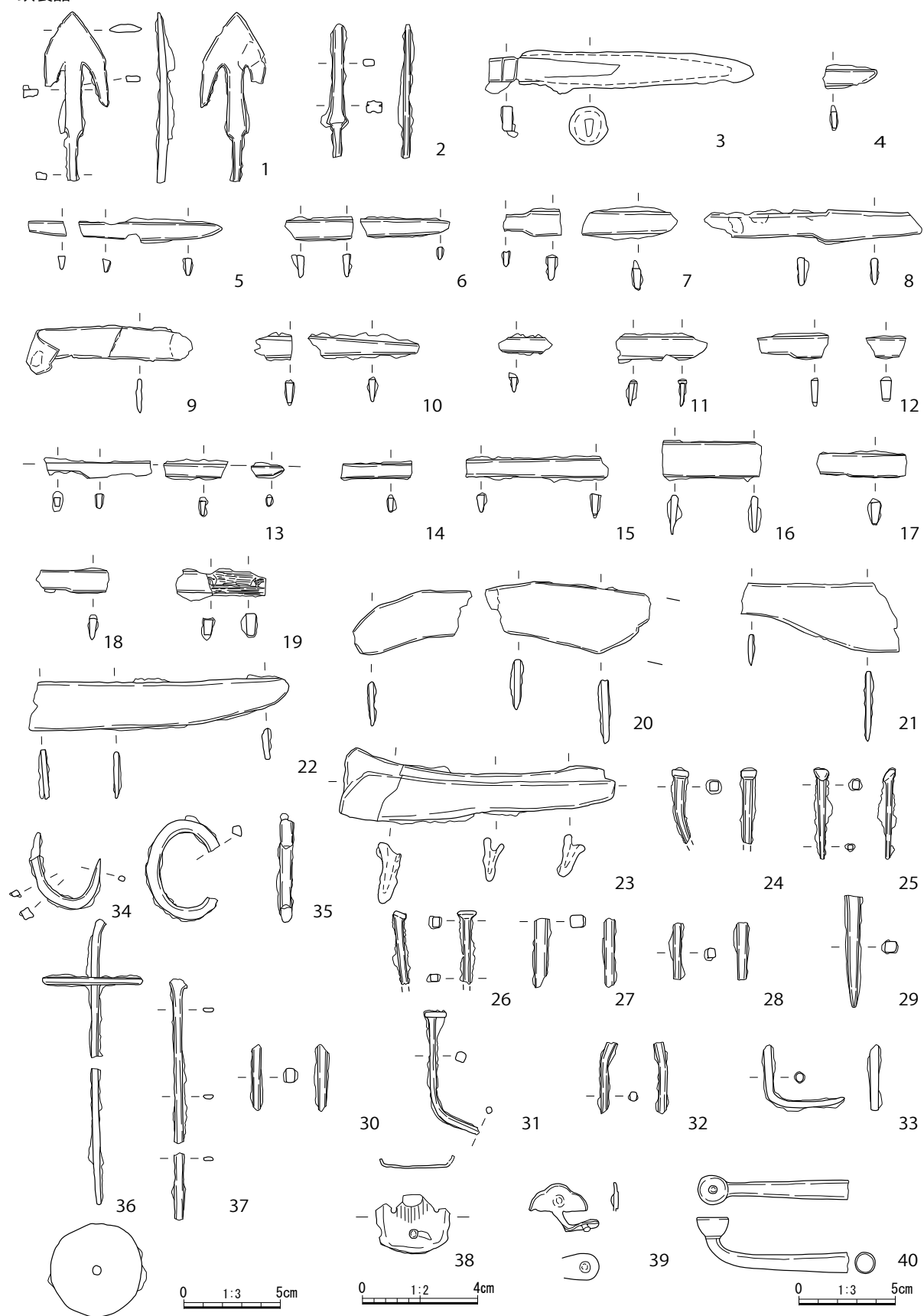
1 ~ 10・12 ~ 14 S=1/3
11 S=1/4

0 1:3 5cm

0 1:4 (11) 10cm

第179図 鉄滓

鉄製品



第180図 金属製品

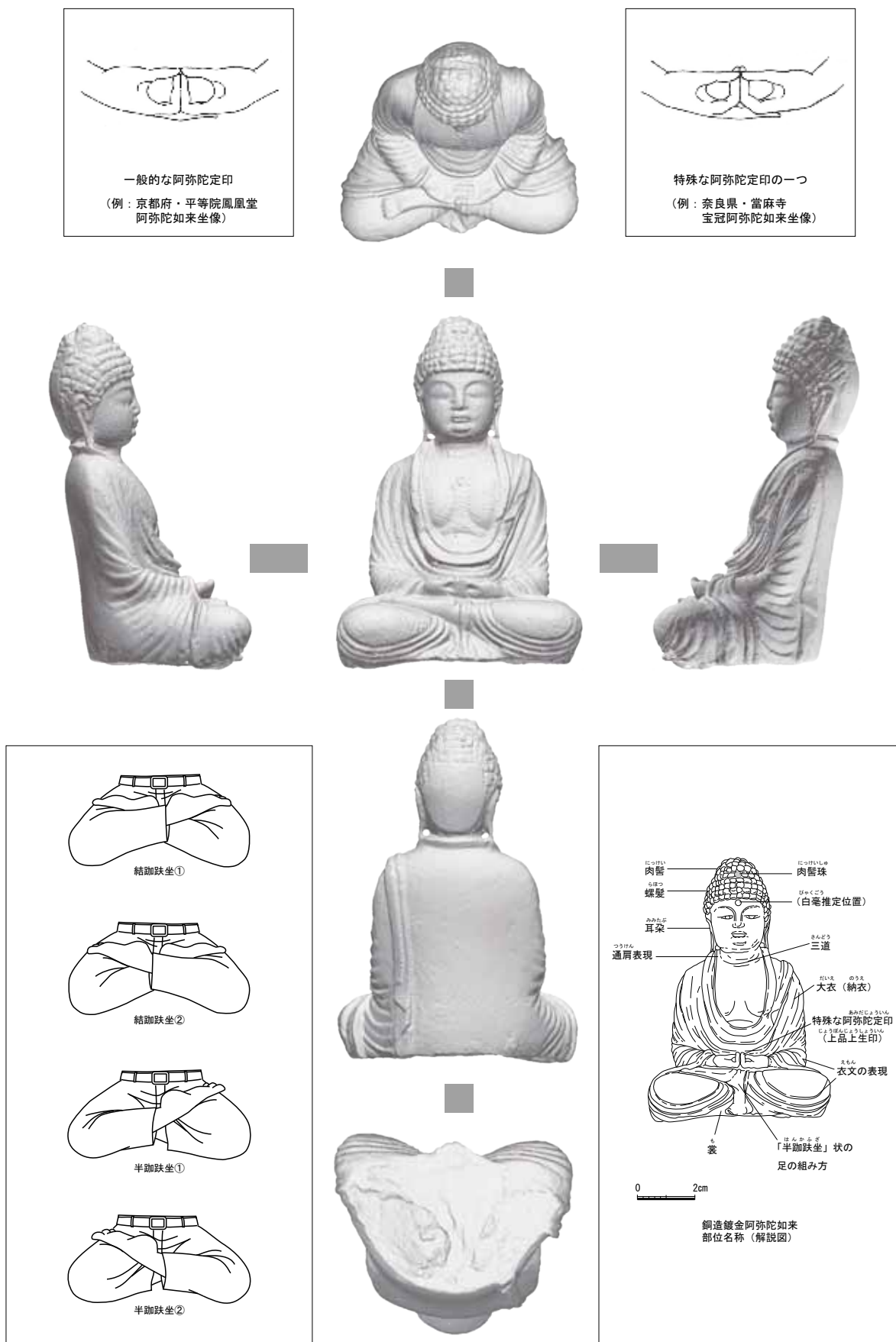
鉄製品



第181図 金属製品写真



第 182 図 銅造鍍金阿弥陀如来坐像写真 (S=2/3)



第 183 図 3D写真計測 銅造鍍金阿弥陀如来坐像 (S=2/3)

4. 小 結

a. 土器の編年的位置付け

ここでは従来の土器編年に照らし合わせて今回調査で出土した古代土器群の位置付けをはかってみたい。

1 期（5 世紀） 陶邑窯編年・TK-216 号窯段階の甗 [包 -1] が出土している。また土師器は、藤田編年・Ⅱ～Ⅳ期 (5c2/4 ～ 4/4) 頃と思われる碗 [SI64-3]、鉢 [SI64-2]、高坏 [SI39-3]、ハケメ調整球胴甗 [SI39-1] が出土している。

2 期（7 世紀中～後葉） 須恵器は、陶邑窯編年・TK-209 号窯段階の須恵器・坏身 [例 .SI57-1]、北関東型須恵器 [例 .SI2-8]、湖西窯産フラスコ型瓶 [例 .SI84-1] が出土している。また、統一新羅系土器と思われる陶質土器 [例 .包 -2・3] が出土している。一方、土師器は須恵器坏身の模倣土師器坏 [例 .SI84-3] や、半球形坏外反坏 [例 .SI82-5]、半球形直立坏 [例 .SI75-4] が出土している。また、他地域間交流を示す内湾口縁坏 [例 .SI35-1]、有段口縁坏 [例 .SI35-2]、常総系土師器甗 [例 .SI2-52] も出土している。

3 期（8 世紀第 1 ～ 2 四半期） 地元芳賀郡の益子窯産須恵器 [例 .SI31-3] をはじめ、三毳窯産須恵器 [例 .SI23-3]、堀ノ内窯産須恵器 [例 .SI23-8]、新治窯産須恵器 [例 .SI31-1] が出土している。また、東海地方産須恵器 [例 .SI31-5・6] や、湖西窯産の肩張り形瓶 [例 .SI-13] も出土している。一方土師器は、須恵器模倣土師器坏が消失（古墳時代的な在地系土師器甗も極めて微量となる）、半球半球形坏 [SI29-5] や半平底形皿 [SI62-3] が目立つようになってくる。なお、微量ではあるが、有段口縁坏の流れを組む丸底坏 [SI29-4] も出土している。なお、この頃から常総系土師器甗 [例 .SI23-14] が主体的に出土するようになってくる。

4 期（8 世紀第 3 ～ 4 四半期） 前代と同じく益子窯産須恵器 [例 .SI31-3]、三毳窯産須恵器 [例 .SI23-3]、堀ノ内窯産須恵器 [例 .SI23-8]、新治窯産須恵器 [例 .SI31-1] が出土している。また、猿投窯産原始灰釉陶器 [例 .SI58-5, 包 -21] が他遺跡に比べて一定量出土する傾向にある。土師器は半平底形皿 [SI61-12・13]、樫村 1998 編年・5 期の常総系土師器甗 [例 .SI23-14] に加えて、少量ながら桜岡 1991 編年Ⅳ～Ⅴ段階の上武系土師器甗 [SK55-1] や、新たなタイプの在地系土師器甗 [例 .SI70-14] が出土するようになる。

5 期は竪穴建物軒数、ならびに土器出土量のピークを迎える。竪穴建物跡切り合い関係、および土器様相から 2 時期に細分したい。

5 a 期（9 世紀第 1 ～ 2 四半期） 益子窯産須恵器 [例 .SI44-3]、三毳窯産須恵器 [例 .SI38-7]、堀ノ内窯産須恵器 [例 .SI45-1]、新治窯産須恵器 [例 .SI11-1] が出土している。また、猿投窯産・黒笹 14 号窯式期の灰釉陶器 [例 .SI38-5] も出土している。土師器は、非ロクロ坏が消滅して、器面処理ロクロ土師器坏 [例 .SI54-2, SI7-7] が増加してくる。甗は吉田 1997 分類・2 ～ 3 類、樫村 1998 編年・6 期の常総系土師器甗 [例 .SI7-10]、桜岡 1991 編年Ⅴ～Ⅵ段階の上武系土師器甗 [SI44-7]、在地系土師器甗 [例 .SI24-13] が出土する。

5 b 期（9 世紀第 3 四半期） 益子窯産須恵器 [例 .SI73-3・2]、堀ノ内窯産須恵器 [例 .SI20-5]、新治窯産須恵器 [例 .SI17-1] が出土している。この時期、三毳窯産須恵器 [例 .SI38-7] は供給量を減らす、代わりに常陸三和窯跡産須恵器 [例 .SI60-2] が台頭してくる。なお、猿投窯産 [例 .SI22A-5]・東濃窯産 [例 .SI22A-3] の灰釉陶器が一定量出土している。土師器は、器面処理ロクロ土師器坏 [例 .SI22A-10, SI67-7] に混ざって非

器面処理ロクロ土師器坏 [例 .SI8-14] が出土するようになってくる。甕は前代よりは出土数量を減らすものの吉田 1998 分類・4 類、檉村 1998 編年・7 期の常総系土師器甕 [例 .SI46-1]、在地系土師器甕 [例 .SI47-2] が出土している。なお、上武系土師器甕はこの時期以降、出土しなくなる。

6 期 (9 世紀第 4 四半期～10 世紀代) 須恵器の出土量が極端に減り、益子窯産須恵器、堀ノ内窯産須恵器が認められなくなる。ただし、新治窯産須恵器 [例 .SI10-2]・常陸産須恵器 [例 .SI10-1]、ならびに、その技術系譜を引く常陸筑波産ロクロ土師器 [例 .包 -13] が微量ながら出土している。また、産地不明のロクロ土師器坏 [例 .SI46-1] も少量出土し続けている。なお、東濃窯産 [例 .SI26-1・2] の灰釉陶器も少量出土している。

〔補遺 1〕 包含層出土の初期須恵器・統一新羅系土器

遺構重複が多いうえ、現代の農耕に伴う攪乱 (ゴボウトレンチャー) や、後世の手による埋め戻し土、または攪拌土が土層断面にて多数確認されている。また、そのため、遺物が本来の帰属遺構を離れてしまうことが多い。しかし、その一方で、本遺跡出土遺物は貴重な品々が多い。ゆえに、ここでは、そうした包含層出土稀少遺物について補足説明を行う場としたい。

まず、包 - 1 は甕の復元実測図である (細片の出土情報などは「IV -1. 初期須恵器」併照)。推定口径約 9cm、胴部最大径 11.5cm、推定器高 10.5cm。器厚 0.3～0.8cm。口縁部外面に細かな波状文と 1 条の隆帯を施す。また、頸部外面には細沈線を 3 条施文している。胴部は外面に 3 条の隆帯と細かな波状文を施す。径 1cm の注ぎ口円孔を穿っている。胎土は須恵器胎土 F 群。焼成は硬質 (堅緻)。色調は暗青灰色を呈する。全体的に造りがシャープである。駒澤大学前教授・酒井清治氏の御教示によれば、陶邑窯編年・TK-216 号窯式に比定可能とのことである。

包 - 2 は口縁部外面に 3 条の沈線を施す壺口縁部破片。成形が丁寧なうえ、胎土がきめ細かく、焼成も硬質気味である (栃木県域の須恵器窯では見かけない胎土・焼成である)。広義の搬入品と考えられる。なお、本土器は新郭遺跡出土の統一新羅系土器広口壺に近似している。

包 - 3・4 は碗の破片。口縁部内・外面に数条の沈線を施すうえ、包 - 2 の壺と同様の胎土・焼成・色調をしていることから統一新羅系土器の可能性が考えられる (「IV -2. 統一新羅系土器」併照)。

〔補遺 2〕 包含層出土の朱字墨書土器・鉄鉢形須恵器

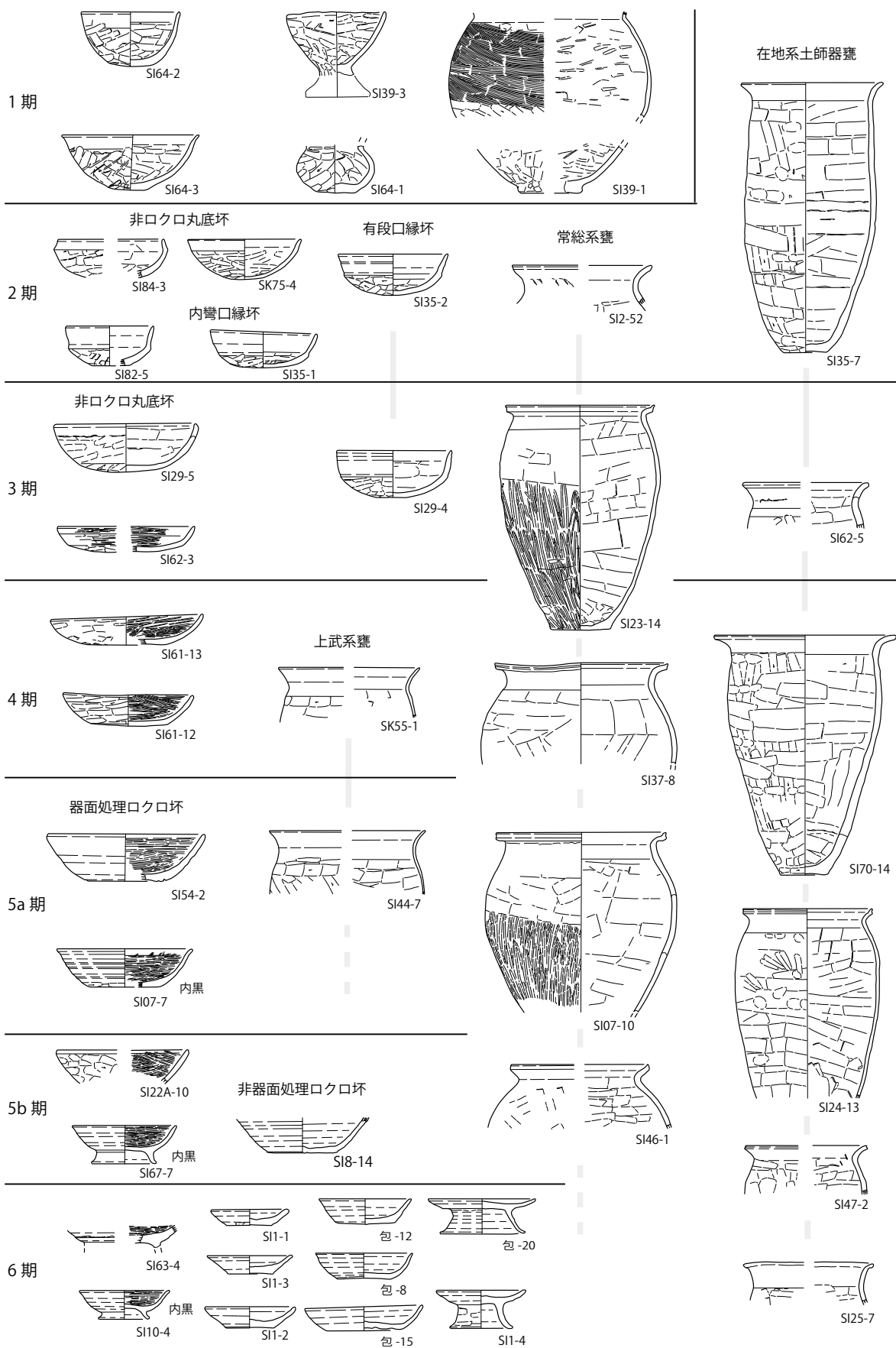
包 - 5 は益子窯産の須恵器高台付坏。高台径 7.8cm、残存高 4.5cm。ロクロナデにより成形。底部は回転ヘラケズリのち高台部が貼り付けられる。なお、高台底は朱墨により「笠」字が描かれている。

包 - 6 は産地不明 (須恵器胎土 E 群) の須恵器体部。肩部～体部が「く」の字に湾曲し尖り底状になること、外面に金属器模倣と思われる細沈線を施すことから鉄鉢形須恵器として推定復元してみた。なお、平成 24 年度調査でも鉄鉢形土器と思われる須恵器の体部破片 [H24 SI-28・6] が出土している。

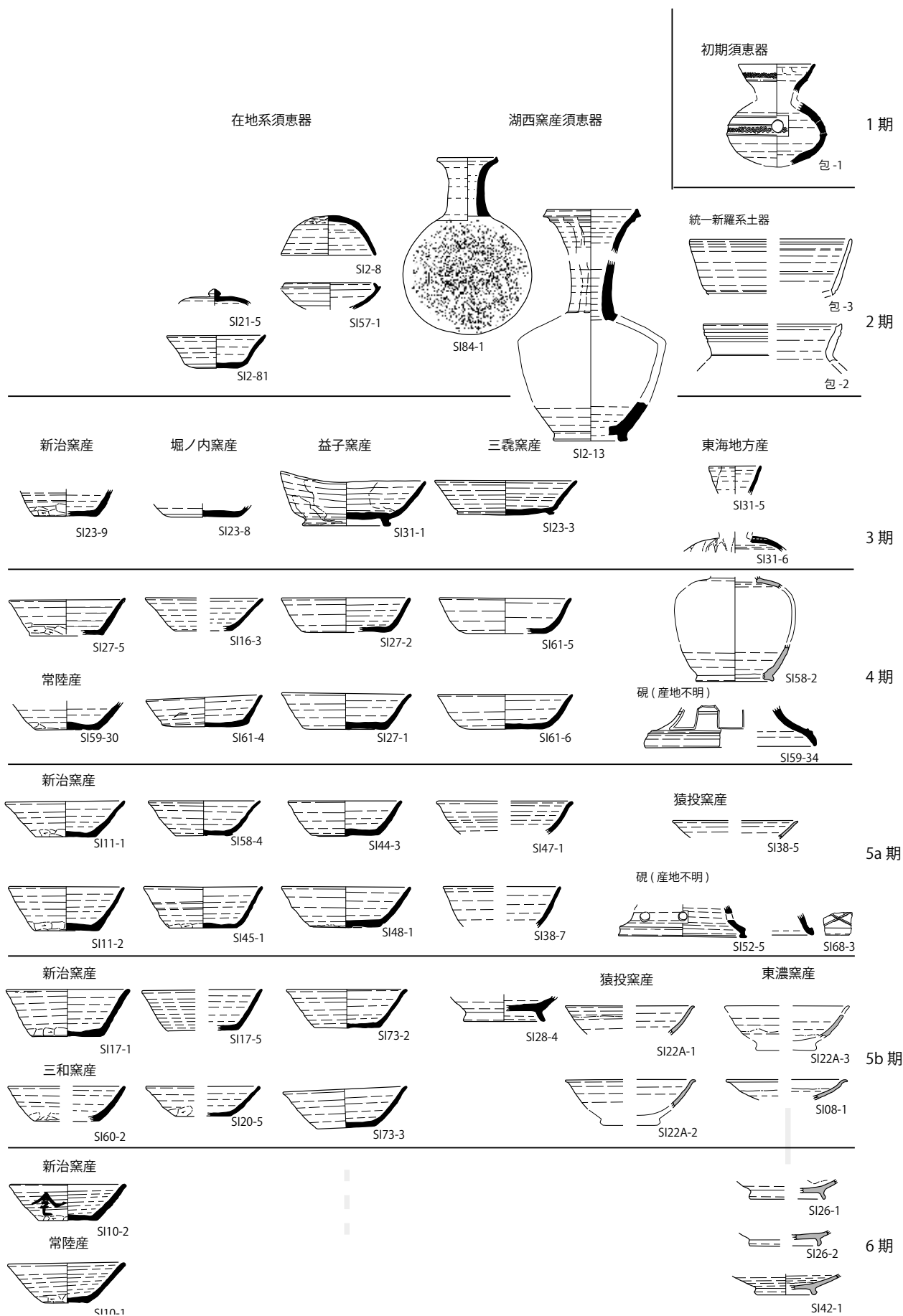
〔補遺 3〕 包含層出土のロクロ土師器皿・碗

包 - 7～12 は体部中位～腰部付近が丸みを有するロクロ土師器皿。口径 11cm 前後、定径 6.5cm 前後、器高 2.5cm ほどのものが多い。一方、包 -13～15 は口径・底径は上記の大きさと変わらない。しかし、器高は若干低く、体部立ち上がりも直線的な傾向がある (底部調整は包 -12・15 のみ底部回転ヘラ切り未調整。それ以外は全

Ⅲ. 調査成果



第 184 図 くるま橋遺跡土器編年①



第 185 図　くるま橋遺跡土器編年②

Ⅲ. 調査成果

て底部回転糸切り未調整)。包-13～19はロクロ土師器碗類。口径15cm前後、定径6cm前後、器高5cmほどのものが多い。包-20はロクロ土師器高台付皿である。ロクロ土師器ちなみに、出土遺構などを整理してみると、東区N3～S3グリッド(竪穴建物跡内の攪拌土層)にかけて出土している。

- 包-7 ロクロ土師器皿 SI-62 攪拌土出土
- 包-8 ロクロ土師器皿 SI-67 攪拌土出土
- 包-9 ロクロ土師器皿 SI-62 攪拌土出土
- 包-10 ロクロ土師器皿 SI-61 攪拌土出土
- 包-11 ロクロ土師器皿 Q4 グリッド出土
- 包-12 ロクロ土師器皿 R2 グリッド出土
- 包-13 ロクロ土師器皿 S3 グリッド出土
- 包-14 ロクロ土師器皿 SI-61 攪拌土出土
- 包-15 ロクロ土師器皿 SI-62 攪拌土出土
- 包-16 ロクロ土師器皿 SI-62 攪拌土出土
- 包-17 ロクロ土師器皿 R3 グリッド出土
- 包-18 ロクロ土師器皿 N4 グリッド出土
- 包-19 ロクロ土師器皿 SI-67 攪拌土出土
- 包-20 ロクロ土師器高台付皿 SI-61 攪拌土出土

〔補遺4〕包含層出土の古代施釉陶器

包含層出土の古代施釉陶器をまとめると次のように整理できる。

猿投窯製品

- 原始灰釉陶器(8c3/4～4/4) 包-21 壺(SD-6 攪拌土層出土)
- 黒笹14号～90号窯式期(9c2/4前半～4/4) 包-24 碗(SI-23 攪拌土層出土)
- 黒笹90号窯式期(9c2/4後半～4/4) 包-25,26 碗(SI-20 攪拌土層出土)
- 包-27(SI-22 攪拌土層出土)
- 包-28(SD-6 攪拌土層出土)
- 折戸53号窯式期(10c1/4～2/4) 包-32 碗(SI-7 攪拌土層出土)
- 時期特定不能 包-22,23 壺・瓶類(SI-29,SD-36 攪拌土層出土)
- 包-34 緑釉片(SD-36 攪拌土層出土)

東濃窯製品

- 光ヶ丘1号窯式期(9c3/4～4/4) 包-28 碗(SD-6 攪拌土層出土)
- 包-29 碗(SK-32 攪拌土層出土)
- 包-30 碗(SD-36 攪拌土層出土)
- 大原2号窯式期(10c1/4～2/4) 包-31 碗(調査区一括)
- 包-33 碗(調査区一括)

近江産または京都産製品

- 時期特定不能 包-35 緑釉体部片(SI-35 攪拌土層出土)

〔補遺5〕包含層出土の中・近世陶磁器

今回調査区の遺構攪拌土層中からも、中・近世～近代の陶磁器が散見される。調査範囲内の土地利用状況を考えていく上で有益な資料となるものが多い。それゆえ、実測可能な資料を中心に、これらを報告したい。

包-36・37は河合ほか2003文献でいう「均質手」の山茶碗系小皿(いわゆる山皿)と比定出来そうな資料である(近在の下陰遺跡や長沼城跡で山茶碗系鉢が出していることも考慮)。残存高は3.0cm前後。陶器胎土B群。焼成は、やや硬質。2点ともSI-11の攪拌土から出土した。

包-38は淡い緑灰色を呈する青磁碗小片。内面に数条の波状文を施していることから中国・同安窯産製品と考えられる。

包-39は須恵器系の焼きもの。体部外面に数条1組による横叩きが施される。一見すると新治窯産の雲母を含まない須恵器甕を彷彿とさせる。だが、新治窯をはじめとする常陸系須恵器甕の叩き具よりも幅が広く、かつ深みがある。国立歴史民俗博物館名誉教授・吉岡康暢氏の御教示によれば、中世の須恵系陶器(広義の珠洲系)の可能性はありえるとの由。

包-41は体部外面に薄く灰釉が掛かる焼きもの。体部・底部境に三角状の突起を有し、高台部は角状を呈する。陶器胎土C群で黒色細粒を少量含む。渥美窯産製品の可能性を指摘しておきたい。一方、包-40は常滑窯産製品独特の胎土(長石粒含む)・焼成・色調(赤みがかった)の焼きもの。内外面の摩耗痕跡から鉢の体部破片であることがわかる。

包-42・43は古瀬戸窯産天目碗の体部小片。残存高2.5cmほど。釉調は茶褐色～黒褐色。包-44は瀬戸・美濃大窯製品の壺類底部破片(施釉で確認しにくいが底部は回転ヘラケズリまたがナデか)。なお、本品は鉄錆釉の上に暗茶褐色釉を上掛けする。内面が無釉でロクロ目が残る(整形意識弱い)ことから茶入ではなく、片口小瓶や水注・合子の底部と推定される(吉岡先生の御教示)。

包-45～48は瀬戸・美濃大窯製品の擂鉢小片。胎土は陶器C群に相当。白色系蛙目粘土由来の素地土を用いていると思われ、素地は淡黄色を呈する。なお、釉調は暗褐色～明赤褐色を呈する。

包-49は瓦質土器の底部破片。浅鉢状を呈すること、切り込み方形の脚部を有していることから火鉢と考えられる。

包-50は玉縁状の陶器口縁端部であること、内外面に淡緑色の釉薬を流し掛けしていることから連房式登り窯期の練り鉢と分かる小片。

包-51は陶器口縁端部であること、内外面に灰釉を施釉していることから連房式登り窯後半期の練り鉢と分かる小片。瀬戸・美濃系製品。

包-52は外面に灰釉を施釉、内面ロクロナデのままであることから連房式登り窯期の瓶類体部と分かる小片。美濃系製品。包-53はロクロ成形。内面全面～体部外面に釉薬を施す美濃系製品灰釉小坏。

包-54は幅広折縁の陶器口縁端部。内外面ににぶい茶褐色釉を施す。在地系鉢類と思われる。包-55は口縁端部が短くL字状に屈曲する。内外面に鉄釉を施す。包-56は内外面に鉄釉を施す体部小片。いずれもは在地系壺類と思われる。包-57は陶器内面に茶褐色釉を施し、体部外面は露胎。底部は蛇の目状低高台を付す。皿類底部小片。

包-59～61は肥前波佐見系染付の小片。包-62は陶胎染付の小片。外面は白地土を塗ったのち、西洋呉須(コバルト釉)にて染付が施される。内面は鉄釉が施される。おそらく近世益子窯産の土瓶体部小片であろう。なお、包-63・64は現代磁器碗である。

Ⅲ. 調査成果

以上の資料をまとめると次のように比定できよう。

貿易陶磁器

同安窯系青磁 (12c ～ 13c 前半) 包 -38 碗体部片 (B2 グリッド出土)

須恵系陶器

会津大戸窯・上雨屋 64 号窯段階 (12c ～ 13c 初頭頃) か? 包 -39 甕体部片 (H3 グリッド出土)

養器養系陶器

渥美窯製品 (1130 ～ 1150 年頃) か? 包 -41 鉢類底部片 (SI-64 攪拌土層出土)

常滑窯製品 (年代特定不能) 包 -40 鉢類底部片 (調査区一括品)

陶器小型壺

大窯 1 ～ 2 段階 (1480 ～ 1560 年頃) 包 -44 水指・合子類の体～底部片 (P4 グリッド出土)

陶器天目碗

古瀬戸後期後半から大窯期 (概ね 15 ～ 16c 紀頃) 包 -42 天目碗体部片 (SI-64 攪拌土層出土)

大窯期 (概ね 16c 紀頃) 包 -43 天目碗体部片 (調査区一括品)

陶器すり鉢

大窯期 (概ね 16c 頃) 包 -45 すり鉢口縁部片 (N3 グリッド出土)

大窯期 (概ね 16c 頃) 包 -46 すり鉢口縁部片 (D5 グリッド出土)

大窯期 (概ね 16c 頃) 包 -47 すり鉢口縁部片 (M3 グリッド出土)

大窯期 (概ね 16c 頃) 包 -48 すり鉢口縁部片 (SI-64 攪拌土層出土)

瓦質土器

常陸筑波産 (中世後半頃か) 包 -49 火鉢類脚部片 (SI-64 攪拌土層出土)

出土傾向

実測個体中の 5 点 (渥美窯産鉢類底部片, 天目碗体部片, すり鉢体部片, 瓦質火鉢片) が東区の P3・P4 グリッド (SI-64 攪拌土層含む) からの出土である。また、N3・M4 グリッドではすり鉢体部片が出土している。一方、西区 B2 グリッドで同安窯系青磁, 山茶碗系小皿が、H3 グリッドでは須恵系陶器養肩部破片が出土している。これらの調査区外域に中世遺構が存在している可能性もあろう。今後の調査の進展に期したい。

b. 本遺跡出土の近世・近代陶磁器の位置付け

年代・産地 実測図掲載資料をまとめると次のように比定できよう。

肥前産磁器

肥前Ⅳ期 (1690 ～ 1800 年頃) 包 -59 染付皿口縁部片 (Q4 グリッド出土)

肥前Ⅳ期 (1690 ～ 1800 年頃) 包 -60 染付皿底部片 (SI-61 攪拌土層出土)

肥前Ⅳ期 (1690 ～ 1800 年頃) 包 -61 染付碗底部片 (Q4 グリッド出土)

瀬戸系陶器

連房式登り窯後半期 包 -51 練り鉢口縁部片 (N3 グリッド出土)

美濃系陶器

連房式登り窯後半期 包 -52 瓶類体部 (SI-59 攪拌土層出土) 包 -53 灰釉小坏 (SI-10 攪拌土層出土)

益子系陶器

- 19c 後半以降 包 -50 練り鉢口縁部片 (N3 グリッド出土)
包 -62 土瓶類体部片 (N3 グリッド出土)

産地不明

- 19 c 以降 包 -54 幅広折縁鉢 (H3 グリッド出土)
包 -55 鉄釉壺 (SI-64 出土)
包 -56 鉄釉壺体部片 (SI-64 出土)
包 -57 錆釉皿類底部片 (SD-36 出土)
- 20c 中～後葉 包 -61 現代磁器碗 (N3 区出土)
包 -62 現代磁器碗 (N3 区出土)

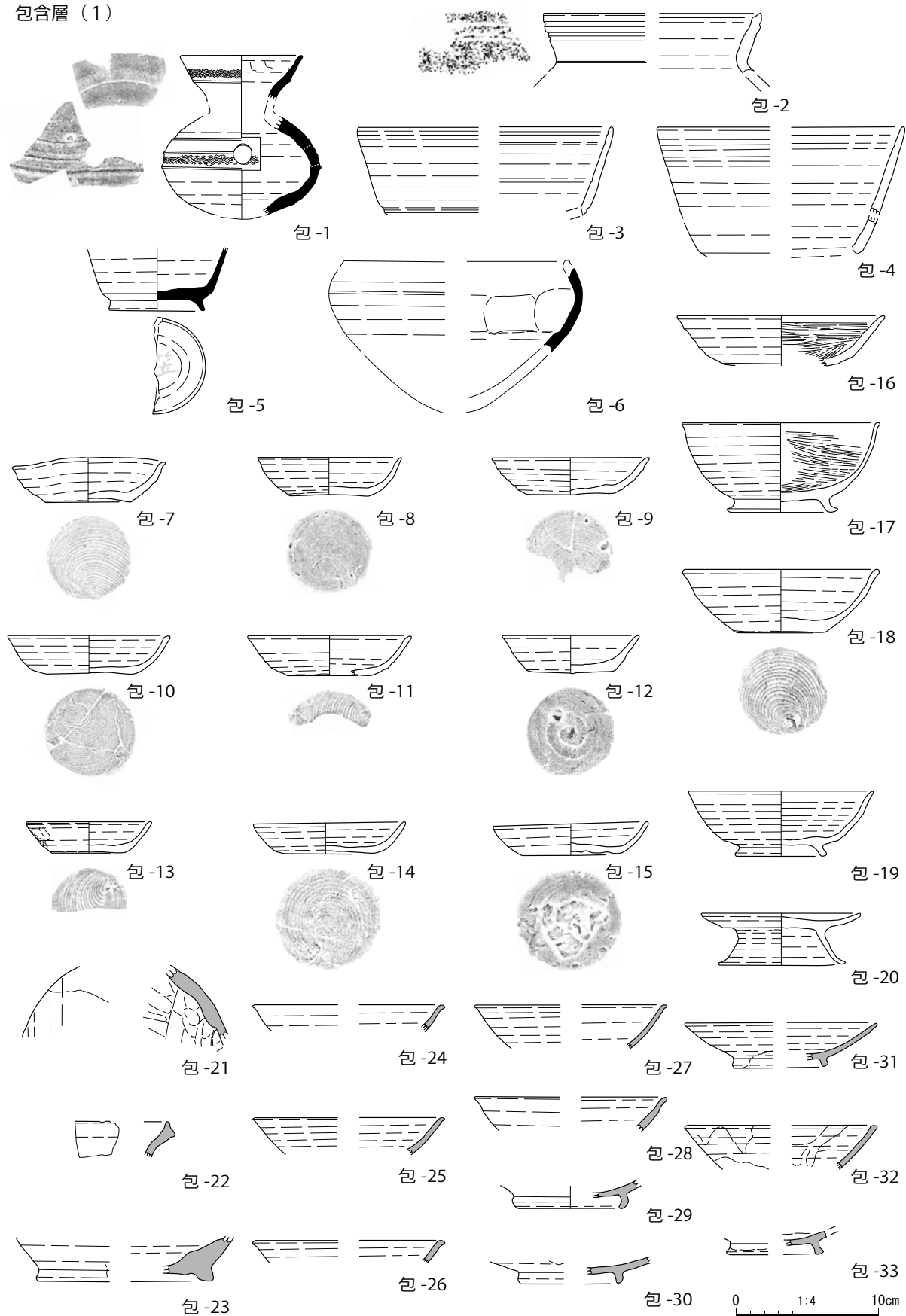
出土傾向

東区では、N グリッドから S グリッドにかけての範囲で近世・近代陶磁器が散見される。ちょうど、「後世の手による竪穴建物跡覆土攪拌」が目立つ範囲と、ほぼ重なる。一つの仮説ではあるが、古い時期の攪拌土層（現代耕作土攪拌以前）は近世期の新田開発等に伴う整地土であったかもしれない。なお、西区・東区境界の調査区外に所在する十二所神社は、地元所伝では文禄年間〔1593～96〕創建、安永年間〔1772～81〕再建と言う。くるま橋遺跡・古代集落廃絶後の土地利用変遷を考えていくうえで傍証的言説となりうる可能性がある。これについても、今後の調査の進展に期したい。

〔参考文献〕

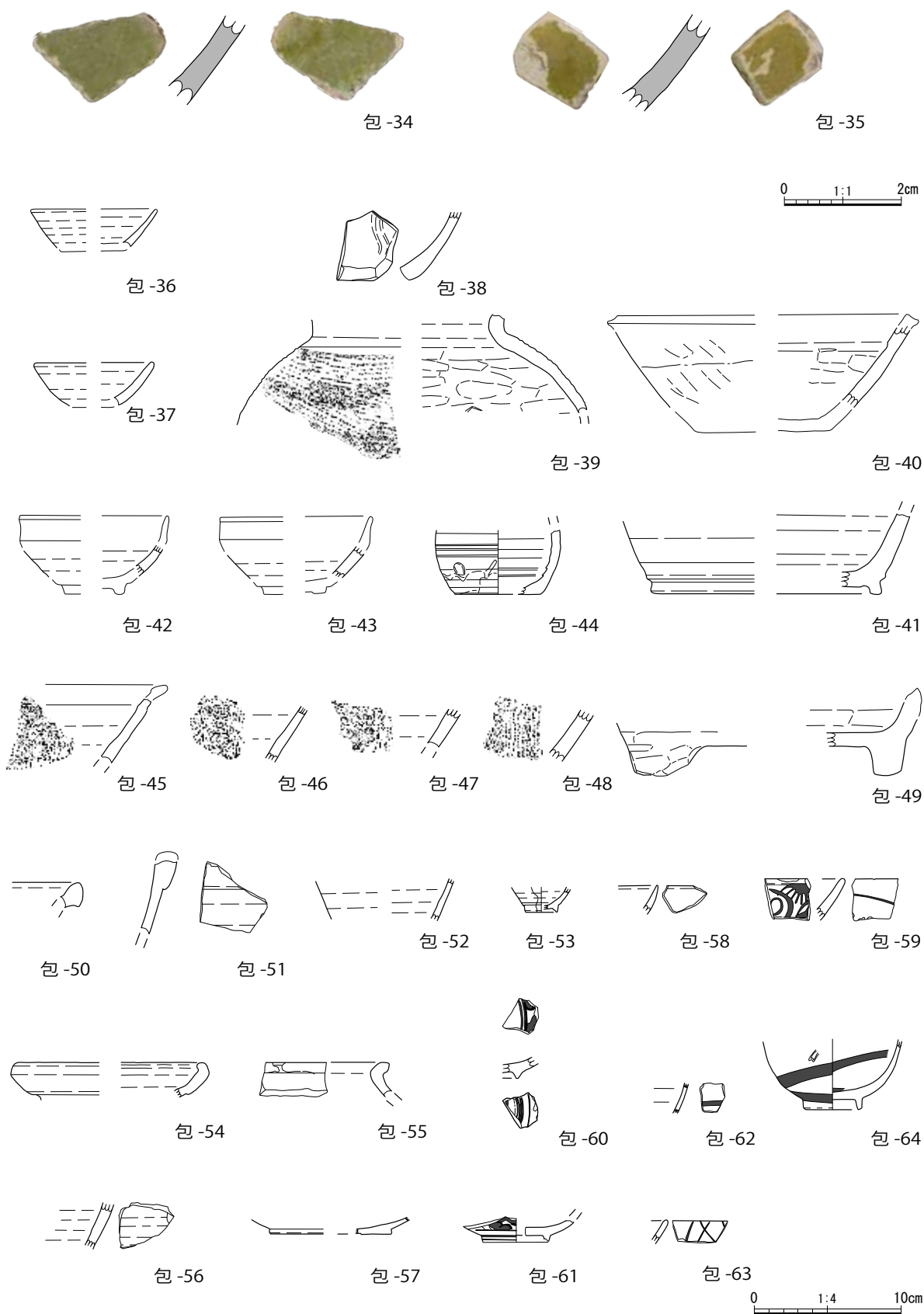
- 池田敏宏 2007「第7章 古代 第3節 遺物の研究 2. 古代施釉陶器」『研究紀要』第15号—栃木県の埋蔵文化財と考古学—、(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 池田敏宏 2009「栃木県域における6・7世紀の土器様相—地域間交流を視座にすえて—」『古代社会と地域間交流—土師器から見た関東と東北の様相—』六一書房
- 池田敏宏 2010『下陰遺跡Ⅱ』/2011『長沼城跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 樫村友延 1998「常総型甕編年小考—茨城県南部を中心として—」『列島の考古学—渡辺 誠先生古稀記念論文集—』六一書房
- 河合 修ほか 2003「各地域における土器研究の現状 東海」『シンポジウム中世土器研究の今日的課題—土器編年と中世史研究—』中世土器研究会
- 桜岡正信 1991「7世紀代以降の土師器坏の画期とその要因について—群馬県域を中心として—」『群馬考古学手帖』Vol.2 群馬土器観会
- 藤田典夫 1999「栃木県における5世紀の土器編年」『東国土器研究』第5号 特集 東国における古墳時代中期の土器様相と諸問題、東国土器研究会
- 吉田 哲 1998「第4章 まとめ」『八木岡Ⅰ遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団

包含層 (1)



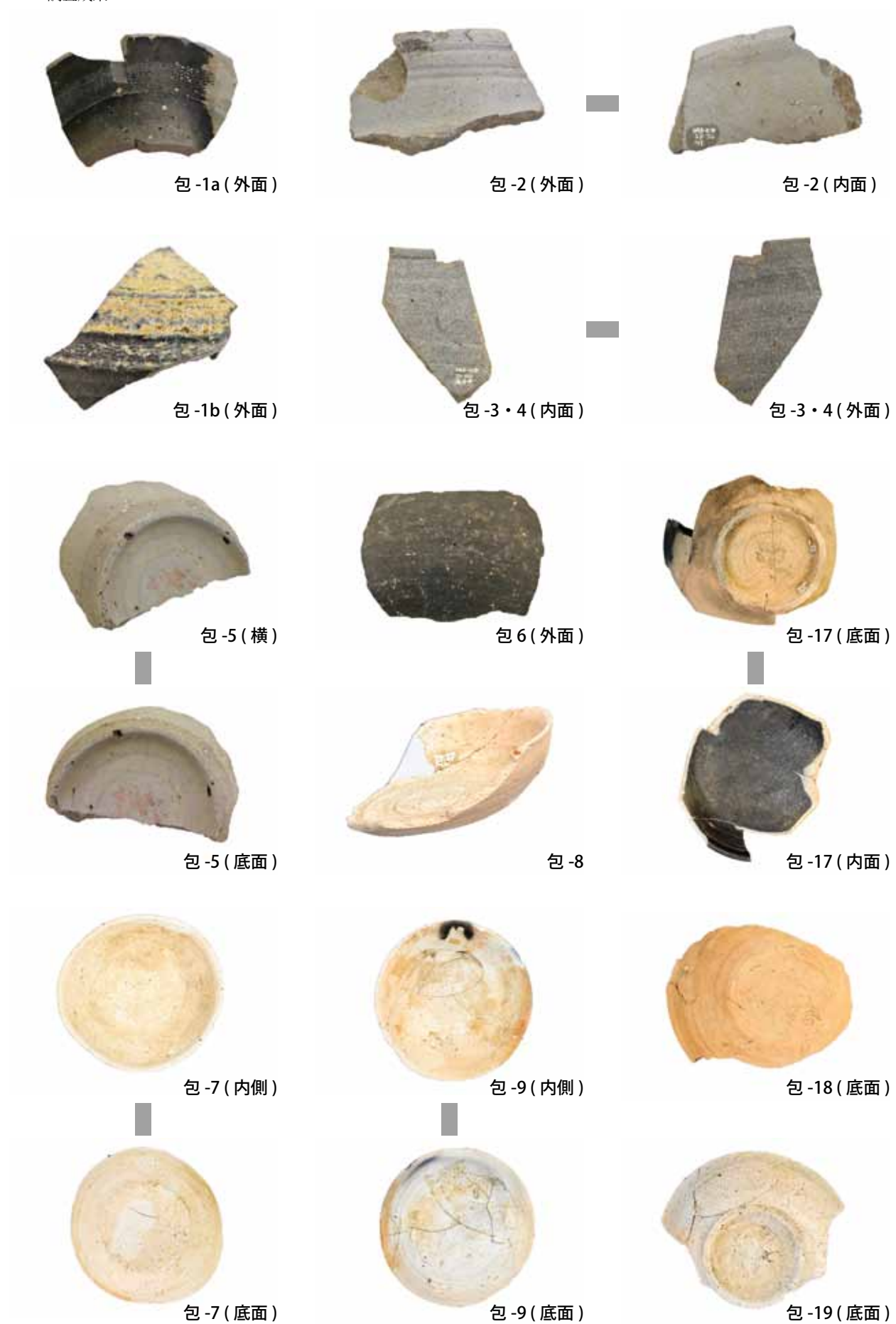
第 186 図 補遺 包含層出土土器 (1)

包含層 (2)

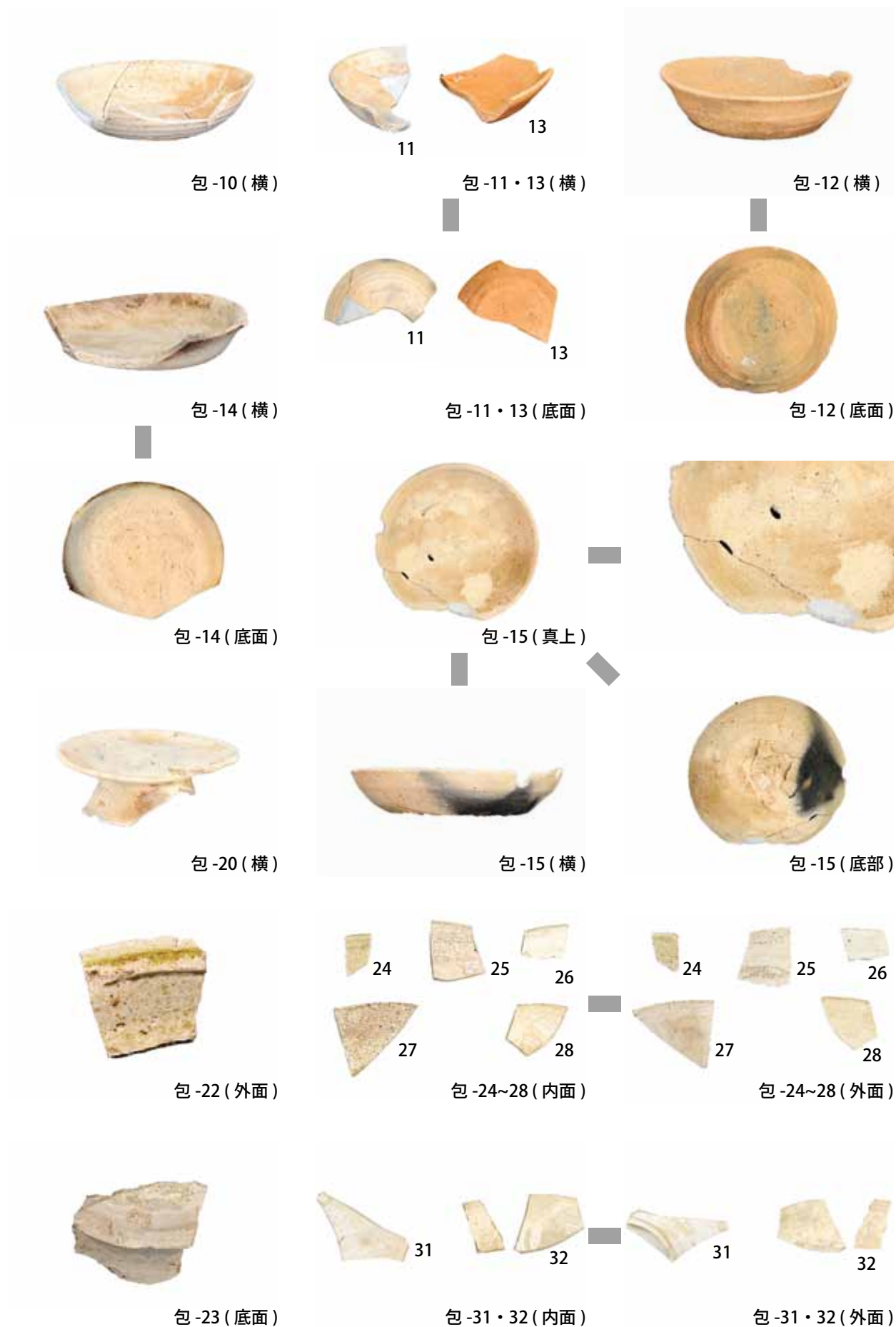


第 187 図 補遺 包含層出土土器 (2)

Ⅲ. 調査成果



第 188 図 補遺 包含層出土土器 (3)

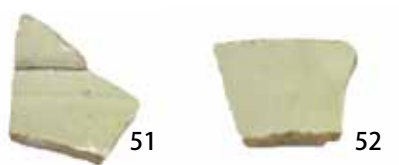


第 189 図 補遺 包含層出土土器 (4)

Ⅲ. 調査成果



第 190 図 補遺 包含層出土土器 (5)



包 -51・52 (外面)



包 -53 (外面)



58



59

包 -58・59 (内面)



51



52

包 -51・52 (内面)



包 -60 (内面)



58



59

包 -58・59 (外面)



54



55



56

包 -54・55・56 (外面)



包 -60 (外面)



包 -62 (内面)



包 -57 (内面)



包 -61 (内面)



包 -62 (外面)



包 -57 (外面)



包 -61 (外面)



包 -64 (外面)

4-b. 遺構の位置付け

遺構変遷把握のための本書視点

- ① 遺構重複が極めて著しい範囲については、これを把握するための単位 (ユニット unit) を 8 個設定した。なお、A～H ユニットにおける遺構変遷過程については第 188・189 図 (本書 273・274 頁) としてモデル図を示した。
- ② A～H ユニット以外の遺構重複関係については各遺構の「重複関係」の項を御参照頂きたい。
- ③ 今回調査区発見の遺構の帰属時期、ならびに、その変遷過程を要約したのが第 71 表、第 192～193 図 (本書 277・278 頁) である。

各期の歴史的位置付け

1 期 (5 世紀代)

東区の東端から一辺 26 m の方墳跡が検出されている。本墳と、三本松古墳 (平成 21・24 年度調査・本書 14～15 頁併照) が、大和田富士山古墳出現以前の有力首長墓であった可能性はあろう (本書 23 頁併照)。とすれば、初期須恵器 [包-1] が同一遺跡地内で出土していても不思議なだろう。

2 期 (7 世紀中～後葉)

1 期との間に 150 年ほどの空白期を設けて、再び、この地に集落が形成され出す。出土した土師器を見る限りでは一般集落と変わるところは何らない。しかし、この時期の県内集落と比較しても、本遺跡出土 7 世紀須恵器の出土量は多いほうであろう。加えて、合計 8 点 (現時点では、県内 2 番目の数量) の統一新羅系土器も出土している。本期の集落展開の背景には、在地的なものと、公的なもの (渡来人など) の双方が関わっていた可能性が考えられそうである。

3～4 期 (8 世紀)

3 期は、遺構の数が減少するようである。しかし、続く 4 期は竪穴軒数も増え、出土遺物について種類が増す。大型の須恵器硯破片 [SI59-34] が出土していることも含め、半官的な勢力による集落運営が行われ出したのであろうか。

5a 期 (9 世紀第 1～2 四半期)

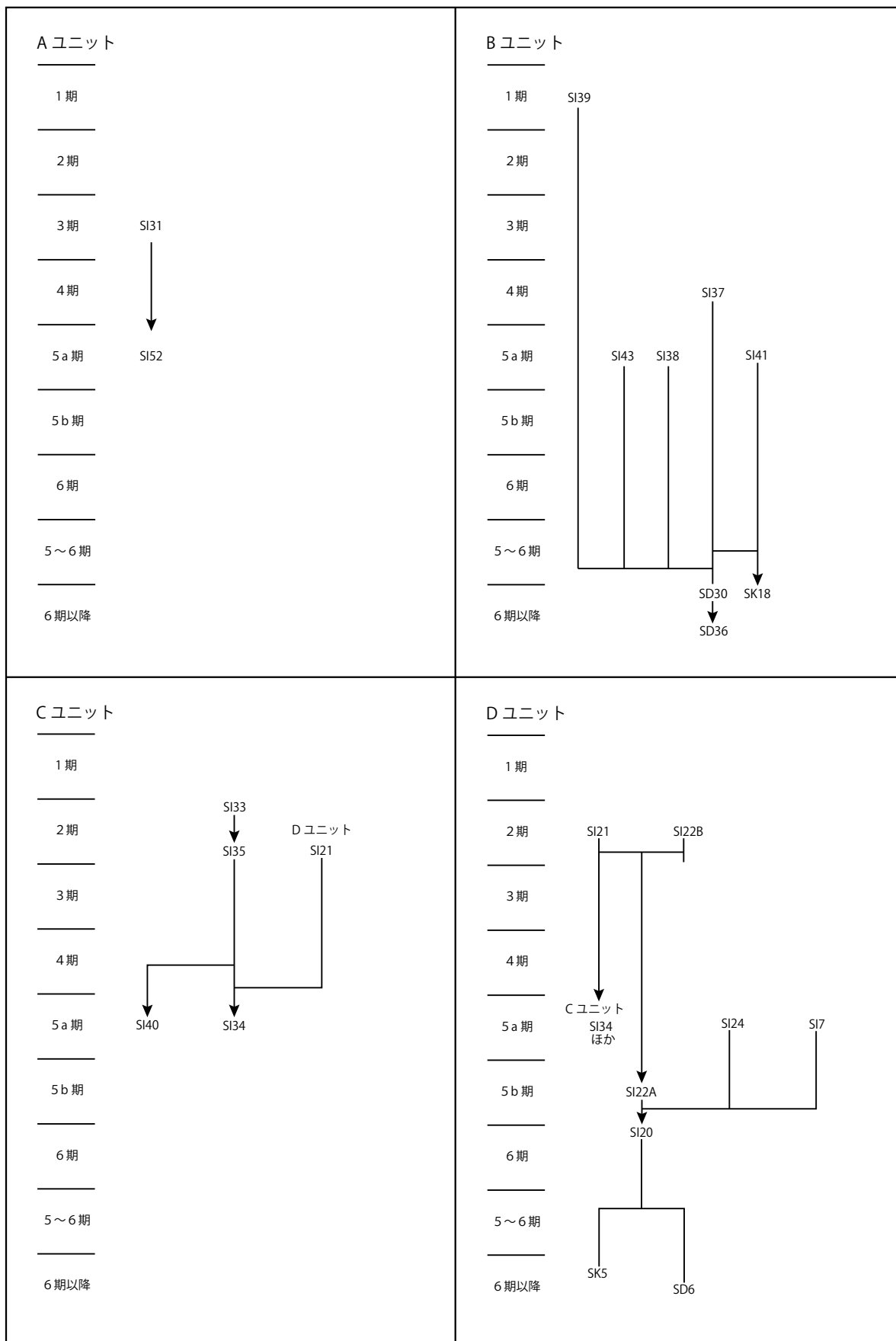
竪穴軒数の最盛期である。同様に、土師器・須恵器・施釉陶器が多数出土する。さらに、生産具 (紡錘車、土錘、鎌、鋤)、文筆用品 (硯、鞘入刀子)、金銅製毛彫金具、嗜好品 (碁石) と言った品々が出土している。優位階層による集落運営が活発化していた時期と推定しておきたい。

5b 期 (9 世紀第 3 四半期)

竪穴軒数や甕などの出土数量が減少傾向を示すようになるものの、まだまだ前代の勢いは続いている。また、加えて常陸三和窯跡産須恵器が市場に台頭してくる。

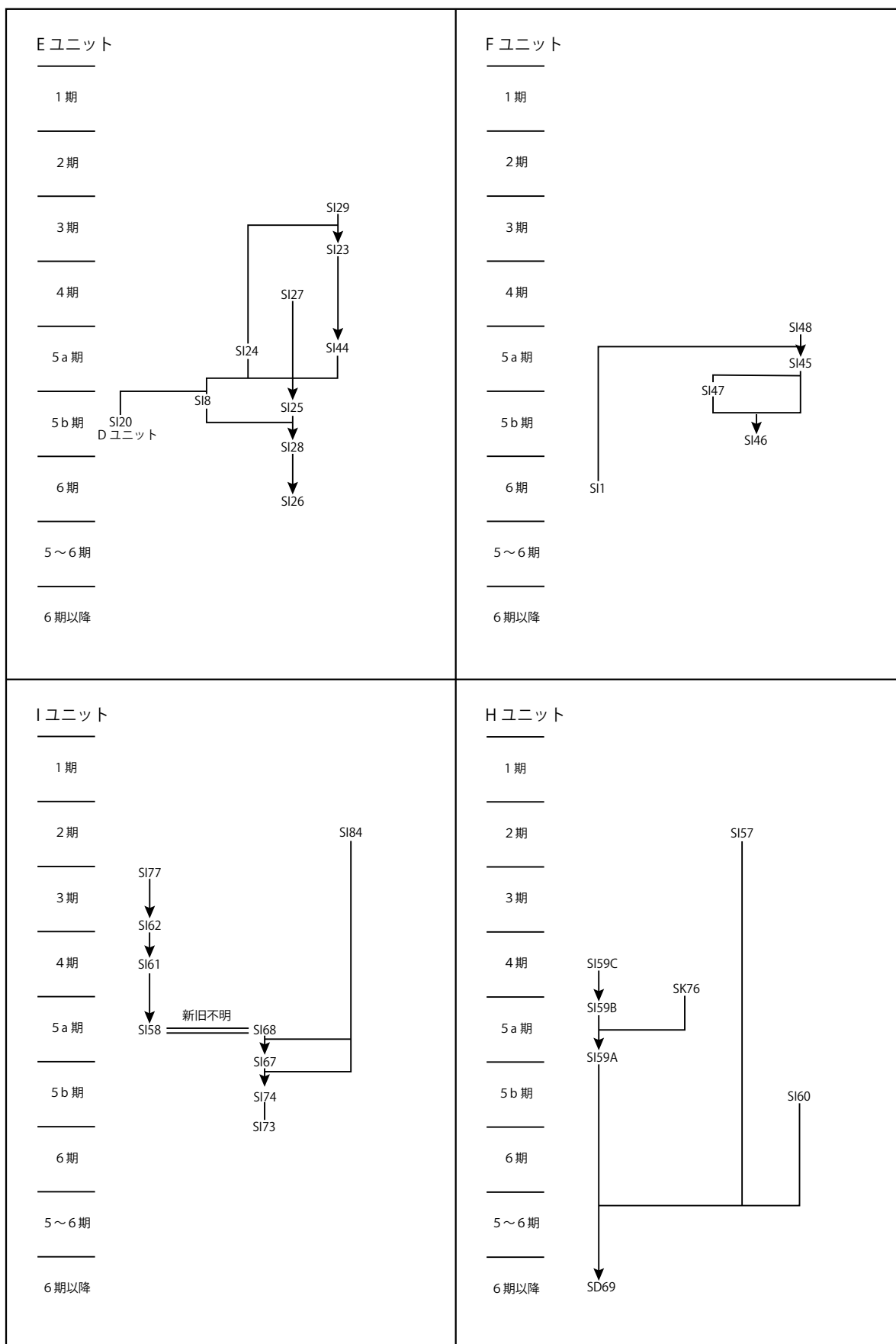
6 期 (9 世紀第 4 四半期～10 世紀代)

遺構数が極端に減る。遺物についても、益子窯・堀ノ内窯産須恵器の供給が減退し、常陸地域産の須恵器・土師器と少量の東濃窯産灰釉陶器が出土する程度になる。ただし、この時期、栃木県域の多くの古代集落は遺跡展開自体が終焉を迎えているものが多く、そうした状況下、持ち堪えているほうであろう。



第 192 図 遺構変遷ユニットモデル図 (1)

Ⅲ. 調査成果



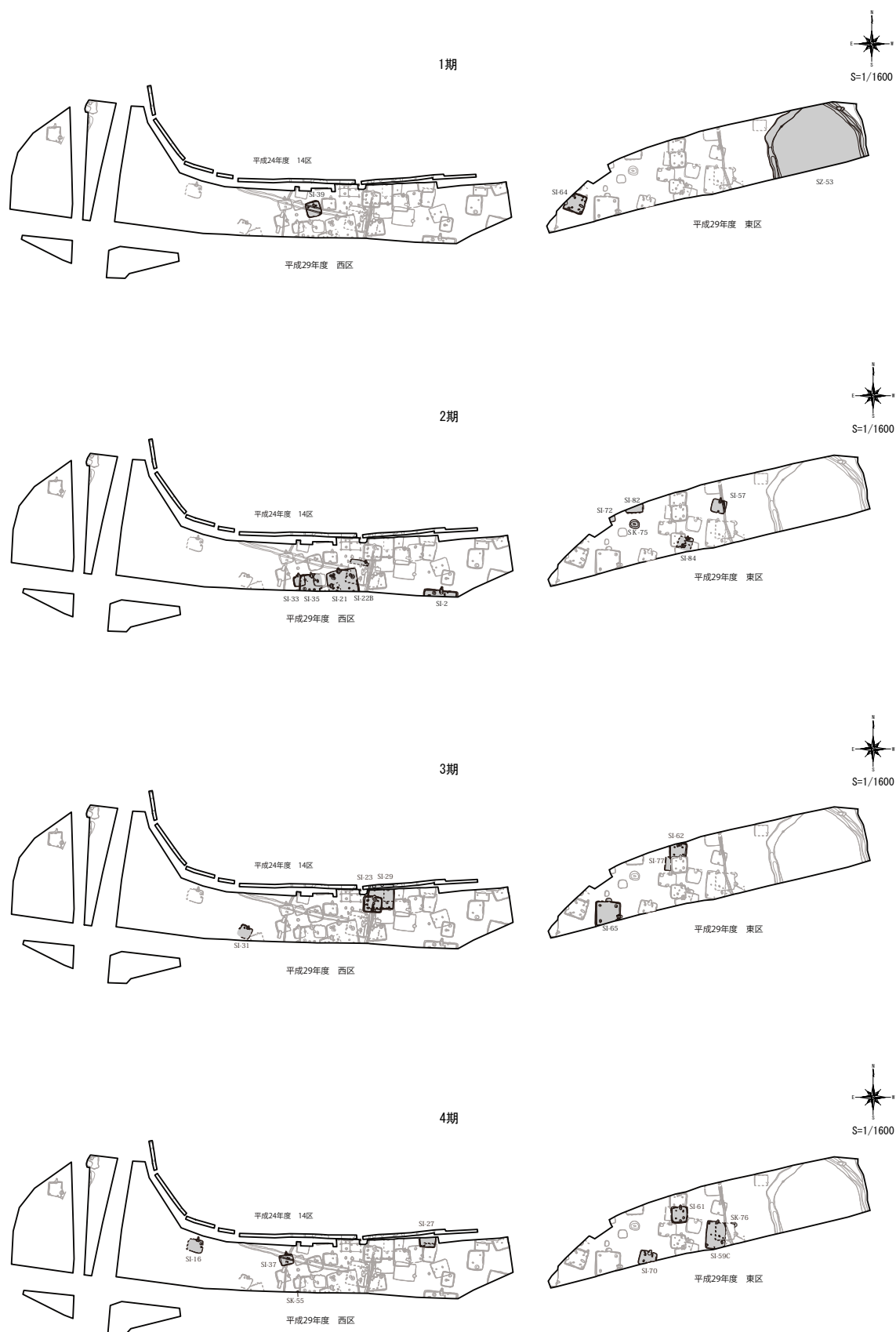
第 193 図 遺構変遷ユニットモデル図（2）

第71表 遺構変遷表

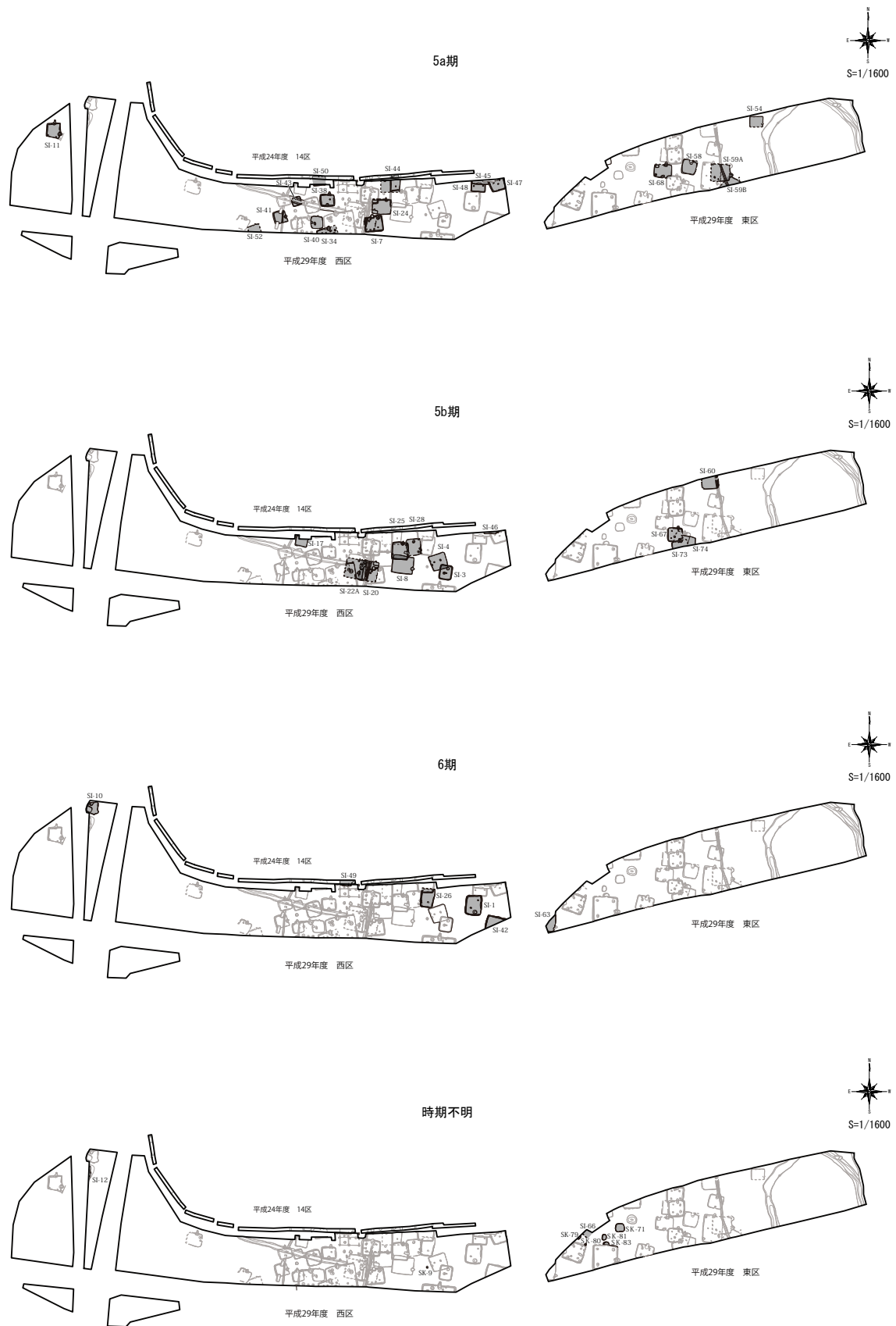
	西区	東区
1期 5C	SI-39	SZ-53 SI-64
2期 7C 2/4～4/4	SI-2 SI-21 SI-22B SI-33 SI-35	SI-57 SI-72 SK-75 SI-82 SI-84
3期 8C 1/4～2/4	SI-29 (2～3期) SI-23	SI-62 SI-65 SI-77 SK-83 [3期以前]
3～4期 8C 1/4～4/4	SI-31 [3～(4)期]	SI-61 [(3)～4期]
4期 8C 3/4～4/4	SI-16 SI-27 SI-37 SK-55	SI-59C SI-70 SK-76 (9C以前か)
5a期 9C 1/4～2/4	SI-7 SI-11 SI-24 SI-34 SI-38 SI-40 SI-41 SI-43 SI-44 SI-45 SI-47 SI-48 SI-50 SI-52	SI-54 SI-58 SI-59A SI-59B SI-68
5b期 9C 2/4～3/4	SI-3 SI-4 SI-8 SI-17 SI-20 SI-22A SI-25 SI-28 SI-46	SI-60 SI-67 SI-73 SI-74
6期 9C 3/4～10C	SI-1 SI-10 SI-26 SI-42	SI-63
5～6期 9～10C	SI-49	
6期以降	SK-5 SD-6 SK-18 SK-19 SD-30 SK-32 SD-36 SB-51	SD-69
時期不明	SK-9 SI-12	SI-66 SK-71 SK-79 SK-80 SK-81

欠番 S-13・14・15・56・78・85・86

Ⅲ. 調査成果



第 194 図 平成 29 年度くるま橋遺跡遺構変遷図（1）



第 195 図 平成 29 年度くるま橋遺跡遺構変遷図（2）

IV . 特記事項

以下に取り上げる遺物は、本遺跡を地域の歴史ばかりでなく、日本歴史上に位置付けていくことが出来る貴重な資料群である。本章では、これらの遺物群の位置付けをはかる。

1. 初期須恵器

a-1. 初期須恵器の定義

須恵器は、日本自生の焼き物ではない。4世紀末から5世紀前半頃、朝鮮半島から陶質土器や、その製作技術(穴窯を用いた還元焰焼成、回転台成形技術、専門工人など)がもたらされ、北部九州、瀬戸内、大阪湾岸などの地域で須恵器が生産されたのが始まりである(註1)。

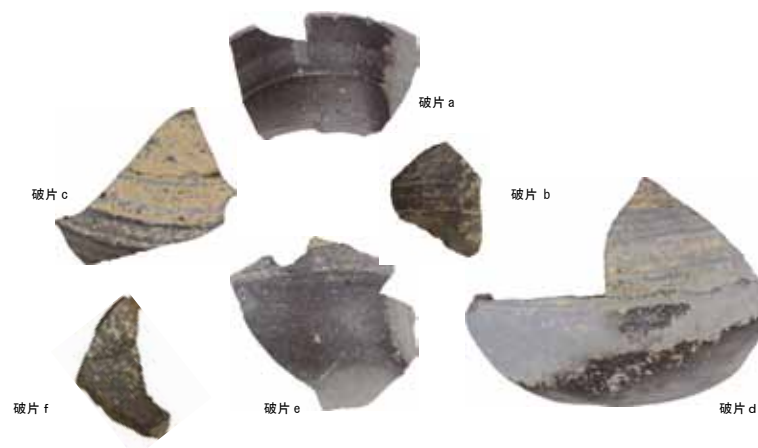
ちなみに、田辺昭三氏は、「定型化以前」(= TK73号窯式からTK208号窯式段階)の「須恵器の総称」として「初期須恵器」という語を用いている(田辺1981)。また2000年以降の研究では、初期須恵器導入時の様相(TK73号窯式以上に三国時代の陶質土器の特徴を色濃く残す)を示す語として「揺籃期」を用いている(宮崎・藤永2006,10頁など)。本稿では、これらの用語・定義を使用する。

a-2. 本遺跡から出土した初期須恵器

本遺跡からは甕1点(破片総数は8点。すべて同一個体と考えられる)が出土している。以下の諸特徴から陶邑窯跡群TK-216号窯式段階でも古式の可能性が考えられそうである(註2)。ハソウ破片は、いずれも遺構に伴うものではない。ただし西区のI3・J3・J4グリッド(SI-21・22・38)に分布が目立つ。

くるま橋遺跡出土の初期須恵器甕

- 破片 a(口縁部片) 口縁部外面に細かな波状文と1条の隆帯を施す。SI-38・SI-21 攪拌土層出土が接合
- 破片 b(頸部片) 外面に細沈線を3条施す。自然釉一部付着。SI-21 攪拌土層出土
- 破片 c(体部) 外面に3条の隆帯と細かな波状文を施す。径1cmの注ぎ口円孔を穿つ。全面に自然釉付着。SI-22 攪拌土層出土
- 破片 d(体部下半部) 外面に隆帯と細かな波状文を施す。外面の一部と底部付近に自然釉付着。SI-21 攪拌土層出土
- 破片 e(体部下半部) 円孔の下半部と外面に隆帯と細かな波状文が残る外面の一部と底部付近に自然釉付着。SI-21 攪拌土層出土
- 破片 f(底部片) 外面は欠損が著しい。内面には口縁開口部から降灰してきた自然釉が付着する。SI-37 攪拌土層出土



第196図 くるま橋遺跡出土の初期須恵器甕写真

a-3. 栃木県域における陶質土器・初期須恵器の出土傾向

次に、栃木県域出土の初期須恵器、ならびに陶質土器の出土傾向を整理してみたい。本県域から出土した陶質土器としては4遺跡5例がある。祭祀遺跡の可能性が高い白山台遺跡〔5〕以外は、いずれも県央部からの出土で、宇都宮市南部～下野市北部に目立つ（第6・196図）。なお、権現山遺跡〔1,2〕、殿山遺跡〔3〕は豪族居館からの出土事例である。

一方、揺籃期～TK216号窯式段階の須恵器は8遺跡44例ある（本遺跡を含む）。ほとんどが県央部からの出土である。上記・陶質土器と同じく宇都宮市南部～下野市北部に分布傾向がある（第6・196図）。一方、新郭遺跡〔16～18〕、砂部遺跡〔20～25〕など集中分布域から離れた地域で出土する事例も存在する。出土遺跡の性格を見てみると、豪族居館絡みが5例〔6～8,14・15〕、首長墳（前方後円墳）が1例〔11〕、拠点集落出土が7例〔9,10,12,13,16～18〕ある。器種を見ると、特殊器種（組紐文有蓋壺、把手付高坏・碗）、筒形器台、高坏、甕が占める比率が高い傾向にある。（註3）

なお、この時期の須恵器は、誰もが所有できるものではなかった。本遺跡の初期須恵器は、SZ-53（一辺26mの方墳跡）や、三本松古墳（今回調査区の北約1km）との関係-地方首長間との関係-王権との諸関係のなか、本遺跡、ならびに、これらの拠点集落に初期須恵器が再分配されていたのである。

〔註〕

註1 菱田哲郎氏が指摘するように「〔初期〕須恵器の生産をもたらしたのは朝鮮半島からの渡来人」であり、「新しい焼き物を使う生活様式と、その技術が同時に伝わった」と推察できる（菱田1997,14頁、ただし〔〕内は池田補記）。

註2 駒澤大学文学部前教授・酒井清治氏に資料を実見頂き、御教示を賜った。

註3 TK-208号窯式、および須恵器定型化以降の事例（参考データ）の出土傾向については別稿（池田・内山2020）を参照頂ければ幸いである。

〔引用・参考文献〕

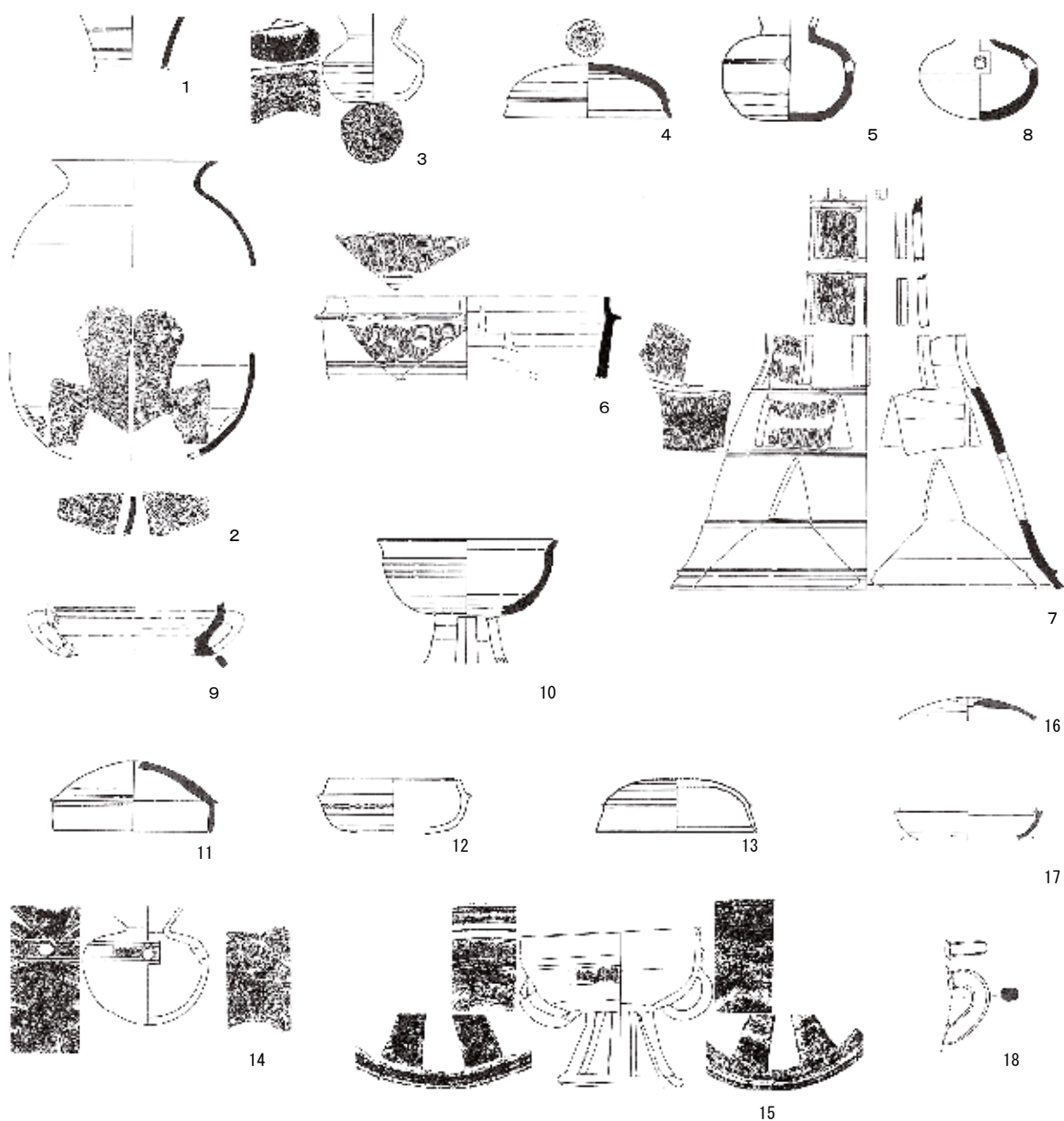
池田敏宏・内山敏行 2020「栃木県域出土の初期須恵器集成」『研究紀要』第28号、（公財）とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

菱田哲郎 1997『歴史発掘10 須恵器の系譜』講談社

宮崎泰史・藤永正明 2006『平成17年度冬季企画展 重要文化財指定記念 年代のものさし—陶邑の須恵器—』大阪府立近つ飛鳥博物館

IV. 特記事項



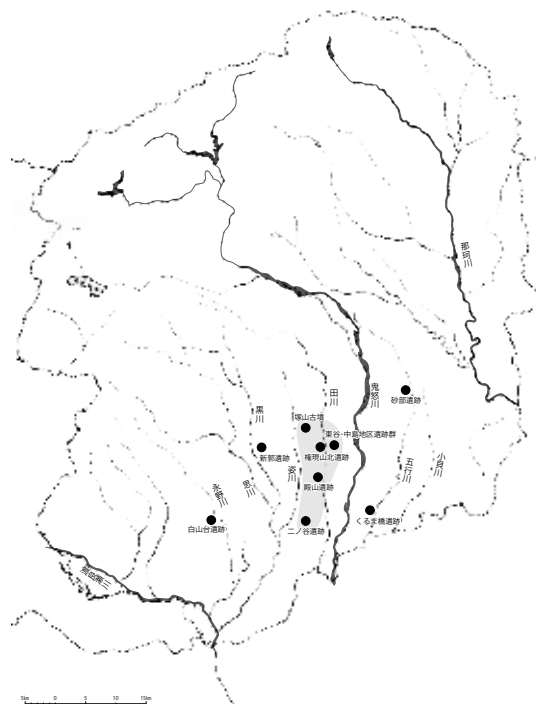
- 1, 2 権現山遺跡 (東谷・中島地区) (S=1/6)
- 3 殿山遺跡 (S=1/6)
- 4 二の谷遺跡 (S=1/6)
- 5 白山台遺跡 (S=1/6)
- 6, 7 権現山遺跡 (東谷・中島地区) (S=1/6)
- 8 権現山遺跡 (北関東自動車道) (S=1/6)
- 9 砂部遺跡 (S=1/6)
- 10 砂田遺跡 (S=1/6)

- 11 塚山古墳 (S=1/6)
- 12 権現山北遺跡 (2号住) (S=1/6)
- 13 権現山北遺跡 (7号住) (S=1/6)
- 14, 15 殿山遺跡 (S=1/6)
- 16~18 新郭遺跡 (S=1/6)

第 197 図 栃木県域出土の初期須恵器 (池田・内山 2020)

第72表 栃木県域出土陶質土器・初期須恵器一覧表(池田・内山2020より一部転載)

遺跡	所在地	遺跡の性格	須恵器型式	出土遺構	出土器種	備考
権現山遺跡 (東谷・中島地区)	宇都宮市東谷町	豪族居館	---	居館付近溝, 居館付近の建物	壺(1), 小型壺(2)	伽耶系陶質土器
殿山遺跡	上三川町上神主	集落/豪族居館か	---	KT-121	小型壺(3)	伽耶系陶質土器
二の谷遺跡	下野市自治医大地区	集落	---	D5-SI002	坏蓋(4)	伽耶系陶質土器
白山台遺跡	栃木市皆川城内町	祭祀遺跡か	---	表面採集資料	甕(5)	韓国柴山江流域の陶質土器
権現山遺跡 (東谷・中島地区)	宇都宮市東谷町	豪族居館	大野池213号窯頃	SG10区SI-88	組紐文有蓋壺(6)	揺藍期須恵器
			TK73～TK216か	北部居館の溝と周辺	筒形器台(7)	
権現山遺跡 (北関東自動車道)		集落/豪族居館/古墳群	TK216～208頃	B区SI-102	甕(8)	権現山・百目鬼遺跡編年Ⅱ期の標識資料
砂部遺跡	高根沢町大字太田	集落	TK216	SI-157	把手付高坏(9)	
砂田遺跡	宇都宮市砂田ほか	集落	TK216	6区SI-34	高坏(10)	
塚山古墳	宇都宮市西川田町	古墳(前方後円墳)	TK216	---	坏蓋(11)	
権現山北遺跡	宇都宮市茂原町	集落	TK216か	2号住居	坏身(12)	梁木1998編年Ⅲ期の標識資料
			TK216～208頃	7号住居	坏蓋(13)	梁木1998編年Ⅳ期の標識資料
殿山遺跡	上三川町上神主	集落	TK73～TK216か	KT-52	甕(14)	藤田1999編年Ⅱ期の標識資料
			TK216か	KT-28	把手付高坏(15)	
新郭遺跡	壬生町羽生田	集落/古墳	TK216～208	SI-29	坏蓋(16), 坏身(17)	
			TK216	SI-51	把手付碗(18)	
くるま橋遺跡	真岡市石島	集落	TK216	攪拌土層出土	甕	



第 198 図 栃木県域出土の陶質土器・TK216 号窯式以前の須恵器（分布図）（池田・内山 2020）

2. 統一新羅系土器

b-1. 統一新羅系土器・概観

6～7世紀、隋の成立・滅亡、唐の形成、百済・高句麗の滅亡、統一新羅の形成といった東アジア情勢のもと、数多くの渡来人が日本に移入してきた。とりわけ下毛野（下野）国は、持統朝期に集中して新羅人移配記事が残っている（『日本書紀』持統天皇元年[687]条、同3年[689]条、同4年[690]条）。そして、栃木県域では7世紀後半～8世紀前半の統一新羅系土器が出土している（第196図・第73表）。それゆえ、文献記事との検証が比較的有効であり、全国的にも、その動向が注目されている。新出事例・参考事例とも増えた今、改めて、本県域出土の統一新羅系土器について動向再整理することは意義があると感じる（註1）。

b-2. 本遺跡出土の統一新羅系土器

最初に、本遺跡出土の統一新羅系土器を要約する。本遺跡からは、次表のように、供膳具2点、貯蔵具6点、煮炊具1点が出土している（註2）。

くるま橋遺跡出土の統一新羅系土器

供膳具

集成1(包-3) 碗 口縁内面に凹線。焼成・胎土・色調は包-2 広口壺に似る。SI-40 攪拌土層出土

集成2(包-4) 碗 内面に浅い凹線。形態も包-3 碗に似る。焼成・胎土・色調はG26 広口壺に似る。攪拌土層出土

貯蔵具

集成3(SI-2・1) 壺・口縁部 外面に三角状の縁帯を施す。内外面に凹線が数条巡らせる。SI-2 出土

集成4(SI-24・1) 壺類・体部小片 新治窯産 外面に1組2～3条の凹線を3段以上巡らせる SI-20 攪拌土層出土

集成5(SI-20・1) 壺類・体部小片 新治窯産 外面に1組2～3条の凹線を3段以上巡らせる SI-20 攪拌土層出土

集成6(包-2) 広口壺・口縁部 SD-36 攪拌土層出土

集成7(SI-2・2) 壺類・体部～底部 SI-2 出土

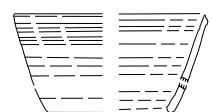
煮炊具

集成8(SI-21・1) 甑・把手部分

供膳具

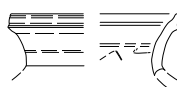


集成1 (包-3)

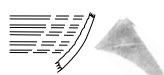


集成2 (包-4)

貯蔵具



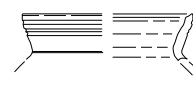
集成3 (SI2)



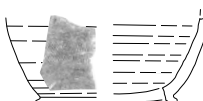
集成4 (SI24)



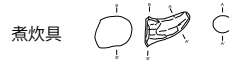
集成5 (SI20)



集成6 G26 (包-2)



集成7 G2 (SI2)



集成8 G27 (SI21)

0 1:5 10cm

第199図 くるま橋遺跡出土の統一新羅系土器

年代的位置付け 集成 3,4,8 は 2 期 (7 世紀中～後葉) の竪穴建物跡からの出土である。一方、集成 1,2,5,6,7 は、後世の手による攪拌土層中からの出土のため本来の帰属遺構は不明である。だが、おそらくは、上記集成 3,4,8 や、本県域出土の統一新羅系土器 (第 200 図・第 73 表) と同じく、7 世紀後半～8 世紀前半頃に位置付けられよう。

生産地について 集成 4(SI-24・1) は胎土に雲母細粒を含んでおり新治窯産製品と判断される。また集成 8(SI-21・1) は胎土・焼成が三毳窯産製品に似ている (体部外面に 1 組 2～3 条の凹線を 3 段以上巡らせる新治窯産須恵器甕は一般的ではない。同様に、把手を有する三毳窯産須恵器甕は殆どない。集成 4 が新治窯産製品、集成 8 が三毳窯産製品であっても、統一新羅系土器にその系譜が求められることには変わりなかろう)。

その他については、成形が丁寧なうえ、胎土がきめ細かく、焼成も硬質気味である (栃木県域の須恵器窯では見かけない胎土・焼成である)。広義の搬入品と考えられる。

小結

- ① 先学が指摘するように、渡来人の多くは、東国へ集団居住させられることが多いと推定されている (経年のなかで母国の土器は、徐々に損失していく傾向にある)。にもかかわらず、栃木県域では多数の統一新羅系土器が出土しているのは全国的にみて特異である。7 世紀後半以降、畿内を経由せず直接下野へ移住させられた新羅人がもたらしたがゆえとする考え (註 3) は妥当であろう。
- ② 栃木県域出土統一新羅系土器のうち 12 点は西下谷田遺跡 (拠点的評価や国宰所との説がある) から出土している。加えて、西下谷田遺跡を含む栃木県中部 (とりわけ河内郡中心部) に統一新羅系土器の分布集中が認められる (第 201 図)。これらは、下野国への新羅人移配記事との強い関連性 (律令国家の動向) を窺わせるものとするむきが強い。
- ③ くるま橋遺跡では、確実に統一新羅系土器と言える土器が 2 点 (集成 6,7)、統一新羅系土器の可能性が考えられそうな土器が 6 点 (集成 1～5,8) 出土している。つまり、現時点では、西下谷田遺跡に次ぐ数量の新羅系土器が本遺跡で出土していることになる。
- ④ 統一新羅系土器が多数出土する九州や畿内であっても、複数個体が同一遺跡から出土するのは稀有であると言う。かつ、上記②③や、板橋 2008 論考の新羅土器搬入背景を踏まえるならば、次のような仮説を立てることも出来るのではなかろうか。

新羅人の下野国への移配

→芳賀郡家周辺に一時的集住

→くるま橋遺跡に再配置 (居住)。地の利や、渡来人の知識を生かして集落を営む

(新羅系貯蔵具、煮炊具が出土していることや、本遺跡が半公的性格を有することを考慮)

〔註〕

註 1 池田 2007 文献で、2006 年以前の統一新羅系土器研究史整理 (全国動向・栃木県内動向とも) を行ったことがある。

御併読頂ければ幸いである。

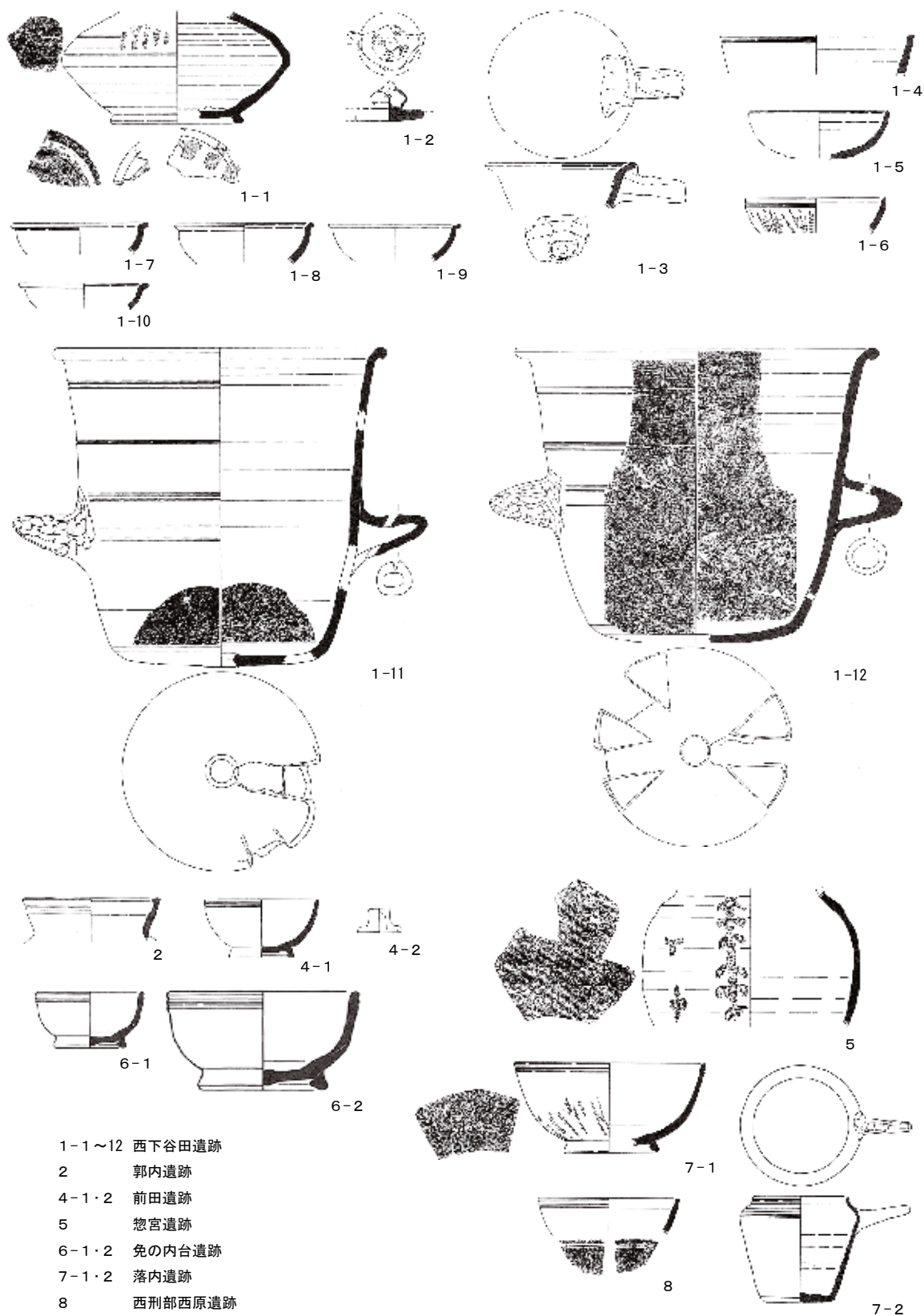
註 2 駒澤大学文学部前教授・酒井清治氏に資料を実見頂き、御教示を賜った。

註 3 酒井 1997 文献、定森 1999 文献、板橋 2008 文献、酒寄 2008 文献をふまえての記述。

IV. 特記事項

〔参考文献〕

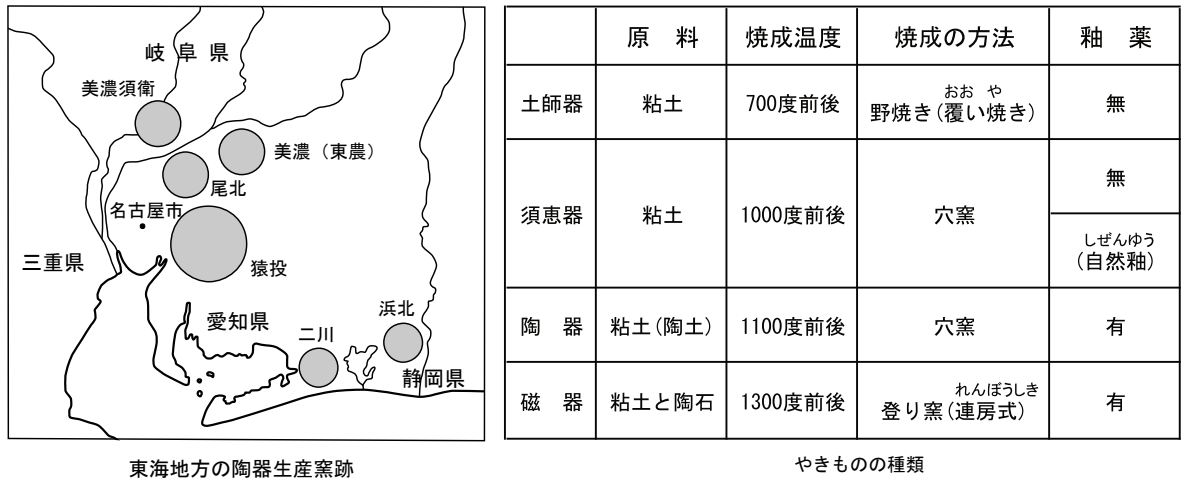
- 安藤美保ほか 2000『谷向・国谷馬場・中の内・惣宮・鍋小路』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 池田敏宏 2007「第7章 古代 第3節 遺物の研究 2. 古代施釉陶器」『研究紀要』第15号—栃木県の埋蔵文化財と考古学—、(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 板橋正幸ほか 2003『西下谷田遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 板橋正幸 2001「栃木県内出土の新羅土器について」『研究紀要』第10号、(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 板橋正幸 2008「栃木県内出土の新羅土器について」『平成20年 栃木県立なす風土記の丘資料館第16回企画展 那須の渡来文化』栃木県教育委員会・栃木県立なす風土記の丘資料館
- 内山敏行ほか 2011『西刑部西原遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 植木茂雄ほか 1993『免の内台遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 亀田修一 2003「渡来人の考古学」『七隈史学』第4号、七隈史学会
- 今平利幸ほか 1991『前田遺跡』宇都宮市教育委員会
- 酒井清治 1996「下野国出土の統一新羅系緑釉陶器」『韓式系土器研究』VI、韓式系土器研究
- 酒井清治 1997「関東の渡来人—朝鮮半島から見た渡来人—」『倉田芳郎先生古希記念 生産の考古学』倉田芳郎先生古希記念会編、同成社
- 重見 泰 2012『新羅土器からみた日本古代の国家形成』學生社
- 酒寄雅志 2008「古代東国の渡来文化—上毛野、そして下毛野を中心に—」『平成20年 栃木県立なす風土記の丘資料館第16回企画展 那須の渡来文化』栃木県教育委員会・栃木県立なす風土記の丘資料館
- 定森秀夫 1999「陶質土器からみた東日本と朝鮮」『青丘学術論集』第15号、財団法人韓国文化研究振興財団
- 中山 晋ほか 1998『郭内遺跡・松香遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団



第 200 図 栃木県域出土の統一新羅系土器 (S = 1/6)

第73表 栃木県域出土の統一新羅系土器一覧

— 290 —



		7	7	7	8	8	8	8	9	9	1	1	1	1	1
		3	5	7	0	1	2	4	0	5	0	0	1	1	1
		0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	5
尾張	I25	NN32	前	後	①	②	①	②	③	①	②		①	②	
			010	I78	K14	K90			053		H72		百代寺		山茶碗 3 型式
															山茶碗 4 型式
				東濃窯		前	後	前	後	虎溪山 1	丸石 2	明和 2 7			谷迫間 2
						光が丘 1		大原 2							

第 202 図 古代施釉陶器整理図

3. 灰釉陶器・緑釉陶器

c-1. 古代灰釉陶器・緑釉陶器の概観

生産地の概要

灰釉陶器は植物灰を主成分とした釉をかけて高火度焼成した陶器である。生産地は東海地方 (美濃・尾張・三河・遠江各国) の諸窯で、とりわけ猿投山麓西南窯跡群は最大の生産地である。一方、緑釉陶器は低火度焼成の鉛釉陶器で酸化銅を発色材として用いるため緑色を呈する。生産地は美濃・尾張・三河のほか、畿内・近江でも作られている。

本県域における灰釉・緑釉陶器の遺跡出土傾向

次に、本県域における灰釉・緑釉陶器の遺跡出土傾向を概観する。

ケース 1 大量の古代施釉陶器が出土

下野国府跡、下野国分二寺跡 (僧寺・尼寺) では大量の灰釉・緑釉陶器と初期貿易陶磁器 (越州窯産青磁、邢州窯白磁) が出土している。特筆すべきは、奉養品として使用された日光男体山頂遺跡 (山岳信仰遺跡) 例で、少量の緑釉陶器 (香炉、唾壺、小瓶)、多量の灰釉陶器 (とりわけ小瓶) が山頂露岩付近から出土している。

IV. 特記事項

ケース 2 一定量の灰釉陶器が出土

多功南原遺跡や、金山遺跡では 1 遺跡で 100 点近い灰釉陶器が出土している。また、館之前遺跡でも 50 数点の灰釉陶器が出土している。ちなみに、多功南原遺跡は下野薬師寺や多功遺跡（河内郡家関連遺跡）との繋がりが深い集落、館之前遺跡は郡家関連遺跡、金山遺跡は製鉄遺構を有した拠点集落と推定されている。本遺跡事例は、これに相当する。

ケース 3 a 少量の灰釉陶器が出土

上記のケース 1・2 と比較すると出土量は微少である（十数点～1 点程度の出土）。栃木県域出土事例のほとんどは、このケースに該当する。

ケース 3 b 少量の灰釉陶器と微量の緑釉陶器が出土

灰釉陶器の出土量は上記のケース 3 a と同じである。ただし、ケース 3 a とは異なり、微量ながらも緑釉陶器が出土するのが本ケースの特徴である。

c-2. 本遺跡出土灰釉陶器・緑釉陶器の位置付け

実測図掲載資料をまとめると次のように比定できよう。

猿投窯製品

原始灰釉陶器 (8c3/4 ～ 4/4) 壺・瓶類 SI24-3, SI58-3・4, SI61-1・2, SI68-1, SI77-1・2

井ヶ谷 78 号～黒笹 14 号窯式期 (9c1/4 ～ 2/4 前半) 壺・瓶類 SI44-1

黒笹 14 号 (9c2/4 前半～ 4/4) 碗類 SI38-15

黒笹 90 号窯式期 (9c2/4 後半～ 4/4) 碗類 SI3-1, SI7-1, SI8-3・4, SI22A-1・2
(壺・瓶類 SI8-5・6)

折戸 53 号窯式期 (10c1/4 ～ 2/4) (竪穴出土分ではなし)

時期特定不能 SI58-1・2, SI59A-1

東濃窯製品

光ヶ丘 1 号窯式期 (9c3/4 ～ 4/4) 碗類 SI8-1・2, SI22A-3, SI42-1

大原 2 号窯式期 (10c1/4 ～ 2/4) 碗類 SI26-1・2

〔参考文献〕

愛知県陶磁美術館 2018『特別企画展 知られざる古代の名陶―猿投窯―』

池田敏宏 2007「第 7 章 古代 第 3 節 遺物の研究 2. 古代施釉陶器」『研究紀要』第 15 号―栃木県の埋蔵文化財と考古学―、(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター

河合 修ほか 2003「各地域における土器研究の現状 東海」『シンポジウム中世土器研究の今日的課題―土器編年と中世史研究―』中世土器研究会

斎藤孝正 1994「東海地方の施釉陶器―猿投窯を中心に―」『古代の土器研究会第 3 回シンポジウム 古代の土器研究―律令的土器様式の西・東 3 施釉陶器―』古代の土器研究会

中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

津野 仁 2014「第 5 章 総括 第 5 節 下野国分尼寺出土灰釉陶器・緑釉陶器の流通」『下野国分尼寺Ⅱ』栃木県教育委員会・(公財)とちぎ未来づくり財団

4. 銅造鍍金阿彌陀如来坐像の位置付け

a. 通形阿彌陀如来像概観

まず、阿彌陀信仰の概説、ノーマル・タイプ阿彌陀如来像（以下、本稿では通形阿彌陀如来像と呼称）の時代ごとの特徴を整理・要約してみたい（註 1）。

阿彌陀如来は、サンスクリット語アミターバ（[s:Amitabha] . 限りない光明のあるものの意）、あるいはアミタユース（[s:Amitayus] . 限りない寿命のあるものの意）にもとづき、「無量寿如来」「無量光如来」「不思議光如来」「阿彌陀如来」などと漢訳される。『無量寿経』『観無量寿経』『阿彌陀経』（いわゆる浄土三部経）や、『般舟三昧経』などを主要経典とする。その信仰・教義（註 2）は A.D. 1～2 世紀にかけて成立したのち、インド～中央アジア～東アジア諸地域に伝播・浸透していった。とりわけ、中国仏教圏では盛んに信仰され、阿彌陀如来が居す極楽浄土の景観が描かれた浄土（变相）図が多数作られた（例・敦煌莫高窟 332 洞・220 洞阿彌陀浄土図）。そして、阿彌陀信仰は、日本には遅くとも 7 世紀中葉頃までには伝えられ、以降、次第に流行していった

なお、通形阿彌陀如来像のうち、8 世紀以前の阿彌陀如来像（絵画・彫像とも）の特徴としては、(i) 坐像（結跏趺坐）が主体である点、(ii) 複数尊（特に三尊）が一般的である点、(iii) 着衣表現は通肩、偏袒右肩の双方がある点、(iv) 印相は説法印が目立つ点（なお、少数ながら施無畏印、与願印の事例もあり）をあげることが出来よう（第 197 図）。

一方、阿彌陀如来像の基本様式（いわゆる本様、定朝様式）が成立して以降の像様（絵画・彫像とも）を概観してみると、i. 11～12 世紀は坐像（結跏趺坐）が主体だが、ii. 12～13 世紀頃から立像が目立つようになる点、iii. 目は半眼で背筋が直立する傾向にある点、iv. 全体的に丸みを帯びた体軀である点、v. 着衣は坐像・立像とも偏袒右肩表現が多い点、vi. 印相は坐像では阿彌陀定印（上品上生印）、vii. 立像では来迎印が目立つ点、viii. 光背は舟形飛天光や、放射光が多い点を示せよう（第 199 図）。

ちなみに両者の中間タイプである密教系阿彌陀如来像（絵画・彫像とも）（第 198 図）を見てみると、

- ①胎藏曼荼羅の無量寿（阿彌陀）如来は、(a) 坐像、(b) 通肩、(c) 阿彌陀定印、(d) 結跏趺坐、(e) 複数尊（中台八葉院のうちの 1 体）が基本的な像容である。
- ②また、金剛界曼荼羅の阿彌陀如来は、(a) 坐像、(b) 偏袒右肩、(c) 阿彌陀定印、(d) 結跏趺坐、(e) 複数尊（五智如来像のうちの 1 体）が基本的な像容である。
- ③さらに、総体的には、顔部と身部の比率は 1：2 で、体軀は質量感に富むことが多い。光背は、円相光、二重円相光が主流である。なお、異形の阿彌陀像（宝冠阿彌陀像など）が存在するのが特徴の一つである。

b. くるま橋遺跡出土阿彌陀如来坐像の位置付け (1)

上記概説をふまえると、本像は、以下の諸点で通形阿彌陀如来像と異なることが明らかになった。

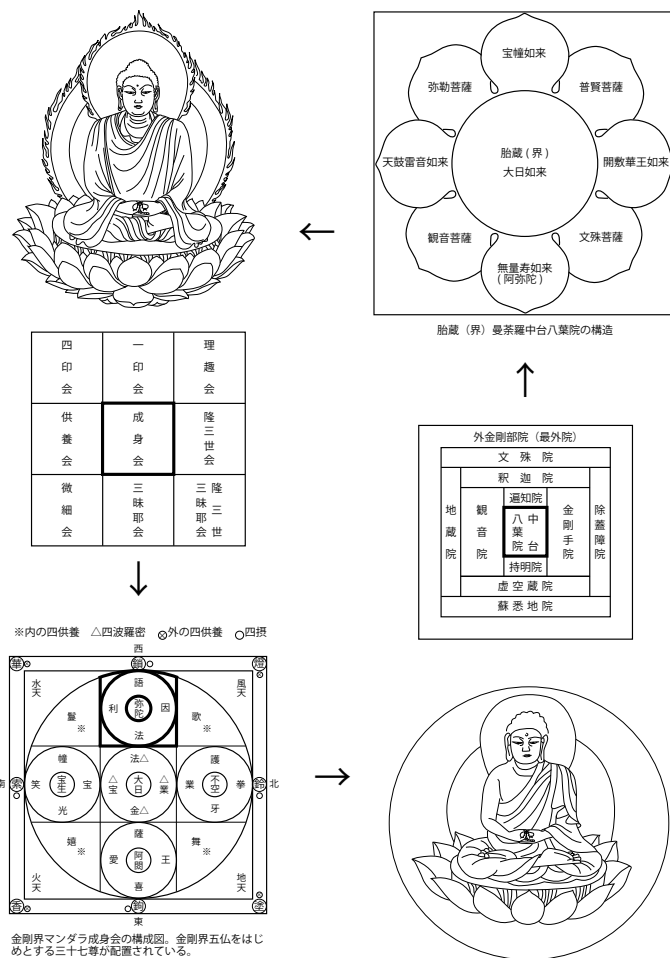
- ・本像の顔部が、目立つ（通常は 1：2.5 ほどだが、本像の比率は 1：2 ゆえ）
- ・本像の着衣は、通肩表現（通常は偏袒右肩表現である）
- ・本像の印相は、阿彌陀定印（上品上生印）の特例（人差し指が、親指の水平位置よりも突き出る）
- ・本像の背筋が、後方に仰反る（通常は直立、または前屈みである）
- ・本像の脚部は、右腿の上に左足を載せる「半跏趺坐」状の組み方（通常は結跏趺坐である）（註 3）



奈良県 法隆寺献納宝物押出仏 (S=約 1/5)



奈良県 當麻曼荼羅 (部分)



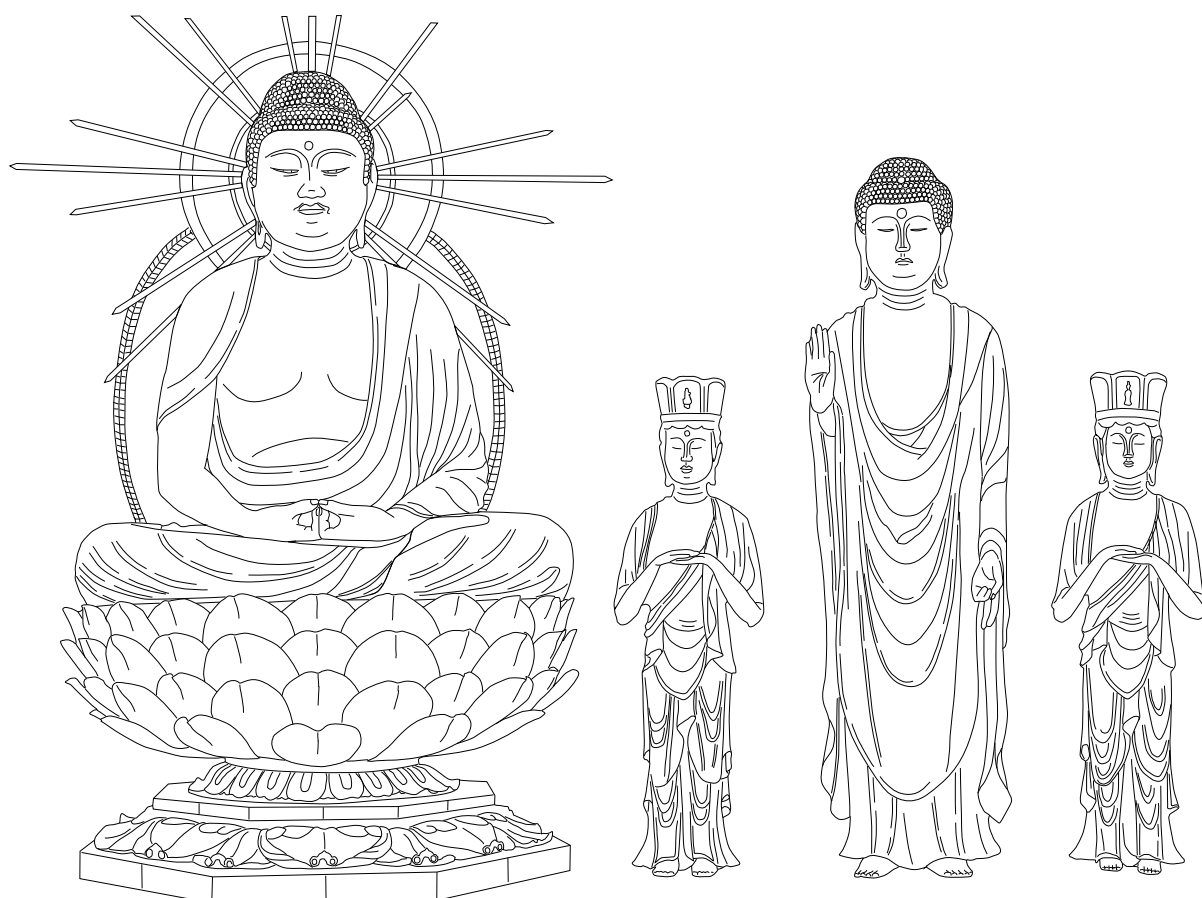
京都府仁和寺 阿弥陀如来坐像 (S= 約 1/10)



京都府安祥寺 阿弥陀如来坐像 (S= 約 1/25)



和歌山県 高野山聖衆阿弥陀来迎図（部分）



奈良県當麻寺 丈六像 阿弥陀如来坐像（S= 約 1/20）

東京国立博物館蔵 善光寺式阿弥陀三尊像（S= 約 1/5）

第 205 図 阿弥陀如来像の変遷（3）

c. くるま橋遺跡出土阿弥陀如来坐像の位置付け (2) — 密教系阿弥陀如来像の比較 —

以上から、くるま橋遺跡出土阿弥陀如来像は、本様 (11 世紀) 成立以前の造像の可能性が高まった。ゆえ、ここでは本像と密教系阿弥陀如来像 (9 世紀～) を比較してみたい。

- i 通肩表現の阿弥陀如来坐像は、胎蔵曼荼羅中台八葉院の無量寿 (阿弥陀) 如来として多数事例が存在する。なお、偏袒右肩であることが主流な金剛界五智如来 / 阿弥陀如来像においても京都市・安祥寺阿弥陀如来坐像 [851～859 年頃造像] のように通肩表現の事例は幾つか存在する (本像を考えていく上で極めて重要。おそらく金胎不二の密教教理が影響していると思われる。なお、これについては、今後の検討課題としたい)。
- ii 仏像の概説書を読んでいると、阿弥陀定印の成立の定点として京都市仁和寺阿弥陀如来像 [888 年頃造像] が取り扱われることが多い。しかし、奈良国立博物館所蔵・木造阿弥陀如来坐像 (註 4) の存在から、阿弥陀定印の成立が 9 世紀頃まで遡る可能性が高まった。
- iii 本像の印相は、人差し指が、親指の水平位置よりも突き出る特殊な印である。これと同じ印相をする仏像としては、奈良県・當麻寺宝冠阿弥陀如来坐像 (奈良国立博物館寄託資料) (第 200 図下段右側) と、同県・大峰山寺本堂解体修復工事に伴う発掘調査で出土した純金製阿弥陀如来坐像 (第 200 図下段左側) くらいしか、現在のところ知られない。
- iv 寺伝によれば、當麻寺宝冠阿弥陀如来坐像は、紅玻璃秘法 (真言密教の秘法の一つ) の本尊であったと言う。仏像彫刻史的には 10 世紀代に位置付けられている。また一方の大峰山寺阿弥陀如来坐像は、平安後期に信仰を集めた「金の御嶽」 (大峰山頂遺跡・修験道場兼山岳信仰遺跡) からの発掘調査出土で、土層の相関関係や共伴遺物、仏像様式から 10 世紀頃に位置付けられている。であるならば、これらと同じ印相をする本像も 10 世紀頃の造像としても問題はないと思われる。

d. くるま橋遺跡出土阿弥陀如来坐像の位置付け (3) — 出土状況の検証 —

ここでは、本像が、なぜ、竪穴建物跡の覆土から出土したのかを考えたい。まず、くるま橋遺跡出土阿弥陀如来坐像の出土状態を記してみたい。本像が出土した SI-1 は、西区・東区境界に位置する。この近辺は、遺構重複が多いうえ、現代耕作土攪乱 (ゴボウトレンチャー含む) や、「後世の手による埋め戻し土、または攪拌土」と思われる土層が多々、確認される地区で、土層識別が難しい地域であった。阿弥陀如来坐像は、竪穴建物跡 SI-1 の南東隅、覆土 1 層 (後世の手による埋め戻し土、または攪拌土) 中から、仰向けに近い状態で出土している (頭部を南に向けた状態) で出土している。なお、竪穴建物跡から出土した土器は概ね 10 世紀代に位置付けられるものであり、仏像の年代観と一致する。

次に、本像に似た出土ケースとして、栃木県足利市・常見遺跡の如来像出土状況を概観する。常見遺跡 11 号住居跡は、いわゆる焼失家屋で、草葺きの屋根を覆っていた土が落ちて蒸し焼きとなり、垂木材が炭化して放射状に残っていた。この竪穴内から土師器甕数個と、小型仏像 (銅造如来立像) が出土している。調査担当者は、「発掘中は火災に遭って仏像を運び出す間もなく焼け落ちたものと考えていた」と言う。しかし、「小仏像と甕のほかは土器の小破片のみであった」ことに疑問を持ったとのことである。そして、竪穴建物を使わなくなったのち、土師器甕と「小仏像を祭祀的な意味で住居と一緒に燃やした可能性」を考るに至ったという (足利市教委 1998, 55 頁)。ちなみに、吉田 1998 文献・3～4 類に比定できる小型常総系土師器甕が出土していることから常見遺跡 11 号住居跡、および小型仏像の焼失年代は 9 世紀第 2～3 四半期頃と考えられよう。

さらに、本像と同じ印相を呈する大峰山寺純金製阿弥陀如来坐像の出土状況をみてみよう。大峰山寺本堂

IV. 特記事項

は、奈良県天川村大洞の山上ヶ岳山頂(1,706 m)に所在する国指定重要文化財である。風雪に伴う劣化が著しいため解体修復工事が実施された。その折、同県立橿原考古学研究所によって3ヶ年の発掘調査が実施され、平安時代の整地土層から10世紀代に構築・用いられた護摩壇遺構が検出されるとともに、本堂西側N4トレンチの整地層内から純金製仏像が出土し注目を集めている(醍醐天皇による延喜5〔905〕年の金峰山寺への参詣・奉納記事『日本紀略』との関係から)。

小 結

以上を整理すると、次のような仮説を立てることが出来そうである。

- ① 足利市・常見遺跡、奈良県・大峰山寺とも、人為的行為(竪穴焼失や、整地土)と仏像の埋納・安置が濃密に関係している。
- ② 常見遺跡の出土ケースは竪穴建物廃絶に伴う祭祀(いわゆる「送り」儀礼)、大峰山寺は「金の御嶽」＝山上浄土への奉斎・埋納という性格を有している(註5)。
- ③ くるま橋遺跡竪穴建物跡SI-1の覆土1層の堆積と、本像(阿弥陀如来坐像)の竪穴建物覆土への安置(または埋納)は、互いに関係があってもおかしくない状況。
- ④ 上記をふまえるならば、1層は10世紀頃の堆積＝人為的埋戻し土ということになる。
- ⑤ ただし、本像は、都の仏師の手で造られた精緻品の可能性が高い。ゆえに、どのようなライフ・サイクル[life cycle]を経て、当地にもたらされ、本竪穴建物覆土に安置(または埋納)されたかについては検討課題を多々残す。

〔註〕

註1 本章は、光森 1986 文献、河原 1989 文献、中村ほか編 2002 文献などを参照のうえ、記述した。

註2 『無量寿経』によると、阿弥陀仏はむかし世自在王仏の時、法蔵菩薩といったが、さとりを得ようところざし、衆生救済のための本願(四十八願)を立て、長い間修行をかさね、今より十劫というはるか以前に、その本願を完成して仏となり、阿弥陀仏と呼ばれた。この仏はここより西方十万億仏土を過ぎた安楽(極楽)浄土において現に説法しており、衆生は念仏などの実践によって、この浄土へ往生することができる、と説いている」(真鍋編 2004, 124 頁)

註3 右腿の上に左足を載せる「半跏趺坐」状の組み方は阿弥陀如来坐像では稀少である。ただし、釈迦如来坐像や薬師如来坐像では幾つも類例は存在する(例、福島県・勝常寺薬師如来坐像)。

註4 奈良国立博物館ホームページ・収蔵品データベースの阿弥陀如来坐像画像(H009874 など)および解説文をふまえて、記述した(<http://www.narahaku.go.jp/collection/1457-0.html>)

註5 茨城県結城市・下り松遺跡でも9世紀後半頃の第28A号住居跡の中央部床面から菩薩像が2体並んで仰向け状態で出土している(川津・平石編 1999, PL6)。このケースも、竪穴建物を使用しなくなった後の「送り」儀礼の可能性が高いなお、遺構鎮め(遺構の「送り」儀礼)に仏教系遺物は往々、転用されており、そうした出土ケースを筆者自身、幾つも体験している(これについては、いずれ改めて稿を草したく思っている)。

〔第197～200図中の仏像素描図作成典拠〕

第197図 東京国立博物館 1999 文献, 66 頁・河原 1989 文献, 表紙

第198図 正木 2007 文献 81・126 頁・光森 1986 文献, 45・46 頁

第199図 堀田編 1960 文献, 12～13 頁・當麻寺中之坊発行『當麻寺』(刊行年記載なし)。光森 1986 文献, 79 頁



くるま橋遺跡 銅造鍍金阿弥陀如来坐像 (S=1/1)

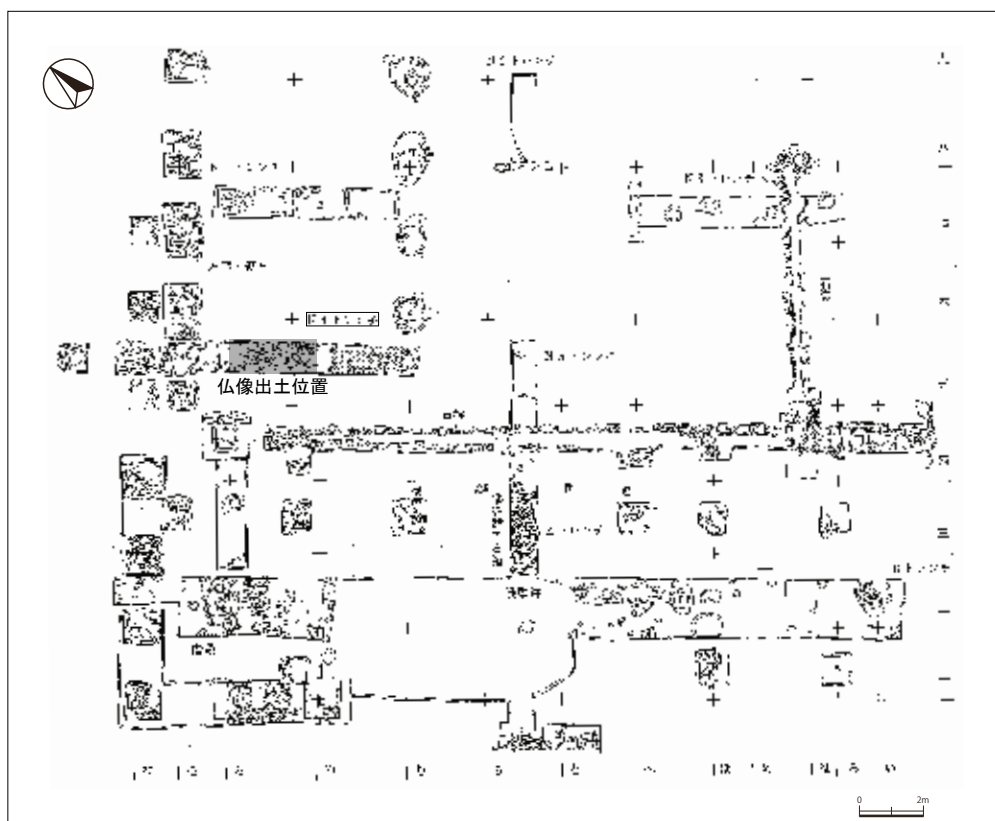


奈良県大峰山寺 阿弥陀如来坐像 (S= 約 2/1)



奈良県富麻寺 宝冠阿弥陀如来坐像 (S= 約 1/13)

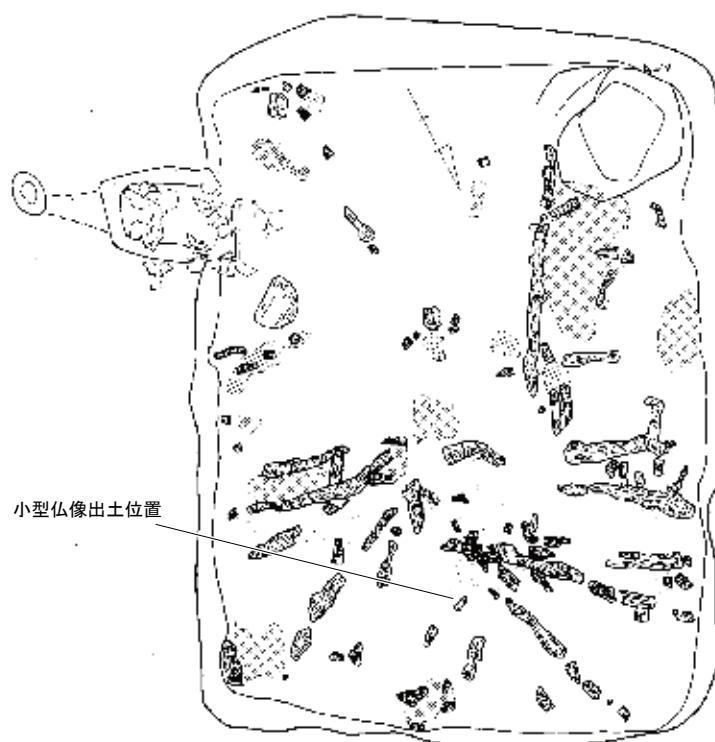
第 206 図 くるま橋遺跡出土仏像との比較・検討



奈良県 大峰山寺本堂解体修復工事発掘調査遺構平面図



常見遺跡小型仏像（如来立像）2/3



足利市 常見遺跡小型仏像出土状況

第 207 図 如来像出土状況の一例

第 200 図 奈良県教育委員会 1986 文献, 巻頭カラー 3. 奈良国立博物館 1983 文献, 57 頁

第 200 図 奈良県教育委員会 1986 文献, 足利市教育委員会 1998 文献, 53・56 頁

〔引用・参考文献〕

足利市教育委員会 1998 「2 常見遺跡」『平成 8 年度 文化財保護年報』

川津法伸・平石尚和編 1999 『下り松遺跡・油内遺跡』建設省・(財)茨城県教育財団

河原由雄 1989 『日本の美術』No.272 浄土図、至文堂

中村 元ほか編 2002 『岩波仏教辞典第 2 版』岩波書店

東京国立博物館 1999 『法隆寺宝物館』

中村 元ほか編 2002 『岩波仏教辞典第 2 版』岩波書店

奈良県教育委員会 1986 『重要文化財 大峰山寺本堂修理工事報告書』

奈良国立博物館 1983 『仏像のかたちと技法』仏教美術ハンドブック 1

堀田真快編 1960 『高野山霊寶大観』和歌山県高野山 総本山金剛峯寺

正木 晃 2007 『楽しくわかるマンダラ世界』春秋社

真鍋俊照編 2004 『日本仏像事典』吉川弘文館

光森正士 1986 『日本の美術』No.241 阿弥陀如来像、至文堂



(西から)



(南西から)



(南から)



(西から)



(北東から)



(北から)

くるま橋遺跡 SI-1 仏像出土状況写真



くるま橋遺跡全体写真（オルソ画像）

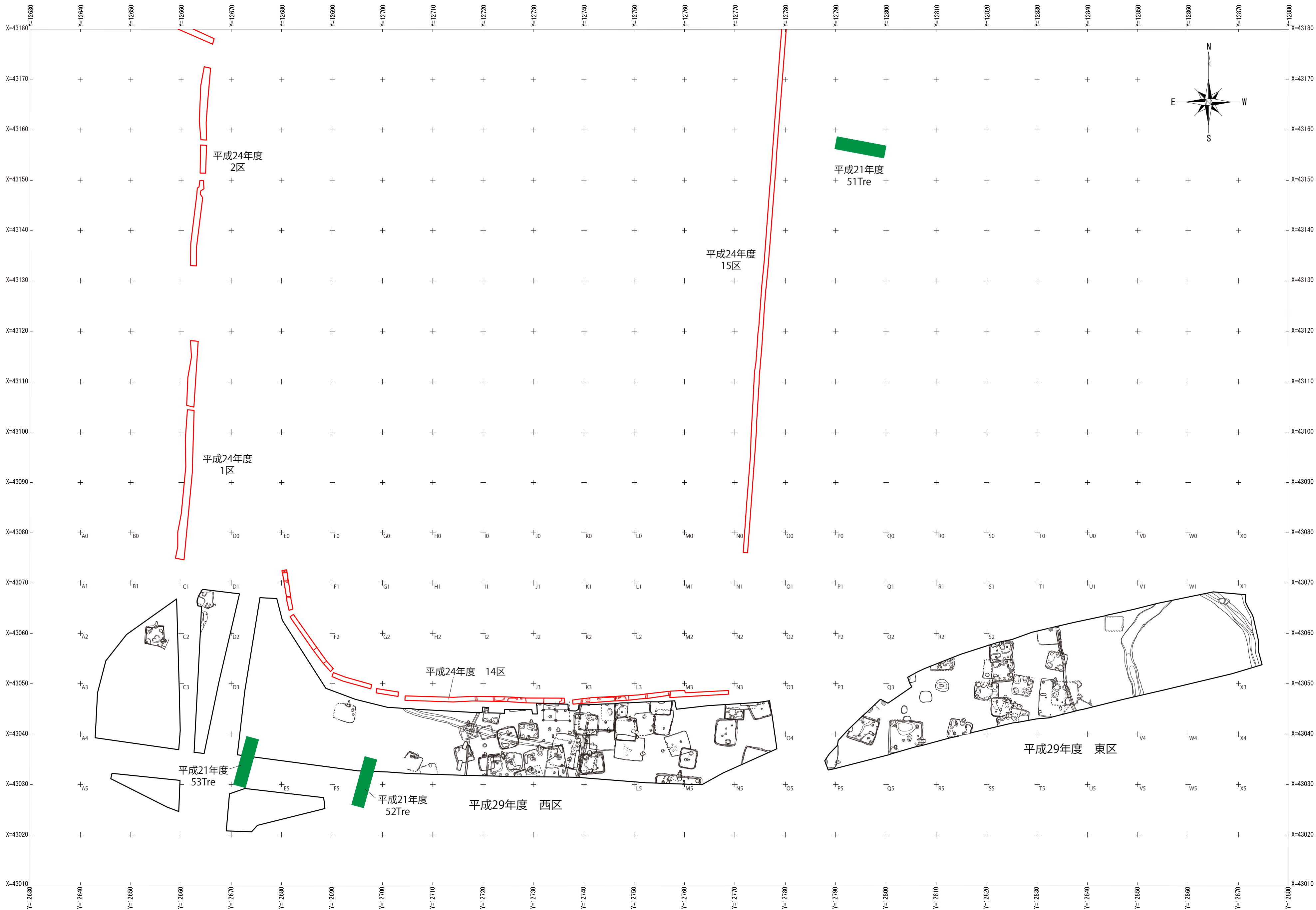
報告書抄録

ふ り が な	くるまばしいせき
書 名	くるま橋遺跡Ⅱ
副 書 名	快適で安全な道づくり事業費(補助)一般県道西田井二宮線石島工区に伴う発掘調査
巻 次	
シ リ ー ズ 名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シ リ ー ズ 番 号	第 4 0 2 集
編 著 者 名	池田敏宏
編 集 機 関	公益財団法人とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター
所 在 地	〒 3 2 9 - 0 4 1 8 栃木県下野市紫 4 7 4 番地 TEL 0 2 8 5 - 4 4 - 8 4 4 1
発 行 機 関	栃木県教育委員会 公益財団法人とちぎ未来づくり財団
発 行 年 月 日	西暦 2020 年 7 月 3 1 日 (令和 2 年 7 月 3 1 日)

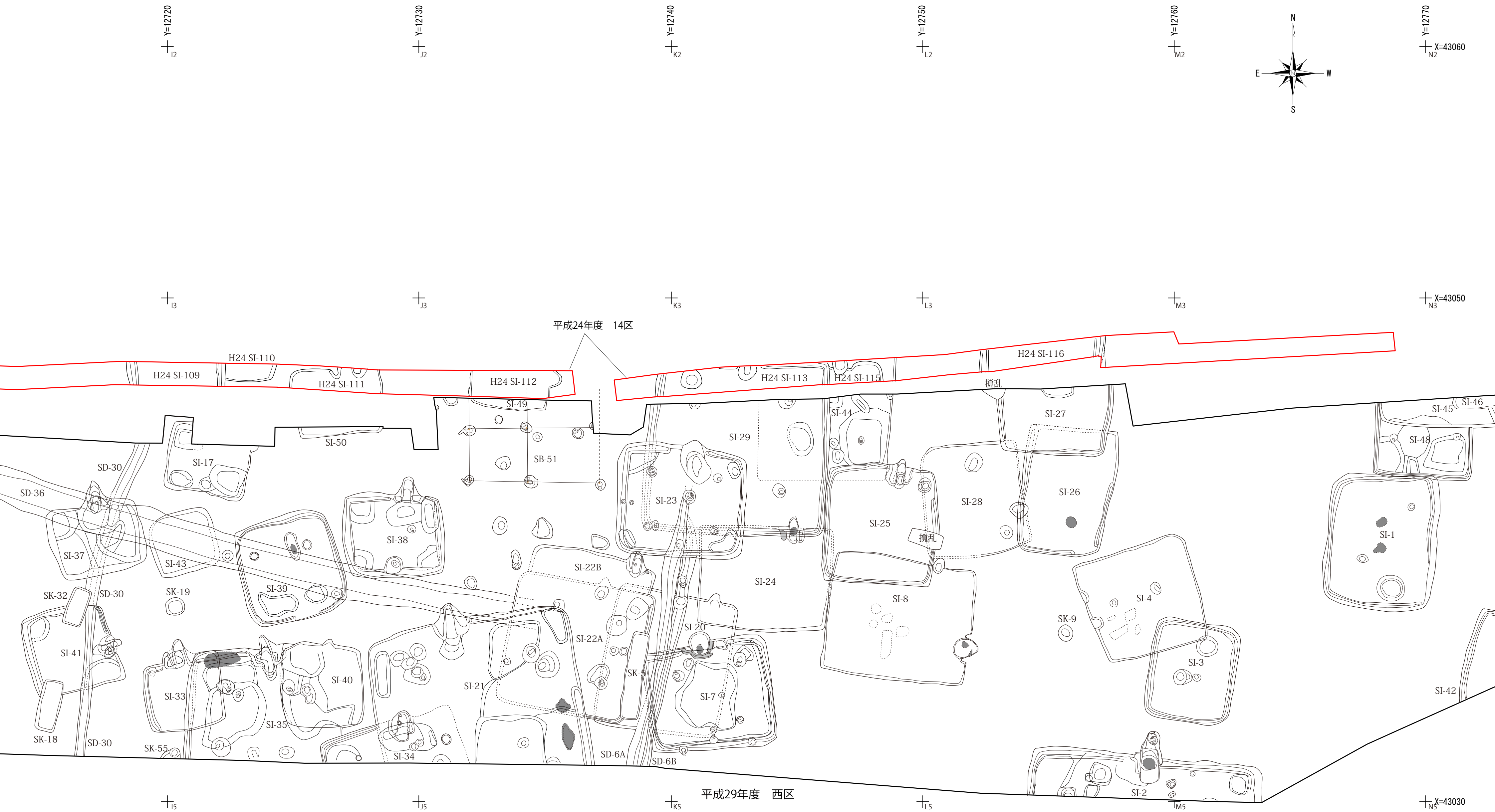
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調 査 期 間	調査面積 ㎡	調 査 原 因
		市 町 村	遺跡番号					
くるまばしいせき 遺 跡	も お か し 真 岡 市 い し じ ま ち 石 島 地 内	09209	6014	36° 23' 24"	139° 58' 29"	20170901～ 20180330	4,050㎡	道路建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物	特記事項
くるま橋 遺 跡	古 墳 集 落 等	古墳時代中期	方墳跡	1	初期須恵器・土師器	大規模な古代集落遺跡 10世紀頃の 小型仏像が 出土
		古 墳 時 代	竪穴住居跡	62	土師器・須恵器・統一新 羅系土器・施釉陶器・金 属製品・鉄滓	
			溝跡	4	中・近世陶磁器	
		中 世 ・ 近 世	土坑	15		
			掘立柱建物跡	1		

要 約	<p>出土遺物は、5世紀の土器、7世紀中葉～10世紀頃の土師器・須恵器・古代陶器、土製品（土鍾、紡錘車）、石製品（石製祭祀具、石鍾、砥石など）、金属製品（刀子、鎌、鋤先など）。</p> <p>なお、初期須恵器（日本で須恵器生産が開始された5世紀前半代のもの）や、統一新羅系土器（渡来人の関与がうかがえる7世紀頃の陶質土器）、多量の東海地方産施釉陶器、金銅製毛彫金具、10世紀頃に位置付けられる銅造鍍金阿弥陀如来坐像1軀、中世前期の陶磁器（同安窯青磁・渥美窯産陶器など）といった稀少品の出土が目立つ。このことから本遺跡は、古墳時代中期～平安時代末に至る拠点集落の可能性が考えられる。</p>
-----	--



平成29年度 くるま橋遺跡全測図 (S=1/500)



平成24年度14区・平成29年度西区（部分）（S=1/100）

栃木県埋蔵文化財調査報告第 402 集

くるま橋遺跡Ⅱ

—快適で安全な道づくり事業費(補助)
一般県道西田井二宮線石島工区に伴う発掘調査—

発 行 栃木県教育委員会

宇都宮市塙田 1-1-20

T E L 028 (623) 3425

公益財団法人とちぎ未来づくり財団

宇都宮市本町 1-8

T E L 028 (643) 1011

編 集 公益財団法人とちぎ未来づくり財団

埋蔵文化財センター

下野市紫 474 番地

T E L 0285 (44) 8441

発行日 令和 2 年 7 月 3 1 日発行

印 刷 株式会社大塚カラー
